尾崎紅葉著

紅葉全集

十千萬堂藏版

明治廿四年の紅葉山人

畏友尾崎紅葉君の遺著「紅葉全集」印刷成るに當つて、予等十千萬堂出版部を代表するもの、玆に一言せざるを得ぬことがある。

首を回せば、本年三月上旬、紅葉君大學醫院に在つて、入澤・佐藤・近藤諸博士の診察を受け、到底不起の症たるを宣告せらるゝや、予等五六の親友は、直ちに十千萬堂設立の事を議し、第一着に「紅葉全集」を發行するに定めて、之を君に謀つたところ、君は其の大いに我が意を得たるを喜び、病苦を推して、之が校訂に從事したのである。然るに、玆に大なる困難が起つた。それは前後二十年に垂んとするあひだの、君が著作の版權は、決して一

定の書肆に屬せず、甲は某書店に、乙は某書肆に、甚だしきは、甲より乙、乙より丙と、轉々版權を移して、遂に所屬の不明なるさへあるに至つた。

かくて有權者の明かな分は、一々之に對して、複製の承諾を需めたところが、多くは著者の境涯と、予等の微衷とに、少からず同情を寄せて、快よく承諾した。舊吉岡書籍店主理學士吉岡哲太郎君、駸々堂主大淵渉君、民友社長德富猪一郎君、春陽堂主和田うめ君、博文館主大橋新太郎君などに對しては、玆に其の厚志を謝すのである。

就中春陽堂主は、著者と最も關係深く、紅葉君が著作

の多くは、其の家より發行して、版權も悉く有して居るに拘らず、全集出版の擧を賛して、一切複製の自由を與へてくれた。

また博文館に至つては、從來一二の小册子の他には、著者の作物を取扱はず、此點に於ける關係は甚だ深からぬに拘はらず、本書の發行に就いて、賣捌一切の事を引請け、特別の便宜を謀る事を快諾した。

此の二家の好意に對しては、予等の深く謝する而已ならず、著者も生前に之を聞いて、大いに多としたところであつた。

然るに又一方に於ては、偶〻其書の版權を他より轉々し

て所有せるを機として、此の全集發行に當つて、啻に複製を承諾せぬ而已ならず、不當の代價を以て讓渡を申込んで來た。予等は之等に對しても、成るべく妥協の態度を取らうとしたが、著者は之を聞いて大いに憤り、遂に數篇の愛を割いて、集中に加へぬに至つたのである。予等の述懷は是に過ぎぬのであるが、勢ひ已むを得ぬところ、讀者も幸に諒とせられたい。

遺友

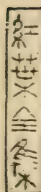
巖谷小波

石橋思案

明治三十六年十二月二十五日

紅葉山人著作年表

掲載書目	標題	起稿發行年月日	發行所
我樂多文庫自第一編	江島土産貝屛風	十八年五月二日	硯友社
我樂多文庫第八集	諺紫怒氣鉢卷	十九年五月廿五日	硯友社
我樂多文庫第十四號	娘博士	二十年十月　日	硯友社
我樂多文庫自第一號至十八號	風流京人形	二十一年五月廿五日	硯友社
我樂多文庫自第十號	紅子戯語	二十一年十月廿五日	硯友社
我樂多文庫第十四號附錄	Yes And No	二十一年一月一日	硯友社
新著百種第一編	二人比丘尼色懺悔	二十二年一月　日	吉岡書籍店
文庫自第十九號至第二十三號	やまと昭君	二十二年三月起稿七月脱稿	硯友社
前百花園	南無阿彌陀佛		金蘭社
後紅葉叢書	同上	二十二年四月　日	駸々堂

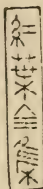
紅葉全集 著作年表（三）

掲載	題名	年月日	発行所
新著百種第三編附録	風雅娘	二十二年五月　日	吉岡書籍店
文庫自第二十四號至第二十五號	江戸水	二十二年七月　日	硯友社
百千鳥第一編	うかれ鳥	二十二年九月五日	駸々堂
文庫自第二十六號	文盲手引草	二十二年九月十五日	硯友社
文庫第二十七號	戀山賤	二十二年十月十五日	硯友社
小説群芳第一	初時雨	二十二年十二月　日	松榮堂
國民の友第六卷新年附錄第六十九號	拈華微笑	二十三年一月三日	民友社
小説群芳第二	京鹿子、紅懷紙	二十三年二月　日	松榮堂
都の花（自五十號至五十八號）文藝俱樂部第三卷第六編	戀の蛻	二十三年七月脱稿	金港堂
幼年文學	鬼桃太郎	二十三年　月　日	博文館
新作十二番	此ぬし	二十三年九月一日	春陽堂
	紅鹿子	二十三年十月十三日	春陽
讀賣新聞 小文學	夏痩 關東五郎		

掲載誌	作品	年月日	発行所
江戸紫（前）新著百種號外（後）	新桃花扇 巴波川	二十三年十二月　日	吉岡書籍店
讀賣新聞（前）聚芳十種第二卷（後）	新色懺悔	二十四年一月廿二日	春陽堂
江戸紫	文ながし		
同	猿枕		
同	わかれ蚊帳		
文學世界第一	七十二文命の安賣	二十四年三月二十日	春陽堂
少年文學第二編	二人椋助	二十四年三月廿三日	博文館
都の花（自第六十四號至第九十七號）太陽三卷十二號	二人女房	二十四年八月一日	金港堂 博文館
讀賣新聞	伽羅枕	二十四年十月二十日	春陽堂
同	二人女	二十五年二月二十日	春陽堂
同	おぼろ舟		
同	むき玉子		
同	紙きぬた	二十五年五月　日	春陽堂
同	伽羅物語		
同	女の顔		
同	花ぐもり		
同	紅白毒饅頭		

掲載	題名	年月日	發行所
讀賣新聞	夏小袖	二十五年八月　日	春陽堂
	三人妻	廿五年十二月廿三日	春陽堂
同	三筋の髪	二十六年一月一日	讀賣新聞社
	戀の病	二十六年五月　日	春陽堂
少年文學第十九編	侠黒兒	二十六年六月廿八日	博文館
讀賣新聞	男こゝろ	二十六年三月一日起稿 二十六年十月十六日	春陽堂
	袖時雨	二十七年一月八日	駸々堂
同	心の闇	二十七年五月一日	春陽堂
帝國文庫第二十三編	西鶴全集上	二十七年五月二日	博文館
	冷熱	二十七年五月廿七日起稿 二十九年四月十七日發行	春陽堂
帝國文庫第二十四編	西鶴全集下	二十七年六月十二日	博文館
讀賣新聞	隣の女	二十七年六月十七日	春陽堂
明治小說文庫第十五編	裸美人	二十七年八月七日	博文館

掲載	作品	年月日	發行所
讀賣新聞	むらさき	二十七年一月二十一日起稿 二十七年八月廿六日發行	春陽堂
同	不言不語	二十八年一月一日起稿	春陽堂
太陽 第一卷第一號	取舵	二十八年一月五日	博文館
	四の緒	二十八年七月廿八日	春陽堂
讀賣新聞	多情多恨	二十九年二月廿五日起稿 三十年七月十八日發行	春陽堂
同	浮木丸	二十九年九月十五日	春陽堂
	俳諧名家選	二十九年十月七日	春陽堂
同	靑葡萄	二十九年十月廿三日	春陽堂
	はじ句	三十年一月一日	春陽堂
新小說 第二年第一卷	安知歌貌林	三十年一月一日	春陽堂
世界の日本 第十一號	千箱の玉章	三十年一月日	開拓社
讀賣新聞	金色夜叉前編	三十年七月六日	春陽堂
新小說 第二年第九卷	銀	三十年八月日	春陽堂

春陽文庫第六編	西洋娘氣質	三十年四月十四日起稿 三十年十一月三十日發行	春陽堂
讀賣新聞	八重襷	三十一年六月五日起稿	春陽堂
新小說第三年第九卷	心中船	三十一年八月五日	春陽堂
讀賣新聞	金色夜叉中編	三十二年一月一日	春陽堂
同	金色夜叉後編	三十三年一月一日	春陽堂
同	寒牡丹	三十三年一月一日起稿	春陽堂
新小說第五年第六卷臨時增刊春鶯囀	茶椀割	三十三年五月五日	春陽堂
俳諧文庫第二十二編第二十三編	俳諧類題句集	三十三年十二月二十九日	博文館
	仇浪	三十四年六月十三日	文祿堂
新小說第七年第一卷	僞金	三十五年一月一日	春陽堂
讀賣新聞	東西短慮之刄	三十三年一月二十三日起稿 三十五年一月一日發行	春陽堂
太陽第四卷第二號	和蘭陀芹	三十五年一月二十日	博文館
讀賣新聞	金色夜叉續篇	三十五年四月廿八日	春陽堂

掲載	題名	年月日	発行所
新小說 第八年第一卷より	金色夜叉新續篇	三十六年一月一日	春陽堂
	芝肴	三十六年一月十六日	文祿堂
	西鶴文粹上卷	三十六年二月二日	春陽堂
	西鶴文粹中卷	三十六年五月十九日	春陽堂
名著文庫 卷の四	娘節用	三十六年五月廿九日	富山房
讀賣新聞	金色夜叉續々篇	三十六年六月十二日	春陽堂
	俳諧新潮	三十六年九月十九日	富山房
	草紅葉	三十六年十一月十五日	富山房
名著文庫 卷の十五	世間娘氣質	三十六年十一月廿日	富山房
讀賣新聞	煙霞療養		春陽堂
	和製ベンジャミン		
	鐘樓守		早稻田大學出版部
	十千萬堂百句		富山房

二六新報社

二六新報　草分　表

△編者曰　謹んで大方諸氏の是正を待つ▽

紅葉全集 卷之壹

目次

目次終

二人比丘尼 色懺悔

新著百種第壹巻

発端 奇遇の巻

罌粟は眉目容すぐれ髪長し。常は西施が鏡を愛して粧臺に眠り。後世なんどの事は露ばかりも心にかけぬ身の。一念の恨によりて。ごそと剃こぼして尼になりたるこそ。肝つぶるゝ業なれ。……百花譜　許六

蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も凩の烈く。あるほど

の木々の葉……峯の松のみ殘して――大方吹落しぬれば。山は面瘠せて哀に。森は骨立ちて凄じ。

茶の煙だに擧らずば。山賤も知らぬ谷陰に誰がすむ庵ぞ。かくても尙捨難き浮世の面影のこす菱垣。疎に結ひ繞し。竹は蝕み。繩朽ちたれど。枯蔦の名殘惜しく縋れるまゝに倒れもやらず。二本の黑木を入口の標に茅葺の屋根は歲に黑み。落懸る檐風に傷はしく。風情は月にばかりの破壁。强くは蹈れぬ竹緣。切株の履脫より左に三尺。其處に筧の。水ほどにもなく絕えせぬ雫。閼伽桶に滴る音の。やう〳〵幽に疎に成りゆくは樋の口凍るにやあらん。夕暮の風寒し。

麓路に梅香りて。扨は春。窓外の山白うなれば。冬ぞと知る。此處には曆日なく。晝は伐木の音に暮れ。夜は猿の聲に更けて。鐘も鷄も。響かず聞えず。戀する身には此上なき隱れ家に似たれども。愛欲を棄てずしては。一日假の住居も難し。夕日影木末に薄ぎ。反古張の障子赤くなれ

ば。程なく内に鉦鼓の聲す。何處よりか來にけん法衣の人。塗笠目深に打冠りて。此門に休ひ。

「賴む。」　と音なふは女の聲。鉦の音息みて。障子の外に現れしも法體の女人。鼠木綿の布子に黑染の腰法衣。頭巾着たるが外面を窺ひ。

「何御用でござりまする。」

「是は行脚の比丘尼。慣れぬ山路に迷ひ。難義を致しまする。御無心ながら一夜の宿を御願ひに。御看經のお邪魔を致しました。」

寒さに慄く聲なり。

「御覽の通の荒屋。夜の物とて御座りませぬが。お厭ひなくば。さゝお入遊ばせや。」

客の比丘尼は凍る手のもどかしく。笠の紐とく〳〵緣に立寄りて。主が勸むる微溫湯に疲れし足を濯ぎ。導れて爐近く座を占め。初對面の挨拶やがて澁茶一碗。欵待ぶりにさしくぶる榾の。焚上る炎に背くる顏を。

主は何心なく打見るに。俗に在りし昔の我ならば。げに可妬しき其の容色。今も見て。臭骸の上を粧うて是とは覺えず。おのれは二十一歳。二つばかりは少かる可し。此の眉目容姿――此の年紀。菩提の種には何がなりし。まだ爪紅の消えやらぬ指に。珠數つまぐる殊勝さ……過ぎて哀なり。我身に思ひ較べて濕む涙を。爐の榾搔動かして。烟しと紛はす。客も主を見れば。世に捨てらるべき姿かは。世に飽くといふ年かは。或は我に似たる身の果か。聞かまほし。語らまほしや。我が事。人の事。互に一樣の思は有れど。言出づる機會なくて。山路の險阻――麓の川の名――堂塔伽藍――昨夜の氷。其等を他に物語る程に。粥煮えたうと。主客夕餉の箸を取り。やがて又少時の物語。

「旅の疲もさぞ。心置かれず御寐なれ。」と紙帳釣下して。切に勸むれば。明朝を契りて客は先づ臥戸に入りぬ。

里ならば初夜撞くほどに夜は更けて。山を吾物に暴す風。其に吹轉けじ

と。松の梢に取附く梟の濁聲。其に呼吸つまらせて。月に嘯く狼の遠音庭にたまりし落葉の。又其に揉れて。哄と一度に板戸を打てば。夢破られし客の比丘尼は。目を見開きて。今眠りしと思ひしに。同じ床に主の寐姿。外は凄く。内は寒く。目を閉ぢても心は冱え。微なれども耳につく主の鼾。枕邊に夜を守る行燈の火影に。紙帳の反古の文字鮮に讀まれければ。寐られぬまゝに頭を擧げて。目近の一通を見るに。

一書置の事。

一筆申のこし候。我此度戰場に罷り向ひ候上は。一命は無き物との御覺悟有之度候。勝負はもとより時の運に候の間。相構へて捨つる命に極れるにも候はず。やがて目出度凱陣致さん事も。有之べきかなれど兼而今日を期し候千歳の一時。仇に過すべきや。日頃の主恩を報ず可きに候へば。比類まれなる忠戰に美名を留め可申所存に候。宿世いかなる緣に候てか。忝くも上樣の御仲立を以て。其許と祝言致し候過分

の條。人々に羨れ候ひしも。夢の世のえばしにて。淺からぬ情の嬉しく。玉椿の八千代。二葉の松の末と頼みしも。今は仇と相成申候。連添ひてより今日まで廿日に足らぬ束の間に。友白髮の年月を縮め。飽かぬ思の短き契。長の別の今と相成候ては。なまじひのかたらひこそ殘念至極に存ぜられ候。始より斯ある可しと知り候はんには。いかに御心淺からずとも。將又主命重ければとて。假の世の假の契は思もかけざる事と。女々しくも後悔致され候。よしなき契ゆゑに。其許にも數の苦勞相掛け。又我とても此のみ死出の迷と相成申候。翌日にも我討死と聞及ばれ候とも。搆へて狹き了簡出すまじく樣。暮々も賴入候一圖の心より世を儚み。髮を切り衣を染め。わが亡き魂の修羅道の苦艱を救はんなどゝ。思し立たん事最も不所存の至に候。主の御爲には家を忘れ身を忘れ候は。武門の掟に候へば。吾家の面目。吾身の本懷何事か之に過ぎ候はんや。妄執少しも無之。往生致し候べく候。たゞ

折々思ひ出され候砌。一遍の回向なし下され候はゞ最も過分に存候。其許はまだ年若く在し候へば。何方へなりとも似合しき縁邊を求められ。萬々年の御壽命の後。冥途にてかさねて對面を期し候。此義はわが一生の願に候。暮々も違背あるまじく候。もし聞入れ申さざるに於ては。未來永劫他人と相成るべく候。別札の通去狀認め置候の間可然身の振方取計はれ度候。當座の用までに金子五十兩。革籠の内に差置申候。春雨の香は殿より拜領の品なれば。平常大事に懸け候を。此度兜に焚しめ出陣いたし候餘りを。形見と思召され度。取急ぎ候間名殘をしき筆とめ申候。以上。

若葉どの

涙に碍げられつゝも讀了り。首を傾けては又打眺め。

「はて小四郎樣に其儘の筆の蹟。」

暫く思案に沈みしが。

「あゝ氣の迷。」
と口にはいへど。心に懸るか。半頃より七八行見返して。
「亂世の習とはいひながら。酷たらしい殿御の討死……南無阿彌陀佛……其故の御發心か。お道理や。似た身の上もあるもの。」
人の哀――吾哀。一時にさしぐむ涙を拭ひ。
「噫。思へば夢の浮世。」
主の尼は目覺して。其の獨語を聞尤め。
「如何遊ばしました。」
客は鼻つまらせて。
「お目覺め遊ばしましたか。只今此のお文を拜見致し……。」
聞くより主は眉を顰め。
「文を?!」
「この紙帳のお書置。」

不注意を悔る主は。呀と言ひしまゝ。語は次で出です。扨は秘する事か卒爾なと心付きけんやうに。客も且く遲ひしが。

「このお書置の若葉樣とは。あなたの俗のお名で御座りまするか。」

此の山中の侘住居。遁世してより若干の月日。今の法名だに。知りて呼ぶ人あらざるに。まして俗の名……若葉……他人の名か。鈍や我耳に珍しくも聞ゆなり。我名……若葉……俗の名……俗の時。それを思へば早や涙。聲も萎れて。

「はい。若葉と申しました。」

書置の名宛は若葉。討死せしは慥に其の夫。傷はしやと思ふ心はいと切に。

「運あらば目出度皈ると是には書いてござりまするが。あなたの其お姿では。まさしく討死なされた事と存ぜられますが……」

「仰せの通り。敢ない最期を遂げました。」

「これほどお勇ましい御覺悟では。定めてまあ花々しい御働を遊ばしました事で御座りませうなあ。」

「はい。ようお尋ね下さりました。人傳に聞きますれば。武士の手本と成樣な。目覺しい働きを致して果てましたとの事。私までが何の樣に嬉しうございませう。」

「けなげな事おつしやるだけ。お心の中が御推量申されて。他人の私まで涙が零れまする。」

「お察し下さりまし。」と言ふにや。聲は斷れて。鮮に聞えず。

「よしない事を申出し。お歎を懸けましたは私の無調法。御免なされまし。」

「何の〳〵。やさしいお心に絆されて。不躾な……お詫ならば此方より。」

とやう〳〵涙を收め。

「先程から私一人が味氣ないやうな事ばかり申上げ。お見受申せば。あ

なたにも花の盛を其の有樣……尼法師には勿體ないお姿を。」
あれと赭らむ顏を枕にさしつけ。嬌羞を笑む初心の風情。振袖着たる昔見たし——さぞやしをらしき聲して普門品。見れば麗しく。思へば憐なり。
「おいたはしう存じまする。どういふ因縁で御發心なされましたか。苦しからずばお物語が承りたう存じまする。」
「お心にかけられた其の尋問。思出すも涙の種。儚い身の上で御座りまする。」
姫百合は露の重きに堪へずやありけん。すゞろに零す一雫。
「兩親ともに世に在りながら。頼む夫に死別れ。味氣ない身の浮世を觀じ。佛の御弟子となりまして。話に聞き——繪に見たやうな旅路をば。同行もなくさまよひあるき。死ぬにもましたる艱難辛苦。夫の事は片時忘るゝ間は御座りませぬが。また其樣な時は兩親の戀しさに。身も世も

あられぬ思を致しまする。今日も今日とて道に迷ひ。日は暮れかゝる心細さ。幸ひの火影を目的にお門まで參り。御無心申しあげましたに。心よう御承知下され。又お目に懸つてお話申せば。お優しいお心やら。お言葉やら。姉上樣か何ぞのやうに思はれて。もうあすからは廻國致すが不好になりました。どうぞ此儘お傍にお召使ひ遊ばして。閼伽を汲め。花折つて來い。汚れた物の洗濯。何なりと御用仰付けて下さりまし。もし。お願で御座りまする。」　眞白に細き手を合せ。涙浮ぶる目を擧げて。なつかしげにも主の顏を打矚れば。

「ようおつしやりました。不束な私を姉……私も親身の妹にでも逢ふやうに思はれまする。物心つく頃兩親を喪し。幼少からお上へ御奉公。緣づいて間も無く夫の討死。何便もない身の上。あなたのやうな妹でもあるならば。憂を語る相手にもならうものと。お目もじ致した其折に。しみ〴〵胸に思ひました。御覽の通りしがない活計。御辛抱さへなされう

なら。十年が二十年。何の。いつまでも御在遊ばしませ。」　語に誠を顯せば。客は嬉し悲しの涙を禁め得ず。

「そんなら今夜から姉上樣。もし姉樣……もう此からは他人、は御座りませぬ。互に身の上を打明けて。お話が致したう御座りまする。あなたの其のお姿を見るにつけ。どうも不審が霽れませぬ。」

「この姿に不審とは？」

「さればで御座りまする。御書置に。尼法師となるならば。未來まで緣切るとの事。その御遺言にお背き遊ばして。御法體は何故で御座りまする。」

「あゝ。其を言うて下さりまするな。あなたがおつしやつても。草葉の蔭から夫に申されるやうな思がいたしまする。あの通り書置に懇々其を申ましたも。私の行末を心に懸けての事。其志を無に致すではござりませぬが。たとひ七生まで緣切られましても。どうまあ操が變へられま

せう……そんな女と思はれましたが。口惜うござんする。討死と聞いた時は。いつそ自害と思ひつめましたなれど。短慮は出すなとの遺言。それかと申して。生効の無い身……世間の人は何にも替へて惜む――命の遣端がないと申すのは。前世にいかなる惡業を致した報でござりまするやら。夫といふは。私同樣。幼い折双親に死別れ。伯父とは申せど。これも實の伯父では御座りませぬ。いはゞ他人に育てられ。縁者といふは御座りませぬ。もし私がない後では。死んだ命日忌日を。誰あつて回向致しませう。修羅の妄執もなく成佛する。と立派に申しても。合戰とはいひながら。人の命を取つた夫。あの世で佛樣がおゆるしなさらう筈は御座りませぬ。私が出家いたした爲に。夫の未來の苦艱が少しなりと助かる事なら。連添ふ女房の役目。去られましても……私の寸志。其ゆゑのこの姿で御座りまする。たゞ返す〲恨めしいは。（わがなき後で再縁せよ）とは。餘りと申せば私を見下げた言葉。連添うた日はわづか半月ば

かゝりゆゑ。私の心を疑つての言葉かは知りませぬが。女夫となるまでの私の苦勞……。」

客の比丘尼は流石に處女氣。

「さやうなら。あの戀婿樣とやらで御座りますな。」

羞かしげにも打笑む顏を背けて。

「お羞かしい事申すやうで御座りまするが。私が御奉公致して居る中から。思ひ初めました夫。若氣の至から文などをつけましても。噂の高い律義な生。露ほども打解ける氣色が見えませぬゆゑ。くよ〳〵と思ひ續けて。疾ひつきましたを。日頃私をいとしがつて下さるお主樣のお取持にて。やう〳〵念願が叶ひ。やれ嬉しやと思ふ内に。隣國との合戰——夫の出陣。翌日は別といふ前の日に。食事はおろか物さへ言へず。たゞ泣くと夫の顏を見るとばかり。武士の妻ではないかと叱られましても…いかに武士の妻だとて。夫婦一世の別が泣かずに居られませうか。先

祖から家に傳はる三方白の兜を。殊外秘藏致して居りましたが。今度の合戰に其を着て出陣致すと申しまするに。忍緒が見苦しく古びて居りましたゆゑ。もしもの事があつてはと。新しく爲易へて置きましたを。一方ならず喜んで。之をそなたと思ひ。是に對しても卑怯な振舞はせぬ。目出度歸るを待つて居よ……此一言が今だに恨めしくてなりませぬ。水くさい……口ばかりその樣な氣安め……鎧櫃の內にはこの書置……兼て討死の覺悟なら。かう〳〵となぜ打明けて有仰つては下さりませぬ……恨で御座りまする。其とお話し下すつたら。何の未練がありませう。夫の目前で自害を遂げ。冥土へ參つて待つて居りまするに。命長へよの……夫を持てのと……其ばかりか去狀まで……見ゝも汚らはしい。其場で引裂い……了ひました。」

昔の恨を――其時喞たんにも其人なければ。胸に苦しく包みし恨を――、つれなかりし夫の前に喞つ如く、口說かれて。

「お道理では御座りまするが。其も皆あなたを御苦勞に遊ばしてお計ひなされたを。お恨みなされては勿體ないと申すものでござりまする」

「其を思はぬでは御座りませぬが。女と申すものは。我ながら愚癡なもので御座りまする。つれない――水臭いと。人樣にまで恨がましい事を申すほどな夫が。なぜ又この樣に戀しい事で御座りまするやら。どうか成佛致すやうにと。お經は讀んでも上の空。勿體ない如來樣のお顏までが。夫の顏に見えまして。心の迷は少しも消えず。夜晝のわかちなく。戀しい……懷かしいで。胸の安まる暇は御座りませぬ。姿ばかりが佛の御弟子――心はやつぱり淺ましい愚癡な女。此通り書置を紙帳に張つて之を見ては思出し。また思出しては之を見。毎夜この中へ臥せりまして夫と添寐を致す思。佛樣の冥罰も忘れ。未來の苦艱も覺悟の上。佛樣とも神樣とも思ひまするは夫ばかり……早く……今にもあの世へ參り。夫と一所に苦艱が受けて見たう存じまする。まだしもお主樣がお出遊ばし

ましたら。力にも成りまするに。夫が討死の其後の合戰に。お二方とも御生害。お家はつひに斷絶して。館の跡は薄尾花。今は枯野の姿でござりまする。」

「お主様まで御滅亡とは。重ね〴〵のお不仕合。そのお歎きは御尤で御座りまする。とは申すものゝ。やつぱり前の世からの約束事。過去つた昔は長い夢とお諦め遊ばして。煩惱を去つて一心に御回向遊ばすが何よりと存じまする。今更どの樣にお歎きあそばしても。死なれた方の生返るではなし。今までの迷をお霽しなされて。心からの出家を遂げ。佛樣にお仕へ遊ばすが。お連合樣の爲には。此上もない弘誓の船で御座りまする。あなたに御意見申上げる私では御座りませぬが。親身の妹がお身の爲を思うて。申す事と思召し。必ず小ざかしい――差出ものとおさげすみなされて下さりまするな。」

「御深切によう有仰つて下さりました。」

主の尼は涙に冷ゆる目元を押拭ひ。
「先程から手前勝手な事ばかり申して……どうぞあなたのお身の上をもお聞かせ遊ばしまし。御苦労になる事は。及ばずながら又私がお慰め申したうぞんじまする。」
今まで泣きしは人の身の上。主が優しき言葉に。更めて我とわが身をなく涙。無言に萎るゝ。其も暫時。やう／＼自ら勵まして。
「さやうならお聞き下さりまし。かやうな譯でござりまする。」

戰場の卷

ふる雪にまがふ卯花威

一聲血になく浦松小四郎が事

高きは林か。低きは野か。唯一面に白く。なほちら／＼名殘をふらす曉の空。岡の片蔭に破れ硝子の薄氷に。縁を取せし小澤近く。古りたる梅樹。下は幹を染分け――上は（紅蕋）を包む――雪。誰……此美を亂し――此美を傷く……こは何事。低き梢に。切口より血汐を落す生首三つ結ひつけて。こぼれ齒の長刀の。朱に染れるを幹の二叉に寄掛け。諸膝組んで雪を掬ぶ若武者――鎧は……草摺。小袖の下二段を萠黄に威し。上を白糸――其華美さ卯花威。いかに手痛き合戰やしつる。射向の袖の菱縫の板はちぎれ　草摺の板をほつれて。下る匂の糸。胴の威毛には。血液斑點に染むる散紅葉。顱巻もなく鬢髮大童にふり亂し。額から眉を

割つて斜に左眼の上を行くは斬疵か。紫ばめる唇の下に。三寸ばかりかすられて。朱をにじむ眼……うす青む面色。雪一口ごとに呼吸せはし。やがて水際に膝行寄り。氷をおし破りて。丸く碎けたる處へ首をさし伸べ。我顔を水鏡に寫して。暫く見詰めたりしが。やがて面の疵を洗ひ。四邊を睨めまはして苦しき肩呼吸。雪に深く弓手をついて。半身起上る……其時……右の股へ……誰……鎗を――草摺の外より……骨をも貫いたか。「あゝつ。」と叫びあえず。吉則の二尺八寸……閃く……丁と切拂ふ鎗は蛭卷より斜に切れ。其餘勢に二三歩前へよろめく敵を……見れば鐵地の半首……小具足身輕に出立つ雜兵。手に殘る鎗の柄からり投棄て。腰刀引拔き。眞額に振翳し(二つになれよ)の身搆。若武者はたと睨めつけ。

「下郎。推參な。」

彼は一言も返さず。矢聲高く切下す。二三尺飛退つて。股を穿つ鎗の汐

首抜取り。敵の胸板目がけて投付ければ。體を捻つて……なほ斬懸る。

「物々しや。」

口には言へど初の深手に苦しき進退。片膝ついたまゝ斬込――受流。十二三合亙り合す。虎は病めども虎。苛つて附入る若武者の切先を請損じて。敵は右の肩上の外をしたゝか割附けられ。しどろになつて倒懸るを透さず二の刀に細首打落せば。氣の寛か我にもあらで。撻と坐し。はつと呼吸。時しもあれ。耳元近く。手綱烈く掻繰る鑣の音。すはや敵よ……味方か。味方ならば……此處に潔く腹掻捌いて。首級を彼に賴まばや我とても生く可き命にあらず。敵ならば……行歩は自在ならずとも。今生の思出。快く斬結んで。美名をかれの口より擧ぐ可し。「來れ何者。」太刀の血を雪にすり拭ひ。遲しと待つ處へ。青總かけたる白栗毛の。逞しき逸物の蹄に雪を煙らし。驀地に駈け來る武者一騎。鎧は褐色威。目深に頂くは同毛の六十四間の星兜。獅子頭の前立物に金の鍬形を聳かし

て。左脇に青貝摺りたる二間柄の大笹穗を橫へし騎馬の姿——天晴物慣れたる武者よ。此處に人ありと心着かずや。驅拔けて通る後より。

「此は浦松小四郎守眞なり。手傷少々負ひたれど。勇氣は少しも衰へず御不足ながら御相手仕らむ……いかに。」

と聲をかくれば。かれ遽に駒首引廻らし。其足を留めて目庇の陰より。守眞の顏を篤と見。

「やあ。小四郎か。」

いふは誰。守眞深く怪み。兜の內を伺ひながら。

「如何にも拙者は小四郎守眞。貴殿は……。」

問はれて。背に閃く。指物の旗の端をとつて。守眞にしめす。見れば緋羅紗に遠山左近之助武重と白し。

「やあ。伯父上か。」　涙聲。

「小四郎……珍しや。」　これも涙聲。急しく馬を下り。鑣とつて進、

み寄れば。守眞恭しく一禮して。

「其後は御健勝で祝着に存じます。」

「御身も達者で………。」

いひかけて眉を顰め。守眞の姿を左見………右見。

「大分の手傷。面色といひ呼吸といひ。氣遣はしい。重手では御座らぬか。」

戰場の習とて。親は子を棄て子は親を思ふ暇なく。人の心は剛に流れ。寄手の松火に目さまし。胡籙枕にいぬるまで。やさしき言葉は。かけられも。かけもせず。かゝる時なれば金瘡の血を嘗る。大將の慈悲の舌には。惜むべき一命も物かは……棄てる氣になるぞかし。人と見れば。討つか——討るゝかの中に。思ひもよらず逢ふは……伯父——聞くは……溫言。ばら〳〵と玉走る涙は草摺の血を洗ふ。

「は………はい。」　あとは無く。さしうつむく。武重は唐綾の縫袋よ

り。金瘡の藥とりいだし。舌頭に濕して指に載せ。
「さ……さ。小四郎。藥……面を……。」
守眞會釋しつゝ顏をさし出せば。武重其頤に手をかけ。疵口に藥を塗りながら。
「ほう。此は……どうじや。痛むか……うむ。左程痛まん……外に矢疵でも請けられたか。」
「は。……左の籠手と腰の番ひ……外に一ヶ所高紐のあたりへ。強く横矢を請けました。」
「左樣か。」と聲をうるませ。「玉傷は……。」
「幸ひに彈丸はうけたやうに覺えませぬ。」
「玉は受けぬ……其は目出たい……ひどく震へる樣子だが如何いたした。」
「只今此處で……。」
と倒れたる雜兵を指し。

「此奴に不意に右の太股へ鎗を……。」
「此奴に……仕留められたのか。」
勇氣を心に譽むる笑顏。守眞も寂しげに笑を含み。
「細首打落してくれました。」
「ふむ。天晴。」
と守眞が亂髮にふりかゝる雪を拂ひつゝ。痛手に凋るゝ姿を見て。偸に淚おし拭ふ。響く……突然……彈丸の音――釣瓶ばなし。守眞むくと首をあげて其方の空を睨め。ふり向く顏と武重の顏。
「計らざる處にて見參致し。今はの際の喜悅……。」
「なに。今はの際。」
「は。此より戰場へ引返し……花々しく斬死致す所存でございます。」
「いゝ所存――いゝ覺悟。さりながら御身が勢は無殘な敗軍……あれ……
……あれ味方が揚げる鯨波。今御身が取つてかへし。一働きとは天晴……

義の潔しとする處なれど。累卵を以て大石の喩。御身一人次ぐ味方もなく。群る敵へ斬込んで。三面六臂の目ざましい働をした處が。急に味方の勝利になるではなし。言はゞ犬死……ましてかけ退も不自由な重手をうけて居ながら……餘りといへば無謀な量見……如何なる怪我で名もなき下郎に。首級を揚げらるゝやも知れ難い。合戰は今日一日に限るではなし。十分手當をして。英氣を養つた其上で。存分の働をしやれ。何時でも一命は捨てらるゝ。一先拙者の館へ立越え。ゆる〳〵手疵の療治を……なう小四郎。」

實意を籠めて說勸むれど。忠義一徹の守眞。武重を恨めしげに見遣り。

「お言葉とも思ひませぬ。死すべき時に死せざれば。死ぬにましたる耻辱を受くると申すに……武運拙くして味方の敗軍。たとひ手疵を負へばとて。戰場を脫けて此處等を徘徊致すは。我ながら快く存じませぬ。まして……卑怯者と敵味方の者の思はくも耻かしう御座るに。此處を落ち

て館へ來い。ゆる〳〵療治せよ……御深切は御深切なれど。伯父上。平常とは違ひます……名を惜み義を重ずる武士に……夫が仰せ下さるお言葉か。名を惜み義を重ずる武士の……夫が御意見か。餘りと言へば女々しいお言葉。此小四郎は命を惜む腰拔者と。おさげすみの上の御戯言で御座りますか。伯父上。亡父と積年御入魂の御馴染。且はその遺言を以て。我子と思召して御意見下さるならば。何故に潔く討死せよとは。仰せられて下さりませぬ。却て御厚志を恨しくぞんじます。」

當然の理に責められて。武重は――鎗を突き。鞍にもたれ――首を下げて無言なり。返事如何にと。流眄に見やる守眞。かれ一言の答なければ。苛ちて。

「伯父上……さらばで御座ります。」

何を思案の武重。言葉は耳にいらざるか。體さへ顏さへ。少しも動かず。鬣の雪に身をふるはして。馬のみぞ高く嘶く。

「是が此世の御暇乞――伯母上にも芳野殿にも。守眞がくれ〴〵よろしく申あげましたと御傳言を賴上げます。」

次で言ひださんとせしが。懷舊の涙に暫く咽ばされ。

「不運の小四郎。八歲にして父母に別れ。夫より今日廿五歲の曉まで。伯父上伯母上の御不便にかけられ。實の親さへ及ばざる御慈愛。山とも海ともたとへ方なき御高恩を蒙り。小祿なりとも給はりて。父の名籍を受嗣ぐ迄に相成しは。偏にお二方のお骨折。いつかな此御恩報じと。日夜忘るゝ暇もなく。思續けて罷在りしに。計らず此度の合戰。伯父上とは敵と味方に別れ〴〵。勿體なくも大恩ある伯父上に弓をひきしは。私にかへ難き主君の御爲。武門の奉公のつらいと申す事。今日始めて思ひ當りました。舘へ來いとの今の仰せ。日頃に替らぬそのお言葉。何處までも不便と思召せばこそ。平常なればいかやうなる無理難題を仰せらるゝとも。身骨を碎いても。御意を背く心は御座りませぬ。まして御深切

のお言葉。推しても願ふ處なれど。假初にも主君を持つ身の上。武士の意氣地。小四郎がいふにいはれぬ心の中。御賢察下し置れて。折角の御厚志に背くの段は幾重にも……伯父上……これこの通り。手……手を合はして……。」

(願ひます)は涙に紛れ。がばと伏せば。聲ば立てねど武重も。震ふ鎗先に隱されぬ涙。守眞曇れる聲を勵まし。

「わけて伯母樣には……。」

少時勵みても。また撓む。

「言語に絶せし御慈愛を被り。常々身のまはりの物何不自由なく賜り。風引いても人を使はされ。氣分はどうじや。欲しい物あらば申越せ。この藥を用ゐよ……我子と思しめしての御心勞。風引いてさへ夫ほどに……
……此度小四郎が討死せしとお聞遊ばさば。いかなる事に成行かせたまはんかと。今死ぬ際に臨んでも。心に懸る伯母上のお身の上。なる事なら

ば唯一目。なつかしいお顔を拜し。長年うけし御恩の御禮なりと。せめては一言申上げ。此世に思ひ遺す事なく。快く生害致したう御座ります尚又伯父上にも伯母上にも。改めてお詫を致しますは。芳野殿の事。」默然としてひそ〳〵涙を拭ひ。耳を清せし左近之助。わが娘の名を聞くや否。身を背けて鞍の前輪に。兜を犇と押つけ。堰留めし奔流一時に注ぐ涙。如何なれば……所以あらむ。

「風の便に承れば。不束なる小四郎を思ひ詰められ。頼みなきほどのお疾……有難いお志……伯父上始め伯母上の御心痛。御推量申します。これと申すもみな不義なる拙者がなす業。御免下さりまし。芳野殿と拙者とは幼少からの許婚。今日明日と祝言の延々に相成る内兩家の確執。其處へ足下から鳥の立つやうな御臺樣のお言葉。たつて侍女の若葉と縁組せよ。仲立してとらせると……往生づくめの祝言。御主人の仰なりともかね〴〵許婚の妻を餘所にするとは。いかなる人非人と。御二方の思召

も御座りませうが。よく〳〵申すに申されぬ。深い仔細のある事と。お免し下さるやうに願ひます。此度小四郎が討死も。不義の天罰と思召して。御無念をお晴し下さりまし。」

武重は鼻を啜り。聲をうるませ。

「何の……何の。お身が若葉殿とやらと祝言の義については。拙者を始め奥はいふに及ばず。む……む……娘まで。共々に毎日喜び泣にな……ないて居る。娘芳野は知る通の不束者。氣に入らぬは尤千萬……。」

言ひも切らざるに。矢庭に守眞立上り。股の痛手に撞と倒れ。倒れながら武重の脛楯に取縋り。おろ〳〵聲を震はし。

「そりや伯父上……そりや伯父上。あ……あ……餘りで。ご……御座ります。其樣に御立腹では。小四郎が此世の心懸り。冥土の障りになりまする。犬畜生にも劣つた恩知らずの顏を。御覽なさるもこれ限。不便の者と思召して。たゞ一言許してやる……とのお言葉を……さもなくば。あ

の世へまかり越し。どうも父に逢はす顏が御座りませぬ。何卒お心解けられて……これ伯父上。ゆ……ゆるしてやるとのお言葉を……土產に心やすく死出の旅が。い……致したう御座ります。」

刀を杖に身を起し。力なき足を蹈占め。梅の木下に立寄り。花多き小枝を切取つて。武重の前にさし置き。髮の毛一束切拂つて弓手に摑み。

「伯父上。此髮の毛は伯母上に……遺物と申すも恐れ多くは御座りますが。たゞ小四郎が討死の記章までに。御屆け下さりまし。またこの紅梅の一枝は。芳野殿へ拙者が寸志。先頃お目にかゝつた砌。拙者の庭の梅が咲初めたら。是非一枝との御所望。今日は持參しやう。明日はと思ふ內。遂に本意を果さず。さ……嘸や今頃は庭の梅も。いゝ詠で御……御座らうが。其を進ぜる譯には參らず。さいはひの此梅と存じつき。一枝御覽にいれまする。小四郎が魂は此花につきそひ。伯母上にも芳野殿にも。やがて見參いたす心持にて。其を樂に潔く討死致します。伯父上に

は武運長久。御壽命萬々歳……死後れては一大事。時刻の移らぬ内……伯父上。此……此が長の……長のお別で御座ります。」

俄に涙を掻拂ひ。立上らんにも痛手の苦しさ。二三歩をよろめき――よろめき蹈出す。鞍に身を寄せ。涙に暮れし武重。鎗取直して突立ちあがり。鼻聲を張揚げ。

「暫く……小四郎。」

守眞は立留り。頭を振向け。

「は。何御用で御座ります。」

「何處へ行く。」

「戰場へ……。」

言はせも果てず。怒氣を含む大音聲。

「默り召され。先刻から言葉を盡して。言聞かするに。更に用ゐる氣色なく。二言目には討死する……。」

鼻の頭に(へゝ)と笑ひ。

「さほど命が捨てたくば。戰場へ行くまでもない。伯父が相手を致さう老體ながら御身如き若輩づれの。未練な刄は……。」

胸板を。弓手に丁と一つ叩き。

「よも立つまい。見事伯父が皺首斬つた其上で。まだ刄が鈍らずば。其時こそ戰場へ。引返すとも――斬死するとも。御身の勝手。武重此處にある間は。其處一寸も動かす事はならぬ。さあ勝負。」

二度三度鎗を引扱いて。身構ふれば。

「勝負とは……情ない……。」

目も眩み心も消ゆる。いぢらしや守眞が無殘の姿。强く口には言へど。胸には涙。泣じとすれど曇る聲。

「情ないとは何が……今となつて後れたか。さ……さ……勝……勝……。」

「後れも致さねば恐れも致しませぬ。」

「それになぜ勝負は致さぬ。」

「どうあつても勝負は出來ませぬ。其鎗で。さ……さ。一思に突通して下さりまし。」

「手向ひせんものは死人も同然。左樣なものを手に掛けるは本意でない戰場へ向ふも此處で戰ふも。命のやりとりに二つはない。さ。早く……。」

「いつかな成りませぬ。相手といふは大恩のある伯父上。亙合はさむ其鎗は。亡父が秘藏の笹穗……刃向ひがなりませうか。」

實に其鎗は守眞の亡父守道が双なき秘藏の業物。遺物とてかれに讓れるなり。見るからに思出さるゝ亡人の事――其人の遺言(我子を賴む。)我子とは……小四郎。小四郎は……此姿。武重は鎗をからり投げ。立つたるまゝ男泣に咽び入る。

今迄は遠くも隔てぬ戰場の。物騷がしく聞えしに。先程より寂寥となりしが。えい――えい――おうといふ勝鯨波。俄に天に轟けば。守眞礑と

膝を打ち。無念の一聲。
「南無三。」
言ひも敢ず太刀取直して。咽に突立てんとす。武重あわてゝ其手を捕へ。
「逸まるな……これ。」
太刀を捥放す處へ物の具の響。後の方より遠山が郎黨一騎馳來り。武重の前に跪き。
「味方大勝利。敵は最早二三里も引きました。大慶に存じます。」
守眞のうつむけたる顔を覗込み。
「おう……珍しや小四郎樣。」
力なく首をあげる守眞。郎黨を見て。
「新六殿か。」
「はつ……。おう。おう。そのお手疵は……殿樣。」
武重と顔見合せ——顔を背け……涙。

やがて武重に何事か囁かれし新六。頷いて守眞に近き。
「小四郎樣。拙者がお伴を仕ります。」
「一先。舘へ引取られよ。」
守眞今は詮方なし――戰場へは向はれず……義理の箭に射すくめられ。自害は得遂げず……恩愛の手に支へられ。死を望む身の……何事ぞ――死を嫌ふ人と異らぬは深手の苦痛。新六の肩をたよりに辛うじて立上りせはしき呼吸の間より。
「伯父上。さらば……。」
武重は言葉なく。たゞ返答の首肯。郎黨には。
「新六。氣を着けて參れ。」
「はあつ。」
西へ靜に急ぐ二人の後姿。東へ遠く薄らぐ駒の嘶。あとは蹂躪りし雪間の死骸――梅枝の生首。澤邊の枯蘆風に友摺れて。頂く雪をふり落せば

驚き立つ羽音高し二羽の鷺。

怨言の巻

留めても行く春
なげきに散殘るよし野が事

遠山が館の奥まりたる別室に身を忍び——病を養ふは浦松小四郎守眞。苦惱の中も敗軍の無念やる方なく。戰場の戀しさ胸に絕えず。明日にもあれ。矢一筋射るほどにもならば——この家の人々承引あるまじ——夜に紛れて竊に脫出し……その時はいかなる强敵に亘り合はすやらむ。先頭の合戰に。森陰より現れし武者——鎧は胴丸……黄櫨匂……筋骨の逞しさ。あはれよき敵。亂軍の中なれば姓名を名乘り合ふ暇なく。彼は大太刀。我は長刀。二三合あはす間に。崩れ懸る雜兵ばらに隔てられ。勝負を決せざりしこそ遺憾なれ。あの武者風……あの太刀風。誰が御內の誰なるか。捨つる命ならば。あれほどの刄に。札を試させせんぞ武夫の本

懷。此度もかけ向ひたらば。あはれいみじき敵に出逢ひ。守眞が目覺しき合戰の樣を。其口より人々の語草に傳へたき。血氣に逸つてかく思ひたつ時は。矢も楯もたまらず。夫は心ばかり。矢疵は扨置。太股の鎗疵に。五體のあがきも思に任せず。焦れて獨泣き。身もだえ――苦痛。足ずり――苦痛……淚……呻聲。

「もし。小四郎樣………小四郎樣。」

枕元に誰そ。優しき聲。守眞閉ぢたる眼を細々と見開き。

「おゝ。芳野殿。」

「御氣分はいかゞで御座ります。母も一方ならず御案じ申して居りまする。」

「難有うぞんじます。して伯母上は……。」

「一日も早くあなたの御本復遊ばす樣にと。此頃は毎朝山の不動樣へ。お參を致します。もう大方歸るで御座りませう。」

「何。不動へ……日參……。」
青ざめし頰を流るゝ涙。拭はんと夜具の中に手をもがけば。芳野はさし寄り。我袖に柔かく拭ひ。
「今朝はお顏色がお惡いやうで御座りますが。また強くお痛み遊ばしますか。」
「いや。追々苦痛も薄らぎました。伯母上はじめあなたの御介抱。お禮は言葉に盡されませぬ。」
「何の他人がましい。左樣な事を思召さずと。御自分の家にお出遊ばす同樣に。何なりと御用をおつしやつて下さりまし。」
「拙者ゆゑに伯母上は御日參……あゝ勿體ない。冥加に餘る御厚志。」
芳野の顏を見護りて。
「久々御病氣とうけたまはりましたが。もう御全快なされたか。」
「私……はい……その病氣を御存じで御座りましたか。」

裏に怨を含む言葉——麗しけれど薊の花。刺ありと云れば手はのびず。
守眞は眼を塞ぎ。
「ゆるして下され。」　千言より一句のつらさ。
「お目出たうござりました。」
應せぬ答。目出たいとは何が。守眞の今の身の上に。不吉ならぬはなし敗軍——武士の最も忌む可き。服藥——人の最も厭ふ可き。守眞は解せぬか——答なく。解したるか——顔を背く。
「御祝言遊ばしましたとやら……。」
扨は是……此恨か。毒を塗りし尖矢。うらかくまで守眞の胸。呀とも言はず身を縮まし。あとは何事をいひ出すかと。血は脈管に浪を打つて。胸は安まらず。あとの言葉を氣遣へば。今の無言の氣味わるさ。呀。口を開く……身は縮む。
「小四郎樣。女と申すものは貞操が大事と申しますが。その樣な物で御

座りますか。」

荊棘に咲く櫻――思もかけぬ……奇異な質問。守眞は深く訝りながら。

しかし容易に。

「申すも愚。女は貞操を守つて兩夫に見えず。男は二君に……。」

言ひかけて猶豫ふは。我身に耻ちてか。

「吉野殿の手前も面目ない……忠臣は二君に仕へず……難有い御敎訓。なか〳〵生長らへて居らるゝ身では御座らぬ。思へばあの時伯父上のお言葉に背いても……。」

米を種ゑて稗――芳野は呆顏。

「あれ何事で御座ります。私の申した事がお氣に障りましたか。その樣な心で申したのでは御座りませぬ。女は兩夫に見えずと申しますが。殿御は澤山戀人をお持ちなされ……てもよろしいので御座りますか。」

守眞が氣を損じてはと。こは〳〵ながらいふ怨言。氣を損じてはと。斟

酌するは（愛）怨言は（惡）水火のやうな（愛）と（惡）を。加減する處女心。何處までも憎からぬもの。守眞が答――應といはゞ。我身を辨護へども……道に背く。否といはゞ。道に合へど我身に裏切る。思案に暮れて口を閉ぢしが。露を厭ふも濡れぬ前。我身を裏切れ……道に合へ。

「たとひ男たりとも左樣な事を致すやからは。男傾城とか申して武士たるものにはあるまじき擧動で御座る。女とて忠義は忘れてならず。男とて貞操なくては叶はぬかと存じます。」

「其ほどよく御存じの上で……。」

他人と緣組は……と詰らんとせしが。（はしたなし）と我を誡め。

「あなたは私が左近之助の娘といふ事を。お忘れ遊ばしましたのか。」

守眞の心の（箭）は芳野が言葉の（脫兎）を逐ふ。此處の藪に認むる形。瞬く間に彼所の林に其影。出沒謀られざるを。足塲も定めず逐廻し。不測の蜓を蹈外さんかと。氣は退けて進まぬながら。

「なに。　左近之助の娘といふ事………なんで忘れませう。　異な事をおつしやる。」

「いゝえ。　お忘れ遊ばしたに相違御座りませぬ。」

少し聲をうるまし。　膝を詰寄せて言懸ければ。

「何故に其樣な事を………。」

「何故………とはお情ない。　左近之助の娘なら。　幼稚折から浦松小四郎守眞の許婚の妻では御座りませぬか。　親と親とが誓文許した女夫では御座りませぬか。　もうし………小四郎樣。」

夜具の袖に取附き。　身を震はし。

「あなたは左近之助に芳野といふ娘がある事を。　お忘れ遊ばしたので御座りませう。　餘りといへば………お………お………お情ない。」

守眞は青く——憔けたる手をさし出し。　芳野が伏したる肩にかけて。

「なんの其を………八幡忘れは致さぬ。」

肩に懸けられし。守眞の手を握詰め。

「なんとおつしやつても。現在私をお見捨遊ばして。外に言交はしたお方と……。」

言ふに言はれぬ口惜さは。涙と咽び聲が物語る。暫時は其等に物語らして。

「男とて貞操といふ事はあると。只今おつしやつたからは。夫はよく御存じの筈……。」

此處でまた言葉を途切らし……途切らせしは。はしたなく言過さばと男の心をかぬる例の娘氣。なるたけは柔かに。しをらしくと心を配れど。其人の顔見るからに戀はいやましに募り。募るほど恨は一入深し。恨があればこそ言葉は恨。言ふ事は思ふ事——思想の媒。鏡に花を翳して月の影とは見えず。此(自然)に逆ひて。泣くに笑ひ。怒るに喜ぶは。世なれし曲者の業なり。

「それ程御存じの筈……それをいかにお主様の命だとて……またお主様だとて。人では御座りませぬか。鬼か蛇でゞもある様に。まるで情を御存じない方でも御座りますまい。たつて今の奥様をお勸め遊ばされたとき。小四郎様。あなたはなぜ私といふ……左近之助の娘芳野といふ。歴とした妻があると。おつしやつては下さりませぬ。いかに無理なお主だとて。……其を推して縁切つて。今の奥様をとお勸めなさるやうな事がありませうか……其樣な事が御座りませうか。母が話に聞きますれば。今の奥様はお主の御臺様が御秘藏な……子のやうに御不便がられるお傍の衆とやら。其方があなたをお慕ひ成されて。死ぬほどに……他人さへ一命かけて焦れるものを。幼稚馴染の私が。それに愚が御座りませうか。御臺様もその心根を不便に思召し。お上からのお言葉……おとり持で。御縁組なされたとの事。其時のそのお傍の衆の心持は。まあどんなに……えゝ。思出しても口惜う御座ります。御臺様も御臺様。御自分のお傍の衆

が不便なりや。私の心とて。不便は同じ事。其方が死ぬほどなりや。誰も死ぬほどに思ひますに。あなたの口から此々と。譯をお話し遊ばして御辭退遊ばして下すつたら。いかにお主の權柄づくでも。其を無理にとは。よもやおつしやりはなさるまい。其方とかねて深く言交はし。私のやうな不束なものは。厭におなり遊ばしたゆゑ。言譯もおつしやらず。御意を幸ひに御祝言なされたので御座りませう。なんとで御座ります。小四郎樣。」

守眞が手を握詰め――抱〆め。戀の一念が言はせる恨。日頃に應せぬ舌の働き。なよやかに見ゆる庭の若竹も。可恐しや雪を刎返す力はあるもの。

いかに芳野。知らずや戰國の常として。味方同士に狐疑を抱き。一言の讒に千人の命を失ふ。某の城某の陣。妻を遺し子を送り。人質に誠を明す頼みなき世の習。春秋戰國の時。魯の兵術者吳起といふは。齊との合

戰に大將として。差向けられたき望あれど。その妻齊の產なれば。魯人の思はくをかね。神ぞ二心なき眞心を明さんがため。露咎なき最愛の妻をわが手にかけ。功名首尾よかりしが。殘忍薄行の男よと名立てられ。遂には身にふりかゝる禍のあらんかと可恐しく。魏國へ走りし例もあり無情なる吳起の振舞。人の人たるものゝ學ぶべきにあらざれど。時によりては此に似たる心懸なくては叶はじ。小四郎守眞八歲にして孤となりしを。父が義兄遠山左近之助蔭ながら守り育て。弓彎き太刀打つ業をも傳へ。此までに……。瑣少の事より兩國の合戰さし起り。伯父甥其君を異にすとて。敵味方に立別れたれば。守眞は敵の內に伯父と賴む人あり二心はなきか。油斷なく振舞に心着けよなど。あらぬ陰言も耳に入る其矢先。若葉が戀慕——もだしがたき主命。敵の內に伯父を持つさへ。讒口の種となるを。其娘——敵の片われと二世の契……此を大膽にも主の前にて言放つべきか。祝言は否むべし……我身の浮沈。主の心を損じて

君臣の縁を絶れ。編笠やれ鼓　轍の魚と落ぶれても。むかしの一諾を重んずるがために。不道の君に見放されしと名を立てらるゝならば。知行や扶持に心を煩はす守眞ならず。義ゆゑの浪人ならば犬となつて。肩衣に臂張るよりは心易し。それしきを曉らぬ小四郞か。それしきを得爲ぬ守眞か。又芳野が怨言に。許婚の我に秋を吹かして。萠出づる草の若葉に見替へしとは。そもや亂心しての言葉か……心得ぬ。此守眞は甲冑を伊達に衣る男傾城と見たか。十餘年の長の月日。小四郞が顏ばかりに氣を奪はれて。皮一重內の膓は。仇に見過せしか。芳野といへば筒井筒振分髮の許婚。其兩親は海山の恩を受けたる伯父と伯母。思案の外に迷へばとて。この義理を忘れやうか。若葉との祝言に。熱鐵の盃を酌み。新枕の針の床に。鬼と添寐の夢を結びしは。讒言の外に身を措く一時の策略。もし芳野の事をいひ出して。二心の汚名を受けなば。味方の咎に背を破られ。敵に濺ぐべき血汐をむざ／＼流し。剩へ馬革に裹むべき屍

を蓆に卷かれなむ。此身一時の苦痛は忍ぶに難からざれど。萬代不朽の惡名は。守眞が恥辱祖先の名折。かほどの事を土百姓は甘んずるか。素町人は得忍ぶか。武士は得忍ぶか守眞が甘んずるか。常に似ぬ愚痴の繰言。爾がそれを言ふにはあらじ――戀が其をいはするか――戀には誰が性根を奪はれし。此程守眞が戰場へ向ひしに。二つの目的あり。一に主恩を報ずる事。二に遠山夫婦の恩を受け。芳野を妻と定めながら。若葉に添ひしは餘義なき主命。半日なりと添ひしからは。主命に背かず若葉の心を無にせず。扨は一命を捨て。遠山夫婦未婚の妻芳野へ言譯の事出陣の砌遺したる書置も。此心を籠めしなり。かくは思ひながら。今更なまじひに言出しても。疑心の鬼は挫ぐに難しと。半句も吐かず。答なきを芳野はなほ恨めしく。

「お主樣のお取持で御緣組遊ばした奧樣。それをとやかう申すでは御座りませぬが。つい此間まで此處へお出遊ばした時は。女房と思召してか

可愛らしい情らしいお言葉をかけて下さりましたに。今度戦場からお歸り遊ばしてと申すものは。恩に被せるなんのと申すでは御座りませぬが三度の食事からお藥のお世話まで。女房の役目と心嬉しく。人手にかけず及ぶだけは。御介抱申上げても。いつも御機嫌わるく。賴みもせぬ事をといはぬばかりの御樣子。私の不束なは御一處にお遊び申した幼稚時から御承知のはず。其を今始まりでも致したやうに。急につれなく遊ばすのは。御同慾と申すもので御座ります。幼い時から戀ひ慕つて居るものを……よしやお氣にめさずとも。よそ外の方を奥樣にあそばしたゆゑ定めし口惜くも無念にも思つて居やう。不便なものだと露ほども思召があるならば。切めて氣安めなりと優しいお言葉ぐらゐは下さりさうなものと。この頃のつれないなされ方を見るにつけ。恨めしいやら悲しいやら……く……口惜しいやら……かう〳〵だと母に申せば。みんなお前の不束からと……取着かうにも賴まうにも……。」

聞けば憎からぬ心――哀の述懐。守眞の骨は碎けるばかり。芳野の胸は裂けるほど。袂を嚙占めて疊に伏し。涙は惜ます聲を惜みて泣く。やうやく面をあげ。頰にかゝる鬢の亂れ毛の濡れたるを。搔拂ひ搔拂ひ。

「いつそ死にたう御座ります。」

「死にたい……。」

「はい。樂ない命を長らへて。こんな苦勞を致すより……。」

「惜からぬ身をいつまでも……口惜しい日を送るより……。」

不思互に見合はす顏。見合はす間もなく背ける顏。芳野は涙を拭ひ。守眞は眼を閉づる。

戀に死ぬるも命――名に捨つるも命。因緣いかなればかく惜からぬ命の人。二人まで相逢ふ事か。憂世は獨りの憂世ならず。

(はあつ)と守眞の太き溜息に驚かされて。芳野の眼はかれに向く。其顏色は光澤なく靑ざめ。頰骨の露はなる。二ケ所の疵の赤黑き。面影かは

りて其人とも思はれず。此前逢ひし時は。今凄味を添ふる亂髪。其を油艶やかに取上げ。今愁に濁る眼。其も冴々しく愛嬌を含み。今苦痛に慄く紫の唇。其も丹く潤ひ。何一つ戀を媒たぬはなかりしに。哀れ何一つ愁を語らぬはなき今。

見るにつけ其人の盛なりし越方を思出し。行末いかにかなるらんなど心細く推計り。目ばたきもせず守眞の顏を目護る内。芳野の心には（憐）の情（懷舊）を呼出し。（懷舊）（戀）を催し。情無くされても其人の傍――瘠衰へても其人の顏。ならぬ戀かと思亂れて。重き枕に喞ちたる時を思へば。薄々の酒も茶よりはまし。夢になりと面影の通へと。願ひし事さへありしを。嬉しや樂しや今の我。芳野は愁の中の、我を忘れて。寂しさうに笑を含む――思慮定まらぬ處女氣（悲）も手のうら返して（喜）。蝶は紅に遊ぶ間に。風に吹かれて紫に眠る。

芳野の初々しき笑顏に。守眞も思はず笑み返す。今となつて何を羞づる

か。芳野自らも知らで。顏少し背けて振袖の袂を拈り。（どうしてあの樣にはしたなく言過したか。）　思へば一倍の嬌羞さ。

「芳野殿……芳野殿。」

和かに守眞が呼聲。拈る振袖を横顏に翳し。其隙から男の顏を詠めて。

「はい。」

「芳野殿。改めてお願が御座りますが聞いて下さるか。」

「あの。私に……叶ひます事ならば。何なりと……。」

「必ずお聞き下さるか。」

親しく問ひ懸けられて。嬌羞さも薄らぎしか。枕近くにじり寄り。

「其換私のお願も……。」

「其は申すまでも御座りませぬ。」

「小四郎樣。屹度……あの。屹度で御座りますか。」

思の外の挨拶は疑惑の種。

「武士に二言は御座りませぬ。」
淀なく言放てば。紅らむ顔を。袂に包む嬉しさ。
「お嬉しうぞんじます。」
守眞は二つ三つ咳く苦痛さに。眉を皺め。
「改めてお尋ね申すも異な物で御座るが。あなたは此小四郎を二世の夫と思召す其お心に。詐は御座りませぬか。」
言切らざるに折返して。
「今更其をお尋ね遊ばしますか。」
「相違は御座りませぬな。」
戀に最も恐るゝは(疑念)。芳野は聲を濕ませ。
「あらゆる神様佛様を誓にたてゝ。此に詐は御座りませぬ。」
「其ほど思うて下さる拙者に。なぜ秘しだてを成さる。」
語氣を鋭く詰り懸る。思も寄らぬ難問。途方に暮れてはや……涙。

「小四郎様。あなたは根もない事を拵へて。私の願を叶へぬやうに。遊ばすお心で御座りますな。」

「小四郎は左様な卑怯ものではは御座らぬ。あなたの深く包んで居らるゝ事を。疾くより見抜いて居ります……一昨日伯父上からお便が御座りましたらうが。」

「えゝ。」驚くを見て。さこそといふ笑を含み。

「そのお便を聞かして下され。」

いかにして守眞は知りけむ。此便といふは左近之助が陣中から凱旋の吉報。敵の大将は不意の夜討に自害を遂げ。名あるは同じ道にと屍を晒し。臆せるは降人となり。落人となりけり。此便に母を始め下人まで　われが命拾ひせる嬉しさ。父が目出たき歸館は。小四郎がやる瀬なき遺恨。笑うてよきやら。泣いてよきやら。芳野の胸苦しさ。「父上がお歸り遊ばす。」と機嫌顔に母がいふを。義理にも泣顔はならず。人情として

も喜ばねばならず。嬉しいが五分なれば。悲しいも五分。父の凱陣言ひ易へて敵の敗軍。其と聞かれたら嘸や守眞の歎。戰の吉報を母から耳に入るゝと同時。目に浮ぶは守眞が涙の顏。心に浮ぶは守眞が遺憾の情。「此上もなく目出たいに。何を不吉な……涙を出す。」と母に詰られて包むによしなく。「嘸小四郎樣が御無念で……。」と一思に言放てば。「道理。」[illegible]と一言。あとは貰泣にして暫時あり。「味方敗軍と聞かれたら。利かぬ氣の小四郎殿。逸つた事するも知れず。此は父上がお歸まで必ず秘めて……。」「あい。」と覺束なく答へたりしが。今守眞にとひつめられ。(語らうか)母の言葉の如く。もしもの事ありては……。(秘さうか)我戀は此返事一つに。成りもし破れもす。實を語らば。一時我戀叶うても。小四郎樣の一命。語らずば我戀は此儘朽ちて我命まで……我戀——人の命。いづれ輕重の別なく。思案に迷ひしが……我から語らずとも終には露れむ。「母の堅い申しつけゆゑ。深くお包み申して居りましたが。秘しだてす

る水臭い女と。お疑ひ遊ばすゆゑ申上ます……から。どうぞ私のお願を……。」

「慥に……。」

「屹度で御座りますか。實は敵方はさん〴〵に破れて。大將までが討死。あしたあたりは父上も歸ると。母上の話で御座ります。」

「なに。大將まで。う……う……討死……。」

苦痛を忘れて跳起き。五體を震はし齒を食〆め。

「む……無念。口惜しい。」

逆立つ眉。血走る眼――駭く芳野は守眞に取着き。

「小四郎樣……もし。小四郎樣。」

縋るを突退け。枕元の鞘卷に手を掛ければ。突退けられし芳野。また其手にしがみつき。

「何事を……御生害か。」

「しいつ。」
芳野は忍ばす聲に力を籠め。
「逸つた事をして下さりますな。」
女ながらも一生懸命。男なれども病苦の瘠腕。白き手と。青き拳の間に。二寸輝く刄の光。振解き――拔放す力はなく。無念と苦痛をませし守眞の呼吸――驚駭と恐怖にせはしき芳野の動氣。それの漸くしづまる時。
「父上も明日は歸りますゆゑ。御相談遊ばしましたら。よい御分別も御座りませう。御短氣はどうぞ……小四郎樣。」
痺るゝ手より鞘卷を捥放され。守眞は無言――投首。今此所で。自害覺束なしと思へば。
「いかにも……伯父上に御目に懸つて……。」
欺罔と知らねば。
「はい。どうぞさう遊ばして……。」

書院の方に侍女の聲。

「芳野樣………芳野樣。」

「どうぞ御短氣を遊ばしますな。此馬手差はお預り申して參ります。」

芳野は鞘卷を懷に押入れ。亂鬢を搔き——限を拭ひ。

「お風を召します……御寐なりまし。」

「此儘でよろしう御座る。」

「左樣ならば後ほどまた………。」

力なく立上り。しを〳〵と襖を開く。

「芳野殿。」

「はい。」

ふり向く顏をつく〴〵見て。

「伯母上に………よろしく………。」

「はい………必ず御短氣を………。」

首肯く守眞。出行く芳野。知るや其鞘卷は遺物　黑髮ぞ切れとて。

自害の巻

吉野は春若葉は夏

われは世を秋の露の命の事

行燈の覺束なき火影。隙間偷む風に揉れて。明……滅……定なき人の命屏風立てまはしたる床の上に。我篠楯も寛むほど。瘠衰へし脛を組み。陣刀に縋つて亂髮の頭を垂れ。我目にも我身を今宵が見納め。一死と覺悟は極めながら。心といふ物ある間は。氣に懸けらるゝ此世の事。主命に是非なく。心外の契。とはいひながら初枕――忘られぬ物。妻――我に焦れし女。若葉……名は詐にて姿は花と人の譽物。氣立もやさしくしをらし。これ程の女が戀婿とて。身に替へて大事に勞るを。懷にいる窮鳥――鳥は言葉もなく情もなく。獵師は殺生に慣れて心自ら荒し。其さへ之を射らず。筒井筒の芳野を思はぬにあらねど。半月たりとも妻の若

葉。憎からう道理はなし。その憎からぬ妻……心にかゝる。またの逢瀬を未來にたのみ。生甲斐もなく取遺されし心の中……しかも女心。出陣の時十分悲ました上。又鎧櫃の書置。命の絶えざりしか。心の狂はざりしか。玉の緒絶つばかりが殺生ならず。絶たずして絶つにます苦。無殘な……無慈悲な……此が女夫の間にする戯か。離別の折切めては笑顔を見せ。頼もしき言葉をもかけべきに。未練を殘させじと情無くせしは不便の妻……可哀の若葉。忽然胸に浮ぶ離別の有樣。

更衣初の六日……(春の曙)……聞けば暖に長閑のやうなれど。雪を底に持つ空。灰色に曇りて。日出前のいとゞ薄暗く。芽ざし柳を扱く朝風に鎧は冷えて霜を浴び。足も踏留まらぬ寒氣。二番鶏に凄じく嗁立てられ式臺へ立出づる若武者。引添ひて妻と覺しき美女。眞紅の忍緒を手繰つて。五枚錣の二方白の兜を。馬手重げに捧げ。弓手は揚卷の形を繕ひ。或は。赤銅魚子の覆輪かけて。螺鈿の櫻を散らせる。黒鞘の埃を袖にて

一拭ひ。夫に死花飾らせんとか……けなげにも。哀を知るや其處に跪づく郎黨の。さも惡氣に半頰當てたるが。鋭き上眼づかひに主人を見遣り。草鞋を直しながら。白く——太き息を吐く濁聲。

「大分白むで參りました。」

若武者は首肯くばかり。やがて草鞋の紐を結び。立上つて二度三度足踏して。

「若葉……兜。」

聲の下。郎黨心得て。物をもいはず若葉の手より。もぎ放すやうに兜を請取る。凋れて式臺に座したる若葉。じり〳〵と居去つて夫の草摺に縋れば。振向ける顏——見上げる顏。兩人ながら身を動かさず聲を出さず——たゞ見詰合ひしが。四つの目ばたき。自ら隙なく繁くなりて。堪へずや一雫……若葉か。次で一滴……守眞か。跡は孰れを誰のと分たず。傍に見る郎黨は。手持無沙汰の氣の毒顏。手に持つ兜の星を數へて。素

知らぬ風にもてなす。若葉は女氣の脆く。一聲わつと泣立つるに。守眞もたまりかね。草摺にかけし妻の手を執り。引寄する時。郎黨と顔見合せ……其手を酷らしく振拂つて。一足踏出す。

「暫し。」

と言ひながら鐺に取附くを。またふり切り。

「健固で……參れ六郎太。」

俯す若葉の耳に響く跫音。すはや行く。

「御無事で……。」

いふも嗚咽聲。矢庭に立上り——逐ひかけ門口まで走り出て見れば。其處に。あれ二人の姿……急足に。まだ袖や草摺の音も聞ゆる間近。

「聲が懸けたい……六郎太の手前……え丶。名殘が惜しい。」

門の柱にしがみ附き。身悶え——足踏み——袂を食裂き。

「え丶……え丶……え丶。」

胸は沸える。五臓はちぎれる。身を伸ばして見亘せば。二人の影は二尺ばかり。右か……左は絨毛白し。白きが夫。えゝ重なり合ふ。叱……六郎太脇へ寄れ。

「あの閃きは長刀……長刀は守眞様。」

姿はいつか朧……霞みて。霞の中に薄黒きを心當に。其人と眺め入りしが。生憎眼を曇らす乾ぬ涙。拭ひてまた見れば。その薄黒き粒も跡なく消ゆる。消えてほしき霞は消えもせで。

念力に碎くるほど。柱を抱きしめたりし腕の力は。次第々々に弱り。今はたゞ始め犇と取附きし形ばかり。五體はたゞかれし如く勞れ果て。桃色に腫上る皆重げに。何を見む目的もなく。見詰める瞳は少しも動かず。茫然と立つ心の中は無念無想。悲しいも無く。戀しいもなく。夫もなく吾身もなし。慈悲に殺すといふこと。此世にありとせば。此時此若葉の命を絶つぞ是。守眞が向ひし方より。風が運ぶ陣鐘——雲に響く寶螺の

音。心づきしか目ばたきする若葉。眼を閉ぢ手を合せ。

「南無正八幡大菩薩。」

* * * * * * * * * *

守眞「思ふまい……女々しい。」

此一言が唇を出るや否。太刀も鞘から。火影近くさし寄せ。鍔元より切先まで。切先より鍔元まで。見上げ——見下す帽子から五六寸に。一團の血の暈。守眞につと笑み。

「是……肩先を……。」

敵を斬らむず太刀　我身を護るべき太刀。今は……我腹を裂く……此が我本意か。そもまた太刀の本意か。主を殺す不忠の太刀……とは言ひながら今死なずば。君に對して臣たるの道に背き。伯父伯母には人たるの義理立たず。父母の在す冥土の手引。また我守眞を臣たらしめ。人たらしめ。且は嬉しき對面さするは此太刀。身は護らずとも。義を守ら。

忠を守る　太刀の本意　我本意。同くは捨つる命ならば。憎き敵一人たりとも。多く手に懸け死すべかりしを。鈍や伯父に説伏せられ。六しく渇せし爾に。思ふまゝ血を啜らせでやみしは。爾が長年奉公の志を酬ひざるに似て。守眞が畢生の落度。もし精あらばよしなき主取りて。一代功名も成さず。果は腐れし腸に汚さるゝを。遺憾とも恥辱とも思ふべし。我なき後誰が手に渡るとも。守眞が佩刀たりしを。ゆめ曉られな曉られなば未練者の指料よと囃されて。誰帶ぶる人なく。光を糞土に埋め。われからの銹に朽果つる事。よき誡のこの守眞。

「父上の遺物と思へば。太刀までが懐しい……一刻も早く懐しい父上母上に對面しやうか。」

取直す太刀を袖に巻き。切先少し露はして。襟押寛げ。下腹を左手に撫廻し。

「書置なりと認めて。伯父上伯母上に此まで受けた。御恩のお禮を述べ

たいものだが。矢疵の爲にどうも手が……あすはいよ〳〵伯父上も目出たくお歸り遊ばすことか。伯父上が御無事でお歸りなさるは何より重疊……それにつけて味方の總敗軍。殿までが無殘な御最期……な……何が目出……たいのやら……あす勇むでお歸りなさる矢先へ。小四郎の切腹さぞ仰天遊ばす事であらう。日頃あれほどにおぼしめして下さるお心では。大抵のお歎きではあるまい。どれほどお恨み遊ばすか。あゝ……勿體ない。伯母上はまた女だけに。御病氣にでもお成遊ばしたら。日頃痺弱いお體……今日聞けばわれ故の日參……あ……あ……有難涙がこぼ……れる。かねての堅い約束を無にして。若葉との緣組。定めてお腹も立うに。この戰でなくば宿元へ安否を知らしてやりたい。誰の思も同じ事若葉が一人でどのやうにか苦勞して居らう……此樣な言葉が僞にも出るものか……また芳野殿の深切。今日の恨は一々道理。其心を知らぬではなけれど。どうで一日か二日の命。なまなか思の種を殘しては。後の爲

になるまいかと。お身の爲を思つてわざとつれなく致したので御座る。若葉に心が引かされてと疑はれて。薄情者とさぞ恨れて御座らうが。幼少からの馴染の守眞。その樣な男でないは。よく御承知で御座らう。此も因緣とあきらめて。思切つて下され。再び此世へ生れ替つて參つた時には。今最期の一念で。きつとあなたの顏を見覺えて。必ず女夫になりまする。あなたもどうぞ忘れずに居て……此世では。な……なき緣……心にもない不實を致した段はどうぞ許して下され。焦れて重病になられたとの事。小四郎が生きて居る中……逢瀨の賴がある中でさへそれほど……今夜自害して果てたらば……あゝ思遣られる。お兩方が命に替へて御秘藏のあなたゆゑ。もしもの事があつては。お兩方の御苦勞はどれほどか。あまり歎いて疾はぬやうにして下され。それが何より小四郎への供養……芳野殿賴みます。」

更行く鐘に驚かされ。忙はしく涙搔拂ひ。

「南無阿彌陀佛。」

聲の下。あゝつといふ叫喚。突立てしか……沸出す血汐。左の小脇から五六寸。病苦に震ふ手は進まず。唇を嚙裂くまで力を籠めて。じり〳〵と一文字に……仕て遣つたり右の傍腹まで……敢なく絶ゆる命。

* * * * * * * * * *

* * * * * * * * * *

「そんなら夫守眞の…………。」

「小四郎樣のお内方か。」

こは〳〵とばかり呆れ果て。互に顏。板戸洩る日影白く。紙帳に騷ぐ風寒し。ほの〳〵と明くる一夜。

(廿二年一月)

風雅娘（新著百種第三編附錄）

上

落卷は吳服店の子息
古今に稀なる美景

今は昔となりぬ。　淺草三筋町に育ちて、其音の鄭聲に染みず、世を秋深き山奥に、鹿笛の稽古もがなと、風雅にねぢれしお千代とて、處に名代の俳諧娘。商賣は紙店、小體にして今日饒に、雙親とも小鬢に初霜を置き、今年十七の一粒種、いとしき事何に譬へむ方なし。容色芳野櫻、これは〳〵とばかり、見る目を驚かしける。さるにても、其盛見せさう氣は朝の露ほどもなく、柳の髮も風まかせにして、蛇と白粉を嫌ひ、剃へ自ら織らぬ罪深しとて、木綿物の外、肌觸をしらず。帶ならぬやの字を

(疑)の(歎息)のと氣にかけ。明暮につくるは句の姿、臭骸の上を粧うてと悟りすまし。たゞ心移るは、暖簾に音づるゝ春風、日除を濡らす俄時雨、軒下の其處に宿りたまふは宗祇樣かと、あられもない乞食坊主に脇を所望し、をかしき所業慕れば、近所の若い衆達新道の熊床に寄合ひ、三世相を繰つて、前世はまさしく芭蕉庵に。年久しく飼はれし羊なりといふ。もしや來山が伽を勤めし、土人形の再生ではあるまいかと區々の批判、蕙蘭薫らむとすれば、秋風ざは—ざはとうるさき世間なり。はや春景色とゝのひしものを、此儘何の木のそれぞとも、見知られで過ぎなば一生の不仕合。少しは女らしくめかしてたもれ。其が何より孝行になりますと、お袋が再々の意見に、おことこそ風狂亂の姥櫻。是ではならぬと親爺倶々、口を酸くして言聞かせば、初鴈やならべて聞くは惜しきもの。扨も〳〵と苦勞の忍び涙に、朽ちて(そでなし)の襟乾く間なきをお千代も流石子として見るに見かね、わが執心の此道に奇特ありし例は

心なき天も白雨を感應せり。世は末法なりとて丹精を抽でたらば、やはかと、兩親安心祈禱の句を詠みしに、あら……たうと、語近人耳義憤神明。出雲の神此志を納受ましまし。此頃不圖店へ、照降なく日毎通ふ客二人こそあれ。一人は武士の紅葉に耻ぢず、女のもとへ供人引連れ、買物は色紙短册。身柄はこれにて知れたり。今一人は尺藏と呼子鳥、猿屋町に名だゝる呉服店の二番息子。これぞ兩手に松檜。行末依賴の柱となるべきは、孰れにしても氣遣ひなし。通ひ／＼て、今は馴染も月を重ぬれば、茶の一盃も出すが義理、飮むを樂みにいよ／＼怠らぬ日參、神も佛も大方の願ならば、上根の衆生じや、まけてやれと、靈驗の原價を切りたまふ時分なれば、いやながらお千代も浮世話のつきあひ、少し口が解けかゝれば、思切つた一句の下知こそなけれ、大廻しにほのめかし、味な手爾葉をつかへど、山類を水邊の挨拶に拍子をぬかし、答へぬ山はあらじと思ふに、扨もつらきは御心もじ。その唇紅は惜や、誰が肌ふれ

る。花見にきらはるゝも是ゆゑかと、長刀腰にぼつこみ、角助參れの下知に怒を移して立歸り、樣子を探れば果せる哉、外に通ふ男あり。おのれ素町人の分在として、と無念の鞘を反らせど、此ばかりは異本孫子にも謀計なし。呉服屋の息子はまた、此頃のお千代の愛相なさ。聞けば何處かのりやんこ奴が、試斬にせしよし、さうかと指を啣へて引籠んでは花川戸の叔父が承知しまい。よし／＼さらばと、今日は我ながら男を飾り、お千代の店へ行きて、葛の葉數々ならぶれど、お千代には一つも合點ゆかぬ事ばかり。何をおつしやる事やら、呉服屋さんの符牒は一向ぞんじませぬ。聞くもうるさし。えゝ好かぬといふ顏色。そりやこそと、懷中より一軸恭しく取出し。此度圖らず斯る物を手に入れたり、お前も此道の數寄者、見せて喜ばさうとて、わざ／＼持參したと差出すを、見ぬもつれなし。何ぞと開けば。あら。一目見るから飛立つ思。今目前にまざ／＼と其人在すが如き筆勢……翁が自筆。これぞ古池の吟なり。暫

くは聲もたてず、恍惚して。是がお手に入りましたか。いかにも昨日手に入れしばかり、何とふめる品ではないか。おつしやりやうもあらうにふめるとは勿體なし。含嗽手水の上改めて拜まむと、奥へ持行きかける袂をとらへ。今日は用事あり、長座はかなはじ、最早歸りますと、ぶらしを言へば。御秘藏では御座りませうが、今一刻長くとは申さず、是非に貸してたまはれと、願はくは我との後朝に、ほしやと思ふ涙を、惜氣もなく兩眼に浮べての懇望。尺藏かねて期したり。心弱くて協ふまじとわざと承引せず。命から二つ目の一軸、むざとは他人に見せまじき重寶なれど、誰あらう、外ならぬお前なればこそ。片時も身を放さむこと思ひも寄らず。なほ見たくば、去來月末は家例の虫干。其時こそ七日精進して、土藏の三階へ忍ばれよ。命に易へて首尾すべし。あなかしこと、商賣柄の加減を言へば、お千代は身を震はせ。命はいらぬ。この一軸放すまじと。手早く卷收め、兩袖にしつかと抱しめ。お情にもう一時、餘

りとしへば情ないお言葉。たつて持歸るお積なら、私を殺してからと、身を倒に初音を絞れば、壁越に聞付けて親父これは何事と飛出し、仔細はと言へば、お千代只手を合せ、お慈悲にとばかり、合點ゆかず、尺藏今さら迷惑して、次第はしか〴〵と物語る。親父も呆れしが、可愛子の事なり。御無理なれど、もし願へる事ならば。成程お娘子の一命に拘ること、親御の身としては、道理なれど。はて其處をたつてと申すがお願ひ。其代には、私身にかなふ事ならば、いかなるお言葉もいやとは申すまじ。私も倶々にお願ひ申します。おや母親さんまでが、御念のいつた、實は私にも一つの願。それこそ幸。さあ〳〵早くおつしやりましと、女の諸聲に急立てられ、騒ぐ胸の落付顏。羞かしながらお千代さんには二月越のわが戀や青鬼灯、いつか一つ蚊帳に寐てみつ、狹さを喞ちたき心願。私風情へは下さるまいか。一人娘といふことなら此方は二男なり。多分とは參らねど、身代相應の持參にて、入婿に參りたし。聞くより雨

親あつと頭をさげ。不束なる娘を其程までに、思召し下さるは冥加に餘る仕合。手前に於ては願うてもなき大慶なれど、よもやあなたの親御樣が。今時の親と青梅はすいもの〳〵。それには微塵心配なし。たゞ心元ないは御當人。是の五體は親のもの。しかしどうだお千代。此品さへ手に入ります事なら、私は否やは御座りませぬ。あれあの通りに申しまする。扨ぞ物には前兆争はれぬわ――昨夜の夢に出雲からの到來、鶴と龜の鹽漬一樽。江戸猿屋町尺藏殿行。

下

何枕一夜に戀の兩吟千句

さしあひは婿と時鳥

高砂や此浦船を謠ひ納め、一座歸帆を急ぐ、後はかへつて波靜に風凪ぎし如し。此間に舵枕と勸められ、偕老丸とも名けむ絹布舟にて、御祝儀の床盃式の如く、仲人夫婦やがて屏風の外へすべり出れば、婿殿ごろりとなり、嫁御寮の袖を牽き、微醉の呼吸に塗枕を疊らせながら。これお千代と、呼捨も今更勿體なけれど、既に我物なり。それを樣と尊ぶもをかしく、いつそあや——ふやに呼懸け。作法を知らぬか何ぞの樣に、なぜ横にはなり給はぬ。いつまでも手強く鬼しき姿は、當流の好まぬ處といへど、本懷紙の名書のやうに間を明けて、お千代は蒲團の端にしよんぼり。返事なければ、とんと叩き、此柳腰め。何が氣にいらぬ風とてか

くはすねたまふぞ。夫婦といへば心に俳諧の裏表なく、花月の座一つに、五十年百韻の擧句まで、かはるまいぞの中なり。一座に二句までは掟もゆるす睦言を、何ゆゑ嫌ひたまふ。當坐の感吟何がな聞かしたまへと言葉をかけても、いはぬ色はきがゝりと、婿殿不審の眉を顰め、つく――づく其姿を見れば、懐中に物やある、突張るを絶えず氣にするは胡亂なり。扨はまさしくかの侍と馴れ染め、行末までの契淺からざりしが不圖翁の一軸に迷ひ、それ欲しさに筑摩鍋重ぬる恥辱を面目なしとて、今宵新枕の床を白露の置所。潔く自害ときはめし下心か。懐中の一物こそ、見るまでもなけれ、白鞘の九寸五分。さりとてはさりとては恨めしいぞや。自分得心づくの祝言。其盃の醉もさめぬに。はや同穴を急ぐか臣は。命をおのれ一人の物と思ふか。察するに一軸も、例の侍がお家の重寶などにて、親父預りの内式の如く紛失させ、役目緩怠の御咎を以て、殿の不首尾扶持にまで及びしを苦に病み、皺腹仕つて相果て泉下に

瞑目なり難きを、われ所持なすを見こみ、色にたらして卷揚げ、可愛男に本知安堵の墨附を、それを何よりの誓紙とはせしが、假初なから兩夫に見えしは、貞女の道にあらずと、思逼つての覺悟。われ此上に氣をよくせば、六道の辻は、駕籠ある邊まで見送つてなどゝ、あゝいやな事哉。何はともあれ懷中の物引づり出し、證據を押へて白狀の上は、其方が生きやうとて、我から改めて西向に合掌させむと、矢庭に刎起き、引倒して、懷中へ諸手をさしこめば、服紗に卷きし鞘の手觸。やらじものをともがくを、左はさせもが露を命かぎりに爭ひ、づるり引出せば、是はどうだ。我與へし翁の一軸。呆れ顏をお千代は起返り、恨めしげに見護り。男の口から一旦下さるとおほせられしは、正風の奧儀を取違へ、虛に居て實に遊びたまひ。此品を囮に我身を心の儘にした上、やがて取戾さうとの御心底か。よしや降れ花の雨、麥は惡くともとは、餘りと申せばさもしや。數ならぬ身なれど、人のなぶり物になりましては一分立ちませ

ぬ、さまで天さがる鄙び根性のお方と女夫の初契、一口甘くとも行末澁の出るは知れました事。此一軸身に易へ欲しいに相違なけれど、子に飽くと申す人には花もなし。風雅も人情を離れましては、邪道で御座ります。思へば肌身につけしも不淨。お返し申しますと一軸投出し、向ふむきにつゝんとすれば、婿殿何と返事も岩清水の汗をながし。今更申譯なさ邪推段は、幾重にもと、人が如何に見ねばとてわが女房に兩手をつき、此通り〳〵。見た人あらばをかしなもの。始終を聞いてお千代も心解け此方向けてお顏を見せるまでに、直る御機嫌を見澄し。なるほど短刀と見違へしはそゞろの狐疑、此外にまだ一つ。こればかりは正銘の不審。言譯あらば聞かむ。何か存じませねど、あだし心ある私ならねど、至らぬ身なればと、少し和ぎし挨拶。新枕から悋氣でもなけれど、鮓一夜蓼二寸いそがしき世の習はせと見ゆるしたまへ。なんの。其の遠慮こそ水臭けれ。二世までの夫婦中、互に口說もあつさりは言合はねば、いつま

でも馴染薄しとの言葉に、婿殿悦喜骨髓に徹し。さらばその口に甘えて申すが、（先程三々九度の席から、今かく差向ひになりても、沈み勝なる風情。深き物思なくては協はじ。如何なる苦勞あるか知らねど、明日はともあれ、今宵はその顏ちと不吉ではあるまいか。必ず餘所に指の血を絞り交はせし人ありて、我へは義理の祝言、思ひ直せば悔しく、其人聞知りて嘸や今頃無念の齒嚙、主なき枕に食ひつき、物狂はしき心中察して、かく鬱ぎたまふと知れり。聞くよりお千代は懷紙を口にあて、左の脾腹を押へて、くつくと笑ひ轉け。そのやうに氣を廻し、心を遣ひたまうては、小刀細工のこせ〳〵したる句ばかり案じて、とてもすら〳〵とせし姿は、得詠みたまはじ。尤も初心のうちは勤めて淺きより深きに學びいらむやうに、心がけたまふがよけれど、さればとて案じすごして、一人合點の聞えぬ句を作るは、ゆめ〳〵手柄にあらず。戀の道には師なく、口傳秘訣の傳授もなければ、朝露夜雨、月砧烟笛、昆蟲鳥魚、季に

從ひ見聞に應じ、自づと世の哀、人の情を會得し、嫉妬の邪道を避け、和合の正路を履むこそ願はしけれ。御教訓身に染みて嬉しけれど、其はゆる〳〵承る時節もあるべし。扨尋ねし肝腎の一事は。はてせはしない。發句に三體と申して、大體——文——見所の三つ。是だけ具足せずば平句とて。其もゆるりと承る時節あるべし。はてまあせはしない。私の今申上げたは文で御座んす。是からが見所と大體、聞いて下さんせ。實は私風雅の道に志してこの方、春は梅、夏は杜鵑、各百餘句讀みましたれど、お羞もじながらいまだに杜鵑といふ物を、耳にせしことなし。淺ましや大俗と軒に菖蒲の葉を葺きならべ、鳩吹く秋も淺草寺の奥山に、なか〳〵哀のしられぬ身は、山里ほど風雅の自由利かず。かしかまし此里過ぎよとは、餅皮の惡體。其人の身の上こそ羨しき限なれ。いかで此初音の血が、躑躅の花を染めるものか。八千八聲なくものか、數へて見たき願淺からねど、此鳥晝間啼くものなら、江戸中何處へなりと尋ね渡り

いやといふほど聞きたけれど、意地惡く物騷な時刻を、撰りに夜なれば若き女の身としては、湯屋へさへ小提灯に母親は附物の私、遠方山の手まで立越えむは、一日に袷一枚縫上げ、獨吟千句致さうよりむづかし。つね〳〵是を不足に思ふ折から、今宵のお盃はあなたのお寮。此處小梅の里。町はかけ離れ、木立は深し。處も處時も時、月黑くして雨も今やの空合。やはか此夜を過さじと、駕籠の中から油斷なく耳を清してをりましたが、一聲の音信なければ、お盃の席にても心空になり、魂雲間に分入り、おのづと氣拔のしたやうに見えましたが。お床入の後は、四邊一入ひつそとなり。愈便よしと用心して居りますに、人じらしにも程の有つたもの、聞えませぬ杜鵑、恨は此鳥にこそあれ、あなたを何恨あつてお嫌ひ申しませう。お心解いてたまはれ。然りながら今晩はどうあつても、一聲聞かねば痞がをさまりかねます。明日から癪で寐るやうな事がありましては、あなたも同難義。こんな者を女房になされたが、一世

の因果と御了簡なされて、居合つて一夜を明してたまはれと、事を分けての吾儘なる申分。是が男といふではなし、相手は鳥の事なれば、大事もあるまい。我は横に成つて、かうして引立耳をして居れば、もし啼かば袖を引くべし。其樣に寐衣の儘で起きて居て、あれ窓には芭蕉葉の戰ぎ。夜風は身の毒、果報は寐て待つ心はなきか。横になりましたら睡くなります。有明の油盡くるまでにはと、風雅に雄々しき挨拶。其志に愛でゝも、追つけ啼かう。あゝ風流と大晦日は睡いものとの獨語を、聞流しにお千代は小首を捻り、小夜更けて〳〵と、上五文字を小聲に幾度か繰返し、今にもあれ一聲を相圖に、殘り七五文字を續けむと、待つに更くる此の夕は、いかゞせし杜鵑も流石、われ忌はしき名立つ身にして、目出度々々々夢を破らむさへ苦々しきに、其音の不如歸去來、和訓にして、取も直さず去狀かけたかとは、重ねての不祝義。遠慮していま駒形あたりを飛ぶのか。固より是には心なき婿殿。いつか傍若無人の高鼾。

もし〱と搖起され。啼いたか。いゝえ。啼かずむば啼かしてやらう、金で自由になるものならと、ならぬ高を括つて伊達を言ひ〱、また鼾かくとだに得やは約束せじ。もし〱。むにや〱聞いたか。聞きましたはあなたの鼾。それでは鳴けばとて耳には入りませぬ。實があらば目覺まして起きて居てたもらぬか。實のある事此通りと、むつく刎起き、寢亂れの帶しめ直し、お千代と膝を並べ、夜衾の袖に二人片々づゝ手を通して、蹲る姿や孖山。これぞ地にある比翼の鳥。天に在る奴めはまだかと、言ふさへ寐惚聲。たあいない婿殿ごくり〱。二挺立の猪牙とやらにゆしまして、風引かぬやうにと、もし〱。あいよ。覺めては眠り。眠れば覺され。間なくほの〲と鴉黑みて、東の櫺子白むに、何等の音沙汰なし。とれと聞く空耳もがなとお千代が述懷に、輪をかけて不便なは婿殿。明くる朝は箸持つまゝの居眠、昨夜からの夏瘠と、人に嘲弄るゝは、なんぼうつらき事なるべし。人間一生終初物の樂時、七生忘難き

苦艱をうけ、婿殿殊の外、風流におぞ毛を顫はれ、是娘たちに愼ましむべき第一と、女大學を繰つて見て、はてな。はてな。

（廿二年五月）

新桃花扇

（新著百種號外）

過ぎにし昔語、今はかゝる馬鹿ものなし。わが祖父一歳京都一見の折から、東山の月に浮れての歸路、四條通を過ぐれば、古道具の露店夜燭の星を列ねたるに、此所は名にし負ふ九重の帝都、塲所がらとて小町が草紙洗の匜もや、耳など缺けて雨晒の木地のまゝに疎まれ、其所等の隅へ投遣りてあらむも知れずと、そゞろに掘出心出でゝ、木彫の羅漢めける老夫が店に佇みて鵜目を睜れど、何所にもあるものは錢もらひと敏捷漢にて、かうとひねりたる物も見當らざりき。書畫は好みて少しは眼も開きたれば、古手本反古の巻物の中に交れる袖珍の帖一折引出して視れば、媚かしき友染縮緬の表装、角は磨れて裏面は剝きたるごとく破れたるを、馬鹿々々しきものとは思ひながら異りたるものと披けば、地は白綸子に

小さく扇の地紙形に截りたる奉書を、一折毎に全面一面に貼付け、それに畫もなく字もなく、地紙一葉に七つ八つほどづゝ大小打交ぜ、桃の花瓣を散らせるごとく、形も大略それほどなる臙脂?の痕あり。一瓣毎に十四、廿五、三十、四十六、十九、二十一など、小書をしたり。異なものと思ふばかりにて更に解せず、數へて見れば地紙兩面にして一百枚あり。奥に年號月日もなければ、持主の姓氏も見えず。いかにしても會得かざれば何ぞと老夫に尋ねけるに、渠も一向に知らざるよし。由來は不解ねど餘りの不思議さに買取りて江戸に持還り、目出度歸國の祝賀にと、知音五七名を招ぎて小酒盛の席に、知恩院の鐘、祇園の花、銀閣寺の庭、加茂の社の噂よりも、先づかうした珍しきものこそあれ。諸君の內にて正鵠といふ所を極めたまはむ御方には、羅生門通にて拾うて戻りし鬼の小指の生爪を進じ申すべしと、柱に掛けたりし頭陀袋をとりおろせば、座中にて雜學博覽病の俳師柴門坊柳五、腰なる紙袋留の竹如意を抽きて

斜に搆へ、見ぬ前なればいかな珍品奇物かは知らねど、かくいふ柳五が座にあるからは迂濶なる放言なしたまひそ。あて事もない鬼の爪の恩賞、は望まねど、御秘藏の宗祇が髯の拂子が欲しうござると居丈高になれば、祖父は恐るゝ色なく、何も御所望次第、さりながらもし御鑑定疎忽ならむには？　此杯洗にて三盃戴き、卽座に獨吟五十韻お目に懸くべし。是は一段の餘興。お蔭を以て飲めまする、と、一同崩れし膝を正して危坐る中へ彼の帖を差出せば、額をあつめて之を披き、孰も呆れて面をぞ見合はせける。柳五一人澁面装り、仔細らしく拱手して控ふるを、所望といひし拂子を持來り、疾々お持歸りをと目前に衝着くれば、閉口して頭を叩き、われいまだ嘗て學ばざるなりといふがまゝに、杯洗を執つてたてつゞけに漾々三杯傾くれば、太息をも吐かせず紙硯をおしつけ、題は何帖。發句は何と？　五十韻々々々と疊を拍つて迫れば、柳五仆れて海鼠のごとくなりけり。

此事名高くなりて一見所望の人士多かりけれど、誰判ずる人なくて久しく其まゝに過ぎぬ。

その後或席にてまた此事を發言しけるに、つまといふ其家のお針の老女が襖越に聞着け、拜見願ひたきものと切に請うてやまざるは奇なり、詮議の端緒ともなりなむかと、即座に取寄せて見せけるに、つくづく表裝を吟味の上、繰披きて半過ぐる頃にあつといふを聞咎め、何事ぞと訊へば、はづかしながら是が私のでござりますと、一つの花瓣を指して答へぬ。其が其方のとは？　されば、この持主は下嵯峨の豐樣。これは其人の契鑑とて常に懷中せられし品なるが、かく數ある紅きものは、豐樣が一度にても契を籠められし女人の唇朱にて、側に小書の數は銘々の年齡なり。豐樣は有德なる木綿店の二男に生れ、將來多病とて下嵯峨の閑寂なる寮に若隱居の、容姿優れて麗しく、而かも實意深く散財よく、諸藝にも暗からぬといふに、京の女人といふ女人は黑白の差別なく先方より

泥みて、雨とふる濡文は日毎新しく、紙衣にして着らるゝほどの男冥利は、とても此後の世にはない事。好き月日の下に生れつきたる、わが一生の思出に、千人の女人に契を籠め、死しては戀の諸願成就の明神ともなりたやと、やがて此帖をつくりたまひしに、第一は島原の汐路太夫十九とあるぞかし。太夫これを冥加に思ひて、その夕被たりし裲襠の袂を裂きて、この表裝の勸進につきたまひたりしとかや。これを始めとしてあるとあらゆる女人の品々に逢うては、かならず唇朱を移させ、其を數取にしたまひて樂みけるに、行年三十二才を一期として本願成就に及ばず、其數はたしかに九百九十一人、殘る九人に思を遺して身歿りたまひきと語りぬ。

まことに唇朱の數つまが言葉のごとし。扨は其方も訂契の一人か。どれ何所に？　こゝに十四と書いたるが私のなり。一生忘られぬ男子よなと背を撫てば、あゝこの老女をお手暴な、咳氣がおこりますとは色も香も

なき挨拶。それもその理か、四十餘年前に男子はお先へ往かれたるものをと大笑して、やがて老女が言葉のまゝに契鑑と題して、久しく長持の底に秘めたまひたりしが、祖母は堅人にてかゝるものゝ子孫に毒を遺さむことを氣遣ひ、祖父卒去の後石をつけて墨田の川底に沈めぬ。彼を啖ひたらむ魚は鯡ごひにやなりつらむと、これ親父が一代の秀句。

（廿三年十二月）

巴波川（新著百種號外）

上の巻

わが友青木某、此一事は神にも親にも秘めど、仔細ありて我一人に語りき。一昨年の暑中休暇、筑波へ登山して麓を早發に、栃木へ廻れば其日は暮れけり。旅店を求めけるに嚢中乏しければ、大構の店を餘所にして某町の小路に、煤け行燈の見る影もなき安泊に飛入れば、四十恰好の女房背戸の風呂に、柴を烟らせたりしが客と見て出で來り、挨拶たら〳〵洗足の水を汲り、疲れて氣力なく上り框に腰を据ゑたる、青木が草鞋を解かむとすれば、颯と涼しく吹來る風に、ふす〳〵と音して柴の焚上るに驚き、蔦よ〳〵と喚起てながら小股走りに行きけり。

梯子下の黯淡所にあい〳〵と聲嬌饒しく、やがて立出で丶、お入來なさ

なき挨拶。それもその理か、四十餘年前に男子はお先へ往かれたるものをと大笑して、やがて老女が言葉のまゝに契鑑と題して、久しく長持の底に秘めたまひたりしが、祖母は堅人にてかゝるものゝ子孫に毒を遺さむことを氣遣ひ、祖父卒去の後石をつけて墨田の川底に沈めぬ。彼を啖ひたらむ魚は鯡ごひにやなりつらむと、これ親父が一代の秀句。

（廿三年十二月）

巴波川（新著百種號外）

上の巻

わが友青木某、此一事は神にも親にも秘めど、仔細ありて我一人に語りき。一昨年の暑中休暇、筑波へ登山して麓を早發に、栃木へ廻れば其日は暮れけり。旅店を求めけるに嚢中乏しければ、大搆の店を餘所にして某町の小路に、煤け行燈の見る影もなき安泊に飛入れば、四十恰好の女房背戸の風呂に、柴を烟らせたりしが客と見て出で來り、挨拶たら〳〵洗足の水を汲り、疲れて氣力なく上り框に腰を据ゑたる、青木が草鞋を解かむとすれば、颯と涼しく吹來る風に、ふす〳〵と音して柴の焚上るに驚き、蔦よ〳〵と喚起てながら小股走りに行きけり。

梯子下の黯淡所にあい〳〵と聲嬌饒しく、やがて立出でゝ、お入來なさ

れましと小腰を屈め、お灑ぎまをしましよと草履を突懸けて青木が前へ廻り、引上げし褄を挾みて盥越に屈み、油掃除を致してをりましたればと兩手を嗅ぎて、何ともございませぬ、おとりまをしましよと草鞋を解捨て、砂まぶれの靴下を脱り、汗ばめる脚半を解き、氷のやうなる冷水に剝きたる足を趺高に浸して、指の股まで洗うてもらふ快哉。なるほど地方の人が東京の旅籠屋を不深切といふも道理こそ、木賃類似の安泊だにかうした丁寧なる待遇、茶代なしでは勿體なし。女人は帶に挾める手拭にてやは〳〵と拭ひ、お上りなされまし、御案内と驅上り、手早く行燈に火を移して引提げ、踐めば櫓を盪すごとく鳴る梯子を昇れば、二階は二間なり。表座敷にても裏にてもお好み次第。裏は田圃の樣子風通しよかるべしと、肩に懸けたる革包を抛出してどたりと倒るれば、柱も動ぐに駭けば女人笑うて、家が古うございますゆゑと行燈を適所に直し、しとやかに跪きて燈心を搔立つる時、始めて其顏を見れば！　や丶、此

所は魔窟か、此奴變怪か、凄いほどの美色。火影を眩がりて纖むる眼波に、えも言はれぬ情思の籠れるに、女色には鈍き青木もしみ〴〵感じて、心魂脱けたるごとく惘とその顔に瞳を凝せば、女人は振向き樣に合はす顏を微紅めて俯きながら、只今お煙草のお火をと、小聲に言捨てゝ逐はるゝやうに下りけり。

青木は手を組みて顰むる眉の下よりきつと壁を睨み、此女の正體何と判斷に苦しむは、安泊に過ぎたる女人、過ぎも過ぎたる美色、栃木町にも……縣にも過ぎたる美色、いや〳〵下野、下野はおろかな事、都にとてもあるまじき花艶、下女か女子か、淫賣か、其にしても此にしても過ぎたる容色。我心には措かじと誓ひし迷信發りて、一笑に付したる聊齋志異剪燈新話などの怪談を憶ひ合はせ、理外の理のなきにも限らざる妖怪などにてあらむも知れずと、虛心に復れば我ながら愚痴なる分別の出づるも。意外の顯象に惑へる心の曇なり。迷信なりと悟らむか、悟れば

かゝる家に眞人間としてかゝる美人のあらむこそ、妖怪にてあらむよりいよ〳〵奇異なれ。此地にはそよとも淫風吹かずとも聞かざりしに、さりとて良家の娘子ならば知らず、見れば夕暮の町にむらがる淫行男子が翫弄までおくべきか。其より優れるにしても多錢人面の河獺が餌物にならざる理なし。さるを其等に褻されたる臭味もなく、言語に此國の訛はあれど、噪がしからねばさしては鄙びず。擧動は嫋柳のわづかに風を知る風情の幽婉。想ふに壬生藩士の落魄などにて、武家氣質の義ずくめに當世には立交らう方法なくて、かくはなり果の安旅籠を渡世とすれど、むかしのまゝに崩さぬ家庭の嚴格なれば、廢垣の野花をも鳥啄み落す事なく、枝頭の春色ひとり盛なるにや？　確然にそれと小膝を拍つて、變化にても淫賣にてもなきにまづ胸穩まれば、遽然ゆかしく慕はしく覺えて、この家外に下女のありとも見えず、晩飯の給仕はあの娘子に極まれば、其時風采容顔思ふまゝに觀察くべしと、疲勞も空腹も忘れてその事

のみ思ひ續け、そは〳〵とする氣休に樣子を覗かむと、徐と立つて忍足の二つ目に、何やら母に言うて娘子の昇り來るにあわてゝ座に還り、何食はぬ顏して用なき革包を拈くれば、そのまゝ頭壓るゝごとく重りて上らず、觀察！と思へどなほ重りて上らず。娘子は木根の煙草盆を青木の前に直して、只今すぐに御飯をと立つて行くと思へば、輕く頭上りて意氣地なくも後姿を見れば、瘦肩、細腰、頸の附根の花車なる事。今度は決然眞向になつて十分見むと、一服吸うて心魂を落着け、二服吸うて勇氣を養ひ、今度は必然見むとの誓の三服目の半頃にまた來り、上り口に手をつかへてお風呂をめしますか、直に御飯にいたしませうかと顏を見合へば、頭また重りて俯きながら、風呂をと手拭を握むで立上れば、此方へと先立つ娘子に跟いて下りながら、無念なまた見損じたるかと其のみ思詰めて、心入らざる足下に一段どたりと踏外せば、娘子はあれと驚きざま三段すべり墮つるに、さらぬだに鳴る梯子は百雷の響に奥より女

房飛出で、お怪我はござりませぬか、お蔦氣をおつけ申さぬか。あいあい。どうも遊ばしませぬかと劬られて、青木顏より火の出るほど面目なげに、どうもない〳〵と口早に答へて案内のまゝに行けば、家内が居間の閾外に古莚を敷き、此へお脱ぎなされてあれへと脊戸を女房指せば、お蔦は客に草履を揃へておのれは先に下立ち、此方へと湯加減見に走り行きけり。青木脊戸に出づれば、南瓜畠の側なる野晒の水風呂に溢るゝばかり湯沸き、お蔦は襷懸になりて脛高に褄を褰げ、いそがしく風呂側の小樽に水を汲込む姿を湯の中より眺むれば、頭巾と薄くらがりは女の顏の特に美しく見ゆるものとて、玉のやうなる色白闇を破つてきは〳〵しく、眉目の鮮明には見とれぬあたりに無量の美あるごとく覺えぬ。ざつとお流しまをしましよといはれて、念のいり過ぎたる待遇と薄氣味惡けれど可厭にはあらず。濟まねどざつとにて好ければと手拭を渡し、風呂を出て床がはりの敷板に背を向けて屈めば、お蔦は丁寧に手拭を疊

み、やは／＼と垢を掻く手の觸るゝ處は、玉を磨るか、羽二重を當つるか、油を塗るか、ぬらめくばかり滑かなる心快は、肉ぶた／＼と蕩けむとする思なり。青木はつひに覺えぬ嬉しさ三分は、七分の差かしさに勝れて身を縮め呼吸を塞め、好まぬではなけれど長くかうしてあるべき心持なく、折々首を擧げては禮を述べてやめさせむとすれど、はい／＼とばかり應へて容易に放れず。やがて吹さらしの風に湯の微温とれて、冷亘る肌さはりに驚き、一杯湯を浴せてごゆるりと。

夕飯の膳に坐ればお蔦給仕に出たり。驚破や！　觀察の時到れりと青木は十二分の勇を鼓し、かくぞと行燈の火口を其方にさし向け、我はその陰になるやうに用意したれば、娘子の髮際まで數ふべく鮮明に見らるゝを、曠がましがりて、顏をそむけ身をひねりて、所剝のため塗の飯櫃より、粃糠まじりの冷飯を盛る杓子さばきのにほやかさ、なるほど小笠原流とは彼所なるべし。我顏の暗所にあるを機會、茶碗を口にしてさりげ

なく眼を配れば、瓜核の薄肉頤に細れどふくやかに骨を裹み、舊時は美相の一つなりし垂唇ゑをらしく、瞼に少しく腫ありて睫毛長く、瞳は纖々と睡げにして常に微笑あり。艶かなる瞳子の運動敏捷くして左に動くも右に動くも、それ〴〵の情を含みて無味なる眼波なし。髮際はさながら一筋づゝ描けると思はれて、細く、黑く、長く、濃き髮を手束の銀杏返に結び、油垢に染みたる木櫛の鬢梳と短き眞鍮の簪を挿したり。衣裳は見るにさへ羞かしければ、語るは猶の事この娘子の爲に氣の毒なれど、淺黃の中形の浴衣は、肩、膝、臀のあたり白みて、裄長の足らざるは猶の事つらかるべし。帶は昆布を絢りて卷けるやうなるを、鈎は無理に引延べたるを見れば、紅入友染の葡萄地のめれんすにて、腐りたる蔽膝は客の前とて卷揚げ、片手に給仕の緣缺盆を引附け、片手は膝に措きて俯き、火影を避けむと横顏になりて坐れるに、容色よりもなほ比類あるまじく驚かるゝは膚色の純白なり。雪も白けれど雪の純白にもあらず、玉

には寒けき光澤あれどさるにも似ず、眞白の裏に暖氣を韞み、清めるにあらず濁るにあらず、透明なるがごとく曇るがごとし。肌理濃に膩氣を帶びて、えも不可言一種の美色あり。青木恍惚としてわけもなく胸塞がり、咽喉を通らぬ飯を詰めこむやうに二膳までは入れたれど、口の中に巾ばかりして味なければ箸を捨てけり。此時の感情何とも難道けれど、學年試驗の席上に受驗紙の配賦濟みたる時の胸噪にや丶似たり。女子は可恐しきもの、特別美しき女子と對座ほど世に可恐しきものなしといへる、朋友の言葉を今宵といふ今宵はひたと思ひ中りて、無經驗なる男は何しても物の用には立つまじきものと悟りぬ。お蔦は膳を退きてまた來り、床を延ぶべきやと問ふに、餘り蒸暑ければ少時涼みて後と、櫺子窓に腰を懸けながら下り行くお蔦を呼び、團扇をと望めば、心注かざりしを愧ぢたる面色にて、表座敷の隅より古團扇を持來り、跪いて手渡し、御寐なる時にはお呼びくださりましと梯子を下りぬ。筑波山中にて七絕

の結句を得たれば、路々も之を纏めむと苦吟せしに、疲るゝまゝに遺れたりしをふと憶出して、かゝる時にこそと轉句を案ずれど、風景眼前に浮ばず、工夫字中に入らずして、女子の事のみ頻りに想はれぬ。夕飯の汁濃かりしゆゑにや。劇しく渇きて咽喉ひたと密着がごとく堪へがたければ、お蔦を呼び氷水を取寄せて三杯一息に飲めば、胸やゝ冷えて風腹中を通ふ思も少時、また〳〵煎熬くばかりに渇けばまた二杯賴みけるに、お身の毒なればとお蔦は苦勞にして諫むるに、おのれも藥にはあるまじと思ひ留りけれど、いよ〳〵渇氣堪へがたければ、無理に吩咐けてその二杯も空にしけり。

時移るほどに天曇りて雲低く、戸外にも裸蠟燭の煽らぬまでに風死して夜熱蒸すごとく、何もせで臥せる背に汗流るれば、青木は赤裸になりて大字に仆れ、蚊を逐ひながらうと〳〵と睡りしが、腹痛におのづと目覺めて起上れど、浴衣をひとりして得被ぬばかり下腹痛み、起きては仆れ、

たふれては轉け、のたうちまはりて呻く聲に、何事？とお蔦驅上りて此體に仰天し、けたゝましく母親を喚立て、倶々に介抱すれど、劇痛いさゝかも息まらず、なほ揉立て突立て腸を噛まるゝ苦惱に、顏色變じて身を悶ゆる樣子はもしや虎列剌かと、母親は怖れてどきまぎ狼狽ふるに、お蔦はかひ〴〵しく看護すれど、一粒の丸藥だに持合さず。さればとて藥屋へ此時節がらあわたゞしく腹痛の藥買ひに行かむは、疑念の種を蒔く恐怖もあり。なほさら醫師を呼びて類似虎列剌などゝいはれなば、我家の迷惑はともあれ、此旅人を殺すが情なし。さりとて藥と醫者との外に、急病を濟ふべき方法なきに分別盡き、心狹き女人は泣くにも泣かれぬ絶體絶命の淵に臨み、母親は斷然に醫師を呼びに行かむといふをお蔦は引留め、呼吸も絶々なる青木の耳の根に藥のお持合はなきかと叫べば、革包に〳〵と二聲、心得て母親に革包を解かせて底を覆せば、天助？寶丹の一包、母子見るよりはや命拾ひせる心地して之を飲ませ、板の

うなる蒲團を敷き、二人懸りにて青木を其上に臥かせ、蚊帳は邪魔なりと釣らねば、お蔦附添ひて蚊を拂ひ、腹を壓し、藥を勸め、十二時近くまで母も看病したりしが、苦痛も少しは薄らぎたる樣子に、お蔦は母親を寐ませ、一人遺りて懇篤に介抱したりしが、一時頃より下痢を催し、便所へ通ふこと殆ど歸るを待たざるばかりなれど、その度々お蔦は病者が起居往還の杖となり、汚穢も厭はず深切に世話して徹夜に疲れ、その枕頭にてとろ〳〵と睡る間もなく母親にぞ呼覺されける。

其朝になれば腹痛七分は薄らぎ、折々下痢はあれど人手をからず行歩に自在を得たれど、通夜の病苦に衰弱太劇しく、筋弛み肉軟れるごとく覺え、轉輾も懶く枕に仆れて呼吸急迫く、欞子より吹入る麥の葉末の朝風を面にうけて心快くうつゝの裏、お蔦の昇り來るに目を開けば、枕近くすり寄りて御氣分はと青木の顏を見るに、色青黑く眼凹落ちて光なく、頰骨の際立てるに驚き、お腹痛はと重ねかけて尋ねぬ。青木は枕に、頭

重ければ會釋心に輕く首肯き、お蔭樣にて腹痛も大分輕くなりました。昨夜のお世話は喩へむかたなく、骨肉も及び難きお實情の歡喜は五臟に徹へて……………徹ふるばかりにて報恩もならぬ流浪の旅人、一樹の蔭とはいふものゝ、往けば還らぬ無緣のそれがしに何と思はれての御深切か。御心のやさしくも賴もしきに絆され、昨夜一夜が一年のごとく、今朝は此家に居馴染みて更に旅中の想をなさず、此方をも他人とは思ひ難し。例の疾病にて無殘や他國の土になる事かと、身も世もあられず心細かりしが、唯水あたりにて命拾ひをしたり。やゝ快氣けれど今日の發足は覺束なければ、御迷惑は察すれど今宵の一泊をゆるしたまへ。明朝ともならば勉めても出立つべしといへば、その御遠慮は御無用になされまして、かく汚穢き家だに御辛抱なるものならば、ゆる／＼御養生遊ばしまし、屆かぬながら御看病をしましよ。お言葉は難有けれど階下には用事もあらむに、賴む事あらば手を鳴らさむほどに、繁忙中を附添はるゝに及

ばすと遠慮を言へば、晝間は客なければ間暇なれば、看病してあげよと母の吩咐もあれば、隔心なく御用をおほせられましてと、立たぬは青木も望む所なれど、嬉しさと羞かしさに氣味惡く身を縮めて、壁を向けば顏も見たく、顏を見れば面羞く、夜衣を被れば切なく、身の措置に苦しむ退屈紛れに、一つ二つの雜談が發端にて、其日の中に隔心はなくなりぬ。骨肉の母だにもかうまではと思はるゝ注意の周到なる看護に、青木の心解けて蕩けて他人行儀失せて、表座敷に客あり階下に用事ありても、枕頭を立たす事を悦ばず、さもなきに事々しく手を打拍きて呼寄せ、用ばなけれど居てくれといへば、今の間に用を濟ませてゆるりと來るほどに少時の辛抱をしたまへとて、行くか行かぬに手を鳴らせば、またしても用事はないにと知りながら、懊惱く呼ばるゝを結句悦び、我まゝをいひたまふなとわざ〳〵叱責に來るがうれしく、叱責るゝがうれしく、青木の心には是來識らざりし一種異様の感情萠えけるが、いつしか胸一杯

に蔓延りて、常に胸部に搔かれぬ痒氣あるがごとし。
此夜は表座敷に客ありてやうやく十一時頃に來り、青木が枕頭にてわけもない事をかたり合ひ、何が嬉しくてか相互の面に和氣溢れて、ひそひそ話の種のよくも盡きず、二時過ぐるまで語り續けぬ。明る朝は青木の顏色復り、元氣常のごとく食慾復して、無病の人となりける樣子なれど、なほ床を離れず、惣身だるくして十分本復とも思はれざれば、今一日の厄介を賴むと見舞に來し母親に告げて、其日もお蔦を片時離さゞりき。
我人に聞かまほし、南軒露座の夕、思ひかけず月影の明かなるに、心躍りて酒を酌めば、月盃中にふはと落ちたらむ時の思はいかならむ？ 其盃は放しがたかるべし。戀には無雅なる青木も此盃は放し難く、苦惱なき腹痛の長く癒えずして、此家に逗留の便宜ともなれかしと祈るにかひなく、この一時の暑氣中は洗ふごとく癒えけるに、此地は人の長く逗留すべき名所にもあらず、此家もまたさるべき旅宿ならぬに、口實もなく

滯在せむは母子の所思も羞かしく、よし其は忍ぶにしても此女子に契らむとまでの心はなきを、仇なる戀に繋がれ何時まで在らむも同じ事なるべしと、攪眼てふと其氣になり、手荷物の用意する所へお蔦來合はせ、何所ぞへ行かるゝかと不審を立つるに、東京へ還ると手もなく言放つ顏をじつと視て、もはやお還りかとばかり、事の意外に呆れたるよりはむしろ恨を籠めたる短句なり。此裏に悲愴の調子ありて痛く青木の心に染み、何ともいはで顏を見かへせば、俯きて萎るゝ風情に愛憐動き、さまでに思ふものをと懦軟出でゝ、慰めむ言葉を考ふる間にお蔦は立ちけり。

やがて朝食の膳は母親が運び、女子は飯櫃を持來り、今朝ほどは御全快の由と、母親慶賀をいひながら樣子を見て、今朝は御出立かと問へば、青木の顏に凝せるお蔦が眼裏なる無言の語に、青木の決心鈍りて、大平山へ行かむと思ひしが、今日も此樣子にては暑氣劇しからむほどに、病餘の身に恙やあらむと思ひ止りたりと聞く、お蔦の眼にいはれぬ喜色浮

びたるを、己も識りてや羞かしげに俯きぬ。母親はさりとも識らず、なるほど御病氣餘なれば炎天に出歩行は惡かるべし。快方とて心を忽されなば大事に及ぶべければ、ゆるりと御養生なされましとて立ち行く後に、お蔦はいそ〳〵と膝を進ませ、ようぞ思止つて下されました。お發足と聞きし時はどうせうかと思ひましたと、行懸りの旅人をさまでに懷しがりて、末は何とせむ心なるか。青木は此言葉に女子が所爲を照合はせて、我に心なきにもあらざる事と判ずれば、何といふ目的はなけれど心牽れて離れがたく、飲みもせぬ藥を買はせて母親の手前を繕ひ、例の通り看病をとて側に引附け、二人會りて何の仕草もなきに、この長の日を短かく暮しぬ。

下の巻

其日暮、二人櫺子に腰掛けて涼みけるが、格子の外をゆら〳〵と螢の過行くをお蔦團扇に招き寄せ、手攫にしてこれと青木に差出す手首をじつと握りて、娘子に摺寄りざまに邪魔なる燈を吹滅し、星影の薄くらがりに顏を寄せてお蔦を覗けば、否にはあらぬか聲をも立てず、耳の根火のごとく頰に觸れければ、此所ぞと青木は握りし手首をいよ〳〵緊め、發言むとすれど言葉に迷ひ、胸の跳るまゝに見ともなきほど呼吸喘めば、娘子は猶の事顫へてせむすべを知らざりけり。嫌ふものならば其手を拂ふべきに、聲をも立つべきに、振拂うて遁げもすべきに、手を握らせて動かさず、身は固くしながら退らせもせず。嬉しや恥辱は搔せぬ心か、虚いたる手をお蔦の肩へ懸けて引寄せむとすれど、身を縮めたるが上に我にも恐怖あれば、力入らずして寄らざるに我方から寄添ひ、お蔦樣と

囁聲を忍ばせば、娘子は唯とばかり有るか無きかに應ふれど、青木は續く言葉を失ひ、唯そのまゝに少時無言にて化石のごとくなりしが、梯子に人足の聞ゆるにぱつと離れ、お蔦は脱兎のごとく梯子を下りぬ。わが無禮に驚き、もはや昇りては來まじと階下を覗けば、風の爲に火を取られたりと、擦切木を持て來る樣子に猶希望ありと心を落着け、煙草を移火けむとする時お蔦昇り來るに、面はゆければ見せじ見じと、煙草盆に顏をさし寄する間に、行燈を點すお蔦の顏を覗へば、なほ上氣して眼の上下薄紅に耳根の眞赤きを見るからに、花の蕾を剝きたる心地して氣の毒に覺えけれど、酒狂か、過失か、惡戯かなんぞのやうに謝罪もしにくゝ、いひ懸けむ言葉なくて手持無沙汰に控ふれば、娘子は猶羞ぢて居愁く、よそ〳〵しく下りむとするを小聲に呼留むれば、はいと此方を向きて手を支ふるを此所へ〳〵といへば、つひぞなき顏を背けてうぢ〳〵するをもどかしく、立つて手を引きまた櫺子まで伴れ來りしが、怖くてま

たと手だしはせざりき。

青木が心中に芽ぐみたる戀は、一時ごとに募るを制せむともせざればいよ／＼募りて、眼はやゝ戀に光り鼻息はやゝ戀に鳴り、機會もあらば飛懸らむと爪を藏せど、お蔦は溫柔き裏に四面四角の氣ありて、つけ入るべき妖淫を見せねば、十分我には落つべしと見ながらも、はづかしき事を仕懸けむ曉、萬一其人に心無からむには合はすべき面なしと、淫行に物馴れぬ男の良心に負け良心に勝ち、その爭闘に胸中轉到して、斷行？斷念？　兩岐の分別に迷ひぬ。

されど乘りかゝりたる船の如き想して、このまゝ捨て還る心なければ、病餘の不快に托して逗留六日になりぬ。さりとて戀の仕草は少しも捗らで、螢をとらへし夕にさしては異ることなし。唯それとはなしの青木が日々の所爲の謎を、お蔦も解きて憎からぬ思の募れるにや、とやかく母親を購着めて青木が側を離れじとばかり計らふ心情の美味を忘られず、

此間に旅費は底をはたくばかりとなれど、なか／＼還るのかの字も想はず、いよ／＼窮りて東京なる親友に手紙を寄せ、小額の爲換を强願りて辛くも旅費を調へたれば、もはや泣いても笑うても明日は離別とお蔦に語れば、留れともいはねば行けともいはで唯鬱ぐを見るに、ふりすてゝ還る心はなけれど留まるべくもあらず。長々うけたる世話の禮やら、身を大切に一人の母に孝行せよといふ事やら、緣もあらば再會はむといふ事やらこま／＼と語れば、お蔦は泣いて更に物を言はず、再會期しがたき別離かと思へば靑木も胸塞がり、晩餐も食はで思案にくるゝこそ不便なれ。

我思つひに覊れず。我戀つひに協はざる事か。それも切なし此も切なきは、愛情の鎹に綴着けられて微搖もならざるを、無體に引放されむ離別の惜さ、心細さ、悲さいふ方なし。お蔦は失神して言も發はねば身も動かさず、壁に向うて折々吐息を洩すのみ。

これまでにして本意を果さゞるも、畢竟は我氣の脆弱からなり。馬には乘つて見よ、此まゝ事もなく別れての後悔は、一生胸に曇の病ともなるべし。とにもかくにも今宵は必ず首尾を遂げむものと心を定め、夜深に隣室の客の寢息をはかり、便所へゆく〳〵風してお蔦が臥床を蚊帳越に覗へば、足音に顏を此方に向くるは、これも寢ぬかといとしく、小手招して二階へ還れば續いて昇り來るに、顏愁思に窶れて色蒼く、しよんぼりとして影も薄く見えたり。青木滿心の勇を鼓して矢庭に燈火を吹滅し、有無をいはせず契りぬ。

けたゝましき喚聲に、驚きて青木攪眠せば、枕頭に母親半狂亂になりて蔦が家出と泣聲に喚かれ、なほ夢かと刎起きるしだらなき懷中よりはらりと落つる一通。南無三寶。書置の事！

一筆かきのこし申候。わたくしは今夜うづま川へ身をなげ相果て申候。なくなり候後々までも、きつと愛想づかしの種と思ひ候へば、今まで

は深くつゝみをり候へども、わたくし事は淺ましき病の片輪ものゆゑ、一度男に肌ふれ候へば、一時に病發りて、見るさへいまはしき容に相成候因果のうまれとて、かたく男を愼みをり候ひしが、いかなる御縁にや御情のほど身にしみ〴〵と嬉しくおもひまゐらせ候へども、疎ましき姿に相成候はゞ、生がひのなき耻さらし、とても思ひあきらめむといろ〳〵に心を叱り候ても、お顔を見るたびにゆかしさまさり、思ひきる氣に相成不申候へば、命を捨てゝ御情にあづかり申候。日頃のつゝしみを破り候上からは、今にも顏はくづれ、眉毛はぬけて、二目とは見られぬ姿に相成り、世間に疎まれ候事が今より思ひやられてつらく候まゝ、いつそ身を投げ候覺悟いたし候。思染めし御前樣に、願かなひ候わたくしの命は、さら〳〵惜くは候はねど、賴みなき母一人を遺しおき候へば、あすからはたよりを失ひ、苦勞をいたし候事眼に見るやうにて、それのみが今はの際の氣懸りにござ候。わたくしごと

き因果ものと枕を御かはしなされ候は御身のけがれと、つゝみかくせしわたくしをさぞかし御恨みなされ候事と申譯なく候へども、唯一夜の御情ゆゑに命も捨て候に免じ、どうぞ御ゆるし被下度候。先日いたゞき候御名札を肌身につけ相果て候はむかとぞんじ候へども、御名前にもかゝはることゝぞんじ、此末にまきこめおき候へば、まん一わたくしの死がい見あたり候て、葬式の折は棺の内へ御いれ被下度、申上げたき事は胸一はいに候へども、とりいそぎ候ゆゑ、惜き筆とめまゐらせ候。一たんのいたづらから先立もまする不孝の罪は、なんとも母樣へ申譯なく、あまりとや面目なさに、手紙をさしあげ候ことわざとゑんりよいたし候。御前樣よりよしなに御わび被下度、わたくしの身なげいたし候は、まつたくわたくしの迷からに候へば、かならずかならず青木樣を御うらみ被下まじく母樣へ頼み上げ申候。おしつけがましく候へども、わたくしなき後は便なき母樣を他人とおぼしめさず、

行末ながく御つきあひ被下度ねがひ上げまゐらせ候

あら〳〵かしこ。

十五日

つ　た　か

青木さま

（廿三年十二月）

南無阿彌陀佛

其一　貰泣の淚を手向の水

南無阿彌陀佛――南無阿彌陀佛、大阪中寺町蓮香寺といふ淨土寺に新佛あり。なま／＼しき土饅頭、木臭き塔婆に墨にじみて、春夢淨覺信女明治二十二年四月二日。四五日前までは此世の人――猶それよりも可憐き事あり。裏を見れば、俗名津波梅女行年十八歲――え丶去なしたり年頃の娘を。病氣の上か、但しは非業の最期か、それはともあれ、人の命が入用とならば、是からといふ蕾の花を散らさずとも、定規の五十年を生過した枯木のあるものを、何事ぞこれは。我に恨なき天道なれど恨めし。見知らぬ他人さへかほどに思ふを、嘸や六親眷屬。それ等の淚か此處のじめ――じめ乾かぬ土、踏みつけるも情なく、見れば手向けたる花のい

ろ〳〵麗しけれど、思ある日には、小袖の模樣かばかり見事に染上げても喜ぶ人はなくなりてと、更にまた涙の種。ましてその花の幹にわかれ、根を離れながら、萎るゝ色もなく〳〵——脆く散るべき氣色を見せぬを見れば、此女の命儚きをいとゞかなしがらせて、また泣かねばならず。只わづかに憂を倶にする線香の、見る間に一片の烟、半點の灰となれば、風に誘はれて、影さへ形さへ空。これを見ば、夕電朝露とさも無常にいひなせる人の命も、まだ〳〵頼もしく思はる。あゝ！老少不定斯の如きを、我人ともに春雨の日は、一日を一年と暮し、寢覺の秋の夜は、半時を三歳に明し、このまゝでゆかば五十年は生倦する事と、日頃思ひし不覺、翌日が日をも知れぬ命。心細くなりて、自ら無常を感じ、身近の卵塔にもたれ、餘所目には眠れるやうに立盡す間に、朧氣に聞取る跫音。不圖目を開けば、四十餘の女、亂れしまゝの圓髷、更に取繕へる姿なく、此處の前に膝を屈め、合掌もせず、唱名もせず、口の中に何やら搔口說き、

果は兩手に泥を抓み、或は塔婆をゆり動かし、前後不覺の涙、盡きぬ思はさもこそと、見るに忍ばれず進み寄りて、亡人のお袋樣かと尋ぬれば、顔をふりあげ、乳母で御座ります。わが子同樣手しほにかけしお孃樣の死目にも逢ひませず、はる〴〵東京からこんな悲い物を見に參りました、私の心をお察し下さいまし。去て御病氣は。肺病の上で焦れ死。仔細ありげな詞、それを聞かしてとたつて言へば。乳母は、溜堰來る涙の隙に始終を語る。一から十まで哀づくめ、(南無阿彌陀佛)と題せしは心から出し言葉なり。

此麗朗な春の日を……櫻の宮の花も咲かうに。去年の春は弟を連れ、乳母に傅かれ、花吹雪の中を辿りて、結立の髮に翳せし花鳥の繪扇、たしか用簞笥の抽斗にその後入れしまゝ、再び持つて外出すべき今の體にあらず。一年たらず枕に縋り、蒲團の縞も目に飽き、人にかれこれ思はせし襟も袖も、いまはしきレイフルの移香染みつき、わが身ながら愛想つ

かして、これならば死ぬがましとは、粧飾盛の娘心、道理とも不便ともいふべきやうなし。せめてはお庭のお花見と、乳母のおよしが萬事にやさしく、病身に風を厭へばとて、一枚だけ障子をあけ、黒塀内の吉野櫻を寢ながら見せて、枕もとに附添ふ、其顏をじつと詠めて、

「それぢや、もう、何日逢はれるか知れないねえ。」

「左樣な事は御座いません。來年になりますと、どんな事を致しても是非上ります。」

「そりやお前は又來ておくれかも知れないけれど、わたしやもう其迄は……、」　ほろりと一雫。

「生きては居られまいと思ふ。」

「なんのあなた、お氣の弱い。」

言つては見たが此容體。庭の花も大方これが娘の見納め、さればこの美しい顏もこれが乳母の見納め、思を詐らぬ涙に聲を濕ませ……ながらも

口には、

「今の若さに是位な病氣にお負け遊ばしてたまるものでございますか。何でも精出してお藥を召上つて、早くよくお成遊ばさなくてはいけません。」

娘が穎少い事を言ふたびに、いつも同じやうなこの言葉、乳母とて是より外に言ふべき詞はなし。娘は耳馴れて又例のと思へば、只聞流して、

「さうして、何時出立のだえ。」

「明後日の午前八時の滊車で參ります。」

「明後日。明日切だねえ。」

頬へばらつく鬢の亂毛を、うるさゝうに拂つて、乳母を見遣れば、膝を詰寄せ、

「何で御座います。」

「かうして一處に居るのも。」

人を殺す寸鐵。乳母は胸元を裂かれる如く、齒を食占め、壁を見向き、今一言いはれたら、もはや涙の忍びかぬる處へ、

「ばあや、ようく顔を見せておくれ。」

（明日にも死ぬ）と、言ふより言はぬだけがなほ悲しい――可怜しい言葉に何堪るべき。娘の痩細りし膝にしがみつき、聲は立てねど、立つるより咽返る斷腸さ。是程苦しめてまだ飽かずや、乳母の肩を撫でながら、

「ばあや、お前には大層世話になつたねえ。」

言へば言ふほど泣くやうな言ばかり。此分では泣死に死ぬまでも、哀な事を言ひ續けてやむまじと、

「えゝ、そんな事を、もう……。」

「三才の時におつかさんに別れ、其からはお前ばかりの丹誠で……」

「えゝ、もう、あなた……」

此を聞くより熱鐵を吞せらるゝがまだしもなり。傍所の耳には左程まで

と思はれねど、此主從の關繫と、此場の樣子を知る上は、しめらぬ袖はあるまじ。この(よし)といふ乳母、娘が生の母世にありし頃抱へられ、幼稚ものに傳くに影日向なければ、二なく頼もしき者に思はれ、今はの際にも重き枕を上げ、主たる身が兩手を合せ、くれぐ\も二人の子をと、見込んでの遺言。御安心遊ばしましてと、心安く請合ひしを、今に十餘年當座のやうに忘れず。艸葉の蔭から睨まれやうかと、假初にも氣の引ける事露身に覺なければ、性善の子供が此に懷かざる道理はなく、親にもまして戀ひ慕ひ、他人があやせば泣き、われが叱れば笑むに、慾も德も忘れ果て、形ばかりは奉公人、心は眞實の親になりて暮す內に、今の二度添出來て、持參を楯に、我儘の擧動目に餘るを、旦那の知らぬ顏にいよ\/\募り、わが甥を此處の家督にと、可怒しき事をたくみ、繼しき二人を邪魔にすれば、彌增す不便。何卒心ある親類を味方に賴み、此家の暖簾はいづれとも二人の中へと、苦心の數々もいたづらとなりしは、

輕薄の世の習とて、目星をつけし後楯の緣者も、後妻の里方身代よろしきに心を飜へし、先妻の里はあれど、無きが如く零落して、今は出入も不首尾となり、日本に人は多けれど、二人が爲に力となるは我一人。此上は詮なし、ともあれ二人を成人さして、其後の分別と、實にや嬉しきものは人の情、是を懸けぬは犬、これを忘るゝは畜生。立派なる男ですら、死ぬは易けれど生延びて孤子を守るは難しといひしに、奉公人―然かも女の身として、一諾ゆゑに十年の苦勞を義理とも思はず、恩にも着せず、心底二人を可愛がり、姉は今年十八、弟は十三、是までに守育てたれば、望七分は叶へり。殘る三分は花婿の顏を見て、兩親に疎まれし娘、行末長くいとしがつてと、吾口づから賴み、わが手づからまづいながらも丸髷に結ひ申し、つめ袖を着せ申し、連立つて先のお袋樣のお墓へ參つたら、いかばかり草葉の蔭のお喜は、定めて石塔もゆれるであらう。其を土產に東京へ立歸り、世話好の姉に譽められて、またこの善

根ゆゑに死なれた雨親が、紫雲の厚蒲團に安坐して、極樂へ往かるゝを夢になりとも見ばやなど、苦勞ばかりの胸には、頼みかく薄き事さへ樂みに、待ちし甲斐は……ありしか。あら、何事ぞ、娘の重病。　水夫に聞かむ、果しなき大洋の浪を潛りて、古里間近に漕寄る時、南無三、烈風、烈雨、暗礁に船を裂かれ、陸を其處に睨みながら、折れし帆杜に縋る心を。乳母が胸の中、述ぶるに耐ふる舌があるか　寫すに足るべき詞があるか。思へば言語文章、學ぶほどの物に非ず。

東京からは矢を射る手紙。いつを限と知らぬ奉公して、身の定まらぬを心にかけ、歸れ〳〵といふを、一日延の返事に今までを繫ぎたれど、いよ〳〵此處を暇とらねばならぬ事起り、歸る日の後に逼れば、一人の病、二人の身の上、いかに成行くかわが無き後は。此二つぎりにても振切れぬ袂を、恩愛にからまれては猶。もし此で西東とならば、再會は日の照す處にあらず。その未來とやらも、ありやなしや覺束なし。さらば、是

から永劫の別か――劫といへばまだ有限の月日――無窮の別か。悲しや、泣きたきことは山々なれど、我からして左樣したら、心細き娘が血の淚を流し、それにては足らず狹き胸を張裂かうも知れず。爰が辛抱のゝどころと、聲を殺して呑込みし淚も、娘が再三の言葉にそゝのかされ、正體なく泣倒るれば、娘もはんけちを乏とゝにして、
「此までの恩はわたしや死んでも忘れない。」
「あなた、もう……ぢきに死ぬ〳〵と、何で御座いますねえ。」
しやくり上げながら、なほ、
「今のお母さんは繼しい中だから、私にも由之助にもつらく當り、お父さんまでが此頃は……賴みにして居るはお前ばかりだのに、もう明後日から居なくなつてしまつたら、どんな事が有つても相談合手はなし。由之助もまたお前が居なくつては、誰もお母さんの前をかばつてくれるものがないから、何かにつけて辛い思をしなければなるまい。傍で其を見

るのが、ばあや、わたしや、何より……。」
「えゝつ、御尤様。」
胸は一杯になりて、舌も自由には動かぬを、年若だけに娘はまだ氣丈なり。
「ばあや、」
呼懸けられて顔をあぐれば、
「お前が立つとき停車場まで一處にいかう。」
外出のなる身體か。
「あれまあ、あなた……。」
病寢けて寐返りさへ切なき身體を抱へながら、此一言。嬉しさ――有難さ骨身にこたへ、長年の世話にも――苦勞にも過ぎたる褒美、手に取れるものなら、押戴いて肌身につけたし。
「とんでもない。お座敷さへお徒歩遊ばすが太儀なお體で……そんなこ

とはもう〳〵決して、嘘にもして見やうと思召しますな。そのお言葉だけで私は、た……た……く山で御座います。」
「なあに、歩けなければ車があるよ。丈夫な體ならお前と一處に東京へ往つ切に行つてしまひたいけれど……おっつけわたしや遠い處へいかなければ……。」
又しても死ぬ事。叱られやうかと乳母の方を見れば、誰が顔をあげて聞いて居らるゝものか。唇を嚙占めて、鼻を啜る音ばかり。
「お前が往つてから、また心配な事があつたら手紙を上げるから、どうぞ今迄通り悪い事は叱つて、かうするが好いと指圖をしておくれ、いゝかい、其を私や頼にして居るから。」
「は……はい。」
「わたしや此頃は筆を持つのも太儀でならないから、由之助に書して、日曜のたんびにきつと手紙を上げるから、お前も面倒だらうけれど、わ

たし達の心を察して、返事をよこしておくれ。さうして、又、何か欲しい物があつたら、ばあや、遠慮なくさういつておよこしよ、すぐに送つて上げるから。」

「あ……あ、」

何をいはうにも塞がる胸――咽ぶ聲。勿體なけれど父親の枕元に兩手をつきし時にだも、此ほどゝは覺えぬ思。漸く氣を勵まして、

「平常からおやさしいあなた、今始つた譯では御座いませんが、長々お馴染み申しましたものを、お別れ、申しますさへ悲しくてなりません處へ、そんな言をおつしやいますから、東京へ歸るのがなほ〳〵いやになりまして……たとへどんなに思ひましても、參らなければなりませんので御座いますから、お孃樣、いつそ思切のいゝやうに、お情ない事をおつしやつて下さいまし。」

孃の耳には、なほ情の言葉をかけよと囁く如し。

「お手紙の事は承知致しました。あちらへ着きますと、早々お便をいたします。また御返事は御存じの筆で御座いますから、姉の息子に書せまして、きつと繁々御機嫌も伺ひますし、及ばずながら御力にもなりまする。」

「あゝ、どうぞ、さうして……後生だから。」

「はい、其は御心配遊ばしますな。あなた又つまらない事を苦に遊ばして、御病氣を重らせるやうな事を、遊ばして下さいますな、此ばかりが私のお願で御座います。よろしう御座いますか。」

「あいよ。」

「あなたも今年は十八。もう一人前におなり遊ばしたのでございますから、他人にいゝやうにされる事は御座いません。此上御病氣さへ御本腹遊ばせば、どうともなりますから……。あなたのお體はあなたお一人のでは御座いません。ぼつちやんのお身にもかゝることで御座いますから、

どうぞお大事に遊ばして、首尾能、此處の御家督にお成遊ばして、御婚禮の時には、私も黑繻子の丸帶でも〆めまして、お臺所のお指圖に上りますやうな、お目出たい事の、遠からず御座いますやう……。あれ、お孃樣、な……な……なにを、お……お泣き遊ばします。」

「ばあや、」　いふは淚。

「はい。」　返事も淚。

「さうなつたらさぞ嬉しからうねえ。」

あとは二人ながら泣倒れ、出入口の障子を開く音に、乳母が上げる顏と、見合す由之助の顏。

「ばあや、」

「おや、只今御歸りで御座いますか。」

點首いて、

「ばあや、どうしても東京へ行くのかい。」

「はい、明後日参ります。もういくら坊ちやんに打擲れやうと存じましても……。」

娘は聲を震はし、

「由ちやん。ばあやにいろ〱お世話になりましたと、ようくお禮をお言ひなねえ。」

姉の指圖に乳母の前にかしこまり、兩手をついて……前に似ぬしをらしさ。

「ばあや、種々お世話になりました。」

乳母はたまらず、わが膝の上に由之助を引倒し——抱〆め、泣いても泣いてもつきぬものは、涙か……思。これならば死ぬがまし、生別離の切なさ。

其二――此思通さばや百三十里

千代もと祈る人の子のため――世間の乳母の心を讀まれしものか。淺草の觀世音、深川の不動尊、神田明神、湯島天神、佛ともいはず神ともいはず、路端の古祠、霞がくれの千木、いづれもおろそかにせず伏拜むも、わが身の息災延命にはあらで、お梅樣の病氣何卒一度平癒なさしめたまへと、乳母のよしが東京へ歸つても、以前にかはらぬ志、聞くもの感涙に袖を濡しぬ。

身は此地に在りながら、魂は百餘里の空を往來して、夢に遇ひ夢に別れ、言遺せし事は一週に一度つゝ便の長文句。お梅からはいつも、(あひたい)を五度も六度も一つ筆に書いてよこせば、こちらからの返事には、(御身大切に)を繰返して、別に變りし申條はなけれど、見るたびごとに今更のやうに、涙留めかねるも恩愛の力なり。

扨、玆にあやしきは、お梅が病中の戀なり。さもなくても玉の緒の絶えかねまじき身にして、戀とは何事。氣樂な沙汰と人々の思はくも羞かしかるべきを、して誰を戀ひ、誰を慕ふ。外出せぬ身の見染めしといふ人もあるまじ。見舞に來る男といふも、日頃見馴れし人、しかも親類の白髮頭よりは外になく、戀の相手ともなりさうな男といはゞ、折々この部屋に出入する店の者、二ばん番頭の清七、小僧あがりの與之吉、この二人が數の中で人らしい顏。これ等を餘所にしてはあるべしとも思はれず。さりながら、お梅は幼稚より、三筋、舞扇を手にするを厭ひ、一昨年の秋小學全科を卒業してこのかた、近所なる私立英學校へ通學し、米國婦人ミス、アンナを師と頼み、文明國の婦人の位置は、どれほどのものと心得、おのづから氣位高く、わが生涯苦樂の連合とせむものは、兩親の目鑑と少し變りて、生意氣といはるゝか知らねど、銖利を珠算の上にかれこれいふ小商人は、此上もなき嫌なり。さればなほの事わが店の奉公人

風情に戀、夢にも思はず。されば此の戀の相手、外に目ざすべき者なし。あら！　知れたり、代診の書生か、黑綾のコオト縞ヅボン、これは當世男。いや其でもなき樣子。それと穗に出しをやう〳〵弟の由之助が、もしやと見とめしばかりなれば、他人の穿鑿及びもなきことなり。此不思議なる戀人といふは、乳母よしの甥――書狀の代筆者。何時その人を見た――全くの見ぬ戀。見ぬ戀とか。十九世紀の今の世にありとも思はれぬ話、その委細聞きたし。

人を戀ふに、戀ふ品々あれど、大別すれば顏と心の二つに外ならず。顏にのみ思ひつくもあれば、心に焦るゝもあり。兩方ながらのもあり。若年の男女、言ひかへて思想の淺き時は、世話にいへる(目の肥えぬ)時は、たゞ見た目の麗しきに魂を奪はるゝなり。幼きものゝ色ある花をめでゝ、雨上りの若葉、霞隱れの遠山里、口には言はれぬ趣あるに心を動かさず。また成人の後にしても、詩人のこれはと云ふに、凡俗の喜ばぬもの多し。

これ思想の深淺による。（人形食）といふは、若き男女に多けれど、これより崩す戀は大方浮氣のいたづら、心底からの思にあらず。花見戻りの買言葉、微醉の後に引く袂、皆一時の出來心。これや戀の下品にして、肉情の快樂を貪るの外ならず。まことに命をかけて惜からぬ思にはまるは、かゝるなまやさしき事よりは起りにくし。凡そ人と生れ、誰ありて美を好まざるはなけれど、美のみが決して戀の本尊にあらず。美はたゞ戀の緒にして、情は戀の結目と、味ある事を聞きし。お梅が病中の戀。これ春心のいたづらならず、まことの情の道これなり。

乳母のよしが甥は、今年廿三の男盛。上野兼次郎とて、産は商人の家なれど、つい此間まで高等なる學課を修め、政治家とも法律家とも未來はなるべき書生に交らひ、なほ深く學びての曉、社會に打つて出で、あはれ日本の紳商にもなるべき大望ありしが、家饒ならねば自營の道を立てねばならず、某會社に通勤の身となりて、いまだ獨身堅固に暮し、家内

の衣物に襤褸をさげず、三度の食も腹を充すばかりにあらずなりぬ。よしは當分此處に引取られて、日毎夜毎暇あれば京大阪の名所譚。そのあとはいつも變らず、お梅同胞の身の上を哀れに語れば、姉はもらひ泣の雫を火鉢の灰に落して、どうぞ御病氣を治してあげたいと、妹の主なれば他人の心持はせず。此を聞く兼次郎は、江戸氣質のきかぬ氣の男ゆゑ、わが身がもし其場合にあつたなら、どんなにか口惜しかるべし。其お梅さんとやらの心の内……母は繼、父親は實子といふ二人の爲を思はねば、繼しきと少しもかはらず。實母の居た頃には髮をなでゝ、可愛ともいつてくれた親類さへ敵となり、味方と賴む乳母には捨てられ。世間も碌にしらぬたゞ二人、荒磯の孤島に住むはつらいとも、心細いとも。これのみか長女と生れ、または一人の男でありながら、いづれにしても實子に家督は讓らぬ繼母の巧計、此一つにて狹き胸にはあり餘る苦勞。なほまた明日をも知れぬ重病、かうしてつらい目を見やうより、此病を

幸ひに、いつそ死ぬがまだしもと、思ひ……返せば後にたゞ一人由之助が……その行末はいかゞあらむ。其ゆゑにこそ、死ぬに窮めし命を一寸のびにして、のびればそれだけまさる病苦も、姉が生前の寸志、なき後の遺物と、はかなき玉の緒を繋ぐお梅の心を推量りて、始めて世の中の哀といふものは、これと感ぜしも殊勝なり。おのれも不便と思へば、叔母が文の代筆にも、わが深切自ら籠りて、一言かう書いてと頼まれしことを、十言にかいていたはれば、見る身になりては魂もきゆるばかり。此方から始めての文の末に、私事上野兼次郎と申候、叔母義御宅に御奉公申上候折は、長年御世話様に相成、御禮は私よりもくれ〴〵申上候、此末とも私を叔母同様に思召し下され度、不躾ながら及ぶだけはお力にも相成、せめては叔母が日頃の御恩報じをもいたしたくと、添書にして自分を紹介せてその後の文は、半分は全くわが文句にして、心籠れば我知らずわがいふ如く筆がまはりて、深切の數々をかいてやれば、頼少き

同胞は、眞身の親、血系のものゝつれなきにつけ、他人の志いよ〳〵身に染み嬉しく、（なぜ乳母の一家はこんなに深切だらう）と、文を見るたびにお梅がいへば、（僕は乳母の子に生れたかつた）と。由之助が富貴の家に生れながら、奉公人の貧しきを望むも、津波の土藏には金銀ばかりにして、いかなる裏店にもきつと一つの寶が、不足なるを羨みてのことなり。

ある時大阪からの手紙に別封ありて、上書は上野樣。裏に由之助とあるを開いて見れば、こは紛ひもなき女筆、しかも病苦を壓しての筆と見えて、字體も字行も亂れながら、かく事はたしかに、この御深切は死んでもわすれぬと、あらためての禮狀らしき文句のうちに、ちら〳〵焦るゝ思を匂はせ、あすをもしらぬ病氣でなくば……など〳〵、すこしとり亂したる心、筆の穗にあらはれて見ゆれば、兼次郎も憎からぬ事に思ひ、喜ぶやうな返事を出すと、間もなくまた〳〵の手紙に、もはやわが身を兼

次郎の物にせしやうな事をかきつらねて。とても生きぬ命なれば、由之助を弟と思召し、われなき後は引受けて、何卒一人前の人間にしてたまはれ。それは骨が舍利にならばなれ。身にかへ慥に呑込みし旨を返事すれば、涙に墨のにじみたる文が來て、以來は何分御賴申上候、由之助より御兄上樣と宛名して、また別封はお梅から。病苦ゆゑかくだく〳〵しき文句を省き、呼吸のある中御前樣のお顏が一目見たければ、ぜひ〳〵寫眞を今日にもおくつてとの所望、これが戀のそも〳〵。たがひに見ぬ人なれど、叔母から聞けばお孃樣は、新町、島の內にもまれなる姿、これ〳〵と精しく語るにつけ、また其心までが惡からず。お梅は兼次郎の深切いかにしても忘れ難く、乳母の話ゑたりしを今思ひ出せば、學識もあり心も優しく、弟を賴む人を得たるに、死後の苦勞なくなれば、わが戀日々やる瀨なく募りて、此世に思ひ遺す事、入替りてまた一つ憂世なり。

其三──戀の一字に千束の文

ありとても逢瀨も知らぬいのちをば何の頼みになほ惜むらん。今日も兼次郎からの手紙を卷かへし、翌日を待たぬ身にしては其人の厚き情が却つて恨めし。お梅は蒲團の上に起直り、膝に手紙を長々とひろげて、思に沈む處へ、がらりと障子の明きしに驚き、かの手紙を引摑み、袂の中へ忍ばせながら、見れば弟なり。

「なんだねえ、由ちやん、喫驚したよ。」

「御免よ。」

枕元に坐りながら、姉の顏を見て、

「姉さんまた泣いたね、」

「あゝ。」

干ぬ間の露を拂ひ、袂に忍ばせし物を取出せば、

「その手紙は何時の、」
膝を少し進め、手を伸して、その端を引いて一二行讀み、
「この間のぢやないか。え丶、」
「あ丶。あの、二人で大層泣いたのさ。」
「あ丶あれ。一番深切な事が澤山書いてあるね。姉さん大事にして置くつて言ひながら、そんなに揉くちやにして勿體ないぢやないか。」
心附けられてお梅は皺を伸しながら、
「おまいが突然に入つて來るからさ。私や誰かに見られたかと思つて、眞實に喫驚したよ。」
「なあに滅多に此處へは誰も來やしないよ。」
なるほど言ふごとく此處へは人の出入、弟をのけては、まづ外に無きやうなものなり。乳母が……繼母も烟たがりしおよしが先月出てからは、冠を懸けし宰相の門に似たり。さなきだに家内の者さへ、しみ〴〵訪ふ

は稀なりしを、今は猶更繼母に睨まれん事を畏れて、店のものも下女も知りつゝの不人情。まして他人は見舞に來ながら、いゝ顏もされねば、あの子は可哀さうだが、繼母めを見るが氣色に障るとて、此はさもさうづ、さもあらむ事なり。お梅は我朋友が、一月餘り病氣ゆゑに學校を休みしを、自分も見舞ひたりしに、父母は申すまでもなく、伯父伯母、つひに見知らぬは甥と姪とか、大勢枕邊に居並び、その床間は菓子折の山を築き、日に兩度づゝ流行の醫學士が店口に車をとゞろかすなど、さまで病者に益無きことながら、心細き折はそれらも幾分の力になるものなり。其朋友の身代は我に優るにもあらず、其病症は命とりにもあらず、それすらあの通、我はいかなる不幸の身にして。先日無二の親友と賴みし方よりの見舞狀に、店へ五度迄足を運びしに、誰のいひつけやら—夫も知つてゐる——醫者の言葉なれば、お逢はせ申す事はなり兼ると追戻され、其後連名にて心ばかりの見舞物、これならばお前樣の枕近く

へいかれやうと、差上げましたといふに……其人は常々嘘をいひし例なきに、今度。しかも私の病氣をつけこみての悪戯か、その見舞物は此處へは來ず、由之助にその事を話せば、母親の座敷にて、何とも知らねど見舞物らしき品を見たり。しかも翌日母親の甥が來て、風呂敷包にして將つて行つたはそれ。あゝさもしい事を。恨がましく言ふものにあらず、と言つては見たが、日頃が日頃の母親、何とも知れず。これほどつらい上にそれまでとは、念のいつたる無情さ。さほど憎くば一思に殺して下され。この今の思に較べては、決して恨むまじ。

「由ちやん、もうあの手紙が屆いたらうねえ、」

「あゝもう屆いてる。今ごろは讀むでらつしやるに違ひない。」

「返事を書いて居らつしやる時分ぢやないか。上野さんはねえ、字がお上手だよ、假名なんぞは綺麗でやさしくつて此の通……。」

といふ時、何氣なく由之助と顏を見合せ、少し紅めて笑ひける。

「何を姉さん笑ふの、」
「笑やしないよ、何も。」
「笑つたよ、今笑つたぢやないか。此頃は始終いやな顔ばつかりして居るけれど、上野さんの事だと、でも時々笑ふねえ。」
おつな事を、わる氣があつて言ふにはあらねど。
「いやな子だねえ、何時わたしが笑ひました。」
「あら、そら、あら、あら、笑つてるぢやないか。」
此一言に忍びかね、久しぶりにてお梅が心底から揉出したやうな笑ひ顔。
あゝ乳母に見せたらば、
(これで御飯がおいしく頂かれます。)と、いつもの口癖をまた聞かうものを。
由之助は盆の上の薬瓶を取つて度盛を詠め、
「姉さん今朝からまだ飲まないね、」

「あゝ。」

ゆかしい人の噂に、苦を忘るゝも一刹那、藥と聞いていやな氣がさし、あゝこの病さへなくば天へもとゞく蟻の一念、やがて目出度……其ほどでなくとも、おもしろい樂しい目を見やうものを、覺束なき枕に伏してたゞ此儘にと思へば、引入れられるやうなり。

「姉さん、お飲みよ。飲まなくつちやいけないぢやないか。」

瓶をさし出せば、押退けて、

「飲むよ。もう少し經つて、」

「今お飲みなね。また忘れてしまふといけないから、」

「今すこし心持がわるいから、後に。」

「屹度だね、」

「あゝ屹度だよ。」

どうで助らぬ命。苦い思をするだけが損と、若年は一寸先を闇にして、

無法なることを恐なく擧動へば、此處には年老いたる人がつきそひて、萬事心を配り、それゆゑに賴少き玉の緒も繫ぎとめることあれど、看病は十三の男の兒、病者は（くやしい）（恨めしい）といふ病の外の病が死を急がすれば、聞くからに危き事なるを、知らぬ顏する實父、感化の力のおそろしさ！　人も蛇になることあり。

「由ちやん、上野さんが寫眞をおくつて下さるだらうか。」

「あんな深切な人だから、今に屹度おくつて下さるよ。今度もし來なかつたら、また手紙でさう言はう。」

「でもあんまりしつこくさう申して上げちや惡いから……。」

由之助は答もなく、何か考へたりしが……浮びしか、

「ね、姉さん。」

大聲に喚びかければ、

「あゝつ、大きな聲だねえ。」

「ひよつとすると上野さんの方から、姉さんの寫眞をおくれつていつてくるかも知れない。」
「あゝ何とも知れない。」
「さうしたらどうしやう、一枚もないよ。」
「困つたねえ。學校で大勢一處に撮つたのはあるけれど、」
「あゝ、あれを切つて……いゝぢやないか。」
「ありやいけない、變な顏に寫つてるもの。」
「左樣かい。」
寫眞に就いては言ふ事も盡きしか、此方の寫眞を求める手段を案ずるのか、お梅は蒲團の綴糸を拈り、由之助は頭の髮を我とむしり、兩人ともひそまり返れば、奥の間に手にとるやうに繼母が姦しい聲、また光（下女の名）を叱ると見える。お梅は弗と顏をあげて、
「由ちやん、」

「えゝ。」
「おまい上野さんの顔は丸いと思ふか、細面だと思ふかい。」
姉の顔を不思議さうに見て、
「なあぜ、」
「ほゝほゝほ、なぜでもさ。」
「そりや了解らないやね。ぢや姉さんはどつちだと思ふ。」
「おまいまあ當てゝ御覧、實は昨夜夢に見たから。」
山之助はわれ知らず膝行寄り、
「さうかい。見たの、どんな人。」
「まあ當てゝ御覧よ。」
首を傾けて、
「さうだねえ。」
お梅はその躰を見る眼を、嬉しさに輝かして、唇までが、嬉しさに綻ば

されて、
「どつちだえ。」
「もし違つたつても怒つちやいけないよ。」
日頃陰の噂にもお梅が其人を大事に懸けることは、此一言――他人の口からだけ　何よりの證據なり。
「何、怒るものかね。」
「ぢや、ねえ。」
顔を見合せ、ほゝほゝほ。はゝはゝは。
「早くお言ひよ。」
「あのね、僕はね……いやだ、笑ふから。」
「それぢや笑はないからお言ひ。」
「ふゝふゝふ、いやだあ……あのね、上野さんの顔は細面。」
「細面。」

この一言を鸚鵡返しに云たばかり。由之助は氣遣つて、

「違つたかい。」

もしさうならば宥してと云ふ語氣――低い調子――夢に見たも細面！

「左様だよ。」

「左様かい。」

的中したを勝ち誇る語氣――高めし調子。なほ續いて、

「姉さんも僕もさう思ふから、屹度さうに違ひない。細面で溫柔しい人だよ。」

お梅はすこしぢれて、聲を絞らせ、

「逢ひたいねえ。」

其四──散る花を南無阿彌陀佛と夕哉

散る花を南無阿彌陀佛と夕哉、情なき事をしたり。二週前よりお梅は大阪救生醫院に移りしが、手後は是非なく、左肺壞れて血吐絶間なく、末期旦夕に逼りながら、戀慕の一念ばかりは、死ぬべき氣色も見せず。

「由ちやん、上野樣からまだお手紙は來ないかい。」

「あゝ。待つてるのだけれど……何樣したんだらう。」

「來れば寫眞がはいつてるねえ。」

「あゝ。お藥も一處に送ると、此間の手紙に書いてあつだから、寫眞とお藥が來るよ。」

落凹む眼に凄き微笑。笑ふも泣くも此事にばかり。お梅は雪の柳と細りし手をさしのべ、由之助の袂を引けば、

「えゝ。」

寢臺の下を指して、意味ありげに顏を動かす。

「革嚢かい。」　取出して、

「何を出すの、」　言ひながら開けば、お梅は寐返るも大石を脊負ふ身のこなし。寐返るとそのまゝ、枕に額を押附け、呼吸苦しく、やがて友禪染の服紗包を取出し、

「是を開けて………。」

「あい。」

服紗を解けば、花桐と小さき鳳丸の織模樣綺羅びやかなる西陣織の紙入。

「どうするの、」

「其中に紙へお金が二十圓包むであるだらう。」

言ふごとく在るを見て、

「あるよ。」

お梅は首肯き、

「其を持つて、私が死んだら東京へ行つて、乳母の家へおいで。さうして上野さんにお目に懸つて、おまいようくお賴み申すんだよ。」

「えゝつ。そりや知つてるけれど、今つから如此物を出さずといゝちやないか。」

言ふ顏をじつと見詰め……眼を閉づれば、瞼に壓さるゝ涙、睫毛に露を置餘りて、ばら〳〵と頰に傳はるを枕に擦拭ひ、

「何時死ぬか知れないから、」

無常迅速。今やと氣遣ふ矢先へ此一言、只譯もなく心細く……悲しくなりて、胸まで堰上げる涙を、出さじと飲込めば、聲が震へて、

「な……なあに、死にやしないよ。よう、姉さん、後生だから死んでおくれでないよ。」

「あいよ。私だつて何も死にたい事はありやしないけれど、壽命なら仕方がない。」

かくある可しとは覺悟の上ながら、斯ういはるれば今更のやうに心細くなりて、身も世もあられず。死ぬとてやりはせぬと、細腰にしがみつき、しやくりあぐれば、天下に唯二人と今まで睦みしものを、お梅の心として別れたき事はなけれど、わが行くは外ならぬ旅路、連れて行きたけれど死出三途、行く我身も遺る汝も――不便の者。

「由ちやんや、由ちやんや、」

「いやだ。いやだ。」

なほしつかと取縋り、身悶して泣く頑是なさに、可哀くなりて、首頸に兩手をかけ、五六歳の孤兒に言ひきかせるごとく、

「東京へ行つたら、上野さんを私とも兄さんとも思つて、大人しくして能く言ふ事を聞かなくちやいけないよ。我儘を言つたり、剛情を張つて憎まれたら、誰も世話をしてくれる者はありやしないから……いゝかい。

「あ……あ……あい。」

「其紙入は乳母に持つていつておやり、私の遺物だつて。家に遺しておいた銀簪と珊瑚珠の根掛がやりたいけれど、ありや遠からお母さんが欲しがつておいでだから、やるわけにはいけない。」

長き言葉に呼吸を切らし、暫時苦痛さを休めて、

「年のいかないお前にも、色々心配さして……弟とはいひながら、長い間よく深切に看病しておくれだねえ……う……嬉しい、あの世へ行つてお母さんに逢つて、由之助がかう〳〵だとお話をしたら、どんなにお褒めなさるかしれない。」

由之助は兩袖にて眼をすり、

「もうおよしよ。そんな事いふのは、」

「病氣が治つたら、お前が欲しがる唐机と編上の靴をお禮に買つて上げる積だつたけれど……其も出來ない……か……堪忍しておくれ。」

言ふ後は（おいた）と一聲。胸を兩手に我と壓す間もなく、かつと吐出す

血汐、平常にすぐれて多量なるに、由之助は面色變へて狼狽へ、有合ふ手巾をお梅の口にあてがひ、

「痛いかい、姉さん。」

返事はなく、眼を見開き、由之助を見詰めるのみ。藥をといへど頭をふり、水はと問へど喜ばず。其儘暫時ありて、漸く落着きしが、

「手紙はまだ來ないかねえ。」

「もう直だよ、今に來るだらう。」

「待遠だねえ、早く見たい。」

やがてうと／＼するかと思へば、夢に驚かされたやうに、ふつと目を開き、

「由ちやん。上野さんにあつたら、此夏あたりもし大阪へ商用でおいでなさる樣な事があつたら、私のお墓參をして下さいと言つておくれよ。」

「あゝさう言ふよ。」

嬉しげに首肯き、
「それから…………」
室の戸の引手を捻る音に話を切られて、兩人とも入口に目を注げば、入來る男――昔店につかひし番頭の金兵衞。
「おや、坊ちやん。おゝ、お孃樣。」
見るより羽織の袖に眼を拭へば、
「やあ、金兵衞。」
嬉しさに――珍しさに、思はず高めし由之助が聲。お梅もこれに變らぬ思。
「おや、金兵衞かい。」
「へい…………へい。」
齒を食緊めて男泣。
「お…………お懷しう御座りました。」

「金兵衞、此方へおいでよ、よく來たね。」

「さ、此處へ、汚穢いけれど、」

金兵衞は枕元に寄り、慇懃に頭を下げて、

「どうもまあ、こんなに御大病とは夢にもぞんじませんで、昨日商用で此地へ參りまして、御入院と承りましてびつくり致しました。早速まあ今日………御氣分は如何で御座います。」

「あい、有難う、どうもいけないよ。」

「其はどうも………何方が御看病においでゞ御座ります。」

問はれて涙を催し、

「金兵衞や、わたしや………くやしい。」

「ど………ど………何樣遊ばしました。」

お梅は咽ぶばかり、いはねば由之助が、

「誰も家から附けちやくれない、私ばかりだ。」

「えゝつ、」

と振向き、由之助の顔を見て、

「坊ちやんばかり、あの……あなた……ばかり……」

三人諸聲をたてゝ、泣きけり――恨みけり。

此日はいつより早く暮れて、夜もいつよりは賑やかに、火影も花やかに輝きけるが、十時頃よりお梅の容體かはりて、最期は明朝の露を待たぬやうに見ゆれば、醫師もつき切にて、家へは人をはしらす。物も碌にはいへぬ舌にて、何やら呻くやうに聲を立つるを、他人には聞えねど、由之助の耳には正しく、

「手紙はまだか。寫眞が見たい。」

と聞ゆれば、

「今に來るから氣をたしかにして待つておいで。」

と言へば、心得するらしく聲を收めても、間もなく前の如く尋ぬるに、

由之助も姉が今生の願、せひ一目其を見せて死なしたしと思ふに、待てども待てども音信なく、その間に玉の緒細りて、今はといふ時、お梅右の無名指に箝めたる金の指輪をぬきとり、左手に持つてさし出し、物いひたげなれど、哀や今は聲もはかゞしからず。由之助此を請取りて思ふに、此指輪は日頃大事にせし物、其人ならでは外に遣るべき品にあらず。

「私が玄つかり届けるよ。」

といへど、答ふべき體度を見する力もなく、やがて絶命の呼吸づかひ。

枕に引添ふ一同は、聲を呑んでさし控へ、中にも金兵衛は念佛小聲に唱へて臨終を待つ處へ、廊下を急足に轟かし、どんと戸を開け、丁稚の喜太郎が呼吸をはずませ、

「お人で御座いましたが、旦那樣はまだお歸になりません。只今お神樣が……、坊ちやま、東京から、」

と紙包を手渡せば、

「東京からつ、」

遲しと上紙引裂けば、上野の寫眞と肺病の藥劑、一目見るより狂氣のやうになつて、

「姉さん、寫眞……お藥。」

此聲耳に入りて、お梅は口を少し開くは、此藥飲みたいとの事か。一口含ませ、さしだす手に寫眞を握らすれば、ふつと目をあき、ほゝゑみて、口を動かし、寫眞を抱しめ、その儘寂滅花は散りけり。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（二十二年四月）

拈華微笑（國民之友第六卷第六十九號新年附錄）

上

不說說。不聞聞。口よりも眼はよく言ひ、耳よりも聞くこと聽し。市ケ谷御門外の御濠に、鴨の羽音朝の霜に冴えて、松の梢は靜なれど、身を斬る風吹きさらしの大路を往來の土方ども、あいつをしめて、きうと熱いのをと、交番所の前をつぶやいて過ぐる後より、二十五六の判任づくりの男、手頭をポッケットの底に暖め、兩臂をくの字形にして、腋の下に辨當包を挾み、何省へ勤むるか知らねど、南の方から來て、御門を入り左へ曲りて行きけり。　降らでかなはぬものならば、雨もふれ、雪もふれ、難義らしき顏もせず、いつが日にも休むことなく、しかも徒行なり。　客待の車夫も此人は別物にして聲を懸けず。いかな朝も見えぬこと

なければ、烏官員と囁きちらし、帽子と外套の黑色までが、笑の種となりけり。それにしても此男は小白く、眼にいはれぬ可愛き處ありて、近來のばせし八字髭の形もよく、これで身のまはりさへよくば、車夫づれにとやかういはるゝ人品ならねど、世の中は錢が大明神！

今年の二月以來、毎朝同じ時刻――同じ場所にて行遇ふ車上の美人あり。召物のうつついは此が學校衣かと驚かれ、ぼつとりと萬事が上品粧。いつにも日本風の髮を結はれしことなく、鬢髱引つめて、ぐるりと左卷の無雜作結。薄紅の一輪花の簪に、琥珀色の束髮櫛。或時は洒落て舞踏結俠なれど氣が替りて此もよし。肌理濃に地色の白きが上に、薄り刷かれしは可厭にあらず。地藏眉柔和にして眼元情らしく、左の眼下に一粒目立つ黑子のあるは、大いなる愛嬌になりて瑕ならず。車の走るに少し反身の姿はにくいほどよし。

此男偏屈にて同僚の交際を知らねば、譽むる人なく、第一馬鹿律義にて

いつこくにて、無口にて、ぼんやりにて、雪を畫けとあれば六角に畫き、花を詠めよといへばまじく〵見つめるほどの人物。女の噂が出れば、むかふ向になつて書見とは、若いものがあゝでも困る、世情に疎きもこれゆゑといはるゝ男が、擦違ひ――電光石火の姿に、何の目留る理はなく、留つてからが、なるほど美しいと見ても、其美しきが何でもなく、其美しきをどうといふ氣はなほなし。天の配劑妙なり、戀なり。美しきあれば醜きあり。今のは美の部に生れ合せとばかり、手輕に思ひ消してあとには何も殘らず。いはゞ肉眼に光線の作用ありしばかりにして。物は幾度も見るにつけ、眼光次第に骨隨にいれば、其味自ら知れて、初はさも思はざりし物まで、其々其物の妙にありつけば、花は櫻のみかは、海は須磨にも限らざるべし。まして美しきを見て、勿體なくも美しと思はぬは、食はず嫌ひの妙處を曉りえせずして、女などは好かぬと言ひちぎり、人に惡くいはれし例なきを一つの賴みにして、嫌ひですましておけ

ど、道理に二つはなし、これが學問ともいふならば、進まぬながらも大好物といふべし。好色、不德はよかるまじけれど、男として眉目麗しき女を見ながら、顏を顰むるなどは、僞聖人か、但しは食はず嫌ひか。僞聖人は濟度の沙汰に及ばず。食はず嫌ひだけは、いかにも慈悲を垂れて成佛させたきものなり。

我から好んで見るにはあらねど、同じ時刻同じ場所に同じ現象。彼方は車上、此方は徒歩、もとより一呼吸の見る口ながら、其も續けば自然眼につき、また今朝も……いつも遇ふ女、何處へ行くのやらと、何氣なく見過すに日數つもれば、ます〳〵目馴るゝにつけ、神以て戀にあらねど、此顏懷しくなり、其姿見ぬ朝は物足らぬやうに覺ゆるに、女も思はかはらず、男に睨まるゝはいやな物にて、顏を背くるか、傘を傾くるか、娘氣の一寸陰をすべきに、其をせず、我からも見るまでに知合ひぬ。半町距てゝも其車は目に入り、かの人と歩行風を見知り、やがて近處りし

―擦違ふ時、彼此見合ふのみにて二月ばかりが間は、別の所作もなかりしが、いよ／＼見知になれば、何時も希有な顏を合すもどうやら艶なく、また遇ひ惡くもなりしが、ある朝女よりまづ微笑をくれしに釣出されて、男も笑みかへせしより、例になりて、其後は微笑が挨拶となり、偏屈者も此は萬更わるい氣もせぬかして、行遇ふ時笑み、二三步して濠をむいて獨りまた笑みし事あり、此心中知り難し。

日曜の待詫しきは、自他ともにかはることなし。偏屈なりとも、六日勤めて一日の休業は、此日一刻千金、寸陰今日を惜みて餘りあり。なるほど今まではさもありしに、此日頃は、存外日曜も嬉しからず。思へば人間得手勝手にして、彼の笑顏を見られねば、餘所にては長かれと祈る大事の日を、つまらなく一間に籠り、早く暮れよと待明し、今日出勤の時刻平常とかはらぬに、悲しや見られねば、失望に氣を腐らし、其翌日はまた今日もかと、思の外なる首尾にて、嬉しや、無事なるお顏を見たり。

此次の月曜も見えられぬに少し不審を立てしが、其かと思ひつく事ありて其次を試みしに、果して前の此日に變らず。扨は休日なりけり。今まで斯る事はなかりしゆゑ、あつたら苦勞をしたり。我する苦勞ならばいかほどでもあれかし、まづ其人の身に恙なきこそ幸ひなれ。

此秋の神嘗の祭日、所用ありて(山下)を行きしに。鹿鳴館に奏樂聞え、鐵柵よりのぞけば、木陰に馬車人力車群集し、何ぞ催しありて今を最中と覺しき時刻なるに、門に懸る時、車一臺驅出し、車上の貴婦人は其人なり。此は變つた所で遇ひたり。互の不意に例の笑顔はなく、如何なるはずみか、馬手跳つて帽子に懸り、男が頭を下げて挨拶すれば、女はし後れしを詫ぶる思入にて、慇懃に會釋ありて其儘別れぬ。遇ふに定れる處にて、最初時宜しそゝくれては、中途から改るは異な物なれど、かうした思懸けぬ時には、かねての知己といふ氣になり、調子よく挨拶も爲得るものなり。此次の日からは、此迄の笑顔に稽首加はれば、大分親密

の度も增し、人目には嘸や格別の交際と見ゆべし。思へば我らしきの分際にて、かゝる高貴のしかも美しき婦人と挨拶する事、過分の名譽といふべし。この人の車走らす時は、過ぐる人は振返り、來懸るものは見迎ひ、誰が目も遁さぬ容色なれば、彼の人の馴々しく時宜するはどんな奴かと、其顏を見しものゝ、また我顏を見ぬはなきに、此年齡にていふもをかしけれど、羞かしくなりて遁ぐる如く早足にすれど、また思ひかへせば、われ尊からずしてかく尊き知己あるは、何にしても肩身は廣し。さりながら、彼の人は心憂く思はるべし。なる事ならば先方の耻辱にもならぬやうにと、此が一つ、二つには其人の手前少しは繕ひたく、まづハ、クラワツトも新形を好み、此冬の移替を機に、品はともかくもパンタルンを細くするなど、しをらしき心遣ひを覺え、今更色氣づきしかとの陰言はありながら、あれほどの偏屈これほどに和ぐも戀でこそあれ。良藥、毒藥、用法一つ。裏から見れば雜巾もかはることなし。

此心づかひ自ら先方へも通じて、今迄はさもなかりしに、此頃女は三日にあげず、羽織――小袖、取替へ、引替へ、何を着てもうつらぬはなく、なほ寐覺間のなきお出懸なるべきに、鬢の毛一筋亂さず、顏の化粧行屆きたるに、生やさしからぬ思の籠れるも知れて、嬉しさ身に染み、此分では萬更鮑の貝ではあるまじとはずみかけ、到底出來ぬ事なるべけれど其處が緣にてどうぞなるものならば、是非この人をといふ一念目色にあらはれ、昨日に增して心を籠めたる微笑をつくれば、女も意味ありげなる笑顏を見するにいよ〳〵のぼせ、なほ其心を試すべき工夫を案ずれどこれといふ思つきなく、二三週は夢のやうに過ぎけり。

大雨夜を籠めて朝にやまず。傘は二重張なるに、面に霧を吹きかけ、袖も背もしぶきに濡れわたる往來の人を見て、母は乘れといへど車は榮耀と、古外套の惜からぬを引かけ、戶棚に棄てし古帽子を、禍も三年たてばと打冠りて出でしが、此雨ゆゑ彼の人は休なるべし。よし休まずとも

母衣深ければ、中秋無月、不愉快！元氣薄くして道はかどらず。いつも此處らは車の見える邊と、見るに見えず。車は大分見ゆれど其らしきはなし。もしや見過せしか、我思ふほどにもあらば、母衣の中よりのぞく位の實意はあるべきにと、一町餘ゆくに一つ車に出遇ひたり。此雨に母衣もかけず。不思議と見れば、その車夫！其人！車の上なは。今朝はいつよりにこやかに、會釋も叮嚀に、此雨に定めて御難義なと、慰めたき風情たしかに見えたり。車には母衣のあるものを、かはつた物好と立留つて見返れば、五六間ゆくと車の中より、燃立つ色の襦袢の袖口にからまる手をさしのべ、母衣をふわとかけて車は急ぎぬ。扨は眞實我に劣らず、我顏見んとてしよぼ濡れたまふか。さほどの心中とは知らず、我愧かしき此扮裝、客嗇男などゝ愛想つかされなばと悔みしが、次の日少しもかはる事なかりし。

沖の石水に圓まり、鋒も磨ぎて針となる長の月日に、眞顏は笑み、笑顏は語るまでになれば、はや言葉を交さむと十日か廿日かの辛抱。言葉をかはす段にならば、何の苦もなくあとは此方の物。やれ宿願成就の緒、うれしや〳〵に胸逼り、世の中何となく愉快になり、課長の小言、愉快！同僚の毀言、愉快！母親の壁訴訟、愉快！森羅萬象愉快に輝き、愉快に響き、夏暖かに、冬涼しく、茶漬甘く、空財布重く、ユウトピア！今はユウトピアの王となりぬ。一時は苦しき事又は樂しからぬ事ありて、かくては此命捨つるに惜からずと、無法一徹に思つめし事もありしが、世間にて我よりも苦勞ありげにて、なほ生き長らへたく見ゆる人の數多くあるを、なぜ死にはせずして、一日長らへば、其だけのうい目を見ずにはおかれぬ物を、して見れば、他人は呼吸の通ふ限りは、苦勞に換へ

られぬものありてなるべきに、我には其物なければ、他人一倍命を麁略に思ひしなるべし。其物とは何ぞ。疑團の氷結、なるほど今解けたり。鈍しとや笑はれむ。此ほどまでの女人の名をいまだ知らず。住所も知らず。手懸りとなるべきは、車に三蓋松の紋あり。車夫の背にも此あり。偏屈ものゝ悲しさには、かゝる事は打明けてかうといふべき友なく、獨り心を傷め、いつかは車に尾いて行先を突留めむと、思ひ立ちしことなきにあらねど、勤仕の身にして何條かゝる事ゆゑに一日休むべきや。良心に恥かしくて止みしが、何時まで待つとも知るゝにあらずと一念飜りて、ある朝小陰に忍びてその車をやり過し、七八間行くも待たず、辻車に飛乘をして逐かけしが、引添ひて行かば見咎めらるべし、見え陰れに逐へば、其車夫の健足韋駄天にて、とても始終うまき距離を保ち難く、見失ひてけり。此に懲りずまた試みしに、結果はかはらず。其上に、途にて同僚の某に行過ひ、南無三と見ぬふりしても先方にも眼あり、見露

はされて役所に此沙汰ひろまり、今まで風一つ引かぬ男が一週に兩度の所勞屆それのみならず、いつもの徒歩がしかも其日に限り、車に乘つてゆきしは何の用事か知らねど、此頃のそぶりと照合せて不審の條々、奇怪々々と目を欹てらるゝに、此はならぬ、露見せば一大事と、根が小心謹直の男なれば、おぞけを振つて恐れいり、すまじき事と其後を愼みけり。念願これゆゑに空となれば、又思直して我儘にはならぬが緣なり、時節なり、急いて仕損せばと氣を長くし、毎日顏の見らるゝものを、今の不足ありてと心を叱れば、其場は素直に鎭れど、またむら／＼と不滿足萠して、たしかに其とは思へど、話し合うて見ぬ上は黑白知れ難し。何をいふにも目顏でする仕形話、此方は太陽の心にて丸い形をしても、先方は鏡と判ずるも知れず。もどかしや、戀か、戀でないか、一刀兩斷にと思へど、車夫といふ邪魔あれば、卒爾に聲もかけられず。此方と彼方と首肯きあふことは彼も知らざるべし。なれど、日毎行過ふ我はよく

知らむ。されば一度あやしめられては、其後車夫に目をつけられむかと是も心元なく、いかにもして車夫の手前あやしからぬ樣に、言葉をかける方もあれかし。考ふれどなかりき。望むは、かの人に怪我もなく穩かに車倒れ、車にも損所なくして、車夫にも傷つかず、暫時氣絶するやうな事あらば、しめたり！ 我驅寄りて介抱し、話しかけ、つい其わけをつけて退けむに、何の仔細もなし。其語氣にていよ〳〵我に御心なきに極らば其にてもよし。人知らねば恥にもならじ。是上策上分別。車倒れよ――靜に、轄ぬけよ、車夫躓けと、祈るに効なかりき。外に手段なければ、唯物いひたげなる風情を見すれば、女もまた應へたき樣子、人目をかぬるそぶり、可愛き人の志のほど哉。さほどの眞實あらばなど一日は車の榮曜をやめて、徒歩ならば首尾はあり、日頃の思を霽らさしてはたまはらぬ。先頃母衣に見せたる心中あらば、これしきに思ひつかざる理はなし。して見れば此戀もどうやら覺束なく思へど、なほ未練をひくは

その顔いよ〳〵情らしく、會釋のしぶり婀かしきに合點ゆかず、樣々に思過せば、惡推かはしらねど。世間にはある例の、器量優れて不便や啞娘。それでこそ物が言はれぬか。車を下りて首尾してくれぬは、もしや跛者ではあるまじきや。跛者はしらねど、啞者は樣子にてそれと辨別るものなり。かの人にさせる樣子はなければ、跛者か、疑はし。身分といひ、年頃といひ、器量といひ、默つて人の置くべきものならぬに、あゝした野邊の花、娘姿は因緣なくてかなふまじと、其か、あらぬかに一夜迷ひあかして、朝飯一膳味なしにかつこみ、風でも引きしかと不興な顏を母親に詰られ、啞者だと答へて膽を潰させ、出勤の道々も此分別に苦しみ、人に怒られ、犬に吼えられ、また遇うて見れば、此日の扮裝一際まばゆく、花に露そひしたるゝ愛嬌に、今更に消え〳〵となり、何の多愛もなく根性昨日に返り、跛者でなし、啞者でなし、無垢清淨圓滿具足の美人。啞者でなし、跛者でなし、たしかに啞者ではないぞ。跛者でも

ないぞ。十一月の二日は亡父の命日。母と妹と此男三人連にて、谷中天王寺へ参り、南無阿彌陀佛と花を手向けて戻り道、入口の休茶屋を出づる五人の一組、内に老女は母親らしく、若夫婦の外に女二人は從者なり。此男路傍の新しき石碑に目留り、立懸けて墓誌を讀むに、母も妹も其所に待つ間に、五人連近く來れば、こそ〳〵と妹の母に囁くは、あんな帶が欲しいの、下着が好いのと出來ない事のねだりなるべし。何の某撰と讀了り、行くべしと踏出せば、さりとは思ひがけぬ、其娘は紛ひもなきかの人なれど、人目を憚れば笑顏も目禮もせず、ほんの他人にて行違ひぬ。ふりむけば、細腰しな〳〵と練りゆく風情、車にては此好き所を見せずにしまふものを。何はともあれ、跛者でなきこそ、わが身蘇生りしほど頼もしけれ。母に向ひて、あの娘は何か話して居たりしかと尋ぬるに、母親いぶかり、顏を詠めて答へず、妹さしいで、御亭主と何やら話してゞといふ。啞でなきは好けれど、亭主の一句が口惜しくて顏を睨めぬ。

今思へば、片輪にて獨身なるこそ望ましけれ。滿足なる上に主ありと知れては、玉を掘出し他人に奪はれ……其には力づくもあれど此は手出しもならず。奧齒に無念を嚙み、熱涙を飮む辛さを、何ほど二人は知らぬとて、團子坂の菊盛、大人形がどうのかうのと、少しも我氣を知らず、餘に遠慮なさ過ぎるに腹立たしく、扨もぬしある身にして今までのしなしは、弄つて遊ぶ心か。女惡し。その男なほ惡し。

いちや〳〵物語る亭主の顏目前にちらつき、無念いよ〳〵骨髓に徹し、杖とりなほして、おのれ！と横薙にすれば、びゆうといふ音に、あれと妹飛除くに、はつと心附き、呵々と高笑に紛らせば、母親は何も言はずまた顏を詠めけり。

落花重ねて梢にのぼらず。

またとは遇ふべき心なけれど、これが言葉をかはす自由あらば、百萬遍の恨つらみをならべ、存分腹を癒やしてくれる所なれど、物いひかはさ

れぬ悲しさには、恨のいひやうなけれど、天地も照覧あれ、言はでやむべきか、と業を沸して來懸るに、轔々とかの車轟く音胸に響き、何とせむ——われ眞向になつて行過ぎなば、女は必ず曉りて、笑顔も念入にして媚ぶるを、此方はそしらぬ風にて、一昨日來いとすねて見せなば、張合ぬけて、嗜なきしかたと恨めしき様子を見するを、見てやらず。ずつと行過ぐる——これにて萬分が一の念霽しと。側目もふらず反りかへつて行過ぎながら、女はいかにと流眄に偸めば、かの人も眞向になり、唾さへ吐きかけぬ様子に目算外れ、むしやくしやと面白からず。此方にて立腹する道理こそあれ。かの人のつんとする所謂はなきにと、其心中少しも合點ゆかず。扨は陰せし夫を知られ、とても契るまじきと思切り、どうでならぬものならば、なま中物を思はむよりとの下心ありて、今朝から改めて昔の他人となりしか、學問せる女の雄々しさ、氣強さと一度は呆れけり。

其より一週ほどは朝々かはらず遇ひしが、かはりしは互の心中にて、我もさうした女に阿らむも男らしからず、と氣まづくはなりしが、また折々は未練の目づかひすれど、女は人形の如く更に情はなかりき。

其後幾朝か續けて其車を見ず。疾ひでもせしかと、流石に他人のやうにも思へず。遇へば不興な顏をしあひながらも、其すねた顏も見ぬになれば懷しく、萬更心に懸らぬでもなく二週間を過しぬ。

或日役所にて同僚ども物語りけるは、課長の數年前に亡くせし娘に妹あり。此姉を氣に染まざりし人に、推付けて嫁入らせしに、いやが高じて疾ひつき。それが原因にて身まかりたれば、此に懲りて、妹には好いたるものをと、今年廿歳まで氣に入るもののなかりしに、日毎學校の途に行遇ふ男あり。物もいはず單の見知越ながら、此ならばとの御心ありて、名も所も知らねば、さま〴〵手をまはす內、兄につれられ母とゝもに寺參詣せしに、此男の妻と連立ちたるを見かけ、世に望なく思沈みしが、數月

前ベルリンより歸りし、ドクトル丸山某は、課長の縁者にて、娘とは幼稚友だちの中にて、身分にも男振にもいひ分なければ、娘は左も右も此に得心して、結納は早や濟みたり。今年中には輿入と、外ながら聞くに胸躍り、あまり似た話と、此を寢言にまでいひ續けて過ぎしが、ある日退省の途より赤坂へまはりしに、三蓋松の紋つけたる油團かけし釣臺七つまで續きたり。紋に目留り、氣にかゝりて、其儘におかれず。用事を捨てゝ引添ひゆけば、氷川町の玄關いかめしき新宅にぞいりにける。何者かと門に立寄れば、無南三！（MARUYAMA）

（二十三年一月）

戀の蛻

(壹)

(都の花 自第五十號至第五十八號)(文藝倶樂部 第三卷第五編)

男は十八、女は十六、揃うて初心同志は、思ふ事の十分一が言はるゝものならば、と言語の可悶を恨みて、互に手出しなどは思ひも懸けず、水も岸も無き吉野川を隔てゝ情の目授こそ、戀も淺瀨に立てる一人は、横濱太田町に野田屋といへる賣込問屋の息子千之助、對手は軒を並ぶる同業松屋の娘に初といふ美形、隣同志と七八歲より睦じう遊びければ、此年紀になりても頻繁往來すれど、双方の親たち然しては氣遣はず、まだ〳〵子供にて許しぬ。並べて似合しき姿を見れば、いづれの親心も行末は同棲にと、折に觸れては言出すこともありながら、廉立てる取極にも及ばざれど、薄々は二人とも考付きて、その心算に愛憐は増すなりけり

神田の祭禮とて同區の親戚よりお初の招かれけるに、去年も一昨年も折角の志を無にしたれば、今年は是非に行け、母も久しぶりにて東京の山車が見たければ連行かむと言へど、物見遊山何にまれ、性來の出嫌にて孑然と一間に籠りて新聞小說などを讀むか、裁縫の對手なしに物寂なるを好めば、心に染まぬ事ながら、兩親の揃うて義理が濟まねばと勸めける上、女は女にて、此夏新しく絽の單衣の出來たるに、一度も着たる事なければ、其を着ても見まほしさに、明日は涼しき內にと一番汽車にて出京と定りける夕暮、一風呂汗を流して身修の薄化粧、紺中形の縮浴衣着て、亞米利加行の繪團扇片手に庭口の切戸を啓けて潜る時、結立の髮を氣にして、裏傳ひに隣家の庭の切戸を推せば、毎も納涼に來るお初を待ちて、錠を外したる扉のやさしく啓けば、千樣とは言はず姨樣と小聲に會釋して通りぬ。可厭味は有れど數寄を盡せる小庭は田舍源氏を宛然にて、時經ぬ打水に木の葉の露を含み、棗形の手水鉢には水漫に溢れて、

軒下の釣燈籠に火影の搖ぐも涼しく、植籠の隅に蚊の聲して、二人懸の竹床几に陶器の提爐に蚊遣の煉香獨薫りけるが、人の氣勢に奥より絹小絨の單衣着て、少し疾め足に竹簟を鳴らして出來るは千之助なり。お初を見るより溫顏に、今日の暑い事は、翁様も姨様もお變は無いかと言ふを、お初は團扇に頤を埋めながら流眄に見て笑へば、千之助は庭に下りて、此人は何が可笑いと、床几に懸れば、別に可笑い事は無けれど、番頭さん染みた挨拶をなさるゆゑ。はて十九にも成つて是式の挨拶を爲いでか。其様な生意氣な挨拶は私は嫌ひと、蚊遣火を中間に交互に腰を懸くれば、お初が扇ぐ團扇の風の餘に、千之助は背後を吹かせて、何處からか知らねど深切な風が來て涼しいことはと言へば、お初は其横顏を竊と覗きて、扇ぐ手を停むれば、千之助の振向く顏と顏を合せてほゝと笑ふ。最すこし扇ぎたまへ。此方が疲れなば我代らむ。必然代り給へと二つ三つ扇ぎて、千様草臥れましたと肩越に千之助の顏を覗けば、其様に骨惜みする

人には何も頼まぬと、お初が放さじと握る團扇を力まかせに奪取り、はた／＼と邪慳に扇ぐ手頭をしかと捉へて千様々々と喚べと、眞向に向きて知らぬ顔の頬を一寸銜けど、なほ物を言はぬば起上りて、後面より兩腋に手を入れ、こちよ／＼こちよ／＼、此方様はえゝ密男の子かいな。如是にこちよ／＼こちよ／＼と操れば、千之助煩悶してきやつと飛退き、母に見られなば叱らるべし、もう堪忍したまへと二人ともに床几に懸くれば、お初又窃と千之助の腋下を銜く。驚き劒退き、まだ惡戯するならば此所には居るまじと、縁側に昇らむとするを引留め、もう操らぬかはりに沈默て居ずと、何か雜談をしたまへ、何も言はずに如此して居るは面白からねば。さらば有興やうな、お樂みのそうな、後は寂寞やうな、詰らないやうな、我にも話さず掩してゐるやうな、聞いたら吃驚するやうな、雜談をして聞かすべきやといへば、お初膝を擦寄せ、裙に螫る蚊を拂ひながら、何卒其物語をして下され。話すは好けれど吃驚したまふ

な。可怖話かえ。否々〳〵。可怖はない話かえ。否々〳〵。あれ其ならば什麼な
る事ぞや。可怖やうな不可怖やうな……其はどうとも御勝手次第。其様
な談話なら聞きたくはござんせぬと向背になれば、千之助お初の島田髷
の新結なるに目を着け、其でこそ髪も結うたれ、白粧も傳けたれ。えつ
とお初振向けば、此度は千之助が向背になりて、獨語のやうに、什麼あ
るべきぞ今夜の長さは！　待しき明朝の一番汽車にて、東京は神田の伯
母様方へお客に行きて、明神様の祭禮は濟むとも、五日も十日も廿日も
一月も一年も逗留して、好所天を採擇むまでは此地へは歸るまじ。其様
に思うて見ればおもしろからぬ横濱なれど、少しは名殘も惜まれてと、
聞くよりお初きつと向直りて、千様何年の何日私が御所天を選擇に東京
へ行くと申しました。否、我とて此方様が東京へ行くと何時申しました。
此方がもしまた一日なりとも東京へ行かるゝやうな事あらば、何とて交
情好き我に褁みたまふべきや。今の話は今日の新聞にありし餘所の女子

の事と說遁れば。否、否其は虛言なり、早誰かゝら聞かれてか。おつしやる通り明朝は母樣に連れられて、神田の御祭禮拜に伯母樣の宿へ參ります。此暑氣といひ、行き度い事はなけれど、毎年招かるゝを外したれば。今年ばかりは是非一度は行かでは、他人の深切を無にするといふものと、父樣のお言葉ゆゑに進まぬながら參ります。今宵は一寸その事を話しに參りましたに、失言れて此方樣に先を越され、所思もない濡衣を被せられたは口惜うござんす。明日後明日は必定歸つて來るほどに、其樣に腹を立てたまはずと、平素のやうに温和してそして待つてゐて下されと。何なりと此方樣の好な物を土產に買うて參りませうほどに、かういふ物をと言うて下されと、手を取れば引込まされ、袂を牽けば振拂はれ、喃千樣と泣聲になりて縋れば、土產などは欲しくもない。東京などにあるほどの物が何とて此橫濱に無かるべき。御機嫌好うとばかり突然起つて奧へ入りける後影を、お初惘然と見送りけるが、やがて續いて座敷に

入れば、千之助の母一人中の間の緣に端居して煙草を薰らしけるを、見るより慇懃に挨拶すれば、應、ようお出なされまし。見事にお髮が出來ました。お峯殿か、島田は彼女の事なり。なるほど明日は神田の御祭禮へお詣なさるとの事、おたのしみでござんす。其所は疊の端、此所が涼しければと我對坐に革蒲團を敷きて此へ〳〵といふに、馴染ならば遠慮はなく一寸會釋して其所に坐れば、今し方まで千之助と庭にて納涼みたまひける樣子なりしが。千樣を怒らして床几に一人取殘され、淋しきゆゑに此處まで參りましたと、哀訴がましく語れば母親笑ひて、千奴は吾儘ものと、まだ十一二のやうに思うて、他人が見た所を立派なる若衆といふを聞かぬか。下女を呼びて未だかと問へば、大概宜しうございましよと立還りて、臺所より氷菓子の鑵を運び、匙玻璃盃等を取揃へて立つを女主人は呼留め、部屋へ行つて千之助に來やれと吩咐くれば、やがて來りてお初の姿を見るより、拗ねて母親に倚添うて坐れば、えゝ此暑熱

に少し離れてくれぬか。それ、此方の注文ゆゑ拵へましたれど多分には進げませぬぞ、惡疫流行の折からなれば。其にしては一杯の多量が辛しと、眞顔になつて嘲てば、母親も笑へばお初も笑ふ顔をじつと視て、何が其様に可笑うて笑ひたまふぞとぷり〳〵すれば、あゝ、まだ先刻の腹立は解けざりしものをと、日常は有情の眼元が此折は一層悸ろしく、身を窘めて俯視きぬ。千之助腹立を見せ貌にわざと默れるに含羞て、お初は母親にだに氣易く話懸くる便惡ければ、おのづから默りて氷菓子を味はへど、窮屈なる筐の中に身は跼蹐らるゝほど切なき思すれば、そこそこに仕舞うて歸らむとせしが、なほ見れば千之助の腹立顔、心の障碍となりて其儘にして行くべきにあらねば、試に物を言懸けゝるに、顔を背けて生返事の可憎。我に何罪科ありてと勃然としければ、流眄に怨念を籠め、母親に忍びて千之助の顔を凝視めながら、突然！　賢母様左様ならばと、立起る氣色に、千之助の心少し屈みて、お初様と呼懸けて逐來

るほどに、女子は勝利に乘りて氣剛く、聞かぬ風して足を早め、緣より履脱に落つるごとく降りて、急く儘に踏返す下駄を正す間はなし。千之助逐着きてまたお初樣と、肩頭に懸らむとする手に身を退り、跣足のまゝにあたふたと切戸を潛りて裏へ出づるを、なほ逐懸け――逐着き、何とも言はでお初の手頭を握り、何を其樣に。其も聞かずして振解き、我庭へ遁込みて內より切戸をぴしやりと立て、戶外の力に推開かれむは口惜と懸鐵を懸けぬ。拗ねては見たれど拍子からの所爲。憎くはあらぬ男子のさぞや望を失ひ、戶外に佇みて此心の無情を恨まむと、脆くも心折れて樣子は什麼。覗くべき戶の節孔塀の間隙を探せどあらざれば、呼吸を殺し耳を峙つる時、ほと〳〵と戶を打つ音胸に徹へて辛抱しがたく、手はおのづから懸鐵に行くを引戻して、餘り弱きも羞かしと思飜してなほ忍べば、少時ありての足音は隣家へ其人の歸るなり。戶を開きて見廻せば、果して誰の姿もなきに遽に慕はしくなりて、拔足に隣へ忍び、切

戸に立寄りてそつと推せば、開くに驚きて遁歸れば、引續きて來る足音、扨はと内に身を忍ばし、切戸閉めたれど推せば開くやうにして、此度はきつと和解の覺悟して待てど、觸りもせずに行きけり。希望外れて戸を開けば、脱遺きたる我庭下駄の入口に揃へたるに、土足にかゝるものを手づから持來りたまひつるかと、嬉しくもあれど氣の毒にもあり、勿體なくもありて其志の忝さに、お初も足には懸けず手に持ちながら、燈籠の影に明るき隣の軒端を、爪立つて詠むれど思は盡きず。

(二)

心を此所に遺して其朝、お初は母親と下女の民に傅かれ、神田多町なる伯母許に着けば、既已五六人の先客ありて家内は糞ゆるがごとし。伯母の喜悦は斜ならず、この一組は別座敷に請じて伯父ともぐ\に心を竭して懇待しけり。

戶外には樽御輿を舁く兒童のよつちよい――わつちよい濤を崩して一しきり過ぐれば、遠近にきこゆる飾屋臺の囃子に雜りて、拍子木の音、木遣の聲、耳に閑なく心の底へ闖入み、軀體もおのづから動搖くほどの閙しさ。お初も之に紛れて出窓より窓外の雜閙を眺めやり、往來少女の風俗に心を着くれば、櫛、簪、染色、縞柄、下駄までが、土地變れば變る流行、下賤なる箇所なきにあらねど、横濱はらしいやいやめん金剛石のごとく光りて思ふまゝの華美を行れば、潔白少女まで見やう見まねにおのづから

自墮落の風に染みて、あるまじき異樣の趣味を悦ぶ事の淺ましさと、每く々なる伯父の言詞思ひあたりて、さる事もやと我風俗のいやしく橫濱風たらんを氣遣ひ、側なる民に我姿を質ぬるはしをらし。

やがて來客一同に打揃ひ、家內も一群に表町の懇意なる店を借りて竹欄を結ひ、毛氈敷かせし棧敷に山車舞蹈を見物して、此夜は晝にもまして賑はしければ一泊して、明日は歸らむといふを、祭禮濟まば久しぶりにて演劇を見にゆくべし。此地に住めば何時にても見らるべきなれど、所天が知るとほりの出しぎらひなれば、かゝる機會ならでは見難ければ、お客樣を口實につかうては濟まねど是非に月伴うてと伯母がいふを、素氣なくも否まれず、抑留らるゝまゝに逗留りけるに、彼此繁忙みて伯母は其日に間なく、また一日と延ばして見物濟めば、淺草へ、上野へ、何所の何は橫濱にはなき美味物なればなどゝ釣られて、うか〳〵と四日逗留せしも、なほ放すまじき氣色なるを、お初の母が、宅は無人なれば唯

二日の間をもらうて參りたるものをなど〻百方に遁詞して、今日は午後に是非とも發足といふ午前、土産に何もなければ人形なりと買うて進せたしとて、伯母はお初を十間店へ伴ひぬ。

お初は好むま〻の函入の男人形を買うてもらうて還れば、まづ母には大概に見せ、民を小蔭に招きて見せけるに、唯可愛らしとばかり賞むるがお初氣に入らず、民は眼が無いのか、猶よく〳〵視やれといふ。何程熟視ても唯可愛らしきに相違なく、外に何ともいふべき詞なければ、この半袖の友染がどうも〳〵誠に好いと賞めて見れば、衣裳などは何にてもよし。人形の顏が誰やらに肖てゝはないか。其を言うて見よとあれば、民は左傾右斜凝視めて會得の微笑、まことに眼の邊が。それ〳〵、誰に肖てか。誰樣やら知らねどなるほど能う肖てをります。然うも心着かで見ましては肖たとも覺えませねど、視れば見るほど生寫。お前にも肖たと見ゆるか。見えます段ではござりませぬ。そんなら誰に？　まあ貴孃

こそ誰様に肖たとお思召します？　まあお前は？　貴孃は？　お前は？
貴孃は？　えゝもうそんならと民の手より人形を引取り、兩袖に抱へて
奧へ行きながら振向きて、民！　はい。千様に。

（三）

この四五日は賑はしきに心を奪はれ、千之助を忘るゝといふにはあらねど、絶えず思ふにもあらで過ぎたれど、汽車に乗れば川崎鶴見と横濱近くなるほどに、不快意ざりし別離を思出せば、此より歸りても何と詫びて再訪問るべきや。二日にて必ず歸らむといひしが、四日にもなりたればいよ〳〵此身の譎詐多きを疎まれて、如舊にならむは難事かるべし。まださるにても此人形は一目なりと見せ申したきものなり。まだ此外に上等品は腐るほどありて、其を伯母様は薦めたまひたれど、さしては良品らぬ人形を擇びたるも、眼元と口頭の千様に肖たる懷しさに。かほどまでに思ふ心を識りたまはむものならば、いかに腹立てたまひたりとも折れたまふべし。何はともあれ之を見せて、二なき心のほどを明して詫ぶるより術なし、大概はそれにて堪忍したまふべし。早く着け〳〵、神奈川

はまだか。逢うて腹立貌を見るは心苦けれど、また見ぬ内は心の濟まざるに腰動きて車室の床几に落着かず、氣は急くほど車輪の進行緩く、やう〳〵横濱へ着けば人力車を飛ばして歸宅るが否や、呼吸も繼敢へず土產を持ち、人形を抱へて例のごとく庭傳ひに、隣家の庭の切戶口までは容易に着きたれど、其扉は鐵壁、推すべき氣力なくて少時彳みぬ。其人に逢ふは異なもの、逢はぬは猶更心慊まず。さりながら此木戶を開けて入らん時、其人庭前の座敷に居らむものなれば何とすべき？　歸るにも歸られず、行くには行かれず、立留るとも埒は明かず、其手持無沙汰の矯羞さはいかならむ？　もし折よく下座敷には居で、われ坐に落着く頃出て來る都合にまはり合はさば何の事はなかるべし。南無不動樣、さうした都合にあれかしと胸悸々、目を瞑りて一思に切戶を開け、半身さしいれて緣口より座敷を覗へば、嬉しや〳〵其人の姿は見えずして、例の座敷に其人の母のみ見えたり。其人は店にか、二階にか、出て來ぬ

間を命といそ〳〵入室れば、お初樣今お歸宅か、大分ゆるりとしたる御逗留、嘸かしお面白い事と全文までは聞かず、千樣は？　と尋ぬれば、急に昨日大阪へ發足ました。え丶其樣な事をおつしやつてもよく存じてをります。お店か、お居間か。餘り突然の事なれば私とても夢のやうにて、今に心が迷うてをるものを、然う思ひたまふは無理ならねど、眞實大阪へ遣りました。空言とも疑ひたまはゞ店へなりと、居間へなりと行て見て念を霽したまへといへど、なか〳〵腑に落ちず、窃と立つて小蔭より店を窺けど姿はなし。二階へ昇りて見れば居間はさらりと整頓き、千之助が坐右雜具は何一箇影なきに呆れ惑ひ、墮つる如くばた〳〵と梯子を奔下り、賢母樣、眞實千樣は在宅なさらぬのか、あの居間の光景はと泣聲になりて見凝むる眼中に、淚を湛ふるしをらしき心情に誘はれ、千之助の母も多愛なく淚を催し、此方樣にもよう傳言てくれとくれ〳〵も頼むで發足ました。幼稚頃よりの好侶伴といひ、是から大分長年の別

離なれば、せめては一目見たかりしなるべし。そして私の家からは誰がお見送に參りました？　御多忙中をお父樣がわざ／＼停車場までお見送下されましたに、懷人濃き千之助なれば、汽笛の鳴るまで側を放さず、お父樣もまた車室の裡まで侍いて百方お世話をして下されました。扨は眞實に極りしか。そして千樣は何日お歸りなされます？　まだ昨日行たばかり、丸伊の本店へ商法見習とての奉公なれば三年は戻らぬつもり。え丶三年、三年とは！　なぜ電信なりと打つて告しては下さりませぬ？賢母樣あなたは餘りじや／＼。それも此方樣が我家子ならば知らぬ事、他家子を我子のやうにその樣な勝手がなるものぞ。ならぬというてならぬ事があるものぞ！　餘りな賢母樣と縋着きて戯欷ぐれば、持餘せど、我子を懷しがりて泣くほどの心を想へば、我子にも劣らぬ可愛さに涙を零して、そのやうに泣かれては折角紛れし私までが悲しくなる。電報で知らせざりしは私の過失、どのやうにも詫びませうから機嫌を復して、

さあ〳〵機嫌を復してとお初の背を搖りながら、我膝に俯向けし髮の繼を見て、我鬢梳を取りて梳上くれば、お初はしぶ〳〵顏を擡げて、あゝ三年といへば長い月日、其間一人何をして……このやうなる事あらむと蟲の知らせしにや、御祭禮へ行くは可厭で可厭でならざりしを、親父樣が何の彼のと喧しくいうて、斷つて行かぬといへば譴責るゝが可畏に行つたればこの始末。今度からは御祭禮なりと何なりともう東京へは行きませぬ。そんなら賢母樣衣服を更へてまた後刻ほどにと、萎れ〳〵て歸りぬ。

（四）

意中の人の姿は晝夜見徹しに見るに慊かずして、片時も見ざるに切なきこと渇きて水を思ふに似たり。情慾は人生の苦の樂、喜の憂、有つて是非、無くて善惡、物の利害の兩極端なるべし。

二つの心愛に粘りては、義利の力も智識の手も引放し難く、心の器は東西千里に離るゝとも、この粘着力の消ゆべきにあらず、消ゆべきにあらずしてなほ濃からむこと、水一滴だになければいよ／＼渇氣堪へざるに異らじ。

別離に名殘を惜まむとて餞別を世上の風習にして、孰れか此時に袂を牽き涙を餞けざるはなし。さりながら、今はと一刻に惜みて盡くべき名殘にあらず、愁思はなほ之に募りて執交はす手は石にならむまでもえは弛まじ。別れでならぬものならば知らぬ間にふいと別れ、此一時は逢うて

も逢はでも別れて後、肉を撈り腸を絞るに輕重なき苦愁に耐ふべき精根を、仇なる名殘の悲嘆に可惜費さしめむは、思へば無慈悲の至極なり。おのれを捨てゝも他の萬事に利からむを望むこそ、おのれが愛する方への惠贈なるべけれ。誰も之を知らざるにあらねど、執着の一念、熱、亂、狂すれば、前後も分別も忘れ果て、往人は此世を其日限りか何ぞのやうに未練に窘めば、送る人も亦同じやうに泣いても喚いても、別るゝものは終に別れけり。この寸時の苦思たしかに生命の五六年は短むるを、かくても滿足するものならばともあれ、なほ後々までの思出草となりて心を責むるぞかし。

去りにし夕の口論は睦まじき口論、折には戀の花なり。根もなき事は二人の心に何も遣らずして、明日逢ふおもしろ味ともなりたらむを、千之助はさぞやお初を一日なりと見まほしく、お初も一日なりと見まほしかりつらむをと、我等が推想るはおぞし。名殘をえせざりける二人は、そ

の無垢なる戀を神の嘉したまひて、心を入牢の苦艱に陷したまはざりしなるべし、さりとも心着かでお初は名殘の一日、後れけるに切歯して一生の口惜き事と、家へ還れば捨つるごとく衣裳を更へ、他人を見るも可厭、發言ふも可厭、いはるゝも可厭と、かの人形を抱へて二階の一室に籠りぬ。口惜や、無念は千様に逢はざりし事！　またというては三年も後の事とやら、朝夕逢ひにしものが一月逢はであるべきか、一年辛抱がなるべきか。ならでもせでは協はぬものならば我慢もすべけれど、其にはせめて別離際に存分逢うて、話したい事を話し置き、聞きたい事を聞いて置き、何やかや一寸は考へきれぬほど所懐は澤山にあるものを。我には似ざる千様の水臭さ、これほどの大事が足下から鳥の立つ様に起るべきか、以前から薄々相談ありて知りたまふべき理なるに、何とて此身には裹みたまひしぞ。もし又我出京たりし日に相談起りて昨日發足に定まりたらんには、電報なり端書なりとも知らせ次第飛んでも還りたらむ

に、さはなく我を他人にしてこつそり發足たまひたる後、あれしきの事を根に持ちて此身を袖にしたまひしか。あのまゝにて別れたれば心懸りになりて、かうしてある間も快意からずと、戀慕よりはさしあたりて別離に逢はざりしむしやくしやに、じれて、泣いて袂を嚙み、痒き髮に櫛を入れて引繫る毛をぐつと搔けば、脆くも櫛齒は三枚缺けたり。えゝと疊に打着くる側に臥かしたる人形の顏笑むがごとし。むづと抱上げて胸に押當て、徐にその面貌を視れば、畫ける睫毛の長きより黑漆の眼裏まで俏て俏て、丹花の唇の間に瓜核のやうなる前齒二枚見ゆるまで其人に寸分違はず、視れば視るほど別れし人の懷しく、その手を吮ひ、その顏に頰摩してせめてもの消愁、窓の簾を明けて隣家の庭を下瞰けば、竹床几もその所にありて履脫にその下駄のあるも恨めし。

（五）

お坊様の千之助、兩親の膝下を百五十里も離れむは、十八年來無經驗き可厭なる想の譬ふべきやうなし。悲しさ、心細さ、じめ〳〵腸に染入りて心消ゆるが如し。窓に臂懸けて汽車の走るまゝに、當分此地の見納めと眺めやる眼に、涙おのづと湧きて滴つるを人知れず拭へど、なほ愧かしき泣顏を帽子に掩し、革包に俯首きて、母親が病身なる事を思へば、わが留守の不慮も氣遣はしく、父親が勝負事好より破産の患を危み、火事ありて全燒ともならば、地震ありて壓死なば永劫このまゝの別離、われ一人生殘りていかなる憂目を見る事やらむ？　其を想へば父親に叱責るゝとも母親に怒らるゝとも、此奉公は廢止にして家に居たらむものを、さりとて商法の習はれぬ理はあるまじきにと、いよ〳〵此旅の悲しきを堪えぬ。箱根にて乘車せし少女が浴衣といひ年齡といひ、お初を思出の

種となりて、さりし夕涼の折からにすねし風釆、あまえし言葉、ものいふ唇頭、見る眼、笑顏、分明瞑想に浮びて、隣席なる女人の髮の油の匂ふも懷しく、百感胸に逼りて安眠を妨げ、東雲頃に車の停りしは名古屋なり。此處までは早や百里に幾しと越し方を見やれば、一念雲に入りて迷はれぬ。日に照られてうつら〳〵と斷續の夢の間に、正午少し過りて大阪に着けば、出迎の衆の言葉の訛可笑くも耳馴れざるに、旅愁增りて心細きこと限りなし。車に乘せられてせゝこましき小路の幾曲、見る物每に馴染なく、遇ふ士女の風俗とんと異れば、此中に交らふ事かと所恃なき身はいよ〳〵心細し。二十分も引廻されて丸伊の店に着きけり。我店とは年來の懇意といひ、親父より格別の依囑ありてや至極手厚き待遇にて、我を待受の風呂に入れば、名物の蒲鉾——鱧の碗などにて午餉を出し、旅疲を息めたまへとて、異な髮形の下女が麻夜被に空氣枕を持來り、御用もあらばと喚鈴を手近に置きて行くなど、不足なき待遇に、

翌日からはかうした身分にてはあるまじく、一寸逢ひし伴頭の眼光の可恐さ、意地惡げな丁稚あがりの面貌、隨分涙を呑むやうなる目にも遭ふべけれど、主人夫婦は物柔かなる性らしければなどゝ、行末を思煩ふまゝ、疲勞はあれど、就眠れぬ耳に、人の昇り來る足音に起返れば、梯子の口より顏だけ見せし丁稚は、ばた〳〵と下りゆきぬ。程なく主人先立にて、噂に聞きし二十歳になる子息と、其後に引添ひたるは娘粧なれど嫁ならむ。紹會はされてそれ〴〵挨拶濟み、二つ三つ談話はせしが初對面なれば、相互に手持無沙汰の坐憖くて直に暇乞しけり。同く商家の子息に生れ、財產とても對等なるに、此身は故鄕を離れ、衆中に氣兼し、身體に、樂なく、松坂木綿着て冷飯食ふに引替へ、此家の子息の運の好さは、さる苦を知らざるのみか、我お初のやうなる少女を女房にして……
…えゝ！………年季の三年、早く經つて還る事になれ！　停車塲まで歡迎に出て逢はむ時は、さぞや嬉しくて物はいはれず涙が先立つべし。お初

も物はいはで泣くべし。えゝ、還りたや！　還つて顔見む時の心はいかならむと空想に弄られて、鬱ぐやら笑むやら、やがて今の身に思かへせば、今日來たばかりに失望してまた枕に仆れしが、衝と起つて床間の提嚢を持來り、裏なる懐中物よりお初の寫眞を出し、孔の穿くほど視凝めて太息を洩しぬ。

奉公人姿となりて二三週を經るに、麁食も馴るれば砂にもあらで腹は膨れ、木綿の肌觸とて肩の剝けるにもあらねば、苦とも覺えず。毎日の用事も店に居ながら役の濟む事とて、何もかも思ひしよりは樂なれば、今の境涯にさしては不足の恨なきに、宿元の戀しさは一重づゝ引剝ぐ如く減りて　其減るほどに、増すはお初を戀慕の一念なり。

巧手が笛を吹けば、下手の歌口も感じて其調子の鳴出づるごとく、我より二歳上なる此家の息子にお初と同歳の嫁あり。奥の別座敷を居間にして、覗けば重簞笥の木地の新らしきさへ憎きに、晝間も用なければ息子

此裏に籠りて飯事のやうなる遊戯、千之助お氣入にて、茶が出來たりとて呼ばれ、菓子があるとて呼ばれ、その度々若夫婦の膠膝を見せつけらるゝ辛さ、撲つやら抓るやら、そんな事を散々見せし揚句は、妻の寢像の惡さは髻を枕にして、夜衣の袖から隻足出してと息子がいへば、千樣それは根據もない空事、人事よりはお前樣の朝寢坊、夜はゞ大方死なるゝ事などゝ聞かされて、思ある身は業が沸えて、寫眞抱いて寐ても及ぶ事にあらず。

（六）

事なく其年は暮れ、春も過ぎ夏も過ぎ秋も半の九月十二日、横濱よりの電報スグカヘレとあるに、仔細は知れねど一大事と暇乞うて歸港し、大田町に來て見れば淺ましき事？　店は入口の外格子戸を下して巡査の張番するは、誰が不養生からの虎列剌なるか。奉公人ならば遙々我を呼寄する事はあるまじ。母親か父親かと跳る胸に足もしどろに驅入れば、奥より母親は轉び出で、還家しかといふより早く、泣腫したる眼に涙を浮ぶるは心元なく、誰が病氣！　と問へばおろ〳〵聲にてお父樣が！　えヽ！　と荷物を投捨てヽ、一散に父親の居間へ行けば、後より母親驅來りて、昨日の明方お父樣は亡なられしぞと、二人とも仆れ重なりあうて、少時泣くより外はなかりき。やがて母親は涙の隙より、此外にも驚く事あれば、千、心をたしかに持つて聞きやれ。六年の秋から父樣は眼病を

疾はれ、はじめのほどは霞む〳〵とばかり、許漫にし給ひしが大事となり、後には雲懸りて物の色だに辨じかぬるに驚き、その歳末、東京駿河臺の井上病院へ入院したまひたる留守は、番頭の嘉七が萬事の支配。さりとは賴まれぬ人の心、僅少二月ばかりの間に手の屆くほど負債の額は六千圓。父樣やうやく快氣にて御歸宅の際に嘉七め身を匿しければ、店の名の借財とて父樣の負債となり、剩へ此宅まで抵當にいれたる始末に飼犬めに手を嚙まれたりと、父樣も私も其を聞きし時の無念は！……無念にては濟まねば、顚末を債主に話し、ゆるぎの附くやうにして一回復

さらぬだに苦勞性の父樣なれば、夜の目も合さぬ御心配。それゆゑに痛められし身體の、暑氣に中てられ、一日一晩無比の苦痛の中に、な……な……亡なられしぞ。逢ひたうございました。

父樣ゝ亡からむ身と知られてか、苦痛の中にて千といふ事を幾度いはれしか知れずといへば、堪らず聲を揚げて泣入るを、母も泣きながら泣く

なと制め、明日からの身の所置は！　家ぐるみ道具までも負債に取られ、其方の腕には何の藝はなし。二人活計の小商賣も掻集錢の覺束なけれど、今月中には此家を明けねばならぬ對談、さしあたりて何とする意ぞと問はれて、かうといふ分別の段か、暴風雨の沖に漂流ふ心地して思慮もなゝ手段もなく、唯可恐さ可怖さに途方に勞るゝを、母はかひながりていとゞ心細く、行末の苦勞死別離の悲嘆の中に式のごとく葬禮を濟ませければ、此家を立退の支度は、店のもの悉皆暇取りし中に、一人殘れる子飼の長藏、下女の鶴、母親、千之助、四人懸りにて大方形附きたる日暮千之助風呂あがりにて庭の床几に倚り、明日からの始末を案じて伊勢山の鐘腸に染み、つくゞゝ世の味氣なきにほろりと涙を滔せしが、奥へ行きて母親を慰めむと起上る足下に、からりと音して落ちたるものを拾上ぐれば、文を卷きたる簪なり。隣の二階を仰げば果して！　お初欄干より乘出して此方を覗きこみ、挨拶ぶりに小腰を屈むる姿を見れば、父親

が死去の不意に惑ひて、中絶えし戀慕の情むら／＼と湧き、飛立つばかりの懐しさにお初の方を物珍しげに仰ぎて、手招すれば首を掉り、其文を見よとの手摸に解いて見れば、留守中の戀しさ、歸宅の慶賀、父親病死の弔詞などつきませて七八行に書記し、お歸りと聞くより飛んでも行きたけれど、傳染病の後なればと、兩親彼此いうて出さねば、ゆるしてくれとの添書あり。千之助讀了りてお初の方を見上ぐれば、文の意を得たりやと尋ねがほに一寸首を傾くれば、千之助は首肯き、日は暮るゝ――談話はならず、告別の目授して入らむとすれば、お初あわたゞしく手招きして呼留め、返書をくれとの手摸に、奥へ行て、我思とても異らねば、同じく逢はざりし戀しさを認めて簪に結び、塀越に二階に投還せば、お初請取りてそのまゝ袂にいれ、月なき宵を相互に恨みつ、見えぬながらもゑみ／＼と顔を見合せて別れぬ。

荷物は此夕停車場へ運びて、東京芝金杉なる母が姉の方へ送り、明の日

暮には此地を去るに極め、其日の午後母子つれ立ちて、長年の懇意なればと隣家へ告別に行けば、夫婦しきりに言語を盡して氣毒がれど、心底は賴もしからぬに長座は心快らずと、直にも歸らむ母親の氣色に、お初一人切に抑留て還さねば、なほ語る事實とて憂人の胸には外に何かあるべき？いづれ不幸の物語に、お初淚を浮べて千之助を眄る眼には、千萬言もいふにいはれぬ實意溢るゝ如し。話したき事聞きたき事は山々なれど、親等の前とて憚多く、千之助には物いはぬ勝なれば、首尾して人なき所へ連れむものと、母親同志話す間にお初目授してすつと奥へ立てば、お庭の樣子が大分變りましたといふを機會に、千之助も續いて奥へ行き、梯子の側に隱れて手招するお初に尾いて二階へ昇るや否や、千樣と手を握られけるに女のも握り、お初樣と繫がりて坐れば、お初は擦寄り、此方樣はまた大阪へ行かるゝのか。もはや大阪へは行かねど東京へ引移りて、明日からは裏店住居の身上なれば、また當分逢ふ事はかなふまじく、

東京へ出らるゝ事もあらば立寄られよといひたけれど、來らるゝやうな住家ならねば……。何のそのやうな事を厭ふべき？　きつと尋ねますほどに、其節は泊つて行けと忘れずにいうて下され。お父様には亡なられ故郷は離れ、さぞや悲しき事なるべし。何やら澤山に逢はゞいはむと思ひし事あれど、胸充滿になりて……東京へ行きたまはゞいかなる商賣をしたまふぞ？　何を爲むにも資本といふほどの金なければ、當分は叔母の家に寄食りてと談話の中に、千樣々々と下女の呼聲は、母親の歸らむといふなるべしと、膝を立つればお初は其膝を壓へて、今日の日暮にお出立か。晝間は人目愧かしとて。それ〳〵此方樣に見せたい物がと、戸棚より箱入の人形を取出し、去年神田のお祭禮の時買うて戻つて、見せやうと思うたれば行違のお發足。熟視たまへ眼元が此方樣生寫、此眼元に肖たりとか。自分の事がいうてもらひたさに、人事にして謎を懸くるにやといへば、お初眞顏になりて、此方樣はいつも〳〵意地惡な曲つた

事ばかりと、柱なる小鏡を持來り、よく較べて背たか背ぬかを見たまへと、千之助の顔に人形をならべて前に鏡を映すれば、笑ひながら千之助は鏡を引取り、子供のやうなとお初を流眄れば、此方樣が留守中はその人形を朝夕眺め、此上にお菓子を供へてと、雛の三寶まで見せられけるに、千之助紙入の中なるお初の寫眞を出し、此身とて眞實に劣る所なし。寐るにも離さず肌身に添へてと、答へされ、お初人形の帶を解けば、中には千之助の寫眞。私とてもこの通りと、二葉の寫眞をならべて其前に人形を飾り、この子の名は千太郎と顔を見合ふ所へ、下女の民が忍びより、千樣と大聲に呼ばれて周章る二人の風情を笑ひながら、お母樣がおかへり遊ばします、といへば、お初は恨めしげに民を睨めて、わたしがおつれ申せば其方は先へ下りよといへど、なほ梯子の中段に立ちて、否、千樣はわたしがおつれ申します。えゝお下りといふに。其方の千樣かえ
—

（七）

千之助母子は橫濱を引拂うて、東京芝金杉なる叔母の家に同居して、二月許は何も爲で過ざけるが、坐して食へば山も空し、落魄の身は世に唯恃みなる貯金の少額なるが日々に減行くを、命の縮むほどに心細がり、なほ少金にても有る間に營業の道を見出さむと、千之助に何にてもあれ其方が此うと思はしき稼の業もあらば、まづ其に取着き、身の落着を定めて、ともかくもすべしとあれど、もとより商人の身なれば手に覺の職はなく、讀書は尋常の店ものなどより巧者なれど、取立てゝいふほどならねば、其とても出世の役に立たず、大阪までも奉公に行きて此ほど覺えたる商賣の道も、資本なければ今の間に合ひ難く、さりとて之をと口實て給料取るほどの活力もなければ途方に暮れ、私の量見はとかく〳〵と立派なる挨拶もしかねて、面目なげにさし俯向けば、母親は口にこそ

出さね、心中には効なかりて無念の涙を催せば、千之助認咎めてまた何を泣きたまふぞ、生者必滅會者定離、老少の不定なるはすべてこの世のならひなど〻、商人の知らでもよき坊主染みたる言を高慢に言立つるがいとゞ腹立たしく、此涙を知らぬか、父樣の卒去よりは生命長き其方が行末を案じ、且は男一匹でありながら、女愧かしき腐がひなさに呆れ、その樣に意氣地なく此母は生まざりしものをと、口惜さに泣く涙とは知らざるか。幼稚頃は玉のやうなる容貌にて、玄かも女子優りの氣立の柔娩、餘所の男子のやうに喧嘩せず惡戲せず、よく兩親の言葉を守りて素直なるを自慢にして、衆にも大方ならず譽められ、青年になりてもその氣象は、狂まず、浪費せず惡所へ近かず、親には溫順く、奉公人には情深く、家にのみ引籠りて、道樂は新聞雜誌等を好くに止まりしを、藤久の大旦那が、千之助は天保時代の生息子、または明治の當世の男としては、日本橋通の大店向の息子株ならば知らず、往來を素手にて行くも心

を緊めて行かざれば、何時の間にか眼玉を拔取らるゝといふ、寸の間も帶を寛むる事だにならざる土地に、平家の公達見るやうな此方の千之助は、とても此所の土合ふ種にあらねば、二代の太田屋は彼ではあるまじと平素語られしに違はず、合戰のやうなる今の世中に立交らひて、一人前の稼は覺束なし。之を思へば男子の氣烈からぬは、利かぬ辛子も同じ事にて物の用には立ち難し。色黒く、でく／＼肥り、喧嘩して人の子に傷付け、惡戯して世間に疎まれ、游泳に行きて苦勞を懸け、親の身は刻まるゝばかり世話は燒いても、成人の後山氣はありとも才動き、氣丈にて老人の杖となり、孝行といふほどにはなくとも、唯邪慳ならずば其外に慾なし。養育効ありといふものなれど、女子ではなし男子にして、根性に骨なく所志に心なく、二十になりても三十になりても、顋髭ある懷見ほど、賴もしからぬはなし。なまじひに子あればこそ、腑効なしと知りながらも、倚るべき氣は興れ、その氣興りて倚らむ氣力なければ、か

くよしなき苦勞を求めて、寢食の安からぬも此子あるゆゑなり。寧無く
ば無いにて諦め、おのれ一人は女子ながらも世は渡らるべし。
千之助も大阪へ遣る前までは、かほど意氣地なしにてもあらざりしが、
彼地に一年も居たりし裡に、言葉の訛鈍くなりしのみと思の外、根性ま
でも上方になりて、齒痒き事は我慢しても見て居がたく、なほ又父親亡
なりてよりいやが上に氣脫して世を儚み、見物聞事につけて無常を感ず
る樣子に、所詮此多端き世に打つて出で、足から懸けても人を倒し、利
ゆゑには骨肉をも蹂躪り、我一人だによくくばの可恐しき灘を、板子一枚
にて乘切る放れ業のなるべくもあらず。親一人を辛くも養ふ段か、自分
の身始末だにならで今に孩兒のやうなるは、とても希望なき性根なり。
我もし明日にも目を瞑りなば早速路頭に迷ひ、狹き心はそれしきに亂れ
て、亡せにし兩親の戀しさに首縊るか、身を投ぐるか、果なるべし。石
に噛着き、鐵を爬挘りても、男子と生れしからは男子らしくやつて退く

るなどの魂は氣もない事、男姿の女とは千の事なり。我は女子なれど身貧に育ち、亡せにし夫が三十の年、痩世帶に小包背負うて嫁入りけるが、夫は物事氣に懸けすぎる人なりしが、無一文より成上りて、濱の野田屋と外國にまで知られし身代になりしほどなれば、何所やらに腹太き所のあるをなほ我は小さく思ひ、腰を推すやうにして一六勝負の商賣を勸め、倶々に肝膽を碎きて二十餘年の間に人がましく仕出してのちは、全く手を退きて絹裏の袂裏に縮め、良人に万事を任せて口出しせず、神妙に内を守りて女房の役目一通の外はせざりければ、昔を知れる人はともあれ、野田屋と仕出してからの出入のもの、又は新參の店者まで此身を巴御前と知るはなく、長火鉢の前に一日坐りて、猫背を撫づるより外に能なき、お孃樣上りの內儀と思ひしこそ可笑けれ。

其眼も番頭の嘉七奴に拔かれて、かくの仕合せに落魄たるは、天の成せる不幸にして、此家の運とて是非なし。

女子には無用らしき我氣象の半分なりとも千之助にあるものならば、都の片陰に人の軒を借りて、箸の上下に頭を下げ、いひたくもなき追從いうて、爲たくもなき氣兼して、睡き時にも睡られぬ寄食の辛さは、一日生きむが爲に一年の壽命を縮むぞかし。人の餐餘に露命を繋ぐ食客は、掃溜の中に求食る犬猫よりも劣りて人の中なる人屑なり。其と知りながら世帶持つべき術なさに、我から好みて畜生に劣るも――愚痴をいふにはあらねど――千之助が氣力の無きゆゑなり。

不便なれども恩愛を斷ち、母子の緣切同樣にして、人馬に蹂れぬやう今間に始末してやり、彼が行末を安穩にして、二つには此母が老後の心を安んずべし。さりながらかほどなる我決心に感じて侮れども彼も男子！いかなる機會にて奮發して、足腰の思懸けなく立つ事もやと、親は親ほどありてなほ未練に牽かされ、まづ彼の心を試し見むと、二階へ呼寄せ

貯蓄の金も大方盡きて此後の身の處置なき旨を語り、親類とて長く此家にも寄り難ければ、我なほ老いたるにあらねば、奉公してなりと一人は身を得過すべければ、其方は書讀む事の好きなるを幸ひ、髮を剃りて行衣を纒ひ、後來は一寺の住持ともなりなむ後、此母を引取らむ心はなきかと問へば、千之助母親の顏をじつと視めて涙を浮べ、お前樣が下女奉公に出らるゝとか、何とか仕樣もあらむにその事ばかりは思止りたまへ。亡なられし父樣に對しても申譯なく、母樣にはまた大不孝に當りますゆゑとあるに、母は詰寄りて、私とても此年して下女奉公のしたき事は少しもなけれど、みなしやう事なしの分別なり。其方の才覺にて何とか仕樣ありて、二人揃うて暮さむ心規あらば其上の事はなけれど、その仕樣とはいかなる仕樣か、聞かせよといはれて辭塞がり、萎れし首をやうやう上げ、かねてお話しまをす如く腕一本にて食ふ術は知らず、少しは心得の商業も資本なければ其效なく、さしあたりて如此といふ事はなけれ

ど……。其挨拶は耳古りたり。仕樣なきを知ればこそ此母が日夜心を傷め、やうやく好智惠出して其方を寺へ入れ、坊樣ともなしたらばむづかしき世間を離れて、露ほどの苦勞なく、唯身を堅固に持ちて平素好める字を讀み經を習ひ、十年も辛抱せば軈て一寺の住職となりなむに、此母一人を安樂に過さむは家鷄一羽飼ふより易かるべし。今日より此世は思を絶ちて寺へ入れかし。其方が錦襴の袈裟衣らるゝ身分になるを、母は樂みに何方へなりと奉公に住込むべし、其までは足腰も達者にして其方が懸念にも及ぶまじければ、母の事よりはまづ其身の末々を思ひ、油斷なく一心に勉强して一日も早く住職にならむ事を心懸けよ。なまじひに浮世を戀うて活路ゆゑに僅少の利を爭ひ、衆に蹴仆されて憂目に遭はむよりは、和尙樣になりて心に懸る雲なく、朝夕に佛樣を拜みて亡き父樣に回向怠りなくば、草葉の蔭にてお心も安まりて成佛なさるべきに、母とても其方の身をお父樣に預くる心地して、苦勞の重荷を下すべしとあ

りければ、恃みし父の病死といひ、母を負ひて家を喪ひたるといひ、重ね〴〵の災難に弱き氣は折れ、狹き心は亂れ、味氣なき身を恨み續けて此世の懊惱き折から、ゑみ〴〵と此言葉膽に徹へて、母だに其心ならばと覺悟して、髮を剃り世を捨つるは願ひてもなき事なれど、母樣一人遺すが氣懸りゆゑ、仕樣もあらむと言うては見たれど、眞實お前樣が奉公を辛抱して、我が一人前になるを待つて下さるとのお心ならば、明朝からにても寺へ入るべし。

かくあらむと母は大方推したれど、その口から發ふを聞けば今更のやうに恃もしからぬ志に涙を催し、思ふに違はず、とても一旗擧ぐべき根性ならねば、いふがまゝに寺へ捨つるのほかなしと、此次第を姉夫婦に語れば、呆れ驚きて、千之助いかに氣力無しとて、坊主にせやうとは情ないにも節はあるもの。兩親もなく、親類もなき、捨子などならば知らず、片親ながら歴としたる此方といふものあり、尚又肉緣の此方が姉もあり、

繋がる縁の我まで控へてゐながら、千之助血氣盛にて何程の米食ふか知らねど、一人や二人が一年居たりとていくらが物ぞ。一生もながき事なればゆるりと好分別の出るまでは、ともかくも二階に窮屈を忍びたまへ。及ばずながら此胸にも思ふ所あればと、叔父が言葉も千之助の母は不承知なるに、叔母は涙ぐみて、今の青年に千もよく〳〵なればこそ心弱き事いふ心中の可憐さ。お前はまた我子が可愛うはないのか、千が坊樣になりたいなど〻假にもいふならば叱りても留むべきに、我口から發言して、希望なし勝效なしと一圖に捨つるとは、常にも似ぬ無勘辨の行止と、我子を惡樣にいはれしほど腹立て、千之助に寺へ入る事は思止れと言辭を盡して意見すれど、我愚鈍にしてこの年齢に及びて母一人を得過さず、このまゝに三十になるとも見込なければ、出家となりて身を立て、母親をともかくもせん量見。此上の心懸りは、母樣奉公に出むといはるれど、これまで水一桶汲みもなされざる身にして、下女のまねなどなるべくも

あらず、强ひてしたまはゞ身體をも傷めたまふべければ、何卒我身の立つまで此家に置きて役使うて下されと、聞くより叔母は聲を揚げて泣出し、かほどまでに親思の一人子をむざ〳〵坊主にしやうとのお前の心は木か石か、あの心根は不便ではないか、淚は無いかと疊を拍いて責むれど、母親は首を俛れて言葉なし。

二日ばかりも夫婦かはる〴〵搔口說きて、思留れと迫れども母親は少しも動かず、留めて下さるはお慈悲に似たれど、我子の爲にも私にも慈悲にあらず、此方等さへさほどに思召し下さるに、生みの親の心の中はいかばかりぞ。思ふ仔細もあれば此ばかりは留立して下されな。氣弱き千之助なれば、餘り四邊にてとやかういはるゝに心變り、可厭をいひ出しなば彼が一生苦勞の種を蒔くべしとて、決心磐石のごとく動くべき氣色なければ、つひには夫婦も口を閉ぢて、其方が子なれば何も其方まかせと手を退きければ、三日ほど經て母親千之助を橫濱へ同道し、亡夫が菩

提所なる淨正寺へ入れて、悄然と歸京しけり。

(八)

千之助淨正寺に入れば法名を日周と呼びて、昨日に變る姿を知れる人のいつしか見て、野田屋の末を憐まざるなし。

他人の思ふほどにはあらで千之助は結句今の身上を心安がり、亡父の回向に餘念なく、殊勝に讀經を習ひ師僧には忠實に仕へ、相弟子にやさしく交はる樣は、今の若年には珍しき性質、僧には似合しき人物、かならず辛抱爲遂げて行々はたしかに一ケ寺の住職ともなりなむと、師僧に賴もしがらるゝほど、母親は賴もしからず思ふべし。

野田屋の息子が僧となりて淨正寺に在るよし噂立てば、横濱の三美男と聞えし男の今迄は大家の若旦那にて、内氣の性として外出も稀少なれば、店に坐れるを近所の浮氣娘、藝妓、淫賣女など、わざ〳〵見に行きて徒に心を動かすも多かりければ、誰も彼もその出家姿を見むと、淨正寺の

裏手なる藥師へ參詣は附たりにて、餘所ながら垣間見て音羽屋の延命院日當生寫と、一人がいひ出せしより此噂高くなりて、千之助の昔姿を知らざる者まで藥師へ參詣して、美僧の御影を拜まむと、門前の賑ひを師僧訝しみて、遽に裏の藥師の流行し始めたるは、何ぞ一廉の利益ばしありてか。誰にもあれ、さる物語を聞きたるものはなきか、と尋ねけるに、藥師如來よりは日周といふ活佛の御利益ゆゑに、藥師までが連累の繁昌とあるに師僧眉を顰め、それこそ日周が修行の大障礙なれ。凡そ出家の髮を下す事、髮は人間の飾なれば、まづ飾を拂うて塵世の慾念を斷たむとの意なるに、日周は容顏美麗にしてまことに女人などの好きぬる風俗、災害此より萠し、道心此に由つて破れむは往古より例ある事なり。彼は今捨世の志深くして一三昧に佛道に入らむを願ふに似たれど、なほ年少く學淺ければ其心枯木死灰の如からず、風暖ければ忽ち花を着け、火來らばまた燃ゆべき勢あるに、脂粉の匂、綺羅の色、日々に耳目を侵す時

は、自然念慮亂れて俗に還るべし。謹みてもなほ畏るべき事なりとて、日周に仔細を語り、奧まりたる一室に入れて晝は端近く出さゞれば、美僧信心の輩失望して、一週間ばかりにして人足全く絶え、藥師堂には鰐口の聲寂び、淨正寺の裏には松風颯々としてまた舊時に還りぬ。

*　*　*　*　*

松屋の下女の民は此事を聞着け、お初に語れど露ばかりも信せず、芝金杉の叔母樣の家に同居して、私にもし出京する事もあれば、きつと尋ねよとまでいはれしものを、二月も經つか經たぬに此濱へ歸られて淨正寺へ入りたまひしなどゝは、演劇にもあるまじく思懸けざる事なり。ならるゝものに事を缺きて出家などになりたまふ理なく、また此地へ來たまひたるならば葉書一枚遣はしたまふまでもなく、自身に尋ねたまはむは知れたる事なるに、其は大方人違ひといへば、たしかに見たりといふ女より聞きたれば萬更の空言にもあらじと口論の末は、お民が見に行くに

極まりて、淨正寺へ行きし頃は、男女の出盛の最中にて、本堂にて顏を見、目禮までして手柄顏に歸來り、圓頂の色から恰好から、白木綿の疊帶を前挿にして、鼠木綿の布子着て珠數を手首に懸け、お佛器に何やら盛りてこの樣な風して御佛壇にお供へなされてと、身振までして見たれりし委細を語れば、お初は眼色を變へて擦寄り〳〵、そして私への御傳言は何とありしぞ、早く聞かせてと急込めば、お民は當惑して、人中ゆゑつひお話もいたしませず、一寸の御挨拶ばかりにてお別れまをしましたといへば、お初は氣色を損じ、我心も知らで氣の利かぬ、大方千樣のお顏に見惚れて物言ふ事も遺失しならむ？　さもなくてはいかに人中なりとて、懇意の間にて物いふ機會のなかるべきやと詰懸れば、お民はいよ〳〵當惑の手を揉み、存じも懸けぬ事をおつしやります。此方樣の大事のお方なれば、千樣も御主人同樣に思うてをりまするに、無躾がましくお顏ばかり見てをる事のなるべきや。また人中とて話してならぬ事

はあらじとのお言葉なれど、舊時と違ひし千樣の今のお身上、女人は禁物の御出家樣なれば、もし物など申懸けて其事お住持の耳にも入らば、千樣は私の疎忽ゆゑにお譴責を受け、お身に大事もやと思へばこそ御遠慮をもまをしましたれ。なほまた人中にて私のやうなるお多福に言葉を懸けられむは先樣の御迷惑と、何事も承知の上にての所爲。千樣彼所に居たまふ事知れたる上は、また何時にても首尾はあらむほどに、その樣に急きたまはずと私にお委せなされましと、理ある言葉にお初も其場は納得せしが、それからはお民の顏を見る度に此事をいひ續け、卽夜に書いたる一通の手紙をさしつけ、之を今日にも、屆けてとせがまるゝを、明日は〳〵と切脫けたれど、つひには主命を聞かぬとて一方ならず腹立て、何いひ懸けても返事せぬまでにあたりて、用事もわざと外の下女に吩咐けて、お民を寄附けざるをやう〳〵詫びて機嫌を回復し、他出の用事を幸ひに迂廻して淨正寺に到れば、此一日前に活佛の一條師僧に知れ

て、日周は閉居の折からなれば、若き女の尋來りたるに、弟子共は目を峙てゝ扨こそと袂を牽合ひ、けんもほろゝの挨拶にて會はさむともせざりければ、手紙も其の人の手には落ちずして、飜然お身の難儀の種と、太田町の松屋より用事ありて、民といふもののお使に參りしと傳へたまへと言遺きて出でしが、面會もせず手紙も屆けずして、歸宅りたりなどゝいはゞ、お孃樣の道理解らず、無理を言懸け、打腹立ちたまひて、また不興を蒙る事と心を傷めながら歸れば、案のごとく理も非も分らず腹立て、其手紙を受取るが否や、寸斷々々に引裂き嚙裂き、お前は賴まぬ、明日にも自身に行きてきつと逢うて來る。此後は何用もお前には賴まぬと、つと立つて部屋を出けるに、お民も所爲方なくて女部屋へ退きぬ。

お初は自身行くに決心したれど、家を出づべき方法なきに苦しみ、逸る心を抑へて一日二日と過ぐるほど、なほ飛立つ思のみして、好智惠も出でざるに、獨思案に暮るゝを見てお民は勸氣の免り時と、一朝お初に、

今日は野毛山の招魂祭なれば午後からお暇を乞うて外出なされまし。私がお伴いたしまして淨正寺へ御案内いたしましやうと勸むれば、用は賴まぬといひし口上も忘れてお初は機嫌好く、何所へ行くとて私一人にては出難ければ、其方が同伴といへば母樣も安心して御承知なさるゝに相違なしと、母に尋ぬれば許可が出て、野毛山は餘所目にも見ず淨正寺へ急ぎ、門外にお初を待たせてお民一人玄關へ行けば、此前二三人見えし弟子僧は誰も見えず、火鉢の側なる机の下には蜜柑皮を取散らし、火も灰になりたるは、前より長く此所に人の居らざりし樣子なり。

女人の聲にて取次を賴み、よしなき邪魔の入らむは口惜し。寺男などもや居らば千之助の事を尋ねむと、徐と裏手へ廻れば、垣根に小さき山茶花を栽うる出家の後姿はどうやら千樣と、なほ忍寄りて斜に横顏を覗へば千樣！と、力を籠めたる忍聲に日周驚きて顧視き、お民殿。千樣！お一人か。玄關に誰も居らざりしかと悉皆まで聞かず、飛ぶが如くに引

還してお初を伴來り、四邊へ氣兼してきよと〳〵する日周の傍へ推遣れば、千様！ といひさま縋着かれて日周も胸を轟かせ、お初様無事か。お前も御無事でと顏を見合ふ眼に涙ぞ浮びける。日周お初の手を袂の陰に握りながら、お民殿玄關に誰も居らざりしか。誰も見えざりしが何時人の來らむも計り難ければ、表へ行て私が番してをりますほどに、ゆるりとお話をなされましと外せば、後には人目の關なく、お初はなほ寄添ひて、いかなる仔細ありてか知らねど、淺ましき此姿は何事ぞ。いかに思うても焦れても、もはや女房にはなられぬお前の身上、ようも思切つて情なき事して下されたと、怨言を聞きて日周涙を拭ひ、我とても忘るゝ時なく焦るれば、此方を女房に持ちたきは山々なれど、親にも見放されたる意氣地なし、世に立ちて活計の才氣なさに出家して、甘い物も食はず綺麗なる衣も着ず、日々に香花の世話ばかりして、末は山寺へなりと引籠り、夜明の鐘撞鳴して、戀知らずにて一生を果さむ身を、不便と

思うて下されと泣けば、お初は顔も得上げず咽び入りて、お前はいふやうもなき不實な男、私が思ふ半分も思ふならば、誰が何といふとも出家などには得成りたまふまじきに、私を可愛々々とは口頭ばかりにて、女房に持ちたくも何ともなければこそ斯した身になりたれ。眞實私が可愛くて、女房にせむとの心ならば、さあ昔時の姿に還つて下され、え丶還られぬのは此身が可愛ないゆゑと、日周が指を兩手に握緊めて身を顫はせば、一度佛門に入りたるからは所詮還俗はなりがたし。何事もこれまでの緣と諦め、此方も今年は十七、早く良家へ嫁入して、兩親に安心さすが孝行なり。不肯々々と泣入れば、此間は離別までも別れて後までも、早く身を立て一軒の主人となりて此方を迎へ、年月の思を霽さむと、其事ばかり夢に見てまで樂みし効もなく、不圖せし事より出家の心起りて、此姿となりたる上は夫婦とならむ希望なし。幸ひに枕を替せし事なければなほ思切る瀨もあるべし。此方を飽くの厭ふのといふにあらず、今も

語りし事實なれば、不實と我身を恨むで下さるな。かゝる姿となりてもなほ心を變へず、この樣にわざ〳〵尋ねて怨言までいうて下さる心中はなか〳〵仇には思はず。餘りの歡喜に胸塞がりて禮をいふべき言葉も出ねど、歡涙がこのやうにと袖に掩うて顏を背くれば、お初は聲を絞り出して、夫婦となられぬものならばなられぬとて濟むものを、良家へ嫁入せよとは誰にいはるゝ言ぞ、外へ嫁入したくばお前に心配は懸けませぬ。幼稚より良人と思ひこみたるお前に添へずば、私は他人の女房にはなりませぬ、一生寡婦暮しの覺悟にて、お前が山寺へ行かるゝなら、私も其隣に家を持つて、何程嫌はれても此方からは少しも嫌はずお側は離れぬ覺悟と、思入りたる言葉に日周も持餘して、今はいかに說諭すとも聞入れじと、離るの離れぬのといふ事はわざといはずして、まだ〳〵話したき事は數あれど、此所は戶外にてゆるりと話し難く、家へ入れたけれど次間に師僧の居たまへば其も成らず。四五日內に所用ありて、他出の次

手あれば、此方の家へ行きて委細を語るべし。人に見尤められなば大事に及ばむほどに、今の内に早く歸りたまへと諭せば、近日は我家へ來むといふを頼みにして、名殘惜氣に日周の顏を眺め、その栽ゑたりし山茶花を一輪折らせて髮へ插し、手を牽かれて表まで送られ、なほ離れがたなくや日周が手を放さぬをお民に引分けられて、悄々と歸り行く後影をじつと見入れる日周が後に、小坊主が密告けるよ。

出家にして浮世に希望なき身を省み、戀は心底に焚えながら氣剛くお初を還せしものゝ、顏を見ては人の物にさるゝも惜く、心を聞けば其情も棄てがたさに、愛着の羈絆太りて日周が了簡昨日に變り、一思に還俗してのけ、彼を妻に持たむの決心もなければ振棄て難く、唯わけもなくもだ〳〵と戀しさに思亂れ、握られし手頭になほ痒所あるが如く、兎角に忘れかねて、此方より今一度の逢瀨を明日にもと望ましき心逸りて矢も楯もたまらねば、なほの事お初は、民を對手に首尾の折の物語ばかりして、嬉しかりし事は繰返し、無情かりし事は繰返し、また逢はむ事を只管頼めど、繁々の外出は露顯の端緒、今少時日を隔きて好機會を見合せ、請合うてお逢はせ申すべしとて早急の相談に乘らねば、お初が胸には逢ひたさ見たさの遣る瀨なさに、家内のものゝ目を忍びて庭口から遁走し、

淨正寺へ單身行きて民がせし通りに玄關へ行けば、障子を立切りて中に書讀む聲は幼稚なり。樣子を氣取られて取次には好きものと、小聲に案內すれば應と障子を開けたるは、日周に口留の大福買はせし小坊主なり、日周樣內にかと問へば、一時頃所用ありて出られ、今にも還らるべしと答ふるに、何所へ行かれたるにやと問へど其は知らずといふ。人目を憚る身の歸來を待つに待たれず、さればとてやう／＼の思にて脫けて來りしものを、此儘に歸らむも無念と猶豫しが、ともかくも會うて行かずは胸の痞治まらず、此所にて待つは見る目もうるさし、門外にてと心を定めて門を出でしが、此間の話に四五日中には我方を尋ねむとの事なりしが、もしや我家へと思へば其も心元なく、急足に引還す途にてはたと出會ひぬ。單身にて何所へと問はれ、今お寺へ尋ねしにお他出と聞き、先日のお言葉もあれば私の家へかとも思うて、お待ちまをさで還る所といへば、日周合點行かぬ顏して、お民殿をも伴れず只一人とはつひになき

事。逢ひたさに窃と脱けて來ました。話したい事あれば何所へなりとお前の識つた家へ伴れて行て下されといふに、日周もまたとはあるまじき首尾を見遁さむも口惜く、胸には積る話もあり、大旱に雨を望むばかりに戀しかりし顏もゆるりと見たさに、二人が少時の隱家もがなと思案すれど、世間狹き男なれば、女人を伴込むべき宿もなく、若き男女の連立つは、夫婦にしても人目に懸り易きに、法衣着て頭顱の圓き身はいとゞ目立ち、此所は往來稀なる所なれど、なほ來る人行く人に顧視らるゝ度に油汗流れて長くは立話もならず。此所ぞと思當てゝ行く家もなけれど、さればとて別れがたさにお初を伴れて、道路の兩側に立分れ、相互に知らぬ顏して人目を避けて行くに、かねて話説に聞きし怪しげなる小料理屋など目には入れど、勝手知らねば可恐しくて得入らず。かくては何所にも行所なし、思切つて入らむにも、日周青道心の身の懷中に五十錢の用意もなければ、此はと當惑して慚かしながらお初に語れば、帶の間よ

り繻珍の可愛らしき紙入を出して日周の袂へ推入れ、其裏に三圓餘あればば好様にしてといふにやゝ心丈夫になりて、さらば今過ぎし料理屋にせむと立戻りて、門口から恐る〳〵家内を覗へば、中に女中の居るは羞かしとお初が足の進まざるに、日周も亦憶せる心に强ひては勸めずして此家を去り、なまじひに茶屋・小屋は曠がましければ、彼所の小路に行燈の見ゆる汁粉屋は。お初肯かず。此二つ先の横町に小綺麗なる蕎麥屋ありて上流客も行き、離座敷もあり、今頃は客もなかるべきにその蕎麥屋はといへば、外に行く所なければ其家にても苦しからずとの言葉に、其家と決めて横町の曲角にて端なく師僧に會へば、日周面目を失ひて赫と顏を赧めながら慇懃に一禮すれば、師僧お初を尻眼に懸けて、日周今歸宅か、同道すべしとあるに否とはいへず、お初に配目して師僧の蹤に跟いて行くを、惘然と佇みてお初は呆れて顏を見護りけり。

師僧日周を伴還れば黄昏に近し。忠實なる老僧に何やら囁きて日周を渡

し、何氣なく居室へ入りぬ。師の譴責にや遭はむ？　老僧の折檻にや遭はむ？　と氣もそゞろに身をちゞめて机の前に坐り、經を披けど字は眼に入らずして其事のみ可恐しく、可恐しき中にお初の眞實はしみ〴〵と嬉しく、心盡してやう〳〵逢ひながら本意なかりし離別をさぞやと、物足らざる我思に比べて女子の心を察し、明日にもまた首尾を偸まむ氣のみ躍るばかり逸れば、萬慮之が爲に消えて胸は一面戀火に焚え、切なきにあらず苦しきにあらず、切なきにも似、苦しきにも似て、身も世もあらず、悶えけるが、九時頃に老僧來りて師僧が召さるゝと傳へぬ。

罪は今日の事！　尋常の譴責または折檻ならばいかやうにも辛抱すべし唯可恐しきは破戒の科によりて此寺を放逐せむなどゝ申渡されなば、此寺より外に身の置所なしとて入れられたる寺を出されて、のめ〳〵と還るべき家なく、あの氣の母樣なればいよ〳〵愛想盡かされて、親子の緣切るなどゝいはれむには死ぬより外に道なしと、心細く覺えて顏色土の

ごとく、おど／＼して師僧の面前に危坐れば、溫和なる面色は常に異る所なく、物柔に出家たるべきものゝ心得を諭して、今日伴れし女子はいかなる俗緣のものか知らず、行状堅固なる其方なれば女犯の不品行などあるべしとは假初にも疑ふにはあらねど、出家の身にしては殊に衆の思はくを畏れて、若き女子には近寄るまじき者ぞ。此港は土地狹くして寺の數もあらざる上、其方が太田町の野田屋の子息なる事は此所に誰知らざるものもなければ、淫猥なる事あらざるにもせよ、女人との同道が人目に入らば、在俗の舊時は堅氣なりし千之助も、出家となりて飜然あの身持と、後指を指されむは其方一人が名折のみにあらず、亡くなられし親父樣の恥辱、東京の母御の苦勞、また其方を預る師僧の我が世間へ對する不面目なれば、愚鈍なる其方にあらねば、此道理を慮へて向後は其身を愼みくれよ。古參の弟子はあのやうにあれど、我は特別其方が行末に希望を繫け、人先に一ヶ寺の住職に取立てゝ、母御の喜ばるゝ顏も見

たしと、日夜思懸くる實意を酌み、專念に修行して早く我力にもなれかしと、情を含みて理を分けたる意見に、日周愧入りて面を得上げず、不心得の段々を詫びて退れば、明日よりは何となく老僧の監督嚴しく、一寸の出入にも目を峙て、我へ下命るべしと思はしき用事まで、他出とあれば他のものが勤め、言はず語らずの禁足なり。

推籠は二週日餘に及びて免りざれば、さなくも氣は結ぼれて心は腐るものなるに、先夜の師僧の意見も其場は膽に徹へけれど、更に戀は心を責めて〳〵晝夜の差別なし。

大阪に在りし頃は一年も遇はざりしに、起つても居てもかく辛抱ならざるほどにはなかりしものを、此寺へ來てわづか二度の首尾より慾火熾に炎を立てゝ情思を炙ること太劇しく、他人は睡るに睡られず、机に倚りてお初の寫眞を眺め、それも憂くなりて手枕に仆れ、現に思ふ事とてはお初の可憐さ、窮命の身の煩悶さ、この戀の苦惱さ、其顏の見たさ、約

めていへば戀の一字が、百態に形を變へて日周の眼前に現れ、思に絡まり、玩弄物にされて獨り悶え苦しみしが、ふら〱と心浮きて起上り、卷紙を延べ筆を走らせてお初への手紙、屆けむ心にもあらで此頃の胸の切なさを我知らず書いて見れば、平素の遲筆にも似ず、いさゝかの案文もせずして、長さ六尺ばかりの卷紙に端の端まで書詰めても、なほいひ度き事遺りけるに、かゝる事も戀に惱みてやる瀨なき折からの心ゆかしうなりておもしろさに、手文庫の裏なる半紙を出して後を書續くれば、卷きたる絲を繰る如くする〱と、筆の留度なく半帖ばかりも書いて卷紙と倶に一通に封じ、印紙だに張らば屆かむばかりに封書して、一時の戯事ながら折角この樣に出來たるものを、引裂かむも惜く覺えて肌に添へ、其上より堅く腹卷して臥戸へ入りしは、いかなる心か知らねど戀は人を愚癡にするものなりけり。

弟子僧の某晨起にて、其朝も例のごとく第一に起出でけるに、日周は夜

熱に夜衣を踏脫き、腰より下へわづかに懸けて、寐衣の胸あらはに眠れるに、腹卷の下より書狀の端の出でたるを認めて、寐るまでも肌に着くるはいかに大事の文かと、秘す物は見たさに徐と引出せば、お初へ宛てたる狀なり。扨はかね〴〵聞及ぶ情婦の一條、露顯してかく窮命に遭ひながら、なほ思切り難くてかく竊に文通するものならむ。告口する奴等に見咎められなば、重ねての事とて此度は不便なる目に遭ふべし。老少僧俗に論なく、人と生れては誰か戀に繫りては之に泥まざるべき、一命を捨つるものだにあるものをと、やさしくも哀憐を催し、舊のごとく腹卷の中へ人目に懸らざるやうに推籠みおかむとする所へ、監督の老僧來合せ、手に持てるは何ぞと嚴しく糺され、陳ずるよしなくて日周が懷中より獲たりとかの書狀を出せば、老僧請取りて、此事人に語るなと緘口して師僧の部屋へ持行きぬ。

驚破、一大事！　我より起らむ日周が難義と、某は頻に氣を揉みけれど

回復のつくべきにあらねば深く裹みて日周にも語らずして、彼がいよいよといふ瀬戸際には、其身を爲くぢりても謝罪を入れて、見事此過失を償はむと心を定めぬ。

日周目覺まして腹卷の中を探れど、昨夜たしかに入れし手紙なければ、周章惑ひて夜衣を振ひ、蒲團を覆し、血眼になりて穿鑿する樣は、某傍に見てたまらぬほど氣毒なれど、仔細を打明けて今我過失を詫びなば、心狹き男なれば只管恨まれむも辛しと、此躰を見るが可厭に戸外へ出でけるに、さりとも知らねば日周は涙ぐみて一生懸命に、隣の床の下まで探れども見當らざれば、胸を明けてゐたりしといひ、腹卷の緩みたるといひ、扨は晨起の老僧巡視などに來りて持行きたりしならむと想へば、戲事に書きしものなれど封じて番地から宛名まで記したれば、辨解は立ずして此度は重き罰を食ひ、いよ〳〵放逐に極まりたり。あれまでに言はれし師僧に對はさむ顏もなければ、今の間に此所を遁げたけれど、母

親の許へは還り難し。されどもやさしき叔母様夫婦に頼まば兎も角もならむと、お初より先頃預りたる紙入を懐中に捻込み、井戸端へ盥嗽に行く風して抜出さむとせしに、かの某認めて走來り、此方は血相變へて何所へ行かるゝか？　仔細はいへねど不始末ありて此寺に居られぬ身なれば、此手を放してと百搔を放さず、不始末とは手紙の事かと星を刺されて日周呼吸の止るばかり驚き、いかにして其を知りたまふぞとあるに、今は裹まじと今朝の事詳細に語れば、師僧の手へ其文渡りし事と極まるほど可恐しく、此上はなほ以て一時も留り難ければ、人目に懸らぬ間に放して遁したまへと懋るを、これ皆わが落度なれば罪は我身に被て、此方には科なしに濟さむ程に、心の餘りに小さきも損なり。何事も我に委せて知らぬ顔したまへといへど、日周なか／＼肯かず、此方が告口せしといふにあらず、我不用心からの災難なれば、露ほども罪なき此方に迷惑を懸け、おのれはぬけ／＼として在らるべき。とても戀に腐りたる心

の天晴なる出家には成遂げまじき日周、唯このまゝに見免したまへ。なまじひに不便を懸けたまひて、辯護立して此方が潔白の身に傷着け、出世の障礙せむは忍びざる所なり。慈悲に此所をはなしてといふを兎も角も〳〵。

（十）

松屋にては娘の行方知れざるに、家内の騒動は一方ならず。誰は東へ行け、彼は西へ走れと夫婦は半狂亂にて、奧と店との往來は目眩しきばかり、大晦日の繁忙も之には過ぎまじく見えけり。

民は侍婢なれば其方が落度といはぬばかりに母親に責まれ、心の中には大方それと行先も勘着きたれど、千之助と手に手を取りてなどいふほどの事もあるまじく、はや日暮なれば今にも歸來るべしとお初が憂目を見むことのいとしさに、さりとは知りながら裏みていはねば、夫婦の心配を見るに見かねて、私も心當りを探して參るべしと淨正寺へ急けば、前面より物思はしげに首を俛れて來るはお初なり。

やれお孃樣、一言なしにお一人にてまた淨正寺へでございますか、ちとお嗜みなされまし。お家は此方樣の見えぬにて割れるほどの騷動と手を

取れば、お初袂にて目を拭ひ、民や口惜い聞いてたもれといふを、其所ではございませぬ、お兩親の御心配はどれほどゝお思召しますか、お話は後にてゆるりと拜聽りますほどに、早くお歸りなされまし。御一所に家内へ入りましては、お出懸先を私が存じてお伴れ申せしやうにて、家内の手前よろしからねば、一足先へ裏口からお歸りなされまし。私は途にてお目に懸らず、尋ね飽みしつもりにて少し後から歸るべしといへば、お父樣もお母樣もお腹立か。否お立腹ではございませぬゆゑ、早くお顏を見せて御安心させてお上げなさいましと、民は娘の後より護衛をしながら家近く來りしが、不圖心着きてばた〳〵と追懸け、もしお孃樣、一人して何所へ行きしかと責められたまはゞ、何と御返答なされますか？只謝罪りて何ともいはぬ覺悟。否、おつしやらでは濟みませぬ。さらば何というてよいやら敎へてといふに、民も當惑してない智慧を振ひ、別に好思案もなければ、何とやら頭腦重く、氣鬱して堪へがたかりしゆゑ、

庭からぶら〳〵と戸外に出て海岸通を散歩て參りました。お斷申さで出懸けましたは私の不調法とお詫罪をなされなば、それは嘘ならむともおつしやるまじ？合點でござりますか。その通りにいうてお詫をせむと一足先へ還れば、お孃樣のお歸宅となほ煮えかへる騷動に、お初は我ゆゑにかばかりとは思ひ懸けざりければ、只管驚きて呆れ顏にて家内を見廻す所へ、兩親來りて座敷へ伴行きけり。

母親火鉢の前面にお初を坐らせ、おづ〳〵身を小め冷えたる手だに遠慮して、火へは翳さず袖口へ引籠めて胸に置く娘の姿を、言分ありげにじつと覗て、一言もなく單身にて今頃まで何所を步行てゐたりしぞ？女子の身にあるまじき事と、心配懸けし恨と、歸り來れる歡喜さとに、胸轟けば聲顫ひ、涙をも交せての言葉に面目なく、さしうつむきし面をわづかに擡げ、欺かむ事の勿躰なしと思ひながら、眞實を告げなば譴責れむと可恐しく、民に敎へられしまゝを語れば、親は子を見ること年齡よ

りは幼稚き人性とて、戀に浮かるゝ身とは知らず、氣分惡くばなせその樣にいうて醫者に懸らむとはせで、夕暮までもそゞろ歩行して兩親によしなき苦勞を懸けしぞ、此後を愼むべしとばかりにて、父親の小言もいやらしき嫌疑を含まず、女子の身の輕事なる事を叱られて事濟みけり。されど二度とかゝる事のなからむ爲、母親の用心深くなりて、侍婢の民にも耳打ありければ、擧動に心を用ゐたまはずば一條露顯の緒端と、民が注意をお初はさまでに思はざるは、兩親の心を知らずしてなほ千之助を許嫁同樣に思ひなせば、此事露はれても不義淫行の責を受けざる氣剛ありて、なほも民を口說きて密に文通の所望焚立つごとし。

河豚に命を殞すは其味を覺えたる人なるべし。曾て食はざれば食はでも濟むべきものを、一度は命に別條なく、その味を忘れかねて死を求むる例あり。

十六のお初一歲加れば十七とて去年のお初にあらず。莟のふくるゝ時は

吹く風も仇には受けずして、戀に染む頃、其味を知らざればとゝあれ、千之助を今年思ふは去年の思ふにあらで、色も濃く光澤も出づるにおもしろ味を覺え、人形にも衣裳にも芝居にも替へ難きは唯是なり。逢ふ度に思慕りて、辛き事は辛く覺え、嬉しき事も亦まことに嬉しく覺ゆるほど、まことに河豚の食ひたき一念熾にして、二十四時、その次の二十四時、その又次の二十四時も逢ふ事をのみ思づめにして、其慾を充さむとばかり心を役へど、其慾の充ざるに失望して、自暴て鬱していつとなく面瘠せ、起居重く言詞少く、精神鈍れるがごとくなりぬ。

お民はいぢらしがりて慰めむにも、其事をいはざれば愁眉の開く事なければ、思を慕らさむは殺生なりと曉りながら、眼前喜ばるゝ顏を見る事の心快さに牽かされ、間がな隙がな其事を語りて機嫌を取りけるが、やう／＼思逼りて是非に今一度逢はせてと、拜まぬばかりに賴まるゝを肯かぬも心苦しけれど、とても添はれぬ惡緣なれば、なまじひに逢はせて

大事の起らむを氣遣ひ——其は後の事さしあたりては外出禁制の折から、何に託しても此家を出づべき方法なければ、好機會を見合せてと遁辭も四度五度と重なれば、お初も堪へかねて迫るに遁場なく、主人夫婦へに濟まざる義理と承知の上にて、文の使を引承け、他出の用事ありける時淨正寺へ持行きしが、お初よりの物語にて師僧に一義の見尤められたりと知れば、女子も罪ある方よりの使者といふに自ら恐怖を懷き、世間晴れて玄關に立つべき氣力なく、まづ藥師へ參詣して裏手の樣子を覗ひけるに、取着かむ蔓もなければうろ／＼して、去りも遣らざるを老僧認めて、此寺に御用のお方かと尋ねられ、邪氣のなさゝうなる和尚と思へば、お民は日周が千之助といひて、太田町に居りし折の隣家なる松屋の召仕なるが、主人の傳言せむ爲に來りたれど、女子なれば人の思はくをかねて取次を頼み兼たる趣を語れば、老僧はこれを日周が破戒の種の細片と知らず、彼は此頃少しく落度ありて禁足同樣の身上なれば、宿元よりの

人の外には誰にも面會は許さゞる樣師僧の申渡もあれば、用事を此方まで聞かせたまはゞ傳へて進ずべしとありけるに、扨は効なしと諦め、直々に傳へよと主人の吩咐なれば、歸りて一應此よしを傳へ、差圖を受けて又參るべしと、さりげなく答へて還り、しか／＼なれば當分は逢ふ事は扨置き、文の往來も覺束なしといへば、お初はまた素戻りの文を口惜氣に引裂きて、何時を逢瀬といふ顏に見かぬる悲愴の色顯るゝに、他人事とは思はれず、民もいふやうなき不快を感じぬ。

心底焦れてはかゝるものにや、床間には例の人形を飾り、萎れたる山茶花を花立に挿して、肌身には、千之助の寫眞を放さず、日に幾度と無く取出でゝは眺め、其間は多く柱に凭れて目を睡れど眠るにあらず、唯病めるがごとく思ひ沈む風情に、母親氣遣ひて病氣もやと問へど、氣分は惡からずとて醫者をきらふに強ひてもといはざりしが、もし病ならば日増に病勢募るごとき樣子に青春にはある例の氣鬱ならむか、其にしても

此儘に捨置かば、つひには病氣を引起しかねまじき容體に驚きて、父親に告ぐれば此も斜ならず驚き、當人醫藥を嫌ふとも等閑にはしがたしと、醫師を招きて診察を乞ひけるに、此處と指して惡き所なし。氣鬱なれば藥劑よりは湯治などこそといふに、母親と民が附添うて卽日箱根塔澤へ赴きぬ。――(草津の湯でも)と聞きしが。

（十一）

塔ヶ峰に狂花の梅あり、それ見にとお初は民を伴れて、四邊に人なしとてまた千之助の噂、浮かぬ顔にも此時ばかり喜色の見ゆるも愴し。其様に思召したればとて、今は日周様といふ出家のお身上、とても無き縁とふッつり思切り、無効なる戀ゆゑの御病氣を早く治して御兩親様のお心をお休めなされませと、民のいふを聞けば道理と思はざるにあらねど、理はなしに唯千様の戀しくて、忘れむとするも忘られず、我ともなく思ひ續けて氣の鬱ぐが積りての疾病、かほどまでもと推量してたもるならば、お前のいふ言は道理のやうな無理なり。誰が何といはうとも千様の事ばかりは思切り難し。惡縁とやらにてもし添ふことのならずば添はでも苦しからじ。思ひ續けてこのまゝに病重り、死ぬ覺悟と、嘘ならぬお初の口氣に民は内心驚きけれど、言諍ふも益なしと説話を外らせど、

お初は千之助の事、我思の事ならねば挨拶だにせざるばかりなれば、氣に向くやうに口を合せて其事話。口頭にちら〳〵と見ゆる心底は、まさしく一圖に千之助を思詰めて、夫婦とならでは措くまじき氣色なり。お初梅花を一輪摘みて、歸咲といふ名も羨まし。我も早く横濱へ歸りて千樣のといへばお民が、早く歸りたく思召さば、その浮かぬ顏をいつもの御機嫌にお復しあそばさではといふ。この氣分は千樣と……ならでは治え難し。今日にて半月餘りにもなりぬれば、此山中の飽き〳〵して…………。

木枯の吹くに湯冷の寒氣を感じ、もはや還らむと山の半腹まで下りけるに、下行く若僧を認めて、知らざる人ながら幽しく胸轟き、瞳を据ゑて見送るを民は心着きながら、何を御覽なされますと問へば、僧の後姿を指して民の顏を見れど、なほ悟らざる風して、あれが何でござりますと推返せば、あのやうに千樣が尋ねて來て下さらばと欲言して、鬱ぐを紛

らせむと不意に手を執り、そんなら追蹤けて千様のお顏をと急立てゝ驅出せば、お初は木根に蹶きて仆れたるに驚き、御免遊ばせと引起し、膝の泥を拂ひ、手掌の土を拭きて、何所ぞにお怪我はといふにまくり手して見れば、臂を磨剝きて血入染むを、民は連りに詫びながら袂埃を撰りて二人イむ所へ、湯治客の歸家と見えて、人力車四輛列、勢籠むで下り來るを何心もなく見れば、眞先はお嬢樣裝の十三四なる可愛らしき娘、其次は三十恰好の奧樣とも見ゆる人品、其次は二十三四の食客書生、革包柳骨柳と同車して、最後は仲働の年增、其は思も懸けぬ千之助の母親なり。お初は我を忘れて慈母親と走寄れば、其人も驚きて車を停めぬ。お久しやお初樣、お民殿も御一所か、逢ひますも羞かはしき此風體。此方樣の中好なりし千もと淚を飮み、坊樣にしてしまひました。お父樣もお母樣もお變りなうお出なさるゝか、よろしく傳へて下され。また重ねてと車を進むとすれば、お初は飛懸つて其袖に取着き、慈母樣少し待つ

で、聞きたい事が澤山ある。聞いては上げたけれど私も今は奉公の身、奥樣は先へ行かれたに、私の用事に暇入らせてはお首尾が惡し。今日は放して。放さぬ〱。民お前もお願ひ申してくれぬか。何やらお初樣の御用とあれまでにおつしやる事なれば、お手間は取らせませぬほどに、少時待つて上げて下さりませと、民は車の前途に塞がり、お初は緊と袂を捉へて放さゞれば、千之助の母も所爲方なさに車を下りて、此所にて談話もなり難ければと、近きあたりの掛茶屋に入りて、扨其お話はと尋ねられ、あらたまりてはお初も言出しかねたるを、民が會得みて、御母樣御一所にて先月末より此所へ湯治に來られました、その御病氣はお初樣の命懸けて千樣をお慕ひなさるゝ餘と聞けば、千之助の母は子ゆゑの涙脆く、なるほど幼少より朝夕睦まじき遊戯朋友、似合はしきも縁と、やがては夫婦の口約束まではせしものゝ、不慮の災難より知らるゝ通り野田屋の瓦解。雨を凌がむ軒もなき俄乞食の身となりて、千の嫁に此方

樣をくれなど〻は、なか〳〵口幅たくていひ難し。よしやいうたりとて、さる方へ誰の親が大事の子をくる〻ものぞ。其も千が一人前の魂ある男ならば、また野田屋の家を興さむ目的のなきにもあらじ。其上にて嫁にともいふならば、此方樣も好いて望む緣なり、親御とて萬更否とはいふまじけれど、何をいふにもあの通の腑効なし、我子の讒訴を面白うていふではなけれど、とても〳〵此世智辛き世中に一人前の働のなる根性ならねば、可哀けれども子を捨つる藪を探して淨正寺へ入れ、一生經讀ませて果てさする了簡。あのやうなる不束者にても幼稚馴染なればこそ、其樣にいとしがつて下さる此方樣の心がいとしうて、かわゆうて、嬉しうて、これ此樣に淚が飜れます。千に代つて此母がお禮を、忝うござりますと、お初の手を執つて泣出せば、お初はしく〳〵啜上げて、假令どれほど慕うても焦れても、千樣の女房にはなれませぬか。とても愜はぬ事ゆゑ、彼は死にたるものと諦めて何所ぞよい所へ嫁入して、親御に安

心さすが孝行ぞや。千ゆゑ妾は老の坂に懸りての苦勞、此齢して奉公とは何事ぞ。子に不孝されたる親心をよく知れば、此方樣もよしなきものを戀慕立して、それゆゑ親御に苦勞懸けらるゝが、身につまされてお傷はしければ、此方樣には孝行を勸めまする。此所を理解けてふつつり思切つて下されよ。あのやうに人並ならぬ千之助も、可愛や戀は切なきかして、暮々も此方樣の事を遺惜げにいうて發足ました。發足とは？ 成程此方樣は知らぬ事！ 此五日に信州の山奥なる、靈岳院といふお寺へ學問修行に遣られて、五年の難行積る効の見えなば、其邊の田舍寺のお住持になられむとの事と。始めて聞きてお初の仰天！ そのまゝ正體なしに泣崩折れ、賺しても宥めても聞分なく、淚のあるほどを此所に盡して、其後はいかにせしやらむ？

この娘今に寡居のいたづら臥、二十歳の春の夜、月にも花にも憧れて、寐ぬに曙、かの山僧も不便や鐘撞く心の中は？

(二十三年七月)

此ぬし（新作十二番之内）

（一）無妻

小石川植物園近くは都の田舍にて、閑寂の地なれば屈竟の勉強場なりと、一軒立の小家に賃居せるは、帝國大學政科二年の特待生小野俊橘とて二十四五歳なるべし。家内といふは弟俊次といへる十三の少年と、煮炊の世話をと傭婆との二人なり。此學生生國は信州上田在にて、二三年前兩親を亡ひけるが、小作百姓の其日暮しにてありければ、遺産らしきものゝあるべき樣なく、紀念にとても女親のは百結の無袖羽織、男親のは研瘦せたる刈草鎌か、身に着きしものならば、金物は眞鍮の布袋、其笑顏の何處やら持主に似て、懷しき古煙草袋などにやあるべき。此次第なれば、存生中にも學資の出處なきを、他人の情に縋りてやう〳〵今の身上にま

で仕上げたるに、故郷を出でゝより六年、夢の外には一度も親に遇ふ間なくして、二人ともに冥土へ旅立たせ、あとには親類も縁者もなければ、葬禮に歸國せし歸路に俊次を伴ひ、相應の學舍へ入學させ、食ふも衣るも學資も二人分を、俊橋修業中寸暇なき身に、私立學校の教授に傭はれ、辛き世渡の入費を厭ひ、二人下宿住居せむよりはと、傭婆一人おきて、借店の小家なれば、無論造作建具に註文あるべきほどの棲居にあらず。俊橋に言はすれば、家屋の目的は雨露を凌ぐにあり。此志はわれ立身得意の曉にも、一向變ずまじき了簡なれば、まして書生中は、如此天井あり、格子あるさへ驕奢の沙汰なり。俊次、貴樣も骨に彫み腦に印して忘るなよ。我等生れし、育ちし上田の家は、屋根は茅葺其も朽ちて、荒壁土を振ひ骨顯に、戶は破れ閾斜に、左右より五六本の支棒あり。一地震一嵐少し暴くば、ばた／＼と潰るべき犬小屋、建てたる時代も詳細ならざるに、一度の手入もなく、所に名代のぼろ家なりけるに比しては、此

家の見事さ！　二疊なれど玄關あり、六疊の居間あり、外に三疊の一間は其と定めしにあらねど、まづは女部屋なり。此外に椽側、天井、格子戶、戶棚、押入、一々具足して、あつぱれ開化の建家なるわ。千鐘の粟、黃金の屋、おもふまゝの欲しき物は此中にと、机上の一冊を彈きて常に訓へぬ。我も此心を不亂に奉じて、及ぶだけの質素に身を嗜み、いつやら知らぬ間に、之なくては一字も讀めぬ近眼鏡は、措大額上の桂冠なりつ。數千人あるが中なる幾人の、特待生に抽むでらるゝを見るにつけ、今の行狀學力思ひやられ、角帽子に裹む頭には什麼な腦髓があるか、金鈕にしめたる腹はどれほどの實入に膨れたるか、縱鼻橫目形は同じ人類ながら思へば可恐しく、卒業間もなく社會に出現の上は、嘸や花々しくと末々賴もしく、喩へば名刀の鞘を拂はむとする前、見る目今より峙ちて六學の名物男と、衆人の希望この士百姓の子息に繫りぬ。

俊橋二十五歲なれど、瘠方の小男にして容貌醜からねば、一見は二つほ

ども若く、音聲細くして艶あり、低調子にて優しきこと女人のごとし。されども放言を好みて、大石頭上に落懸らば、吹いて飛ばすべき氣勢あり。頭髮薄く柔軟きを梳分け、或は腦痛しとて三四分の毬栗にする事あり。色白の圓顔にして、廣き額に皺一筋深く、眉毛常に顰みて憂愁心中に絕えざるごときは、年少より艱難に惱まされしゆゑか。眼清しく笑むには情籠れど、これにも深慮に沈む色あり。鼻は隆きにあらねど形調ひて難なし、頰豐に肉つき、唇薄くして丹色濃く、口髯春の小草ほどに柔かく短かく、之あるゆゑに乳臭して愛嬌あり。容色美麗生れたるは、山鳥の水鏡ならねど、男女に論なく我面影を惜みて、磨き、粧り、飾り、此色を損ぜじ、此上にもと修飾に心を勞ふは、百人が百人異る事なし。炭ならば磨きて雪にせむとの非望も起るまじけれど、灰ほどなり生綿ほどならば、いづれかといふに、好もしき雪にまづ近ければ、其に磨上げなむ氣にもなるべし。希望の玉光輝ちらりとだに眼に入らば、谿を下り

蔓に縋り、多少の困難は厭ふに足らざること、人情避け難ければ、美色の女人を見よ、美色の男子を見よ、磨く痕あり粧る跡ある通例なるに、俊橋この定規を外れ、二十五は男盛なるに、色めかしき姿は微塵見えず、質素に歩み、質素に語り、質素に食ひ、質素に衣、質素に思ひ、此二字影のごとくに身を去らねば、此男(美)の感想は一分子もなきがごとし。(かまはぬ)は英雄の本色、かくてぞ後來に希望ありと言囃されて、都風に吹るゝ若年には珍しき人物なり。思ふに心は兩道に働かず、此處に盈つれば彼處には虧けて、一方に熱する時は一方に冷かなるものなれば、田舍氣の質素が都門風に散らざるは、心をある物に奪はれてなるべし。このある物は修業にして、俊橋眼中修業の外天下に一物なく、世界に何が有るとて、かばかり面白く樂しき物はあらじと思ひ入りぬ。其ゆゑにや、此年齡にして女色を見る眼を持たず、美形に感ずる情なくて、朋友輩打聚へば、孰れも今を(浮盛)の戲言は、紺屋の下水色に流れて、愚に

もつかぬ事の興あるに、俊橋擇べる色なく、女子は近くまじきものなり。我とても人間なり、情慾の動物に外ならねば、經驗なければ識らねど、恐らくは其毒には泥み易く、心腸忽ち蕩けなば、思想は腐り、希望は碎け、宿願の功名大事ならずして果つべし。眞に怖るべきは女人といへる化物なり。君等は口々に明眸皓齒といへど、翠袖紅裙といへど、或は其は(美)なるかは知らねど、我見るに不愉快なり。まして都女子は風俗に品を粧ることを專務として、色を商ふ不料見、この根性そも〳〵卑しくして、思ふだに汚はしきに、なやなり〳〵ぞべら〳〵とせる風體、惡臭を放つかと思はれて、むか〳〵と嘔吐を催し、頭痛起りて無上可厭なものなり。天下に豚の鳴くと女人の姿ほど心に染まぬものなし。我も一度は可厭な物を持つべきぞと笑ひたまへど、妻は斷然持つまじき決心なり。偉丈夫は必ず宇宙に係累羈絆なかるべくして、始めて海を吸ひ山を蹴るほどの大業を成すべきに、妻あらば子もあらむ、家もあらむ、情愛には

鐵も鎔け、石も裂け、鬼も角を折るといへり。さらば大事を遂げむこと難し。古來大名を成せるもの、ニウトン、ロック、ライブニッツ、ベィル、アダムスミッス、ホッブ、ヒュム、ギッボン、盡く無妻主義ならずや。我はこの數輩のごとく、机の上の學者たらむは心願にあらず、此處に天下國家あり、我に濟民經世の術あり、宿志の一部成れば、劍花舞ひ硝烟蒸し、この一命は忽爾碧血、忽爾白石、なか／＼に旦夕の計り難きに、羈絆ありて何をか爲すべき。あゝ、無妻！ 獨身！ 女子は近く可からずといふに、朋友手を拍つて笑ひ、柳の枝に雪折はなし、貴樣ごとき松の木が、得てぽつきと摧けるものなり。長い目で見む、この四五年が勝負の瀨戸際、合乘車で夜中遊山に出でなんほどの窮屈な思せうより、今謝罪らば麥酒にて合點してやるべきにと嘲れば、俊橋も笑ひて、女房持つて世帶に萎び、敎師で果てなむうづ蟲めら、學校退いて女護島の内務大臣になれ！

(二)　芍藥

此隣に手前建の普請堅く、數寄を盡せるにあらで、立派に嚴肅しき一軒は、前權大書記官薄井某が、今は非職閑散の餘生を樂しむ隱家なり。持丸の嗣子といふにもあらで、もとは一介の書生より我技倆にて顯職を恭うし、其俸給を土臺にして質素に仕出せし身代なれば、させる財產あるにあらねど、活計の模樣は美しく、雨の宵などには琴の音門外に響き、折には黑漆金紋の手車數輛も門內に列ぶことありて、中の上たるべき所見なり。俊橋の住家とは裏庭の垣を隔てゝ、表口の出入は薄井の二階東窓より俯視さるゝに、最初はさる事ありとも俊橋心附かざりしが、わが出入の度に其窓より覗ふ美しき(化物)あり。無妻は持論、これが大禁物の俊橋なれば、また覗くか不潔物と、一向見向もせですつと入りすつと出、ぼく／＼と行く後姿更に繕へる所もなかりき。戀に心なき男子なれ

ば、この女子我を覗くとは思ひも懸けざりけるに、一朝出懸に不圖仰ぎて、始めて窓に女の顔を認めしが、歸校にも亦朝のごとし。次の日其氣ともなく見れば例の如きに、可笑き怪物の擧動と思ひけるが、此事氣に懸りて、女人に心牽かさるゝといふにはあらで、此女人何をせむとてかと、試驗すべき耽奇心起りければ、終には出入の度に態と此方より睨みけるに、不思議や女人窓より覗はぬ日はなかりき。俊橋思ふに、この二階は薄井が娘の部屋にて、窓を開けて景色を見るは、我等にも有る事にて、書見に倦み精神疲れし折から、野廣き天地を見れば、眼清しく氣霽々とするものなり。または深く思案する事どもありて、何を見るともなく、無心に眼を開き、茫然とする事あり。あの女人も恐らく其等なるべしと、半疑ながらも判じけるに、朝出懸には我より先に在れど、午後の歸宅には、遠くより眺むに窓鎖ぢて、近寄る靴音を聞きて徐とこの障子開くがごとく覺えぬ。其上に、いつも〳〵窓に倚れるも不審の一つ、奇

怪なる女と、其後は更に見向かざりけるに、一日歸宅ての入懸何心なく仰視けば、はたと顏を見合せ、女は此機とあわたゞしく一禮して、障子ぴしやりと立てけり。俊橋いやなやつ！と唾を吐いて內へ入りぬ。

此夜夕飯の給仕せる傭婆に、隣家の女あれは娘かと聞けば、お二階に棲ませたまふ御方か。いかにも。あれはお娘子なり。今年お十九とやらにて、この小石川に名代の御容色美、御學問も優れ、裁縫遊藝何にもあれ未熟はなくて、誇らず矜らず、おとなしくして高等なるは、今珍しき御孃樣、御覽なされましたか。あなたはお物堅く、女人の噂など何日にもおほせられた事はなきに、お隣のばかりはよく〱御意に入りしと見えました。御卒業の上は、廣い世界に幾人と指を折らるゝほど、立派なるお方にならせたまふなれば、天女でも小町でも、先方から我を私をと吸ひつく可き旦那樣なれば、あれほどの娘子は難なくお持物たるべし。其お心算にて今一膳、今夜の御飯は炊加減お氣に合ひましたはず、お坊樣

はお硬いがお好ゆゑ、ぐちや／＼して定めて之はお可厭なるべし。われ老女なれど年老の冷水、柔かきは粥のやうにて味なしといへば、俊橋箸を休め、目鏡の下より眉を顰めながら老女を視て、貴様のやうに身體の動くものは、硬くともさしたる害はあらじ。我等讀書の人は運動不足にゑ、消化やすからでは身の毒なればと、修業始めてよりつけたる習慣、今は性となりて少し硬きも腹具合惡し、などゝ大層な事はいへど、田舎に在りし頃は茄子薩摩芋を生嚙にして毒にもならず、其が甘味かりしぞと高笑して、此むかし忘るべからず滿腹々々と箸を捨てぬ。日曜の早朝より用事ありとて俊橋出でける後に、俊次寢轉びながら昨夜買ひたりし鉛筆畫の手本を、物珍しげに開きけるに、芍藥の一朶露重げなる風情、子心にもおもしろく、臺所に向ひて、婆や、芍藥は何月咲く花ぞと尋ぬれば、芍藥は只今が眞盛なり。裏へ出て見たまはゞ、お隣のお庭に見事なるが、數知らず咲亂れたる其美麗さと、聞くより早く刎起き、眞か實

かと雀躍して、編上靴の紐をそこ〳〵に結びも敢ず驅出でむとすれば、老女は呼留め、必ず惡戯はしたまふな。大丈夫金の脇指と、格子戸裂くるばかり手暴に開閉して、鼠の遁ぐるごとく走り出でぬ。薄井の庭は槇の生垣を結ひ廻し、築山なく、雪見燈籠なく、泉水なく、石橋なく、敷松葉なく、枝折戸なく、數百竿の竹、四五株の芭蕉、梧桐は石の井筒に立ち、梅は一簇軒に近く、梨、櫻、桃、李、常盤木を垣に寄せて緊と植込み、木陰に池あれどわざと荒るゝに任せ、菱、藻、萍茂れるまゝに、水淺き所には菖蒲河骨野草の如くに生ひたるを好むなど、漢畫幽棲の趣を寫し、自然の景色を其儘に、人工の過ぎたらむを嫌ひたる造方なり。俊次は我庭の後より此處に忍び寄りて覗へば、果して！　芍藥くわつと丹舌を吐き、跳り狂うて立てる姿は、名種と見えて目覺しきが、石臺を溢るゝばかり獅子頭をふり亂して眞盛なるに、俊次ぞく〳〵して、あの優れて大輪なるをと、呼吸を殺して見入りける間に、風もなきにぽろぽ

ろと二三瓣散るを見て、南無三！　此花明日を待たじ、欲しや、欲しや、手に取りて見ば蕋の形はいかゞあらむ、香氣は得ならず好からむにと、身を擾きて堪へがたき氣色なりしが、首に繋けし水夫刀を手に持ち、忽ち我庭へ立歸り、椽の下に投棄てたる二間餘の竹竿を引出す音に、老女は庭を覗きて、お坊樣また惡戯を遊ばすかと叫べば、小刀を懷中に押藏し、竿を垣の外へそつと突遣り、椽の下にかの黑猫逃込みたれば逐出さむとせしを、いらざる言を其方がいひし間に、無念や取逃せしぞ。また牛肉を盜まれ兄樣に叱られむ。用心せよと言紛せば、あの猫ならば死ぬほど撲のめしてやつて下されとの言葉に、俊次はしてやつたりと庭を出でながら、逃げた〳〵と呼びてかの竿にて地を叩きながら驅出し、離れし所にて再び懷刀をとり出し、竿の頭を兩斷に節にて留め、小枝を拾ひ三寸ばかりに折りて之に挿み、強弱いかにと垣の柱に試みしに、彈力強過ぎたれば緩めてまた試み、この竹鋏を杖きて覗きし所に至り、家内の樣

子を窺へば、椽の障子盡く鎖ぢて、内も寂寞としてあれば、垣の根方よりぐつと挿入れ一衝あつれど、芍薬の莖しな〳〵と弱く、横木の小枝彈けず、頻りに苛ちて二衝三衝滅多突に衝けば、花瓣雪のごとく落ち、莖も五六本折れて、狼藉、一大事と竿を引きて遁げむとする後に、おのれと頸首を掴むものあり。俊次驚き現に心亂れ、懷刀を取つて後樣に振翳せば、其手も執られて動かすこと協はず、是までなりと聲を放つて泣き出せば、障子明きてあわたゞしく出づるは、娘の龍子なり。垣の外を遙にすかし視て、庭下駄を引懸け、ばた〳〵と走り寄りて、吉村か、何をしやる、何處の子ぞ、無殘な年齢もゆかぬものを捕へてと責むれば、吉村といふは十六七なる此處の書生なり。兩手に俊次を掴み、頤を突出して、まづ其を御覧じませ、此奴が惡戯にて其次第といふに、龍子身を退きて脇を見れば、芍薬の花大方落ちて殘るは二つ三つ、呆れて凝視めたりしが、惡戯は小兒の本分、堪忍して放して遣るべし。其子は何處の?

隣家の？　え、隣家の、小野様の？　あゝ、あの小野様の？　さらば咎むべきにあらず。花が欲しくば之にましたるを幾許も進せましよ。吉村其お子をお伴れ申せ。あなたお遊びにお出なされ、彼所にある花を思ふまゝに取りたまへ。吉村、早くお伴れ申せといふにと龍子の言葉に、吉村希有なる顔色して、はつと俊次の手を引き表門へまはれば、龍子はいそ〳〵と奥へいりけり。

（三）馴染

垣の外にて頸首執られたる驚駭に、騒げる心鎮らず、今にも苛き目見むと待設けしに引替へ、美き花やらむ、遊びに來よとは、罪科ある身に薄氣味惡く、賺して釣込み、成敗せむとの下心か。この吉村といへる男の其が言葉ならば、疑ふにも及ばず、無論其計略なるべけれど、あの溫和げなる女の、さる殘忍はえすまじ。さりながら尋常ならざる我惡戲を、事も無げに宥すさへ凡人には成難き事なるに、我を小野の俊次と知るより、以前の調子變りて、いとゞやさしき言葉を懸くるは解せずと、子心に之を訝れば、家へ連行かれなば、とても好事はあるまじ、隙あれ、振解きて遁げてくれむと思へど、吉村わが右の手を力任せに握りて引行けば、心ならねど玄關まで連込まれ、もはや遁出さむは卑怯なりと魂魄を据ゑて、靴の紐を解き懸くれば、奥より圓髷結ひたる婢女出でゝ、坊樣

お上り遊ばしませと、靴の紐を解いてやり、手を取りてさあ此方へと、美麗目を驚かす座敷三間、人も居ぬ所を通り抜けて階子の下に着きぬ。階子は檜木造、二曲にうねりて蛇腹のごとし。之を昇れば右方八疊の座敷の、東に寄せて蒔繪の小机を据ゑ、黒檀の飾棚を列べ、友禪縮緬の坐蒲團に龍子かしこまりて、左脇に琴を片寄せ、象牙蒔繪の爪函の蓋する所へ、俊次連れられて來りけるが、敷居に足の懸るほど入口に坐り、無雜作に頭を下げ、此處へ來るまでは罪を詫びむ心にて、胸の中にて大略口上を作りけるが、いざとなりては臆して言へず、壁なる水彩畫の花鳥の額を詠め、または俯視きて手の指を擦り、物羞かしげなるに、龍子、ようお出なされました、今少し此方へ。菊（婢女名）お蒲團をといへば、婢女次の間の　襖の陰より黄八丈の客蒲團を持來り、いやがる俊次を無體に押載せければ、顏を赧めてうち〳〵と、手持無沙汰は見るも氣の毒なり。竹木持たして野原に放たば、小川を躍り越え石を飛び、樹を撲

き草を薙ぎ、活潑、疎暴、虎に翼を添ふるごとくなれど、見知らぬ人の前、棲馴れぬ座敷の中には、身を縮め呼吸を殺し、日影に曝せる鮒なり。菓子をといへば、婢女はいと階子を半ば下りけるを呼留め、何御用と昇口に手を銜けば、茶はやめて珈琲が好らむ、早くよ。かしこまりましたと降りけり。龍子進み寄りて、御名は。俊次。お年齢は。十三歳。學校は何處へ、書は、算術はと尋ぬること、小兒に初對面の挨拶誰も異る事なし。是より談話の端緒を引出し、其となく家内の樣子を尋ね、ちらちらと俊橋の事をぞほのめかしける。やがて見事なる菓子俊次の前に堆く、九谷の珈琲碗に香氣の烟立つを、冷めぬ内にと勸めらるれど、荒壁の家に起臥の身の悲しさは、綺羅美やかなるに物恐して、手は顫ひ、胸騒ぎ、飲めど食へど味は知れざりき。龍子が絶間なくはなし懸けゝるに、馴染つきて恥羞さも薄らぎ、身體の伸びたる心地して、恐怖心少く四邊を見迴せば、床の間、床柱、欄間、銀屏風、襖、花瓶、螺鈿の文臺、人物畫

の大幅、定紋付の亂凾、眼に入るほどの物善美を盡し、經驗なき俊次の心には、繪に見し御殿の實物も、なか〳〵之を越えじと有難く思ふにつけ、我姿を見れば、色は褪め、釘裂はせる小倉の洋服は、砂に塗れ垢附き、靴下は跟破れて汚れ腐れるを、今更淺ましく覺えて、額の汗を拭かむとポケットより引出せしは、舍兄俊橋が散々持古しの手巾なりければ、見る眼むさくろしく周章てゝまた藏しぬ。龍子の風俗を見れば、帶といひ、衣物といひ、胴紐といひ、半襟といひ、孰れか新しづくめの美しからざるはなし。高島田に結ひて鬢ゆたかに張らせ、蒔繪の櫛に銀の後挿して、何となく懷しさに兒心をも動かす有情の眸、莟口ゑをらしく、物いふ度片頬に笑渦見え、首を少し傾けながら、聲清しき中に色を含めるは、心蕩々となりて、無口もおのづから開く可し。綺麗な女と俊次深く感じぬ。棚より寫眞帖を取卸し、西洋の名所を見たまへ。地理を讀みて知るゝ(ナイアガラ)の瀧は、是よと開きて見するに、此帖の立派なる

は手出しもなり難きばかりなり。いろ〳〵に持なしの手厚こと華族の若君のごとく、俊次臍の緒切りて以來、夢にも知らぬ喜悦さにうか〳〵と二時間も過しければ、御馳走樣、私はもう歸りますといふを、正午なれば何もなけれど、御飯食べてと無理に引留むれば、俊次はまた暇乞の挨拶して立懸るを、支度の出來たるものを今少し待ちたまへと喚鈴を打てば、階子にすと〳〵と音して、婢女膳を運び、さあ〳〵此處へ坐りて澤山めしあがれと、龍子と並びて見知らぬ給仕つきの食事は、胸苦しくもまた小羞かしくて、料理種々あるに手出しもせず、倉卒に箸を置きて挨拶し、小兒の無遠慮に直樣暇を乞へば、龍子手文庫より手帳二冊出して、學校へ持つて行て何なりと書きたまへ。これは家にて勉強したまはむ時の肱蒲團と、黄色縮緬を周圍に、緋と淺黄を一つ置に桔梗形を縫箝め、中心に紅白の絹總長くつけたる、手細工の一品を持たし、明日もかならず遊びに來たまへ、遠慮なく玄關より入りて、不構此處へ昇りたまふべ

しと、一所に階子を下りながら、後より顔を近寄せ小聲して、兄樣に宜しく申して下されやといへば、俊次驚ける眼色にて、貴孃は兄樣を御存じか。知らねどもと口籠り、只さう言うてさへ下さればよし。

(四) 意見

俊次兩手に手帳と肱蒲團を持ち、我門口に立ちて、婆や、婆や、此處を開けてと喚べば、奥より老女、御飯も召上らず何所を徜徉ひたまひしぞ。兄樣も御歸宅なりと立出で、格子を開くれば、婆や、これ見よと肱蒲團を差出せば、見事な！　まあ、どう遊ばしました、立派な御帳面までもといへば、俊次靴を手早く脱ぎ、二品を引摑むで俊橘が机の脇に行き、隣家の姉樣に貰うたを見たまへ。兄樣あの姉樣はやさしき女にて我大好になりたり。明日も來よといひたまへば、また遊びに行く可き心。珈琲は甘かりし、菓子は見し事もなき結構なる品々、其を二つ食べたり。御飯までも御馳走になりけるが、茶碗にも皿にも金にて繪を畫き、ぴかぴかとして立派なるは譬ふべき樣なし。臨歸にはまた此二品を下され、今日の日曜ほど樂しく嬉しかりし事は覺えず。兄樣にも見せ申し度きは座

敷なり。見も馴れぬ道具あり、唐紙も壁も美しくして御殿の如し。我もあれほどの家に起臥せばさぞや快意かるべし。明日も行つて見むと、かの肱蒲團の總を拈り、これも姉樣の細工なるべけれど、兄樣上手なものにあらずや。兄樣は見たまひしことあるや知らねど、姉樣は美麗にして人形のごとく、優しく深切にして、我をいとしがること眞實の姉も及ばずと、手帳の紙を數へ、厚しと思へば五十枚餘もあらむ。これほどの手帳持つものは、學校にも多くはあらじ。華族の淸川がひけらかせしも、なか〱此程ならざれは、明日は見せて膽を冷さゝむ、嬉しやよき姉樣を發見けたりと、形崩れし墨だらけの書囊を持來り、一冊の書を取出し其肱蒲團ついて讀むまねして、心地よし、これならば非常に勉强もなるべし。あつ！　忘れたり、兄樣へ姉樣がよろしくと申せしぞといへば、默れ！　俊橘は煙草をくゆらしながら、俊次の言葉擧動に一々心を注けたりしが、示威眼をして、心得ぬ事どもかな。我には似で貴樣の魂は腐り

けるよ！　俊次は此二品を見せて譽められむ心待なりしに、意外なる叔兄の機嫌に、一度は呆れ一度は怖れ、身を縮めて坐を遠ざけ、上眼づかひにおろ〳〵と俊橋の顏を詠め、指にて掌を搔けば、俊橋机に片肱を懸け、はたと弟を睨み、身貧とはいひながら、さまでに心の底まで賤しからむことゝは思も懸けざりき。緣なき方より物を貰ひ、此上なき喜悅の顏色、見るも汚はし。其上に富貴の家を覗きて其結構を羨むなど、貴樣が後來に希望なきこと、十三歲の今より知れて、教育に丹精すべき力なし。石は發生より石にして、玉は小なりとも玉の性あり。英雄か、小人か、君子か、凡夫か、人物の容量は產聲にても判ずべし。貴樣は希望なき天下の愚物なり。親父樣の物語にも聞きつらむ、我十四歲の折、學校の戾道に、鬼神とばかり人の怖れし縣廳の汚吏を面辱し、其衣に馬糞を塗り、袂時計を取つて泥田に打投みたる事ありき。大丈夫疎暴なれといふにはあらねど、膽は太く志は大きくこそ持つべけれ。富貴を羨み榮耀

を望む根性、今よりその如くにては一生の見放しものなり。それさへあるに、婦人女子に近く事、此兄大不得心なり。貴樣未だ青春ならざれば、劣等動物的の感情に支配さるゝ憂慮なむどは、微塵我に於てなけれど、女子は筋骨を弛め神氣を弱むる大劇毒にして、之に一度觸れなば、百年不治の懦弱といへる病に罹り、一日三度の米嚙蟲にして果てなむこと口惜からずや。女子の手に長じて、剰へその柔弱に教育せらるゝ小兒は、度量狹く膽力なく、形はなるほど男なれど、精神、思想、露女子に異る所なし。貴樣史を讀まば今にも曉るべし、古來亡國の君主は、洋の東西に論なく、總て後宮の美色に傅かれ、脂粉の惡臭、羅綾の惡色、嬌語軟言の惡聲耳目に毒氣を注げば、忽に血腐り、筋弛み、骨和ぎ、皮壞れ、精神氣力有明の灯よりも薄き、お坊樣教育の人物ならざるはなし。我女子を嫌ふ所以、怖るゝ所以これに外ならず。千歳一遇男子有爲の身に生れながら、天賦の能力を活用せず、一塲の春夢、さめてはくやしき女色

溺にれなむは論にも及ばず、我等の取らざる所なれど、若年の身の色に溺れむより、一層恐るべく愼むべきは、思想精神白き絲のごとく、黄にも紅にも染料の性に化せらるべき、汝等少年子弟が、懦弱なる婦人女子の室に出入して、優しき聲に耳を馴らし、柔軟かき手に撫でられなば、外物の感化は凄じきものにて、つひには犬の聲にも慄き、刀の光にも身の毛を立て、地震に騒ぎ、嵐に倒れ、男裝の女膽ひよろ〳〵ものに仕立てられ、獨立獨行の志なき弱蟲たらむは、貴様も書を讀む身の量見して見よ。これ決して男子の面目にはあらざるべし。貴様今を遊盛の年齢なれば、放任のおもしろき思したかるべきを、我知らざるにあらねば、壓制して禁めはせざれど、隣家へゆく事ばかりは、今日限り思止れよ。思留つてくれよ、此兄が頼なり、命令にはあらざるなり。貴様を天晴なる天下の人物としたければこそいふなれ。意地惡の舎兄とな恨みそ。今四五年もして貴様の思想や、堅まらむ時、今日の舎兄が言葉を記憶せば、

無理にもあらず、邪見にもあらず、足下に陥穴あるを心注けたりし實意を悟るべし。いかに俊次、隣家へ足踏せむことは弗と思止るか、俊次、返詞はいかに？　やあ！　おのれ不滿の顏色して挨拶せぬは、わが言葉を不服と見たり。さらば俊次これに答へて見よ、一世の人物たると乞食たると、貴樣は孰れが望ましきやといへば、無禮なり、其分別がつかぬほどの愚物と我を輕蔑したまふかと、無念を籠めたる眼色にて、俊橋の顏をじつと見て一言も吐かざれば、俊橋じれて机を拍ち、見下げ果てたる馬鹿物め！　さほどの分別つかざる歟。物言ふも無益なり、立て、立て！　と睨めつくれば、俊次屹となり、拳を握り肩を聳かして、我も小野俊橋の弟なり。今少しむづかしき問題懸けよと膽太くいひ放てば、俊橋顏色和らぎて呵々と笑ひ、イエス、貴樣は小野俊橋の弟なり。舍兄は萬世の人物たらむ本願ある身なれば、貴樣も其に劣るべきにあらず、勇ましくも申したり。さらば聞けよ、女子に遠かるものは一世の人物たるべ

く、近くものは乞食に果つ可し。明日よりは乞食の學問やめてきつと人物の修業せよ。あい〳〵と俊次其心になりけり。

（五）風邪

明日も俊次來るべき氣色十分見えたれば、龍子は心待して、小兒の好くべき菓子を用意し、手箱を傾けて山水花鳥のコルム畫、クリスマス土產の繪本など取集め、俊次來らば喜ばさむと靴下を編懸け、三時今鳴りたりと待てば程なく、靴音輕げに響き、格子戸暴らかに引明けしは、まさしく俊次が歸宅たるに、四時になれど再び格子の明く音せず、もしや庭にも居たらば手招ぎせむ。流石今日も來むは無遠慮なりと、心なきにあらねど足進まざるか、兄樣制して引留めたまひしか。さらば戸外か後園かに前渡りして、われ姿を見て呼ぶを機會にとの心より、庭に出でゝやあらむかと、南椽に立出で、隣家の裏手を覗ふに影なく、其かと見しは、梅の樹に竹棹懸亘して、俊次が白襦袢を洗ひて干せしなり。裏よりまはりて表にかと、かの東窓を開きて見れど、此處にも更に影はなかりき。

婢女の菊を呼びて、見て來よ、おはしたらば必ずお伴れ申せといひ含めしに、菊少時探しに出でゝ歸り、お內に小音の讀書は、たしかに俊樣のお聲なりといふ。さらば今一度行きて、お間暇ならば是非に遊びにおはせ、我淋しく待兼たりと傳へよとの吩咐に、菊出でゝ行きけるが、間もなく歸りて、召仕の老女挨拶しけるは、お坊樣お風邪氣にて外出なり難ければ、明日にもお邪魔に上ぐべし。昨日は御馳走の上數々の賜物、主人より厚く御禮申せとの事なり。御覽の如くの惡戲兒なれば、嘸やお座敷を荒しましたやら、不行儀やらとて、主人も心配いたしてゞござります、わざ〳〵のお使者恐多き事ながら、右の次第ゆゑ今日は……お坊樣も御無念がりて居られます。お孃樣へよろしくお傳へ下されましとの挨拶を語れば、龍子氣の毒顏して、風邪とかや、顏色はいかゞありし。讀書するほどならば、劇い事ではあるまじく、臥ても居たまふまじければ、出て來り、何とかいひしなるべしと尋ぬれば、菊は首を掉り、いえ〳〵出

もなさらず、姿を見ねばよくは知れねど、どうやら御病氣にもあらざる容子、希有なる事と答ふれば、龍子思案し、その樣な事のあるべき因緣なし。まことに風邪氣ならむといへど菊は肯かず、今しがた學校より無事に戻られしものが、一時間經つか經たぬに、風を引くべきやうもなく、それとも學校にて引かれしかと談話の中に、格子の明く音暴く、そゝくさせし足音は似たりやあのお子にと、障子少し開けて見れば、走り行く俊次の後姿、これはと思ふ間にふりかへり、龍子の顏を遙に見て一禮し、飛ぶが如く馳行きぬ。菊は此體を見るより理由のわからぬ事もあるもの哉。隣家へ來られぬ身の醫者へはよもゆかじ。あの婆め、何恨ありて我を欺きしぞ。えゝ好かぬ。

明日また菊を遣りて誘はせしに、例の老女挨拶に出て、明日試驗あるよしにて、主人附きりにて下浚したまひ、今日一日は外出を禁められ、奥にて算術したまへば、折角の何なれどゝ、いかにも眞實に聞ゆれど、昨

日風邪の空言あれば、之も亦と菊面憎さの餘り、昨日はお風邪と承り及び、お孃樣も一方ならず御苦勞になされ、今日はそれゆゑに外出かなひたまはぬ事ならば、お見舞にも上るべき御氣色なりしが、手輕に御全快なされて、何より結構に存じますと重々しくいへば、老女當意の挨拶に惑ひ手を揉みながら、何、さしたる事もなく、仕合せと早速快くなられまして、其に主人申しまするは、度々のお人にては恐多ければ、此後は御無用に遊ばしまして、お坊樣閑暇さへあれば、遠慮なしのあの通りのお子なれば、何時なりとも參堂まするほどに、態々のお使には及ばぬ事ゆゑ、よく御禮を申して此後をお斷り申せとの事なりといへば、菊は勃然とせしが、さあらぬ顏して、いえ〳〵、お隣なれば日に幾度參ればとて知れたるものなり。つひ一昨日のお馴染ながら、お孃樣後にも前にも只一人の御兄弟なる、弟御樣を十歲にて亡なされ、同じ年頃の男の子衆を見たまへば、徐に亡人を憶ひ出したまひて、懷しさの餘りいとしが

らせたまひ、此方の俊様は別けてお心入一層深ければ、折々は遣はされてと、無念ながら愛嬌殘して戻りけるが、龍子を見るより堪忍の紐寛みて眼色を變へ、義理も世間も知らぬ一家内、ぞんき、そつけなしのいつこく物、もう〳〵腹が立つて〳〵と胸を擦り、あのお子を引出して生膽でも拔くと思うてか。あのゝものゝと出まかせの空言八百、此方へ遣さぬ算段ばかり。あの老女が顏を見れば、口上聞かぬ内から腹だゝしく、今宵は闇なれや、あの老女めを前の小溝へ突落し、腰骨いやといふほど踏むでやらば、せい〳〵として溜飲も下るべし。二度と再び隣家へのお使は、何卒御免なされまし。適には富にも御用仰せつけられて、あのむかばら立きつとおもしろき喧嘩して戻るべし。翌日は態と富をお遣り遊ばして御覽せよといへば、扨は今日もお斷りか。明日の試驗の下浚と、何をいふのやら知れませぬ。其も其にてよけれど、お聞遊ばせ、よくよく物の心得なき不躾もの、勝手な時此方より遣はせば、以來誘引の人は御

無用とは、毎日うるさしといはぬばかりの口上、もうお孃樣、俊樣をお呼び遊ばすは思留りたまへ、あのお子がさほどまでにおいとしうて居らせらるゝかといへば、龍子は力を落し、不快なる顏色にて、われを可愛がりたまひし校長のお子は、四年前に亡なられたるが、面影お隣家の子にそれはそれは生寫。其お子我にいかなる因緣ありけむ、姉のごとく馴染むほどに、我も捨難き思ありて弟のごとくいつくしみ、それからは一日も顏見ねば、心すまざるやうに愛情濃くなりけるに、無殘な事をしてけり。美しき菓子、奇麗なる花など見るにつけ、其子の姿今に眼前を去らざるほどなるに、俊次樣が其儘なる面影に、むかしの愛情移りていとしくて堪らず、それゆゑの執心なれど、小野樣にては何を怖れて俊樣を貸したまはぬか、思當ることなし。

かへす〴〵も不審なりと、龍子生涯考ふともこの理窟ばかりは會得すまじ。此舍兄――大事なる戀の本尊が――容姿に似氣なく木か、竹か、恐

らくは石か、鐵。龍子よしなき人を思染め、氣の毒や、よき一苦勞せねばなるまじ。谷川と戀路は棧橋なくては渡るに危し。思染むるといふはわけもなけれど、其心を知らするは容易ならざる上に、なほ容易ならざるは、其思の達くことなり。戀ひし人を捕へて矢庭に(ほれました)と打付にもいひ難く、よしやいふにしても其人眞實にせず、呆るゝか、驚くか、恐るゝかの三つを出でじ。不用物ながら(はづかしさ)附纏ひて、むざとは手も握れず、文もつかませ難く、さればとて雪の下萠石清水は、詠歌にこそよけれ、正物を正にやりてはつらきものなり。其には棧道を地道に渡り、行く所へ易く行く可し。

俊橋が一二ヶ月前に此處へ轉居せるまでは、この家長々空家にて、窓下の垣根は破れ、戸口には草茂り、住まざる家はいとゞ荒れて、汚く見ゆれば來る人更になく、薄井は見るにつけ、此破屋の不潔なるばかりに、我家の趣大いに損じて、是非いかにともせねば居心惡く、出入の度の氣

懸と、地主に談じて此家を買受け、取壞さむとまで思ひしが、地所は賣らざるとの事に、此家一つ買うて清潔にしても、地所我有ならねば、また安普請の借家を建てられては、幾度買ふとても際限なしと、持餘して其儘に過ぎけるが、俊橋此處に移轉り、磊落主義のかまはぬ男なれど、傭婆壯健に働き、拭掃除丁寧なりけるほどに、やうやく人間の住むらしき家にぞ今はなりける。

されどあの家に住むといふ家主は、何人と樣子を見れば、大學生なりといふより、程なく身を定むべき女子には眼に入りやすく、商人、職人、デシマル官吏ならば、度外の物にして唾も懸けざるべけれど、われに敎育あり財產ある身の夫にして、名譽あるべき末は學士と思ふに幽しく、他人知らねど俊橋を覗きし事ありしに、わけもなく其姿に迷ひ、此人ならばと心もや〳〵せし上に、ふとせし所より俊橋の行狀學力非凡なるを聞込み、裏表揃ひしは得難き男なり。身持の磊落なるは嫌ふべきにあら

ず、當今の書生の氣風文弱に流れ、女々しくて心に染まざる中に、只一人著しく氣節ありげに雄剛たるは、末々名を成したまふべき男ぞと、大千代をふりたる女子の見識を立て、さなきだにわるからぬ思の熱度増しけるより、此一念は可恐しく、嬌羞も捨てゝ俊橋が出入を、窓より覗く心入れのしをらしさといとしさに、靡かぬものは繪の柳、簪の薄、人間といふ人間は、堅くとも武くともじたく〳〵となるべし。小野樣は此道などには疎きゆゑ、日々に覗くほどの眞實を、我ゆゑか、何ゆゑか曉りたまはざると見えて、しら〴〵しき顔色と、身悶えしてもどかしがりけるが、不便や龍子は知らず、俊橋無妻論を守りて動かず、女子は惡魔一樣に見做して、俊次にまで近くなとの先日の意見を聞かせなば、思ひつめし心失望に狂ひ、親の泣く事も起らむに、さりとは世に例少ければ、俊橋にも戀なき事あらじ。此心を通せむには良媒なくてはと、俊次を懐け初めしに、再び來るべき希望なくなり、此戀の基礎家の

建たざるに一ヶ所崩れたる心地して、案ずれども外には手なし、何ともして再び俊次を馴染ませ、その縁に繋がりて俊橘に近寄らば、此戀よしやならざるまでも、くよ〱われ一人いたづらの物案じして、幻燈の花を詠むるごとく、餘所にあくがれむよりは、いゝ、いやみなしになンと親しく物言ひ、思ふまゝに姿をみらるゝがせめてもなり。再び俊次出入せしむかしに還す手段もがな。

(六) 縁日

植物園に若葉茂りて日色濃く、風やゝ薫り初めて夕暮ぞおもしろくなれば、牛込神樂坂毘沙門の縁日賑はしくなりける。夜目には白きもの配合よしと、今年は誰も被て晝は曠にもあらねばと、薄柿地に白き石疊の獨逸フラネルの單衣に、黒縮緬の袷羽織を重ね、蟬表に白天鵞絨緒をすげたる木履に素足なり。結立島田に紅梅重の巾廣なる葛引をかけて、銀簪一本あつさりと粧りたるは、夏向粧飾過ぎしは見る目熱くるしく、これは一雨に色あせたる殘花を洗ひ、新緑に山の姿涼しく、薄々と有るか有らぬかに肉白粉して、口紅の少し濃き方は上品なり。此粧にて毘沙門へ龍子、婢女の菊一人を連れぶら／＼と出懸けしが、書生を見ればもしやと心動き、盲人の琴も小間物屋も身に染まず、若き女連は雜閙の中には男子に侮られ、わざ／＼肩摩はれ、聲を懸けられ、狼藉の可怖しければ、

人足少き方を拾ひぬ。前方より夏洋袴に黒羅紗の制服被て、金釦きらめき、角帽子目庇高に、手帳二三冊小脇に大跨つか〳〵と來るは、姿其人に似たり。われ家を出づる時留守なる樣子なりければ、今お歸路か。然にしては道が違ふに、やはり此所の緣日をひやかしにかと見れば、胸躍きて呼吸は喘みぬ。珠を索めなば圓石にも眼移り、花にゆかば雲にも心動きて、戀人大學生ならば、角帽子冠れる人、さもなき金釦の洋服被る人をも見逅さで、無益に心をときめかす事多し。近づくまゝに瞳を定めて視れば、紛れなき其人なるに赫となりながら、不思足を留めて脇を過ぐるを、菊を小楯に手巾を顏にあてゝ見遣れば、嬉しや其人も見向き振かへるを、熟視れば罪な！似ても似つかぬ武者造、圓き眼と太眉の間狹く、こはらしき男子なり。氣脫して眞實の其人の事ふと思ひ出づれば、そゞろ歩行もおもしろからず、早く歸りて小野樣の門を過ぎ、間が好くばお聲を聞き、さもなくても窓の燈火の影を見ば、此内にゆかしき人何

をして居たまふかと、あたらぬ想像もせめての消愁。菊もはや歸るは何厭かと問へば、不自在に縛らるゝ身は外珍しく、お草臥遊ばしましたか。坂の下には植木屋澤山に聚り、お好なるかわゆらしき根上り松やら、色ある草花のあるべければ、一寸なりと見て歸りたき願。其に鐵藏（車夫）の話に、まことに巧なる菊の造花ありとの事なれば、其も次手に探して、お氣に召さば一枝買うて、お座敷の籠花活にさしてお詠め遊ばさば、風情一入なるべし。はや前途までは一跨ぎ、少々御辛抱遊ばしまして、いよ／＼御足勞れたまはゞ、此菊おぶひ參らせむと笑へば、龍子も笑ひて、老人の車夫よりも氣勞はしきものよと、まづ其言葉に從ひ六七間辿りけるに、菊立留り龍子の袖を引きて、吹矢筒を垣のごとく立列べ、ボオルの小的紙羽の箭など、これに附屬の品々を筵の上に列べし店に、蟻のごとく男の兒の取卷きたるを指さし、お孃樣、あれ御覽遊ばせ。何えと眼き込めば、黑煙立つかゝんてらの前に、淺黄地に白き棒縞の浴衣の洗晒せ

し筒袖を被て、大黒帽子を冠れる十二三の男の兒が、白木綿の卷帶の間より、持古りし小形の墓口を開き、銅貨一二枚取出し、三尺ばかりの筒に箭十筋ほど買ひて立上りながら、其筒をふつふつと吹きて、たしかに曲つては居まじきかと店の老人に聞けば、大丈夫、もしまた曲つて箭の通り惡くば、何時なりと交換にお出なされといふに首肯き、大勢を掻分くるは俊次なり。龍子是はと歡び、早く留めよと菊を推遣れば、小股走りに後より俊次の肩に手を懸け、俊樣と呼べば驚き振向き、帽子を取つて會釋する所へ龍子近寄り、お珍しや俊樣お一人かと尋ぬれば、丁寧に時誼して、はいといひながら帽子を冠らむとせしに、手の箭ばら〳〵と翻れければ、龍子膝を折りて拾ふを菊も手傳ひ、取集めて俊次に手渡せば、一禮して左樣ならばとすげなく行かむとするに、あわてゝ龍子呼留め、御一所に參るべし聞き度き事もあればと、菊と二人して左右を取卷き、其筒を我持つて上げむと、辭むを無體に菊に取られ、其を置去にす

るもよけれど、此間あれほどの取扱ひを受けながら、何一つ心に染まぬ事もなきに、ふり切つて遁げむも、子心に人情忍び難く、傍の說諭を誰か來て耳の根に囁く思して、心ならねど連立つてぞ步みける。あれほど使者を上げましたに、なぜ遊には來たまはぬ。此間は眞實お風邪を召してか。其節の試驗は什麼にと龍子に尋ねられ、痕蹟皆無の空言なれば返答に行詰り、はいとばかりにて何も言はざりしが、思ふには、舍兄の說諭をよく〳〵考ふるに、更に合點ゆき難し。我幼くして兩親を亡ひたれど、世間には母親あり、姉二人もあり、妹もある子幾人もあれど、彼等は一々乞食になり果つべき行末か。學問出來なば覡賣も博士となり、大臣たるべしと我は思へど。其に同級の清水ごときは、家富みて婢女四五人もあり、姉もあり、妹もあり、兄の妻やら母親やら、奥は大概女人ばかりの中に交りながら、優等生ならずや。之を思へば舍兄の言葉は一々道理なし。其に、かくまで我を可愛がりたまふ女の懷しさはと、幼稚

に母親持たざる心には深く感じて、舍兄が說諭の後も、愁きにつけ、嬉しきにつけ、思出でらるゝに、今又逢へば例のやさしきに心消々となりて、舍兄が叱らずは此女の弟にもなるべきものをと龍子を見れば、慈愛温和、情、深切一つに溶解て漂ふ眼に、いつも微笑ありて得も言はれず、見るほど心融けて、假初にも此女の面前には惡德萠し難く、暫時談話途切れし中に、俊次突然、姉樣病氣といひしは空言なり、試驗といひしはなほ空言なり、堪忍したまへといへば、龍子も菊も一齊に、左右より俊次の顏を下視せば、羞ぢてうつむきぬ。何故に空言は吐きたまひしぞ。仔細を語らば骨肉の兄に恨を被せねばならずと、また之に當惑じて口を鉗みけるが、何ゆゑに〳〵と疊みかけて問るゝに、避くべき道なく、舍兄は女人を嫌ひて、婦人に近かば男子懦弱者になるべければ、姉樣の所へは決して行くなとの事ゆゑ、我は行きたけれどその言葉は背き難く、辛抱して家に在れど、姉樣、昨夜は琴を鳴らしたまひけるよなといふに、

龍子、お家へも聞えますか。さては我へ遊びに來たまはぬは、兄樣の御不承知ゆゑかとばかり口を閉ぢて、不快らしく見えけり。菊は、あの兄樣は女人がお嫌ひとか、珍しき方なりと呆れぬ。俊次龍子の顏を見上げ、明日遊びに參りてもよろしきやと問へば、兄樣に叱られたまひても苦しからずや。いえ〳〵知れては大事なり、陰れて參るべければまた遊ばして下され。龍子歡びて、お前樣に進せましたく靴下の奇麗なを編みて置きたり。其外におもしろき繪あり、本あり、明日學校より歸りたまはゞ、お朋友を尋ぬる風してこつそり來たまへ。きつと待つぞえといへば、俊次幾度か首肯き、歡喜面色に顯はれ、行くべし、參るべし、きつと〳〵。あゝ、あゝ、きつと。何か欲しきものあらば買うて進ずべし。吹矢などは危きものなれば、可成は翫弄びたまふな。何なりと欲しきものは遠慮なくおつしやれといふに、辛く育ちし兒は、思ふまゝの物の手に入るが何より心嬉しく、多くはこれに懷く習慣なれば、俊次は飛立つほどに賴

もしがり、物買うて歸らば兄樣に疑はれむほどに、今夜は何も欲しからずといへば、お家へ持歸らで我方に預かりおかば誰も知るまじといふに、俊次納得して、唐物小間物屋に入込み、振出の鉛筆にぱちんの拳銃を買うて貰ひ、道々もぱち〳〵鳴らし、菊を怖らせてうれしがり、淋しき野道を賑かに歸りぬ。

(七) 狂犬

圖らず俊次に出遭ひて樣子をきゝしに、俊橋女子嫌ゆゑに、弟にもその不潔物には近寄るなと、岩木な言をいひそよしなれど、あの容姿のよさにては、我は其氣にても世間が只置くものにあらず。いかに心を持てば、さる偏屈な事のいはるゝものか。女子嫌などゝはそら／＼しき空言にて、餘所に所思濃かなる女ありて約束既に濟み、修業中は銀河を隔て、一週一度の逢瀨を人忍びて樂しみ、やがて卒業の曉は、立派に式を擧げむといふやうなる憎き契あれば、其方へ情立して、餘所外は見もせじ、挨拶もせじ。必ず其口忘れたまふなと、わが物顏の果報女に悋氣さるゝことを怖れ、女子嫌といひ觸らし、俊次を此方へ手懷くるは胸に一物ありて、それより懇意となり往來せむとの、この心中を見貫きたるか。其ゆゑに俊次がわが家への出入を禁じ、棧橋を絕ちて、可愛や、蔦蔓のからみし

命をむしり斷らむとの情無き所作と、俊橋天性の女子嫌とは思寄らねば、餘所にあるに紛れなし。無念！　わが戀の時後れたるばかりに先を越されと、形もなき女を自身に造りて怨みけるが、俊次が日々に忍びて訪るゝまゝに、馴染重なり隔心なくなり、我儘もいはるれば小言もいひ、心底可愛くなりて遠慮なくなり、俊橋の身上など細に聞けば、韞まず語るほどの心易立になりける談話の中に、兄樣には行末の妻君はや定まれるなるべしと尋ぬれば、あれ程女子嫌のよしを話せし俊橋が、何として約束の妻などあるべきや。問ふもくどし知れたる事實なるにと、龍子が合點惡きを驚顏にて、さるものは決してなし。空言なりといへば、空言とはおまへが知らぬのなり。此事は確實なる方より聞込みたれば相違なし。いや〳〵空言なり。兄樣は女子嫌なればとて肯かざれば、其なりにこの談話は止みけるが、俊次思出して、姉樣に見せたきものあり。其は何？昨日學校の朋友より錦魚と緋鯉を五尾貰ひたるを　椽に盥にいれたるが

まことに見事なり。握むで持つては來難く、家には兄樣居れば、お伴れ申すことはなほ成らずといへば、龍子、我も錦魚は大好にて、其はまた見まほしきものなり、つれたまへ。一大事、兄樣に叱らるゝが可恐しや。さりながら姉樣もお好とあらば、いかにしても見せましたきがと思案し、兄樣の留守を窺ひお迎ひに參らむほどに、一寸來て見て直に歸りたまへ。一寸にては否、ゆるりと見たきものなり。其は無理よ。錦魚見るだけにて歸りたまふ姉樣はよけれど、兄樣に認らば、僕後はにて散々に叱られ、一人憂目を見るは憫然ならずや。叱られたまはゞ我いて、兄樣に詫をいうて進せましよ。詫になりとても來たまはゞ、また其後にてなほ叱らるべし。なるほどゝ、龍子も合點してこの談話もやみぬ。

俊橋尋常の人間ならば、事に託けて對面べき便宜なきにあらねど、女子は惡魔と、自分一人遠くるのみならで、俊次まで寄附けざる事を全く事と實とせば、可怖くて近寄がたし。戀の一念に氣强くなり、鐵壁の其庭の

切戸を押して入るにしても、惡魔と嫌ふほどの女子と見ば、罵りもしたまふ可し、撲ちもしたまふ可し、唾をしかけられ、突出され、よい耻辱搔かされてはおめ〳〵と歸られず。まさしく岩木男か、但し推量通りの風雅男にて、約束の女子に心中立の僞武骨か。交際密なる我ならば、何程の不肖にても其辨別はつくべきなれど、わづか羽目二重より隔絶なき隣同士の近き中なれど、心いはなれ〴〵百里千里萬里、地球と月世界ほどの道遠ければ、朝夕顏は見合せながら、一言も交さぬ餘所々々しき他人の、深しき身上を知るべき樣なし。何よりもさしあたりての當惑は是なり。魚の棲むか棲まぬかを明めずば、鈎を入れたりとも希望なければと思へど、これ思ゝゝふのみなり。分別と戀とは水と油のごとく、一つにはなるまじき性あり。此戀かなはず、此思達らずと、あり〳〵眼に見えても、戀しきは戀しきなり。其面影想像に附纏ひ、寐ては夢、覺めては現、この言葉いひ古るしたれど、此所をいふには別に新しき言葉もなく、有

りとしても之に優りて深く穿たむ一句はあるまじ。戀慕の思に責められ、驅られて、此慾を充さむばかりに精神亂れ、賢者もたあいなき窮策の見る眼可笑けれど、戀は闇か、迷ひ。戀は水か、溺るゝが定規なり。一念屆くか屆かぬかは二の次にして、たゞ見たさ逢ひたさに前後の思慮なく、龍子が今左想右思思煩ふは、せめて俊橋と心易くならば、焚立つ此胸少しは冷ゆべし。嗚呼！ 切なきものは戀なるに、何が快くて他人は戀する？ 我も亦と此思は霎時。苦惱の中に不可說不思議の妙味ありて、之に分別も、義理も、名譽も、德義も、命も、我も皆奪はれて、眞空なる心に(なつかしい)唯一つ殘るものなり。

彼人をと心底思込めば、邪魔、不如意に一念いよ〳〵熱して、火となり、烟となり、果は灰とならではやまじ。

龍子この境界に今陷ちて限無く悶ゆれど、賴みし棧橋は力なくて、とてもかほどの重荷を負うて難所を越え、思ふ所へ到り難し。戀にも守神あ

らば、冥護を垂れて教へたまへ、導きたまへ！
犬の吼聲門外に凄じくすれば、龍子窓より覗ひながら喚鈴を亂打に鳴らせば、菊倉皇來りぬ。(あんちうゑ)の容體は什麽、猛しく吼ゆるは心元なし。何處に繋ぎたるや、鐵鎖を斷ることはあるまじけれど、注意せざれば、往來の人に噛附き一大事あるべし。今吼立つるは吉村殿裏手へ伴れむとて近寄れるを怒れるにや。昨日まではさして狂亂しき氣色もなかりけるが、今朝見れば、眼釣りて血迸り、鼻孔怒りて齒莖を露はし、吼ゆる聲噛附くごとく猛なる中に、絲のやうに細長く、されど耳痛きばかり鋭き聲を引くは、苦痛に堪へざるゆゑなり。あれほどに發狂しては、再びむかしの(あんちうゑ)に還りがたく、近日に一命覺束なし。精神狂ひて誰彼の見界あるまじければ心得よ、門口におかば表へ狂ひ出づる憂慮あれば、早く裏手へ廻さすこそよけれと言ひも了らぬに、後庭の木戸あたりに、わつと叫喚聲凄じく、吼り狂ふ聲の中に鐵鎖の音がら／＼響き、

左往右往に狂奔る足音、そりやこそと二人共に落つるがごとく階子を驅降り、庭へ出づれば、垣の外に吉村荒れ廻る犬を制しかね、手足に數個所の微傷を負ひながら、彼方へ引かれ此方へ引き、(あんちうるふ)頭を掉りて頸の周圍の鐵鎖を嚙めど、意にまかせざれば猛然として吉村に飛懸るを、身を替し樣に得たり！と、鐵鎖の端を一振ふつて、骨も挫けよと前足を薙げば、犬はごろりと轉けて勢力弱りし所へ附入り、腮の下より兩耳へ懸けて、幾重ともなく鐵鎖を卷けば、菊こは〴〵庭の切戸を開け、手足に怪我したまひしに痛みはしたまはざるか。我は何程の事もなけれど、折から出遭せし俊次樣は、足首一口にぐさと嚙まれ、匍匐ごとくに遁げられしが、あれ！たら〳〵と血痕あれば、微傷にてはあらじと、犬を引ずりて庭を横に過け、物置小屋の方へ行きぬ。龍子聞くより驚き、あわてゝ奥へ入り、母親にこの次第を語り、俊次は馴染なれば、我これより謝罪に參らむとの言に、他人の祕藏をわが犬に傷けさせ、奉

公人を遣りては事濟まざれば、主人自身行きて厚く罪を詫び負傷を尋ね、鄭重にも鄭重を重ぬべき所、いかにも氣の毒なり面目なくして、我行くは進まぬを、娘からの申出を幸ひに、之を持つて行てよく／＼お詫まをせと、有合せし菓子一折取出せば、菊に包ませ、手早く鏡出して亂髮を撫付け、此いそがしき中に着物も帶も替へて、小野の戸外に案内を乞へば、いつもの老女は居ぬかして出て來ず、俊橋ぬつと現れければ、龍子上氣してわくつく胸に聲震へ、私は隣家の薄井より參りたるが、飼犬この二三日發病して人を嚙むゆゑ、注意をいたせしなれど、後庭の外にて狂ひ、出合頭に此方の俊次樣に嚙みつき、御足に大傷を負はせ申せしとの事に、取物も取敢ず御謝罪に參じました。狂犬の所業とは申しながら根元を糺せば此方の不注意、御了簡もなるまじけれど、過失ゆゑと御免なされましてと、若き女子には大役なる長口上、淀み／＼口中にて獨語ごとし。菊菓子折を差出せば、龍子、失禮ながら御見舞の志るしばかり

なる麁品といふに、俊橋進まぬながら一禮して、あれしきの小事にわざ〳〵の來臨は恐入りたり。犬ごときが嚙みし疵の何事かあるべき、明日にも治る可し、御心配は御無用なり。この品は我受く可き理由なければお持歸りこそ願はしけれと菓子折を戻せば、いえ〳〵つまらぬ品なれどお見舞に參せしゑるしなれば、何卒お納め下されまし。受く可き理由なければ、いかほどおほせらるゝとも受けじ。おゑるしに及ばずとも、わざ〳〵の來臨を我たしかに見屆けたれば、お志のほどは知れたりと言放ちて、領承せむ氣色なければ談柄を替へ、兩親申しまするは、御祕藏のお子樣に傷を負はし參らせ、其も輕からぬよしに承り、氣懸りになりて寢覺惡ければ、是非とも其傷見て來よとの吩咐なれば、不躾ながら俊次樣のお寢間へといふに、俊橋眉を顰め髭を拈りて、いらざる事なり。見たまふまでもなく、歸りて傷淺ければ憂慮なしと御兩親に傳へたまへと腰を立てゝ歸去を促せば龍子居惡く、手巾を兩手に捲き、解き、顏を背

けてもぢ〳〵と立つたりしが、此機を失はじと思定め、其にても濟む心きなれど、私とても心懸りなれば、一目なりと見せて下さりまし。飼犬の罪は取も直さず主人の罪にて、俊次樣の負傷は我手を下せしも同然なれば、御容體拜見の上ならでは、此胸どうも澄み難しと、敷居に兩手を衝き頭を下げ、微傷ならば其傷見せて安心さして下されかしと、眞實外貌に露はれ、思入りての懇望に、義理堅く、實意ある奴とは俊橘思ひたれど、容姿を見れば不潔、不潔！　白粉塗りくり風俗ぞやらくらと媚かしく、是が氣に障りて對坐するさへ不愉快に、〳〵ど〳〵と無益の問答に、男子の神聖を汚さるゝ思して、この大惡魔め、去れ〳〵！　と願へど、流石にそのまゝを口へは出しかね、其お志を聽くからは、寢床にまで見舞たまひしも同じ事なり。此儘お歸りなされよと、會釋なくすつと立上り、打寄する浪を岩の押戻すごとき鰾膠なさに、殘りし二人は顏を見合せ呆れて言葉なし。龍子は奥の方を名殘惜げに見遣りけるが、溜息つき

て去を〳〵立出でむとする袂を菊は控へ、菓子折に指せば、其儘にと小聲に立出でけり。

（八）玉章

萬事の成ると成らざるは熱心一つに在りて、神は至誠を護りたまふものなればと、智略盡きけるまゝに龍子は只管之に縋りて、一念を徹すべきに思案を定め、明日の午後俊橋の在宅を測りて俊次をまた見舞ひぬ。徒勞なりと知れど、遭ふ事をせめてもの心ゆかしに爲て、不撓日參せば、いかな金鐵の情も至誠に和らぎ、つひ我心中も通じてやさしき言葉もあるべしとの量見。少しなりと戀知るものに聞かせなば、他人ながらも涙を飜すべきに、何程道德堅固がよければとて、男子ならずや、人間ならずや。神系銅線のごとく、血は氷のごとく冷き、かゝる人物は父母亡なりし時だに、泣きはせざりしかと憎し。それは覺悟の前なりと、龍子露ばかりあぐむ色なく、昨日も今日も一昨日も脫履に少しの間立ちて、そこ／＼に逐出されながらも、懲りて明日は行くまじとの念は毛頭なかり

き。樣子知らねば(罰あたり)が事もなげに突還へせど、龍子が日々に見舞に來るは生容易事にあらず。最初の日見舞物を突戻され、この志を無にして負傷は淺しと言放ちし次第を有の儘に語らば、兩親も好心持はせずして、世にさほどの義理知らずが二人とあるべきや。たとへ世間不見の書生とはいひながら散々なる所業なり。謝罪にゆきたれば此方の義理は濟みたれば、二度と恥辱掻されに行くなといふは知れし事なり。さてはいとゞ細々とせし通路全く塞がり、取縋るべき蔓なくなればと、戀は慍みて菊にいはねど、たゞあの俊次がいとしさに此後も行きたければ、今日の事は兩親へは無言にして、小野にても此方の手厚き志を歡び、負傷もさしては輕からざる上、日頃の馴染もあれば、我を離るゝ事をいやがる可愛さに、日々見舞にゆきたしと願へば、母親も其負傷重きを氣の毒がりて、見舞にゆくは殊勝なる志なれど、若き男の所なれば、長座は必ず無用にせよとの言葉に、得たり! 家の方は公然に出らるゝ事にな

りて、扱出づるに、此所がまた女らしからずや、一つ衣物を續けては被ず、彼よ此よと簞笥の底を引返して、あるほどのものを着盡し、衣類更らねば帶を更へ、帶更らねば胴紐を更へ、半襟を更へ、櫛を更へ、簪を更へ、根懸を更へ、手巾を更へ、指輪を更へ、束髮に更へ、島田に更へ、一日として更らぬものなけれど、唯一つ不易の一念は、いよ〳〵凝りて、我ながらの持餘となりけり。この心入仇や疎かならねど、俊橘はさほどに買はざるのみか、そも〳〵如斯事が天性厭忌なり。不潔物め！さ男子に色を賣り媚を商ふ、その根性が卑劣卑屈にて虫が好かざるぞ。さる腐敗せし思想を持てばこそ、感覺鈍きこと秋の蚊の鐵牛を嚙むが如けれ。一週餘り一日も缺さず、來る度每に突還して俊橘が不拔の决心を見するに、性懲もなくのめ〳〵と、垣の蕣花女、色々に裝立てゝ見せに來ることそうるさけれ。遭ふを面倒なりと老女に留守を使はすれば、わが歸宅を知りての訪問、一寸なりと我に遭はゞ、後ともいはで今歸ると、情

剛くして動かぬを、長居さるゝはなほ五月蠅と遭うてやればよき事にして、飽きもせで來る事かな。百年玄關に立たば立て。明日からは見事留守を使了せて、一切面會せずむばその一度に懲りて、此後は油白粉の鼻持ならぬ惡臭鰒さるゝ苦艱は遁れむ。かへすがへすも不潔物め！ 昨夜老女のいふを聞けば、あの女子我に惚れたるよし。惚れらるゝといふは思へばうるさくて可厭なものかな。竽を齊門に執ること三年か、老女新しき繃帶持つて來よ、俊次今日も痛むか。

俊橘奧にて讀書の折から、例の時刻なり今にもと思へば、果して案內の聲は龍子と、老女は干せし浴衣に霧を吹かむとて、含める水をぐつと飲み、立上り樣に俊橘を見れば、手を掉りて、見事突還せとかねての吩咐を強むる所作、老女は首肯き、取次に出て留守といへば、龍子承引の氣色なく、お歸宅のほどを待つべしといふを、今日は歸宅は深夜に及ぶと、朝の出懸に言遺かれたれば、一先御戾りありてまたといへど、奧に居る

を知ればさらばと手易くは言はで、少時考へ、俊次様は日増にお快方おはすか。ひよんな事になりて御難澁を懸けまする。犬は病氣の爲に死にましたれば、讐は討てたりといふもの、此よし俊次様に傳へて御心霽さして上げて下され、さりながら(あんぢうゐ)は六七年來の飼犬、昨日今日のお馴染なれど、犬は人なつこき上に小兒衆を好くものゆゑ、俊次様にはよく馴れたりしが、發狂せしばかりに見界なくなり、尾を掉り體をすりつけて悅びしほどの俊次様にも噛みつき、心外なる狼藉と今頃は悔ゐてなるべし。我も愛犬は失ひ、いとしき俊様には遭はれず、此頃は淋敷事なり。大事の舍弟様に大怪我させ申し、兄様嘸かしの御立腹、俊様もまた我を恨みておはすべしと、そればかり氣に懸れば、此心休まるやうにと俊様の枕に添ひお藥のお世話など申し、小野様ともしみ〴〵お話し申して、底よりお心融けたりと見たき願。小野様に謝罪申せば、畜生の事なればと氣易き御挨拶なれど、けんもほろゝの菅なき御言葉に、眞

實は容易ならぬ御立腹と氣遣はし。なるほど御立腹はさる事ながら、今に一週間日參同樣にお見舞申す微衷を、少しなりと酌みたまはゞ、解けたるお言葉もあるべきに、此處より内へは一寸も入れたまはず、俊樣には對面したまはず、日々に參るをうるさきお顏色にて、一言二言をさもいや〳〵なる御挨拶。怪我はさせるにあらねば見舞に及ばずとのお言葉を、推して參るは此方の醉興なれば、其もお道理とは申しながら、尾を掉る犬は撲れぬとやら、人情はさるものならずと我は思へど、よく〳〵のお憎惡お立腹と見えました。其を表面を粧り根に持ちて、我をいぢめたまふやうなる所作は、餘りといへば女々しからずや。如斯せば腹癒ゑむ、心解けむと、明かにおほせられなば、何事もお心まかせなり。存分な目にあはして後、笑ひたまふお顏を土產に戻るべし。お留守とあれば所爲なけれど、もしお宿にならば、慈悲ぞや、遭はして下され。每々參るゆゑに、お取次のあなたもさぞやうるさかるべけれど、隣家ながら兩

にも風にもお見舞の我志を憐と見たまへ。俊様の御怪我心ならねど、小野様今日もし御在宅なるに、お藏れ遊ばせしとならば、明日からはお見舞には參るまじ。今夜御歸り遊ばさば傳へたまはれ、また薄井の龍が來て、お怨言を申して歸りたりと。あなたに賴みますは俊様の事、御如才もあるまじけれど、氣を附けて上げて下され。見ねば我知らねど、負傷はなか〳〵淺からずとやら、其ゆゑに出生もつかぬ片輪となりもしたまはゞ、我俊次様へのお氣の毒はいくばくぞや。顔見たまふ度に、あの薄井の飼犬ゆゑにと一生涯の遺恨を受け、其もよけれど、俊次様の醜からむお姿を見るにつけて、此命縮むばかりの思なるべし。くれ〴〵も大事にかけて上げて下され、賴みますと奥を恨めしげに見入りて、老女に之とやかに挨拶し、手前勝手な事ばかり一人饒舌りてきづい御迷惑な。俊様にも小野様にもよろしくいうて下されと、格子を出て後を閉てながら、土間なる俊橋の靴を見、老女を見、奥を見て之を〳〵と行く後姿を老女

は目送り、奥に入りて俊橋に、今のを不殘お聞きなされてなるべし。世に珍しく志のしをらしき女子かな。一度はしみゞ逢うて、やさしき言葉を懸けて進せませ、それは善き功德になりまする。餘り心入のやさしさに不覺の涙を催せりと眼を擦れば、俊次枕を上げて、老女、今日も隣家の姉樣來たまひしに、兄樣はなぜいつもの樣にお遭ひなされぬといへば、俊橋頭を撫で、流石に今の言葉は氣の毒なりし。我もとよりこれしきの事を根には持たぬを、あの女子は邪推深し。さりながら怒りて歸りたりとあれば其儘棄置け。老女茶を煎れぬかといへば、あの娘子不便と覺さば、そのお見舞の折を開き、一口なりと召上りたまはゞ、念願屆きたりとてどれほど喜びたまふか知れず。心に懸けての品々四折にも及べるを、其儘積重ね、手をつけで今に戻してくれるなどゝ、さる頑固はおほせられぬものなり。せめては是なりと召上り、甘しとの一言を我取次ぎてあの娘子にお聞かせ申したしといへば、馬鹿をいふな！　されどさ

ほどの篤志ならば食うてやらむ。張紙見て甘かるべきものを持つて來よと、磊々落々女人大禁制の偉丈夫も、其姿にあらず、其色にあらず、其情にはつひに和らぎかゝり、カステラ一折自分一人して七分は食ひぬ。明日學校より歸れば、机に一通の書翰あり。見覺なき手蹟、しかも數十人の朋友中これほどの能書はなきはずと、裏書を見れど何もなきを訝りながら、封切りて讀めば、最初に病氣を尋ね、熱き時候は負傷に惡ければ、保養大事の旨を認め、半ばより、昨日は留守に參りてはしたなき言葉の、不敬を悔ゐてゆるしくれとの事なり。末筆に、我百度千度通ふとも、とても對ひたまふまじきを昨日曉りたれば、無益の足踏は思止りつれど、俊樣の病氣きづかはしければ、筆に微衷を言はせむ事を思つき、不躾ながら參らす手紙なれど、これも我よりとならば見たまふまじと、わざと名を記さゞるよしを書きたり。何處までも附纏ひたる所作に、俊橋疑念起り、さしたる負傷にもあらざるを、自分より事々しくして、我

逢はざるより果は手紙に志を見する、龍子の所存何とも合點ゆかず。老女がいふごとく戀ならば戀らしき事をいひもし、書きもすべきに、また一通の病氣を見舞ふには、念の入過ぎたる仕方。扨は俊次の怪我を重く見たるか、其は氣の毒なり、いらざる苦勞さしてと老女を呼び、この旨を語りて、貴様隣家へ行て、怪我は實際させるほどならねば、無益の心配やめよというて來れとあれば、私參るに雜作はなけれど、生面の所へ用あり氣に參るは、事暴立ちてあの娘子の爲に、家内の手前不都合もあるべければ、此方よりも御手紙にて御返事亥たまふがよしといふを、一理ある分別と、俊橋女子ならば、能書の返事に愧ぢて、代筆を賴みもすべき大惡筆の上に、折から墨液盡きたれど手近に水なし、磨るも亦面倒なりと唾液まじりの薄墨にかすれ書の、亥かも艶氣なき挨拶一通りの手紙を返しけるに、其夜の九時過手紙龍子より來り、眞實お心解けて世に嬉しくと、其のみ文章を變へて繰返し、あの御返しの玉章は、是迄七日

餘の情無さにては、買難き寶と大事にして、肌身を離さずとあり。肌身ー肌身を離さずとありけり。

（九）惡魔

其後は自身來ぬ代りに、用もなきに日文降るがごとく、いづれも俊次の病氣を尋ぬる文章なれど、末筆には、俊橋よりの文を肌身離さず持つことを、無上に悦べる心を認めざるはなかりき。身體來ぬと思へば文が來ると、俊橋またうるさく思ひ、後には開封せずして投出すを、老女傍より、あの娘子樣が折角のお志なればと、賺し宥めて讀ませけれど、どの文も前文と變れる事なく、總計八通目の日より、俊次の負傷紀念の痕を殘したれど、牙は筋を絶たず、毒骨にいらで、歩行風可笑くもならず平癒したりければ、其日より學校へ通ひ、午後歸れば俊橋の眼を忍び、龍子に對面に行きけるに、見るより抱附き、なつかしや！ はや門外を歩行くほどになりたまひしか。龍は一方ならぬ心配せしぞといへば、俊次其所に俯して、姉樣の御眞實我死すとも忘れじ。病中は一日も怠らず見

舞うて下されたを、兄様は申せしごとく女人厭忌の性なれば、門口より逐還したまふを、我奥にて臥ながら知つて、逢ひたきやらお氣の毒やら、床にゐる空なく、匐出して喙を容れむかと思ひしは幾度なれど、譴責るゝが可怖しさに得言はざりし不實は姉様免して下され。なほまたお見舞物を有難う存じましたといへば、龍子紙に菓子を取分け、俊次に勸めて、(あんぢうゐ)が齒深く入りしと聞けば心も心ならず、それゆゑに疵も見たく、介抱もせまほしさに、あのやうに日々お見舞に參りたるに、兄様對はしたまはぬより、手紙を其後は度々進せましたが、兄様は一々御覽なされたる御様子か。見ましたる様子なり。其はともあれ、先づ疵を見せたまへといふに、足を出して、これほどの事にて濟みたりと、二寸餘の口の痕を龍子は撫でゝ、氣の毒なる事をしたり、堪忍したまへや。何のこれしきに。聞けば(あんぢうゐ)はあの病の爲に失せけるよし。學校の道なる酒屋に八といへる惡犬あり、往來の小兒を威す事の惡さに、其

内に(あんちうゑ)を伴れ行きけしかけて、散々に嚙せむと樂みにせしを、無念なる事を忘れたりといへば、龍子笑ひて、また好き犬を飼ふべければ、其を可愛がりたまへ、それも可愛がるべけれど、(あんちうゑ)の馴染は忘れ難し。他人より我には特に懷き、撲てど齒を向けず、蹴れど啼かず、我戸外へ出ぬ時は、家を繞りて悲しき聲を立て、果は後庭の垣の破目より首を挿入れ、くん〳〵と啼くことのいぢらしさに出てやれば、毬のごとく轉げて足に纏はり、袂にからみ、其喜悦は譬ふべき樣なし。世間に犬はあれど(あんぢうゑ)のやうに、我を慕ふはまたとあるまじ。此度のはいかな犬か知らねど、とても(あんぢうゑ)ほどに可愛からじ。平常我に忠實なりしを思へば、この怪我ごときは何ともあらず。只此世に亡き物となりしこそ悲しけれといへば、龍子も喜び、その言葉にて(あんちうゑ)も成佛すべし。やさしき心に我も倶々嬉しきぞや。その俊樣の兄樣は、一つお腹に宿りながら、無殘に情無きは何事ぞ。畜生すら慕へば、

人の情は俊様のやうなるに、この兄様は、胴慾にて、人間の思のあれほどなるを、知らぬ顔とはと俊次に恨がましく言懸れば、兄様とて情なきにあらねど、女人厭忌ゆゑ是非なしと容して下され。姉様が御深切は我病中にていよ〳〵知れたれば、必ず此志に酬ゆる時あらむ。やさしき姉様のやうなる女子を、眞實の姉様に持つならば、我をいとゞ可愛がりたまひて、其欽喜さはいかばかりならむといへば、俊様其口に空言はなきや。我も眞實の姉になりたけれど、其には俊橘様の奥様にならずばならねど、兄様我をお厭忌なされば、眞實の姉になるべき便宜なし。さりながら我志に酬ゆる心あらば、一大事を頼まれて下されたまふか。何?まづ何なりとも頼まれむと請合ひたまはでは口外せじ物をと、様子あり氣なる言葉に、いかなる大事かと兒心に氣遣ひながら、平常の深切骨に徹り、此禮には何をか、別に我から奉公すべき事もなければ、何ぞ頼まるゝ、用事もあらばと、心懸けし箭前のこの言葉に、大事とてどれほどの

事あらむやと膝を進め、姉樣の御賴みならば何なりとも、遠慮なくいうて聞かして下されと、確然に心底より出でたる返詞に、龍子言はむとしては躊躇ひけるが、俊樣、兄樣へお手紙を届けて下さるべきや。え。お否か。いゝえ。届けて下さるか。え。年齡ゆかぬとてお前樣も男子、一言は金鐵とあるに、きつと請合ひながら其は卑怯なりと責むれば、俊次當惑して卽答にゆきづまりけるが、大人びて小腕を組み、思案の體なりしが、あつと顏を上げ、其お使請合ひましたといへば、龍子夢かと驚き悅び、むづと俊次の手首を摑みて引動かし、其は實か、あの實かえ其は。えゝ嬉しや〳〵と、つひに見しことなきまではしたなげにいそ〳〵して、書篋の抽斗より、かねて認め置きたる一通を取出し、さらば首尾よく之を届けてたまへよ。其お禮には何なりと好きな物を買うて進ずべければ、これと欲しき品を名ざして置きたまへ。今宵にも調へて、明日は參らすべければといへば、俊次一通を請取り内懷中に入れ、きつと兄樣に見せ

ますほどに安心したまへ。落さぬやうに持つて行て下され、そして他人には老女にも見せぬやうにして。あい、其はよく合點して居ります。さりながらこのお手紙には我叱らるゝやうな事が書いてありや。但は此間中下されたるお手紙と同じ事かと尋ぬれば、兄様何程の女人厭忌なりとも、其手紙見て機嫌は損じたまはじ。扨はお前様にも小言のあるべき様なしと、事も無げに言紛せば、欺かるゝと知らで、それなれば少しは好けれど、之を持參の咎あるが上に、傳送を頼まるゝからは出入りして、かねての命令を背くかと、叱られでは濟み難ければ、二三日は其罰として外出を禁められ、お顔を見ることかなはざるほどに、我は何より其が愁し。怪我ゆゑに二週間餘も臥て此方へ來る事ならず、やう／＼の思にて今日來たかと思へば、すぐ明日は淋しく獨遊ぶ事かと、心細氣にいへば、龍子は不便彌增し、抱占めて頭を撫で、大分髮が延びましたに、此儘にては夏は毒なれば、兄様にいうて刈りたまへ。此頸の黑さは、黑さ

は、何事ぞ。何日お湯に入りたまひしか、一人にて行きたまふか、我よく洗うて上げやうほどに、今日我風呂へ一所に入りたまへ。今直に沸けばといふを、餘り遲なはりて叱られむといふを、無理留して湯に入れ、龍子手づから垢掻して歸しぬ。

此夜老女が青物買に出でしを、此時と俊次藏し持てる龍子よりの文を、兄樣是をと戰々さし出せば、何ぞと俊橋手に取れば、たしかに其と見覺ある手蹟なり。裏返せば名なし。俊次の顏をゑつと睨め、誰よりと尋ぬるに、退身しながら、あのと口籠れば、少し聲高に誰より。あの。えい！誰より、誰より、誰よりと、其手紙を疊に投付くれば、俊次平伏し、今日遊びに出て歸りにお隣の門を過ぎけるに、姉樣顯れたまひ、この手紙を兄樣に屆けてくれよとの事なり。其樣な使せば叱らるべければと色々に斷れど、是は我平癒を祝ひし手紙なれば、兄樣叱りたまふ理なし。是非屆けよ、持つて行かずば放さじと、無理に懷中に押入れ、くれぐ〵

も頼みたまふに、我も病中日々見舞うて下されし姉樣のお依頼故に、叱らる丶とは知りつ丶持つて參じました。どうぞ其の手紙見て上げて下されと、これ皆龍子が入智惠そのま丶の口上なり。俊次其所に捨てたる手紙を拾ひて机の上に置き、兄樣何卒と泣付くやうにすれど、彼方向きて取合はねば、その手に手紙を握らせ、一寸なりと見て上げてと纏れば、俊橘この所作憎からで、面倒なとつぶやきながら封を切りけり。之を見る俊次の安堵は一時、中には何を書いたるか、また機嫌を損じはせぬかと、控ふる身には魂魄添はず。俊橘六尺餘りの文をさらりと開き、聲はすれど解らぬやうに讀下し讀下し、半頃に到りし頃、可怖しき眼して俊次を睨付けるに、南無三！憂目を見るぞと、騷ぐ胸を靜め、いよ〳〵呼吸をつめて、舍兄の傍は針の莚に坐る心地して、遁出したけれどさ程の勇氣もなく、おど〳〵として控へぬ。俊橘末まで讀み、半頃を見かへし、無二無三に引裂き、丸めて丁と俊次の顏に打付け、おのれ俊次！の

一聲雷のごとく俊次の耳に轟き、思はずあつと立つて座敷の出口まで遁げゝるが、遁げなば益々機嫌を損ぜむと、思返して其處に坐り、袖を噛みながら舍兄を見る眼に憐を乞ふを、俊橘少しも其には感ぜず、この舍兄を懦弱無用のすたり物にせむずる貴樣は、惡魔の子なるか。小野俊橘は惡魔を弟に持ちし覺なし。惡魔は惡魔の棲家あり、なか〳〵此家には置き難ければ、隣の棲家へ往け！ 還れ！ えゝ、立たぬか、おのれ！

(十)　吹矢

艶書を取次ぎたりとて俊橋の不興を蒙り、俊次七日は外出禁制の窮命に學校へ往復の外は庭の土より履まれず、惡戯盛に之は風切を鋏まれし鳥のごとく、身を悶えて苦しめど所爲なきまゝ、久しく忘れたる吹矢筒を思出して、書箧の後に投込み置きたるを取出し、老女を賺して竹箸をもらひ、箭に削らむと机に傷くるを俊橋に叱られ、遁げて椽に出づればまた其處に傷くるを老女に叱られ、果は庭に出て石の上にて削れば、大事の小刀の齒を幾所か黐し、千辛万苦の中より、わづか五筋の箭を玄あげ、新聞紙の羽は力ありてよく風を切るよしと、試吹首尾よく、たしかに四五間は覘外れず、鴉來れ、胴を射貫かむ、雀は眼を一吹にと、箭を籠めたる筒を手にして四邊を回顧せど、かゝる時にはまはり合せて一羽も居ぬものなり。わが庭の疎なる杉垣の隙より隣家の庭を窺へば、栗の木の

繁茂の中に、雀の聲を立てずして木傳ふを見たりければ、得たりや應ー
と筒を取直せしが、慮ふるに、其雀見事に吹きても、隣の庭なれば取り
には行き難し。折角の獲物の手に入らぬも本意なし。外に今に來るべし
と待つに來ねば、任他、獲物手に入らずとも、吹落せばそれが興なりと、
身動き絕間なき鳥の眞横になりけるを、胴を目懸けてふつと吹けば鳴い
て飛去りぬ、仕損せしか、確乎なる覘と思ひしに。箭の行方はと見れば、
其細き枝に立つたり。俊次悅に入り、かほどの覘なれば中らざれども中
りたると同然、はや骨を得たれば、不便ながら此次眼に入りし鳥の命は
わが物、覺悟して宿れと頻に勇みて、我庭には樹木少ければ鳥常に來ら
ず。よき獲物は隣の庭に限れりと、垣越に隅々まで眼を配りて、これに
餘念なき後より、俊次吹きしかとの聲に振向けば、俊橋椽に立てり。今
吹きし箭一寸ほど上りなば、肥太りたる親雀の胴をぐざと透すべかりし
を、無念は仕損じました。少し待ちたまはゞ功名せむと答ふる折から、

ちく／＼と囀る聲は四五羽來れると覺しきに、俊次聲を收めて覗ふを、俊橘庭下駄の音を偸みて歩行寄り、小聲にて我に吹かせよといふ。平常ならば否ともいふべき所なれど、勘氣を受けて罪ある身の今なれば、機嫌を損ねじものと大人しく筒を渡し、箭も籠めたり。何所にと俊橘垣の透より覗けば、栗の木の股に二羽、よしと首肯き、呼吸強に吹切れば、箭には力ありて一線に走りしが、意外の處へ外れけりと思ふ間なく、わつと魂斷る聲繁茂の中に凄じく響けば、俊次は顏色を變へてきよとつくに、俊橘筒を投棄て、切戸を押開き、奔り出づる出遭がしらに衝突る女を、えゝ！　何物と見れば龍子なり。左手に俊橘の袖を執へて放さず、右手に右眼を覆ふる白絹手巾に、鮮血にじみて花の如し。是はと驚き、袖に縋る手を執れば、其手に箭先眞紅吹矢を握れるに、俊橘思はず總毛立ちて霜を浴るごとく、唇の色褪め瞳坐り、呼吸せはしくなりながら龍子を搔抱きて家内へ伴へば、老女は一目血に驚きて狼狽へまはるを、叱

りつけて醫士へ走らせ、うろ〳〵する俊次を怒色に勵まし、手水盥に水を汲ませて龍子が眼を洗へば、水忽ち染まりて流るゝ血絶えず、いかなる事にならむかと見るも凄し。俊次隣家へ行て知らせよ。あつと驅出さむとするを龍子留めて、知らして下さるな、小野樣、この眼を射たまひしは誰ぞ。罪人は小野俊橋。さては貴下が射たまひしか、不具にしたまひしは小野樣かと、箭傷抉らるゝごとく痛むに五音亂るゝを、龍子俊橋の膝を抓みて一念不亂勇を勵まし、とても此不具は世間の捨物、嫁くべき所なし、望なしといふに、俊橋、え！と聲を立て、胸轟くばかり言葉はなかりき。龍が心は文にても知りたまふべし。貴下をおきまして世界廣けれど、外に夫に望なき身の、よく〳〵緣なくて貴下に添はれずば、後世に再產れなむ時節を樂みに、一生は夢の間なり、くやしけれど辛抱して獨身にて果つべき心願なれば、眼つぶれ、腕折れても仔細はあらじ、まして此眼も貴下の箭にかゝりてなれば、反つて本望なりとあきらめ申

すべし。さりながらなまなか眼一つを傷け、兩親に貴下を恨ませ、我をもまた世にはづかしき姿に殘して物を思はしたまふよりは、なぜ命をとりては下さらぬ、殺しては下さらぬ。我口より申さむは、女に似氣なくはしたなけれど、小野樣、貴下も一度は妻を持ちたまふべきに、我思はいかにしても徹らで、貴下が一女子と睦まじきを、滿足の身にしても餘所に見ることのつらきに、此樣なる不具となりて人交ひもならでいとゞ有甲斐なく、戀もせず心も盡さぬ女に、わけもなく大事の〳〵貴下をとらるゝ、龍が心中を露ばかりも察したまはゞ、不躾ながら……不躾ながら……不躾ながら……此身を……妻にしてはたまはらぬか。隻眼の妻はお可厭か、お可厭なるべし。されど此眼は、此命を捧げたる證據、婿引出と思召されて、眞實もの、我に焦れて憂身を窶すさへ不便至極なるに、思をかなへてやらぬ上に我手に懸け、生れもつかぬ不具にして世界に嫁き所なく、人間の娯樂我ゆゑに皆無になりしを憐みたまひ、妾手懸は幾

人有りとも苦しからじ、(只)この龍を妻にしてたまはれ。さらずば此命は何を頼に長らふべきぞ。兩親の悲嘆を見るもつらし、末々貴下の奥様見むもつらし、今は只死ぬの外はと立上らむとせしが、矢傷の苦痛によろめき躓きてばたりと倒るれば、眼を覆へし手寛みて血汐さつと迸り、頬に垂れ、手を傳へば、俊橋飛懸つて抱起し、物をも言はず其眼に唇を押當て、溢るゝ血を吸ひて、小野龍子！ 妻にした！ 小野夫婦萬歲！ と聞くより、龍子わつと泣出し、俊橋の頸首にしがみつくを、兩手にしめつけながら、俊次も萬歲を唱へぬか。萬歲！ えゝ！ 其聲力なし、立て！ 立つて高聲に勇しく……。萬歲！ 勇しく。萬歲！ 兄樣萬歲！ やれ、やれ、やれ！ 姉樣萬歲！ 萬歲、萬歲！

(三十三年八月)

夏痩

（紅鹿子）

（一）

扨もいかなる奴が垣間見けむ、別品競といへる一枚摺を印刷し、東京の區々に普く美形を探り、町名番地姓名年齢より家業に至るまで委細洩さず、少年が散歩の種子としけるに、西の大關は麴町何丁目とやらの酒屋の次女にして十七年と記せり。之に便りて尋ねしに、果せる哉希代の優物。芝居歸りといふを見しに、面貌は芳年が（三十二相）の朝顔を見て楊枝つかふ女に似たり。此にて西の大關とあらば、嘸や東はと姓名を見れば、麻布某町の華族藤村房永長女ゆかり子十九年とあり。地下のものとは品更り、雲鬢花顔さこそと見ぬ內よりあこがれ、道は少し遠けれど、其にかまけて時過ぎなば、丁度の御年頃と申し、高家は御輿入下々より

早目なれば、今の間に振袖姿を見損じて、綠葉嘆の及ばぬに至らむ事の無念さに、用もなき其處の朋友を訪れ、餘所ごとに紛らはしながら、姬樣の樣子を尋ねけるに、至極滿足なる返答を得たれば、戲れ言のやうに、今生の思出、男と生れし身の冥加に、餘所ながら拜みたしといへば、打笑ひて易き事なり。さりながら其人は蓮花草、野原の詠ぎりに果てさせ申さむは不便の御事なりと。奧齒に物の挾まりたる言語。その仔細はと幾度問へどいはずして、關係なき人の身持穿鑿は無益の殺生なり。もしまた媒人などに足下が賴まれしといふやうなる次第ならば、此方も其樣に話すべし。察するに例の好心か、何歲まで氣樂な了簡ぞと、內兜を見透されし上からは、今更韞まむも卑怯なるべしと、東の大關の事を語れば、この米價騰貴の折から、殊勝の御志と、何處までも弄ばれて、もはや返す言葉はなかりき。後の柱に三時の音すれば其男心づきて、御執心の姬君、此處を御通行にはや間もなし。二階へゆきて前面の窓より、瞰

の日配りて必ず見外したまふな。心得たと二階へ飛上り、臂懸窓に倚りて教へられし方角を望み、遲しと待つに三十分不足過ぎて、遙に人力車の此方へ驅來るを認め、女か男かと脊伸をすれど、乘客は孰れと別ねど、低くさしかけたる傘の色の媚かしきは、まさに女人に極めたり。下なる男を喚びて其車を指ざし、あれか〳〵と問へば、たしかに姫君！熟視よと脊たゝいて下へ行きぬ。われも續いて飛下り、ついと戸外へ出て、車と擦違ひざまに視れば、まことに！玉簾の中に生長ちたまひしはまた格別にて、(美)中に(威)あり、(威)中に(美)あり。細面にして瘦せず、鼻隆く眼清やかに小さからず、色の飽くまで白きに、髮は光るばかり黑々として厚きを、高島田に峙て、黃金環の根懸に紅梅重ねの蔦引を結び、藤紫地に秋海棠と片輪車を染めたる一樂織の半襟して、象牙造の頸を伸べたる姿は、何ともかともいふべきにあらず。芋掘のやうなる奧樣もあれど、華族と名乘出でむには、是ほどの姿色なくては、同族の顏汚し。人

界にかゝる女あるよりして見れば、繪にかける天女の醜容さ。よき寶を持つて生れたるよ。よき寶、よき寶とつぶやきながら戸内に入れば、朋友笑ひかけて、御意に合ひしや。雲に梯子のとても及ぶべきにあらねば、好不好をいふは無益なり。

其はともあれ、唯氣懸なは足下が先刻の一言、蓮花草とは、什麼。やはり野におけの心なるべけれど、何とも合點ゆき難しといへば、其男煙草を輪に吹き、雉子の聲〳〵といふ。これは誰も知る蛇食ふと聞けばおそろしの意なるべしと判じたれば、益々見免されず責めかけて問詰めしに、彼も餘義なくなりて少し唇を解き、容貌よりは心といふ事、往昔も如是女ありしよりの諺なるべし。十六の年紫繻子の行燈袴を解かれし折、其對手は讀人不知にして濟ませしが、内證聞けば恐るべし、抱の車夫に唆かされしものといへり。夫には金錢をつかまして暇をやり、十八歳の春まで可成外出を禁じられしが、女普通の物學もさせずして、丈ばかり伸

びむもいかゞと、また一學校に入舍の身となりしに、椋實は磨けど黒く、書も讀み、手も書き、歌もなり、琴も鳴らせど、百藝に替へ難き大瑕瑾は、いち早き風雅をなんまたしける。此度はしのぶの亂れ限り知られず、己より落ちて校長の從弟に忍び、二月餘りは人に知られず、後の事には何の思慮なく、只其日を樂しく暮せしが、春の夜の風暖く、梨花雪と亂るゝ畫堂の欄干に、薄月の曇それは我胸もとつぶやく後に、いとしき人がいつか忍びよりて、そつと肩に手をかけながら、卷きたる小簾をずる〳〵とおろし、朧月夜にしくものぞなきと、其まゝ其處に轉寢の折から階子に音して同宿生が繪具皿を取りに來りしに、ふしだらを見られて浮名忽ちにひろがれば、同年頃の女達が多少か羨ましさの法界悋氣に居づらく、且は舍監の耳に此事のとゞかざりしを斷念の種にして、人目繁きにはか〳〵しき離別の言葉もかはさず、目顏に思ふ萬分一をいはして難なく宿へ下りぬ。事もなくては退舍を兩親許すべき理なければ、十六に

て戀するほどの女は萬事に賢しく、親などはまだ〳〵嬰孩と思ひこめる油斷につけいり、あの塾の某といへる教師が、いやらしき手紙を兩三度袂に投入れしを、其儘しらぬ顏にて十日も打遣置きしに、人なき折を見澄し、我に逼りて恐かりしと、娘持つ親心に、最も可恐しき椿事を吹込み、我口よりは退塾と言はずして、先づ兩親が辛抱せぬやう甘々と說付け、己は何食はぬ好い子になりて退舍せし手際の姦才さ。宿へ歸りてからは暫時殊勝に身を行ひけるが、是も長くは續く事にあらず。二十歲までに二度よからぬ名を立てしが、對手は何者やら今に知れず仕舞。今年二十四歲春色すこしも衰へず、一笑百媚の容粧誰見ても二十歲の內なり。一昨年働きし淫行の可憎は我他人ながら忘られず、過ふたびに其面に唾を吐かけてやりたしと、其次第をこまやかに聽くほど、愛憎もこそも盡果て、此鬼め！おのれ只はおかうかと、此女の淫行から連累の難義に泣きし女子の哀を、著者に語るまゝに綴りて、人は容貌より心なりけり。

此藤村に十三の春侍女奉公に上り、二十三の今にいよ〳〵重寶がらるゝは美代といへる婢女なり。上に諂はず、下に驕らず、勤仕にすこしの陰陽なく、氣質內端にして情深く、女今川が假に人間に化生せずば、如此は行かぬものと奧樣はいつも譽物にしたまへり。

下司の倉忽にしてお末の角が珈琲茶碗を取落し、これは殊に御秘藏の御道具、いかなる目を見る事かと、顏色青ざめて竈前の揚板にべたりと坐り、途方に暮れし處へ美代何心なく來りて、お角どの、何處ぞ病きや。身體は大事ゆゑ無理せずと部屋へ行て寢みたまへ。お奧へは私より其通りをよく申上げう程にといへば、角は氣のなき聲して、お美代どの、大變な事をしましたと、袖の下より三つに割れし茶碗を出して見すれば、お美代も駭き、やゝ是はと手にとりあげて角の顏を視むれば、朋輩思

ひの美代を此上の頼みとせしに、其人さへ當惑して言葉なければ、落膽の餘りに涙を浮べ、謝罪なければ此から直に宿へ下り、親父を同道してお詫に上るより外なしと力なく立上るを、夫程に騷がずとも別によき思案あるべし。今更いふとも還らぬ事ながら、平常あまり粗笨ゆゑ、お前の麁忽は度々にて、私の謝罪も奥樣はお聞飽遊ばせしといひ、此品は殿樣の大事がらせたまふ物といひ、尋常にて此お詫は協ふまじ。其ゆゑに私の當惑、よい智惠あらば助けると思うて貸して下され。宿へ行くもよけれど親父に譴責れるが一苦勞、それも眞實の親ならばと無益なる繰言の、親といふ一字に美代は心を動かされ、わが兩親なき身に引較べて、餘所事の樣には思はれず、思案の體なりしが、腰を折りて角に近寄り、小聲になりて、よい事を思ひつきたれば、必ず心配したまふな。此度に限りお小言のないやうに私が取計ふべし。さればこれに懲りて以來は暮々も心を用ゐ、物は丁寧に扱ひたまへと、破茶碗を持つて奥へ立ちけれ

ば、角は我にもあらず其後姿に頭を下げて安堵の息をつきしが、なほ心元なく思ひて抜足に後より忍びゆき、襖の陰に身を寄せて、内の模様を立聞けば、殿樣の聲にて、十年來これが一度の麁忽なれば恕すべし。心配ひするには及ばぬとのみにて坐を立ちたまひ、此後は注意せよともおほせられぬに、何と理由はわからねど、存外なる仕合せに呆れながら、なほ仔細を知らむと呼吸を殺せば、美代は申譯なしと繰返しながら、其處に無氣味に蹲る樣子なるに、奥樣が、もうよい／＼、あちらへ行けとの御言葉なり。角は急ぎ臺所へ立歸り、奥の間の方を覗きて、美代の來るを待つ程なく、しづ／＼と戻りて、お角どの事なく濟みました、嬉しやと胸を撫下せば、お美代どの。え。お前は罪を着て下されたな。其をどうして。死ぬるとも此恩は忘れじと、歡喜泣に泣くこそ道理なれ。

（二）

他人に慈悲をかくるは慾徳づくにならぬことなり。さればその報酬には、また金錢に買はれぬ事身に廻合せ、因果の不思議なることは說教に會得せずとも、日々の聞見これを離るゝことなし。美代が實意のほどは茶碗の一事にても知るべし。此心萬事に行渡りて、主には忠實なり、朋輩には深切なれば、殿樣にぶつ〱口答する車夫の正吉までが、お美代には心底懷きて、之を畏るれば、おのづから上下和熟して、家内丸く治る事、此美代一人の心からなり。出入の呉服屋、小間物屋、肴屋、八百屋に至るまで、來れば式のごとくお美代の安否を尋ね、留守と聞くときは主人不在のやうに本意ながりて、此人此家に息災長年と祈りぬ。霜ふり氷厚き朝は、赤き手足の酒屋の御用を憐み、まづ引入れて臺所火鉢にあたらせ、暖き茶を汲み、我へおすべりの菓子などやりて、やさしき言葉をか

けてやるほどに、近所に此家の沙汰よく、商人などは藤村樣とはいはで
お美代樣のお屋敷にて通ること、まねもならぬ德の感化は神なり。
これ其人の天成に在るべけれど枡の水は四角に湛へ、敎育本性を鑄て百種の形狀をなすべし。思ふに美代の氣質の柔和にして、情深きは、其身の境遇に惡德磨滅され、美德丸く殘りしものか。もしさらずばかほどの君子に、何奴の惡戲か、八年前の大厄。

言葉に訛なく、容姿に土氣を見ず、今は純然都女の一人なれど、故國は埼玉の在といへり。女親は美代が十二の年、喘息の持病に倒れ、父親長左衞門は小作人の身の無人に惱み、あるならひの繼子苛責をやらるゝが如何にも不便ながら、背に腹は替へ難く、氣質のやさしきといふに不器量極まれるを我慢して、桑といへる壯健女を貰ひし翌年、早々十三の女子を人中へ手放すは鬼々しけれど、慈悲ある主人に就かば繼母の手に合さうよりはと、紹介ありて藤村へ住籠ませしに、藪入の都度村人は見て、

一年ましに容姿を上げて掃溜へ鶴が下りると褒められし揚句は、戸長殿の次男が宿下姿を見染めて、ゆく〱は欲しきやうに長左衛門聞くにはずみて、後雜木山、前麥畠に一生を果てさせむも可愛ければ、小身なりとも苦しからず、東京にて髭ある人に結婚け、聟殿は黑色羅紗のだんぶくろ穿きて卷莨をくゆらし、ステッキとやらいふ杖をつき、我娘は水色縮緬の羽織被て、眉毛は落さず、齒は染めず、大圓髷にゆひて嬌嬈と手を引かれ、裏の蜂屋柿のよき頃に來るのが見たいと、豆粉ひく女房の桑と圍爐裏の對坐に、手刻みの多葉粉を喫しながらの夜話。

此繼母はとんだやさしき女にて、美代が藪入の翌日は、今頃はもう無事に歸つたとの葉書が來さうなもの、また顔見らるゝは來年の事と、名殘惜しさに強留して、馳走といふても東京の奢れる口には合ふまい物を勸め、さぞ迷惑せしなるべし。其上に歸家の時刻遲なはりしゆゑ、もしや奥樣のお小言はあるまじきや。其は一つ、また二つには、日暮れて途中が心配なと、此女病氣に亡せし先夫との間に、これも十歳にて殺せしが、今算ふれば美代に二つ下の女子ありしより、其子のやうに思ひていとしがりしが、美代が奉公五年目の七月初旬、膓窒扶斯此村に流行りて、夫婦枕をならべ、劇症に浴びる藥も効なく、四日といふ間に前後を爭ひて墓なき仕合せに及びければ、永訣の飽氣なきに只呆るゝばかり、さしては涙も出ず、一期の無念や！死顔に遇ひもせずして菩提寺の古井にわが

面影を見れば、もはや此世には水底の人の外には便るべきものはなきぞ本堂に行きて和尚にあへば、眼はしよぼ〳〵として眉毛白く、さても夢の間に老けたまへり！ 久々の挨拶を申してお壯健を喜べど、我を見忘れたまひ、何處の御方かと丁寧なる挨拶。 よく百合花とりに垣を破りて棒にて逐れました長左衛門内の美代と申せば、和尚ひたと驚き、扨もよい娘になられしよな。わが衰老は我知らねど、此方の成人を見るにつけ貧道も明日明後日の間に長左衛門殿の跡を逐ふ身といふに、幼稚馴染の顏の年々に減るさへ心細きに、親亡なりていとゞ世を墓なむ折から、此言葉に胸逼りて、土の下なる雙親なほ戀しく覺え、回向よろしく賴み上げますと、實父、實母、繼母、三人同穴の墓標に、苔石一基の前に念佛稱名申して麻布へ歸りぬ。

其夜より歎き始めて三日ばかりは食事も碌にせず、涙盡きて血を流す孝子の志目前にて、瞼は脹れ白眼に血入染み、六日目より眼病を疾ひけれ

ば、朋輩はいふにも及ばず、主人夫婦、娘に至るまで易からぬことに思ひて、醫藥介抱と家内惣立に騷ぎ、奥樣は部屋までおでましなされ、兩親亡せたりとも行末身の落着を苦にはすな、惡からぬやう殿樣が世話してやるとのお言葉ぞ、我も共々力になりて心配すべしとの御意に。手を合して、最早親なき身の此一命は捧げましたれば、これまでの御恩報しに此お家に御奉公死いたしまする存念、行末ともにお目懸けられましてと、それより種々にいひ慰められ、世間に鬼はなき物とすこし心丈夫になれば、眼病も日に薄らぎ、半月ばかりにてまた舊の如くぞ愛嬌眼となりける。

（五）

奥の一間に喚鈴の音するは、お嬢様の御用と美代が行けば、ゆかりは古銅の一輪挿を前に置き、半開の澤瀉に葉を添へ、無餘念枝振を詠めてありしに、御用で御座りますかと言へば、その水瓶に一杯入れて來てたもれ。かしこまりて勝手へ立ち、水汲みて來りし時は、花は手際に出來たりければ、其に水を注し、打詠めて、此はまた澹泊として一段の風情とお賞め申し、お庭の池の蓮の莟も大分ふくらみましたれば、其中にお活け遊ばさまし。あの花は妖嬌なくて好もしき姿といへば、美代は蓮が好かとのお言葉なり。風雅に心なき私等の、好と申せばとて何處が如何よく、何故にと申す事はなけれど、田舎に在りし砌は家近くに蓮田ありて、浮葉卷葉の陰に小魚を掴み、花は紅白の麗しく、朝氣にぱち／＼と響きて莟を破る心地よさ。こればかりは今に忘れ難く、お庭のを見るに

つけても古里の景色目に浮び、世になつかしき花なればといふ。　其は然もあるべし。　其外にあの花を好く因縁やあらむと、意味あり氣なる言葉に、美代は小首を傾け、其外には何も御座りませぬといへば、其處に切りすてたる澤瀉の莖を取つて美代の膝に投付け、そら〳〵しい！　蓮田といふ人は什麼？　あれ又お孃樣の……御戯談をおつしやりませ。　此頃はめつきりお人が惡くおなり遊ばして、よく眞顏にて其樣な事をおつしやりますと、捗り捨てし葉を拾ひ集めて立たむとするを、もはや隱しても益なき事なり。　來月初には祝言ぞといへど、美代は眞實に思はず、ゆかりを見て笑ひながら、一日も早くそのやうなる身になりたければ、似合はしき男あらばお仲人をお頼み申しまする。　美代、お前はまだ知らぬか。　其は眞實ぞえ。　御戯言ばつかり。　眞實。　御戯言ばつかり。眞實、眞實、其話聞かさむほどにまづ少時といはれ、思も懸けぬことながら、他人の噂にしても青年は聞きたき一條、美代は其處に坐りぬ。

一昨日の夜、われも同席せしが。母様より此事を仰せだされ、似合うたる縁とて卽座に父様も御得心。今日は蓮田が來るはず、其口上次第翌日にもお前にお話しあるべし。これでも嘘か。今に蓮田が來るが何よりの證據といふ時、しと〳〵疊踏む音の力あるは、夫かと二人見向けば、まことに蓮田震策。　お孃様御機嫌よろしく。これはお美代どのと言葉を懸けられ、さつと赧めし顏を背くれば、ゆかゝりはわざと覗きこみて、美代、蓮田にお茶を……。

ぷつつりとも如此話の是までなかりしかば、蓮田と夫婦にならんなどゝは、皆ゆかゝりが放言なるべしと思へど、時ならぬに蓮田の來りしは不審の一つ、これには何ぞ仔細あるべし。なるほど主人夫婦がその存心を聞かむとて、わざ〳〵呼寄せしといふは然も可有様に思はれて、もしや此身の目出度からむ事、眞實――か――ならば機敏なき蓮田様を夫に持つは嬉しき事なり。さりながら、萬事に行渡りたる人の氣褄は取惡きもの

と聞けば、我如きうつとりものには、荷重くしてちと不釣合なる縁談。これは御主人が折角の思召なれど、御辭退申したが此身の爲かと、先潜の思案、ふと心付いて我ながら可笑くなり、洋燈の心を繰上げ、縫かけし襦袢の袖口に針の運びを走らし、無益な事を思ふ暇あらば、今夜中に此を仕上ぐべきものをと、少時は之に心を移しけるが、夜靜なる部屋に只一人、誰話しかくるものなき折からなれば、人は一分時も無念無想にてはありがたきに、また此事浮み出でゝ、一應は虛誕の樣にもあれど、一二年前より御主人も折々此事をいひ出でたまひ、似合しき縁のなかりしと、此身此處を出てはさしづめ不自由したまふとに、確乎とせし事なく過來りしが、聞けば蓮田樣もおひ〳〵御昇進なされ、お交際も廣まり、人出入も繁きに、六十近き御老母一人にてその世話ならざるよし。もはや女房持たすべき時節との噂も耳に入りたれば、其や此やを思ひ合すれば、ゆかり樣の晝程の御戲談は、御戲談にてあらざりしか。丁度鳴る奥

の大時計を算ふれば十一時なり。蓮田樣の御歸りなされたは四時過。其節は用事ありしまゝお奧へも參らで、殿樣より蓮田樣へのお話の模樣は聞かざりしが、さして手間取りたる樣子もなく、日常に變れる事もなかりしが、其にても緣談なりしや。もし蓮田樣わたくしごときに御不承なされて、行末見捨てじとの御挨拶ありしならば、今頃はお奧から御話しあるべきに、更にその景色なきは、蓮田樣御不承知にて、曖昧に其場を濁してお遁げなされしか、其も知れず。されど親人おはすお身なれば一存にもゆくまじく、我は異議なけれど一應話して見ねば、母親何と申すや圖り難しとて、御卽答なかりしやも知れず。されど世間には親の不承知に事寄せ、申込人に否とは言はれぬ義理ありて、我は天地の諸神かけて願はしけれど、親の心にはまた背き難ければと、體よく免けるはある手なり。其手にてもやあらむか。蓮田樣に好かれむを強ひて此方より望むといふにはあらねど、あのものは如何にと、此身をさして申觸みし緣

談を、たとへ難はつけられずとも破談にさるゝことは不面目なり。もしさあらば、蓮田様にまたと顔を見らるゝはつらし。お嬢様にいはるゝが情ない。噫寝ませう、夜も更けた。

（六八）

此事妄想ならで、二日過ぎて美代は奥へ呼ばれ、蓮田を世話したければ了簡聞きたしとの言なり。かねても申上ぐる如く、幼稚よりお世話に預り、今は親なき身の恐多き事ながら、頼みに存じまするは此お家なれば、命召すとありともなか〳〵否やはいふべきにあらず。まして此身を思ひて數々の御心配、有難き心は言葉につくし難し。不束なる私を蓮田樣さへお厭ひなくば、お世話を頼み上げますと挨拶すれば、主人夫婦は斜ならず喜び、當人は勿論の事、母親も滿足にて、お前のやうなるやさしき嫁は老いての力。既に目を注けては居たれど言ひ出しかねたりしに、此は渡りに舟なり。老人は心忙しなく、一日も早く式ありたきとの口上なれば、其は相互の仕合せ。蓮田は知る如くの男にて、人にも才子といはるゝほどのものなれば、亭主に持ちて肩身狹からず。母親は心懸よく、

氣質むづかしかねばら。餘所外の姑のやうにはあるまじ。美代しかと得心か。われ等主人が媒妁ゆゑと、氣の進まぬを遠慮づくに納得するには及ばぬぞ。夫婦は一生の合體、微塵も心合はぬやうにては、後來家内風波の基、必ず遠慮なく、不得心ならば其よしをいへとあれば、美代は、はつと頭を下げて、兩手をつき、過分なるお言葉、勿體な過ぎて此身に罰あたらむかと可恐し。田舍女の私を、蓮田樣こそ可厭にもあるべけれ、私には異存なきのみか、身に餘れる果報、何分ともに賴み上げますると、奥を下りてゆかりの部屋の前を過ぐれば、其處へ行くのは美代か。はい。　一寸と呼入れ、慇懃に手を支ふれば、美代さぞや嬉しかるべし。何事でござりまする。　明日あたりは結納の交換ありて、間もなく圓髷ゆふ心の中が羨しといへば、美代は赧めし顏を下げ、御庇陰にて有難う存じまするとしをらしき言葉に、ゆかりも疊みかけて戯言はいはれず、彈力ぬけて可笑くしよげしが、其は兎も角も、蓮田は外貌おとなしく、

内心雄々しく活潑に、志かも實意ありて如在なく、容姿までがよければ、誰が夫にしても耻かしからぬ人物なり。今より念の爲いふにはあらねど、挿花の稽古にゆく道なれば、以來は折々お前の家に寄る事あるや知れねど、其は迷惑か、お邪魔か。是はしたり、お孃樣のお言葉とも覺えませぬ。汚穢ともお構ひなくば、毎日なりとお宿懸なりとお出下されましといへば、蓮田の家を（むさくとも）とはもう奥樣じみた御挨拶、お手廻しのよい事と笑はれ、これはしたり！と思へば居たゝまれず、一寸行つて參じますと、立上るをゆかりは呼留め、蓮田樣へよろしく。えゝ、もう、お孃樣と遁げ行きぬ。祝言前後は一生の可愁可喜とはかゝる所をいふにや。それにしてもゆかり樣の人の惡さ、これを當世貴婦人氣質と雅踏好の若紳士はよがりたまふとかや。

（七）

女の一生を二つに分けて、嫁入前は花盛。色の香のと左や右いはれながら、己からも浮々して、冬も秋も此世にあるを知らざる景色、餘所目も只美麗なり。嫁入後は實熟りて姿風情に構はず、苦勞多ければ仔細らしくなりて、雪霜を心待に恐るゝ姿なり。この二季を較ぶるに、花盛の短き事風の過ぐる如く、實を持ちてから枯木の烟とふすぶるまではやゝ長ければ、前に愁くとも後には樂しかるべきこそ願はしけれ。

幼稚くして親に別れ、子普通の放意の味知らず、他人の中に揉れながら生長なる事、苔を雨に灑かれ、開けばまた風に挘られてやる瀬なく、春は此梢に長閑からずして、青葉に更くるは本意なし。さりながら、花は人の眺にとて咲くにあらねば、秋の實豐に障る事なくば、仇花三千朶更に益なく、何事も末の吉なるがよし。

美代は花を人に見せず見られず、人間天樂の配當に幾割か洩れて、聞くにさへ不運の身上なりしが、福の裏の貧乏あり、禍のあとには福の座ありて、枝もとをゝにやうやく果熟りぬ。嫁の身の仕合せは、第一に良人のやさしきなり。之はもとより論なけれど、姑の氣むづかしきには、柳も風にしなひきれず、飽かぬ中の生木裂けて、浮世の義理にはと涙を呑む事少からぬ例なり。良人の心は角にても、嫁の手にて丸くはなるべけれど、楕圓にても姑のは、之を捏るに難しといへり。世に生れながらの姑なく、いづれか嫁の花散りてにあらぬはなきに、我も苛くあたられしを、愁きものとの同情はなくて、其遺恨を恨なき方に霽さむとの心は淺まし。いはゞ我子の何がそれほど疾きか。死水もこれが取るものをと舅はいへど、姑はまた老爺殿の贔負が見苦しいと、この病死なずばやむまじ。女を形付けし親は良人と和合に一まづ安堵の胸は撫づれど、つゞいては姑の機嫌に心を惱まし、折々の音信にも、御母上樣を大事にかけよ

とあるは、文面孝行盡せよと見えて美しけれど、其心は（よきやうに丸め置け）なり。此通り姑は荷厄介なれば、まづ媒人に親人あるか、兩親か片親かと尋ぬるは女の母の情にて、有と無とは隨分貧富を入替にすべし。金あるが上に男よくても、親あれば まづ考へ、金なく男惡くとも、只一人厄介なしとあれば、相談の緒に運ぶほどなれば、天下の邪魔物は捷徑の（往來止）と姑なるべし。

大惡飜れば大善となり。溺るゝも水なれば生きるも水なり、虐待るゝに姑の愁けれど、佛のやうならば持たぬ女は可有願ひ、あるものは良人とゝもに百年も壽よと祈るべし。

（八）

蓮田震策が母親は、美代が嫁となりし日より、家政萬端老身に太儀とこれに委せ、己は隱居所あらば引籠り、夜は早寢、朝は晏起、晝は亦樂寢して、嫁に此上なき馳走したけれど、玄關客間居間と合せて僅に只三間の小家なれば、嫁が愁かるべし、如此したくはあらねど火鉢の前に美代が厚意の厚蒲團に樂坐して、可厭ながら嫁の擧止を見張るを、嘸やと思遣れば、成可見まじ、それには近所を徜徉き、留守勝にして樂をさせむとの心はあれど、性來の外出嫌につひ臀重くて思ふにまかせず、せめては一人多忙きに助手と、流しもとなる筍の皮を剝き、ゆでこぼす湯の釜

の下を焚き着くれば、美代は裏に洗物しながら、引窓より立登る烟に驚き、驅付けて之を見るより、あれあなたは何事を遊ばします。さる事は打捨て、昨日震策殿が買うて戻られし小説なりと御覽なされまし。いや〳〵是しきの事は間暇ある身の運動がてら、なか〳〵太儀にもあらず。其方が來てより御大層なる隱居樣になりたれど、それまでといふものは、下女同樣の働ぶり、それが突然に動かぬも胃病にやなるべき。なるほどおつしやればさる事ながら、お留守にかやうな事ありと震策殿に知れましたらお小言あるべし。臺所事は偏に思ひ留りたまへといふを、無理にといふも心を損ずべしと姑は悖はず、やさしき志にほく〳〵と座敷へ戻りぬ。

午後には姑、戸棚の隅より搔餅の袋をとり出し、緞念に遠火に燒きて茶を煎れ、美代と喚べば、はい〳〵と氣輕に答へて、何ぞ御用と來て見ればこの體樣なり。朝からつめての洗物、何程わかき身とて毒になるべし。

天氣は今日一日に限りたるにあらねば、好程に切上げてまた此次にせよ。まづ茶一つ、此處に掻餅を燒きました。震策は餅嫌ひ、それに變つて我は大好物。下歯は入歯ながら意地穢くて此の味忘れ難く、毎年少しづゝ搗きて掻餅を造れど、かうせねば嚙むに難義と、紙のやうに薄ければ、其方には味なかるべけれど、點心には金米糖よりましと勸むれば、美代は會釋し、有難き御志一つ頂きますと木彫盆の上の茶椀を見れば、つひに眼馴れぬ湯呑なり。とり上げて是はといへば、姑微笑みて、子供瞞のやうな紅い模樣の可笑しけれど、ゆふべ震策と勸工場へゆきし次手に其方のにと買ひましたゞ。さあ〳〵暖いうちに澤山食べよ。まだいくらも燒くべしといへば、美代は湯呑を兩手に握り占めて、はら〳〵と膝に落せし涙を、何故の落涙ぞ。泣くほどの事あれば誰に隔あるべき、裏むはつらし、恨めしと身を進めて、心配面色に現るれば、美代は眼を拭ひ、かねてもお話し申せし如く、十二の歳母に別れ、十三の春より藤村樣へ御

奉公に出ましたれば、他人の中に物心つきて、甘露のごとき母親の慈愛の味知らず。此身や阿波鳴門のお鶴にも似たらむ。母が口移しに御飯くれし事もありたらむなれど、其は今覺えず、何のかのと甘え盛を手放されて、肌着も母が手にかゝりしを纏はず、一皿に四つの箸を入れしも少時間にて、日傘さしかけられて後より母親に帶を直さるゝ娘子を見るにつけ、幾度か人知れぬ忍泣に、墓なきものよ此身はと、そればかりが旦夕の遺恨なりしに、今お手づから搔餅を我に燒き、我を喜ばせむとて湯吞を買うてたまはるとは、御志の忝さが骨身に徹へ、其につけても亡母なつかしさの餘り、ほゝ、うつかり涙を滴しました。震策などは其味を知らねば、折々不孝をして我を困らする代り、其方が孝行に尽てくれるが我は何よりの歡喜、嫁の憎しといふ女に、一日其方を貸してやりたし。

（九）

藤村家に蓮田震策の關繫は、藩閥主從の緣故より今に絲を引きて、震策が亡父條藏は此家に召仕はれ、京都より此地へまで隨從して、家扶やうに勤めけるが、震策は內務省の屬吏となりて、親父亡なりし後は足近く藤村に出入り、身に應せし用は遠慮なく吩咐けられ、月々の給料とてはなけれど、相應の惠金を給はりて二代の條藏なりけり。今年廿八まで妻を持たず。もはや好時節世話せむと同僚の妹などを推擧せられし事もありしが、薄給の身にて一人口殖ゑるは此上の難義なり。母も折々は此事をいひ出せど、今少時といひ延して過ぎぬ。されど惡所へ立入る氣色はなく、酒を好むで飮むでもなく、着物にえやらくするにもあらず、親父が頂物の五紋の羽織を縫直して、母が被するまゝ可厭な顏せず、今の若者に希物と譽めらるゝ、外形から大人しき男なり。如此性質は多く世

事に疎く、交際に角ありてむつ〳〵せるものなるに、辯口ありて如在なく、いふ事なす事を見れば確然に浮世才子。御紋所の御はおりを脱ぎて、今樣の裝束つけなば、此省の交際官として何處へも押出さるべし。瓜核顔にて色淺黒く、兩斷にわけたる髮の毛柔かくして末に二三段波線あり。眉濃く、眼圓く、鼻高く、唇薄く、身の丈五尺ゆたかにして、肩少し怒りたる計り、すらりとして外には難なし。懇親會の席には杯盤周旋のうづくしきに思ざしを受け、柱に倚りかゝりて今笑ひたまふお方は誰樣と我名を餘所に尋ねられ、または名刺を所望されて下等印刷の見苦しきを羞ぢ、生憎持たぬといへば紙硯を持參るべし、書いでたまはれなど、此周圍に小袖幕を打めぐらし、この花をあらき風にまかせじといとしがらるれば、(瞋恚のほむらは、身をこがす、思ひしらずや、おもひしれ)と、熟醉の老人までが、濁聲立てゝいやみの一節。桃李物言はねど其下に蹊をなして、いつも果報の壟斷をすれど、これゆゑに亂るゝといふ事なく、

此會の解散怪しと見れば、人目を忍びてぬけ出し、一筋道に歸宅して、假初にも浮きたる心はなかりき。

藤村夫婦も此處を洞察き、亡父條藏は律義一遍ものにて、大丈夫なる老人なりしかど、事によりては頑固が妨げ、圓滑ゆかざりしに引替へ、物堅くて道理のわかりし重寶物とて信用上よりも可愛がられ、祝儀不祝儀の外にも出入繁く、娛樂を見る隨從には何日とて泄らさるゝ事なく、其上奉公人にまで可厭がられず、これもさして世事愛嬌など撒くといふにはあらねど、阿彌陀佛を拜めば我にもあらず慈悲心の萌すごとく、身に備はる德なり。美代と女夫にして一塊に纏めるは惜むべき愛嬌と、殿樣も申されけり。

（十）

新婚の翌日は、男子も羞かしけれど女子は一層羞かしく、まして其日は日曜とて、震策も出勤せねば、狹き家の陰なく、鼻擡合はしてもぢくと、一日を送る美代は、我身を我身との感覺なく、不祥しき比喩なれど、谿に轉けいり、懸崖に生ひし葛の一條にとりつきたるごとく、高くは咳もせけず、身動きもならずして、一生一度の艱苦さは此時なるべし。知らぬ同士はかへつて此如までにはあるまじけれど、藤村に久しき馴染にて、蓮田が夕暮に來ていつもより告別の早き時は、玄關まで送りながら、今宵は何處に待つ御方あるにやなど、下女の角と戯言いふ事あれば、其次蓮田來りて美代が新結の髮を見て、柳橋邊の藝妓が御座るのかと思へば、お美代どのかといはれし事などありしものが、一轉に阿郎――美代とよべば唯と答へ、後から羽織を被せかけ、晩の菜物の好を聞くなど、

狂言の稽古するやうなる心地にて、相互に往時を知り、顔を知るほど、急に亭主風もならず、女房氣取も可笑く、其を笑ふ事はなほならねば、益々羞かしくてたまらず、姑の傍にゆきて少し談話をしかくれば、それとなく震策の方へおしつけられ、いつそ二人の外に人なくば、無遠慮に雨戸を締切り、此家を常闇にして相互に姿を見せずば、思切つて少しは打解けたる物語もなるべし。夜にいれば灯を點さず、また十二時を眞闇にして、いろ〳〵話し續けなば、其次の朝は大分夫婦馴もすべきに、此苦惱さを助けたまふ神はなき歟とまでつらがりしに、震策(粹)を心得、此方より打解けて見せける上、二日三日と過ぎる間に、霧霽れて富士白く、世の中にこれほど嬉しき物はなくなりぬ。

夜は更けねど母親は、次の間にすや〳〵眠り、柱に時計の齒を嚙む音響き、戸外には垣根の一簇草に蟲の聲々、夏ながら秋の涼しさ。鐵瓶烟を吹き洋燈の火影薄曇りて、之を私語の夜とやいふべき。二人對坐にて震

策は火鉢の縁に頰杖つき、われ妻を持たばと、かねての願望は其歯を染めて見たかりし。眉毛も剃りたけれど其は堪忍すべければ、鐵漿だけはつけて見せよと眞顔にいへば、美代は笑ひて、其を可厭といふにはあらねど、今流行ねば見苦し。白歯に馴れし目には若き女房の歯を染めたるは、妖怪のやうに見えてといへど、震策承かず、似合ふもあり、似合はぬもあるべし。其方には似合ふと見立の註文なれば、有難く御受して容姿をあげよ。他人が見て笑ふを氣遣はゞ、當分外出を愼むまでの事なり。さらば買物にはいかにして參るべきや。　その本箱の抽斗に、我曾て使用ひし呼吸器あれば、其を懸けて出なば何の仔細あるべきと笑ひぬ。美代も笑ひて、眞實かと思へばまた御戯言か。さる益なき事をおつしやらずと、はやお寢みなされまし。お床を展べむといへば、震策火を埋けながら、今打ちしは十時ならずや、人間六時間寢れば事足れり。美代は笑うて、毎朝三度までお起し申さねばならぬ方もあり。　廣き世界にはあ

るやも知れず。されど此處にはなしといふ。其様に立派なる口をきかれて明朝は存じませぬぞえ。其方が折角存じてくれぬとも、母親といふ深切な方ありて、呼起さるゝが苦勞なりと欠伸をすれば、美代は火鉢を片よせ寝道具をとり出し、枕紙に反古少したまはれといへば、震策また欠伸して、其邊に許多もあらむ。睡たや睡たや。

（十二）

勝手の水仕業も飯事戯のやうに面白く、用濟めば姑に新聞のやさしき處を讀みて喜ばせ、それより綴衣の針は持てど、急がぬ裁縫なれば精も盡きず、霞策が歸宅の三時遲しと、待つことを日々の勤務にして、うかうか一月餘は過ぎぬ。天氣よければとて姑は九時頃より、知音の方へ無沙汰見舞に出でしあとには美代一人なり。晝なれど——狹き家なれば用もなくてぽつりと只一人は寂しきものかな。かゝる折に猫兒など飼うてあらば、翫弄びて憂鬱は紛らすべきに、猫の毛はよく脫けて食物の中に飛び、心惡きゆゑ飼ふ事は思ひとまつてくれよ。それよりは早く初孫生まむことを賴む。子を持てば猫も犬もなし。目の眩るほど世話は燒くれど、その可愛さは持たぬ人には語り難し。犬猫など座敷に飼ふ女は、皆子なきまゝの心休めと、母樣のお言葉なれば其もならず。早く孩兒を持ちて

可愛がり、二人が中にも此上の情愛の鎹打たねば、眞實夫婦の情濃ならず。されど顏窶れて乳の根張り、美しき女にしても姿の衰ふるものなれば、此身のやうなる醜婦は、さぞや見る影なくなるべし。其も一つの苦勞なり。此間藤村樣へ伺ひしに、御孃樣も、お角殿も、我を女房づくりしといはれしは、はや世帶の脂に染みけるか。時節來れば鮎さへ錆れば是非なし。折から格子戸引開くる音に、立出で見るに髮結の浦なり。一日早けれど明日より三日ばかり、親類に事ありて休みますれば今日參上ましたといふ。扨は定めて多忙かるべきによくぞと、鏡架櫛疊紙油瓶取出す間に、浦は火鉢の傍に襷を懸け、接待煙草二三服ふかして、厚き脣を飜へし、御新造樣、歌舞伎座を御覽遊ばしましたか。良夫が芝居を好かねば其樂みはなしといへば、浦は眼を圓くして、お嫌ひ？おきらひな旦那樣が御見物あるべきはずなし。さらば何日か見物せしを。見た段では御座りませぬ。しかも先日の日曜、さる方へ奉公に上げし娘が宿下

して、是非行けといそがしき中をそゝのかされ、大入なれば豫約なしには場所なく、不本意ながら土間の六に割込まされ、人間の鮨は苦しきものなり。東の高土間に二十歳ばかりのお屋敷風の、それは〱、美しと申すべきか、麗しと申すべきか、女人さへ見惚るゝばかりの女子ありて西の棧敷には雙眼鏡の筒口を揃へてこの一人にさしむけ、土間も、聾も大入場も、一齊にこの女子に首を回らし、歌舞伎座中何萬の人の心を味にせし美女に我も眼を着け、いかなる御身分の御方にやと、娘とも語り隣の客とも話し、幕の間はとかくその女の噂のみなりき。その良夫とも見えかねたる三十恰好の男と、一桝にたゞ二人はいぶかし。御息女めかせし姿はすれど、化生變化の旦那を咀へしにやあらむ。其にしてもかほどの美女に懸るは男の冥利、其顏見たしと心を付けしに、高帽子目深にしてよく〱は知れねど、何處やら此方の旦那樣の面影あれば、それと疑ふにもあらねど、不思議に思ひて、始終眼を配りしに、狂言の間一寸帽子

を脱ぎたまひしを見れば、夢か、現か、それとも之は幻か。御新造様、それは判然此方の旦那様なり。　其は虚！大方人違ひなるべし。　成程始はさも思ひたれど、不用世話ながら何となく心に懸りてならねば、運動場へ立ちて後面よりさし覗きしに、紛なき旦那様にて、人違ひ見違ひといはせぬは、羽織の御紋が（對細角）。世間に似たる人多ければとて、お顔は寸分違ふ處なく、御紋所まで一つとは、餘り類似様が過ぎたりと申すべし、必ず相違ないことは、私が請合ひますと、髪根結ふ元結嚙む齒に力を入れぬ。美代は始終を聴きて、此事嘘に極めたれど、とやかう取合ひなば、一日言爭ひても盡きじ。他人はいかにともいはゞいへ。此心の底にさへ、月影清からば我は其にて事足るべし。我事足らばいふべきことなし。結髪工輩にはしたなき心底を見拔かれむは無念なりと、柔和き女の思慮深くて不快なる顔せず、扨は近頃夜更けて戻りたまふ事の重なるを可怪とは思ひしが、いつも上手なる遁辭に卷かれて、いくぢなくも

疑はざりしが、さうした快樂を他所に拵へたまふか、憎き人なりといへば、浦は勇みて、外貌に神妙を見せかけ、金佛樣のやうな顏したまひて、母上樣の前にては唯々と頭顱も上げたまはず、又あなたには物やさしく深切らしく繕ひたまひながら、芝居にてはその女子と玄なだれながら猪口の獻酬、見るもなか〳〵憎かりし。油斷ならぬを小娘と紙袋とは申しながら、女の夫はなほ以て心は放されず。女房のわれ等が悋氣するほどは、外にゆかしがられぬ亭主にしても、相應の蕩樂をかはかして手に合はぬものなるに、此方の旦那樣は、容色はよし、言行はよし、女の飛付くべき薩摩芋男、これはしたり御免遊ばしまし。諺にも黃金持つての旅は、日暮れて宿らず拂曉まへに立たずとやら、あなたも普通の御苦勞では濟むまじき事なり。私今は四十路越えての婆なれば、わかき時とは違ひて悋氣するほどの根氣もなけれど、七年前に夫を失ひしまゝの寡婦ぐらし。配耦なき身の氣樂さは、おもしろき思せぬかはりに苦勞なくて脊

後輕し。さりながらその亭主には、衣類は肉まで剝かれ、一車にたらぬ家財まで沽却されて、我はいくぢなくも酒樽と揚錢の御用達、泣言のなの字でも言へば、蹴られ、撲かれ、其にても未練ありて離縁もせず。長年我をいぢめ飽きておとなしくなりしと思ふ間に、酒色の毒に骨肉朽りて、紀念にのこるは今の貧窮。されば夫には油斷去がたし。隨分心をつけ、眼を配りて、針ほどの事を見出したまはゞ、棒のやうにつけ〳〵いうて嗜めたまへ。夏季の鮮魚と亭主ばかりは、やいておかねば持ち難しと、いらざる惡智惠をふきこみて、お暇申しまする。

（十三）

我は此世に圓滿の戀あるを知らず。神もし戀をしたまはゞ兎も角も、人間の淺ましさは、此裏に疑念あり、邪推あり、嫉妬あり、暗涙ありて、片時も胸に浪立たぬ事なかる可し。火よく焚ゆれば鐵を鎔かし、寒薄うしては堅く氷らざるの理に背かで、百煩惱も戀の深淺の度によりて、濃淡その權衡を失はず、疑念嫉妬の餘所から見て疾むべきも、いづれか愛情の極ならざるべき。悋氣せぬ女は張合なくして、はずまざる毬を弄ぶがごとしといへり。戀も疑念嫉妬の在る間は紛雜の綾ありて、物の哀もとは此ところをよく詠みたるものなり。されど物は至極に近きて其勢失せ、その形なくなり、始めて有無の界を出づれば、やがて圓滿の地に到りて、我いはゆる神の戀なるべけれど、人に心あり思ありて、此影に情慾躍れる中は、涙に袂は干難く、疑念に花と月との分別つかず、邪推に

(物の裏面)のみ見えて、果は嫉妬の火炎に身を焦し、尻火移りて人の心まで灰となして、戀は全く冷くなんぬべし。之を思ふがゆゑに教を立てし人の賢く、嫉妬を愼めとはいへり。必ずせざれといふにはあらで、其手綱をゆるめなば、奔逸の憂あらむを氣遣うての本文味あり。貞女烈婦は女なり、女は人間なれば、貞女烈婦にも疑念嫉妬のあること、淫女姦婦に違ふ所なし。されど、其慾を愼むと愼まざるとは、一歩を異にすれば東西千里末に到りての相違なり。疑念たとはゞ海水の如けむ、其姓に流動あれど誘ふ物なければ、油を盛り疊を敷き、平和にして恐るべき所なし。風起りては山轉け舟舞ひ、南無や大慈大悲、佛力も及ばじ。

美代は震策の行狀に常住疑ふ缺點なければ、芝居見物に女を連れたりとの、浦が物語は痕跡もなき空言なり。耳の役目と聞きはしたれど、其言葉は信心に染むことなく、震策たとへば不身持の人にしても、さもなき事に尾を添へて、坐興に等しき其場ぎりの無根草、髮結工輩のさがな口

は、心に留むるに足らじと思ひけなしたれど、如此事は聞くに快からで、（さりながら萬一）のむら〳〵の雲おこりしを、我と吹散らし、震策どのに限りては、中々さうした浮氣ものに非ず。母様には優しく、我には實意あるにても知れしことなり。外に増花に戯るゝ男の癖として、其おもしろさに、我家は囹圄か病室のやうに空氣腐りて、閾を跨げば不愉快いはむ方なく、其氣はなくとも家内のものに情無くあたり、おのづから宿泊他所になること、十人が十人まで違はず。さるに震策どのゝ神妙なることは、我目に見てさへ少しも保養めける事なく、あゝしては氣の鬱したまふべきにと思ふほどなるに、何時をやりくりてさる淫行は得したまふべき。まして物堅きあの人が、嘘、嘘、嘘なり。何の思慮なく迂濶と他人の注水に堰かれ、わが添ふ良人を假初にも疑ふなど、我身ながらまことや女人は淺ましきものかな。此上の淺ましきは浦なり。益なき饒舌をして悋氣の喧嘩させ、見物して保養にもならざるものをと、之を浦が

もし聞かば、のろき御新造とまた隣家へ行て吹聴すべし。

藤村家に大客ありて人手足らねば、一晩泊にて美代を借りたしとの使なり。異議なし、前日の早朝より遣はすべしと答へしを、藤村にても世帶持の身は多用なるべしと察して、夫には及ばず、午後よりとの事なり。美代は飯も二日分を其日の晝炊にして、菜も姑が手の懸らぬやうに用意して、震策には氣を付けてと留守を頼み、姑には洋服屋來らばこれ／＼いうて下され、米屋參るやも知れず、其時はこの前貰ひしは稗まじりて迷惑せしと、小言いうて下されなど、こま／＼と頼みて藤村へ出向けば、明日は三十餘人の大勢にて、しかも手の懸るお客樣と、勝手は朝より戰場のごとし。獻立の仕度は料理人來るとてその用意にはあらねど、膳腕器物は自慢の道具ありて、土藏より出せし函を山に積み、襷懸の男女五六人、取散らせる間紙の雪に埋もれ、皿を拭くものあり、揃へるものあ

り。平の蓋が足らぬに、立てよ探せと彼方に喚けば、この鉢の縁すこし缺けたるは今せし粗匆にあらず。去年仕舞ふ時か、土藏から運ぶ時正吉どのが手荒をせしゆゑと此方につぶやき、賑はしき事なり。美代はまづ奥へ挨拶して、煙草も吸はず下女部屋に行き、持參の風呂敷包を手早く解き、平常衣に着かへて、前掛は木綿の新しきをして、大きに遲なはりました。皆樣御苦勞樣と會釋して、己も其處に飛入り、袂より藍臭き手拭を取出し、打冠りて働き始むれば、新手の加はりしに一同疲勞を忘れ見るも目眩しくいそがしき一盛過ぐれば、先一服と美代は下女部屋に行き、角を呼びてつまらぬ物なれどゝ、めりんすの半襟二懸、絹まじりの前垂地一枚くるりと半紙に包み、のしと一筆書の簡畧なるは、氣の張らざる手土産も角は氣毒がりて、此間も頂き毎度にては迷惑といふを、迷惑したまふほどの品ならよけれどゝ烟管をとり出せば、角は立上りながら、自分が吞まぬゆゑ烟草盆には心づかざりしと尻輕に飛行き、奥にて

煎餘の茶に湯をさして倶に持來り、お美代どの大變があるぞえと聲を潛めてすり寄れば、美代は吸付けむとせし烟管の手を留め、其は何事。また怱匆ではなきかといへば、怱匆か拍子か知らねど、餘りといへば呆れもし、お前には氣の毒にて、話はしにくけれどゝ、入口の障子を明けて戸外の人氣を覗ひ、蓮田樣の擧動に變りし所はなきやとは、仔細知らねど心ならざる言葉に、美代は眉を顰め、角の顏をじつと視て、其はまた何故に？震策殿の身に何かありしや。神ならざる身はよもや知るまじ我もよもやと思へど正確なる證據人あれば、後に其者を呼びて委細は聽きたまへ。何やら知らねど胸騷する話の樣子、早く聽かして下されといへば、角は呼吸をはずまし震聲になりて、胸騷もせで何とすべき。お前は御亭主を寢取られたと、聞くに美代は眼を睜り、何？あの震策殿を蓮田樣を寢取られたに口惜くはないか、無念とは思はぬか。他人ながらも腹が立つ、お美代どの、私や口惜い〳〵と、おろ〳〵聲して美代の膝

にとりつけば、そりや寢取られての無念は、問ふにも及ばず、推したまはれ。されど其女は何者――誰。其を聞かして下され。さあ、いうて下されと詰寄れば、いや〳〵其はいふまじ。いうたら氣の良きお前、日頃の恩にからまれて、欲言事も得いはず、欲爲悋氣も得せず、只〳〵と思ひ詰めての果は、名もなき病氣を疾ひて、いとしや死なねばなるまじ。其を思へば寢取つた奴が――女が憎い〳〵憎い〳〵憎い。

角は我一人口惜がりて對手を明さねば、美代はせきこみ、よしや切なる思に我死ねばとて、捨てられし身ならば仔細はあらじ。其女は誰ぞ、拜むほどに聞かしたまへ。もはや此事を明したまひし上は、女の名のみ裹みたまふとも、美代が心には炎焔焚えて、終には之に身を燒くに極めたり、此身不便と思ひ、且は今までの馴染を忘れずば、何人といふことを知らしたまへ。其女もしまた我の知人ならば、頭の一字にても苦しからじ、敎へて下さらば無量の慈悲ぞと角の手に縋れば、角は兩眼に涙を浮

べて、親に陰す事ありとも、お前には何をか裹むべき。さりながら、不言はなか〳〵裹むにあらでお前がいとしさの餘り。もしいうたならば。其は今いふごとく懸念には及ばぬ事なり。其を聞かぬ中は御用も手につかず、今宵も寢られず。お前も此處は立たしはせぬと、思入りての言葉はさも有る可し。お美代殿明しませう。明して下さるか。忝いと拜まぬばかりに喜べば、忝いとは何事ぞやとまた涕泣、其對手といふはお孃樣！　えゝ！　ゆかり樣！　や、や、や、や、眞實かと反問す時、お美代殿お奧にて御用との聲に膝立てながら、今宵ゆるりと話してたまはれ。また前程いはれし證據人とは誰ぞと尋ぬれば、正吉が判然に見屆けて我への物語、彼人も切齒をして無念がり、是非に是はお通知申さむと、二三日前相談もしたれど、今日お出とありしゆゑ、差控へて居りましたなれど、此口惜さは人事とも思はれず……。またお美代どのと呼ぶ聲に、障子を明けて二人とも立出でながら、角は言葉を繼ぎて、晩には

正吉を呼びて委細聞きたまへ。　よき樣に頼みますとて別れぬ。
美代は奥向の用事に立働き、多忙き中にも此事を思へば何をする空もなかりき。空言に極めし浦が話は是なりし。其時は聞流にしたれど、芝居で見たりし女の二十歳ばかりにしてお屋敷風とは、町の娘にもあらず、藝者にもあらず、ゆかり樣にてありけるよ。申すは恐多けれど、お孃樣は年端のゆかぬより浮名ありて、早稲なる性質なれば、この病いつかな已むべきにあらず、如此事のまた何日あるべしとは、お氣遣ひ申したれど、其對手に震策殿とは、神樣も知りたまふまじ。行状堅固に見せられしは外貌なりしか。我連添うての月日は長からねど、此間に氣質の大概は知るべきに、まことにさる不德無殘の人とは見ざりし。確乎に不德無殘の人にはあらざれど、此度の淫行は若輩の過失なるべし。素より人の道には有るまじけれど、男の浮氣は世間に例多く、女も其は其人のはたらきと、大概は見容すべき習慣となれば、我も些細なる事にいやみは謹

みもすべし、藝者、娼妓、賣女の類に懸合ふならば、後腹疾めず始末よろしく、其は一時の放蕩にて世間の手前は濟むべきなれど、人の娘をそゝのかすは、罪深くして遁るべき道はあらじ。まして是は大恩あるお主樣の娘子との密事、末はいかなる難義にや遭はむ。ゆめ／＼悋氣するにはあらねど、この對手は惡かりし。情なき無勘辨の震策どのと、其處に崩折れて沈吟の後に、美代久しく逢はざりしとは、ゆかりの聲なり。居形を正して、只今お歸り遊ばしましたか。其内は心にもなき御無沙汰いたしましてと挨拶すれば、蓮田も無事かとそら／＼しき言葉に、美代も流石に堪忍しがたく、返事なしについ。

其夜の十一時過には支度殘る方なく整ひ、いづれも晝間の疲勞に、洋燈を圍繞きて雜談すべき氣力もなく、我勝に蒲團引ずり出して、ばた／＼と轉けるかと見れば、女に似氣なき高鼾、切齒きり／＼と凄じく、其中に雜りて、油揚の附燒が三枚とあり／＼寐言いふ側に、寐返り打つて足

どたりと棚から物の落ちたるごとし。狹き角の部屋には、角と美代、車夫の正吉、三鐵輪になりてこそ〳〵と語らふ。美代は上手の壁に添ひて、茫然懷手して首を垂るれば、角は膝の上に手を組み、正吉は胡坐掻きて腕組しながら猫脊に屈み、面さし出して美代に向ひ、正吉何と思うて空言を申す可きや、たゞ此中何時出來しや知らず。お奧と下々とは隔たれば、蓮田樣御入來になりても、お二人の樣子を見るべき樣なし。さりながらお前樣が御奉公中の事にてはあらじ。其折からの首尾ならば、お奧へ出入自在の御前樣の限褄に懸らぬ事はあらじと思へばなり。其はともあれ、この淫行の實證見屆けしは、去る十日、お孃樣挿花のお稽古とて、いつもの師匠の許へ御伴致せしに、今日は近所の朋友を尋ね、時間取るべければ先へ歸れとのお言葉に、かしこまりて歸路、本國にて馴染の男に遭へば、之も兩三年前出京して、今は車夫となりて駿河臺下に夫婦暮し、女房も識る顏なれば遠慮には及ばず、數年ぶりの盃せむとて其家に

誘れられ、牛肉鍋にて三四合傾けながら浮世話の末に、國元の何處の小女郎も、はや誰の女房になりて子を持ちたり。誰の妹は誰が手に入れしを、誰がうま〳〵横ばんきりて、鎮守祭の夜を喧がせし抔と、亂話に移りしに、其女房我に無類の別品を見せむといへば、其男が、はや來りしかといふ。今しがた這入りしばかりと解せぬ事いひ合ふを、何ぞと聞けば、垣一重前面の二階屋に男女の密會あり。一週二度づゝ日を定めて、雨にも風にも違ふ事なし。其は賣淫かと聞けばなか〳〵さる卑賤きものならで、身分すぐれし地色なり。女は華族のお孃樣とやらにて、容色は百人寄せて似るものなく、千人聚めて及ぶものなし。萬人に一人は可有きか、其もちと覺束なきまでに思はれて、衣裝は四邊目眩き絹づくめ、屑屋が目にも高家の姫君なり。男は官吏と見えたり。されども風俗とんと下りて、とても其女子に戀を仕懸けむ便宜を持つべき身分とも見えねど、其美男のほどは恐らく役者の素顔など見るべくもあらず。妄推慮に

は、女子から落ちて出來し首尾かと、談話の内も小癪に障り、面白し！其を肴に今一盃といふ所なれど、業が沸えて一滴もはや入り難し。この窓を開けなば機關は見ゆるにや。二階に障子を立てたれば、にくや雲めが邪魔をして拜むことかなはずと、聞くにいよ／＼憎くなりて、此處に獨身者ありと知らざるか。畜生め！驚かしてくれむと立上るを、二人に留められ、成ほど是も殺生の一つか。明日は伯父の命日と辛抱したれど此密會心憎く捨てゝ歸るべきにあらねば、茶漬二三膳淩ひこみ、横に仆れて二つ三つ雜談に時移りしに、女房外面より駈込み、今出て行く所を見よ。・逃したなろかと飛起き、入口より首さし出して覗へば、後向の女の立姿は、晝日中よりも狐は化けまじきに、我阿孃樣に紛なし。魂消て飛込めば、わが顏色を怪しめられ、骨も薄くるほどの美色、眼球が筋斗を打つたと紛らし、また立出でゝ小蔭から、二人連立ちてその前を通るを隙見せしに、女はまさしくお孃樣にて、對手の男といふは――潰れ

し膽の二度潰れ　蓮田樣にてありけり。追尾けむかとは思ひしが、見咎められなば此上くはしく詮義の邪魔と、宿の二人へは何氣なき顏して此首尾を志きりに羨み、其内また〳〵見物に來るべしと、暇を告げて戻りぬ。

(十四)

正吉始終を語りて、蓮田樣はあの通りの堅固人、不義は女から仕懸けしに極つたり。憎いはあばずれお孃、お美代殿何となさる御了簡ぞ。かゝる所にては日常の慈悲は必ず無用たるべし。きつとしたる思案ありて、手強くやつて退けねば女の一分立つまじ。人の良夫を竊みしからは、盜人、盜賊、ふてくされ、主人も糸瓜もあるべきや。此正吉が不承知と、居丈高に詈れば、角も首頷き、我等も對手を主人とて恐れはせじ。此事公然にしたまはゞ、ともぐに力を合せ、屹度讐をとらねば置かぬ。まづ眞當人のお前がしつかり腹を据ゑてくれねばならぬ。さあ、お美代どの思案が聞きたいと、四つの膝を詰寄すれど、美代は頭を垂れて言葉なし。角は急込みて、それ！その樣に氣が弱ければこそ、お孃づらが高を括りて、横着を働くなれ。この角は業が沸えて／＼立つても居ても此胸

がと、歯切をして我膝を搔拐れば、正吉も肩を怒らし、頭を張つたら佛様でも堪忍はゑたまはじ。氣の好いばかりが能ではあるまい。お美代殿口惜くはないのか。いやさ、無念ではないのか。えゝ！腹が立つ！と煙管を撲付けて舌打すれば、こらへ涙の堰きれて、美代はわつと立てしこゑを袂に掩へ、よういうて下された。腹も立てず、無念とも思はず、いくぢなしになり通したけれど、正吉どの、お角どの、い、い、一寸の蟲にも五、五分の魂、くやしい、くやしい、くやしい…………くやしけれども……な……腹は立てられぬ美代が身上。切なさは五臟もちぎれるやうなと身を慄はして泣けば、正吉居直りて、えゝつ、腹が立つに身上も主從もいるものか。不義は誰がしても不義ならずや。遠慮會釋といふ事は眞人間にする事也、畜生には貝にて飯を遣る世間の風習、彼奴は畜生、猫だ、犬だ、喃、お角殿。猫でも犬でも相應の義理は知るに、彼のお嬢づらの非義非道、お前ごとき善人の良夫を寢取るといふは、お

賽錢を盗むと罪は同じき大惡黨。蟲のやうなる作聲して、角や、など、お姫様の皮冠。かゝる惡事を働くかと思へば、あの顔が鬼に見えて凄し。聞けば十六から立派な事せし蓮葉もの、油斷も隙もなるものならねど、餘りといへば人でなしの今度の一條、思ふ存分懲しめずば、第一お前の一分立たぬを、餘所見しては居られぬ義理と、熱心外貌に現はるれば、美代は他人の情を今の身にはいとゞ嬉しく、さまでに我を思うて下さるか、世に忝き事なり。他人すらも無念はさほどなるを、其身にして其に劣るべきや。肉に嚙みつくとも飽かぬ恨は胸一杯。さりながら此身は此處のお家に大恩うけしこと、命をさし上げても十分一も償ひ難きばかりなれば、ゆかり様には遺恨を含むべき様なし。この事荒立つる曉には、お二方の御心配はいくそばくぞ。その御苦勞を思へばこの身一人の切なさには替へ難し。このまゝに濟まさば我だけの辛抱にて足るべし。幼稚くして兩親に別れ、寄邊無く此世にすてられし程、不仕合せに生れつき

たる身の、これほどのつらさはまだ〳〵幾度もあるべし。
骨髓！無念に思へど對手は大恩ある主の娘、憎いといふ言葉は胸までせき上ぐるを、じつと忍びて面色に見せねど、言葉の中にほろ〳〵と落つるは何故の涙ぞ、いはぬこそ切なけれ。良人を寢取る女は憎く、其色に移氣の男は恨めし。さりながら、思へば、其は皆この身の不束よりなれば、恨むとならばわが身の外に人はなかる可し。くやしまぎれに此事を表向にして、不義の中難なく裂け、愛情再び此身に戻るにしても、わが子の惡き親はなく、殿樣奧樣はゆかり樣に嫁入まへの惡名つけたる我を恨みたまふべし、惡みたまふべし。これ御恩をうけし御主に對しての美代が本意にあらず。我思ふに、此を表立つるは火を煽ぐがごとく、堰くにつのる戀のならひとや。我悋氣ゆゑにいよ〳〵愛想つきて、ゆかり樣と深くなるは知れし事なり。それといふは、われとは媒人ありての夫婦中、もとより好き好かれしといふにあらねど、よく〳〵思はぬ女ならで

は、女房捨てゝの戀はせまじ。此方にかほどの弱身あれば、なまじひ悋氣立して爭論の上、出て失せよとあれば去狀もつて歸るべき所なく、其上ゆかり樣の惡名ふらせしお惡しみを此方に受け、恩知らずの人非人とて、とりあうてたまはらぬ事もやあらば何とせむ。身の行所なく分別盡きなば、世間に捨てられましたと泣きにゆくべき所は、兩親ゐますあの世なり。淵川に身を沈むるとも、哀といふべき人一人なく、御主に長く恩不知よ非道よと惡まれ、震策殿ゆかり樣には淺ましの最期を笑はれて、捨つるにこの心の證明たつ命ならず。無念の中にもおとなしくせば、お主樣には御恩がへしの寸志屆き、二つにはかはらず良人を大事にかくる情に、かの人も絆されて浮氣もいつかやむ時あらむ。さては短慮の犬死にまさりて、今のくやしさをとも〴〵昔に語り、雨降りて地堅まる行末を賴みに、此眼はつぶるゝまでも泣き、此胸裂くるまで無念を忍びて見るべし。お前二人は我を思ひ、さほどまでいうてくれるを、わが意氣地

なき了簡聞いて、相手にならぬ腑甲斐なしと嘸や愛想も盡くべし。されど我身にしての此辛抱は、對手を刺殺して我も命を捨つるよりは、なほなるまじき事と、腹立てず、笑はず、よく勘辨したと賞めてたまはれと、思ふ一通を述ぶれば、流石二人も天晴れなる心中に感じ、書にでもあるべき賢女と、理に服して返す言葉はなかりき。美代は涙を拭ひて、この事外に洩れては一大事。わが折角の志も煙となるべければ、ゆめ〳〵口を固めて噯氣にも出さぬやうにして下され、頼みまする。正吉どの、して其首尾の宿はと尋ぬれば、何町の通りを二つ目の横町の中頃に、上總屋といふ人力車屋の北隣なる小さき二階家なり。今度一度出掛けて行つて實證見屆けたまへといへば、首肯きて、あゝ！無分別な、若氣とはいひながら。

（十五）

此處は、正吉が見たりしといふ二階に陰首尾の興味は、世帶染みし夫婦中とはまた格別と、震策が阿言にゆがりは眼中に微笑を浮べ、さりながら末は奈何すべき心ぞや、今より其が氣懸なとあれば、震策寐轉びながら、末とは。　末とは末なり。　その末なりが分りませぬ。添ふ事かなはぬといふにや、但しは露顯の曉にやと問へば、其方は美代とて貞實なる女房ある身、此身はまた、先頃佛國より歸朝せしかの法學士に嫁く可き身なれば、天下晴れて添はむなどは、思も懸けざる事ながら、此中もし美代に知れなば。　それは案じたまふべからず。よしや美代が知るとも對手が貴孃なれば、主思ひの美代が之を荒立つる事は萬一もあるまじ。主とて嫉妬に用捨はあらじ。但は之を荒立てなば、其方に愛想盡かされむを恐るゝ迄に、美代は其方にほの字にれの字か、これ蓮田と震策の腋

の下を抓れば、飛起きて、階下にも人は居るものを靜になさりませといへば、唯々といひながらゆかりは笑ひて、いふ事を忘れし。昨夜の夢に、美代が其方に恨の數々を並べゑと見しは心元なきが、美代はけどれる樣子はなきか。其配慮は御無用になさりませ。露ほども變れる樣子なく……。其方を大事に懸くるや。其は知りませぬ。なんの此方にて一通りにするものを、先方より大事にすべき理あるものならず。必ず可愛がるに相違なしと、帶の間より黃金側の女時計をとり出し、時刻を見るまねして、美代が定めて待遠なるべし。さあ〳〵早く歸りて顏を見せよと、震策の肩を衝けば、衝かれて後に兩手を突き、われも法學士ならばかほど手苛くは扱はれまじきにと、喞つやうにいへばゆかりは震策の顏をじつと見て、また法學士か、氣色わるし。此間の約束には、再び我に向ひて法學士とはいはじとありしにといへば、今こそ口にはとやかく言へ、未來の良人にあらずや。其時急に可愛がりたまはゞ覺えて居たま

へや、藁人形に五寸釘。ゆかり樣、男の一念といふものは、世に可恐しきものぞといへば、ゆかりは首肯して、かねてもいふ如く、我良人を持ちたりとも今日の歡樂を捨てたまふな。此方には捨つる心なけれど、危きものよ。　何が？　危きものよ。　何が？　それ！膝にて茶碗を轉かしたり。危きものよと其故に心注けたりしにといへば、ゆかりはやさしく睨みて、我は愚なれば存分弄りたまへ。美代の利發の樣には到底行かじとすねれば、法學士といはるゝが可厭ならば、我身にもなりて見給へ、美代々々と更に嬉しき事はあらじといふにゆかりも言葉なく、口說の種も早盡きぬれば、此次の逢瀨はゆるりとゝ顏見合はして笑ひ、立際にゆかり震策を呼留め、古金襴の紙入の中より幾干か取出し、少けれどゝ差出せば、押返して、入用あらば申すべきに、是は御自分のになさるべし。先日のさへまだ餘れるをといふを無理に取らせぬ。

（十六）

其ぞと思うて見れば、震策の擧動に臭味所なきにあらねど、夜歸る事あるにもあらず、もしや役所へ行くとて餘所へ外れるにやと、出入する同僚に其となく尋ぬれど、少しも變る事なし。されど疑うて見ば、朋友も同穴にて、わが前を取繕ふやも知れず、其にしても良夫の我に對する調子の以前に變らざるは不審の第一なり。さりながら髪結の談話といひ、正吉がたしかに見屆けたりといふに、根の無き事にはあらざるべしとは思へど、われ其證據を押へしといふにもあらずして、震策我に強顔あたる事さへなければ、何分にも半信半疑にていづれと定め難し。角に言はれ、正吉が話せし其時は、くやし涙にも暮れたりしが、今にしてつくづく思へば、我心狹く量見淺かりし。さほどのゆかり樣との交情ならば、擧動に幾分かは顯る可きにと、嫉妬すこしく靜まりぬ。嫉妬といふこと

何より起るかと思へば、情人の我を捨てゝ彼に移るゆゑなり。我を捨つるとは、我に情愛褪めてつれなきより、ありし時の濃かなる契に思くらべ、其人を恨み吾身をはかなむ餘りに悋氣は出るなり。つまりは一種の自愛心なれば、我身に受くる愛情に不足ありと感ぜずしては悋氣は成り難し。よし不足を感ぜずとも、目前良夫がゆかりに戲るゝ風情の睦じさを見ば、其人への愛情には我への及ばざる事とて、また悋氣も出るべし。此時には他人中に入りて何程賺すとも慰むとも、この一念は忿たじたと消ゆるものにあらず。されど我に愛情の滿足ありて自愛心發せざるに、御身は飽れたり、棄てられたり、誰といふ增花ありなど、人の中口なりとも嫉妬はおこるまじ。勿論其を聞いて嬉しくはあらじ、また快意くもあるまじけれど、唯それより疑念は湧きて、おのづと氣を廻せば、箒も化物の世の諺、撫づれば撲つ意、可愛は可憎の裏と、萬事につけておもしろからぬ思慮のみ浮べば、その心より出づる此方の言葉も、擧動

も、自然不平を離れざれば、それより不吉なる顏を見せ合ひ、いよ〳〵立派なる嫉妬に仕上ぐるつまりは、合せ物は離れものと天下國家の是が大本たる夫婦の中を(燒繼茶椀)と謠ふは、扨も輕薄なる世間なり。されば美代もゆかりと譯ある中と聞きて心快からず思ひながら、人は情に脆くして、震策がやさしきに絆され、角、正吉が騷ぐほどにはあらで、家内穩かに納りけるが、四五日前より震策の顏色冴えず、多く物も言はず、食事も常より少くして、浮立たぬは、何處ぞ加減宜しからぬにや、早く診察をうけたまへ、病氣は一日の手後にても、可恐しき事になるものといへば、何處も惡き所あるにあらず。さらば一方ならざる心配ありて、其に屈託したまふなるべし。さもなくて此頃の樣子はと推して尋ぬれば、すこし役所の事にてとばかり、深く言はねば、心懸な、何ごとか聞かして、とも〴〵に苦勞えたしといへば、其方達の知る事にあらずと、剣らるゝに返すべき言葉なく、其後は苦勞の日に增し面色に顯るゝを、餘處

に見る事のつらけれど、韞みて仔細を明さねばなすべき様なく、不機嫌なる心をとり損じてはと、はら〳〵とたゞ心を傷めぬ。

震策は沈みたる男ならで、善く言ひ善く笑ひ、此月はと、大分氣遣はしき晦日前も浮かぬ顔せず。役所に地震沙汰ある頃、同僚來りて寢食も安からぬなど丶いへば、主なき犬も食うて生きる世の中に、一箇の男子ではないか。其はともあれ、地震必ず有るべき確とせし徴候あるにもあらで、風聲鶴唳のびく〳〵ものが、無根の浮說に我から騷ぎ立つるに何の懸念あるべきやと、多少は其沙汰の根據ありと信じても、心を弱らせじと、大丈夫、大丈夫、安堵したまへとはぐらかして、何時も談話は愉快を種として、世間はおもしろく渡らぬが損との主義なれば、胸狹き女人の縋りて柱と賴むには心丈夫なる人物なり。か丶る男一人ある家內には、十分の苦勞も七八分にて濟み、泣言好の女房も自然と氣に腐敗なくなり、一圓持つても百圓束二つある心の饒に、壽命の十年は請合延ぶべし。震

策顔色蒼ざめ溜息を吐くことなど、其も稀なる病氣の折ならでは、何時が日にも見懸けしことなきに、此の日頃の容體に、美代は不審をうつ段は過ぎて、一方ならざる憂慮なり。病氣かと尋ねしに其にもあらで、押して尋けば女人の知る事ならず、役所に關しての筋なりとは、いよ〱聞捨になり難く、なほ其仔細をとは思ひしが、氣の結ぼれたる時には人の言葉は腹立たしきものなり。まして女人の知る事ならずといはるゝものを差出がましやと、溫讓の女人なればそのまゝ言葉を返さずに已みて、心の中に其か此かと推測れど、我と得心すべき見當つかず、思ひ惱む餘りに、いつそ此事を母樣に打明けてとは思ひたれど、年寄れる人はいとゞ苦勞をしたまふべし。我にさへ聞かせじとの事なれば、惡き耳に極りたりと胸に納め、姑の前はさり氣なく笑顏を粧り、良人に對しては、馴〱しからず、言葉少なにしをらしくとりなして、露を飜さぬ蓮の葉にも、横紙破の風あてゝ、震策の苦き顏は和がず、三日の間に十度とは物を言

はざりし。
四日目の朝は寝過したりとて、朝飯にも及ばずそゝくさと出勤せしが、新裁の綿入に常用の羽織を重ねて着せしを、其とは心付かざる氣色なりし。女人はいそがしき中にてもかゝる事には氣付くものなるに、成程男子といふものは……此間も近藤樣が下前にしつけ緒のついたる衣物をきて見えしと、脱更へし古小袖を疊まむとて、左の袂より丸めし半巾を引出し、また右へ手をいるれば、鼻紙屑一掬もありて、みな役所用の罫紙なり。なほ剩殘あらむかと探るに、出でしは粉藥らしき紙包を袋入にして、見るから勿體らしげなれど、一字の上書なければ何とも知れ難し。されど此處にあるからは、自分の服藥に疑あるべからず。扨は顏色のわるきも病氣なるか。其を押裹むは可怪やと、糊封の口を引裂き、紙包を取出し、押開けば、黒色粉藥なり。よく〳〵視れば茶褐のやうなる所もあり、摘みて拈るに柔かくして、之を嗅ぐに少し焦臭し。元のごとく包

みて袋に收め、火鉢の角におきて、疊みかけし小袖を形づけし所へ、來合せしは懇意の醫士なり。是は蜷川樣！

早速ながら是は甚麼なる藥劑なるや、御覽下さりましとかの紙包を差出せば、蜷川開きて點檢し、美代の顏と藥とを見合はして驚ける眼色なれば、何の藥劑と復尋ぬれば、何處よりお手に入れしぞ。夫は良夫の袂より只今見付出したるなれど、この兩三日は顏色惡く、氣分快れざる容子ゆゑ、病氣かと尋ねしに、さらぬよしを答へながら、我見し所にては何所ぞ惡きに相違なし。かく藥劑を所持するからは必定其なり。是を見てたまはらば病症は知らるべし。腦か、肺か、それとも例の胃病にや氣遣はしといへば、蜷川は眉を顰め、近頃怪しかる事かな。これは男子の用ゆべき藥劑にあらず。血道かと尋けば首を掉り、寸白か、否と膝を進めて聲を落し、□□といへる墮胎藥と、聞くに美代は膽を消し、是がと手に取上げ、しげ〳〵と咏入りしが、扨は！と思當れるを色に出さず、

かゝる可恐しげなる物を何用ありて震策殿がと、蜷川の顔を見れば、蓮田君に限りては淫行すべき男にあらざれば、是に用ありて所持せしにはあらざる可し。さりながら是は直樣取捨てたまへ。母樣は彼方にか、久しく御無沙汰せしゆゑ今日はお門を通る次手にといへば、長らくお見え遊ばさぬとていつもお噂をなされてゞ御座ります。何卒彼方へ。御免と蜷川は坐を立ちぬ。美代は彼の藥劑を摑んで火鉢の前に撻と座し、心細げなる溜息吐いて、いよ〳〵一大事とはなりけり。よもや如此までとは思寄らざりしが、お孃樣身重にならせ給ひて、もはや陰すべき術なきまゝ、鬼のやうなる事を巧み、墮胎藥とは可恐しき男女哉、外に千百も仕樣模樣のあるべきに、この儘に捨置かば、あられもなき事仕出來したまふべし。悋氣がましくていふは可厭なれど、火鉢に倚れ目を瞑りて、この思案に屈するこそやさしけれ。

婦人として、我夫を取るが上に、其の胤を宿せし女の、骨を嚙むまで憎

からぬはあらざるべく、また二心の良人の恨めしさは、男傾城！人非人！我は玩弄物にされたるよと、一徹の女は心狂はしくなるを、あれは嫉妬、淺ましやと餘所に笑ふは情知らずなるべし。美代も二人の中を聽きし時はくやし涙を流して、とても霽らせぬ此無念に、狂ひ死するともと泣きける心には素より無量の嫉妬充ちたれど、墮胎藥と聞きては流石に女心の感じ易く、餘りに情なき業なり、この藥劑過ちてもしや命に及ぶ大事あらば、良人は名譽上のみならぬ罪人となりて、藤村御夫婦は懸代なき御秘藏を失ひ、三方四方の難義愁歎、其なしに濟むも濟まぬも此身一つの了簡なりと、此勸辨が石の扉とも鐵の楯ともなりて、暴るべき嫉妬の一念を留めたり。さもなくしては此道ばかりは、誰にしても辛抱なるべきにあらねど、義理に立つべき白刃はなしといへり。白刃はおろかな事、爆裂彈も人情の前には火焔を吹き難く、其人情が義理には、曲りて折れて溶くらむ。

此日の夕暮、震策龍鍾として戻り、羽織袴そこ〱に脱捨て、火鉢に倚懸り、額に手を當て、吐息の忍びやかなるにも妻の耳は峙ち、様子を覗へば、この兩三日に幾層増せし苦勞の面色。扨こそと合點しながら、そしらぬ風に持なし、好める菜に晩飯を薦め、灯點りて少し經ちし頃、珍菓の砂糖漬を菓子に茶を煎れ、我は機嫌よく浮世話を仕懸けゝるに、震策はうるさがりて生返事の應答しながら、顏を彼方に向けむとするを、美代はひた〱と摺寄り、身は愚鈍にして物の數ならねど女房にあらずや、苦勞あらば相談對手にもしてくだされ。及ばぬながらない智惠なりと振うて貸しましよ。命をかけてならば女の念力、世間一通の事は隨分さばいて見るべしといへば、猿智惠の賢才風、何のおのれがと言はぬばかりに、じろりと美代を見る眼に冷笑を含みて、直に顏を彼方に向くれば、美代はせきこみたる聲音のせはしく、名譽とやら、信用とやらを、千萬人に失うても、この女房一人には、陰したき思召にや。我何程のぼ

んやりなりとて、大事の良人を寝取らるゝを知らであるべきやと、見事に言放つて横にぐるりと體を押向くれば、震策電氣を感せしごとく、此の一言にびくとして身を起し、美代の横顔をぢつと見詰めたりしが、奥の母に聞かせじと聲を潜めて、これ妄說をいふな！美代は顔を向けて、良人の顔に拘るを何を榮にして無根言をまうさうや。二月も前より熟知りたれど、はしたなしと此身を愼み、世間に此沙汰廣まらむ事を氣遣ひて、今日が日まで胸に納めし美代の心を、可愛とも不便とも覺さぬか。露ほども左樣覺さば、出來たる事は今さら所爲なし。一層しか〴〵なりと所嬌なく打明けたまはゞ、對手は大恩あるお主のお娘子、悋氣も嫉妬も人による。何ほどの仔細あるまじきに、非義に眼眩みたるお二人樣、ゆかり樣はあれほどの御利發なり御學問もあり、貴郎は又男といひ格別の智慧あるべきに、揃ひも揃うて無分別なる術計の果は極惡非道なと一段小聲になり、墮胎藥とはそも〳〵何事ぞや。餘りの無法無慈悲に身

の毛が彌立つと、袂よりかの藥劑を取出し、是は何ぞと震策の膝の上に置けば、是をとばかり呆れて言句はなかりき。此程の證據ありても、美代を日本一の愚鈍と侮り、ゆかり樣との中を裏みたまはむ御了簡か。震策殿、これまで知りてもつひ一言の厭味はいはぬ美代が心を酌みて、前非を後悔なしたまひし上、此始末つけよ、と頼まむとのお心は御座りませぬか。まだ〳〵陰立てなされたきかと遁さぬ言葉に、震策惣身に冷汗を流して、坐にあるべき心地せず、身をすくめて顏も得上げざりしが、少時ありて、美代濟まぬと絞り出せし一言には、膏も血も混りてその苦痛は何に譬ふべくもあらざりしが、また此懺悔ゆゑに、縮めたる呼吸を少し吹きけり。よもやと思ひしに正鵠を射貫かれて、震策今は陰すべき樣なく、其上に覿面不義の結果ゆかりの腹に宿り、露顯の端緒に及ばむとすれば、之に心惑ひたる窮策拙く、墮胎藥とまで煎じ詰めたりける心は麻のごとく亂れながら、一大事を打明けて智惠を借るべき人なく、持餘せし折からな

れば、美代が意外に捌けたる言葉を聞くに、敵ながらも頼もしく思はれ、なまなか韞まむは美代が折角の志を無にするに似たり。之が悋氣に亂れてはしたなく吼り懸るものならば、底の底まで見透かされたりと見ても知らぬにて通すべけれど、我名譽を思ひ、藤村の恩を感じて、我等二人の爲によかれと計らうての申分は、慚愧に堪へざる貞女、其を不足らしく餘所にして、我は榮耀の不義淫行。神は在さゞる世か、この身の今に無事なるが不思議なり。冥利を知らざる男、わが女房ながら面目なくて、合すべき顏なしと、俯首きて額の汗を拭ひ、おづ〳〵と膝を進め、萎れし調子低に、此度の不量見は今後悔の曉に及びては、穴へも入りたきばかりにて右左いふべき樣なし。我口から若氣の心得違ともいひ惡し。今よりして思へば、此淫行をどの我が働きけるかと呆るゝばかり、天魔ふと魅入りての所業かと夢のさめたるごとし。憖入りしは其方が心入なり。そでなき良人に媚めしき顏もせず、さりとて其を他人にいふにもあらず、

胸に深く納め、愛氣にも出さずして、不義の二人が身を心底苦勞にして、世間をよきやうに取成し、名譽を傷付けじと段々の心配、何と詫びて然るべきや、いかに禮いうてよきやら、震策一期の不面目、一期の歡喜、此通りと疊に兩手をつき、美代ゆるしてくれと頭を下ぐれば、あれまあ、此は何事。貴郎に面目を失はせむとてかうした次第にあらず。わが何よりの歡喜は、是までの心を入替へたまひて、其如く後悔の色見せたまひしなり。只此の上のお願は、ゆかり樣尋常ならぬお身となりて、かゝる可恐しき藥を用ゐむとまで、絕體絕命の淵に臨みたまひ、數ならぬ我言葉をお聞きなされましたほどの、今の切なきそのちともお忘れなく、仕懸けらるゝ戀なりともゆめ〳〵手出しは愼みたまへ。ゆかり樣が御嫁入前の大事のお身なる事は、申さずとも御存じなるべければ、こと新しく繰返すも無益なれば、くどくは申さじ。たゞ〳〵此末を愼むでたまはれ。扨又ゆかり樣は最早三月にも及びたまひしやと尋ぬれば、震策頭を搔き

て、まだ二月と少日なり。さればなほ便宜よし。明日にもゆかり樣を何處へなりと賑はしからぬ溫泉場へお連れ申して、其處にやすくと身二つになさしめたまへといへば、震策合點ゆかぬ顏して、生れし其子は？　お氣遣ひなされますな。私お引取申して我子同樣可愛がつて御養育いたします。　其方が其子をと、後は言葉なく、おのづから眼中に淚ぞ浮びける。やゝありて、世に嬉しき篤志のほどは、未來までも肝に銘じて忘るまじ。さりながら仕官の身は、便々としてゆかり樣を介抱しては居難し。此分別は？　さればお役所の方は所勞居を遊ばし、一週間の休暇を願ひ、明日にも御出立なされて、御介抱の中には三日を出でずして、此方より遠慮なき人を使はすやうに計へば、其人着次第一先御歸京なされませ。　なるほど溫泉場にて產せし上、何氣なき顏して歸らば世間に此事知れずして濟むべし。是は極めて好けれど、われ七日も留守とならば、母樣不審を起したまふ可し。其上生れし子を引取らむは、其

方が一存にてはゆくまじければ、此計の成就覺束なし。其に又藤村様にても、ゆかり様無斷にて家出したもふを、騒ぎもせずして十月近くも打遣りて置く可きや。之に就ては何とか一工夫なくては成るまじと、當惑の眉を顰むれば、美代もやゝ暫時思案せしが、やがて氣力無き聲にて、とても藤村様また母様には陰し果す事かなふまじ。内々に陰立せむとせば、却つて世間に裏より機關を見らるゝ理なれば、貴郎の世間に對する名譽、二つにはゆかり様が御祝言の邪魔にならぬ様にせむとには、内々へは始終を明して、一同合體するの外は有るべからずと言ふに、震策さつと汗を流し、不義の段々を我口からは、面目なくて白状爲がたし。其は御發足の後私好き様にお話いたして、丸く治めて置きますほどに、明日はゆかり様をお連れ申して下されと、眞實此事を心に懸けての入々惠、此女の心は大海のごとく底知れず。

（十七）

美代が指圖のまゝにゆかりを連れて忍ぶ處は、伊豆の修禪寺なり。時候は夏季ならざる上に、伊香保熱海杯とは事異りて人氣少く、多くとも、米俵背負うて自炊に宿る田舍人なれば、見咎められて大事に及ばむ心遣いらず。某屋といへる態と中等宿を擇びて其處の奥座敷に閉籠り、餘所目には羨ましき初契月と見ゆれど、震策の胸にはさゝら波だつ苦勞の絶間とてなく、一日の勤は樂寢美食の極樂責に苦しみながら、明る日なれば暮れていつか二日を重ねしに、東京より音沙汰なく、三日目の朝にもなりけり。二人ともに苦勞あればおち〳〵とは寢られず、戸外なる泉の湯玉の音に、朝は目聰く起きて連立つて一風呂浴びて戻れば、朝餉の膳並びて待つをそこ〳〵に箸を捨てゝ、それからは火鉢を堺に浮かぬ顔を見合せ、懸合の溜息に此室の空氣腐敗して、氣色惡しきこと限りなし。

震策蒼皇として部屋を出入り、椽の欄干に倚りて東京よりの道を眺み、まだ見えぬは心元なし。察するに美代が目算外れたるかと、障子を閉てゝ入りながら獨語けば、ゆかりは男の心弱きに、じれたる聲暴く、目算外れなば其までの事なり。さなきだに氣のくよ〳〵する折から、其樣に愚痴ばかりいひ續くるゆゑ、いよ〳〵心配嵩高になりて壽命縮まることし、葡萄酒なりと取つて二人して飲まむと、手を鳴しかくるを押留め、音信聞かぬ内は酒も咽喉を通り難し。お前樣好もしくば一人して召上れといひながら、あゝと太息吐いて其處にごろりと仆れ、天鵝絨の括枕に手を伸せば、ゆかりは其枕を取つて我後に隱し、お前が寢入らば我一人淋しければ起きて居てとの言葉に、震策むく〳〵と起上り、ゆかり樣、先日より申す如く、末遂げぬ惡緣に惱まさるゝ、此苦痛を見るにつけ、我はふつつと淫行を思ひたちたり。今更卑怯に二の足踏む水臭き震策なりと、嘸やおさげすみもあらむなれど、お前樣にしても今度といふ今度

は、よからぬ事の結果は、如此よからぬに目覺めたまひ　御後悔なされしなるべしといへば、後悔？何を後悔？と冷笑ひ、此道には後悔など、いへる水臭き事はなき道理なり。後悔といへば他聞よろしけれど、其實は秋風立ちて元木に增る末木なしとかや。縱令露顯はされたるにせよ、智惠分別盡きたるにせよ、第一に陰す可き女房に委細を打明け、子までなしたる密婦に嫉妬せずして、如此までに計ひくれしは貞實なりと、其等しきに心を動かされ、おめ〳〵と其指圖に從ひ、萬事をよきやうにと其手に委せ、此始末美代ゆゑに首尾能く附かば、生涯夫の頭上る瀨なく、また主筋なる我とても肩身窄まる譯にあらずや。いつも賢きお前の處置には、似合はしからぬ今度の失策。さほどまでに子の出來るが可恐しきや。情なき人は違うたものかな。我に對して美代がこれしきの志は、更に珍しき事とも思はれず。それを事々しく恩に衣せて、賢女立の面憎きに、お前は其實意に絆され、大方此身は鼻に附きたる頃といひ、之をよ

き潮に逃げむとの目的とは遠から見拔けり。さほど可厭なものならば、さぞ御迷惑、其を此方よりたつてと言はねば、今にも出立たまへ、我を振捨て〻、美代が家にて案じ煩ひ、首を長くして待つてゞあるべし。我親人の勘氣を受けて、人も遣はされず、送金さへなくば、此の身の因果それまでなり。腹のこの子を同伴にして、山に分入り、溪に落ちてなりと、松に縊れてなりと果つべければ、離別の今日を命日に、思出せし日には菓子なりと、花なりと供へてたもれ、飽きし女の紀念なむどは、見るも汚はしからむなれど、馴染のむかしを思ひて我ゆゑに果てしか不便のものと、此を邪魔ながら持つて行つてたもれと、聲を曇らし涙を浮べながら、サファイア入の黄金の指環を拔かむとすれば、震策其手を抑へ、事を分けて昨日一昨日よりあれほどにお頼み申せど、只我を水臭しとのみ言放ちて、果は死ぬ〳〵と、其は我を困らすといふものなり。我には定る妻あれば、よしや無きにもせよ釣合はぬ二人の位置、とても添はれぬ

縁ならずや。其と知りつゝ、如斯中になりしは、無論此身の不覺なれど、されば好時分に見切を附けねば、我は好けれどお前樣は一生の不具、いとしければこそ當座の苦痛を辛抱しても、行末お前樣のお爲を思へばなれ。なほ篤と此處を御分別遊ばし、今より改めて骨肉の縁に結び替へ、お腹の子はわが子となして立派に成人さすべし。さればお前樣も再生りしゆかり樣になりて、磯村樣(法學士)へ目出度御輿入あり、千秋萬歳お二方御息災のほどを陰ながら祈りまする。男女は聖人ならざれば、一つ二つの惡事はありうちなれど、好加減に前非を悔ゐて惡行を悛むれば、神の罰もなく人目にも觸れず、末吉なり。後悔なくして何時までも夢中に迷ふものは、一人不殘社會の外に放逐され、あるがひなき一生を死ぬこともならで、愧顏かくこそ氣の毒なれ。世間に義理なく、德義なく、名譽なくば、この(愛)骨に染みて褪むべきにあらねど、世間を思ひてゆかり樣、今より他人とならむ、骨肉たらむ、磯村夫人たらむとの一言が

承りたいと、疊を叩いて逼寄れど返詞はなく、袂の吹綿を摘みては捨て摘みては捨て、膝に恨の雫をおとして、一向埒明かぬ所へ下女障子を明けて、相州訛の可笑氣に東京より此方へお客様が。

急きて良人を發足したれば、ゆかりに遇はして談合さする間もなく、有金少許を洗浚ひ路用と、二三日の凌ぎに足るばかりを持たしたれば、此方の相談に間取り、宿屋にて難儀させむは氣毒なり。いかにとも早急に形を附けむと、其午後姑には、葉書來りたればと詐りて、暇を乞うて藤村に趣きぬ。主人夫婦折よく打揃うてありければ、少々密談の筋ありとて侍婢を拂はせ、しかぐゝと有りし次第を細やかに語りければ、夫婦は聽くごとに顏を見合せ、一々呆るゝばかりなりしが、幼少より早稻なるゆかりの行狀に泣きし事のありければ、今かゝる事仕出來して見れば、限りて無き事と圖り難し。磯村と縁組の大略整ひたる箭前に、是はと當惑一方ならざりけるが、美代が天晴大人しく出て暴立てざるのみか、[illegible]に藏すまでにお腹太らず、人目にも觸れざりし前に修禪寺へ忍ばせしと

は、出來たる所置を心中にては拜まぬばかりに思へど、娘がかほどの不品行に一言もいはで、出來たる事は所爲なし、よいわにて甘く濟し難きは、美代の手前なり。不埒、不屆、不所存のいたづら女、親の面皮を汚す奴、我等親でなければ、彼も亦子にあらず、了簡せじ勘辨せじ、家へ出入はさせ難し。我瞑目の後はともあれ、さる奴は此後いかな椿事を仕出來し、藤村の家名に泥を塗るやも計り難ければ、以後の見せしめ、よき刑罰、更に構ひ附けずして死ぬとも仔細あらじ、存分窮命させよと、さまでは心ならぬ立腹の言葉を荒らげでは、美代が美德に對して面目なく、又其志に酬ふべき樣なしと思へば、父親は烈火の如く滿面に怒氣を顯して、云はむ樣なき人非人！藤村の家名七代の今斷絶すべき時節至れるか。美代がさほどの所置は、嬉しさ窮りて禮を述ぶべき言葉なし。志は重々有難けれど、彼には必ず構うてくれな、日頃の恩誼を思ひて身を捨物に骨折りて周旋してくれたとて、我初一念はなか〳〵動く事にあ

らず。わが娘とは思ふな、わが娘ならば其方には義理もなし、恩もなし、赤の他人の、しかも大事の良人を竊みし不義ものに世話は無益にせよ。さりながら美代、其方に苦勞を懸けて返す〴〵も氣毒なり、濟ぬ事なり。ようも辛抱してくれたるぞ。此情には屹度返報すべし。同じ女にありながら、善惡邪正の相違雪と墨との如し。氏にも育にもよらざるものか。老いて苦勞のよき種蒔きし我等は世に稀なる不仕合者。ゆかりの事には構はずと美代ゆるりと話せ、奥馳走してやれ久しぶりなればと、捨詞して房永は奥へいりぬ。女親は慈愛格別にて、美代の膝に膝摺合ふまで寄添ひ、忍び音ながら神精籠めて、これ美代！其方はいしくも計らうてたもつた。心中には千萬ゆかりの不屆は憎かるべけれど、行末頼みなき一人子を持ち合せし、不運上なき此母の心を汲みて、なるまじき所を量見してくれよ。殿樣は知るごとく正直正路の御氣質なれば、不善を見ること讐敵の如く、我子と他人との用捨も遊ばされぬ御方なれば、今

のやうなる御立腹。さりながら親ぢやもの子ぢやもの、口でおほせらるゝほどのお憎しみはよもあるまじ。其方に一方ならぬ難義を懸くるゆかりを、如此いへば辯護ふやうにて、一圖に甘き親心、人の憂は微塵も思はでと、其方の思はくも愧かしけれど、他人の思慮とは格別なが親子の情。わが娘一人よくば他人はいかにとも成次第、わが此程實意の萬分一を汲みもせで、わが儘勝手の言ばかり、情なき我と恨むでたもるなや。磯村との縁談も極りたるに、此事弘まらば彼が一生の大疵、とても嫁ぐべき所又とはあるまじ。大事の中の大事は今なり。されば此方にてはゆかり病氣と言觸らし、彼所にて平産の上呼戻して、燒杭に火移らぬ間に磯村へ遣はさば、彼等二人の安心、外には此世の思出なし。早速震策の手代りに氣遣ひなき人を遣りて、我も其内殿樣に其となく、暇を戴きて修禪寺へ行くべし。孩兒は引取りて成人さしてくれるとは、何處まで優しき心やらむ。其手當抹持は我より不足なく仕送り、學問修行さして一

人前となるか、女ならば嫁入りさすまでの世話は、皆此方よりまかなふべければ、我子同然可愛がつてたもれ、其につけても、あれほど物堅き震策が……。若きものは油斷ならず、何時の間にやらそゝのかしてといひかけしが、美代と顔を見合せ、親は愚なり、恨は他人にはあらざるものをと、其より手筈萬端申合せ、點燈頃に又其内に是非ゆるりとゝ、美代は暇を告げぬ。此日は奥様玄關まで見送りに出たまひ、車まで賜ひけり。これも子ゆゑか、人の親の心は闇にあらねども。

（十九）

まづ一方は首尾よく形附きたり。自宅には夕飯遅なはれるに我は歸らず、何日になく震策も戻らざれば、母親お一人にて嘸かし御心配と、魂魄身に添はねば、韋駄天走りの人力車もゝどかしく、やうやく我家へ着けば、格子を開くる音に案の定待兼ねし姑飛んで出で、きつう歸宅の遅刻に案ぜしぞや。其にまた震策が、今日に限りて遅きは何ぞ用事ありてか。其由言置いて出懸けしかと、美代を家內へ入れもせず、玄關に立ちながらの尋問に、美代は揚板列ねて駒下駄を仕舞ひながら、されば少々用事ありてなり。其は只今お話し申すべしと、奥にゆきて衣物も着替へず、まづ火鉢の前に坐りて、過去事なれば必ず叱つて下さりますな。實は二人が密會の始終を搔摘みて語り、ゆかり樣終に身重になりたまひたれば、餘義なく伊豆の修禪寺へ二人を忍ばせし一條より、この始末つけむ爲に

今日藤村へ行きしに、殿樣は以の外なる御腹立なれど、奥樣は快意く御承知遊ばされ、かねての手筈通りに參りまして、ゆかり樣にも良人にも疵が付かで、どうやら濟むべき手續に至りたれど、其子を引取らむには、母樣の思召聞かでは、私の自由に成難ければ、何卒良人が不量見の段は此度限りお容されて、其子を養ひたき此身の願、お聞屆あらば有難しといへば、姑仰天の餘り物をも言はず眼を睜りて、きよと〳〵と痛く心驚きながら、半信半疑の風情なり。美代重ねて、吃驚あそばすは御道理なれどゝいひ懸けしを引取り、其は眞實か。えゝ、あの眞實か。現に今日お二人とも伊豆へお發足なされました。やゝ！子を知ること親に如かずとは、誰が言初めし空言なるぞ、三十年來欺かれたり。犬畜生にも劣りし震策、憎や憎や、おのれ了簡ならじ。女もある可きに擇りに擇りてお主樣の娘といひ、緣談極りし大事の女をそゝのかせし不埒もの、我殿樣奥樣に合すべき顏なし。亡なられし良人の木主の手前、我不取締の

面目なさに、お燈明上げにも佛壇を覗き難し。あの白徒は親父様が遺訓の一通を忘れたるか。(われ十六歳の若年より山海の御高恩相受くるのみにて、五十年の長の月日を安樂に、させる忠勤もなき身にて、臨終の病床にまで殘方なき御手當を給はり、尚又其方官職を辱しむるに至りし敎育まで、いづれか君公の賜物ならざるはなし。我亡き後は一倍忠義を抽んで、一朝藤村家に事起らば及ぶ程の力を盡して、萬分が一の御報恩いたすべきものなり)との御遺言は、骨に彫みてあるべきに、反對なる不忠不義、恩を仇とは震策おのれの事よと、涙に咽びながら不所存を責立て〳〵、震策其處に在るが如し。美代は手を附けかねて默然たりしが。聲を和らげ、其お腹立はさる事ながら、震策殿一人罪あるにもあらず、戀の對手は同罪なり。其ゆかり樣をさへ奥樣おゆるしなされしからは、母樣あなたが震策殿ばかりを責めたまふは苛し。情なし、片手打なり。私可愛と思召さば堪忍して上げて、生れむ子は引取り、初孫の傳して老

を忘れむとのお言葉を下さらば、美代が一生の歡喜此上なし。何卒とばかり袂に縋り、顏を覗込みてあどなげに頼めば、母親立腹涙を呑込み、ようこそ震策を辯護うてやつてくれたれ、嬉しいぞや。女猫を抱いたりとて悋氣の角芽立ちて、ごべごべいふやらふてるやらは世間女房の風習なるに、我無念をさつぱり捨てゝ、二人の爲に其程までに心勞する其方は、神樣佛樣の化身か。不埒なる子息の母は面目なく慙かしく、昨夜までも此事夢にだに知らざれば、姑面して腰を按らせ肩を叩かせしが、思へば此身體の痲痺せざりしが不思議なり。かほど有難き志には、畜生の心も流石に感じて、いかばかりか嬉しかるべけれど、佛樣なりとも其方は女房、犬猫なれども震策は良人。良人が女房に頭を下げ、手を合して禮はいひ難かるべければ、外貌にはさして嬉しからしくは見せざりしなるべし。其は幾重にも私がなり代りて禮をいひますと、蒲團をすべり下りむとすれば、あれ勿論ない。さらば差出たる私の處置を我慢なされて、

初孫可愛がりて下さるか。　其子の可愛き事はさら〳〵なけれど、其方の(志)を傅する心にて隨分いとしがる可し。過ぎにしことは及ばざればあれの不埒は了簡して、お位牌へは內密にして濟してやるべけれど、向後の懲惡明日にも歸らばと切齒をなせば、美代には心配顏して、あれお願ひ申すは其事。此度は何もおほせられず、目を瞑りて昨夜の夢と流してたまはれ。　あゝよし〳〵、何もいふまじ。萬事は其方に賴みしぞといふ時、鐵瓶の湯烈火に乾きてから〳〵と鳴るに心付き、あら！まだ御夕飯前なるべきに氣のつかざりしといへば、この一條に胸は一杯になりて空腹くもあらねど、其方は嘸や。　いえ〳〵あなたこそと、急がしく膳立して箸を取りしが、母親はわづかに一膳。子は樂の種、または苦の種。これを思ふにつけ、不孝は人情出來まじき事なり。

藤村より介抱人を遣はしければ、四日目に震策歸京し、美代がくれ〴〵の依頼なれば、小言も好加減にて震策ひた謝罪に前非を悔ゐ、神妙に日々出勤して此事役所に誰知る人なく、從前の品行端正家にて通りぬ。ゆかりの母は臨月まで月の二十日は修禪寺に滯在して、日夜の看護を父親も默許にて、世間へはゆかり腦病なりと披露し、月滿つれば美色の同士に出來し子は、玉の如く光れる女子にて、母の肥立は難無く孩兒にも病なくて、目出度趣を申越せば、美代はわざ〳〵出向きて其嬰を懷きて一足先に歸れば、健康なる乳母の兼て傭置きたるが其日に駈付け、甘露の乳房を含ますする傍より、母親べつたり附傍ひて、和かき頰を撫でゝこん〳〵とあやしては、あれ笑うと他愛はなかりけり。震策は美代の前にては、なるべく其の子に寄らず寄せつけず、陰にまはりてこそ〳〵と顏見

る遠慮を、美代は氣毒に思ひ、乳母に含めて震策に突付けて懐かするを、外貌に迷惑がりてうるさしと過ぐるこそ可笑しけれ。ゆかりは二三月經て常時の身體に復れば、美色少しも其光を滅せず、男の味知らぬ生娘粧して博覧會に行けば、千萬人の首骨を捻りてゆかしがらせけれど、其事知れる眼にてよく／＼觀れば、なるほど目淵に極印あれど、之に心付くものなく、兩親口を拭ひて吉日を急ぎ、首尾よく磯村法學士に縁組ませ、見事なる結婚式ありて夫婦萬歳！と、賓客さゞめきの中より人力車二輛引出し、仰げば千點の星影きら／＼愉快の光を放ちて、顔を拂ふ夜風爽かに、木間に入りては奏樂の音あり。初契月七日ばかりを伊香保に樂しく暮しけるが、ある夜ゆかりふと先年の修禪寺を思ひ出し、湯玉の響に身の毛を彌立て、あの時惡縁と思ひ切らざりせば今頃はと、そゞろに物可恐しく覺えぬ。氣毒なるは學士にて、この二番煎じながらの濃色に魂を打籠み、寢てもゆかり、寤めてもゆかりと、良人に惚れらるゝは女房

の身にしては、洋裝十襲入の長持より重寶にて、二度目と知れての夫婦ならば、その弱點ゆゑに萬事につけて、身を退き心を窄むべきに、ゆかりは世界隨一この幸福者め！　勝手氣儘を働けど無理も道理に通りての贅澤三昧、學士一日二日三四日も置きて機嫌を窺ひぬ。世間には幾許もゆかりの如き花嫁ありて、磯村ごとき花婿あり。妻を持つべき男は一目の美色に泥まず、身上よく〱吟味の上にせむこと肝要なり。自身知らねばよい氣になりていとしがれど、未破瓜の破毀玩具を、一生の持物にして有難がるは可厭な事なり。其後震策は勤直にして、美代は貞實にして、不義の娘震子は健康なり。當年十四五歳の男子が、嫁ほしき時節にはこの子年頃なれば、迂濶と色に引れて之を娶りたまふな。不義の士に貞操の花咲かず、震子の性質心元なければ誰も用心あるべし。（士族蓮田震策長女震子）、幾度も繰返し肝に銘じて忘れたまふべからず。これは不義の子なり。震子は不義の子なり。

（廿三年十月）

關東五郎 （紅鹿子）

上

日光街道栗橋に角屋といふ休茶屋、名高く、旅人に憩まぬはなく、憩みては茶だけにて行くはなし。日中は此を日除の、店頭なる合歡木の葉に入日薄らぎ、かな〳〵蟬の聲夕暮をせきて、行人せはしなく腰を懸くるものなければ、床几の莚を巻き、茶道具などとりかたづくる處へ、三十未滿の商人草臥足を引きながら、お仕舞ひなさる處をお氣毒なと、挨拶おとなしき江戸訛。女房は冠りし手拭をあわてゝ引とり、何のお構なくさあ此へと莚を巻かへし、なほ熱き茶釜の底を汲むで煮花をさし出すを、やれ旅は夏のものではないと、手甲をこきあげながら茶碗を取らむとして、女房の顔を見ればと、山路來て何やら幽し菫草、其紫の江戸にも二人

とあるまじく容色よきに、茶碗に手をかけしまゝ、盃を持つ手のたゆなるまで見惚れ、穴の開くほど凝視らるゝに年増ながら差かしく、誰も呼ばぬにあい〳〵と返事して茶を早くとらせ、土竈の蔭にいりて後向になり、小枝をひし〳〵折りて焚付くるを、此男爪立つてのぞけは、頸足玉をのべ、撫肩しをらしく、細腰裊々としていかにも華車なる後姿、京といふなら京と得心のゆく骨格のやさしさ。お前の生國はと聞けば、此土地のもので御座りますとの言葉は紛ひなき此處の訛にて、顏が見たさにもう一杯といへば、會釋して近寄るをなほ熟視るに、目鼻立よきが上に眉毛の痕青々としたるも好もしく、物いふ時染めたる齒のあらはれ、口元に愛嬌こぼれて、何とも斯とも言はう樣なし。世の中にはこんなのに氣を揉せ、悋氣さする罰あたりもあればあるもの哉。我も年季明けたれば此度本國下野鹿沼に歸り、やがて一軒の主となる身の女房持たねばならぬが、持つならば此程美しく、しかも温柔いのを貰ひ、三度の給仕

もこれがするならば、梅干澤庵にて他人よりは甘く食ひ、榮曜はやめて金を溜め、斯るいやしき業は洒落にもさせまじきにと、急にうつくしき女房欲しくなりしが、此程ならでは千兩の持參ありとも心は勸まず、一も二もなし、平たくいへば此女欲しきなり。欲しけれど定まる男あればと、賴みなく心細くなり、腕組して溜息吐くを、女房見咎め、御氣分惡しきにや、途中めしあがられし水などに中てられてか、其ならば持合せによろしき藥あり、進ぜませうとは深切なる言葉、他人の我にさへ其なれば、まして亭主にはどれほど實を盡さるゝ事やら。　はいお藥とくれし禮より談話の緒にとりつき、お米といふ名から聞初め、今年二十五にて金性――我とは合性――四年前に亭主を持ち、まだ子供なく――道理こそ若いと喜ばせ――兩親なければ舅姑もなく、亭主は木樵と聞けば聞くほど、そんな者にといよ／＼口惜く、長居するだけが思の種、行かむとするに名殘惜まれ、また二つ三つ話す內、前面の田甫黑み亙りて、火

影ちらつけば、長坐は氣毒と多分なる茶代を置き、すご〳〵立出づる後にて、御機嫌ようといふ聲、又何日か逢ふべき此別、悲しきといはぬばかりに覺え、進まぬ足を急がせ、半町ばかり行きし後より呼懸くる聲あり。いとゞ後に心遺る耳には、もしや其人かと立留り、振かへりてすかし見れば、女の馳來るに胸跳り、其處に待兼て迎ひに戻れば、果して其女房なり。呼吸をはずませ、お忘物と笠を出す手を、此場ぎりのいたづらと握りしめて一散に遁げゝり。

中

仁助殿内にかと、戸口に溢るゝ蚊遣火に、顔を顰めて入來るは、關東屋の親分樣、ようお出なされました。お米どの、いつも／＼美ついな。えゝ又お弄りなされます。もし／＼と轉寐の仁助を動起せば、此は親分樣お越しなされまし、夕飯に一杯ひつかけころりとやりました。暑い事では御座りませぬか。　扨仁助どの、今夜參つたは少し無理な頼みで御座るが、日頃貞女の噂高きお米どのゝ手前話すも面目なけれど、言はで協はぬことなれば、無法な男と見下げて下されな。お米殿、今日の夕暮お店へ商人風の男が憩まれたか。　あい、其お方がどうぞなされましたか。　なされた段か、命をかけておつ惚れたわ。　そりや誰に？　はて、仁助殿といふ歴とした亭主持に。　えゝ！と驚くお米の顔を仁助尻眼にかけ、　親分樣、其がどうぞ致しましたか。　無理な頼みとは此

處の事。今宵我宿へ泊られしは其旅人衆、座敷へ通るが否や私を呼ばれ、關東五郎殿とは此近國に誰ならびなき俠客と見かけ、折入つて賴みたき一義はしか〳〵と、今日角屋にてお米殿を見染めたれど、聞けば亭主持の上になほ賴みなきは、きつい貞女と聞及べり。指もさゝれぬは知れし事なれど、いかなる因果にや更に思切ることなり難し。只一夜の情にあづからば、此一命もなか〳〵惜からじ。如是不義に與したまふ御身にはあるまじけれど、切なる我思を酌みて、此戀取持つてたまはるまじきやと、話の中にお米は五郎にすり寄り、もし親分樣、五郎樣、無理なと知りつゝ其戀取持たうとてお出下されましたのか、上下野州に隱れもない關東五郎ともいはるゝ俠客が……。　默れ、默れ！亭主の我をさし置き、おのれが今の口上は誰樣へいふのだ。五郎樣は此驛の守本尊、おのれが去年高崎の虎五郎に引攫はれ、無法をしかけられし時は誰樣のお蔭で災難を逃れしと思ふぞ。いふ事あればおれがいふ。すつこめときめへ

くれば、いや／＼さういはれては五郎面目がない。俠客風を吹しては言はれぬ口上、お米どのゝ立腹はさら／＼無理ではなけれど、命をかけて我も頼まれしからは、出來る出來ぬはともかくも、話の一通はせねばならぬ。かの旅人のいはるゝは、われ江戸は本町某屋と家名いふを耻辱とつゝめど、口裏から見れば、此邊にも知れ渡りし太物屋の手代衆、嘉藏とて今年廿九、幼年より何の落度もなく、先月にて首尾よく勤めあげ、親の名跡を繼ぐべき金子とて主人より褒美の百兩をもらひ、其上に我貯へし金子三十兩ありとて、胴卷のまゝ我に渡し、願ふは此三十兩を御身に贈り、女房お米どのをたゞ一夜かりうけ申したく、此金子にて不足ならば、隨分百兩に手を附けまじきものなれど、さうしては第一親へ不孝、主人へ不忠、三十兩は我年頃の費を省きて丹精せしものなれば、誰への遠慮もいらず、此だけにて本望遂げさせくれなば、慈悲よ情と手を合さぬばかりに頼まれたれば、出來るか出來ぬかは請合かぬれど、餘りに切

なる熱心の不便さに、われ一代覺なき色のとり持、千二千の無頼漢がそぎ竹の鎗襖の中を、懷手して往來するは物の屑とも思はぬ關東五郎、此ばかりには怯氣がきて、いひ出すにもいひ出しかね、膏汗が流るゝわと始終を語れば、お米は五郎と夫の顔を相互に見やりて、呼吸を殺し——片唾をのみ、いかなる事に成行くぞ。

仁助暫時思案して、承知致しましたとの返詞に。五郎ひたと呆れて、流眄にお米の樣子を覗へば、さもさうず！かれは涙をはら〳〵と流し、仁助殿、おまへは三十兩のお金に目が眩れ、女房を他人の玩弄物にして飮む酒が、おいしく咽喉へ通るのか。つれないといふにも節はあるもの。わたしは食べる物を減しても、お前の寢酒はかゝした事のないを、何の不足ありて、何の恨ありて、これ喃仁助どの、その樣なさもしき事をさして私を汚させむとは。よもや本心ではあるまじ。醉が醒めての上御挨拶をして下されと、仁助の膝にとりついて泣入るに、五郎は道理に責め

られ、何とも口を出しかね、腕を組みて下視くのみ。仁助のいふは、お米、時代な事をいふな。今の二人が中に三十兩といふ大金あつて見よおぬしとて我とて、これまでのやうに齷齪するにも及ばず。また茶店の道具萬端新しくして、旅人の足を多分に留めるやうにすれば、繁昌はいや增し、またおぬしにもよい衣を着せたいばかり……。　あい、わたしはよい衣きたくは御座りませぬ、茶店も奇麗にしたくは御座りませぬ。此が正路に手に入る金子ならば何の申分はなけれど、夫ある身が情を切賣しての富貴は、露ばかりも嬉しからず。近處の人に見られても、今の木綿物は苦しからねど、明日からの絹物はさもしき心の看板同樣、さる不正を不正とも思はぬ心あらば、とくにお前にも木樵如きはやめさせ、濡手で粟の攫取、わるい事を勸めまして、御領主樣のやうな暮しをもさて見たけれど、喃、身貧に生るゝも前世の約束、たゞ氣安いを樂みに、正直正路に働きなば、神樣佛樣も在す世なり……。　えゝ、御法談聞き

たくない。不承知ならば強ひてとはいはぬ。亭主がいふ事を聞かぬやうな不實な女、添ふとも賴みにはならず、ありがひなき奴に食はせる飯はなし、今から緣切つてくれる。大方は三十兩といふ聲を聞き、いはゞおのれが稼いだものを、われにしてやらるゝを口惜しく思ひ、我氣に逆らふ言を並べてわざと離られ、一人うま〳〵ぬけ賣して其三十兩物せむとの了簡、さる腐つた根性の女なら、なほ以て添ふのはいやなり。早く出てゆけ、三十兩おのれが物にして甘いものを食ひ、よい衣を被、わが飢死ぬを見物せば、さぞや寢醒よかるべし。去つた、出て行けとわめくに、かゝる男に添ひあてしはこの身の不運、わが夫重病にて良藥の代に身を賣ることゝ諦め、まだしも仁助どのゝ息災なるこそせめてもなれ。言葉に背かば離緣とのことなれば、今宵はさられし身の定まる夫なきと思ひ、旅人に枕かはすべし。仁助どの得心いたしました。やゝと五郎の仰天、仁助の喜悅。今宵旅人に身をまかすは、神ぞ好いてする業ならず、離

緣るゝが悲しく、つまりはおまへを思うての淫行なれば、この後とも今宵のことをいひ出してとかういうて下さるな。關東屋の親分樣がよい證據人、もしもそのやうなる事あらば、何卒お言葉そへられて、仁助どのゝ心を鎭めたまへ。扨もやさしき心入、仁助どの、仇や疎そかに思はゞお米殿の罰が當るべし、此後はいよ〳〵おぬしを大切にするに相違なけれど、もしもの事ある曉には五郎が身に引請け、元の鞘へきつと納むべし。あゝ、我身こそつらけれ、天晴貞女を畜生道に墮せし應報空しからず、日頃無益の殺生つゝしみたる功德も之ゆゑに消えて、今更念佛三昧も成佛の一助にはなり難からむ。お米どのゆるしたまへ、よい女房を持たれて仕合せな仁助どの、いざ參るべし、客人の定めて待つらむ、さらばと立上れば、お米濟まぬとつひになく仁助の頭をさぐるも、三十兩へする禮義、さもしき人の心やと、またはふり落つるくやし涙を拭ひて、親分樣よろしくお賴み申しますると、五郎につれられて戸外へ出づれば、

何處も火影見とほしに門涼の人々、　お米どの今から何處へゆかるゝと、尋ねらるゝに返事はなけれど、心中聞かば、いやな所へ參りまする。

下

親分樣、親分樣。　あつと五郎目覺し、誰だと起返れば、枕頭の薄闇き徹夜燈の陰にお米手をつかへ、少し顏を背けて用ありげなり。　お米殿か、此夜深に何用ありて、　されば折入つてのお願、明朝が待れず、ようお休みなされての處を。　其は兎も角も、明朝が待れぬとは氣遣ひなりと居直れば、お米もぢ／＼と言出し兼るを、五郎早く推し顏に、なるほど、仁助殿の手前無理に得心はなされたもの丶、扨どうあつても心には染むまじ、こんな淫行は我から勸めては申さじ、無理なる御亭の言葉に違ふとも、違ふおぬしの心意氣こそ眞實貞女なれ。よしさらば次の間にてゆる／＼寐みたまへ、寐道具は其處の戸棚に許多もあれば勝手に取出されよ。明日は明日の事。何とか分別して仁助殿には我よりよきに言ふ可し。斷るの去るのと肯かぬときは、我當分引受け、及ばずながらお

世話申す内には、原來此方に科のあるでなければ、仁助殿から詑入らるゝは案の定、かならず心にかけ給ふな。少しの間なりといやな思をさせしも皆我から、其代にはおぬしのたつ様にも我計らふべし。然るにても器量よく生れついたばかりにおぬしも迷惑、われらも迷惑、この後の世には五郎が宿の嬶のやうに生れて御座れ、構ひてがないだけに氣安いといふ。五郎の言葉の中にもお米は唯はい〳〵とばかり、男の顏に上目づかひのさも〳〵恨めしく、言はるゝ一々思ふ事と背中合せになりて、さもなくても言出しかぬる事が一倍羞かしく、とつおひつ當惑の胸逼り、所在なき手に崩れもせぬ襟を掻繕ひ、いつそ思切つてと顏をあぐれば、生憎五郎が此方を見る目と見合ひ、横顏になりてためらふこそ女なれ。返事を待つになければ五郎重ねて、用事はそれと思へど外にありや。あらば遠慮には及ばぬ。　はい申しにくけれど……いたづら者とおさげすみ下さりますな。「今宵はお蔭にて二階のお方と、圖らぬ契を籠めまし

て。

や！か丶るべしとは覺悟の前ながら、其と聞いてはまた今更のやうにお米の顔を見詰め、じり〳〵と詰寄れば、火影風に煽られてぱつと赤くなるに、女はなほ顔を背け、契を籠めましたが、あやしくも不思議の縁纏りて、此人の情身にしみ〳〵と忘れ難く、二世までと頼むは此人の外なくと思込み、今までは長い夢、ふつつり仁助殿と縁斷りたき願、添ひたき二人の望協へて下さらばと、聞くに五郎膽を消し、是はどうぞ、何事ぞ、行懸りの旅人にまで知られた、此驛の名物貞女のおぬしが、十年來可愛がられた仁助殿を棄て丶、唯一夜の他人、どれほど好いかは知らねど、浮氣も主ない中の花。もはや世話のやける物持つ可き年して、ちと了簡が若すぎやう。本性ではあるまいがお米殿、何ぞ仁助どのと一處にならぬ前の夢でも見られしか。よしや現の寢言にも、さうした事は滅多には言はぬもの。壁に耳あらば今まで立通した貞女が體無しにならう。其お言葉もあるべしと、羞かしさに申かねたる私の心中、今迄の貞

女を無にいたすは、よく〳〵の事と思召されて……。いつかなゝらぬと、お米が言葉を引たくりて、五郎兩手を張臂に構へ、腐つた根性の女、いらぬ、捨てると、仁助殿無念の上の承知ありとも、世話した此五郎が金輪奈落の底まで承知する事ではない。一夜たりともぬしある身を汚さしたばかりでも、此しやつ面へ大きな疵なり。天魔であれ、鬼神であれ、公方樣でも、御領主でも、金づく腕づくでの依賴なら、此方も意地づく、誓文合點する段ではなけれど、かの客人が仇ならぬ心中、命かけてとは肝玉に答へていぢらしく、扨はいたづらの手引はしたれど、上州の俠客は隨分賴み次第、密夫の世話もするなど聞えなば、江戸の奴等の思はくも羞かし。

いかにしても本性とは思ひ難し。これ容易ならぬ一大事、重ねて思案あるべしといへば、我身にもなつて下されまし。つく〴〵思ひ廻らすに、仁助殿の此度の無情さ、何と申さう樣なし。明日のお舍利を今宵買ふと

までにはなきに――女房可愛くは思はぬか――金子ゆゑに肌身を汚さい、いやさうな顔一つしてくれぬ志、なか〳〵夫とは思はれませぬ。他人でも我身になりて見ば、か丶る事をよいとは思ふまじ。外に分別ないまでも、分別せよというてもくれうものを、女房といへば亭主のもの、身體こそ二つなれ、何處の耻辱にても耻辱は同じく二人の耻辱。餘義なき事に責められ、外に思案のなきま丶私からさもしき事をいひ出で丶、たつてするとあらば離縁ともあるべきに、せねば離縁とはいひ甲斐なき根性。仁助殿は我より金子がいとしいので御座ります。されば此身の情を賣らする事、きつと今度には限るまじく、また五十兩といふ人あらば、夫にも身を委せよ。百兩やるというたなら、恐らく穢多にでも枕替はさせむは此宵で知れました。今が今まではかうした人とは知らざりしが、もはや仁助殿の女房は米ではなく、金子といふ増花ありてこれに見替へられし上は、行末どのやうな目を見るも知れず。今日が日まで立てました貞女

をやぶりますも此處の事。旅人の富裕なるに迷ひしの、わかき男に心を移せしのと、御疑念もあるべけれど、今までの日頃をよく御存じの親分樣、御推量あれかし。仁助どのゝさもしく、つれなきに引替へ、二階のお客樣の眞實。一目見しばかりにて心底から深々と思ひこまれ、江戸に馴れたるお目には、梅櫻見てからの大根菜の花、風情なき田舍ものをどう思しつかれてか、大枚三十兩の金子、それとて仇や疎かならぬ、長年御丹精の身の膏、ある方の千兩萬兩にもましたる大金を、只一夜の情にとは冥加に餘りて可恐しく、此方こそ金子を捨てゝの私なれば、夫仁助殿とは雪と墨との心入。此方が金子持たるゝ身ゆゑ、今添ふとあらばあなたにも嘸や金ゆゑの心中と思召すかはしらねど、夫婦の樂みには金も財も物の屑ならず。此人もし零落の曉――それを願ふではなけれど――――金ゆゑでない私心中の清きことを御覽にいれむは、其やうな事あらむ日の私を、長き眼にて見て給はれ。命かけても此人に添ひたき願、親分樣、

お賴み申しますは貴下の外なし。米が益なき貞女を壞らして下されと、思入つての所望に五郎首肯き、なるほど聞けば味ある言分。飲みこむだ四の五いふに及ばず、客人諸とも……お寐つてか。御一處にと申せしが、重ね〴〵羞かしきお願、面目なしとて寐床に吉左右待たれてゞ御座ります。さらばと呼寄せ、二人並べて、此處はわれ引受けたり。今宵の内に二人とも立退きたまへ、夜明けなば面倒なり、はやくと急がせば、いそ〳〵と支度しながら、されど心懸りなは後の始末。いかなる御分別ありてかと、嘉藏さすがに我ゆゑに難義を大恩人にかけむことを氣遣うて尋ぬれば、分別は許多もあること、まづ此處を立退くとも近邊には長く足を留めむこと無用たるべし。夫婦となりし今宵の始末を行末忘れず、かりにも喧嘩がましき事せず、玉椿の八千代までもかはらず契りたまへ。緣もあらば重ねて遇ふべし。今宵は此方の客、今朝までは知らぬ他人にこれ程の御世話、生々世々この御恩いつかは御禮申すべき。再び江戸

へまかり越し、一軒の小店なりと持つことゝならば……。　五郎頭を掉り、禮うけたくてする世話ならねば、それに望は微塵なけれど、喧嘩出入絶えせぬ身の上、もしもの事いつありとも圖り難し。我なくなりしと聞きたまはゞ、折々は思ひ出せし日を……。　あとは言はず大口開いて笑ひ、一番雞が、あれ、今鳴く。猶豫はなり難し、隨分氣をつけて行きたまへ。　御機嫌よう五郎樣、親分樣と諸聲に訣別を告げ、立出づる後姿やうやく殘月の影に消え、馬の鈴ちやら／＼と微けく、はや曉近き空を仰ぎ、また二人の先途を見て心よく打笑み、再び戸をさしこめ、寢床へ還りてかの三十兩を封じ、別に一通を認め、其朝仁助が行つて見ての話に、見事にこれと、拳で腹に一文字。惜しや武州の名物、一度に二つなくなしけり。

（二十三年十月）

新色懺悔（聚芳十種第二卷）

（一）

男女ともに寡居の心中には、有形にまれ無形にまれ、必定想ふ人はありながら、世間は百事不如意なるが中にも、夫婦の縁は――魔神ありて邪魔ひろらぐかと疑はれ――別けて思ふに任せず。愼みて焦飯を嫌ひたりしに、南無三寶！　痘痕面に添ひあて、それからは呪詛、祈禱、卜筮まで信ぜぬやうになりしこそ可笑けれ。

つくゞ観るに、夫は美男にありながら、惡女を妻にして可愛がり、女房美女にして醜男に滿足し、我庭の糸瓜の花は他所の山吹より、輪大きく色の濃かなるを悦ぶも、緣の不思議に次での不思議なり。　わが夫と定まり我妻と極まれば、容色に善惡はなくなりて、跛者もいとしく隻眼

も憎からず、さればこそ世は持つたれ、思ふ人に思はれむさへ至難に、それに添はむこと千に一つの僥倖も覺束なし。

西京大谷本願寺へ門徒宗は火葬せし亡者の齒を納むるが風習なり。南無阿彌陀佛、やれ〳〵腰が痛む、否如此事を申しては佛樣に濟まぬ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、胡麻竹の杖に縋りて、褄高く、西陣フラネルの脚布短く、皺枯脛に黑汚點出で、白紋羽の紐足袋に、黑唐天の太鼻緒すげし後齒も引くに力薄く、斷髮に雪少し殘れば、首筋寒しと卷ける、黑のお高祖は年數に色褪め、昔氣質の短羽織は三紋の茶紬、此老女と倶に命長きものなり。杖持つ手首に珠數を懸け、小包持つ左手を背後へまはし、匐ふやうに腰屈まりてよぼ〳〵と行く姿だに哀なるを、納骨堂の方へと志すを見れば、まさしく孫か子を亡して其齒を納めになるべし。老いて杖とも賴みし青年を喪ふ心は、推慮るだにいぢらしければ、其身にしてはいかばかりか便なからむ。極樂へ連立ちたかるべきにと、

無常に目馴れし小坊主も、古里の親を思出して涙ぐめり。
悲哀はされど此老女一人にも限らず。待合はする男女五七人、若き女人もあり、血氣なる男子もありて、老女の入來るほどに談話を途切りて一齊に見向けば、新しき憂友の可憎敷奴ならば悲嘆も少しは減るべきに、是は又傷はしの老人やと、心弱きは紛れし悲みを喚起して鼻涕を啜り、席を讓るもあれば、あぶなしと手を引くもあり。少時は深夜の如く鎮りて、吹殼敲く音のみいかめしく聞えしが、退屈紛れに一人の男子雜談の封を切りて、一つ二つ可笑き事をいへば、少し笑聲も聞え、それより稍賑はしくなりけり。
其男子老女に向ひてお年齢はと問へば、當年七十三になりますと答ふ。住所は御室の方にて。亡なられしは？　わが配耦、老病の局所が疾病ともなく、じめ〳〵と弱りたれば、其ぞと藥も飲ませず、醫者樣に診するにも及ばずして、つひ往生を遂げました。此方樣が七十三ならば大

方八十は越え、米の賀も濟しての上なるべし。それは三十年も昔時に濟し、百十六にて亡なりましたといふほどに、一座顔を見合せ誰も挨拶するものなかりき。

是は因縁あり氣なり。　男子少しく面白くなりて、申すは失禮ながら、其程御長命の上は此世に何のお遺念もなかるべし。御良耦百十六にて、此方樣は七十三とあれば、大分なるお年齒の相違と胸算して、四十三とは親父樣と申すも愧かしからず、稀有な事と眼を睜れば、老女は幾度か首肯き、われ十七の年初嫁入して、六十の老夫樣を花婿にしたりといへば、一座ます〳〵奇異の想をなし、愁思を片寄せ興に入りて耳を傾けぬ。男なほ面白く、いかなればさる奇しき緣組はせられしぞ？　義理か戀かと膝を進むれば、老女は手を動かし、委しく語らばわが耻辱、または儕の耻辱ともならむに、これは申し難し、許して下されといふ。年寄れる人々はさこそと氣毒がり、餘所の雜談に移さんとすれど其男子滅多に背

かず、新聞に出るといふではなし、只此場ぎりのむかし物語、懺悔にはいかなる罪も滅すといへり。愍ひに裹みたまはゞ後生悪かるべし。是非に聴かされよと責促めば…………。

（二）

妾もとは宇治の出生、十六まで茶摘をして、若芽の陰の後姿嬌しく、見御聽かせまをしたかゝりき、美音の一節、ゆたかに幾人か迷ふものは、見るも好ましからぬ土氣男。その上に妾物堅く生れたれば、世辭にも男子に有情らしき流眄だにせざりしに、それが反つて戀の種を蒔き、土地狹ければ妾ごときも眉目は郷里の一に數へられ、我身分より數十段立優れる方より嫁にと望まれし口二つ三つありたれど、從弟同士の某は、雙方の親どもゝ、行末は偕老にさしたき心組にて、其人の姿心、打揃うてやさしきが、特に妾へは他人の誰も、決して知るまじき優しき所あるに、日陰の氷も春風のそよ〳〵に融初め、この人廿歳にならば夫婦になられむ事たしかにして、其を相互の胸に樂み、十六までいやらしき事せず、他人にはとかういひ囃されながら、それは全く嫉妬からの取沙汰なりけ

り。其時われは十六、男子も同歳にて三月妾より年弱なりし。十七の夏、京都御幸町の茶商人宇治に來りて、わが傭はれし家の取引店なれば、其處に宿りて茶摘を見物せしに、三日の逗留中いつも我傍を離れず、朝から歸るまで綢繆に不去て種々雜話を玄かけ、動作にも言詞にも色めける事はなけれど、われは唯何となく羞かしく可怖しくて、なるべく侶伴を遠ざからぬやうにしたれど、人目を厭はず妾名を問ひ、年齢を尋ね、家内の樣子まで委しく糺し、あら！　薄氣味惡き老夫と思ひしに、その翌日家へ歸れば、母親いつになくあらたまりて、京へ嫁にゆけといふ。仔細を聞けば扨こそ！　わが傍を離れざりし老夫妾を所望のよし。なほその由來を問へば、其人三十の歳戀女房を亡くし、外には見替ふるほどの女人なくて、六十まで獨身に過せしが、妾を見るに面影其女房に寸分違はず、年齢まで大方妾に似合はしき頃嫁入せしといふに、舊時懷はれて忍ばしく、どうあるとも妾を娶はではおかじ。なるほど親子

ほど年齢は違へど、それさへ不承して暫時の辛抱せば、今年六十といふなり、限りある命の何年までか生くべき、つひ今の間にお目出度ならむは知れたこと。其曉には親類も厄介も一人だに持たざる身なれば、御幸町の財産家に數へらるゝ身代は專有。四十九日を果てしもあへず――なか／＼苦しからず――其身代を持參にして、好いたる方へ嫁入るべし。長くて此處四五年の堪忍、夢の少し長いのと諦め、一先老夫殿へ緣づけかし。媒人といふは外ならぬ旦那樣、御所望なさるゝはその旦那樣が大事の顧客、此度の事首尾よくをさまれば、旦那樣は立派なお手柄をなされ、且は其方の顏に對しても、われ等二人を麁末にはなさるまじ。其上婿殿からは月々十分の御扶持に預り、相場もしらぬ白き米飯を心のまゝに食ひ、親父樣は好な植木いぢりして、梅が咲いた、菊が茅ぐむだに、今日安樂の身とならるゝも其方一つの心がら、もし強情いはゞ旦那樣のお憎惡強く、さては此處には住みかねて、いとゞ難儀な目を見ねばなる

まじ。おひ〳〵老る年齢のわれ等に、すればなる事ならずや、樂な思さしてはくれぬか。幼稚時は虫持にてと、二歳三歳の世話盛の時の事などしみ〴〵といはれ、なるほど大恩ある兩親の爲とあるを、なか〳〵否をいふにはあらねど、從弟の誰さんがと十分までいはせず、其人に添はさぬといふではなし、わづか五六年老夫殿に添ひさへせば、あの金銀荷物は皆我物になり、立派なる土産持ちて、華々しく彼樣へ輿入すべし。萬事は黄金が指圖の世の中ぞや、思ふ人に新枕かはすが嬉しければとて、みす〳〵わが物になる財寶を捨て、添ひは添ひても明日の薪に事缺く痩世帶、何の樂しかるべきや？ 貧より愛想づかしおこりて、友白髮と契りし口上も餘義なく反古となり、年老りて別れ〳〵の穴に入る事世に數ある例なり。

（三）

都へ出で奉公して金銀貯蓄へてから、其人に添ふ事と思はゞいかやうにも堪忍なるべし。持參ある戀女房、彼人の身にしては、櫻に柿實のなる仕合せを可厭なる理はあらじ。この始終を話さば喜びて得心あらむと、母親の無理なる理に說破せられ、それもさうかと老夫に添ふべきに心を定めたる旨を答へはせしものゝ、從弟の所存はいかにとも知れ難きに、獨斷を悔ゐても還らず。翌日從弟を呼寄せ、此度の概畧を母親語りければ、口頭ではどうやら納得せしが、妾を見る眼に怨言をいはせ、變りし妾が心の情なきか、捨てられし其身の口惜きか、淚を浮べながらおとなしくはい〳〵と、濕聲に母親の言葉を應答ふる可憐さ！　妾が心は拶らるゝほど辛く、母親の蔭になり兩手を合せて見せても、眼を瞑り首を掉ふるは、妾が胸を知らず一圖に心變りと思ひこみ、詫を聞いてはくれぬの

かと、情なくなりてわつと泣出せば、散々に兩親に叱られ、其日は人目に隔てられ、話したき事を疊みて、本意なくも其人を戻しぬ。

明日は無きやうに、今日遇ひながら心中を語らざりしを悔み、那樣いはゞ彼人の心は解くべきか、もとより飽いて斷れむ別れむといふにあらねば、八百萬の神々樣、妾を不便と思召され、腹立てられし人の機嫌を直させたまへ！　口不調法なる妾なれば、何というてよきやら、もしいひ損ねてなほ氣を損じなば何とすべき？　枕紙食裂き、夜衣の半襟に嚙着つき、終夜之を思へば夢も成らず、とろ／＼とまどろめば、恨めしげなる眼、それに溢るゝ涙！　妾には挨拶なしに出て行かるゝ姿！　少時待つてと手を伸せば、夢じや！　目が覺むればまた其事を思出し、うつらうつらと三番鷄まで聞きて寢床を疊み、今朝は茶摘にゆくふりして𛀁み／″＼遇うて始末を話さむ上、得心せずば大阪にもお日樣は照るべし、もしや此地を今日が見納にならむも知れず。兩親の顏はいふもさらなり、今持

つ箸も茶碗も、燻れる竹の自在鍵も、鑵子も圍爐裏も、裏の楊梅も背戸の瓜も懐しや！　おのづと濕む眼元を見咎められ、親父に睨まれて身を竦め、食事も匆々にして、行て參りますと挨拶すれば、茶摘か、今日は行くには及ばぬと母親に留められ、其日は一足も土を踐ませられず、居れど立てどわく／＼として、針の筵とは是なるべし。落着かぬ擧動を怪しく思はれ、其夜は父親床に入れども、深夜に灰吹の音させて、それと我に知らしめ、明日の午後駕籠に乘せられ、前の駕籠には傭はれ先の旦那樣、後には父親、生涯に一度は我もこれに乘りて、京大阪見物に行て見たしと、京女郎の美しく衣飾りて、宇治へ遊びに來るを見るたびに、思はぬ事はなかりしが、一生の願望足り、駕籠に乘りてわれは京へ行くなり。村外にてみねといふ朋輩に遇へば、立留り、覗きこみ、悲しさうな聲して、京へ行くやと尋ねられし時は、物もいはず、唇を嚙緊め、袂を顏に掩てゝ、さめ／″＼と泣きけり。ふりかへれば田畝を隔てゝ一村立

の杉の陰より一縷の烟立登り、茅葺の屋根ちら〳〵見ゆるは誰が棲家ぞ？　いはでも知りたまへかし。之を見るからに胸塞がり、何の一言もいひ遺さで、後にて嘸や……わが肉を啖ふとも恨は霽れまじく、血の涙を絞りて惡しとも無念とも覺さるべし。其憎惡をも解かず、其無念をも霽らさせ申さで、京へゆく身の心懸りの數々は、其手に毆たれ、其齒に嚙まれ、其人の傍に命を捨つるの氣安きに及ばじ。

彼樣が妾を憎しみ、妾を無念がりたまふ胸も、さぞや張裂くばかりなるべけれど、それよりは名殘のお顏、見で別るゝ妾が心中は、何に譬へむ樣なし。神經少し亂れてわれと舌を嚙裂き、血を流せば、輿丁に認められてより用心嚴しく、まづは無事にて御幸町の其店へ夕暮に着けば、噂に嘘なく甍家並外れて高く嚴しく、店つき見事に奉公人も大勢あり。

座敷へ通れば、障子、襖、天井、戸棚、まことに繪を見るに違はず。きよと／＼して、附添はれし旦那樣に袖を引かれ、冷こき敷物といへば、これは朝鮮といふ國にて出來る油團といふものなり。かゝる大家のお家へさんにして、油團を御存じなくては、嗤はれむといはれし事を今に忘れず。何につけても從弟戀しく、二人づれにて一年もかゝる家の客になりて遊びたらば、いかに面白き事なるべき。今頃は湯漬も咽喉へ通らず、京の方を足にして寢ながら、くやし涙に咽ばるゝなるべし。
少時ありて金蒔繪の亂筐とやらいふ、見事な見事な箱の中に、蟬の羽のごとき帷子をいれて持來り、これに着かへよといふ。着て見れば五所に紋ありて、袂は引くばかり長く、裾も長くして足にからみ、其處にも袂にも桃の花と女夫雛の染模樣あり。鏡にむかへばわれ我姿を疑ふほど麗

しく、昨日までは、適に髪を結へば彼様見られて、何のかのと賞揚し、夫婦とならむ曉には、綺麗なる衣物はともかくも、せめては髪なりと二三日隔に結うて、美しくして置きたしといはれしが、この姿を見せまをしなば……いや／＼新しき藁を着ても、缺土器にても、彼様との祝言ならば……。娘、何をいふと父親咎めけり。扨は口走りしか。かほどまでに思ふものを、十分が一も彼様に知らせたし、得心の上とはいひながら、これにこそと極めし彼様を外にして、心に染まぬ老夫によき事され、今更口惜きことと限りなし。次の日からは店の若いものが、いはでもすむ事にわざと御家さん／＼と呼びたて、其度ごとに我顔の赧らむを見て陰にて喜び、また此老夫様を――わが夫を、果報旦那と呼ぶことを世間にまで廣めぬ。

我はいかにしても此老夫様をわが夫とは思へず、色々と優しき言葉をかけられても一向に馴染まれず、何となく心置れて、餘所々々しき風情我

眼にさへ見ゆれば、老夫様はどれほどか疎ましきやつと、內心覺さるべきに、老夫の勘辨よくて、露ほども之を苦にせず、氣長に打解くるやうに仕向けたまへり。いかな深切も可厭！　體は老夫様の傍を離れねど、心は宇治の古鄕にさまよひ、從弟の面影眼前にちらつき、老夫一人に傅き、何の談話もなくうそ寂しき夜は、目鏡騷にて草冊子を、讀み聞かせらるゝも我への馳走、鬱したる氣を霽さむとの好意、老眼のいかい毒になると知りつゝ、身をすてゝの追從、おもしろいかと聞くに、それはもう、廢止にして下されと不興なる挨拶。老夫様莞爾やかに、なせ其樣に不機嫌なるぞ？　茶をいれてやらむ、甘き菓子があるが食べぬかといへど、それも好ましからずといふ。さらば大方睡いのであらう、我には構はず先へ休め。年寄と違ひて若きものは睡たかるべし、遠慮はいらぬと柔かなる言分。家を出づる時兩親暮々も我にいひつけ、必ず我儘らしき事をすな、從弟の事があればこそ、不祥なる顏もすれ、世間にまたと例

なき出世なり。其を思はざれば神佛の御罰にあたりて、汝はおろか、われ等兩親までよき最期は遂げられまじ。思へばまこと其に相違なく、冥加の程も可恐しや、茶摘女の舊時を考ふれば、今の身上の氣樂さ。米櫃の在所も知らず、裏庭に雜木山も見えねど、竈の煙賑ひ、簞笥より思ふ儘の衣物涌出で、それを着、膳のものを食べ、一日何の仕事もなく、樂過ぎて我身を持餘し、退ひかてら水なりと汲むで見たきほどなり。これ皆老夫樣の恩賜、その有難さをよく知りながら、怪我にも笑顏見せし事なしといはゞ、誰も我を人非人よ、犬畜生よといふべし。まこと我は非人よ、情の餓鬼なり。犬畜生よ、煩惱の。心に染まぬ玉の臺を何かすべき？　もとより茶摘女風情に賤しく生れ來りしものを、此家の老夫樣がいらざる醉興立したまへば、何も自業自得にして、わが知る事かと思ひしが、勝手の婢女どもが影言いふを聞けば、老夫樣が孫のやうなる嫁を貰うたは、三十年來の浮氣を霽さんとの洒落か。今に見よ、當世髷の鬘

をかぶり、嫁の手をひき東山などへ遊山に出らるゝを見かけ次第、若いものへの訓誡、馬の沓を打ちつけてやらむと、近所の若衆等が夜話の謗草ともなりけるとや。此家を出づるは老夫様の爲にもよし、わが爲には勿論なり。今宵は遁げむか、明の夜はと時機を窺ふに、老夫様も從弟の事を聞かれしにや、忍び〳〵の監督あるが上にも、用心のしまり堅固にして、勝手しらぬ我には、なか〳〵忍び出難く、分別しかねしある夕暮、宇治の宿元より使の男見えたりといふ。思ひもつかぬ、何用かと逢へば、しや　從弟なり、其人なり。胸轟き、手足慄き、呼吸いはずみて口もきかれず、涙ばかりは少し膝に落ちたり。人目あれば抱きつきもならず、近所の知人のやうに挨拶餘所々々しくして用事を尋ねしに、懷中より一通取出して母親からといふ。

請取りて上書の手跡をちらと見れば、われと同い年の焦れぬいたる母親の筆のあと。帶の間へしかと挿み、下女を呼びて洗足の湯を運ばせ、ゆ

るりとして夕飯食べよといふも、今日は見事なる大鯛の燒肴あれば、京へ來し思出に食べさせたかりしを、何も欲しからずといひて草鞋の紐も解かず。

菓子を包みて與ふればそれをも取らず。腰かけしまゝにて今にも暇を告ぐべき氣色なるを、傍に人さへなくばさうして置かうか、其足にかぢりつきて、脚半引取り、足をも灑いでやり、無理にも座敷へあぐべきものを。にくい男め！　我に恨を返さむとて茲らしに來しか。返事かく間は長ければ、まづ上つて待つて下されといへば、なほ面憎しや、返事はいらぬとの吩咐なりといふ。何か話出さむとする間に立上り、暇乞するを引留め、今宵は是非に一泊せよ、宇治までの夜道はつらしと、老夫樣まで口を酸くして諭せど、色々遁口上をならべて此も得心せず、いよ〳〵歸るに極めたる樣子を見て座敷へ戻り、有合せし三兩を錦の紙入にいれ、そつと袂にして訣別際のどさくさ紛れに其袖に推こみ、脊中を血の出る

ほど抓りて別れしが、あとに溜息つき、何とも思はぬに涙ほろ〳〵と滴れたり。老夫様の眼を偸みて、その手紙の封を切れば、細字にして長四尺に餘り、一筆よりかしこまで、外の事は少しもませず、皆怨言のかず〳〵なり。初は腹立て、中程は愚痴を口説き、終に近くほど悲しき事を認めたるに、讀下す小聲も震へて、紙を打つ涙の音繁く、こみいりたる胸中なれば、文章思ふやうに綴りかね、候なしに玄て口にていふまゝに筆を走らせし邊は、其人に遇ふ心地せられて格別に悲しく懐しく、それにつけても口惜しきは、返事かく間のなかりしゆゑ、よき便ありしものを、我心の花の色は散るとも移ろはねど、時節なり運ならばよしなや、可厭な風にも點頭き、好ましからぬ雨にも濡るゝ、切なさを得言はずして、いゝゝゝじうのう髭に薄緑の眉の痕、彼樣に斷りもいはで白歯を染汚し、かはりし姿を見せていとゞ業を沸させし我不束を――今始りしにもあらねど――詫びたいにも其人は居ず、なまじひにお顔見しより一倍の苦勞を

求め、思ひ亂れて解くべき智惠も分別も、われ一人に及ばねど、扨語るべき對手はなく、おのづと色に出て凋るゝ愁容を、氣にして尋ねて下さる老夫樣の深切はうるさく、幾度繰返して考ふれど、是ぞといふ思案は浮ばず、漸く思かへして、何はともあれ老夫樣に氣を許させるやうに、わざと打解け、其中に芝居遊山をねだり、いつか外出の時に宇治へ遁げむと、分別を極めてより心魂を入替へ、老夫樣をふりつける事を愼み、また仲働のかしこき小女に目をかけ、常に種々の物を取せて其心を靡け、買物をかこつけて出し遣り、宿元へ走らせて其子の親父を賴み、宇治なる從弟の許へ目方十五六匁もあるべき長文を持たせ、必ず返事を貰うて歸れといひつけさせ、その翌日また小女を遣はして吉左右聞かせしに、其子まで凋れて歸り、我やりし文をそつと袂より出して、其お方樣は七日以前に江戸へ御奉公にと御發足なされ、五六年は歸るまじとの事なりとて、親父もお氣毒がりて此文握つてもどりました。

（五）

其文は火中して折角の心盡しも烟となりけり。江戸へ奉公と聞きし時は、前後も知らず唯悲しやとばかり胸潰れしが、思直せばこれ皆虚なり、架空なり。雨降るにはまづ曇り、花咲くにはまづ暖なり。今までそれらしき談話もなく、または彼人なくして親人を養ふべきものあらむや。いかにしても江戸へゆかるゝ理由なし。文使を怪しと見て親人たちの、虚をいひて逐戻せしものなるべし。あの子のかしこ氣なるには似で親父の愚鈍者よ、四十面さげてこれしきの戀の手傳ひがならぬか。さればこそ其愚鈍萬事につき纏ひ、世を渡るも今日に逐はるゝなるべしと、恨もなき人を心中に罵り、之に氣を腐らせておもしろからぬ色顏にあらはれ、また老夫樣をはら〳〵思はせぬ。

其人の安否知りたく、古里の景色も懷しければ、一日宇治へ參りたしと

願へば、店がせはしくて今は暇なければ、其内に連行くべしとて、老夫樣聞入れられず、一人にても苦しからずといへど、是も聞かれず其儘泣寢入になりしが、不圖下女どもが嫁入の談話するを聞けば、里がへりといふ禮あり。今までさる事は知らざりし。扨は從弟あるゆゑに兩親の指がねにて、宇治へ來るを止めしと見えたり。口惜く思ひて、われも里がへりしたき旨を、老夫樣に話せば一言もなく、やがて籠二挺ならべて宇治へ急ぎぬ。

久しぶりにて我家の傾ける軒を、見るに嬉しさ胸に溢れ、老夫樣を捨てゝ驅入るに、誰も居らねば聲を張りて母樣と呼べば、背戶より襷がけにて入來り、顏を見合せて、やれ珍しや娘、一人かといふ。いえ〳〵旦那樣も御一處にと門口を覗けば、杖つきて毛のなき頭をふり、暑い事だと齒をもる聲の疎ましさ。此姿を見てはこの人に連添ふ我身にも愛想をつかしたり。母親は花筵をとり出して、われ等二人を上坐へなほし、親

父殿は直其處までゆかれたれば、今の間に戻らるべしと、爐に枯木をさしくべるを見て、澁茶など飲みたまふべきや、例年のやうに眞桑瓜の作りたるがあらば其を薦めたまへ。皮は我が剝かむ、これは柔かなれば小さくしてなど丶まめ〱しく、我ながら何時にも似氣なし。これ心中にうれしき希望あれば、その餘滴のほとばしり、か丶る事も出來るなり。夏は田舍の事、都にては此見はらし、金で買はれぬとつぶやきながら、老夫樣立ちて南向の窓より青々とせし田畝を眺むる隙を見て、母に寄添ひ、從弟のことを囁けば、首を掉り眼ばたきするは、今いふなとの意なるべし。我も首肯き、友達の事など尋ね、麥こがしありやと聞けば、京の菓子より味美きかと、老夫樣に笑はれけり。程なく父親も歸れば、男同士は田舍ものながら話柄もありて、打語らふ間に母をいびり、久しぶりゆゑ朋友にも遇はせたくと、少時の暇を母より老夫樣に願ひ、門を出づるや否やまた從弟の事を尋ぬれば、少し猶豫ひて、先月の末方、江戸

へ奉公に出したりと言放せしが、流石に我へ氣毒とや思ひけむ、これには深い理由のある事と言はせも果てず、母親の手に縋り、不肯、不肯！彼樣戻して。　えゝ、見ともないぞ、御家さんの泣くといふがあるものか。それ白粉がはげる。　白粉もはげよ、苦しからず。見すべき人なきに何かせむ？　誰に斷りて彼樣を、江戸へ流しものにはせられしぞ？彼の兩親が相談の上なれば是非なき事なり。　嘘じや〳〵、お前が意地をつけて遠けたに相違なし、何が憎うてそのやうな事は云たまひしぞ？京へゆくは可厭といひしも彼樣あればなり。また可厭なる京へ行きしも彼樣あればなるを、よもや知らぬではあるまじ。親と云たものが子に嘘を教へてよい物か。子を可愛と思うてくれぬお前には、我も孝行はすまじ、我は京へはゆめ〳〵歸らじ、これより江戸へ行き、彼樣を尋ねて、夫婦とならむ。母樣さらば。隨分息災に暮したまへと驅出せば、母は魂を消し、あわてゝ我袂を捉へ、娘待て！　樣子を聞け！　もはや樣子

を聞くには及ばずと、手を振拂はむとすれば腰にとりつき、面色を變へ泣聲になりて、詐りしと思はゞ腹も立つべし。親として子を思はぬはなきものを、これ皆其方が身の行末を思へばなり。まづ心を鎭めて樣子を聞きやれ、樣子を聞かば萬更腹も立つまじといふに、心の角すこし折れ、早く話してと涙を拭ひぬ。

（六八）

餘りに思寄らぬ事なれば、從弟が江戸行は架空とのみ思ひしに、大眞實！　母の細々と始終を語るを聞けば、なるほどそれにも一理あり。もし從弟を宇治に置かば、我はそれに牽されて老夫様を粗末にし、つひには愛想盡されて、衣のまゝ去状攫むで戻るか、または先方から去るといひだすまで辛抱ならず、われから暇とるか、此二つの一つをいづれか遁れじ。さらば一月極の妾奉公して、處女の清淨を、汚され放しに追出され、女人の身にとりては莫大なる耻辱損失の償ひなく、たゞ世上のうとまれ者となるのみ、千日の萱を一日に焚すとは是なり。心の熱燃に、思慮分別を燒く靑年には、避けがたき事なれば、戀の主となる男を遠けたらば、及ばぬに思締め、行末を目懸けて辛抱もなるべし。近くにあればこそ未練も起れ、今が肝要なる時に、ひよんな過失を爲出來さばと、一同相談

の上江戸へ三年、奉公に出したりと語りぬ。
想ふに従弟を遠けし事の早急になりしは、京へ彼の尋來しこと、わが紙入を與へし事の露顯せしゆゑならむ。道々も母は我心の落着くやうに理を分けて、此度の一條を話しける其腹中を聞けば、無二無三にすねるも忍び難く、従弟三年勤めて歸國の上は、其頃には老夫樣も亡人になられ、妾はあの身代を持參にして、目出度く一對の眞實が合體すべければ、（なる堪忍は誰もする）と諄々諭され、唯しやくり上げて首肯くのみ。やがて従弟の家に着けば、見る模樣舊時に變る所なく、餌を拾ふ家鷄右往左往に亂れ、一羽我裙を逐懸くるは、見覺あり彼人卯よりかへして、殊に大事に育てしかいゝしはなり。抱きとれば、足の泥に帶がよごるゝといふも構はず、羽翼を撫でゝ、彼樣は何處へゆかれしぞ？　今は其方を可愛がりてくるゝものもあるまじければ、朝夕に戀しかるべし。再會の日は長かるべけれど、其方も命壽

く玉子も澤山生み、彼樣の歸らるゝを待てよ、必ず待つべきぞといへば、一聲長鳴して羽搏くにぞ、母も淚を催し、妾はいとゞ哀憐を骨肉に感えける。伯父伯母打揃うて出迎へ、我風俗のかはりて美々しきを見るより只管魂消かへり、しげ〳〵と姿を眺めて側へは寄らず。お替りなうと小腰を屈むれば、母親會釋して、今日一寸參りましたゆゑ伴れました。お二人とも褒めてやつて下され。衣裳の物好は申すもおろか、擧動なら、言語なら、天晴京女﨟！ 眉をおとし、鐵漿をつけましたら、一段容色をあげました。よい御家樣を見てやつて下されといへば、伯父も伯母もほく〳〵して、京の水には染みたきものなり。もとより色白ではあつたれど、何處やらに土氣は失せざりしが、凜と威がついて奧幽しくなりをつた。伯母は言葉を添へて、こんなのをわが子が行末嫁にとは勿體なし。遠き所をようぞ尋ねてくれしと、二人して我手をとりて內へ入れ、ちと京の話して聞かせよ、田舍にては何の快樂もある事なし。世に其方ほど

仕合せなるものあるまじといふ、伯父の顏を流眄に見やり、我都にはあれど、外出を許されねば、かつて都を知らず、明暮に心を去らぬは此處宇治なり。道々母樣には怨言を申したれど、伯父樣伯母樣！　あなた方は鬼とも蛇ともいはうやうなき無慈悲な方なり。　これは近頃思も寄らず、無慈悲とは何を無慈悲な事をわれらが爲しぞ？　生木を裂いたは無慈悲ではあるまじきや。命をかけていとしき人を、江戸三界へ逐ひやられしは、慈悲か功德か。それも理由を話して得心させ、念の霽るゝほど名殘を惜ませて下さらば、孩兒のやうに聞分なく、横に車を推しもせまじ。我身にしては不得心の此上もなき、京への嫁入さへ得心せしを見たまはゞ、彼樣の爲、且は我身の末もよかれと計らうての事を、それと知りつゝ、一時の辛抱え難く、否をいふ妾ならぬは知るべきに、妾が知るまでは何處までも裹まむとのお心の水臭さ。　さる邪見非道なる伯父樣伯母樣とは、今日の今までも思懸けざりき。

實に人も容し、我も自ら我性質の柔和なるを識りしに、此時ばかりは、後にて考ふれば淺ましくもはしたなく、母にあたり、伯父伯母にまで食つてかゝり、聲を荒らげ顏を赤めぬ。

さもあるべし、われ一生に如此腹立しき事を覺えず。此までつひに見聞させし事なき、角芽立てる言葉といひ、態度といひ、勇士の劍は妄に鞘を脱けず、たま〳〵脱れば血を飲までは藏まることなし。伯父伯母したゝか畏れて少しも悖はず、只管言語を和らげて、今度の事は我等が重々の多罪と、手を衝かぬばかりに詫びたまへり。縱令今帝樣御中人に立たれ、千萬枚の詫證文取つて下さるとも、行きし人の還るにもあらず。さらば堪忍せまいか、せぬとて益なく、堪忍すべきか、それも口惜し。詫びて事が濟まば人を殺しても頭顱を下げて濟むべし。謝罪は肯かじ、詫びたまふには及ばじ、彼樣を呼戻して下されといへば、また其樣なわやくをいうて我等を困らすか。江戸へ彼を遣りしは二人が行末の利とは識

らざるかと壓へられ、これには返す言葉なく、袂を噛みて俯首きたりしが、彼樣江戸へ行かれしは、過ぎたる事とて及び難ければ、何もいはで此まゝ諦め申すべし。さりながら只一つあきらめかぬるは、我嫁入を彼樣一圖に心變と思ひ僻め、我に恨を重ねしまゝにて出立れしからは、もはや妾への戀の糸は切れて、弗とこの田舍ものを棄て、江戸の美しき女子に昵み、再び此土地へは歸りたまふまじ。よしや三五年の後歸りたまふにしても、我に何の心かあるべき。その美しきとこれ見よがしに世帶を持たるゝは知れし事なり。これまでの苦心は徒勞となりて、餘所の和睦を羨みの寡婦暮し、金銀を夫と傅きて、果てなむ事は口惜しからずや。心に染まぬ老人に添ふといふは、そも／＼何故ぞや――誰の爲ぞや、彼樣に添ひたければなるを、それゆゑに恨まれ、疎まるゝこの身を少しは不便とも見たまへと、初め腹立てし氣色に引替へ、さめ／″＼と涙をこぼし、いつもの柔和なる氣性に返りて搔口說けば、伯父は道理々々と首肯

き、其恨あるべしと、我等老年に如在はあらじ、涙を拭いて心靜に之を見よと、一通の手紙を我前に置きけり。なつかしや！　彼樣の筆の跡。遠慮も忘れて取上げ之を讀むに、兩親より京への嫁入の始末を聞けば、移氣などゝは神以て思もよらず、我身をいとしがりての奉公、其と知らで未來かけて恨みし我心を慚ぢたり。われ此度江戸へ出づる事、近くに居ては其方が煩惱の種となりて、大事にすべき旦那樣を、麁末にする事あらむには、二人が後年の爲惡かるべし。女の身すら可厭な家に辛抱するを、男として行くべき所へ行かずしてあるべきや。則ち我も江戸へ下り、數年の奉公首尾よく勤め上げ、一人前の男となりて、歸國の上夫婦の盃を酌むべし。其までは相互に隔絶れど、屹度身持を愼み、女の後妻も見まじければ、我事は心に懸けず、此處は大事に老人に傅きたまへ。多時の離別なれば、顏の見たさに肉動きしかど、なまなか遇はゞ辛抱の邪魔なりと心を叱り、態と暇乞はせざりしが、可憐き其方が意中を聞く

につけ、此間情無くせしを悔みて、寝るより寤るまで――寤るより寝るまで、忘るゝ間なき愛着の一念通らば、わが面影其方が枕頭に通ひて、盡きせぬ名殘を惜みたらむ。先頃くれし紙入の伽羅の香今に失せず、長途の道中も肌身につけ、草枕にも添臥の想して、獨旅の憂を慰むべし。かへす〲もはかなき戀はすべきものにあらず。かくまでに二人ながらうき身を窶し、もしも添はれぬ事もあらば、思ふまゝに神佛を罵り、此命を三尺繩にからげるか、魚の餌食に投げやるか、浮世は頼まじ、地獄へ墮ちてなりと夫婦になるべしと、思入りては可恐しき事をぞ書きつらねける。我も之を見るからに、其人の心さらりと解けたるに胸治まり、京へ來たまはゞ是非に立寄りたまへと、愛嬌遺して暇を告げ、我家へ戻れば老夫様は待草臥れて凉風に高鼾、かくの首尾とも知りたまはで。

人間は苦勞の器物といへり。上は大臣より、下萬民の我等まで、誰かこの器ならざるべき。金銀あればあるにて苦勞なり、なければまた無きにて苦勞ある世の習と諦め、從弟と分離〳〵の憂身、戀の花あたら咲いて散るも命なるべし。されど苦樂は羽子板の表裏にして、いつか一度は裏がへる時節に遭ひ、今を昔語に玉子酒相酌はし、思ふ人にいとしがつて貰ふべしと、只其ばかりを希望に老夫樣をもやさしく待ひ、竹の麻姑手老體の肌ざはり快からじと、わが柔かき指頭にて、痒き處を搔き參らせ、思ふまゝ老夫樣を悅ばせけり。

年に四五度は江戸より音信あるを此上なき娛樂にして、その文殼一通も反古にせず、忍讀の折の小皺を伸し、緋綸子の囊を縫ひて悉皆之に納め、簞笥の奧に潛ませて折々の心幽しの種に貯へぬ。まをすも天可恐しく、

勿體なき事なれど、老夫様を大事にかくる意の皮一重剝いて見ば、この老人一日も早く死ねかしと、効驗なる神々様を念じ、老夫様の命を縮めたまへと、斷物までして丹精を抽づれど、其顯少しも見えず、三年目に淺ましや！　わがお腹大きくなりたり。人を咀はゞ穴二つ、惡業身に酬ひけるに是はとばかり驚きしが、流石に鬼ならねば闇から闇へ手づから突遣るに忍びず、とはいひながら我戀の邪魔物、彼様に立派なる事をいひながら、かういふ物を拵へては言譯立たず、心に染まぬものゝ種を宿すべき道理ありやと、淫婦に我を見做して、女房には特つまじといはれなば何とすべき？　苦勞の上に苦勞重なり、くよ／＼と妊娠中も、絶えず案じ煩ひたれど、お腹の子には露ほどの障礙なく、やすらかに出産せしは、玉の如き男子なり。

老夫様手を拍つて小躍し、出來した出來したと心を傾けて喜悦を灑がるゝ顏を見ては、掌を合す猿には覘もそるべし、あはれにも可憐くなりて、

扨も我心の愧かしや、果敢なき戀はすまじきものと彼人もいへり、實に我も是ゆゑ未來は地獄へ墮つべしと知れり。宇治の宿元、伯父、伯母まで、一所になりて之を喜ぶに、何ゆゑに喜ぶやら、我には少しも解せず。子一人あらばあれ、何とか彼樣に詫びたらば、捨てよ、殺せともいひたまふまじ。此子の命のかはりには此財產、ともかくにもよしなき物が出來たりと思ひながら、日を經るまゝに愛出でゝ、わが腹を痛めし子の惡からむやうなく、また老人の附添ひて大事に懸くるほどに、我も疎畧にならず養育てしが、あくる年また妊娠りて女子を生みしに、我も我身に愛想をつかし、また此老夫どのゝ達者なるに呆れ、此分にてはまだまだ命數盡きざることゝあぐみぬ。江戸へは子を持ちし事を深く裹みしが一人ならず二人までもと知らば、其腹立のほど今から目に見えて可恐しく、伯父伯母等は好樣にいうてやると仔細なく受合へど、此事朝夕の氣懸りになりて快らず。打續きて從弟に刃物持ちて逐かけられし夢に魘は

れけり。なほ此上の氣懸りは老夫樣の壯健なる事なり。我添うて四年に餘れど、藥一服飮みしこともなく、腰なども年齡ほどには曲らず、日々に若やぐに引替へ、我は二十一までに二人子を持ちて、鮎も錆つく面影、よき婆樣にぞなりける。いよ〳〵彼樣との緣は薄くなり、また長年添ふ内には、いかな男子にもじり〳〵と情愛つき、この老夫樣とて萬更いとしからぬでもなきやうになりぬ。

人情といふものは、神の心まかせに働くなれば、持主たりとて人の力には及び難し。寒強く咳などせらるれば、否がる藥を薦め、重くてならぬといふに夜衣を重ね、眞實の女房めかしき所作をゑむくるほどにはなりたれど、まだ天秤にかけて見なば、從弟とは七分三分、どちらかといはゞ幼稚馴染にこそ添ひたかりけれ。

月日は待つに長く、過去りし後から見れば實に流れし如く、我は丁度三十になりぬ。老夫樣は七十三にて災息なり。この十三年が間最初の四年までは、江戸より折々の音信ありしが、五年目の春の暮、大方手紙の來るべき時節なるに何の音沙汰なければ、此方より二三本追かけて安否を聞かせよといひやりけるに、之にも一向返事はなく、去年江戸にて疫病流行りたりと聞くからに、もしや非業の死を遂げたまひしにはあらざるかと、我思に異らぬ伯父伯母は、かけがへなき子を亡して老後の快樂は盡きたり、野なり山なり行倒れむ所を菩提所にして、悲哀を其所に留めむと、夫婦固く言替せ、我も打交り五人一夜泣明して離別を惜み、杖つき並べて子息探しに出でたまへり。みいら取みいらになりて二人とも歸られねば、門出の折の言葉に違はず、驛外れの野路の露と消えたまひし

やらむ？　さなくば江戸にて尋ねあたらざるに氣落して、よしなき往生したまひたらむか。彼樣もし生きてならば、奉公勤めあげて一軒の主人となりて、京育はなまぬるしと、いつか其地の水に染み、江戸ものを女房にして、昔の事は忘れたるべし。腹立しや！　我に無果なる貞操を立てさせ、女一人をつまらなく埋木にせしか。いや〱彼樣に限りてさる不實なる事はあらじ。ふとせし麁忽より店をしくじり、それより諸所〱をさまよひ、あるほどの商賣に手出しして、いづれも馴れぬに仕損じ、面目なくして故鄕へも歸れず、有るか無きかに世を渡りて、獨身のさびしき夕暮は、入日の山の此方戀しく、男子の手に火吹竹持ち、粥のやうなる飯を炊き、何かにつけて苦勞したまふべし。早く其不自由を救ひ參らせ、泣いて喜ばるゝ弱身につけ入り、長年我を打遣放して、餘所々々しくせし不實を怨み、思ふさま腹立て、すねて、あまえて、いぢめて、こまらせて、あとは心解けて相互に變りたる笑顏を合すべし。それには江

戸へ尋ねて行かねばならぬに、老夫様の妾の心も知らで何處まで達者なるぞ。翌日は死ぬか、來月は死ぬか、此冬にはといたづらに待ちて春も明け、その次の春も明け、またその次の春も明けて、我三十五の歳、宇治なる父親身逝り、二年置きて母親も阿彌陀様の許へ參られけり。思も懸けざる人は亡なりて、望みし老夫様は惡いほど丈夫にて、我もいつしか四十の老女と成果てぬ。此年齢になりては戀慕の熱も冷え、淨瑠璃小唄は聞くにうるさく、御法談の難有味を感え初め、從弟の事は全く思絶ちて、次女の身の結婚を、心に懸くるやうになりぬ。

老夫様やうやく老體の立居につらく、二十歳の總領に身代を渡せしに、浪費盛の無勘辨もの、天下の主になりすまして我意を募らせ、色里に入浸りて腸に酒氣の絶ゆる間なく、商賣は他人まかせにして存分の放蕩をつくせば、瞬間に五棟の土藏がらんとなり、風袋までも他人の物となる始末に、家も地面もそれ〴〵人手に渡り、わづか千日足らずの一人の色

遊の代に、數代根生の老舗蹟形もなくなり、家名は昔の、思出草に、古暖簾を綴りし老夫樣の肩に殘るばかり、我等を難澁の淵に突落し、可憎子息は夜遁して今に生死を知らず。たゞ不便なるは娘なり。十九の冬緣づけし男、商賣のおもはしからぬより山氣を出し、見事に躓きて此も瓦解し、それを苦に病みて先立たれば、すがる處なくして犬小屋のやうなる我家へ轉げこみ、親子三人乞食せぬばかりに世を送りけるが、それにても立行かねば、さる人の世話するにまかせ、勤番の西國武士に娘を妾奉公に出し、その月々の仕送に、露命を繫ぎぬ。老夫樣も我も口癖のやうに、死にたい〳〵といひ續けしが、仕合せな老夫樣は、去年百十六にて目出度なられしに、我は生耻掻きに殘されました。思へばその昔老夫樣に早く死ねとは如何なる心にて願ひしやら、今となりてはなか〳〵戀しやと齒壺を抱へて泣出せば、關係人の迷惑と若き男は慰め、其後つひに從弟殿の音信はなきや。――いかにも音信を聞かず。どうなされし事

やらと涙を拭ひ、されども妾に出せし娘は、旦那様のお氣に合ひ、死なれし奥様の後に位り、旦那様は御一新の時お手柄ありて、今は官員様をお勤めなさるゝが、やさしき方にて、老夫様死なれてより、我は其方に引取られ、孫の監護して日影に背を干し、氣樂なる今の身上ながら、焦れし人には添へず、添ひし人には捨てられ、吁、浮世はいやゝの〳〵！

（二十四年一月）

文ながし　（新色懺悔附録）

上

長局は世間無鹽色姿の尼寺。よく〳〵なればこそ一生奉公と諦めし心根は、武士が忠義に腹切るより一倍不便なる中に、不思議は藻鹽どの、年齢こそ寄りたれ、美しき皺陰れに花の香なほ殘りて、更に婆染みたる箇所なきにつけ、あはれ四十年の舊時が拜みたかりしと、藩士の青年會まれば、必ず談柄にして無念がりけるに、其頃より今に門番の六助といふ老漢、彼奴は生物の一代記、引捉へて吐かせよと、中にての好者が先達になりて四五人を唆かし、酒一升にてやう〳〵口走らせけり。聞けはなるほど、なるほど。祇王祇女が嵯峨野へ夜奔したも、クレオパツラが蝮を懐いたも、棄てたくて我から棄てし美色にあらず。藻鹽殿とても其通

り、深い因縁とは承るも憎し。

世は誰も戀なり。對手は同藩の要人殿、此間までお國元にて全命られし、後の名は定巳殿、年を重ねたればこそ之も老父なれ、青年には善美好の美男、これをや花に露そふ御風情、一目見し女人心の動かぬはなかりき。特別盡すが上の心盡しに、鹽樣の物とはなりけるも、好事は魔多くして只夢の間の夢なれや。生命を捨てゝならばともかくもあらむ、生きては添はれぬ事情に泣別れけるより、初戀の一圖は此外世界に男子は無きものゝやうに、世を味氣無みて髪は其儘の比丘尼心、やがてお奥へ御奉公との噂立ちける時は、涅槃の圖をまざ〳〵と、虎のやうな武士までが涙を零しぬ。

* * * * * * *

可恐しきは思ひつめし女人の一念、これならば石にも蛇にもならばなるべし。十九の歳より五十何歳まで、戀に目逃がす、濡に膚撓ませず、身

を慎みて忠節一三昧に仕へければ、御覺も勝れてめでたかりしが、廢藩の後は寄る齡に窮屈なる奉公も憂し、町家住居は兼てより希望の一つと、病氣を申立てゝ御暇を願ひ、麻布古川の邊に淸四郎とて、骨肉の甥が小體に煙草營業せるを便り、其裏借屋に小奇麗なる一人暮し。長年の奉公中に貯へし衣類道具の置所なくて、或確正なる知音の土藏に預け、之を賣食にしても餘命短き一代は安樂に、なほ一周忌の法事も遺族に迷惑を懸けずして、見事に取賄はるべきに苦勞といふものなく、いつやらは保字小判を火鉢の陰にて勘定せられし所に行合せしが、大凡百枚もありけりと淸四郎が語れば、女房口頭を尖らせ、此間土用干のお手傳に參りし節は、葛籠の底より帶錠前の手文庫出たりけるを、殊に秘藏がり給ひて、人手に懸けさせられず、出すにも取入るゝにもまづ其から御自身にし給ふは、公債證書何十枚と、聞くより淸四郎雀躍して、持つべきものは叔母御と、夫婦揃うていよ／＼大事に懸くるは、是にも限らず現金なる人

心陰ながら御長命を恨み奉るはなほの事淺まし。さりとは壯健に年齡を重ねたまひ、七十二とは勿體なければど、生過ぎたる長の月日に、預けたりし器財は一つ殘さずちび〳〵と取戻して、巨燵の灰と消え、家賃米薪酢醬油と減り、時候の甘物食に盡して、四壁からりと寂しくなりけるに、夫婦は商賣を外にして、之にのみ心を傷め、氣を遣ひぬ。されど大願懸けたる手文庫には、有難やなほ手の附かざるを樂みけるに、其年の秋の初旬、差配が庭の柳散るを見て、無常の歌を何心なく詠出で、つひに覺えぬ秀歌と歡びしが前徵となりて、老體衰弱の床に仆れしまゝ足腰立たずなりて、霜夜の蟲の死期近きぬと我から曉りければ、藥劑よりは手馴の珠數を此上の依賴と、現にも阿彌陀佛を口不斷に念じけるが、今日明日といふ夕、夫婦を枕頭に呼寄せ、病中は格別厚き世話になりける禮などを述べ、葬式一切の料にとて金子若干の紙封を手渡し、衣類二三品の遺物分配まで濟せて、呻くも苦しき聲の下より、

葛籠の底にといふを、それと心得て清四郎、例の手文庫をうや／＼しく取出して、是かと枕頭に押直せば、大義さうに頷きて、頼むは其中の物、未來までの懸念。　とは御道理々々。人は最期の一念に由つて生を引くとやら申せば、何事も清四郎奴にお委せなされまして、必ず麁畧には致すまじければ、露ばかりも此世に思遺したまふ事なく、清しく成佛遊ばされよ。　嬉しや／＼、其中にはかねて一通を入置きたれば、呉々もその通り計らひくれよ。毛頭も違背かば執着の種ぞとあれば、夫婦膝行寄りて、御安心なされませ、何事も御遺言のまゝといふ返詞に首肯きて、其後は何の言葉もなく、目を塞ぎ吸呼重く、枕に縋りてすや／＼と眠れば、夫婦相見す眼中に（臨終）と囁きぬ。其夜の三時頃病者の鼻息少時高まりけるが、ふつと吹斷れば、忽ち潮の退く如く、五體の血冷え徹りて、脆きもの！　あの世の人とぞなりける。

下

葬式事なく果つれば、佛壇には白木の位牌、叔母様在すがごとく、うや〳〵しく燈明を供へ、線香を薫じて、夫婦はつと叩頭きぬ。清四郎は流石恩愛の涙留めあへぬ側に、女房例の手文庫を持來りて衝着け、開けて見たしといへば、清四合掌を解き、急かでも蛙にはなるまじきものを、さほど見たくば拜ましてくれう。鍵を渡せと、胸わく〳〵の動氣を蔽して、無理沈着に沈着くを、女房憎しと、おつしやる通り見たくて見たくてならねば、昨日から絕えずの催促。此方はどうやらさまで見たくはないやうな、さる人に強ひて御覧なされとは勸めませぬほどに、此方は一人御回向をなされませ。其間に私は寸時見ますと、文庫に懸くる手を清四捉へて、待て〳〵！と示威きつくり眼を、女房くす〳〵と笑ひて、そのやうに可恐い顏をしたまうても、額に（見たい）と書いてあれば、瘦

我慢は好加減にして、早く開けて御覧なされと、錠を脱して帯革を放せば、待て〳〵！　おのれなどは身貧に育ち、青錢五厘銅のざく〳〵錢か、背筋の透いた十錢二十錢の古紙幣の外には、御意得た事のない下司下賤もの〻分在として、假初にも四五百圓の公債證書に手を觸れむなどは、福の神への畏懼ありとは心注かざるかと、文庫を奪取りて燧火を打懸け扱推戴きて、南無や大黒天、惠比須三郎殿と、蓋に懸けたる手首に女房遽て〻縋り、開けたまふは善けれど、さる夜の約束を忘れはえたまふまじ。　約束とは何？　え〻！　此人は、氣を留めいでもの日毎の小使帳は、風引いた夜も忘れず調査べながら、あれほど諄ういうた詞を、どの耳へ入れたまひしぞ。　どの耳この耳と榮耀がましく、ひかへの耳を持つほどの清四郎なら、腕も大方五六本ありて、日に三四千の貨を巻けば、かうした不自由はせぬ理なりと嘲笑ふ。女房赫となりて鼻息暴く迫寄り、なんぼう私がお多福面なればとて、あまり手暴く玩弄物にはえて

下されますな。忘れたなら忘れたと、男子らしういはしやんせ。百も承知して居ながら、今更惜うなつて遁げうとは、士族々々と日頃いはるゝ口吻にも似合はぬ卑怯なことゝ、口惜涙をほろ〳〵と濺せば、清四郎この見脈に易事ならずと駭き、聲を和らげて、何か知らぬど仔細を語れとあれば、濡眼を蔽膝の陰より片目顯して、恨ありげに清四が顔をじつと眺め、此方はまだぬけ〳〵と、何か知らねどなどゝ不知をきりたまふか。此事ばかりは死ぬとも忘られぬ一代の嬉しさ故、日に二三度づゝ復習うても覺えたるは、この文庫の内百圓以上のものならば、黒繻子の丸帶と縮緬の頭巾を買うてやるといはれたは、空言か戯言かと疊を拍つて問詰むれば、清四郎呵々と笑ひ、其事か、今泣いたのは其事か。其事ならば泣かずとも笑へ〳〵、願の外れるほど笑ふがよし。もし文庫の中二百圓以上ならば？　其外に鰻飯二つと、所望の演劇を土間にて見すべし。三百圓以上ならば？　景物として、かねての所願なれば流しもとの手

入した上、改良竈を買ふべし。又四百圓以上、五百圓以上、百圓の一割づゝ現金にて小使に遣るほどに、衣類なり、髪飾なり、好むものを買ふがよし。此身にとりて其上の所願とてはなけれど、その所願にも勝して大事の〳〵、大切の所願がまだ一つ殘りたりといへば、もはや御免！　と喚と文庫の蓋に手を懸けたり。驚破！　と飛着き今一言、一大事！　と喚けば、何だ〳〵？　縱令此金高百圓に足らずとも、千圓に餘るとも、祝などとて此方は必ず餘所にて酒を飲みたまふな。餘所にて酒を飲みたりとて何ほどの仔細あるべき。さらば飲むは可けれど酔うては下されな。茶さへ濃ければ浮かさるゝに、飲むで酔はぬといふのろまな酒があるか。さらば酔ふも可けれど……。何とした。酔うた紛れにはある例、浮かれて味な所へ踏入りたまふな。馬鹿め！　伊豆屋の清四郎樣はお世帶持だ。これを資本に一旗擧げて、京橋邊へ攻寄する覺悟、女房しかとやれ。乾元亨利！　そりやこそお寶と蓋を取れば、もとより

金銀珠玉をつめたるものならねば、これはと驚くほどの光明を放たざるに張合なければ、それ、この反古のやうな紙の尊さと、徐に手をさし入れて、七卷の書類を取出し、疊の上に置かむとするを、女房遽てゝあら勿體なやと、簞笥より蒔繪の古盆を出して、　ともかくも此上へ。それお光來じやお光來じやと、大喜悦の四つの眸を細めて、莞爾の顏を見合せ、左右に飛退つて盆の上なる御寶に三拜をぞしたりける。清四おづ〳〵膝行寄りて、上なる一卷を取上ぐる側に、女房兩手を支へて尊敬の上眼づかひ、目退ぎもせで視てあれば、清四咳拂二つほど高らかに響かせて上封じを解けば、こは、こは、こは！　こはそも什麼？　むかし埋けたりし緡錢の蛙と化せし例もありしとかや。この一卷は奥の奥まで文殼なり！　清四血眼になりて外の卷の封を切れば、これも同樣文殼束。もしや奥にもと筍の皮を剝くごとく、心を目的に引裂き、引剝けど、いかな事！　文の外はなかりけり。女房堪らず半狂亂になりて手傳ひ、瞬

耳に殘る五卷をも一々引解いて見たれど、十錢札の截片だに飛出でざれば、夫婦呆れて、呆れて、呆れて、腰の拔けざるこそまだ〳〵不思議なれ。女房わつと泣出して、繻、繻、繻子帶……。　え、、不吉な、泣くな。なほ、不吉な、帶の事などいふな。　いはいでか、いはいでか。あの老女め……。　何と？　否、何、あの、叔母樣め、平常御殿の自慢いうて、お殿樣が御大氣の、お奧樣がおやさしいの、いろ〳〵の下賜物が、つもりつもつて、金子にすれば何千圓、それもこれも其方達夫婦がやさしうしてくれる禮までに、わが歿後は二人の所有にならうぞなど、屋敷あがりは皆赤田螺と思の外、甘い事ずくめの談話を、無根にしても十分が一の物はあらうと、親身の母親同樣に世話したりしに、長命のしすごしから、持物をみな沽却して、紀念というてあれは何ぞ？　よくぞ恥かしくもなく出された羊羹色のびり縮緬、大御所樣時代の振袖か、茶番の外に何時誰が被るものぞ。平常の御大層なる口上に合せて、あれし

きの紀念がはづかしければ、證文一つなき文反古を種にして、うま〳〵手品をつかうたは、惡さも惡き虚言吐婆！　えゝ、腹が立つ、業が沸える、此方は癪にも障らぬかいな？　死んだものでないならば、逐懸けて摑み着き、白髮を引挘りて咽喉に嚙着き……。　えゝ、この馬鹿ものめ！　血迷うたか、よまひ言も節にせよ。　あゝ、血迷うた、血迷うた、血迷うた。　繻子の帶が口惜うござんすと、身悶して泣入れば、その勢に膽をぬかれて、淸四はいよ〳〵惘となり、目瞬ぱちり〳〵と文殼を眺めながら、虹のやうなる息を吐きぬ。

猶未練ありて文庫の中を覗けば、底側にべたりと密着たる一通あるを、もしやと取上ぐれば、叔母の手跡にて、書遺の事と認めたり。公債證書でなくば見たい事もなけれど、尋常事ならぬ遺書といふ字に、心牽れて之を披けば、

一筆申のこし〼。　此中の文がらは、お國元の定巳様と年來とりかはせ

しものに御座候。申すもはづかしき事には候へども、私御殿へ御奉公中、十八の年より定巳様に馴初め、末はかならず〳〵女夫と、淺からず契りまゐらせ候ひしが、とても添ふことかなはぬ譯有之、死ぬよりつらき思にて縁切りは候ものゝ、貞女兩夫に見えずとの敎もあり、なほまたありし夜の契のほどを思ひ申候へば、只この人こそ戀しく懷しく候へ、外々の男に添ふ氣はさら〳〵ござなく、それゆゑに一生奉公を思立ち申候。その後定巳様はさる方と御祝言なされ候へども、まへ〳〵の約束にて、行末ともに此身を忘れぬ證據とて、月に二度づゝこまぐ〳〵との文を下され、私よりも返事をさし上げ、逢ふにかへてかくはかなき首尾をたのしみに暮しまゐらせ候。十九の年より一昨々年七月、定巳様あの世へ御先立なされ候ひしまで、月々おこたらず御音信有之、私は東京住居、定巳様は御國元にて郡役所の小使を勤めらるゝ御身とて、御出京の御暇もなく、私とても老年まで御屋敷に上りて自

山ならぬ身なれば、御目に懸りにも參りかね候まゝ、五十年が間文通たえず、只々こがれ居りまゐらせ候へども、かはらぬ御志のほどは文にていつも嬉しく覺え參らせ候。いよ／＼私事も此世は今日明日に御座候へども、定巳樣未來にてさだめし御まちかねなされ候はむとぞんじ候へば、臨終いそがれ申まゐらせ候。扨とやこの文は戀しき人の筆の跡、心のまことにも候へど、火を懸け候はむも心苦しくて、かくとりおき申候ものゝ、御前樣方に見られむは、亡なりし後までの物笑と、まことに／＼耻かしくぞんじ候へども、この文の始末頼みあげたきまゝ懺悔いたし候。此上は人目にかゝらぬやう、そつと川へ御流し被下度、くれ／＼もねんじ上げまゐらせ候かしこ。

（三十四年一月）

猿枕（新色懺悔附録）

其一　すさまじきもの（上）

勇者も大晦日は恐しといへり。三百六十四日が間、天にも地にも繕ひし襤褸、今日只一日に出て、世間は苦しき人九分九厘と知る可し。此夜の十二時は尋常の薄暮ほどにも思はれず、商人の店には洋燈の數を増し、高張に景氣を添へて、丁稚も居眠らず、買人もまた夜深を厭はずして、黒豆、照五萬米、調へに、今頃行く女房の家の有樣、さこそと思はれて氣の毒なり。大路は晝にまして賑はへど、小路へ曲れば商家少く、家々の大戸はたとさしこめ、明窓の障子に火影華やかに映り、時々笑ふ聲戸外に響くは、羨ましさの限にして、かゝる家の戸口には、初春の神立草臥れたまふと覺し。其二三間先に格子戸造に外面を固め、出入口はくゞ

りの一枚障子、丸の中にトの字を筆太にかきて、其下に吉田屋と家名を添へたり。內には人聲靜なれど、此五六日は人出入わけて絕間なく、士農工商、老弱男女をきらはず、此門に立たば日本の風俗一目に見らるべし。十露盤の玉音ぱち〳〵とひゞき、錢の音もすなり。これぞ世間無二の重寶屋、不善の御用達、七つ屋といふ店と聞えぬ。格子の內一坪を石土にして、腰かけながら手あぶりの獅嚙火鉢、眞鍮の熱を持たぬほどに炭團二ついけて、高帽子いかめしき髭男が火箸に兩手を重ね、目鏡の下より番頭を覗きて、傲慢らしき高笑、主人は強慾なる面して帳塲格子の中に構へ、厚やかなる帳面を繰廣げ、墨だらけなる軸の古筆を一文字に啣へ、蚤取眼のせはしげなる傍に、十三四の小丁稚が土藏への往來、水鳥の足より絕間なく、反古紙包を二つ三つ肩にして鐵行燈をさげ、出て來るかと思へば坐りもやらず、今一人の丁稚が紙捻十文字にかけし紙包を、四つ五つ抱いてまた土藏へ運ぶなり。店に腰かけし五六人に浮いた

る顔色少く、されば浮いたる話は更になくして、物いふかと思へば情なき事を哀れげにならべて、とかく主人を口説きぬ。一時過ぐる頃は客も一人になりて、番頭も欠伸を呑む時、入口の障子を細目にあけて、其人すぐには入らず、丁稚首をのばして何方樣と、聲をかくれど返答なく、細目の間より、なほ家内の樣子を隙見するらし。

其一　すさまじきもの（下）

番頭の目配せに丁稚飛出し、格子戸がらりと開くれば、戸外の人一二尺横に退きて、小陰へ忍ぶこそ怪しけれ、丁稚首を伸し、何方様でございますといへば、聲を低めて、混合つてゐますかと尋ぬるに、是はお客樣と丁稚は此方へお入りなさいましと言捨て、番頭の傍へ來て、囁けば、首肯きぬ。やがて入來るは束髮十七八の娘なり。色白の圓顔まんざらならず。會釋小聲に閾を跨ぐ木履の塗兀げ、足袋の色も清かならず、博多結城の綿入に、黃八丈の長羽織を重ね、縞繻子の帶は大分古りて、胸の下に皺深く、これに鶸茶色の丸紐の帶〆して、水淺黃地のめりんすに鳥襷を赤色まじりに染めし半襟に、是はよして欲しき洋金に銀色の蕋をいれたる牡丹の衣紋留して、領巾も冠らず、シヨルも被がず、夜風に亂れたる鬢の毛を搔上ぐる手頭を見るに、ありてよかるべき指環は見えず。

左脇に紫の大きなる包を抱へしまゝ片隅に腰を懸くれば、居合せし一人の男客、稀有な顔してぢろ〳〵見れど、其娘は一向見ぬふり、番頭の挨拶を無言にうけて、これをといひながら包を出せば、解きて見るに、(スウヰントンの文法書、ナショナルの第四讀本、源氏物語講義の合本、本朝文範、袖珍英和字書) 何程御入用と尋ぬれば、何やら答へしやうなれど聞取れず、何程と重ねて問へば、娘は無理に咳拂して、壹圓といふ。尋常の男ならば、何も言はず、壹圓、易い事とつひ言ふべき所なれど、商賣づくなれば鬼にも家暮にもなりて、壹圓とは滅相なり、六十錢ならばと字書を開けたり閉ぢたりして、返事を待てど無きほどに、風呂敷を擴げて書物を包みにかゝれば、首を垂れて思案せし娘は、右の袂より、汚れし白地に黒の翁格子の絹はんけちに包みしものを取出し、そんなら此を添へてといふ。番頭心得て解いて見れば、緋鹿子の帶上なり。それとても中古にて結目黄ばみたれど、此を合せなば萬更ならぬを、外面に

見せず、毎度のお顔ゆゑと恩に衣せ、濫紙張の笊より新しき壹圓紙幣をつまみとり、兩面あらため、ぱり／＼と音させて渡せば、手早く帶の間へおしこみ、其風呂敷も預つて下されと行き懸くるを呼び留め、この七月の銀時計と金の指環は、何時うけて下さるやと問へば、今月中には必ず出すべき心なりしが、都合ありて思ふにまかせず、來月は早々うけむといふ。それはよろしけれど二月分の利子を。それも知らぬではなけれど都合ありて思ふにまかせず、何事も來月にして下されと遁ぐるがごとく歸りぬ。客の男膽を消し、我廿六までは臆病にて、質置くといふ重寶な事を知らざりしに、世には可恐しき娘あり。彼は何處の女と尋ぬれば、さる女學校に寄宿の身、故郷は三州の豐橋とかにて、お名は申さぬがお客樣への忠義、國元には母親と兄あり、田地も少しは有りて五人六人の口に狼狽ふる樣な身代ならねば、あのやうに娘を修業によこして、月々のものもたしかに仕送らるゝよしなれば、あれほどの難義をするやうな

不始末はあるまじきに、それには事情ありと番頭がいへば、亭主は帳面つける手を休めて、金さん世界は色さねと笑へば、ちげえねつと客は膝をたゝきぬ。

其二　あさましきもの（上）

入谷にて見し朝顔は輪大きく色濃かにして、我垣の物のたぐふべきにあらず。隣家のはいかにと覗きしに、我のと少しも變らず。主人を呼立てゝ、此花がかねてお噂の（狂獅子）かと問へば、頭を搔きて、種は正眞紛れなしの（狂獅子）、此地は土瘠せたるが上に培養もせねば、見らるゝ如く江北の枳殼と申す。なるほど〳〵、系圖の一卷とり出せば、たしかに先祖は八幡太郎義家公、其後胤でありながら、冠は戴けず、おこしの飯臺を頬冠の頭に載せて、母人に伴させ三味線ひかせ、われは太皷打鳴らして、よか〳〵と子供をたらして、五厘六厘に頭を下げ、萬事さもしいづくめ、此等はまだ〳〵正しき營業なり。某藩の奥女中がなれの果、轆轤首の見世物の三味線ひくも心がらかはしらねど、さもしさ過ぎて哀なり。ゆすり、かたり、引剝、盗人は、男のやくざものが末路にきはまり、

藝妓賣女はいたづら女の果に定めたり。氏も素性も何かすべき、食ひ兼ぬれば黑いものも白く見え、人の心自然と淺ましくなりて、我知らぬ間に所業不善不德に落ち、つひには其に染みて天晴不義の人間になりすます事、朝顏の種にはよらぬ如し。

末げきものは丸の内の靴音、猿樂町の私立學校。大路をそれて横町ごみ〱と狹く、菓子麵包屋と古道具屋の裏の奧に只一軒の貸家あり。此一月前引越せし人ありて、入口の木戸に杉板の看板かけて、英漢數學教授郁々學舘と一六流の筆意、紙札をさげて本月入學の者に限り無束修と認めたり。

半月ばかりはひやかしにも規則見にゆく人なく、あれにて能く立行くと近處にて怪みしが、此頃にてはいかな事！ 朝は九時頃より人足ひきもきらず、夜は十二時過ぐる頃ぞろ〱と歸る樣子、大凡一日に五六十人は、いれ替り立替り出入ると覺しと、近處のもの不思議がりぬ。此あた

り一面ともいふべき學舍の數の中、人出入の少し賑はしきは、一軒か二軒なるべし。夫さへ煉化のアヽヽチ見事に構ふるか、ペンキ塗の大門いかめしくして、一週に兩三度も門口に揭示を新しく張替へ、懇篤に敎授す——月俸は何程——校費はなし　英人某などゝ、まねきをするが上に、新聞廣告も折々するやうに勉めねば、いつが日生徒の減るやら圖られず、幹事校長の心勞一通りならざるに、此はまた無爲にしてこれほど化すを見れば、名を匿す大先生にやあらむ、腕前ある人の錢金ずくならぬ仕事なるべしと、誰も彼も言合へりけり。

日を經るほどに入學者の數まして、此頃は入口にいつも手車一二輛づゝ、待たぬことなし。身分ある人の令息などが高名を聞傳へ、かくは出入したまふか、われらも學者にならざりしことの今更悔しと、表の古金屋の老爺はいひき。

其二　あさましきもの（中）

郁々館の建家廣からず、二階は四疊二間、下に講堂と名くるは六疊四疊二間打拔にして、教師の書齋と食堂と居間をかねて、三疊一間の外には物置もなければ玄關もなく、生徒の控所が二階なるもをかし。教師は三十四五の髭のある男にて、色淺黑く眼つき聰く、辯舌爽かに講義は滑稽まじりて上手なりといへり。床几形の長机を三側にならべ、生徒は坐りて席につき、教師は別に樅の机の前に、四方栗のブリキおとしの小火鉢を控へ、奉書紬の黑の一つ紋の古羽織を着て、貧乏ゆすりをしながら、講義の中に（さりながら）といふ口癖あり。生徒はいづれも不行儀にて、前の側に居ながら歴々と胡坐かき、方程式を教師に說明させて、我はマッチを摺りてカメオをくゆらせ、或は袂よりスコッチミキスチユアをとり出してほつ／＼と嚙むもあり。後の側の隅に二人引附いて、りやん拳藤

八、さすがに柳はつゝしむこそ殊勝なれ。教師は一向見ぬふりにて、熱心に自身だけは說明すれど、腹司ふくやかならぬかしていつも不說明の說明、それを生徒は解せしやら解さぬやら、問返すものは只の一人もなく、一時間もたゝぬにごちや／＼と課業すめば、我勝に二階へかけあがりながら、（惚れて通へば）と小聲の甚句、入違つてどか／＼とおりくる五六人の授業の模樣、微塵前に變ることなし。此通りにて朝より夜更まで追通し、通學の目的はいづれを見るも修業ならざる如し。

二階へあがれば萬事氷解。其四疊の間は造作小綺麗にして、壁には一面の月琴を掛けて、窓の外に二つ三つ鉢栽をならべ、片隅に化粧道具を置き、長火鉢の脇には勸工場仕入の茶簞笥、後には鼠いらずありて、德利皿小鉢を座敷にちらし、鮨、菓子の食殘しを片よせ、四五人車座になりて一同眼まで赤くし、妻楊枝を嚙みながら、中に一人の娘をとりこめ、頰をつき、膝をつめり、果は同士打、同士惡口、美人が今の一語はたし

かに一合を直打するぞ。武田一合買へと、寢そべりながら二十四五の蚊がすりの羽織きたる男がいへば、君は今足で彼の膝をついたでないか。その罰として酸鮓を奢れといふ。賛成々々と皆罵るほどに、かの男起上り、魯西亞革の紙入より、二十錢札を出して、これで半分といへば、哀な事をいふなとしかりつけ、又何程か集錢して、其中の無錢の男が奔走官を命ぜられ、いそ〳〵と二階を下りぬ。

その娘は十八九と思はるれど、小造の德には十七ばかりに見え、上品なる高島田に前髮ふつくりと取り、色菅糸を根懸にして黑塗蒔繪の木櫛、簪は銀足に金水晶は誰かの遺物なるべし。黃八丈の小袖に羽織は空色のきぬ縮、帶は黑繻子と友禪の腹合せ、おやしき風につくり立て、立居、物ごし、優しく、顏は細手に色白く、鼻の形惜しい事には少しまづけれど、眼元しをらしく、強ひてするにあらねど性來の色眼づかひに、物を見る眸に千萬無量の情漂ひて、此にちらと見らるゝを(惱殺)などゝやい

ふべき。

規則見に來る書生には、此娘應接にまかり出で、三指にてはぢらひながら返答しとやかに申せば、皆肉を蕩かし、わが骨を抓むで歸るとかや。授業まつ間には香煎湯を出して、口數きかぬ愛想を、[illegible]と喜悅の眸を引下げ、お顏見たさに我も／＼と入學者引もきらず。

其二　あさましきもの（下）

朝七時頃教師は彼の少女と二階にて取膳の朝飯、箸とりながらの雜談聞けば、樣子はさらりと知れたり。鷄の脂に玉子を半熟にいため、その鐵鍋を火鉢の脇にかけて少女に給仕させながら、かの事はどうしたといへば、香の物につけし箸を休め、もうわたしはあんな事はいやでござりますといふ。いやならば此後はさせまじけれど、今度だけは甘く賴む。御承知遊ばして來週の日曜日までには、屹度屆けるとおつしやりました。よし〳〵お手柄〳〵。扨今一つの一條はと問へば、少女は顏を赧らめ、あの事ばかりは兄さん許して下さりまし。お言葉を背くではなけれど、餘りと申せば人外なり。今する事さへに心羞かしければ、一日も早くかゝる業はとも〴〵廢止にして下され、草葉の蔭にて父樣母樣が、定めし睨めてゐたまはむかと、夫を思へば情なくなりまする。ようこそ申した

れ、我とて其始はかくさもしき事を働かむとは思ひ懸けざりしが、通學の書生どもが御身の色香に迷ひ、われ學問の未熟なるにも拘らず、此頃の生徒の數、みな是御身ゆゑなり。かりそめにも學校の控所が、稽古所湯屋の二階めきて、酒を食ひ謠を唱ひ、あられもなき亂脈亂ちき、我何とて快かるべきや。されども此ゆゑに月々の實入多分にありて、下谷に住みし頃は米薪に今日を逐はれ、われら二人がどろ〲せし木綿物にくるまりし昔を思へば、店屋物に新濁活のつけ合せだに食殘し、飯が白いの黑いのと贅な事をいひながら、月々若干か郵便局に殘りゆく今の身の上、有難く勿體なき事なり。さればこそ心よからぬとは思ひながら、御身を囮にして若き男をたらし、情こそ賣らせね、人の玩弄物にさせる事、みな此兄の不所存不了簡なり。一昨日話せし如く、かの人は新華族某殿の長男、これも御身に焦れ、わけて心を碎くと見てとりしゆゑ、他日の榮華を目的に、昨日は靡けと勸めしは、いひ譯なけれど兄が誤と悟りぬ。

もはや誰にも靡きたまふな。其内にはよき縁を求めて御身を片づけ、われも眞面目に教授するか、商社へなりと僱はるべし。それも今日明日とゆかねば今少時辛抱して、大勢に不興な顔見せてくれな。夫にしても今日に限りていかなればかうした事をいふぞ。されば、此事は今日思立ちしにあらず、茶をいれよ、酌せよと人のおもちやになるにつけ、貧すればとて淺ましやといつも思はぬにはあらねど、あなたの心を汲み、明日の活計を慮ふれば、娼妓になり下り、萬人に肌身を汚さるゝ女もあるものをと、無念の涙をのみて、夢に兩親ゐませし日の榮華を樂み、今日が日までは何も世渡りと忍びたれど、昨夜梅の湯にて表長屋の人々に出遇はせ、われを矢場女の密賣のと、はづかしき噂をせられしに、いよ／＼我身が淺ましく、たとへ食べずに死ぬもよし、ふつ／＼此業がいやになりましたと、眞實の情に可愛き眼をぬらし、思ひいつて頼みたるを、兄もさこそとよきやうに慰めしが、その後二月たてど少女は奉公にも出ず、

半歳になれど緣をさがす模樣もなく、小川町邊のなんとやらいふ好男子が手にいれたなどいふ取沙汰もありて、此頃は其少女、黃金の指環二つはめて、兄人は奉書の古羽織を大名縞の糸織に着替へ、二階の押入に絹布の夜具が一組、天鵞絨のくゝり枕を二つ見しと誰やらが話しき。

（二十四年一月）

わかれ蚊帳

(上)

(新色懺悔附録)

我駿河町の呉服店越後屋に年季奉公の頃は、百人百色の合手に可笑き事あり。可悲き事あり、可喜き事あり、可憎き事あり。浮世を見通しの店頭に坐りて、うか／＼と月日を過しぬ。

我直接に見もし聞きもしして、隨分新奇げに覺ゆるも、其を我口より語らば一向に骨も筋もなくて、お伽には成難き談柄のみなれど、數の中には一つ二つ物語るべき事なきにもあらず。

年は忘れたれど西南戰爭中の春なりけり。世間何となく平穩ならねば、我店も平常に三分一の客足にて、多數の奉公人閑暇なれば、懸硯に頰杖つきて、隣なる忠吉が出商の掛賣帳調べて算盤彈くを呼留め、一寸見よ

角の正八が處へ今腰を掛けし女中をといへば、算盤銜いて伸上り、どれ〳〵と、此男(近忠)と呼ばるゝ近眼なれば、眉間に不様なる皺を寄せて篤と眺め、彼は何者？　何者とは近頃薄情なる申分かな。修飾せずとも例の目鏡を掛けて、今一應たしかに見よといへば、懐中探りて取出せし目鏡を掛け、無遠慮にしげ〳〵と打眺め、小膝を拍つて、菖蒲か杜若か。　似たも〳〵南瓜を割らで其儘なるべし。　僞言にも我所思を南瓜とは、了簡なるまじき所なれど、彼女を心づけくれし褒美に、今日は無難に許さむが……其はともあれ兼藏殿、姉妹の段にはあらで、見事其人其儘ならずや。他人の空似といふはあれど、是は什麼と見惚れたりしが、獨語くごとく、今月初には乾度顔見せてたまはれと、暮々もいひしを、安請合して行きもせず、沙汰もせざりけるが、元來、彼奴、心弱く、度量狭く、些少の事をも氣にする女なり。　我にはぞつこん參りて、此顔さへ一目見すれば、いかな癪も血道もけろりと治るべき良藥男。寝ては

夢、覺めては現、忘れぬまゝに思續け、我あるゆゑに苦界に苦を知らぬとまでの深間なれば、久しく打絶えしに可愛や病を起し、戀し〳〵の一念、形となりて、此處までも徜徉ひ來りしか、開闢以來の眞實女！不便のものやと、丁稚の前も憚なく、入湯歸に覺えし豐竹のまがひ節。我は不思吹出して、好加減にせぬか、往來の人が笑うて通るわといへば、あゝ！と太き溜息吐き、思ふまじと思へば、見たき秘藏の寫眞をも取出さで、饑餓見るよりも苦痛を忍びて過ぎしが、今生寫の面影を見るにつけ、胸わく〳〵として此はならぬ。たとへ其人ならずとも、肖てゐることのゆかしさに、かの客我に來りたらむには、尺は思ふさまたつぷりにして、五寸とあらば五尺、一尺ならば一丈……あゝ、あの笑ふ口頭は、眼元はと、身顫して悅ぶ容は、亂心ものゝあと、矢庭に耳を引かむとすれば、彼は引せじと打合ひ突合ひ、狂ひ與ずる耳根に、（こら）との一聲、百雷の墮つるがごとし。わつと驚きて振向けば、我前にいつのまにやらお客様

の御入出なり。衣紋繕ひてかしこまり、慇懃に挨拶して、ちとお掛けなされましと火鉢を推遣りながら其男を見るに、年齢は四十近の武骨一遍なる巖石造、膚色赤黒くして古りたる銅のごとく、手足肥えたるにはあらねど、肉剛く筋立ち、むしやくと毛生ひたり。面長にして顴骨秀で、眉毛黒々と一文字を引き、眼釣上りて凄き光あり。七分苅の頭髪針のごとく立ち、腮髯縮れて渦を卷き、口髯長くして兩端は耳にも及ぶべし。段鼻高く下視きて、薄き唇は弧を畫きて常に鎖ぢたり、見るに可恐しきは青隈の額際に蟠れる、いじれいて大喝の下には鬼も怕るべし。蚊がすりの長羽織に、そゝ同じ長なる博多結城の布子を被て、鼠縮緬の兵子帶を細く纏き、肌衣は縞フラネルの襦袢なり。霜降羅紗の獵鳥帽子を無造作に戴き、素足に疊附の駒下駄、握太なる自然木の洋杖を持ちて仁王立に立つたるに、御用のお品はと聞けば大股廣げて撞乎と腰を掛け、最上なる蚊帳所望といふ。

いつぞや秋の末に浴衣地買ひに御座られたる男ありしに、夏ならでは賣らぬよしを答へければ、東京は聞きしに違ひて不便なる都會なりと、賤れて歸られし事を思出し、其も可笑かりしが、正月蚊帳といふも判じ物めきてと思ひながら、店に在るものならば賣りもすべし、其季々の品物の外は御座なし、お氣毒樣なりといふ顏を乾と睨み、愚な事をぬかす奴かな。東京に越後屋といへば、日本國の津々浦々、いかな僻邑にまでも轟ける老舖ならずや。其に何ぞや、正月なればとて蚊帳一帳ないとは、扨々哀なる事かな。此分にては、其抽斗の裡には紙屑などを入置き、遠くの棚に重ねたる反物類は、繪か但しは紙なるべし。適れ軍師！矢種を集めむとて藁人形を用ひし古の智略も思出されて、商人には近頃惜むべき才略家と可憎げに高笑すれば、我も勃然として、お國元などの吳服店はいざ知らず、土と黃金が同じ桝にて賣買なる都會の眞正中に此程の角地面引廻し、此日除布外しても大佛樣に夏冬のお仕着せなるべき大身代

まづ彼處なる屋根を御覽ぜよ、東都名所繪にても御存じ樣の鯱の手前、さゝきたなびれたる商畧は成難し。千張なりと、萬張なりと、蚊帳ばかりの土藏あれば、この夏は忘れずに瀛船に召して御座りませ。此店頭を大海原にしてお目に懸けましよと空嘯けば、其男立ちかけし腰を据ゑ、愉快、愉快！さもあるべし。今のは過言なれば容さるべし。さほどある蚊帳を何爲又賣らぬぞ。されば其季の品に數を好めば、なか〳〵置く可き席なくしてと答ふれば、其もなるほど聞えたり。さりながら、我此度の買物は一期の思出、其方が手柄にて是非一張見せてくれよ。價金などは一錢も直切るまじとあるに頭を下け、有難きお言葉なれど、その土藏には錠下りて出入を留めたれば、今というて今のお間には合ひ難し。且又店に人手なければ、此次にお願ひ申したしと斷りけるに、其男思案の體なりしが、此店の支配人なり、一番伴頭なりと呼べ、直々に談判せむとあれど、わづか蚊帳一張に支配人引出せとは大業なり。隨分呼びも

致すべけれど、別にお話もあらば我まで聞かせたまへ、可然申聞けむとの挨拶に、膝を向け直して聞かれよ仔細はと髭を拈りぬ。

我紀州和歌山の藩士にして、今年三十七歳。幼稚かりし頃は世上武人の習慣、思へば量見狹き事ながら、わづか一人の敵に向ふべき兵術を此上なき本技にして、兩親子心を勵せば、我も自ら撃劍だに上手とならば、御國の男子たるべく思込んで、他念なく竹刀を握りづめに、二十四の夏一傳流の達人となりて、他流仕合十本に九本まで負を取りたる事なし。遂には紀州家の名物男となりて、士分の中なる武士と、人も呼び自らも許しぬ。

維新の後は天、地となり。地、天と變れる世の樣、同藩に某の二人は、病身幽靈の如くひよろ〳〵と瘦衰へ、箸二筋も持たしなば、指は折れぬ可き弱虫の腰拔ども、虛弱の身の堪へ難ければと、道場に足を容れず、竹刀のはゝしゝと撃合ふ音を聞くならば、我等が頭痛は立處に治るべきに、怖

お恐れて打仆れなむ用不立。爲やう事なしに一間に閉籠りて、青標紙と睨合ひけるが、米艦渡來の後は動に洋學に志すと聞くより、我等は居合腰に長柄を握りて、爲や！神州の民に洋夷の子分はなきはず、賣國の賊臣を斬つて紀藩の恥辱を未然に雪げや。合點だ、只一撃と手分して、其門々に三夜忍びて覘ひけるに、命冥加の奴輩かなと、切齒をして詈りける、某五郎何之助は、今いづれも政府樞要の椅子を占めて、高慢なる髭を掻撫づるを見る事の無念さ。同氣なりし隼人五人までありける中にて宋孔明といはれし一人が、今やうやく内務省の判任にこびりつきて、其外は語らむも不面目なり。これといふも機を見る眼なき我々が愚鈍なるによれば、誰を罵りて誰を怒るべき樣なし。我は覺の一傳流を、推擧の種に巡査を拜命し、させる功勞もあらざるに、聖恩恭くも警部の末に列しぬ。

流浪の折から妻を喪ひけるまゝ、今に不自由を忍びて天地間の一本立、

命を捧ぐる職を汚せば、なまなか覊絆なきを心安く、月給を盃に充たみて唯一息にぐうとやるを、今生の娯樂にして下宿の二階に燻り、來國俊を抱寢して愉快なる夢を見る事あり。

去年の夏詰所轉せし都合によりて本所に移住せしが、聞きしに優りたるは名物の蚊なり。住家は四壁を露出して家具といふものなく、ありけるも悉皆液にして、腹中に收めたるは、火用心を思へばなり。夜具とてありといふべき程ならねば、寒夜は霜に凍えて、かほどの勇者も得凌ぐべきにあらねど、好物の酒といふ物ありて、一盞引かけては、緞子の夜具も知らぬ暖氣に熟睡の魂魄や、こんな時を蝶といふべき。

夏はなほよし、赤條に踏反りたる胸毛に、螢の遊ぶなどは風流ともいふべし。冬のみは五合の貸蒲團に債られて、これを一年中の可愁候と思ひけるに、此冬よりなほ可恐しきは本所の夏なり。日中も部屋の四隅には、雲霞のごとく籔蚊群りて鯨波を揚げ、日暮に近けば貴鼓を鳴らして、ど

つと喚いて八方より寄せ來る勢の凄じさには、體内の血も驚擾きて身毛彌立ちぬる心惡さは、黄巾の賊が幻術の毒霧もかくやらむと可恐し。前後に敵をうけて續く可き味方はなく、嘴襖を築きて責立てらるゝに、烟の木は盡き、團扇の骨は折れ、宵の間の防戰に疲れて仆るれば、押重なりて毒嘴を突入るゝに、手足背面の嫌ひなし、一升の酒一合の血となるとして、一夜に二合の血を吸るゝ無殘さ、迚も城郭の構なくして合戰は覺束なけれど、軍用足らざる身は心の儘ならずして、其一夏は夜毎の手合せに只の一度の勝なきのみか、いひ甲斐なくも滿身遍傷の苦痛に、この男が泣かざりし夜ぞなき。

其夜毎に思はざる事はなかりき、もし餘裕の金を得る事もあらば、必ず蚊帳一張は備ふべきものぞと。天なる哉、城郭成るべき時運到來して、我此度西南へ出張を命ぜられ、支度金若干を昨日賜りければ、かくは今日心願の蚊帳を調めむとて來れるものを、この胸中を察して勞を吝むな

と語りぬ。

明日にも戰地へ打立たむづる身の、後の事はなか／＼思も懸けざるべき際までも、忘れぬ程の苦艱はと、我も骨髓に感じ入りければ、異儀なく承引きて此趣を支配人まで語り、土藏を開きて數の蚊帳を持出して見すれば、斜ならず喜びて四六を一張買うて歸り際、此人の住所姓名を尋ね、國家の爲には一命を忘れたまふべき折から、來る夏を安らかに眠らむとの御用意は何事ぞ？必ず命を全うして歸りたまひなむ御豫想なりや、什麽と詰れば額を撫で、蚊にだに惜まぬ血を國事にいかで。此蚊帳を求めしばかりに、不義臆病の心やあらむかと、貴樣が思はくも愧かしけれど、この夏發起せし心願の漸く遂げられむ時到りぬる嬉しさに紛れ、さる了簡は聊もなけれど迂濶と買取りたり。よし／＼今生の思出に、今宵は此蚊帳に飽くまで寐て、立退際に城は宿の女房に渡すべしと、抱へたる蚊帳を物珍しげに撫でながら去りけり。

やがて逆賊誅に就きて、世は又靜謐となりけるに、一度の馴染ながら、兵亂の間も此人の運命を心に繫けゝれば、今は什麼、骨を曝したまひたるか、但しは勳章を輝かしたまふかと、一日本所の下宿を音づれ、女房に遇うて尋ぬれば、葛籠の底より泣く〳〵かの蚊帳を取出して、殘らでよきものはかく殘りぬ。

（二十四年一月）

七十二文命の安賣（文學世界第壹）

てんのし山〳〵、我に似た山だ、頭顱の少兀赤岩彈介、血氣盛に似合はぬは天性の律義とて、行くに大道の眞唯中、行潦も避けては通らぬ男なりけり、ある日の暮町の風呂へ行かむと立出でけるに、蕎麥切屋の前を過ぐれば好物の香芬鼻を貫き、夜食前の咽喉鳴りてしきりに涎を催せば、大豪のものも之には勝てじと一文字に飛入り、參着三杯は上戸の掟、肴あらしの箸の二乘けて、六膳と物しければ、腹の虫やう〳〵鳴を靜めぬ、勘定くれうと懷中を探るに、南無三寶財布を遺れたり、湯錢だけは袂に入れたれど其にては足らず、例の律義のこゝろにしては此時の想、鐵砲十八挺銃口を揃へておつ取卷かれむも及ばじ、計略爰ぞと思案に暮れたり、亭主に會うて仔細を語らば、何の事もあるまじきに、我は何人ぞや、

武士たるものが蒿麥切の代錢に不足して、素町人風情に頭を下げむ事一代の耻辱といつゝべし、第一さばかりの用意なくして物食ひたるなむど、丈夫の心懸にはあるまじき不覺なり、傳聞く赤穗の四十七士は討入の懷中にそれ〴〵金子所持せしとて、今に良雄を賞美して武人の龜鑑とせり、たとへば酒に亂れて前後を忘じ、折から狼藉のもの亂入して拔合はさず、淺ましき最後を遂げむまでも、せめては刄の錆となりなむこと。なほ本懷ともいふべき所はあれ、よしさる事あるにもせよ、我下戶なれば酒に亂るゝ憂慮なきに、もの〳〵しや三五人の曲者、寐込に蹈入るとも何でふ事のあるべき、柄に手は懸けでも鬚髮引摑むで、二人三人は食殺しても見すべし、平生武道の嗜深く、義を見て命を惜まざること、二心の少年を捨つるよりなほ易し、あはれ事もあらば身の捨樣をいさぎようして、日本武人の模範ともなり、あれ見よ薩州の彈介と、誰にもあれ義死の折には、諸士この國に向つて三拜し、佛名代りに赤岩彈介連景と唱へさせ

なむ心懸は、食慾のゆえに水泡とし、消えぬは汚名末代の譏草、隼人の中に古今一人の腰拔を出來さむ事か、武運盡きぬる今夜の始末と、無念の涙も泣くとは女々し、かくあるべきにあらず、亭主に錢なきよしを語りて、申譯の切腹此場を去らじと覺悟極めしが、待て少時、勇士は疊の上の最後を耻づともいふなるに、いやしき蕎麥切店にて果てなむ事、これ重ねての笑はれ草なり、且は此店の迷惑本意にあらずと、長刀杖に深く思案の体を、亭主の外目には停滯とも見たらむかし、身近の物音に顏を上ぐれば、いつ來りしやら商人風の若者が、傍にて餘念なく打食ふ側に煙草巻を置きたり、中なる錢に目留り、我未だ武運盡きず、彼にかの錢を借りて勘定濟ませ、一先歸宅の上心遺なく腹切るべし、町人ゆるせ、不義の偸盗にはあらざるぞ、彈介熟に借用申すと、心中に謝辭いうて忍びやかに其錢を取出し、さり氣なく拂ひ濟ませて立歸りけり。捨つる命に獨身の氣安さ、誰に愛着の未練もなし、誰一人の伯父の近き

邊に住める方への一通手早く認めける其文に曰く、
拙者今宵いかにも一分相立たざる事仕出來し申候に於ては、只今潔く切腹と覺悟仕候、夜中御太儀の段御察入候へども、淺からぬ緣類のよしみを以て、即刻御立合の儀偏に奉願上候、委細は御面會の上にて萬々可申述候謹言。
人して持たせて最後の支度を急ぎ、伯父の來むまでを此世の名殘と、先祖代々の位牌に向ひて、此度不始末の段々を詫び、やがて一管の天吹を取出し、折しも月澄みわたる窓を開きて、心長閑に得意の一曲を奏づれば、空行く雲も過まりて、庭には落葉の音さきりなり、思ひぞ出づる此一管は、淺水左右七が常住肌身に添へて秘愛の名笛たり、天下に可愛き物、一には彈介、二に此笛とまでに思入深く、秋も半過ぎにし花野の夕暮、ゆかしの里に草分の露は、情願かなはぬ焦れ人の涙、さるにても誰が文のはしだにゆるさゞりし袂は、戀風含みて靡くもあだ姿、男郎花踏分け

〳〵吹鳴らし行くを、逆懸りに其音の慕はしく、妻戀ふ鹿にはあらねど之に腸を斷ちて足の踏所を覺えず、音に引されて見染めたりや御姿、假初に懸けし言葉に返しの言葉、縺れて解けやらざりし後々の物思ひは、其所に伏猪の床も厭はず、枕は此にとさしのべし腕に髮油の移香は、別れても消えねば忘られず重ねての訂情、戀の中立なればとて其より一入此笛を惜み、初契と銘して朱漆に我直筆を所望し、君見ぬ宵の形見と喜びけるに、十六歳の冬、馴初は露、別れ霜と消えて、面影はとゞまらずして戀は是に殘りぬ、今に三年其後は朝暮の友として、花月に吹慰みたるも是までなり、いでや此音の劍山血池の邊へも響きて、亡き人よ、我も逝くぞと知りたまへ、其ばかりに此世の吹納め、後に留めて何かせむ、戀の敵の舌に汚されむも口惜し、汝を大事に懸けし左右七も世を去り、我も今亦此世を去らむに、おのれ二代の情を思はゞ諸共に此所に摧けて、一片の煙となるを恨む事なかれ、我も是にてぞといふがまゝに、脇差拔

放ちて微塵に切割り、火鉢にさしくべ、我を彼世へ送火焚きて、合掌してありける所へ、伯父十郎右衛門血相變へて驅來り、門口より大聲立て、彈介切腹とや、驚き入りたり、仔細を申せと躍入る、彈介平伏の頭を得上げず、申すは面目なし、唯此儘に御介錯、おのれ何いふぞ、面目なければこそ切腹すれ、一命捨つる期にいらざる遠慮立、仔細聞かずば立合はじ、此まゝ歸るといふ、彈介額の汗を拭ひ、蕎麥切の一條を語るに、十郎右衛門足摺して口惜がり、情なき事、人にも語り難し、犬死なるぞと腹立聲の暴かなり、長らへば猫にも劣るべし、不覺は今にして悔ゆとも所爲なし、彈介亂心の上の自害とよろしく御披露なし下され、切腹の義御許容下さるべしと涙を流す、一文盜むも賊なれば、一國を盜むも賊なり、おのれ弓矢神にも見放されたる身の是非なし、死すとも此恥辱は雪ぎ難けむに、生きてなか／＼人に對はすべき顏はあらじ、今は最後を急げと言放ちて、くわつと睨めたる眼中に、堪へかねたる涙はら／＼

と膝に玉走る霰の、見る間に消ゆる命は惜や、せめては血の出る西瓜なり
と斬つても死ぬべきに、筋骨もなき蕎麥を敵手は不承なりと無念の述懷、
聞くに彈介いよ〳〵恥入りて、さし俯向きてゐたりしが、御免といふよ
り早く、遺恨はなほ此中にぞと突立てたり、彈介盜みし錢は返さぬ氣か、
机の上なる紙びねりに七十二文、安い命と引廻して生害見事なり、千人
にも見せたかりし死樣、十郎右衞門一生蕎麥切を斷ちて、盂蘭盆の精靈
棚には干瓢を懸けしとや。

（二十四年三月）

二人むく助（少年文學第二編）

（一）

むかし某村に椋助といふ百姓二人住みけるが、おなじ名の紛らはしとて、四頭の馬を持てるを大椋助、一頭の馬の主を小椋助と、誰いふとなく呼びならはせけり。

小椋助貧なれば常におのれが一頭の馬と共に、大椋助に傭はれて其田を耡きけるが、鎮守の大祭とて一村擧つて業を休み、赤飯を炊き、酴醅醁を酌みて樂しみ興ずるといふ日、小椋助大椋助が四頭の馬を借り、おのが馬とともに五頭を牽きて、我物顏に意氣揚々と群集の中を行けば、友人の擔子六が醉眼ながら認めて、これは小椋の馬大盡樣！　汝が家の痩馬が、一夜の中にさほど肥えたる子を四頭まで生みたりとは、近頃珍し

き見世物種、鎮守様の前に小屋懸して、よい錢儲をしやれと嘲れば、小椋助空嘯きて、良い馬ではないか、いかほど良き馬なればとて汝の馬ならでは、行倒の犬の死骸より益なしと嗤うて過ぎぬ。

前面に見ゆるは新田の蓑七、彼奴は愛想にも虚言はいはざる正直老漢、欺きくれむものと近寄るを待つて、みの七どの、見て下され、きこのふ馬を買ひましたといへば、老漢一目見て、これは大椋助が馬ではないか。いかにも大椋助から買取つたと、いはせも果てず、おのれ默らぬかと背後の大聲に、駭きて顧視けば、何時の間に來りしやらむ、大椋助が眼を瞋らして突立つに、南無三寶荒神これは御免、只今申せしはみな酒落なり。

酒落とはいはさぬ。今も彼所にて擔子六に何と放言した？　虚言は盜みの始めといへば、おのれがやうな虚言つきは、什麼なる事を爲出來さむも測られねば、もはや馬は貸しおきがたし。渡せ、これより伴行かむと、張臂して詰寄れば、向後は酒落にも我馬などゝは申すまじけれ

ば、枉げて今日一日は貸したまへと、額を地にすり着けて、只管あやまり入れば、大椋助も心融けて、かならず我馬とはいふまいぞ。いふまじと、堅く誓ひて別れしが、また懇意なる老婦に遇へば、大椋助より買うたる我馬を見てくれと誇りて、しきりに羨まるゝが嬉しく、庄屋に遇うてもまた我馬なりと吹聴して、半町ばかりも行く後より、大椋助血相變へて追蹤け來り。この虚言つきめ、あれ程の言葉を反古にして、まだ〳〵我馬と吐すよな。もはや堪忍なり難ければ、馬を還せ、伜行かむと先途に塞がれば、小椋助仕損じたりと思ひながら、ぬからぬ面色して、これは身に覺もなき濡衣かな。その後は人に遇うて問はるゝも、我馬などゝいひし事曾てなし。おのれ其がそも〳〵虚言なり。掛茶屋の老婦にも庄屋どのにも、我馬なりと吐せしことをみな聞いたぞ。還せ〳〵と鑣頭にとり着けば、小むく助また大地に額をすり着け、老婦めも庄屋どのも見懸によらぬ虚言つきかな。先刻二人に遇ひけるに、われが五頭の

馬を牽行く樣は、他人の馬を追ふとは見えず、宛然我持馬を宰領するごとしといひけるゆゑ、我はかゝる良き馬の、四五頭も飼ふ身になりたきものと答へしのみ。實否をよくも糺さで責めたまふは、平素の此方にも似ず苛いことゝ喞てど、大椋助いかな肯かず、濡衣ならば濡衣にてよし。われ急に其馬に用あれば今戻せと、四頭の馬を牽かむとする袂に縋り、百方に言葉を飾りて、大椋助の憤怒を解き、又借る事に相談調ひぬ。大椋助別れ際にいふやう、此後もし我馬といふならば、汝が馬を撃殺さむが、それにても異儀はあるまじきや。馬はおろかな事、此頭なりとも碎きたまへ。構へて我馬と二度とはいふ事にあらずと、潔く答ふれば、汝の頭は碎いたりとて何かせむ、只汝が食の種なる、其痩馬を撃殺して、違約の罪を償ふべし。其もたしかに承知と左右へ別れけり。
大椋助引還して、我家近くへ來りしに、芋作が幼兒喘ぎ〳〵驅來りて、小椋助今法念寺の馬鹿和尚が所へ行きて、我馬なりと吐しをる最中なれ

ば、早く行て見よとの注進に、赫となりて、一散に我家へ飛入り、鉢巻結褰の身裝へそこ／＼に、有合ふ大斧小脇にして、法念寺へ驅着くれば、五頭の馬を門内に繫ぎ、其身は納所の上框に腰懸けて、振舞酒をあほりつけ、呂律もまはらぬ舌に頤を舐めずり、この馬大椋助より我手に入りたる緣起を物語らむと、根無事をまざ／＼しく饒舌りたて、明日からは大椋助奴を、此方が傭うてつかうてやると聞くより、椋助約束通りじや、かうしてくれると躍込み、大斧を振翳して、瘦馬が眞額微塵と打下せば、眉間ぱつくと裂けて悲鳴の中に撞と仆れ、虛空に足掻きて死したりけり。小椋助この體に仰天して酒も醒め、馬の死骸に抱着きておろ／＼と泣出すに、眼も懸けず、大椋助は、我四頭の馬を牽き、大斧を肩にして、緩々と出行きぬ。

後には小椋助大地に坐して、腰も立たざるばかり落膽せしこそ道理なれ。糊口の種と賴みし天にも地にも唯一頭の馬を撃殺され、無念は胸も張裂

けむばかりなれど、違約の科あれば過失は此方にありと手出しもならず、仆れたる馬を撫でゝは泣き、泣いては撫で、我かく馬を喪ふのみならず、明日からは大椋助、我を傭うてはくれまじければ、錢を獲べき路塞がりたるに當惑し、太息吐いては馬の死骸を、恨めしげに眺めたりしが、和尚に慰められて悄々と取形附け、車に乘せて持歸れり。

小椋助かの馬の死骸を屠り、皮を剝ぎて日に乾かし、町へ持行きて賣らむものと、打擔ぎて村を出でけるが、町までは川二つ山一つ踰えて、里程大凡十里もあれば、未明より家を出でゝ、夕暮にやうやく山の下りに懸る折から、一天俄に掻曇りて、大粒の雨はちぎつて打着くるごとく降來れど、森の中とて雨宿りすべき場所なければ、一散走りに二町も走れば、呼吸切れて堪へ難きに、雨はます〳〵烈しくして瀧の如し。椋助濡鼠になりて、留るも行くも同じ事なればとなほ走れば、遙に燈影のちらつくは、まさに人家と覺えたり。何はともあれ彼所まで行きて一泊ばやと、また二三町行けば燈影洩る窓の外にぞ着きける

門口へまはりて戸を敲けば、二十四五の女房戸を開けて、椋助の姿をいぶかしげに見遣り、何方よりお越しなされしぞ。主人は不在なれば用の

次第を申遣れよと、吹雨の内に入るに戸を開けたるを不興なる顔色。椋助濡れたる頬冠を取りて、慇懃に腰を屈め、私めは此山の麓の町まで用事ありて參る者なるが、この急雨に遭ひて雨具の用意なきのみならず、身を忍ぶべき軒もなき山中に行暮れ、難澁を極めまするを哀れと思召されて、土間の隅なりとお邪魔にならざる所をお貸下さらば有難き仕合せと賴入れば、女房いよ〳〵不興なる面色にて、なるほど御難澁はお察しまをしますれど、主人留守中なれば私一存にて、見も識らぬ旅人のお宿はしがたければ、何所ぞ外を聞合せて御覽なされと、ぴしやり戸を立てられ、泣顏を蜂に刺れし椋助は、途方に暮れて少時軒下に佇立みしが、近所に人家もなければ、まゝよ此邊に雨を凌ぐべき所もあらば、馬小屋にても辛抱せば宿錢いらずと、軒傳ひに裏手へまはれば、枯草を山の如く積上げ、軒より莚をさし懸けて蓋としたるは、願うてもなき寐床と、羽目に寄せたる猿梯子を攀ぢて、枯草の上に登れば、ふく〳〵して寐心

の好き事、煎餅蒲團の及ぶところにあらず。奇妙々々と獨喜こびて、かの馬の皮を枕に仰天に寐轉べば、家の内より燈影のさすに心着きて其所等を見廻せば、足下をわづかに離れて襴間あり。これより家内の模樣陰るゝ隈なく見え透き、火鉢の傍にかの面憎き女房は立膝して、膳の上には三皿ばかりも肴を列べ、鐵瓶の中より燗徳利を出して、手酌のぐい飲、猪口の數重なれば、微醉になりて鼻謠を歌ふ。裏口よりがたぴしと、三十恰好の女房入來り、臺所にて濡足を拭ひ、裾褰をおろして座敷に入りながら、それ御馳走々々々と、片手に繩からげにして提げたる茹章魚の足を、女房が鼻頭へぶら〳〵突着けて、膳の前へ撞乎と坐り、飲かけし猪口を横取してぐつと飲み、二杯目は酌させて、今夜は歸宅は遲かるべしといへば、大方戻るまじと語合ふは、此奴亭主の留守を窺ひて、飲仲間を引入れ、それゆゑにこそ我をも宿めざりしなれ。かへす〴〵も憎き女と、なほ竊に樣子を覗ひぬ。

程なく表の戸を烈しく打敲き、お猾〳〵と呼立つる聲に、家内の騒動は地震よりも火事よりも一段激しく、かの女は立起り樣に、猫の胴を踏着けて、黑節を嚙まれて仰天に仆れ、敷居にて腦天をがんと撃てば、顰面してむつくと起上り、彼方へまご〳〵、此方へうろ〳〵。女房は德利を懷中に入れ、膳を兩手にあたふたと臺所に驅入り、かまどの下へ肴を藏し、德利は荒神棚へ上げて座敷へ還れば、なほうろつく女の手を取りて戸棚に推入るゝ間も、戸外には割るゝばかりに戸を敲けば、只今々々と言續けに座敷を取片附け、やうやくにして戸を開けば、歸り來れるは主人なり。女房何食はぬ顏して、この雨にようぞお歸りと、濡れたる衣裳を更衣させ、夜は更けねどこの雨なれば、早くお寐みなされませ、お床を延ぶべしなど、やさしげなる口と腹と、雲泥の大相違。それを眞に受けて嬉しさうな顏色の亭主どのは、佛の樣な善良さうな人物を、よくよく罪の深き女子と、椋助口惜がりて、思はず畜生め！と聲を立つれば、

主人聞咎めて、其所に居るのは誰じやと、聲を懸けられしはこれ幸ひと、欄間に顔を推當てゝ、雨に降籠められたる旅人なるが、先刻お内儀樣に宿を願ひましたれど、御主人不在なればと拒絶られて、ゆく所なきに此所に今夜は明さむ覺悟。やれそれはお氣毒な、はやう下りて門口から御座れ。宿めて進ぜましよとは案に違はぬ佛性と、梯子を下りて入口へ行けば、主人出迎へて奧へ案内し、衣類まで貸して火鉢の前に坐を取らせぬ。

女房は最初の氣色に引替へ、愛想よくまめ／＼しく立働きて、夫の命ずるまゝに膳立して、主客に夕飯を薦めけるに、椋助茶を見れば、欄間より覗きしとは打つて替りてまづ／＼しき、唐茄子の裝附なれば、この女いよ／＼不屆なる横着もの。腹癒には化の皮を引剝きくれむと、風呂敷に裹みたる馬の皮を、背後にてごそ／＼と鳴らせば、亭主その音は何物との尋問に、椋助二つ三つ勿體咳して、今鳴りしは我家傳來の重寶に

して、天竺は流沙河の水底に三千年の功を經て、額に一本琉璃の角を生じ、鼻の頭に金の鱗が、其數三千三百三十三枚、また背筋には銀の鱗が、その數三萬三千三百三十三枚、尻尾の長さは三丈三尺三寸三分、其光きら／＼ちら／＼として、お日樣を解いて絲にして束ねて植ゑたらむごとき、奇妙希代の馬の生皮にして、かく揉むで音を立てゝ、吉凶を占ふに中らずといふ事なく、また過去りし往昔の事、今の事、後の事、この世の中の事ならば、一切尋ねて凡そ知らざるなし。此を以て神通自在妙々く智力智之智慧駒大明神と崇め奉りて、一子相傳一天無二の護神となすものなりと、唯一呼吸に陳述つれば、亭主ほと／＼感に堪へて、扨はその音の我等には簌々とばかり聞ゆるも、此方の耳には人の物いふと同じ事に通ずにや。　されば此皮を傳ふるときは、簌々も人間の言語同樣に聞ゆるは、則ち此寶の奇特といふものなり。　あら有難や　さらば今の音は什麼なる事なるか、願はくは聞かせたまへとあれば、淨水にて三度

耳を洗はせ、隻足にて三遍廻つて三度額づかせ、南無神通自在妙々智力智之智慧駒大明神と高らかに唱へて、ごそ〳〵と鳴らし、なるほど唐茄子の糞附などは食ふべからず。　はゝあ有難き御託宣かな。さらば何菜にいたすべきや。　ごそ〳〵ごそ。　なるほど〳〵、竈の下に玉子焼と鰤の味噌漬と鹽鰯あれば。　ごそ〳〵ごそ。　なるほど其を取出して一杯飲むべし。　あら有難き御託宣かな。　ごわ〳〵ごわ。　いや尙だ何やらおほせらるゝ、酒も荒神棚の上に口きり一杯入の德利と、流もとの桶伏の中に五合樽と。　ごそ〳〵、ごわ〳〵。　いや尙だ何かおほせらるゝ。なるほど〳〵、火消壺の上なる味噌漉の中に章魚の足ありとは、重ね〳〵有難き御託宣……………ごわ〳〵ごわ、なに〳〵急用とな。なるほど〳〵、いま味噌漉の中に在りといひしは間違ひにて、それは澤庵なり。まこと章魚の足は箒を懸けたる釘に釣るしたり。右の通りの御託宣なれば、ゆめ〳〵疑ふべからず。御亭主早くお探しなさらぬかと

いへど、稀有なる顏して得立たねば、人もし切角の御神託を、聊も疑ふものならば、冥罰たちどころに到りて不測の災難を蒙るべしとの言葉に、手燭を點させて女房引伴れ、まづ竈の下を覗へば、あるわ／＼。　あるかな／＼。　あるわ／＼。　しかも厚燒玉子に鹽鰯、女房が大好物の鮪の味噌漬、二人前とは夫婦に授けたまはるものならむと、流もとに行きて伏せたる桶を覆せば、まさしく五合樽！　いかにも御神託は疑ふべきにあらず。荒神棚を見れば爛德利にこぼるゝほどあり。柱の章魚の足まで不餘座敷へ運びて、下物は膳の上に列べ、德利は鐵瓶に入れて、御亭主からまづ一盃と獻せど、亭主怪みて得飮まねば、椋助毒味の一盃に、甘露々々と額を拍てば、亭主も安堵して飮み始め、二人懸りにてたゝか飮食する傍に、女房は直呆れに呆れて、椋助の顏をしげ／＼と眺入り、風呂敷包を忍びやかに突いて見て、此裏に小狐などや居らむかと、心も心ならず控へたり。

椋助この體を見てひとり可笑く、これにて幾分か胸はすきたれど、まだ〳〵戸棚の一物を、引ずり出さでは興薄しと、再びごそ〳〵と鳴らせば、又何やら御託宣あるさうな、客人早く聞かせて下されと急けば、椋助耳を峙て、眉を顰め、つひに覺えぬ不思議の御神託かな。唯酒に醉うたるばかりにてもおもしろからねば、座興に化物を出して見すべしとの事なりと通辨すれば亭主興に入りて、我世に化物ありとはかね〴〵聞きたれど、かけ違うて一度も御意得し事なければ、是非とも結交になりたきものなりと乘地になれば、女房顔色を變へ、見るものに事を缺きて、こはらしや化物とは。お客人、化物は血の道の毒なれば、同事なら芝居を見せて下されといへど、亭主肯かずして、芝居は何時にても見物なるべし。錢ずくでも見られぬ化物を見ておけ。お客人早く化物を見せて下さい頼か。見せまをすは易けれど、もし氣を失ひたまふ事などあらば迷惑なり。いや〳〵必ず氣は失ふまじ。話に聞けば幽靈と逢ひて、化

物は其容醜惡きものゝよし。大凡どれほど見苦しきものにやと問へば、椋助先刻の欄間の外より、二人の女房が對話を聞き、亭主は彼の女子を嫌ふ事、蛇が煙草の脂よりも太甚しく、いかに機嫌好き時にても、一目彼の女子を見るものならば、氣色惡くなりて嘔氣を催し、一分時も側に得堪へざるよしを聞知りたれば、凡そ妖怪の醜惡きこと、隣村のおだれといふ女房に肖たり。やれそれは可厭な事。おだれに肖たりとあらば天晴なる妖怪なるべし。其にても苦しからねば見せたまへ。それだに御承知ならば只今お目に懸くべしと、またごそ〳〵と鳴らし、なるほど、座敷の戸棚の中を見るべし。御亭主聞かれましたか。いかにも戸棚の中に居るとの事。手傳うて下さらぬか、一人にては氣味惡しと、二人ともに立上れば、女房は夫がつね〴〵の吩咐に、わが大嫌ひなるおだれめを、家へ入るゝは申すに及ばず、途にて遭うて言語なりとも交すが最後離縁せんとあれば、發見けられては一大事と面色變り、これまでをしお客

人、譫語も休み〳〵いうて下され。天竺の馬の皮やら、何所の馬の骨やら知れぬ旅人に、滅多に家探しはさせませぬぞえ。此方樣もまた兒輩のやうに無勘辨な、我家の戸棚には何と何が在るといふ事を承知ならば、その裏に妖魔などの棲むべき理はない事と、合點のゆきさうなものなるに、明けて見たくば明朝、ゆつくり煤拂までして見せますほどに、今宵客人の居る前にては、此戸は一寸も明ける事はなりませぬと、戸棚に身をひたと寄せて動かねば、椋助またごそ〳〵と皮を鳴らし、御主人また御託宣があります。何とありますな。婦人のいふ事などは露ほども用ゆべからず。もしわが言葉に背かば三日を出でずして此家を灰にすべし。やれ可恐のおそろしやの。おのれ其所を退かぬか。退きませぬ。退かぬと此家が灰になるぞよ。灰になるとも、火になるとも、女の一念退かぬというたら、金輪奈落の底までもと、戸にしがみ着きて動かねば、灰になるぞ、火になるぞと、男二人の力にて、無二無三に手を捻上げて

引放し、その隙に椋助さつと戸を開けば、葛籠の中に音するは、此裏にこそあんなれ。御亭主々々々、妖魔は此葛籠の中なれば、油斷して取逃したまはゞ一大事ならむ。竊と蓋を細目に開けて隙見したまへ。開け過ぎなば飛出づべければ、その覺悟してとあるに、亭主おそる〳〵近寄りて、わづかに蓋を開きて覗へば、果せるかな中に蹲踞る妖魔あり。はたと蓋して、なるほど妖魔々〳〵々。しかも隣村のおだれそのまゝ生寫しと、錠をおろし戸を鎖して舊の坐に還り、扨々希代にも不思議なる重寶の馬の皮かな。凡そ人の家には銘々一子相傳の寶といふはあるものなり。我家三代前に火災に罹りて、財寶一つ餘さず灰にしたれば、是ぞといふべき家寶の傳はらざるを無念に思ふ折から、幸ひなるかな御秘藏の馬の皮は、諸大名にも此類あるまじき奇品なれば、せひとも讓り受けて我家の寶となし、子々孫々に傳へて息災降福の守神とも崇むべければ、何卒御讓り下さるべし。　此方に於ても家重代の寶なれば、むざと人手へ渡さ

むは不孝此上なけれど、さしあたりて金子の入用あれば、随分御相談になりては手放しまをすべしとあれば、亭主斜ならず喜び、金子二百兩にて手を拍ちたり。

翌日歸り際に椋助亭主に向ひ、昨夜の妖魔を封じこめたる葛籠は、あのまゝ此方へ渡したまへ、道なる川へ沈めて行くべし。さもなき時は長く死せずして、禍災を此家に遺さむ事の氣遣はしければとて、二百金を懷中に納め、妖魔入の葛籠を背負ひて、また〳〵と此家を立去りけり。

重き葛籠に肩骨は挫げるばかりの苦痛を忍び、やうやく山を下れば麓に急流の大河あり。橋の半頭に辿り着きて葛籠を卸し、椋助一際聲を張上げて、おのれ此中なる妖魔よく聞けよ。昨夜は智之智慧駒明神の託宣によつて假に形を現し、一夜窮命せしは御苦勞なり。たゞ今首尾よく役目を果したれば、此河の中へ投入れて、再び魔界へ送り返さんほどに、道草食はずについと往けと引導わたして、かの葛籠を橋の欄干より突落さんとすれば、中にて泣聲を立て、やれ命ばかりはお助け下され、慈悲じや情じやと喚けば、椋助驚き顏にて、この妖魔は不量見千萬なる事をいふぞ。おのれは此人界のものならねば、河に沈めて故郷の魔界へ返しくれむといふ際に、命を助けよとは一圓合點のゆかざる次第といへば、中にて此身を妖魔などゝは毛頭覺なし。隣村のおだれといふ眞人間の女子

なり。早く此所を明けて日の目を見せて下されといへば、椋助冷笑ひ、われ人間に生れて愚鈍なりとも、畜生同然なるおのれ妖魔ごときに謀められ、うかと此所を開けてあんぐり一嚼に命を捐つべきや。此期に及びてさる殺生の慾心を出さず、一刻も早く巣窟へ還れ。やれ〳〵南無阿彌陀佛とまた突落さむとすれば、中にはいよ〳〵悲鳴の聲を立て、もし一命を助けたまはゞ、十分なる禮金をいたしましよ。　何の禮金とは近頃耳よりの話なり。さりながら、妖魔の與るゝ金子ならば、狐狸は小判の代りに木葉の格にて、蛇の子か蝘蜓の腸を人間の生皮に裹みたるなどは御免なり。　此人は聞分のなき男かな。私は隣村のおだれといふ人間の女子にて妖魔ならずといふに、かくてもなほ虚言なりと疑ひたまふならば、論より證據はまづ此所を開けて見たまへ。どつこい開けたらばあんぐりと一嚼に、懸替なき命を玉なしにせむのみか、物になりかゝりし禮金沙汰は零とならむ。此所を開くる前にその禮金の高を聞かせよ。浮世

の沙汰は金次第、妖どのどうじやと尋ぬれば、我夫多年丹精の虎の子五十両あれば、其にて此命を我に賣りたまへ。五十金にて命を賣るとは廉けれど、此所に捨てゝは一文にもならざれば、不承ながら思切りて賣渡さむほどに、必ず約束を違へな。命の親に何の報怨すべき。懸念なく此所を開けて下されといふに、椋助錠を捻切りて蓋を取れば、おだれ色蒼ざめてぬつと現はれ、やれお蔭様にて命を拾ひましたと、足腰を摩りながら、先に立ちて我家へ伴れ、夫の金子を盗出して、約束通り五十両包を渡せば、都合二百五十両を財布に入れ、一天下の主ともなりすましたらむ心地して、その歓喜いふばかりなく、十枚二十枚と手探りに算用しては打笑み、取出して珍しげに眺めては打笑み、やうやく我村に着きけるに、他人の馬だに我物なりといふほどの男なれば、今二百両を所持すれば、あはれこの事を他人に知らせて矜りたき箭先、はたと大椋助に出遇うたり。此所ぞと呼留め、首に懸けたる財布を取出し、中より小判

四五枚摑んで光らかし、椋助どの、かういふ物を見たりやと、爪彈きして、此音の好さは鬼も耳を傾けて面を和ぐべしといへば、大椋助打笑ひ、その小判もわが馬と同じく、他人の預物を吾物と吹聽するなるべし。さるさもしき事せずとも、稼ぐに逐附く貧乏なし。額に出す玉の汗は、小粒銀ともなりなむに、正路に稼ぎて富貴を得よと諭せば、小椋助呵々と笑ひ、口ばかりは賢才げに饒舌れど、此方は錢儲を知らぬ男よな。手の裏反せば千兩の品を持ちながら、才の廻らぬより寶の持腐れをやらるゝこそ笑止なれ。小椋助身貧なれども、遠祖は誰あらう、楠河内守菊水の正成なり。我も軍師の家に生れたれば、一度腕を揮ふ時は、十兩二十兩の小判を獲むは、馬糞を拾ふよりもいと易し。此小判を他人の預物とは、此方が馬の傳からの邪推といふものなり。さらば其金子はいかにして何家より獲たるぞ。楠正成の末孫、大軍師の小椋助、減らぬものなれば智慧かして、我にも福德を授けよかし。我家に千兩の品ありとは、氣懸

りなる中分と乘れば、小椋助打首肯き、我違約の廉を以て、此方の爲に唯一頭の馬を斃されたれば、其皮を剝ぎて昨日市に持行き、皮や、馬の生皮やと、大聲に喚步行きけるに、掃除やの黃粉麥、こがしは正眞ませものなしと、町人の信ずるごとく、我を百性と見ていかゝものは賣るまじと思ひけるにや、其所の靴屋、彼所の太皷店より、主人我勝に駈來り、競あうてかの皮を、金二百五十兩にて持行きたるは、凄じき擭利ではあるまいか。此方も四頭の馬を生して使役はむより、皮を引剝ぎ、町へ行つて賣るものなら、一枚二百五十兩、四枚の四五の二十、二四が十の金千兩。これをなまじひに生しおきて、少錢を獲むが爲に、大豆は食はるゝ、草は食はるゝ、世話は燒ける、手は懸る、此方が日每齷齪するも、半分は四頭の馬ゆゑならずや、これを寶の持腐れとはいふなりと、言辭巧に欺かれて、賢からぬ大椋助は、そゞろに打歡び、昨夜は黃金の馬に乘りて奔走き、牡丹餠畠へ振落されて尻餠搗くと夢みしは、今日かゝる

吉事を耳にする前兆なりしか。さりとは深切なる椋助、今に及びて先頃いさゝかの事より立腹の餘り、此方が馬を撃殺せし氣の毒さ、此謝罪は近き内にきつとすべし、宥してくれよと詫入れば、何の〳〵、此方が馬を殺してくれずば、我とても錢儲の分別はつかざりしならむに、其は此方より、却つて禮をいふべき所。何はともあれ善は急げ、早く歸つて馬の皮を剝ぎ、一日も早く千兩箱にして歸られよ。其節は二人して馬儲の祝といふをして一村の知人を招ぎ、此村開闢以來なる圖の大振舞を催し、好運の生神、椋助大明神と崇められむと勵ませば、大椋助はや慾に眼色を變へ、暇乞もそこ〳〵に、結引褰げて馳歸り、大斧を引提げて馬屋へ行けば、馬は主人の姿を見るより、懷しげに顔振向けて嘶くを、利慾に眩みし椋助は、無慈悲の切味鋭く、片端なる馬の眞額發矢と割れば、餘る馬ども此體に驚き嘶ぎて、挫げるばかりに床を踢り、鬣左右に打振りて、韁を嚙切らむと百搔く所を、難なく二頭まで仕留めけれど、獨遺り

し馬は暴れに暴れるを、椋助は刄頭よりたら〳〵と鮮血の滴る大斧を振冠り、隙もあらば只一撃と身構ふれど、躍狂うて撃入る隙のあらざるに、苛つて打込む覘外れて、鼻頭より斜に綱を斷れば、力餘つて前へよろめく肩頭を、馬は一蹋蹋つて門外に跳出づるを、おのれ遁さじものと逐懸け追逼め、三町ばかりも畦路を逐まはしけるに、遁行く馬は足をすべらせ、田中に落入りて横様に轉ぶ所を、得たりと力まかせに一撃の大斧は、首筋深く撃籠むで、大椋助も倶に仆れぬ。

大椋助は四頭の馬を殺すが爲に、數箇所に負傷せしのみならず、重き大斧を持つて奔走りしに疲勞して、得起きまじく心地惡けれど、千兩といふ慾に勵まされて、立たざる腰を無理に引立て、馬屋に納置きたる死馬を屠りて皮を剝ぎ、一日曝したるを麻風呂敷に裹みて矢筈に背負ひ、十里の道を行かむといふに疲勞あれば、足扶けに青竹の杖を突きて立出づれば、行遭ふ士女此體を怪しみ、何しに何所へ行かるゝ事ぞと問へば、大椋助顧髯を搔撫で、おのれらは慮外千萬なる奴原かな。椋助明日にもなりて歸村せば、身體よりは赫奕として金色の光明を放つ、馬大盡の千兩明神なるとも知らず、我に向うていさゝかも尊敬の容なく、卒爾にも何しに何所へ行くなどゝは、勿體もなき事なるぞ。此背を見よ、この背負うたる物を拜まぬか、千兩大明神の御尊體は是なり、そのそうにしげ

〱視るな、眼が盲るゝぞよ。これ〱苟且にも手などを出すな、指が曲るぞよ。側寄れ片寄れ此路狹しと大手を振り、竹杖を突鳴らして過ぐれば、村人かれが袱の中なるは長年飼ひし四頭の馬の皮なるよしを聞傳へ、其事といひ、あの行爲といひ、不便や大椋助は氣が狂ひしぞといひ合ひけり。

此噂を聞きて椋助心中に可笑く、氣も狂はぬものを狂人などゝは彼奴等こそ亂心なれ。我この皮を賣りて明日は千兩箱を背負ひ歸り、立所に此村の山も田地も一人して買占め、一足飛の大分限者になりすまし、今日我を狂人なりと罵せし奴等に魂消させてくればやと、慾に引かれて行けども〱憩まず、其日暮に山麓の町にぞ着きける。

夜中なれば往來寂しく、商家も店を閉ぢたるに、椋助は一刻も早く千兩にせむと思へば、町へ入るや否や大聲を揚げて、皮や〱馬の皮やと喚はれば、町人は奇異なる賣聲に何物と戸外へ驅出で、閉せし店いはたは

たと戸を開けて覗くを、椋助は我千兩の賣物を見にかくは物珍しがりて騷ぐものならむと、したり貌にいとゞ聲を張りて、皮や／＼馬の皮や千兩の皮や、椋助の皮馬の皮と呶鳴り立つれば、一町崩るゝごとく衆人笑うてやまざりけり。

我を笑ふと心着かねば、なほ聲を振立て張揚げて呼行けど、誰も買はむといふものなし、夜深くるまで歩行きて聲は枯れ足は疲れ荷は重りて、滿身の慾もさすがに之を扶くる力なく、さる安泊に草鞋をぬぎ、案に違うて賣れざる事を苦に病みながら、積る疲勞に前後も知らで寢入しが、正午前にやうやく目覺まして、これはならぬと飛起き、朝飯も食はでかの風呂敷包を引擔げ、皮や／＼馬の皮やと、腸や飛出さむと思ふばかりに力を籠めて呼ばむとするに、昨夜の大聲にひたと咽喉潰れて少しも聲の立たぬを口惜しがり、無理無體に立てむとすれば、血の出るほど切なけれど、此所が千兩、辛抱のしどころと、一生懸命に息みて身を百搔き

顔を顰むれど、哀れや蟲の鳴くほども立たばこそ。太鼓店の主人逐懸け來りて、昨夜皮や／＼馬の皮やと呼行きしは此方かと尋ぬれば、そりやこそ手前のお客樣と、恭しく低頭し、蟻の這ふごとき聲にて、いかにもその皮商人は拙者なり。お召下されと袱を解きて四枚の皮を出せば、かの男仔細に檢め、實に良き皮なればさしあたりて用はなけれど買置くべし。價は若干なりや。一枚の價か但しは四枚の價か。四枚ならば若干か割引もあるべけれど、まづ一枚の價は。一枚欲しとならば一枚にても賣るべけれども、願はくば四枚の價を尋ねて下され。異な事をいふ男かな。一枚賣るに四枚の價をいはでも濟むべきに、但しは此方は算用といふことを知らざれば、四枚の價をのみ賣主より聞き來りて、一枚の價は知らざるにや。賣主は我なり、算用もよく知れり。さらば一枚の價を聞かせよ。一枚の價は後に聞かさむほどに、まづ四枚の價を尋ねて下されと、只管請うてやまざれば、此奴正氣の沙汰にはあらじと

想ひながら、いふがまゝに。さらば四枚にて何程ぞ。あら嬉しや、千兩？　何？　千兩？　何と？　千兩？　何？　千兩、この狂人めと拳を揮つて、横面一つ丁と食はせ、眉間に唾を吐懸けて行きぬ。椋助は唯呆れて、惘然と太鼓店の主人の後姿を瞬きもせで目送りしが、やう〳〵心着きて路に廣げたる皮を取上げ、一々推戴きて風呂敷に裹み舊のごとくに背負ひて、蟲の細音に皮や〳〵と喚行く後より、町の小兒等がぞろ〳〵と附添ひ、痴漢よ、狂人よと噺し立つれど、椋助はたゞ此皮を千兩に賣らむ事のみ思續けて、顔を撲られ、唾を吐かれしを口惜とも思はねば、小兒等の惡口をも慚かしがらで賣行けば、町外れに一軒の靴屋あり。店には三人の職工仕事して、物品も數多く美々しく飾立てたれば、此家こそ賣所と、店口に小腰を屈め、馬の皮の御用はございませぬかといひこめば、奥より主人出で來りて物品を見せよといふに包を解きて、四卷の皮を取出しぬ。

この主人も亦良き皮なりと連りに賞賛して、之は悉皆買はむほどに廉くせよ。　價は一文も引なし、一枚が二百五十兩づゝにて、四枚の千兩といへば。主人打笑うて信實とせず。百姓どの御酒が過ぎたか、商賣に酒落は無用にして、眞實の直段を聞かせよとあれば、椋助眞顏になりて、商賣に洒落が無用とは此方から申したき口上。眞實千兩一文も引なし、一枚が二百五十兩の、四枚が千兩。　馬鹿ものめ、毘舍門天の百足小判や、ちん〱小判を通寶にする國とは違ふぞ。一兩小判は黄金だぞよ。譬言吐すなと持つたる皮を、椋助に投着くれば、不意を撃れてづでんだうと倒れ、小鬢を砂利に擦剝き、起上らむとする所を、店の職工ども飛懸り、その皮にて散々に打着され、無念やる方なけれど、多勢に無勢と遺恨を呑み、また皮を背負うて賣行けど、痴漢よ、狂人よとて誰一人取合ふものなければ、愚鈍なる椋助も、爰に始めて心着き、扨は彼小椋助め、我を欺き玩弄物にしたるよな！おのれ、おのれと飛ぶがごとくに歸

村来りぬ。

（五）

爰に小椋助の老母は卒中にて、此日暮に歿りしを臥したる一室へ、さりとも知らで此裏にこそと、大椋助は暴れにあれて、かの馬殺の大斧小脇に闖入し、老母が死骸の枕頭に衝立ち、おのれ椋助今あらためていふにも及ばず、命を取らるゝ覺は胸にあらむ。思ひ知れやと振下せば、骨まで刻みし手答に、心快しと首肯きて、優々として立去りけり。

次の一間に臥したりし小椋助は、彼が雨戸を蹴放して飛入る物音に目覺し、盜賊ならむと竊に樣子を覗ひしに、隣家の椋助が馬にて誑られし恨を返さむとて來りしに、我と思過ちて老母の頭に切着けたれど、幸ひにも死骸なりければ、大事にも及ばずして事濟みたり。さりながら彼奴、おのれが愚鈍なるに心注かず、人に恨を被せてかゝる無法を働きしこそ憎けれ。よし〳〵また一狂言して泡を吹かせ、見事この返報をしてくれ

むすものと、夜明くるまで工夫を凝しけるが、その朝椋助は老母の死骸に晴衣を被せ、目深に頭巾を冠らせて生けるが如く粧ひ、近所より借りたる馬に乗せて、仆れぬやうに鞍に縛り、自ら口取して隣村の薬師へ參詣する風して村堺まで行けば、其所に亭主は名代の馬鹿律義にて富裕の大酒店あり。椋助その前に馬を留めて、老母に酒一盃飲せたまへといへば、亭主心得て、此方の事ゆゑ大安賣にこれほどゝ、茶椀になみ〳〵注ぎて持來れば、椋助馬の側にて草鞋の紐を結びながら、我かく手塞りたれば世話ながら此方が手渡したまへ。母は年老いて耳遠ければ、隨分大聲に呼びたまへとあれば、亭主盃をさしつけ、息子殿からの酒じや、お婆どのお婆どのといふに、返事なければなほ聲を張揚げて、息子どのからの酒じや、早く飮ましやれ、これお婆殿といへど、死人の物をいふべきやうなし。なほ挨拶もせねば手をも出さぬに、此男性來凄じき短氣ものなれば、赫とせき立ち、この老母め飮まぬか厭かと茶椀を取つて投着

くれば、丁と、眉間を撲つて、面にさつと酒を浴びたり、椋助はかねて期したる所と、死骸を縛りし繩を此時忍びやかに解けば、死骸は眞逆に落馬して地上に仆れぬ。椋助仰天して走寄り、掻抱きながら藏し持つたる紅を疵口に塗りて、やれ頭顱を碎いて死なれた／＼と、空涙を灑して大聲に泣けば、亭主の驚駭は譬へむ方なく、顏色蒼ざめて悄然と立つたりけり。椋助涙を拭ひてきつと亭主を睨み、これ見やれ、天にも地にも唯一人の、大事の／＼母親は死なれたぞ。此方が酒を濺けしばかりに、驚きて落馬し、眉間を石に割られて命を失うたわやい。もとのやうにして戾せ。さあ戾せ、戾す事ならずばお上の手を借り、おのれが首を斬らせて親の讐を伐つべしと、死骸を肩にして行かむとすれば、亭主大地に手を衝き、泣聲して、椋助どの、待つて下され。わしが黠の短氣から、かうした大事を仕出來せしは、我罪とはいひながら、心にもなき過失からと、了簡して下さらば、內濟金百兩進ずべし、さもなくば此首が亡な

るべし。首亡くては明日から酒を賣る事かなはねば、首代百兩にて何卒勘辨したまへ。其お婆どのはわしが親にして、病死の體にて葬禮は見事に此家より出さむ、法事も見事に此方の手に營まむほどに、是非に內濟を賴入るとは、思ふ壺と飛立つばかりの歡喜を藏し、椋助淚に暮れながら、思案の體にて、縱令過失にもせよ親を殺されては、子として見ぬ顏はなるまじき所なれど、敵の此方は蚤一疋だに殺生はせざるほどの善人なり。且はさまでに心を竭して詫びらるゝものを、讐呼はりもなるまじければ、非業の死を遂げられし母親は、前世の約束とも諦め、我は不孝の子となりて、淚を飮みて內濟にすべしと、いひも了らず死骸に取着きて、もの／＼しく泣出せば、愚直なる亭主は此有樣を見るに身を斫らるゝより辛く、或は詫び、或は慰め、死骸は內へ舁入れ、扨百兩を椋助に渡せば、淚ながらに請取り、馬の鞍を撫でゝ、朝の露より敢果なきは人の命といひながら、今の今まで此上にて煙草吸はれし母樣は、還らぬ旅

に立ちたまひたるか。唯これ夢のごとく眞實しからぬ不慮の災難かな。母にさほど惡業あらば、何とて身替りにこの椋助の命を神は短めたまはざる。恨めしや悲しやと、馬の鬣に取付きて、さめ〲とまた涙を溢せば、心中さこそと亭主も貰泣して、此悲歎も悉皆我なす業と思へば、慰むべき言葉もなく、眼を瞑り合掌して、彌陀佛々々々と唱ふるのみ。椋助は泣く〲馬を牽いて半町許も引還し、かの百兩を取出して推戴き、小錢を探りて祝酒を二三盃傾け、馬に跨り小唄まじりに還り來るを大椋助見るより、はや出たか、幽靈可恐や〲と內へ遁入るを、小椋助呼留め、椋助どの待しやれ。私を幽靈とは何の譫言。これ此に足がござるぞと毛脛をたゝけは、大椋助呆顏にて、なるほど足がある。幽靈は腰から下が糢糊としてある理なれど、其方には足のあるは分解つた！生前足の達者なりしゆゑ、死しても烟とはならざるよな。足があつても、まだ〲私を幽靈にする氣か。幽靈は亂髮なれど、これ見やらぬか、此樣に

髷があるわと摘んで見せければ、大椋助きよろ〳〵と馬上の姿を見上げ見下し、足もあり、髷もあれど、なほ汝が幽霊に相違なきは、一度死せしものゝ舊の姿にて此世に現るべき様なし。おのれ知らぬか、昨夜たしかに我手に懸けて殺せしぞといへば、小椋助反かへりて笑ひ、昨夜其方が例の大斧にて頭顱を割りしは、我老母の死骸なるぞ。今朝その死體を賣りてかくの仕合せと、懐中より百兩を出せば、大椋助は我にもあらで進寄り、また儲けしか。眞實に其金は老母の屍を賣りて獲たるかと、眞顔になりて訊ぬれば、いかにも〳〵、百兩ならば我も買はむ、彼も求めむといふもの、大方五六人もありしかど、一人よりなき母の死骸に、見す〳〵錢儲の種を捨てゝ歸りし殘念さ。親は何人も持つべきものなりといひ捨てゝ、裏の方へ馬を牽入れぬ。

（六）

大椋助之を聞くより、馬にて懲りし譎詐とも心着かず、慾ゆゑ何の分別もなく、背戸へ廻りて大斧を擔ぎ出し、先頭四頭の馬を殺せしに刄や鈍りたらむ、もし切味悪くして、母を苦しめむは不孝なるべしと、變りたる孝心を發して、井の端へ砥石を持行き、大肌ぬぎになりて、ゑつさ、こらさと砥立つる物音に、母親立出で、椋助何するぞ。用なきにさるものを研すませ、向不見な事せまいぞと諭せば、母人、金儲が向不見か、默つておゐやれ、痛くない様にすつぱり殺つて進ずるわ。すつぱり殺つて進ずるとは？　此方を？ー　私を？　人殺し、不孝ものゝ親殺しと叫びて遁げ出すを、百兩の損毛遁さじものをと飛懸つて引仆し、電光のごとく閃かす大斧の一撃に、敢なく呼吸は絶えにけり。

椋助これを麻風呂敷に裹みて俵に入れ、背負梯子に結附けて家を出懸に、

小椋助を訪ねて賣先を問へば、某といふ藥種店へ行きて、死人の御用はなきかと聞くべしと、敎へのまゝにその店を尋ね、此方にて死人の御用はござらぬか、御用もあらば良品を持合せたるを、金百兩にてお召下されと、背負ひし俵を店口におろせば、店のものども狂人なりと恐れて悉皆奥へ竄入り、暖簾の陰より樣子を覗へば、椋助俵の口を解きて、血汐に染れる母の首を見せ、かく吟味の品なれば、百兩にても相場外れの安物なり。お召下されといふに、いよ／＼恐懼をなして、出合ふものはなかりけり。

やがて亭主出で來り、いかに藥種屋なればとて人間の死骸に用なし。これは寺へ持行きて始末を賴まれしよ。店頭に如此いまはしくも不淨なる物を置かれては迷惑千萬なり。早く納めて持還るべしと、苦りきつたる挨拶に、大椋助心得がたき顏して、藥種屋ともあるべきものが、人間の死骸を仕入れざる事やある？　現在隣家の椋助といふもの、其母の死骸を

百兩にて此方へ賣りたれば、我にも持行きて賣れよと敎へしかば、無理に一人の母親を殺して、早速かくは持參せしに、今に及びて買はぬとは我を弄りたるなり。この代物は外々の品と代り、無駄になりては始末惡ければ、是非とも百兩に買うて下さるべしと、泣聲になりて強ひるに亭主仰天して、扨々此方は驚入りたる男かな。二十四不孝の中にも母を殺して賣物にせむとせしほどの人畜生あるを聞かず。想ふにその椋助といふ奴、此方に恨ありてその返報に、さる無法なる事を敎へたらむなれど、親殺の罪は磔逆が國法なり。此事もし公儀へ達えなば、此方は一命なき大罪人。はや／＼持歸りて人知れず死骸を葬られよと、聞くより椋助面色土のごとく、がた／＼と顫へながら、手早く俵を背負うて遁歸り、夜に入りて忍びやかに、村の東なる山奧に葬りけり。

再度の譎詐に大椋助切齒をして無念がり、馬はともあれ一人の親まで亡はせしは、人外なる惡黨かな。此度こそは必ず彼奴が命を取つて、重な

る遺恨を霽すべしと、丈夫なる麻の二重袋を用意して、小椋助が熟睡に踏入り、知らぬ間に十重廿重に縛りて、麻袋に入れむとする時始めて目覺し、椋助殿苛い、これは何とする了簡かと、言はせも果てず目を瞋らせ、苛いとはおのれが仕業、何も異つた事はせぬ、親の讐を討つのじやと、横面二つ三つ食はせ、ないて詫入るも肯かず、無理に袋の中へ入れむとするを、九死一生と百掻きて入らじとすれば、大椋助袋を頭よりと冠せ、麻繩にてしかと口を緊め、肩に懸けて出で行くは、如何にせむ心か知らねど、いづれにしても命はなきものならむと、身悶えして喚けば、袋の上より滅多打に撲かれ、暴るれば土足に蹂躪られ、せうやう事なしに身を縮めて扛がれ行けば、藥師堂に老若の羣集するを、大椋助何事なりやと道ゆく男に問へば、此本堂にて有難きお上人の御説法ありと聞くに、我手に懸けし亡母の憶起して、後世のほども可恐しく覺え、門の外なる片蔭に麻袋をおろして、説法聽かむとて大椋助は門内へ入りぬ。小椋助

は此時こそと袋を破つて出でむとするに、嚴しく後手に縛められたれば、心ばかりは逸れど所爲なく、只身を百搔きて前へころ〳〵、後へころころ、左へころり、右へころりと轉け廻る所へ、なまいだ〳〵と唱へながら、一人の老夫通り懸り、何じや〳〵、杖にて突けば、何でもござらぬ、人間の袋入。何として袋入にはなられしぞ。然ればさる有難きお上人樣の敎化に、衆生もし手輕に極樂へ往かむ事を願はゞ、麻袋の中に入りて、半日道路に轉がるべし、成佛疑ひなしとありけるゆゑ、極樂淨土へ往かむとて、かく袋入になりたるなり。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と應ふれば、老夫ほろ〳〵と隨喜の涙を流し、お聲を聞けばまだ若きお男さうなが、世に殊勝なる御志、前世の功德に依つて極樂の拔道を敎へられ給ひ、今宵にも淨土へ往かしやる此方が果報の羨ましさよ。我齡七十に餘るといへども、業因盡きずして猶娑婆にさまよへり。此袋の中に今一間もあらば、無理にも同居を願うて成佛の同伴ともなりなむものをと

いへば、小椋助袋の中より。我も一刻も早く彼世へ往きたけれど、老いたる此方の御心を想へば、このまゝに捨てゝ一人成佛も玄がたし。さればとて袋小さく、御同道まをしがたければ、我はなほ若き身にして、今往かねばならぬといふにもあらねば、此方に袋を讓らむほどに、一足先へ成佛したまふべしとあれば、老夫歡涙に暮れながら、お若くて成佛せむほどの人の心懸は格別なるものかな。折角の御志なれば辭儀なしに戴き、お蔭樣にて極樂へ參るべし。この御恩は彼世にて返さむか、もし掛違うてお目に懸らずば、生れ替りて報ずべしと、いそ〳〵袋の口を解きて小椋助を引出し、縛めの繩を解き、妻子珍寶不隨者とあれば、此袋を我に讓りたまひし御禮までに進ずべしと、銜きたる珊瑚の杖と唐錦の頭巾を與へて兩手を後へ廻せば、椋助我懸りし繩もて老夫を縛むるに、これが成佛の御繩かと、百萬遍の珠數の數とり見るごとく、一重懸る毎に戴きて、なまいだ〳〵といひながら、袋にぞ入れられける。

椋助袋に口を寄せて、今にも誰か來りて扛き行くとも、かならず聲を立てたまふな、それこそ極樂の使者なれ。過つて聲を立てなば、袋の底拔けて忽ち奈落へ墮ち、未來永劫浮む事あるべからず。合點か、老夫樣。なまいだ〳〵〳〵。

說法果つれば大椋助出で來りて、かの麻袋を扛くに目方の輕き事前の半分なり。是といふも有難き御說敎の功力ならむと、いさゝかも怪まず。中に老夫は小椋助の言葉を信じ、これぞ極樂の御使と、一念になまいだを唱ふる小聲を椋助耳に入れて、惡黨無賴の椋助奴も、最後の際には善心に立還りて、志をらしくも唱名する事よと、道を急ぎてやうやくぶく〳〵川の岸に着けば、袋を取下して一の二の三と、渦卷く浪へ突落し、後をも見ずしてやつさこらさと遁歸りぬ。

（六八）

大椋助は始めて積る怨恨を霽し、五月晴の想歡喜さいはむ方なく、其夜は祝酒に食醉ひて睡りたる戸外に、我を呼ぶ聲の連なるに目覺まし、誰じやと問へば隣家の椋助なりと答ふ。扨こそ今度は正眞擬ひなしの幽靈！ 椋助は留守じや〳〵と天窓から夜衣を被りて縮みあがれば、小椋助裏口より、のそ〳〵入來りて夜衣を引剝ぎ、幽靈でない證據は、くどいやうなれど脚もあれば髭もある。起きぬか〳〵と襟領取つて無體に起され、此はたまらぬ、留守じや〳〵と喚きて遁げむとするを捉へて、これ〳〵此方のお蔭にて、また圖らざる金儲せしゆゑ、其禮に來りたる椋助を、心鎮めて篤と視よと突放せば、また引被りたる夜衣の袖より、小椋助の姿をじつと凝視り、其方が被れる美しき頭巾は何ぞ、又手に持てる赭き棒は何なるぞ。 されば此唐錦の頭巾も、此珊瑚の杖も、龍宮の土

産なりと、聞くより大椋助夜衣刎ね退けてぬつと寄り、龍宮の土産を誰から貰ひしぞ。　誰から貰ふものぞ、自身に出懸けて貰うて來た。知らざりき、龍宮とやらは、海の底の底に在りて、人間の往來かなはざれば、むかしより浦島太郎と、俵藤太の二人より、行きしものなしといふに、椋助其方も眞實行きしか。　さればこそかく世に珍しき寶は獲たれ。我も行きたきものなるが、此方は誰に伴れられしぞ。　誰にも伴れられず、一人して行く氣もなく行きしは、昨日此方が爲にぶく／＼川に沈められしが、かの川の深き事、古來より知れる人なし。袋のまゝにて落入りて、大凡一時餘も水中を降り行くと思ひしに、忽然と四面明くなりて、宛然旭日の昇りたらむがごとく、なほ止まる所なく沈み行けば、深く行くほど明うなりて、五色の光明赫奕と輝きわたるに、はつと思へば袋の口解けて、色々樣々に目も綾なる、貝類石類珠細工の樓門前なる、金水晶の甃の上に轉び出づれば、珊瑚の扉颯と開きて、十二一重のやうにて

肌まで透明る輕羅着たる美女の、いづれも十七八なるが、五人現れ、我手を取りて奥殿深く案内し。乙姫樣にお目見えおほせつかりて、さまざま陸上の御物語申上げゝるに、殊の外御機嫌麗しく、やがて彼の美女どもの手昇にして、持出したる瑠璃の臺には、結構なる寶盡し。好きほど取れとの御意なりしかど、なまじひに慾張りて、化物葛籠など背負はされむもおそろしく、無念ながら此二品にて、唾を飲込みて戻りたれど、欲しきものは言葉に盡すべくもあらず。乙姫樣と人魚との外は、いづれを見ても小腥い奴輩ばかりにて、話敵手といふものなければ、我等人間を珍重する事大方ならず。なほ有難き事は此世と違ふ仙境なれば、珊瑚、眞珠、玳瑁なんど、路傍にころ／＼と、塵芥のごとく遺ちたれど、誰拾ふものなければ、何方向いてもうまい仕事だらけと、萬八がやうな噓八百を眞に受込み、大椋助ぞく／＼と悦の目尾を下げ、額際から面皰の吹出すばかり慾を募らせ、了簡の箍のゆるみたる男とて、是非なや何遍懲

されても性はつかず、遽に新しき麻袋を仕立てゝ身を其裏に容れ、わざ〳〵小椋助を賴みて、ぶく〳〵川へ投込まれけるとや。

善人なりとも愚鈍は亡び、惡人ながら智者は榮ゆる世の例、合點が參らば御學び候へ、となたも〳〵。

(卄四年三月)

二人女房

（都の花 自第六十四號至第九十七號）（太陽 第三號第十二號）

上之卷

（一）

芝露月町の藤の湯とある長暖簾を推分けて。（淺くとも清き流の杜若）と出端のありさうに顯れたる女子二人。いづれも長湯に磨ける顏色は瑩々と赤く。對の高島田に髪飾も同じ好み。年長けたる方は。容貌優れて麗しく。十九ばかりなり。他は二歳も年少と見えたるが。女子には厚肉過ぎて。色さへ白からず。額の左に寄りて。薄けれども三日月狀の創痕あり。

美しき方は聲まで清やかに。辯舌爽快にして。口數多く作らぬに愛嬌具りて。人を逸さぬといふ性らしく。美しからぬ方は口重く。常に物案じ

貌なる陰性に。年齢よりは更けて年長の樣なり。

「鐵ちやん。お前の帶は彼だから可いけれど。」と舌敲して。

「可厭だねえ。私のは。衣服が好くつたつて。帶が惡けりや。依然引立ちはしない。どうか爲様が無いかねえ。」

年少のお鐵は石鹼を包みたる濡手拭にて。小鼻の傍に玉なす汗を一寸拭き。

「あの帶で可ければ貸事をしやうか。」

「然してくれゝば私の方は可いけれど。お前が窮るぢやないか。」

「私や構やしない。」

「構はない！　そんなら後生だから然しておくれな。其代お禮をするよ。そら彼の海鼠絞の半掛を。」

「屹度？」

「屹度さ！」

「また嘘かも知れないから。いつそ約束をしない方が可い。」
と呟くやうにいふ。
「可厭な女だよ。折角他が深切に上げやうといふのに。」
「でも。此間の半襟も。お流れになつてしまつたぢやないか。」
「だから彼の半襟は。上げられない理由をいつて。あんなに謝罪つたぢやないか。あの事もあるし。帯の事もあるから。今度は屹度あげるよ。」
「有難う。」
談切れて。無言にて五六間行く。
「姉さん。もう何時だらう？」
「もう九時だらう。」
と言はず語らず急足になる。姉は思ひ出したやうに。
「あの。お四季施は何方のお見立だか。華美でなし。質素でなし。質に好い柄ぢやないか。銘仙も好いねえ。一寸見ると宛然お召縮緬のやうだ

よ。」

「大層立派なものを下すつたね。」

「だつてお前。盂蘭盆と若樣の御卒業の御祝と。御祝宴の御手傳のお禮と。三件兼ねてるのだもの。」

「若樣の御卒業遊ばしたのは法律だとね。ぢや代言人だね。あんなお人柄なお方でも。代言がお出來遊ばすかねえ。」

「代言人だつて人の惡い代言ぢやないんだよ。」

「それぢや上等の代言人樣だね。」

「ほゝほゝ。樣付にしなくつても可いぢやないか。」

「だつて若樣の事を命捨にしちや勿體ないよ。言葉遣ひに氣を着けないよ。お母樣に叱られるもの。」

姉は苦笑をして。何か言はむとする時。通りかゝる男に眤と顏を視られ。少し横を向いて遣過し。

「お名前でもいいふんなら。様付にしなくつちやならないけれど。何も代言人といふのに様が入るものかね。代言人様といふと。何だか隣家の眇目の三百にも様を付けてやるやうで可厭ぢやないか。」

「さうね。」　と肚裏では随分可笑かつたやうな顔色。

此二女子は某省の極く卑いところを勤める丸橋新八郎といふ士族の娘にて。姉の名は銀。妹は鐵。容貌は羽子板の裏表。肖てはゐねど同腹にて。姉は父親肖。妹は母親肖なり。

新八郎は桐村家三代の家來筋にて。今も律義に主從の禮を執つて繁々伺候すれば。同家にても至極心易く思ひ。事ありて人手の足らぬ折は。いつも此同胞を借りて重寳するを。此方は結句有難い事におもうて。お邸へ／＼と榮譽にして吹聴するほどなれば。此度も桐村の若殿忠準の卒業祝宴に大客をするとて。例の如く手傳に招ばれたるなり。

母親はお銀の立てゐる後に廻りて。帯を結むで遣りながら。

「奧樣にお目に懸つたら、頂戴物のお禮をよく申上げなよ。」

「あゝ。」と帶揚の結餘を。帶の中へ挿みこむ。

お鐵は自身の容貌の醜きを識りて。餘り念入に化粧するを憚ばず。さればとて塗らねば母親に叱られるゆゑ。申譯のあるしに一寸々々と塗りたれば。生地の黑いが衣服を着更へたゞけ目立つて。姉とならべるとお孃樣と下女の如し。

母親は見かねて。

「鐵や。お前の白粉は薄いよ。」

「私や餘り濃いのは可厭。」

「濃くなくつても可いけれど。それぢや餘り薄くつて。傅けたのだか。傅けないのだか。知れやしない。最ちつとお傅けよ。私が今手傳つてあげるから。」

「澤山ですよ。これで。」

と急遽帶を結めに懸る。

「鐵ちやん一寸此方を向いてごらん。」

「もう澤山だよ。」

「澤山ぢやないよ。」　とお銀は手を伸して。お鐵の肩を摑まうとする。

「あれ凝然してお在。」

後から母親に引張られて。「ほゝほゝ。」と姉の笑聲に。壁を向いて帶を結めてゐたるお鐵は。一寸と此方を向くを。お銀は一目見て。

「あゝ眞箇に薄い。もつと傅けておもらひよ。」

「澤山だつてば。」

「澤山な事があるものかね。」

と母親は衝と行つて。お鐵の結懸けたる帶を捉つて。無理に鏡の前に坐らせる。

「年齢のいかないものゝ白粉の薄いのは。生意氣で下品なものだ。まし

てお邸は厚化粧だから。矢張濃くなくっちやいけないから。」

と最一層塗れば。塗られる間も頻に氣にして。鏡の方ばかり向きたがる。

「其方ばかり向いちやいけないねえ。」

と小言たら〳〵大分厚塗にして。

「さあ御覽！」

「あら。宛然妖怪のやうだ。私や可厭。」

お銀は鏡の中を見込むで。

「そんな美しい妖怪があつて堪るものかね。」

「姊さん多度おいひよ。」　とお銀を流眄に懸けて。

「そりやあ貴孃はお美しうございます。」

「あら可厭な。」　と流眄に懸け返して。

「ねえ。お母樣。ちつとも妖怪の事はありやしないね。」

とお讓らしい銀金具の。帶留をばちんと懸ける。

「白粉を傳けて妖怪なら。先刻見たやうに傳けないくらゐだつたら。なほ妖怪だ。上つ方の前へ出るのに。白粉を傳けないのは。此上もない失禮だよ。官女方を御覧な。私のやうな年齢をしてゐる方でも。みんなお化粧をしてゐるぢやないか。」

といひ〳〵火鉢の前に坐りて。煙草を吃しながら。我娘の容姿を心嬉しく眺めてゐたりしが。とんと吸殻をはたき。指頭に袖口を巻きて。

「おゝ熱い。」と額際の汗拭き。

「銀や。お前の襟は餘り巻着いてるよ。」

お銀は鏡の前へ行きて。一寸襟に手を懸け。

「此頃は拔衣紋は流行らないよ。」

「でも餘り巻着いてゝ。何だか可笑いぢやないか。鐵や。一寸此所へおいで。　下前が下つてる。」と上前の褄を少し引いて。

「懐中から手を入れて少しお引張り。あゝよし〳〵。」となほ飽かず。

二子の容姿を見較べて。
「人力車の來るまで其所へお坐りな。」
同胞は人形のごとく取繕うて坐る。母親は左視右瞻。
「まことに好い衣裳だよ。よく似合ふ事といつたら。」
お銀は大事さうに疊みたる絹の手巾を取出して。胸の邊を扇ぎながら。
お鐵の髮を見てゐたりしが。窓より來る風に鬢の毛の二三莖解れたるを
撫でつけてやり。
「今日の髮は好く出來たね。お母樣。」
「まことに上品で好いよ。」
がら〳〵と車の音の。門口に止りたるに。三人齊しく振向けば。格子戸
開きて。
「へえ。お車が參りました。」
「そらつ。」といふ聲の下。どたばた。た〳〵。

築地なる桐村家にては。晩涼よりの宴會にて。當日の上客は。伯子男の華族十餘名。外に一族藩士五十餘名。廣間の簾を高く掲げて。風を入れ。庭を見せ。葉陰の燈籠三箇所に火を入れて。星影を池水に映し。小華巖といふ瀑の前の岩陰に灯を伏せて。座敷より遙に玉なす水を見せ。椽より遠からぬ萩島の繁茂に蟲籠を忍ばせ。松虫鈴虫の聲々席に亂れて。客に扇をつかはせぬ懇待の趣向。衆人杯を片手に見曠す折から。四阿の後に聳ゆる老松の梢に十八日の月の懸りたるは。一段の馳走なり。來賓總代として某伯爵が簡單に卒業の祝詞を述ぶれば。忠準答辭をなし。續いて一族總代の祝詞。藩士總代の祝詞。之にも答辭ありて。滿場拍手の裏に表向の儀式が濟めば。席上は上客より亂れ始めて。浪の碎くるごとく。末席の方も次第崩に崩れかゝる頃。無禮講にして賑かに。とある家令の

聲懸に。此上はいづれも君の御爲討死といふ覺悟で。いよ〳〵亂酒になる。

席の末の方に柱を後にして。大禮服をいためつけて。白リネンの胴衣に黃金鎖を山形に懸け。頸の括れるやうな前折の衿に。針は黃金の浪に旭と見せたる紅玉を摑ませ。氣になるほど袖釦の煌々は金無垢の狂駒。目貫の直し物と見えたり。年配三十六七。大肥として。髮は濃く。毛頭渦卷く癖あり。口髭は束ねて取着けたるごとく。硬くして長く黑く。眉毛は小氣味よく一文字に際立ち。團栗眼に一種の光を帶びて。顏色は古りたる素銅の如し。

實印を彫りたる黃金の指環を小指に穿めたる。左手の拇指と中指と藥指との三本にて。ハヾナの太卷を輕く持ち。かの一種の光ある眼を側てゝ。始終お銀の擧動に注ぐを。隣席にゐる藩士の山口昇といふ中老漢が認めて。

「御意に召しましたか。」　と突如に囁く。
黄金鎖。黄金釦。黄金針。黄金指環と。黄金づくめの紳士は某省の會計課長にて。囁きしは屬官なり。
（御意に召しましたか。）と星を貫されて。澁谷課長は悖然。然あらぬ體にてぎろりと山口に瞳を轉じて。何とも言はずに微笑を含めば。山口は（で御座らうがね。）といふ面色で。
「あの紺飛白の……………今立ちました。彼で……………。」
と扇子の尾で指せば。澁谷は大きく空笑をして。
「まあ一盃差さう。」
と麥酒の硝子盃を山口の前に置く。
「これは。」　と一寸戴き。前列に酌をしてゐるお銀を呼寄せる下心にて。
「一寸お酌を。」　といへば。お銀が振向くと齊しく。横合からすゐす

聲懸に。此上はいづれも君の御爲討死といふ覺悟で。いよ〳〵亂酒になる。

席の末の方に柱を後にして。大禮服をいためつけて。白リネンの胴衣に黄金鎖を山形に懸け。頸の括れるやうな前折の衿に。針は黄金の浪に旭と見せたる紅玉を摑ませ。氣になるほど袖釦の煌々は金無垢の狂駒。目貫の直し物と見えたり。年配三十六七。大肥として。髮は濃く。毛頭渦卷く癖あり。口髭は束ねて取着けたるごとく。硬くして長く黑く。眉毛は小氣味よく一文字に際立ち。團栗眼に一種の光を帶びて。顏色は古りたる素銅の如し。

實印を彫りたる黄金の指環を小指に穿めたる。左手の拇指と中指と藥指との三本にて。ハヾナの太卷を輕く持ち。かの一種の光ある眼を側て丶。始終お銀の擧動に注ぐを。隣席にゐる藩士の山口昇といふ中老漢が認めて。

「御意に召しましたか。」　と突如に囁く。

黃金鎖。黃金釦。黃金針。黃金指環と。黃金づくめの紳士は某省の會計課長にて。囁きしは屬官なり。

(御意に召しましたか。)と星を貫されて。澁谷課長は悖然。然あらぬ體にてぎろりと山口に瞳を轉じて。何とも言はずに微笑を含めば。山口は(で御座らうがね。)といふ面色で。

「あの紺飛白の…………今立ちました。彼で…………。」

と扇子の尾で指せば。澁谷は大きく空笑をして。

「まあ一盃差さう。」

と麥酒の硝子盃を山口の前に置く。

「これは。」　と一寸戴き。前列に酌をしてゐるお銀を呼寄せる下心にて。

「一寸お酌を。」　といへば。お銀が振向くと齊しく。横合からすゐす

ると來て。

「麥酒でございますか。」

と壜の銃口を向けたお敵は。名もなく雜兵といふ面體。但し甲冑は目指せし御大將と同じく。此家の小間使にてお種といふ蓮葉なり。

澁谷は山口と眼を見合せて。竊に苦笑を取交はせ。餘所を向いて煙草をふかり〳〵。知つた顏ゆゑ。山口は折角酌に來たものを素氣なくもしかねて。

「お酌は實にお種さんの事だ。」

空々しい愛想に澁谷はくす〳〵と笑へば。山口も可笑くなつて。くすくす。何だか理由は解らねど。二人が笑ふから。お種もくす〳〵。

山口は左手を衝いて右肩を斜に突出し。ぬつと頭を伸して

「お種さん。」

「はあ。」と眉を搖かして顏で嬌態をする。

「あの娘ね。」　と頤で篩つて眼で見當をつける。
「どれでございます。」
「其さ。」
「お銀さん？」　といふ聲が大き過ぎたので。我を呼ぶのかとお銀は振向いて。
「何御用？」
「いゝえ呼むだのぢやないの。」
「然う？」　とまた後姿になる。
お種は聲を潛めて。
「あれで御座いますか。」
「さうさ。あれはたしか御家來の？」
「はあ丸橋といふ…………。」
「うむ。」　と反身になつて。「さうだつ。」　と膝を拊つ

「大層感心あすばしますのね。」

「なか〳〵別品だね。」　と扇子ぱつちり。

お種は手巾を口に當てゝ。　首を縮め。

「ふゝふゝ。」

「何を笑ふんだ。　え。　何が可笑うござる。」

「でも貴下は御前樣の前だと。　苦い顏をして眞面目な事ばつかりおつしやつてゐらつしやる癖に。　今夜に限つて否な事をおつしやるから…………」

「酒を飲むと誰しもかうなるものだ。」

「虛ばつかり。」　と樣子笑をする。

（三）

山口は用ありさうに眞面目になつて。

「時にお種さん。」

「はい。」　と釣込れてお種も眞面目になる。

「あの娘のお酌といふので一盃飲みたいね。」

お種はついと傍を向いて。

「多度召上りましな。」

「はゝはゝ。一盃願ひませう。美しいのに。」　と猪口を出したは。餘程御機嫌を取る氣なり。

「御遠慮なく…………。」　とお種膝の上に手を重ねて。ちんと澄す。

此所山口昇大忸怩の氣味合にて。頻りに猪口を荷にして。お種の顏色を覗つてゐる。お種は何と思つたか、衝と銚子を持つて。

「どうせ私のやうなお多福のお酌では…………。私は彼方へ御遠慮申しませう。」

腹を立ちましたよ。はい。眞個に腹を立つたんですよと言はぬばかりに。くつ〳〵と口を搖かして。傍を向いて凛然と立懸ける袂を。宜してなろか。と山口が捉へて。

「さう何も怒らんでもいゝぢやないか。」

「あら可厭な。怒りはいたしませんよ。」

「怒らんなら。そんなにぷり〳〵せんでも…………。」

「どうせ心太の柏子木でございます。」

「これは御挨拶だ。」と少禿の頭顱を撫でゝ。

「まづ其處で中和にお酌を。」と盃を出して。お種の顔を覗いて。

「實はね。あの娘の…………何といふ名だえ？…………知らない？ぢや其知らんちやんのお酌で。私が飲みたいなんぞつて。さう〳〵さうした譯ち

やないのさ。此方が。この澁谷さんが…………のお酌で是非…………。」

といひ懸けると。澁谷はとんと山口の肩を撞いて。

「怪しからん事をいふ。我は知らんのだよ。」　とどういふ氣でか眞顔に辨明する。其顔をお種が見て。くつと可笑さを飲込み。此面相ならばとでも思つたのか。但しはお銀を玩らうとでもいふ了簡でか。後を振向いて。

「お銀さん〳〵。」　と呼びかけて一寸手招をすると。

「何?」　といひながら來て。山口の正面。お種の隣に坐る。其手をお種が矢庭に捉へて。

「山口さん。御執心のお銀さん!」

「いやなお種さん。」　とお銀は差かしさうに横を向く。山口は澁谷に一寸目授をして。

「いやお銀さん。」　と透さず恥懸けると。お銀は窮屈さうに會釋する。

「一杯戴きませうかな。」と銚子を持つ。
「お酌を……………。」と猪口を出しながら。お銀の顔を瞥見に大概測量して。
「結構々々。」
一寸氣を變へ。
「澁谷さん。お銀さんのお酌といふので御一盃如何でございます。」
澁谷は故と然あらぬ顏で。冷淡に「可からう。」とばかり。なにも言はず。大風にぐつと硝子盃を差出せば、お銀は膳を斜に向けて。少し躙寄つて酌をする。
見たいと思ふ人の正面には坐るなの格言の通り。澁谷の烱々たる巨眼も。此場には平生の力を失つて。猪口を出す。壜を出す。其瞬間に瞥見したばかり。年効もなく羞かしいといふ氣味で。好加減に盃を引いて。口に持つて來て。飮みながら盃越に。可厭な眼をして睨と視る。お銀は山口の眼色の可笑らしいのを早くも見て取つて。薄氣味惡く思ひゐる箭先に

さなきだに好かんたらしい眼光の澁谷に秋波を注がれて慄然として、何となく居心の惡さに立たうとすると。お種が袖の下で手を引張つてゐて一向放さず。立たうにも立たれず。居るのは快くなし。進退維谷つて杏且してゐる。

澁谷は飲みながら是ぞ好下物といふ顔で。お銀の容貌を耽視する眼から。例の刺す如き光は射せど。それと和してまた名状すべからざる一種異樣の光の見えるは。恐らく其刺す如き光の（愛）に蕩けたるならむ。と難解く言へば謂ふのなり。

話次分頭。この席の酌人は。藝者半分に素人半分といふ調合で。藝者は新橋の精選と見えて。流石に可憐の春色も見える。素人の方は一群盡く（つぶし）といふ中で。お銀の美貌さは光明を放つかとばかり。際立つて。藝者も頻にお銀の進退には目を側てゝ囁き合ふほどなれば。無論滿座の客は現になつて。衆心一人を逐うて移るといふ狀で。一見の客も名を聞

覺えて。お銀が前でも通ると。爲懸けた談話を輟めて。「お銀ちやん！」など、溫言で呼留める。

就中某伯と來たら。眼を絲の如くして。お銀〳〵と懊惱いほどのお聲懸りで。少し御自身の前に見えぬと。酒を飲んでも甘うない。と金閣寺の大膳懸りで。頸を延ばして。「お銀は居らぬか。」と御意ある時の鼻下の寸を。玉八といふ人の惡い老妓が。杉箸を鉛直に立てゝ、遠くから測量して。高島屋の忠彌といふ身をやつて。妹藝者を笑はせてゐる。遂に此所に居る事がお目に留つて。早速彼を喚べとの御意に。お爲といふ小間使が。勅使三度に及ぶといふ始末。

「お銀さん。一寸でも可いから來て下さいよ。私が窮るわ。」　と泣聲を放つ。

「はい唯今。」　と立たうとするを。此時は山口大分酩酊の呂律で。

「まあ可いぢやないか。何。室山の御前樣のお召だ？　然う？」

とつまらなさうな顏色。ぺろりと舌を長く出して唇を舐ずり。
「あの御前も御高齢にまし〳〵ながら。いつも〳〵お助兵衛な御前だ。」
「あれ聞えますよ。」　とお爲とお種が口を揃へて注意する。
「へゝへゝ。」　と冷笑して。
「聞えるものなら勝手にお聞えなさい。」
と身體はぐな〳〵。眼ばかり据ゑて。一向多愛ない事を立派さうに云ふ。
いつかお銀が立つて了つたとは氣が着かず。
「お銀ちやん。ねえ丸橋銀子ちやん。氣を着けないと不可せんよ。あの御前といふものが。いやはや尋常ならぬ助前だからね。高い聲では申されぬが。(どうか聲色のやうなれど。誰のやら當なし。)一體華族といふものは。士族平民より一倍お好色で。お執濃くてゐらつしやる譯のもんだから。お給仕は辛いよ。ねえお銀ちやん。」　と再舌舐ずりをして。細い眼を無理に瞬いたが。

「おや不在！　不在ね。お銀ちやん。いや遁した〳〵。お前だわは。」

（四）

澁谷は翌日の退省に山口を伴歸り。客間の椽近に。マホガニイの小卓子を据ゑて。これに淡泊とした者を三品ばかり列べ。獻酬なしと定めて。小さな臺付の硝子盃と京燒の小德利を銘々に控へ。山口は葛布の洋服をば。糊にぴんと張つた客浴衣に衣更へて。紅革の裀の上に割膝をして。庭の盆栽棚に咲懸けた柘榴の盆栽をじろ〳〵眺めながら。髭を撚つて待つ所へ。主人も浴衣になりて。濡髮を拭きながら。のつし〳〵と出て來て。

「いや山口さん。貴下も冷水で一寸顏をお洗ひなさらんか。」　とどつかり裀の上に胡坐を搔く。

「いえ私はこれで結構でございます。」

「水で顏を洗ふより。これで口を嗽ぐ方がいゝですか。」

「うふ。」と笑ひながら山口の盃に盈々と注ぐ。

「これは〳〵。貴下まあ。」と徳利に手を懸けるより早く。澁谷は獨酌してぐつと一息に飲干し。

「あゝ蘇生した。貴下も早く蘇生なさい。」

と無雑作に茶碗の汁をちゆうと吸ふ。山口は盃を一寸戴いて口を着け。下に措いた手で箸を取つて。洗魚の摺山葵を醤油皿の中に摘み込むで。二つ三つ掻廻しながら。

「時に彼は眞實御媒妁をいたすのでございますか。」

「勿論願ひたい。」

「然し些と若過ぎはいたしませんか。」

「若い方なら過ぎても苦しからずだね。はゝはゝはゝ。」

「そりやまあ老婦よりは宜しいに相違ございませんけれど。どうも此家の經濟を切廻さうといふには。」と輕く首を拈つて。

「どうでございませうか。」　と尻上りに言切る。

「そんな事は構はんぢやないか。經濟というた所が格別至難い事は要らんし。二月か三月も慣るれば。誰にでも出來る事だ、」

「へえ。」　と山口は思案してゐる。

「出來んのなら白痴じや。白痴ぢやあるまい。山口さん。」

「白痴な事は。それは。那樣事はございません。」

「白痴でない以上は出來るよ。我が保證する。」

「所で貴下は宜しいと致して。いかゞでござりますか。お母樣の御意見は？」

「母の？母の妻ぢやなし。我が可ければ別に不服のある理はない。」

「然し、一應は兎も角もお相談になつて…………。」

「昨夜はさう話した。」

「御不服はございませんか。」

「母も喜むでをる。」
「左様なら一つ先方へ話して見ませう。」
「先方はどうぢやらう。承知をしやうか。」
「此方が二度目といふ所が少々何でございませうけれど。お子様はなし。御姑御様はお一人といふのですから。申分はございませんな。」
「さういふ註文にいつてくるれば可いが。」
何かふと思ひ出したと言ふ發端に。卓子の端をとんと拍つて。
「品行はどうぢやらう？」
「左様。」　と洗魚を一臠口へ入れて。もぐ／＼と何を言ふのやら全然解らず。
「なあ。品行は？」　と問なほされて。慌てゝ嚥込み。手掌で口角を横摩して。
「其點は私にも解りかねます。一つ糺して見ませう。」

「何分願ひます。」　と奥の方を向いて。「こら酒を持て來んか。」
「はい。」　といふ聲が聞えて。四十餘の中老女が德利を兩手に持つて來て。空いたのを換へて行く。
澁谷は「熱いのを。」と一本を山口の前に置き。自身も一杯注いで。半分ばかりきゆうと飮むで。椽續きの隱居所を。軒の葦簾の下から覗込むで。
「御母樣？」　と又覗いて。「一寸。」　と呼べば。六疊の隱居所に新聞を讀んでゐた。六十五六の剪髮の女隱居が。洋銀緣の目鏡の上からまづ座敷を透して。やがて目鏡を取つて。新聞紙の文鎭にして。「やつと。」と小さな懸聲で立上り。腰もしやつきりとして。座敷へ入つて來て。山口を見ると。
「よう入らつしやいました。」　と田舍訛の濁聲で。べつたり坐つて時誼を述べる。山口は急に裀をすべり落ち。はつと平伏して。慇懃に挨拶をする。

澁谷は盃に手を懸けて母親を見遣りて。
「一杯どうですか。」
「今は欲うないから又晩に。」
「少々召上りまし。」　と山口は自身の盃を干して献さうとする。
「私は晩と極めてをりますから。」　と德利を取つて。
「まあ〳〵貴下最一つ。」　といはれて山口は輕く額を壓へ。
「然し先刻から餘程頂戴いたしてをります。」
澁谷は椰子實の煙草入に銀の長煙管を添へて。雪洞を懸けた紫檀の煙草盆を母親の傍へ廻すと。隱居は背を屈めて膝の上に兩肱を持たせながら煙管を取つて。すう〳〵と二度ばかり吹いて。煙草を埋めながら。上眼で人を見る癖あり。澁谷の眼の大きくて可恐いのは。遺傳と見えて。此隱居の眼にも同じ大さと。同じ可恐さがあるが。老年に落凹むで奥の方で。ひか〳〵するだけ。いとゞ可恐くも凄くも見える。顏色は日に燒け

た澁紙の如く。顴骨高く秀でゝ。顋の先まで瘦細り。七十にも近からう
といふに髮は濃くして。目に着くほどの白髮もなく。唯老年の悲しさに
は。天邊が燒原のごとく圓く赤兀に兀げてゐる。齒は貝を含めるやうに
揃つて。一枚とても瑕のあるはなく。恐らく衆は入齒と想ふべし。年老
の髮の黑いのと。齒の脫けてないのは。いかにも憎體に見えるものなる
が。此隱居はそれに最一つ普通れて。可恐い眼といふものを控へたれば
一目して邪慳の氣が人に逼る。

山口は酒を飲みながら頻りに此相を觀て。（あゝ嫁になる身は不便だ。）と
つくゞ思つたが。（幸ひに澁谷は。此隱居の相が表はす如き性質ではな
くて。外貌によらぬ實意のある好人物であるから。嫁を世話しやうとも
いふのだけれど。あの姑は他人の我ながら氣が置けて。何となく薄氣味
の好くない人物だ。）と思へば。酒もどうやら旨くなくなつて來る。

「御隱居樣にあの御話を。」

「何かい。嫁の……」　澁谷は首肯く。
「可からう。少し若いやうに思ふけれど。な山口さん。」
「其所です。」
「何所かな。」　と言つて見て。「はゝはゝはゝ。」　と澁谷は笑ふ。
「なるほど若いやうではございますけれど。女子といふものは老易いものでございますから。」
「私なども去年までは。餘程若うござつたけれど。」
「左樣でございましたな。はゝはゝ。」
「眞箇。ほゝほゝ。」
隱居はなほ前のごとく屈むで。緩く煙管を持つて。鴈首で疊の目を横に摩りながら。鼻の孔からふうと太い烟を出して。
「私の嫁といふのではございませんから。此人の氣にさへ入つたら。私は構ひません。」

「なるほど。」
「士族でありましたな。」　と上眼で見る。
「たしかに士族で。手前と同藩のもので。」
「小身ですか。」
「私は交際つたことがございませんから。詳しくは存じませんが。」
「まゝ小身でも士族なら………。平民は不可。」　と憎々しく顰面をして首を掉る。
「何故な？」　と澁谷が笑ひながらいふと。怪しからむ事を聞くとばかりの腹立顔で。
「私は好かん。平民なんぞは。」
「今は士族も平民も無いです。」
「否。有る。」　といよ〳〵腹立つて。
「貴下が平民の娘なんぞを嫁にしたら。私が先祖へ申譯が立たん。」

と火の様になる。　餘り腹を立たしたら。　此話が○にならうか。　と山口は案じて。

「それは何と申しても。　士族の事でございます。」　と隠居の意を迎へると。

「何というても然でござるよ。」　と庭を向いて煙草を吹く。　これで座が白けて。　いづれも少時無言なり。

「山口さん。　兎も角も先方へ相談をして見て下さらんか。」

「承知いたしました。」　と盃の底にある酒を干して。

「大分頂戴いたしました。」

「まあ。」　と澁谷は德利を向けると。　其頸をおさへて。

「否。　もうどうも。」

「何のあればかり。」　と無理に注げば。　山口は盃に盈るのを見ながら。

「どうも。　もう是は。」　など〻呟いてゐる。

隱居は勃然として。ふか〳〵煙草ばかり燻らして居たが。急に吹殼を擊いて。

「山口さん。それぢや何分お賴み申しまする。緩りとお上んなさい。まだ戶外は暑うござる。」と言捨てゝ隱居所へ入る。後を見送つた山口は聲を低めて。

「御隱居樣は御立腹ぢやございませんか。」

「なあに。いつもの癖だ。」

「左樣でございますか。」と山口は隱居所を見込む。

（五）

やゝ煤けたのは去年から持越。といふ岐阜提灯を。出窓の格子の中に釣して。燈は其ばかりの三疊の薄くらがりに。蚊を拂ふ團扇の音を絶間なく立てゝ。姉妹二人行水後の浴衣姿で。肩と肩と相摩ふほどに密着いてゐる。

平生に異りてお銀は一向に冴えぬ顏色。窓外の方を眤と眺めて。團扇の柄で膝を小刻みに敲いてゐる。

お鐵は姉の顏を不思議さうに多時見込むでゐたが。小聲に。「姉さん。」と呼べど。返事なければ。手を把つて。

「姉さんてば。」

「えゝ。」　と振向く。

「そんなに考へなくつても可いぢやないか。」

「何も考へはしないよ。」
「考へてるよ。先刻から。」
推返して然ではないとも言はず。然だとも言はず。お鐵の顏を惛乎注視ながら又考へてゐる。お鐵は少し焦れ氣味で。
「姉さんてば。」　と力を入れて呼ぶと。
「あいよう。」　と（よう）を長く引張る。
「否だ。私は。」
「なぜ？」　と平氣。
「お目出たいのに那麼にお鬱ぎでないよ。」
「否な子だよ。」　とお鐵の肩を輕く拍つて。眼中には嬉しさうな色も見える。
此嬉しさうな色を見て取るお鐵の眼中には。その（嬉しさうな）を嘲るやうな色が見えて。「お目出たいのに。」と繰返せば。「否な。」とお銀の方で

も繰返す。

「何日適くの？」

「何處へ？—

「お目出たい所へさ。」　と姉の膝を一寸突く。

「否な。」　と内向いて。又考へ始める。

「眞箇に冗談は退けて。何日に極つたの？」

「何がさ。」　と手強く不知をきると。

「否だあ。」　と甘垂れたやうに言ふ。

「否だあつて。何の事たか。些も解りやしないやね。」

と恍へやうとするほど。喜色は却つて眼中で舞を跳る。

「そんなら可いよ。」　と少し激して。お鐵はわざと横を向く。

お銀は眼中の微笑を滿面に廣げて。「鐵ちやん！」と呼べど無言。「鐵ちやん！」いよ〳〵無言！　ます〳〵横を向いて。竟にはくるりと背を向け

る。お銀は二本指でお鐵の背筋をむづ〳〵やると。「あれ。」と身を顫はせて。「知らないよ。」と後様に拂ふ手を。透さず摑むで。片手を肩に懸けて。ぐつと力を入れて此方を向かせる。

「知らないよ。」　とぷり〳〵するのを。お銀は面白半分。調戯半分。

「さうお怒りなさるもんぢやございませんよ。」

とぬつと手を出してお鐵の頤の下を擽る。頸を縮めて。怒りたいにも可笑くて怒られず。仕方なしに揉潰したやうに笑ひながら。お銀の手を振拂つて。

「否。もう姉さんは。」　と顔を見てゐて。

「もうお嫁入をして。居なくなると思つて。妄に他を虐めるよ。」

「お目出たいの。お嫁入だの。とおいひだけれど。未だ決定はしないんだよ。そんな事は。」

「決定らないから心配して鬱ぐの？」

（じれむま）の角に懸けやうでもなく。何氣なしの言葉が。嚴しくお銀の感情を突いたか。流眄をして。「否な。」と苦々しく刎ね返せば。

「だつて鬱いでるぢやないか。」　となほ執念く問窮める。

「鬱ぎはしないよ。」　と叱るやうに説破する。

「さう？」　と眞面目に。おとなしく聞流して。後は双方無言。

奥には今戸燒の蚊遣猪に。炭俵の口の刻むだのと陳皮とを燻して。その烟を呉服屋の景物團扇で女房が扇ぐ傍に。新八郎は洗晒した阿波縮の沿衣に。寢ぼけ色の淺黄めりんすの三尺を前結びにして。鹽漬の古茄子ほど平坦となつた木綿更紗の座蒲團に。藻に鯉の印附の。即効紙のやうな色をした擬油團を上敷にして。胡坐を掻き。座敷の眞中に釣した小洋燈の火を借りて。赤くなつた野代の膳を控へて。鯵の鹽燒が二尾と。生乾の雷干で。泡盛をきこしめしてゐると。手水鉢の上に釣つてある玻璃細工の風鈴が。無性にチリン〱チンチリンと鳴る。

「お〻好い涼風だ。」　と女房がいへば。新八郎も「豪氣だ。」と和して向脛に來た蚊をぽんと撲つて。
「然し。申分はない誠に結構な口さ。」
「でも二度目といふのに。年齢がちつと違ひますから。」　と女房は幾分か二の足の語氣なり。
「年齢が違ふつて。幾許違ふものか。三十六だと？」
「さうでございます。」
「十九で二九の十八と。倍は違ひはしない。」
「可哀さうに。倍違つて堪るものですかね。其も初婚なら。まだ何ですけれど。」
「女子とは違ふ。男子の事だ。初婚でなくつたつて。嬰孩がないから仕合せさ。」
「二度目で。嬰孩があつて。姑があつて。加之叔父ほど年齢が違つたら。

第一相談にはなりませんわね。」

「といふがの。今時の娘はなか〳〵那樣事を言つてはゐないよ。髪の出來が氣に入らないといつて。飯も食はずに一日泣潰したなどゝいふ。お前の娘時代とは。全然了簡が別だといふ事さ。」

「いくら利口のやうでも。やつぱり十九や廿歳の處女でございますよ。阿郎。不斷の擧動を御覽なさいな。まるで孩嬰ちやございませんか。」

「然でないつて事さ。」と德利を持つと。何時輕くなつて。ちよろちよろと猪口に半分ばかり。倒にして。ぽたり〳〵と滴らして。情なさゝうな貌を。女房は横を向いて見ぬ風でゐる。

「もう少し。」と思ひ切つて德利を出す。

「過ぎますよ。また明日の事になさいまし。」

「お銀は子供でもいゝが。乃公まで子供扱にするな。もう少しだ。」

「召上るのは可うございますけれど。今夜は彼子の事で相談をしなければ

ばならないんですから　お控へなさいましよ。また過ぎると、相談も何も出來やしませんわね。」

「道理だよ。醉つてしまつて相談が出來んと思へば。控へろとも言ひたからうけれど。前祝と思つて。少し。眞のすこうしだ。これつぱかり……。」

と徳利の底を、五分ほど指で畫つて見せて。

「また後を引くと思ふと。止めたからうが。決して後を引くのではないよ。前祝だ。前祝と思へば。憎くはなからう。前言ふ通り前祝に飲むので。醉はうなぞと思つて飲むのではない。決して〳〵。いかな事があつても醉はない。あゝ醉はない。醉つた日には第一前祝に對しても濟まん理だ。別に斷つて飲みたくもないけれど。眞の前祝に飲むのだから。」

「飲みたくないものなら。浪費な事ですから。なほの事お舍諸なさいまし。」

「そんな皮肉はいひっこなし。後生だから持つて來てくれ。もう猪口に二三盃も飮まして見ろ。いよ〳〵相談が捗どる。といふのは。實は此所等に。」　と鳩尾の下を壓して。

「好い分別や文珠の智惠なんぞが。雜然小さくなつて窘むでゐるのだ。之を迎ひに行かなければ出て來ない。迎ひには誰が可からうといふと。それ酒だ。之を迎ひ酒といふ。」

と眞面目にやられて女房も可笑くなり。仕方なしのくす〳〵笑。澁々臺所へ行き。現金に少しばかり注いで來て。德利を膳の上に。印でも捺すやうに。𠀋かと置きながら。新八の顏を覗いて。

「もう是限ですよ。」

「今度は狆扱ひだ。餘のはお預けかね。」　とにた〳〵笑ひながら德利を持つて。餘り輕いのに驚いて。思はず。「ほい。」と聲を懸けて。少時考へたが。

「怪しからん。酒だと思つたら。此中に子供を入れて來たな。」
「また冗談じやありませんよ。早く吃るなら吃つて了つて。相談を決めませうよ。」
「いや。何でも子供が入つてゐる。」
「なぜで御座いますよ。」と希有な顔をする。
「なぜでも可いから。一寸振つて見な。」
女房は何の氣も着かず振つて見る。
「そら。そら。ぼつちやん〳〵。」
「えゝもう。洒落所ぢやありません。」と茶漬茶碗の糸底に載せた猪口に溢れるほど注ぎ。早く形付けやうといふ下心から。飯櫃を擔出して側に引着け。胴中を撫でゝ見たり。蓋をこと〳〵と。指頭で責皷を鳴して。短兵急に押寄せたりしても。一向落城の樣子が見えぬに飽倦むで。最後の策は。蓋を取つて。杓子を入れて。飯を捏返して。誰か實のある

人は一膳食べてくれさうなものだ。と謂はぬばかりにして見せる。其時亭主は少しも騒がず。悠然自若として傍に飯なきが如く。ちびりちびりと旨さうに。飲むといふよりは寧ろ舐めて樂むでゐる。舐めても嗅いでも。もと／＼三四杯の酒は。竟に一滴も殘らぬまでに飲盡して。虚になつた德利を名殘惜しげに膳から下して。やうやく不承々々に茶碗を取上げると。かねて期したる女房は。一番鎗と呼はらぬばかりの勢で。茶碗を奪取つて飯を盛りつける。

新八大とろんこの眼色になつて。箸どりの模樣なども餘程覺束なく。此分では食事が濟み次第　前後不覺の高鼾と女房が察して。今の内に相談を云かける。

「ぢやあ阿郎の御了簡は。お銀を嫁らうといふのですか。」

「大やりさ。お前の考へはどうだ？」

女房は默つて飯櫃に縋つてゐる。

「嫁さんに決めなさい。大した結構な口だ。まづ大磯の方に二千圓ほどの地面があつて。さ。よしか。地坪が二百三十坪で。建坪百坪といふ居宅が。自分の家作で。婢女が二人に書生が一人。お抱車で車夫が一人さ。奥には六十五になる姑が唯一人で。當人は奏任の百圓といふ身分で。よしかい。實意があつて。優しいといふのだから。此上の望蜀はありやしない。年齢も。二度目も。要つた理のものぢやない。」

「それはもう結構は知れてゐますけれど。適く身にもなつてごらんなさいましな。妾にでもなるのぢやなし。ちつとやそつとは註文もありませうわね。」

「註文があるならして見ない。どらほどの註文か知らないけれど。註文通りより除程上出來だと我は思つてゐる。十三圓の官員樣の娘に奏任の婿は。註文より過ぎてやうぢやないか。慾をいつたら際限がない。實は我も最一杯飲みたいのだけれど。かうやつて控へてゐる。お前も控へて

甚と我慢をするが可い。」
といかにも睡さうな顏を（ごろん）して。遂にばたりと横になる。今仆れたかと思ふ間に。すや／＼と寢入る。酒は是だから可厭だといふ顏で。女房は膳を片寄せ。直と夫の傍に寄つて。肩頭を搖ぶりながら。
「阿郎々々。お風を引きますよ。阿郎。」
「う〻。う。」といふ聲に。手を退けば。一向多愛なく又寢入る。
「お銀や。お鐵や。」と呼べば。二人はばた／＼と驅けて來る。
「此所を形附けておくれ。」
「おや大層な鼾だこと。」「ほ〻ほ〻。」と姉妹は手分をして膳を引く。流元に手洋燈を點ける。跡を掃く。茶碗を洗ふ。揚板を踏む。がら／＼ばたすたと騷々しい中で。新八は心持好さゝうに熟睡して。折々顏に來る蚊を現で撲く。女房は頻りに搖動かして。（もし）と（阿郎）の二三十唱へてもお通じ無しゆゑ。頸に手を懸けて。うんと引起せば。有繫に少し正

氣付いて。

「何だ〳〵。」と寢惚聲を出す。

「さあお起きなさいよ。先刻の相談はどうするのでございます〳〵」

「蠅帳へでも入れて置け。むにや〳〵〳〵。」

之を聞くと。臺所では姉妹が腹を抱へて。きやつ〳〵と笑ふ。女房も持餘して。手を放せば。又ころりと寢て。足をばたん。

（六）

子を見ること親に如かずといへど。子を見損ずるも親に如かず。女親はお銀の容色をば。たしかに實價の五倍も買被つてゐて。お銀ほど美しいものは。世間に二人とは無いものゝやうに想つてゐる。

これまでに數度の縁談も。母親が主唱に立つて毛嫌ひをして。彼でもない此でもないと皆壞した。といふのも。畢竟お銀を寶に思過ぎて。慾を乾かしたからではあるが。また一概に慾ばかりとも謂はれぬ。女親の身にもなつて見たら。いかさま十九年來の丹精。二葉から培養に懸け。雨に風に心を傷めて。やう／＼花の咲くまでに仕立てたものを。むざと手放すは。いかにも口惜しからう。世話の燒けるまでは散々世話を燒かされて。これから手助にも相談對手にもならうといふ頃に。ふいと持つて行かれては無念なるべし。又一面は。可愛くて／＼。片時も傍を離しかね

るといふが。母親が毛嫌の原因でもあつたらしい。けれども慾の方が勝つてゐたには相違ない。さて女親の理想の婿といふのは？　まづ今度の話ほどの身柄で。舅姑が無くて。年齢が二十五六で。容貌の好い。性質の優しい。自分等夫婦を親のやうに大事にしてくれる。ぐらゐの男なれば。

澁谷に就ては未だ二三箇條の不服がある。男親の方はさほど不當な思想は持たぬ。娘の價値を稍正しく知つて。此上も無い福ゆゑ。どうか纏めて。早く安心がしたいといふのを。女親の眼から見ると。何も我子を然う卑く見て。損物の强賣でもするやうに。急促つて手放したがらなくても可さゝうなものだが。男親といふものは。實に女の子には情の薄いものだ。と其とは言はねど。心中には恨めしく思つてはゐるものゝ。此縁談が頭から不服でもなく。さればとて。二つ返事といふほどでもなし。昨夜は一晩まんじりともせずに考へ明して。今朝になつて見た所が。別に

に決心が出來たわけでもなし。隨分嫁つても可い。父親も承知。當人も承知ならば。嫁つても可いやうなものではあるが。唯(二度目)といふのが氣になつてならぬ。尤も二度目といつた所が。新婚といつた所が。二度目だから女房を疎末にする。新婚だから大事にするといふ理もなし。仕立おろしの衣服でも。一度着たのでも。着心に格別の異はなし。と思案をして見れば。勘辨もなるけれども。同じ嫁るものなら。外に口が無いではなし。嫁る所に事を缺いて。二度目の所を撰るといふのも馬鹿々々しい。これが此方も二度目といふのなら當然であるけれど。何にしろ初婚で。年齡は十九で。容色が優れて美と來てゐるのだから。それに何も醉興な。二度目の所へ嫁るにも當らない。斷然嫁るまいかしらぬ？兎も角も夫が退省てからの相談と。煙草盆を引寄せて。すぱり〳〵と喫しながら。悄然母親は沈思てゐる。姉妹は彼三疊に人氣無きが如く寂然閑と繼物をしてゐる。

やがて新八郎は朴齒の下駄を曳ずつて。疾歩に歸つて來る　猪口を措したやうな五紋の紗の羽織の。どう疊むでも。鎭を置いても。自體縫が性を失つて。揉めたら些と伸びにくい皺が。最多く裾の邊に髣髴たるを。特更に折目正しく着做したるが。一心に道を急いだ所爲か。四分五厘ほど拔衣紋になつて。然のみならず背縫が二十三度ばかりも曲つて。御紋の上り藤が風に吹れてゐる。いつそ煤けたなりに委いたら可いものを。山梔子色に色揚をした麥藁帽子を。仔細らしく入口で脱いで。右手に小さく握つた手拭で。額際の汗から。ぽつ〳〵と湯氣の立つ頭顱まで。一刷毛に拭き〳〵。顏を顰めて。「熱いわ〳〵。」といふ懸聲で入れば。姉は帽子を請取つて。奥の承塵の折釘に掛ける。妹は粉の散る白鞣の朴齒を下駄箱に形附ける。鼻に皺を寄せて又。「熱い〳〵。」と呻りながら。眞裸體になると。お銀は透さず濡手拭を持つて來て。背を拭けば。老者は「げい〳〵。」と二つ三つ。いかにも胸が開いたらしさうに。凄じい噯氣を放

つ。お鐵は藍地に細万筋の嘉平治もつ。今は寄る年浪の法體で、何齋といひさうな袴を。最も鄭重に疊むで。簞笥に納めてから。辨當の包を解いて。鐵葉細工の漆醬を取出し、梅干の核を水口へ捨てに行くと。狆面の額白の隻眼の黒毛牝犬が。變に鼻を鳴らして。今にも千切れるほどに尾を掉つてゐるのを。叱々と追ひまくつて、やがて辨當箱を洗ひに懸る。お銀は父親の御所望とあつて。飯糊の一袋を餘さず擂込むだかとも想はれる。ごわ〳〵した白地の浴衣を着せる。宛然輕燒を背負うたやうだと哄と惡落が來さうなり。

姉妹は彼の相談が始りさうな氣色を見て。揃つて次へ遠慮して。針を持つと。

「どうだ？　いよ〳〵嫁るに決めたか。」　と父親の聲。お鐵は之を聞いて。姉はどういふ顏をしてゐるだらうと見れば。下を向いて。わざと一心に針を動かしてゐる。

凡そ小一時間ほども相談が有つてから。
「お銀や。一寸。」　と母様の呼ぶ聲。聞くとお銀は針を停めて。午後四時ばかりなる縹色縮を膝から推下して立起る處を。お鐵がわざと徐と顏をば見上げると。澄して。すうと立つて二三歩行きかけたが。彼事だなと思ふ心があれば。何となく改つたやうな。氣羞かしいやうな。恐いやうな。異な氣持がして。赫と顏が熱くなつて。胸が轟いて。足が竦む。母親を少し離れて。父親を遠く離れて。風入の好さゝうな。誂のむづかしい所に陣取つて。兩親の顏色を忍びやかに覗ふ樣子は。いかにも。不氣味らしい。遠慮があるらしい。麁想した下女が譴責を吃ひに呼出された。と云ふ風情に似てゐる。
母親威儀を正し。と云ふ態度で。
「お銀。」　と頗る嚴格に口を切ると。改つて出られた言葉に釣込まれして。

「はい。」とお銀も改る。

「概略は昨日の談話で聞いたらうけれど。お前も最う妙齢だし。いつまでも家に居る譯にはいかない身分だし。幸ひ實に似合はしい緣があるから。取極めやうかと思つて……。」

「やうかと思ふぢやない。取極めるのだ。」と横鎗を入れられて。

「まあ阿那。」と女房は懊惱さうな貌を夫に向けて。やがてお銀の方を見向いて。

「先方は二度目ぢやあるけれど……。」

と言ひ懸けると。父親が突然に！

「これ。直に二度目々々々といふよ。」と竹篦返しの恐い眼をする。

「でも。貴方……。」

「えゝ！」と睨みつけて。

「おれが話說をする。銀。何だ。その先方は小石川水道町でな……。」

「あれ貴方。小日向水道町でございますよ。」
「町所ぐらゐは如何でも可いわな。喧しい。」と顏を顰めて。
「小日向水道町で、澁谷周三といふ人物だ。奏任四等の上月俸といふから百圓の月給で。なか〳〵評判の好い有用人物ださうだ。住居は自分の家作で。下女部屋。車夫部屋。書生部屋。湯殿がある。物置がある。何のかのと云つて。間數が九間もあらうといふのだ。表の桝形の門から玄關まで十間もあつて。庭なぞは宏々として。立派な物ださうだ。それで六十五になる女隱居樣が唯一人で。小姑も何も無しで。當人といふのは三十六になつて。大肥した長の高い………。」
「お前お見だらう。此間お邸の御宴會の時に。見たはずだよ。」と母親が言ふ。
昨日橋わたしに來た男は。其晩醉つて喋つた山口といふ人。いかにも見覺えてゐる。其人の話を聞いた時に。欲しいといふ人も察した。おぼろ

氣に名も覺えて居るが。見たとは、どうやら鐵面しくて言惡い。まんざら見ないとも亦言惡いのは。山口が來た時挨拶に出て。先晩はなどゝ言はれた事もある。そこで。

「よく知りません。」と（よく）の字を冠せて跡を晦ますと。深く斬込む必用も無い所から。

「さうかい。」と長追もせずに母親も手を退く。

入代つて父親が。咳拂ひを一つして。

「あゝ見なかつたか。肥つた長の高い。誠に男らしい立派な人品だとよ。」

（立派な人品だとよ。）とは、お銀も少し可笑かつた。

「それに姑は始終隱居所にばかり引籠むでゐて。三度御飯を食べる時の外は。一切座敷へ出て來る事なしで。主人は朝八時から出勤で。四時頃歸つて來る。其間は用なしだ。用があつた所が。下女が二人ゐるから。奧樣は用無しで。晩に一杯飮む肴の見繕ぐらゐが役目だといふ。どうだ。

女子は十九が厄年といふが。お前は。去年劇く流行性感冒をやつたから。前厄で厄拂をして了つたから。今年が大當なのだ。どうだ。」

（七）

父親は獨り悦に入つて欣々然と話すに引換へて。有難くもないといふ顏色で。(二度目)といふ事を忘れたのか。わざと言はぬのか。何にも爲よ言はいで措かうか。と唇を蠕々させて。夫の言語の斷れるのを。待構へてゐた母親は。

「唯お前もどうだかと思ふのはね………。」

「俺が今に言つて聞かせるわな。」と壓潰すやうに言はれて。

「早く話してお遣んなさいましな。」

父親の心になつて見れば。勿論(二度目)の事も言つて聞かせる氣なれど。もし之を言出したらば。お銀が二の足を踐むかも知れぬ。そんな物を踐まれたら。此御父親大凹と躊躇してゐるのを。女房が(二度目)といのを讐敵のやうに氣にして。跟けつ廻しつ。やい／＼言ふゆゑ。もしやお銀が

惡く取つて。何か可厭な事のあるのを嫌むのではあるまいかと氣味を惡がつて。談が破れるやうなことでもあつては大變と。言つて聞かせるに決心して。

「子供等があるわけではないが。實はその澁谷といふ人は前妻があつたので。二年前に亡なつたのださうだ。二度目の家へ。此方が年齢が若くて初婚で適くといふのが。少し氣にも入るまいけれど。さうでもなければ。大分格の違ふ今度の話のやうな家へは。我家あたりからは適けるものぢやない。二度目といふのも子供でもあるのなら隨分思案ものだが。そんな面倒はないのだから。知りさへしなけりや初婚も同じ事だ。男子は三十五六で初婚のものは許多もある。初婚と思へば初婚で濟む事だらう。女子と違つて男子は二度目が三度目でも。那樣事は少しも瑕にはならない。」

お銀は話説の始終顏を下げて。一面は聞き。一面は分別。万更否でもな

けれど。（二度目）といふのが。女氣には異る事なく母親と同感で。咄嗟の間に挨拶をしかねて忸怩してゐる。

「どうだえ。」と母親に促かれて。胸は悸々。徐に顏を擡げて。まづ父親の眼色を見て。母親の顏を窺つて。また首を垂れて默然。

此處で（否）ときつぱり斷つたら御父樣が怒る。又自分にもきつぱり（否）といふほど否でもなし。さうかといつて否とも應ともいはなかつたら。父親が癇癪を發す。母親の樣子を見るのに。父親ほど乘つてはゐないらしいから。兎も角も母親を味方に賴むで。好いやうにしてもらはうと。

「私はどうでも御父樣と御母樣さへよければ……。」と言ふを速しや遲し。新八郎は衝と乘出して。

「御父樣は善いとも〳〵。大贊成だ。お前はどうだ。」と女房を見向けば。

「さうですね。」と娘の顏を見る。

「そんな生返事をするな。しつかりした所をいへ。しつかりした所を。」
と歯痒さうに言ふ。
「私は宜うございまさあね。貴方さへ宜くば。」
「えゝ。他人がましい事を言ふな。貴方も此方も要るものか。胸を聞くのだ。お前の胸をよ。」
「私は宜しうございますけれども。當人が肝心ですから。兩親ばかりが善いといつても……。」
「それだからよ。それだから當人も。今御父樣御母樣が善いならと……。」
「言つたからつて信にはなりませんわね。」
父親は頰を脹らして。
「何。信にならぬ事があるものか。」
「でも然うはいきませんよ。まあ今日は彼にとつくりと考へさせて。而して私が明日すつかり胸を聞いて見ませうから。」

かういふ事は表立つて聞いては實を吐かぬもの。と自身の舊時にも經驗のある母親の調和に。一時の壓服は後來の風波の基と。悍切つた父親も一歩を讓つて其意に從ひ。

「それぢや彼方へ行つて善く考へて見な。」

嫁入は女子一生の大事なり。可か否かは風邪氣の時に浴の分別をするとは大きに寸法が違へば。お銀は頗る案じ煩つて。二疊に還つて再び針を把つては見たものゝ。悵然として溜息ばかり吐いてゐる。胸の中では。どうせう。御父親もいふ通り。先方の身分には實に申分はない。玉の輿だと世間はいふだらう。媒妁人の山口は。お邸の祝宴の時。お金さんに私を呼ばせて。酌をしろといつた人だ。澁谷といふ人は。なるほど右隣の柱に凭れてゐた。太つた色の黑い。眼の可恐い。髮の縮れた。口髭のもや〱と生へた。あゝいふ風だから更けては見えるけれど。三十五六？　那樣ものだらう。私が十九で先方が三十五六。大分違ふけれど。女

子は更け易いから直に丁度好くなる。最う少し若いと好いけれど。三十一二……二十七八……五六なら何も申分はないけれど。さう又若くつては些の書生上りで。自分の力であれほどの身分になれやう譯もなし。年齡の所はどうにも我慢は出來るとして。それから男振だが。役者や藝人ではないのだから。男振なんぞはどうでも可いやうなものだけれど。又然うもいかない。醜いにも次第がある。同じ醜いながら。何所となく愛嬌のあるのがよく有るものだが。那樣のならまあ〳〵可いとして不承もするけれど。どう考へても彼人の目が可厭だ。何だか腹の黑さうな。えヽ誰かに似てゐるよ。えヽと誰かに……然矣。山王樣のお祭禮の時。醉拂つて佩劍を揮舞はした兵隊の眼色に宛然！ 本當に可厭な眼色だつちやありやしない。媒妁人は。實意のある。優しいことヽ云つたら外貌に據らない男だといふけれど。媒妁口だもの。何だか分りやしない。あんな眼色の人に限つて。邪慳で執念強くて。薄情でやかましやで。氣心の

知れないえんねりむつつりが多いものだ。そんな人に添ふ事は否々。一月か二月なら、機嫌も取れやうけれど。これから一生涯……。あゝ思出しても肩が凝るやうだ。けれども人は眉目より心といふから。何でも心が肝心だ。容貌はまあ彼でも可いとして。どうだらう。心が？　それがさ。邪慳で薄情でやかましいやで……とは想ふけれど。蟲も殺さないやうな顔をしてゐて。隨分邪慳な人もあるし。地主樣の隱居樣見たやうに。赤鬼のやうな貌をしてゐながら。慈悲深い人もある。さうして見れば彼人だつて優しいかも知れない。容貌は當座の花で。夫婦は相互の氣心といふから。生白い人形のやうな亭主を持つた所が。それが永久どうといふではなし。あゝ容貌の事なんぞはもう〳〵考へまい。考へまい！
それから二度目の事だ。之が第一氣に入らない。二度目だから如何といふ事もないけれど。何だか他人のお古を引請けるのは可厭だ。先方は甚麼好い家か知らないけれど。此方は十九の嫁入盛で。初婿で。年齡の更

けた二度目の所へ嫁くのはつまらない。それも此方が疵物で。他に娶ひての無いといふのなら仕方もないけれど。娶ひては世間に許多もある。それぢや二度目がどういふ理で可厭なのだといはれて見ると。かういふ理だと返答も出來ないけれど。誰だつて二度目は可厭だ。一寸譬へて見ると。古衣を買つて仕立直して着るよりは。同じ直段なら誰しも新しいものを買ふ。古衣の方が品が良くても。新しい方が着心が好いわけだ。どう考へても二度目は氣に入らない。否だと言はうか知らん？否に決めやうと思へば扨又眷戀として棄つるに忍びざる處もある。月給が百圓。家作が有つて。地面を持つて。中の上。上の下といふ生計。這麼唐縮緬のくちや／＼帯をしてゐる。丸橋の娘銀が。忽ち奏任官の奥様！なりたい。否どころではない。願つたり協つたりだ。男振が好いの年が若いのといふのは些の當座の事だ。當座より行末を考へなければならない。末の事を思へば此上もない良縁だ。と奥の手に悟入して見れば。なるほ

ど父親の喜ぶ胸中も全然讀めたといふわけ。そんならいよ〳〵適くに決めたかといへば。色氣も大有。未練も大有で。せめて並むで行いても可慙しくないくらゐの容貌の男にしたい。那ではどうもと。復分別が立戻る。

胸一つに置きかねて。妹に相談をしかけると。まづ（あの人かい）と馬蚿〳を撮む時のやうな顔をされて。妹に對しても彼を我夫はちと可慙しく。舍さうかとも思つて見る。否々よく〳〵。本當によく〳〵よく〳〵考へて見ると。依然適く方が可い。私でさへ容貌の事を左右思ふのだもの。年齢の長かないお鐵がさう思ふのは無理もない。行末を考へて見れば那樣事を言つちやゐられない。もう誰が何と言つても。適かう〳〵〳〵。

中の卷

（一）

若き女子は箸の轉けたも可笑く。笑ひ興ずる心の中にも仍苦勞は絕えずして。老けぬ間に緣附きたや。好き婿取りたや。世帶持つとも苦勞なきやうにと。金持も容色美しもいづれか身のをさまりを案じて。朝暮の憂慮とせざるはなし。思へば女子の身は夏の牡丹餅のごとし。餒易くして賣れ難し。之を抱ふる心配は實にさもあるべし。

緣は出雲の神の思召すまゝとかや。容色の美醜に由らず。身代の貧富に拘らず。持參が二萬圓お臺所をも持ち。御齡十九にましく〳〵て容顏美麗なる姬君の。二年良媒をもとめて今に几帳の陰に物思はせたまふもあれば。味噌漉に五厘が剝肉買ひに行く妾のかひ〴〵しきを。至極の世話女房と見立てゝ望めば。綿銘仙の禮服にて。車にも乘らざる輿入に埒明く

もあれば。縁は抽籤の當の知れざるに。世間の娘身を案じ。親の髮白くなりて。昨日今日空に過行くを手を空うして。氣のみは苛てど所爲なく。横町の鰹節屋に河豚のやうなる嫁の來たるさへ恨まれけり。

此國の人口男子一人に女子百人といふ比例にもあらざれば。何のかのと案ずる間に吉事の劔頭向きて。圖らざる方より持込む縁談は上々吉。願ふ所と家内愁眉を開き。前祝の鰻飯。嫌ひなものは鰌鍋と。食過ぎてか寢られぬほどの歡喜さ。鏡臺は何處で見て置いた。簞笥の扉附は今行らず。長持は邪魔もの。用に立つは用心籠なれど。彼も道具の花なれば。と深夜を知らぬ寢物語。傍に娘は寢たる風して。後來の取越苦勞。其中に小袖の染色。模樣の工夫も挿みて。嬉しさ。氣遣しさ。樂しさ。心元無さ。打混じて一塊となり。胸に幅たく込上げて。我と我心を持餘すべし。粹なる媒殿の萬事を察して。支度金百圓結納の目録に取添へ。帶代として贈り來しければ。甘露庭の落葉に降りたるばかり。兩親膽を潰して有

難がり。さあ何でも買へと奮みあがれば。所望の品を殖してお銀の嘆願其も是も一諾に承けこみ。思ふまゝなる支度出來て。約定の日を遲しと待つのみ。

嫉妬深き近所の誰彼目を側め。聞耳淸して。分外なる方へ適くさへ合點のならざるに。聞けば支度金まで出たるよし。容色美くても然ほどの代物にもあらざれば。准妻准妻。其に極まれり。日比は鐵橋を舟で渡るやうな嚴格な言ばかりいうて居ても。其は榮曜と云ふもう〳〵それは〳〵尊い有難い神樣から。運といふお使が來ぬ前の瘠我慢なり。早くお銀樣の三輪か束髮に結うて。大方旦那のお召古しを土産にして。歸寧の美しき姿が見たしと囁き合ひけるを。お鐵が聞きつけて口惜と母樣に告ぐれば。腹立てゝまた之を父親に語りぬ。

新八郞は獨り打笑ひ。捨てゝ置け。法界悋氣の仂なき長家者。陰にては大臣の事も彼此いひくさる人の口なり。そのやうな言吐す日償貸のお爪

が娘は。下水浚の鳶の彌助と腐り合ひ。金錢まで掴み出して新網に遁げ。今はさながら乞食の境涯。また合羽屋の女房めは我娘を茶屋奉公に出して。三十に足を懸けたる身に亭主も持たせず。淫樂の應報は此頃頸に吹出て病院入の不始末。他事よりは銘々の事を構ふべき身の猜忌と思へば。腹立つ處か不便といふべし。妬まるゝほどの銀の出世は。目出度い〳〵と取合ざれば。なる程と會得して。其後は又も嫁入の障礙ともならむ根も無き取沙汰を虞れ。ふつとお銀を戸外へ出さず。首尾よく荷物を送りすまして。吉日もいよ〳〵二三日に迫れば。親類へ暇乞の次手。小癪に障る近所を廻るは快からねど。祝うてくれたるものを捨も置かれず挨拶に行けば。陰言とは雲泥なる輕薄たら〳〵。お銀樣に感れと小娘引出して挨拶させし。惡口の頭領株。小間物の（じやらくら）女房はいよ〳〵憎くこそ。

前日には例規の立振舞とて。一升炊の赤飯に家内〳〵の盃事。父親は目出た

い〳〵と口にはいへど。常に酒に對ふほどの元氣は無くて萎れたる顏色。母は脆くも淚を浮べて。今日ばかり物懷しげにお銀の顏をのみ眺むれば。庭に柿の落葉する風も哀を誘ふ心地して。お鐵もしみ〴〵悲しく覺えぬ。お銀は淑かに盃を納め。これまでは長々お世話になりましたと。後はいはず俯むけば。母は堪へかねて淚を流す。父親は鼻聲にて。凡女子の身一たび人に嫁がば。生きて其家を出でむと思ふなかれといへり。他人の中へ出づるからは。むづかしからでも兩親の手許にある時とは。大分了簡を違へねばならぬ事なり。今改めて一々いふまではなけれど。第一夫を大切にし。姑をやさしくし。奉公人を憐み。他人には信を以て交はるべし。

我等もさま〴〵苦勞して。育てあげたる効ありて。此度は仕合せの出世。家の面目。此上は無き兩親の滿足なり。年寄れるものに苦勞懸けまじきやう心して。夫の氣に稱ひ。姑の機嫌損せぬやう。隨分油斷なく仕ふべ

し。尙又女房は內を治むる大役にして。家の榮ゆるも衰ふるも女房の所爲唯一なれば。華美を好ます。冗費を愼む事肝要なり。人情は咽喉元過ぐれば熱さを忘れ。苦しかりし時は憶はで。在る時の心奢り易きは身上の大毒なれば。其方も些少なる官員の娘の今日を。奥樣になりすましての後も努々忘るまじきぞ。嫁入りては澁谷周三の妻。過失あらば夫がいふべし。我娘と思うての意見も此限りなれば。疎略には聞くまいと。此時は父も淚を催しけり。

我娘と思うての意見も此限りとの言葉を。何と聞きたるか母は悲哀を强め。餘りの名殘惜さに更に酒盃を取擧げ。今一盃其方の飮さしを母がもらはんとは。其子に知られぬ親の情。こぼるゝほどお鐵が酌すれば。多しとお銀のいへるに。母樣の餘に私がと。一盃の酒に親子三人の淚を酌み交して。納を父親に献し。姉はお鐵の手を執りて。我跡にては二人分親人を大事にして、世話燒けぬやうおとなしう仕へよ。お前も身を厭うて

病はぬやうになどゝ。別れては長く會れぬか何ぞのやうに心細げなる事いうて。後は涙に濕りがちなるを。何時までも盡きじと。父親醉に紛らして小聲に謠を始むれば。其顏が可笑きとて眞先にお鐵が笑ひ出せば。いづれも笑顏は雨後の月。これぞ末吉やれ目出たし。

(二)

先方は財産家の何不足も無く。隱居樣は長持の底より白無垢の下着を出して。帶も名ある織物。今日はかゝり息子の嫁取と。一際あらたまりたる服裝にて控へらるゝ座敷へ。我等の嫁の兩親顏して罷出づべき衣裳の用意あるべきにあらず。願くは次の間にて御免を蒙りたき仕義なれど。此も禮なれば是非に及ばず。膳に列ぶ段になれば。父親嘉平次の袴にてもならず。母親柳條の小袖にても濟し難し。さりとて知人に借るべき方はなし。また世間に知れて陰言の種となるも愁けれど。娘の肩身を狹くせむには替へられじと。かゝる時の重寶は。裏の路次の口に差配の質屋が損料貸するを幸ひに。父親一走り行きて恥辱を話し。家の定紋下り藤をつけたる女小袖御座るかと問へば。縹色裏の小紋縮緬二枚襲を持合せたりといふ。

染色も質素にて間に合ふは仕合せなり。次に黒の同じ紋附の男物はと尋ぬれば。黒羽二重の中古あれど。惜き事には紋が少し違ふと亭主頭を掻く。いかなる紋かと聞くに。藤は藤なれど上り藤に大字とはいかさま持餘し物。此小袖六年の間。前後に借人唯の二人と。迷惑さうなる顔色然もあるべし。

亭主のいひけるは。いづれ御羽織御着用なるべし。さらば大字でも天字でも。見えぬ處なれば御量見なるべしと敎へぬ。なるほど。羽織だに脱がずば何の事もあるまじ。されど羽織も此方に持合せざれば。之もお宅の御厄介なり。羽織には大字の附かぬがござりまするかとあれば。亭主少時小首を傾け。損料物の中には無けれど。今月質に取りたる中に在れば。一日二日の御用ならば。御懇意の間がら極内にて御用達申すべし。されば酒汚箸の雫など隨分御用心下されたし。いかにも心得ました。今一つ仙臺平の袴をと望めば。其には至極上等ありとて。多時待たせおき

て註文の品々を渡しけるを。懷中にせし三布風呂敷の。萠黄も春過ぎて夏も茂り。秋も末。冬の初の枯草色なるを。そと廣げて大事に包み。夜を幸ひに長家の前を忍びて我家の裏口に着けば。見識るはずの犬めに吼えられけり。

此夜父親は長年の重荷を卸して草臥の高鼾。耳にうるさく寢がての母は。明日こそいとし子を浮世の潮に突放し。許多の苦勞の爲始めと。はや行末を豫想りては。また更に過去の事を喚起し。とかくに別離の暗愁胸に滿ちて。此折から目出度き心地せぬを。何故と我さへ知らず。人に奪はれて遠き國へ我子の逐らるゝやうにも想はれて唯悲しかりき。

お銀は親妹に別れむ時のいよ〳〵逼りて。銀滅金の指環を玩弄びて流元に轉がし。遂に庇間の下水に墜して涙の出るほど母親に叱られ。父親を頼みて探してもらひしが今に見えざるなど。幼稚の古蹟多き馴染の住家も今夜を見納。明日の今頃は知らぬ座敷の屛風の中と。かゝる古借家も

故郷となれが懷し。

來年は廿歳と女子の春もやう／＼過ぎ行くを悲み。此度の相談を良緣と心急かれしまゝ。たしかなる思慮もなく一圖に取極めたるものゝ。其姑尋常勝れて氣むつかしく。夫なる男も情薄くして。居辛き家なりせば如何すべき。暇取るにしても。氣に染まぬ主取りたる奉公とは譯違うて容易き事にあらず。離れてどうぞなるかといへば。どうもならで疵物で棄るべし。もし又緣切りたくも切られぬ義理など起りて。厭忌を忍び。苦艱を怺へて。荊棘の床に起臥の。世に在る思出もなくて暮さむには。一思に死なむよりなほぞ辛かるべき。

分別の上にも分別して。よく／＼添ふべき人と見立て。緣附くべき方と斷定めての後ならでは。返事は嘘にもすまじき事なるを。と思へば思ふほど身上の氣遣はしさに。後悔の汗流れて。身毛は彌立つばかりなり。惡き事のみ考へ窮めて。行く處まで行けばつ又我を愍むる意も發りて。否

々くさにもあらじ。此方だに眞實を盡し自己を正しくせむには。祈らずとても神や惠を垂れたまはむ。鬼を欺く人心も自ら和ぎて。樂き目をも見るべし。誰もかく後來を案じ人を怖れなば。世間に嫁入する女子はあるまじく。嫁入りても孫を見る母はなかるべきに。一軒の家には其々の女房ありて。同乘して花見に行くもあれば。黑くなりて倶稼するもあり。是皆案ずるほどにあらぬ證據なり。

女一代に一度は誰しも夫を持つべき身なれば。此緣夫を危みて破談にすとも。其次の緣夫にも必ずこれほどの取越苦勞はあるべきを。女子を愚痴とは恁る處をぞ謂ふなるべき。今更何程案じても悔ても復らぬ事と心を定めて。鷄の初めて鳴く頃少し交睡みしが。覺むれば小春の日影麗に。鶴も舞ふべき天と兩親に語れば。斜ならず歡びぬ。

（いよ〳〵今日）の今朝は。心地淸しく胸は隈なく霽れて。思ふ事無く考ふる事無く。唯食事の進まざるは平常に變る驗かと自ら思ふのみにて。

昨夜までは涙も出で汗も湧き。悲歎に裹まれ憂慮に惱まされ。骨も瘠せ血も冷ゆるかと疲れ果てし其悲歎も憂慮も。涙も汗も。今日を焦點なる今日となりて。我境遇の遽に一變したらむやうに。不知不識しくも心落着きたるは。何故との疑念は融けざりき。

姉と同伴も今日を納めなれば。随分中好く洗しあうて。今まで喧嘩せし回復して。後悔の種を遺すなと母親に笑はれて。石鹸垢摩朴木炭。糠袋には平素よりも多分の洗粉を仕込み。頸白粉の小蓋物。取揃へて新しき手拭に裹み。母は用あれば一足後より。二人は混まぬ中にと立出づる後影を父親見送りて。まだ一人重荷がと太息吐けば。散々に世話を燒かされ。物を懸けられて。頓て手助にもなる頃唯他に取られ。女子持つは五割の損と。母親はつく〴〵愚痴をこぼしぬ。

湯より歸來れば髮結待懸けて。御祝儀戴くばかりにもあらず。花客樣一代に一度の贖と。腕を揮へば時間も入りて。見事なる髻形。髷の形も高

等に出來て聊も言分なし。其鏡仕舞ふにも及ばず化粧急ぎて。やう〳〵首から上の仕揚りたる頃十二時の鳴りければ。それ二時には媒妁人の入來と支度を急ぎ。父親は例の羽織。母は例の小紋縮緬、借りものとは想はれぬ衣裳附由々しげに推列び。上座にはお銀が黒縮緬の目立たぬ裾模樣の小袖に。下着は鴿羽鼠地の更紗縮緬。白茶繻珍の丸帶して。帶揚は緋無地の縮緬、模樣縁の絹手巾を疊みて左に持ち。右手の遣端に迷ひつゝ。置床の前に端坐したる姿を。之が我姉かと驚く許りに見違へて。お鐵も頻に眺め入るほど艷なり。間も無く媒妁人車にて駈着け。彼此談合の間にざつと祝の盃出でゝ。時分は好といふ頃日は落ちて戸外も闇うなりぬ。

娘に附添ひて兩親出拂ふ後に。夜分お鐵一人は氣遣はしと。かねて心易きお針の老女を午後より賴みて。留主は二人の役。隨分氣を着けよ。遲くとも十時には還らむと契り置きて。人力車も揃ひたればいざと一同席

を立てば。媒妁人を先に次は父親。花嫁を取圍みて殿は母親。しづ〳〵と立出づれば。座敷の隅に物思はしき顔えて。音も立てず沈みゐたりしお鐵はばた〳〵と驅來り。姉樣と袂に縋りて泣出せば。お鎌も一足づゝ迫る別離に胸塞がれる折から。堪へかねて手巾を嚙緊め。顔を背けてお鐵の手を緊むれば。なほ泣立つるを門外には人の居るぞ。見惡しと母は小聲に叱りて引放せば。佇れたるまゝ袂を敷きて涙は歇まざりけり。せめては別離の一言と。姉は物を言はむとするに。涙咽喉に塡りて聲は出です。唯一目見返りて車に乘れば。門の外には一町內の男女皆此處に集まるかと覺えて。黑山のごとく立重れり。

（三）

馬には乘つて見ろ。人に添つて見れば。年齢は三十六であるが。醜男子ではあるが。二度目ではあるが。澁谷周三が何の〳〵可厭な譯ではない。その譯ではない譯は。謂ふに謂はれぬ譯で。之を識るものは當人のお銀。其一斑を聞いたものは獨り母親である。

半月ばかりの內に衣類が出來る。簪が出來る。黃金指環が出來る。家重代の黃金裝の一刀の目貫を剝して帶留が出來る。時計が出來る。此上は早く子供の出來るやうにと。兩親は大熱望の大歡喜。然し我女房の事なれば。婿殿は然もあらうけれど。蚊遣火の烟たき姑はどうか。と蔭ながら心配した隱居は。なるほど人附の惡い。愛想氣の無い。竹筒を藤蔓で縛つたといふやうな性である代り。萬事に無頓着な。朴訥だけに面倒入らずで。家內も無爲にして化すとは何よりなう。

旦那樣は御寵愛遊ばさるゝ。御隱居樣とのお中も至極好くお見受申せば、婢も書生も車夫も奥樣〳〵と奉り。威令自ら行はれて勢旭日の登るごとく。昨日の娘の身を考へて見れば。今日の奥樣の我身が我身ながら不思議でならぬほど不思議で。これが玉の輿かと乘つて見れば異なもの。庭は廣し。花卉果木は多し。裏には畑もある。家宅は大きくて座敷は奇麗で。旨いものも食べられる。嗚呼母樣やお鐵にも。恁した所で保養がさせたい。といふ念の起るは人情の常。近日呼むで御馳走でも爲たいと思つたものゝ。日數も經たぬ内から我儘らしいと怺へてゐれど。歸寧の時に妹に。かうだあゝだと種々話を爲たれば。是非近い内に。呼ぶとも呼ぶとも。呼ばなくて何としやうと。堅く約束したを待遠に思つてゐやう。と想ふほどなほ一日も早く呼びたい。妹の方でも來たい。母は尙更逢ひたいは山々なれど。先方は男女の四五人も使つて居る家へ。あれが奥樣の母樣か妹か。といはれるやうな服裝で行きたくない。お銀の恥辱

と。切ない思をして辛抱してゐるとの事。なるほど然う聞けば道理ではあるが。さらば澁谷へ行く晴衣は何時出來るのか。博多結城の布子か。縮緬の蔽膝ぐらゐは出來る事もあらうけれど。小袖はまづ難しい。さうして見れば姉の處へ遊びにゆくは協はぬやうなものだ。とお鐵は折々母親に壁訴訟の愚痴を吐す。

澁谷奥よりの手紙が二三通も來て。呼ぶほどの用も無いに。好い猫の子を貰つたから見に來いの。羊羹とカステラが戸棚に一杯貰つてあるから。お鐵を伴れて是非々々など〻。氣樂な事をいつて寄來してお鐵の心を挘る。もう耐らなくなつて。母樣よう〳〵。ようつてばと鼻を鳴らせば。父親が可恐い眼をして。解らない奴だとぐつと一睨。これに縮むで。陰へ廻つて。母親に摩りついて。泣くがごとく悲むがごとく。怒るがごとく怨むがごとく口說き立つれば。母親は不便骨髓に徹して。鏡の裏に虎子の金子もあらば。紙を引剝して此急場の間に合せたいほどなれば。泣

付かれる體を持餘して。衣裳の工夫に肝膽を碎いても。無い袖は振られぬで。當惑の極は吐息虹のごとく。最少し辛棒しなと。親の口から言惜さうな挨拶に。お鐵は失望して此上強請る元氣もなく。めそ〳〵と泣出す傍に。母親は硯箱に向つて。用事があつて行きかねると返事を認め。お鐵が投函に行つてポストの蓋が裂れるやうな八當。小腹を立てゝ二三日はつん〳〵してゐる所へ。お銀は右の返事を見て。隱居が親類廻りの留主を覗ひ。今日は書物だといふ夫に留主を賴み。車を飛して來て見ると。おやまあと母親は驅出て煙草盆を蹴飛ばす。臺所で水仕事をしてゐたお鐵は。妙な顏をして入口を覗けば。束髮の美しい…………。

「あら姉さん！」　と持つてゐた束藥を水瓶の中に投込み。飛着かむばかりの勢で驅着ければ。威嚴備はる奥方扮裝。悠々として立ちたまふのに拍子が拔けて。笑ひたいやうな。たくないやうな。不思議な顏をして襷を取りながら。ぴしやんと坐つて極の惡さうに挨拶する。

お銀ちやんは舊時の事。今は澁谷の奥樣。改つた挨拶をして。

「おや。お前大層髪が壞れてるぢやないか。」

「あゝ。」　とお鐵は悲しい顏をして。憤れたさうに髷を捻くりまはす。

「何處か惡いのかえ？」　と聞けど默つてゐる。

「なあに少し御機嫌の惡い事がありますのさ。」

と母親は茶を煎れながら。お鐵を尻目に掛けて笑ふと。義理に逼つて苦笑をして。お鐵は横の方を向く。

「どうしたの？」

「へゝへゝ。」　と母親はお銀とお鐵とに當てゝ。意味兩用といふ笑を爲る。

お銀も之は何か曰のありさうな。其曰は何か可笑な曰であらうと笑ひかけて。

「どうしたの？鐵ちやん。」

お鐵はくるりと母の方を見向いて。
「お母樣いはうか。」と姉を得たので勇氣日頃に十倍する。
「何だね。いはうかなんて。」
「何だよ。」とお銀に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。
「あのね。羞かしいから止しませう。」と問答の中へ母親が。
「先日はまた度々手紙を。」と橫鎗を入れる。
「何故來られないの？」とは龍の腮の珠に手頭の觸るやうな心持。
お鐵は機一發と身を硬くして。俯むいて片唾を飲むでゐる。
「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」
「實はね…………。」と母親も言出しかねて。
「お茶を。」とお銀の前へ。籐編の茶托に露根蘭の金色燦爛茶碗を載せて出せば。

「おや綺麗だ事。家の茶碗？」と取擧げて眺める。
「失禮な事をおいひなさいな。此急須も宅の品でございますよ。」
と母親大自慢で。茶碗と對に買つた急須を見せると。
「おや〳〵。」といひながら手に取つて見れば。蓋の鼻鈕の蘭の花は好けれど。葩が一枚缺けてゐるのにぷうと噴出して。急須を下に置いて吃々と笑ふ。二人は何の事やら解らず。お銀の獨して笑ふを呆れて見てゐる。
「おや御母樣。氣が着かないの？」
「何が。」といふ目前に急須を出して。
「蘭の葩が一枚無いよ。御覽なさいな。」
どれ〳〵と視て。
「おや〳〵おや〳〵。」といふ聲に。節が附いて可笑いとて。姉妹が哄と笑ふ中に。自若として母親は。眞面目に希有な顔色で。

「怪しからん事だねえ。鐵の僉相かえ？」
「あら御母樣否な。買立から私は恁いふ花だと想つてゐたら。目が惡いものだから御母樣。自分が勸工塲で欺されて來たのだよ。」
「さうかね。まあそれでも此間御父樣は頻りに捻繰まはして。どうも此鼻紐の花の恰好が好く出來てゐるといつて。大層賞めてお在だつたよ。否ぢやないかね。」といふを聞きながら。お銀は茶を一口飲むで。
「おや。お土產を出すのを忘れて居た。鐵ちやん二疊にある包を一寸。」
お鐵が取りに行つて見ると。萠黃羽二重の定紋附の袱紗の大包。菓子ではあるまいと持上げれば。下には衣類でも在るやうなり。
お銀の指揮に解いて見れば。四棹入の羊羹二折。カステラ一釜。「到來ですよ。」と出せば。
「其はまあ澤山に。御父樣大喜悅。」と母親は蕩けさうな顏をして。
他人に百圓もらつたより大恐悅なり。

袱紗の底に殘りたるは水色縮緬の羽織と。其下の一枚は。嫁入の半年ばかり前に出來た糸織の。其縞の好さといつたら。もう〳〵もう〳〵とお鐵が其時身顫をした小袖なれば。彼をどうする心算かと薄々横目を遣つてゐると。お銀は此二品をお鐵の前に出して。

「代りが出來たからお前に上げやうと思つて。」

聞くや見るや胸悸々！唐茄子と薩摩芋と芝居が。手を引かれて誘ひに來たやうな氣持がして。目の眩ふほどの嬉しさ。母親は思はず乘出して。

「お前まあ這麼に可いのかえ。代りが出來たつて不斷着にでも爲れば可いのに。可いのかい。」

「鐵ちやんのが無からうと想つて。」

「無からうの段ぢやありやしない。あの銘仙のね。彼と棒縞のと。古うい鳥籠縞の黑手の八丈。そんな物だけれど。着て出られるやうな衣は無し。實は其一條で二三日大不機嫌でね。」

「さう。何か強請つたの？」

「強請つたつて目的はありやしないけれど。之が（と自分の衣服を指して）無いものだから。折角手紙をおくれだけれど。行けないところから御父様に叱られたり何か大世話場があつて。御愁嘆の處を。鐵どうだい。否な子だよ。那麼顔をして。お禮でもおいひなさいな。」

「姊さん…………。」と何處か擽つたいといふ恰好で會釋をする。

「さう。まあ。」と大方右の如く鑑定を着けたお銀は。始めて知つたやうな顔をして。

「おや之が間に合へば。別に手離されない用事もないのでせうから。二三日の内にお出な。御母様と。」

因でお鐵の御機嫌は直る。母親は彌喜ぶ。お銀も満足する。御父様が早く退省になれば可いにと噂をしながら午餐も濟めば。また茶を煎れかへて。女同士の話は愚にもつかぬ事を。大事さうに問うたり答へたり。誰

さんが引越して了まつたから。此町内に柿のなる家はなくなつたの。襦袢の袖を色揚にやつたら。紬と違へて縮緬が來て。亭主が謝りに來た事の。唐菜は柔かいが。澤庵は刻むで鰹節を懸けたのが好きになりましたの。椽下で鼠が九つ子を產むだの。釣瓶に釣られて裏の春ちやんが井戶へ陷ちて助けられたの。一昨日初霜が降つたが御覽かい。昨夜の火事は半鐘が鳴らなかつたの。巨燵は毒だの。山の手は寒いの。雪の降る日は地面が白いの。梅が咲くと匂がするの。何のかのと話して居る內に時計がちん〳〵。

「二時かね。長話を了ましだ。」とお銀が袱紗を捻くれば。

「まあ最う直に御父樣もお歸宅だから其まで。長い事はない後一時間。」と留められて見れば、どうで今まで居たものを。會はずに歸るも氣が濟まぬ。と立かけた膝を敷いて。又何か話の種を拵へて。火鉢の側に巴のごとく額を寄せてゐる所へ。御父樣のお皈宅。

「すばらしい駒下駄があると思つたら。お銀か。よく來た。御馳走を忘たか。澁谷樣は御機嫌よしか。我も一寸上らうとは思ひながら御無沙汰ばかり。御母樣にも御機嫌好しか。お前も風も引かんかえ。結構々々。彼所に居て這麼處へ來ると。何だか鼻が支へて息が塞るやうだらう。否。彼くらゐの家は東京にも亘多は無いて。今日は何ぞ用か。御機嫌伺だと。伺はれるほどの御機嫌ではないが。いつも達者でまづ〳〵目出たい。時に久しぶりでお銀が酌で一盃飲みたいものだが。何急ぐと。なるほど。御隱居の隙を覗ひ。極内で怪しからん事だ。微行といふ洒落か。なるほど。我の皈宅を待つてゐた。遲くならん内に皈る。いや其は。はい〳〵はい。どうぞ澁谷樣に暮々もよろしくよ。はい〳〵。氣を着けて行きなよ。車は餘り駈けさせせんが可い。緩々とな。」

さんが引越してしまつたから。此町内に柿のなる家はなくなつたの。襦袢の袖を色揚にやつたら。紬と違へて縮緬が來て。亭主が謝りに來た事。唐菜は柔かいが。澤庵は刻むで鰹節を懸けたのが好きになりましたの。椽下で鼠が九つ子を産むだの。釣瓶に釣られて裏の春ちやんが井戸へ陷ちて助けられたの。一昨日初霜が降つたが御覧かい。昨夜の火事は半鐘が鳴らなかつたの。巨燵は毒だの。山の手は寒いの。雪の降る日は地面が白いの。梅が咲くと匂がするの。何のかのと話して居る内に時計がちん〳〵。

「二時かね。長話をしました。」　とお銀が袱紗を捻くれば。

「まあ最う直に御父樣もお歸宅だから其まで。長い事はない後一時間。」

と留められて見れば、どうで今まで居たものを。會はずに歸るも氣が濟まぬ。と立かけた膝を敷いて。又何か話の種を拵へて。火鉢の側に巴のごとく額を寄せてゐる所へ。御父樣のお歸宅。

「すばらしい駒下駄があると思つたら。お銀か。よく來た。御馳走を忘たか。澁谷樣は御機嫌よしか。我も一寸上らうとは思ひながら御無沙汰ばかり。御母樣にも御機嫌好しか。お前も風も引かんかえ。結構々々。彼所に居て這麼處へ來ると。何だか鼻が支へて息が塞るやうだらう。否。彼くらゐの家は東京にも巨多は無いて。今日は何ぞ用か。御機嫌伺だと。伺はれるほどの御機嫌ではないが。いつも達者でまづ〳〵目出たい。時に久しぶりでお銀が酌で一盃飮みたいものだが。何急ぐと。なるほど。御隱居の隙を覗ひ。極内で怪しからん事だ。微行といふ酒落か。なるほど。我の皈宅を待つてゐた。遲くならん內に皈る。いや其は。はい〳〵はい。どうぞ澁谷樣に暮々もよろしくよ。はい〳〵。氣を着けて行きなよ。車は餘り驅けさせんが可い。緩々とな。」

（四）

姉の來た次日に髮結が來て。明日はといふ聲懸りの所爲か。至極御意に協つた島田の出來。宛然姉樣のあの時の樣だと。後生大事に髱を劬り。蝸牛が日和を見るといふ頸狀を爲て。洗物でもさせると小桶の水に映る影を。撓めつ直めつ眺めてばかり。「それほど氣になるなら戶棚へでも仕舞つておけ。」と父親に窘められても。猶且氣になつて。竊に一策を案じ。戶棚に鏡を立てゝ置いて。隙を覗つては一寸々々見に來るといふ寸法。

「いくら。大事に爲ても寢たら形なしさ。」と母親の言つたのが。ぐつと警策になつて寢像頗るおとなしく。常よりは凡そ二時間も蚤起をして。無性に朝飯を急ぎ立て。甚だ相濟まん事だと。律義を言張る父親を。昨夜から飛付二人懸りでやう〳〵負して。病氣屆で役所を休ませの。御留守居の我一人が貧乏鬮だと。先から愚痴の出ぬ中此方から一合增といふ

擲込に。父親は醉はぬ前から口が利けずに頷いて。早御自身に德利を提げて。裏口から買ひに出られるといふ手廻しの好さ。此方も早くと。途る。着る。車が來る。乘る。走る。車の上で衣紋を繕ふやら。襟を直すやら。何を急くのか。誰に逐はれるのか。一向解らずに。母はお鐵に急かれるからなれど。お鐵は夢中で唯急ぎ散し。車に乘つてから少し落着いて考へて見ると。通魔がさしたやう。

無紋稽古の二人乘。車夫は中屆の草鞋ばきで。白地に竹に虎といふ蔽膝では。玄關まで曳込ませるには大に憚りあり。と角で下りて裙を叩き。帶を直して直と玄關から懸れば。襠の無い袴を穿きて。右の硝子に裂の入つた眼鏡を懸けた書生が取次に出て。變に訛のある聲をして。「何方から。」といひながら蛛蜘の如く踞ると。小鬢に一團浮いてゐた雲脂が。ちらく〱肩へ降積る眺望の。氣味の惡さにお鐵はぞつとして。(姉さんは疳

性の癖に。よくまあ彼を何ともいはない。」と入らぬお世話を氣に爲てゐる。

取次が引込むとお銀が。家にゐた時分は命から二番目であつた他所出の糸織に。今度出來たらしい黒繻子と更紗縮緬の晝夜帶を爲めて。生意氣な束髮に結つて微塵飾氣無しといふ頭で。肉白粉を傅けて臙脂を一寸點して。粹な粹な！父親が見たら苦い顏を爲さうな姿で出て來て。

「おや。さあ此方へ。よく早くねえ。」といひながら案内する後に跟いて行けば。四疊の玄關の次が十疊の應接間。食べたいほど綺麗な天鵞絨氈を一面に敷詰め。眞中に淺黃地に花鳥の縫模樣のある薄羅紗の卓子被を爲た圓卓を据ゑて。一間の板床に古薩摩の唐冠の香爐。幅は一蝶が浮世人物の二幅對。床脇が寢覺棚。袋棚の上には古銅の楊柳觀音。違棚には古代蒔畫の手文庫。並べて印譜二帙。白磁の匾壺には。庭のを奥樣が入れたとも想はる。山茶花が一輪。此下に古竹提梁式の菓盆に佛手柑を

懸つて、額は大小二面を相對に懸けて。一面は東湖自筆の七絕。一面は某大臣の揮毫なり。此次奥の間の正面。鋪込袋棚の下に西洋式の書棚耶蘇の厨子のごとく。此中の書籍が凡そ千圓と聞いて御母親吃驚。隅に紫檀の大机を据ゑ。其前に縮緬の座蒲團。脇に手爐。茶道具。煙草盆などよろしく。總て主人居間の體。隱居所の咳の聲にて幕開くといふ誂へ。お鐵は始終信夫が吉原に尋ねて來たといふ見得で唯きよろ〳〵。母親はまご〳〵。旋て奥方の居間に通れば。下女が黄八丈の茵を持つて來る。手爐が出る。茶が出て少時すると。隱居は羽織を着換へて挨拶に出て來る。

「此所は汚うござる。彼方へ〳〵。」と切に勸められて母親は立上る。

「貴方も〳〵。」といはれて。お鐵は何も言はずに會釋ばかりしてゐると。

銀「これは宜しうございますよ。」

「澤山御馳走しておもらひんさい。はゝはゝ。」　と男のやうな高笑をして。

「さあ。あんた。」　と母親を伴れて出て行く後影を、お鐵は睨と見送つて。

「可恐い顔だねえ。」　と極小さな聲。

お銀は何ともいはず唯莞爾。

「姉さん旦那様はお役所？」

「あゝ。」　と横を向いて。何だか耳の底が痒さうな面色でゐたが。傍に在る長煙管を取つて。

「鐵ちやん。煙草を吃むで鼻孔から出して見せうか。」　とは餘程修行を積みて。自慢の一藝と見えたり。

「馬鹿々々しいぢやありませんか。」

奥方は蚤を捕るやうな指頭をして煙草を捻つて。雁首に詰めると。ちつと

餘計の分を撈取つて。

「いゝかい〳〵。」　鷄子に手裏劍といふ恰好で。すう〳〵と吸ひ。ふうと見事に二條の煙を立てる。此處に到りてお鐵も感に堪へたか

「おや〳〵。」　と極めて賞讃すると。圖に乘り。最う一服と取懸る時人の足音。煙管を推隱すと隱居が入つて來るので。二人共慌てゝ居住を正す。

「お銀さん。御酒の支度でもなさらんか。」

「母ならば一向不調法でございますが。」

「お飲みんさらんか。それなら御膳の…………。」

「あなたはお一盃召上りまし。」

「私も一人なら預けませう。お鐵さん。ちとお出んさい。」　と捨言葉で出て行く。

お鐵はかねて姉に逢ひたい〳〵で。胸には一杯話柄が溜つてゐれど。扨

逢つて見れば昔日のお銀ちやんにあらざる澁谷の奧方は。流石に奧方の見識が附いて。自分とはまるで段の違ふ人のやうに考へられて。左右なくは撃つて蒐られず。何となく變に他人を見るやうな心地がしてならぬ。其癖姉の方では打解けて煙草の曲藝もして見せる。相互の外には他の知らぬ秘密事件に就て冗談口も吐く。お銀は依然お鐵の姉の定なれど。妹の方で氣怯がして。兎角奧齒に物を介むでゐる。其著しき證據は。何かにつけて遠慮をするやうな氣色が見える。

どうも隔心があつて眞實の妹のやうに思はれぬ。親類の娘が遊びに來たやうな鹽梅で。其では面白くないからと。お銀がいろ〳〵手を盡して此隔を打壞しに懸れど。お鐵は固く氣を緊めて。或親しい奧樣のやうに遇つてゐる。想ふに。之はお鐵の氣質がちと偏人の方ゆゑ。姉だな。お銀ちやんだなと心の中では思つても。奧樣の姿が強く眼に染みて。多くの奉公人が氣味の惡いほど唯々いふやら。其所等の戸棚を開散らして。立

派な道具を惜氣もなく取出すやうな。此宏々とした家内を自在にする威權を非常に驚くと倶に。那樣威權ある人を崇ふ念が出て。どうも狎れにくいのである。二つには。かねぐ〵兩親にいはれた言がある。姉も澁谷の奥樣になつたからは。家に居た時分のお銀ちやんと同じに思つて。仂なく狎々しくする事は決してならぬ。姉の顔にかゝる事だと。其も感化の力はあらうけれど。首には含羞が先に立つて。おのづから思ふ事も控目にして言はぬやうになるのを。お銀は不滿に感じて興無がる。お鐵の方でも逢つて見れば想つたよりは樂みが少い。

時分といふので御膳が出ると。尋常ならぬ馳走で。皿の數々所狹く。箸が戸惑して。見たばかりでも腹中が一杯になる。旋てお銀の案内で庭を巡覽り。裏木戸から畑の方へ出て座敷に還れば。食事の跡を一掃除して。人數ほど褥を敷き。前とは變つた茶道具を安排して。銀瓶がふう〱と煙を吹いてゐる。茶菓子は切籠細工の硝子の大蓋物に西洋懸物と。九谷

の鉢に象牙箸を添へて。色々の蒸菓子が山盛にしてある。隱居も同席で四方山の談話の内に車の音がら〳〵。「お歸りい。」それとお銀は急いで出迎に立つと。「あ。然うか。」といふ聲がして。椽先に現れたのは主人の澁谷周三。小豆色の小外套を被て。思ふ樣縁の反つた茶の山高帽子を冠り。荒布革の書類入の。裂けさうに脹れたのを小脇にして。一寸會釋をして次の間に入り。頭髪を撫でながら直に出て來る。

縁談のあつた時は。(あの人かい。)と顏を顰めたお鐵も。つら〳〵視るのに。我姉の夫と思ふ所爲か。容貌は惡い。惡いけれども氣障な處が無くて。いつそ武骨らしい處が却つて好い。樣子も言語も顏に似ず柔和で。氣も善さゝうな。かうして姉樣と並べて見ると。松の樹に藤が咲いたやう。容色の揃はない夫婦は照應が惡いとばかり想つてゐたが。決してさういふ事はない。男の異に生白いのと。女の美いのと伴立つて行くのは。信に見ばの好くないものだが。此人と姉さんは信に照應が好いよ。眞箇

に好いよと感心した。

三十分許愛想をして。此から宴會があるからと。挨拶をして又出て行く。夕飯を食べてから皈れと。陰にお銀が留める。陽には隱居も。此方の暇乞の挨拶を。一向取合はずにやい〳〵と抑留はすれど。今日散財を懸けるほど。お銀が姑に對して其丈心勞を爲なければならず。又實家が良くないだけに口善惡ない奉公人に陰言を利かれるのも辛し。何の彼のと母親は母親だけに氣を働かせ。若いもの丶思ひつかぬ。綿密な思慮を持つて無理に皈るとなつて玄關に出れば。達者さうな車夫が綺麗な二人乗を格子外まで附けて待つてゐる。菓子やら殘りの料理やらを。蓋の持上るほど塡めた二重箱の包を。下女が先に持つて出て。滴れ物だからと車夫によろしく賴む。

之に乗れば。往はよい〳〵還は早いで。日沒前に家に着くと。洋燈掃除で火屋を壞して。指を切つて眞損〳〵してゐた父親が。やれ待兼ねたと飛ん

で出る。

其後は天下泰平家內無事で。お銀からの手紙にも。旦那樣がどう遊ばされたの。母樣はかう仰せられたといふ愚痴も無く。それが何より結構と生家方の歡喜。此上の願は。初孫の顏を見たいのと。お鐵に好婿を娶りたいの二件であるが。女親は家に掛替のお鐵といふものがありながら。離れてゐる姉のお銀が案じられるやら戀しいやらで。火事でもあればお銀の方ではないか。風が吹けばお銀の方は寒くはあるまいか。旨い物でもあれば。あゝお銀に一口と。何かに就けて念に懸るはお銀の事ばかり。因でお鐵は。母親の（お銀〱）に聞飽きて。又かいと可厭な顏をして。私の事も適には言つてくれても可さゝうなものを。同じ胎の子でないかと少し妬ける氣味なり。母親の曰く。其は同じ子だものを。彼が可愛くて此が憎いといふ理はさら〱なけれど。お前は私の手許に居る。お銀

は遠く離れてゐればこそ。雨に風に案じられる。其はお前。親の情といふものだ。其證據には二人一所にゐた頃には。少しでも分隔をした覺は無い。一個の物を尺度を當てゝ二個に折つて。分けて遣るほどにしてゐたではないか。と切に分疏をいへば。それでも内々は姉樣の方を。餘計に可愛がつてゐた證據が。又私の方にもある。其は謂はれないけれどもなど、未だ拗る。

凭る次第なれば。儘になる事なら毎日でも母親はお銀の家に行つてゐたい。行つてどうするといふ事もなし。會つてかうといふ話說のあるではなけれど。唯行きたい。會ひたいといふ。其處が親の情かも知れず。矢も楯も耐らぬほど行きたくても。今は我子ではない澁谷の奥方。其家には主人もあれば親もある。我出店でも見巡るやうに。繁々は行きかねる。行きかねるほど意固持に念は增す。

そこで。用も無いに繁々出入は不良と知りつゝ。何とか用を拵へては出

懸ける。お鐵も一所に其都度伴れたい事は山々なれど。さうしては廉立つて遊山臭くなるから。色々に宥めては。三度に二度は留守番をさせる。それ又愚痴をいふ。御母様は一人でお樂み。つまらないのは御父様と私ばかり。私が一所ではどうせお邪魔になりませうからと泣顔をするのを。父親が見兼ねて。行くものなら伴れて行けと。家では責められる。彼方では。さしたる用のあるでもないのに。何のかのといつて好く來る親だ。とまづ隱居が顏を顰める。といふほど實際度々出入るではなけれど。姑は姑根性で。生家の親の餘り來過ぎるのは。畢竟嫁の心の鈍る原因で。何時までも生の親を恃む氣が拔けぬと。自然姑が麁末になりたがると。異に僻見を出す。母親からは之を僻見といへど。萬更僻見とも謂はれぬのである。

姑は最一つ僻見を抱く。其僻見は。起るの日に起るにあらずして。遠く此嫁の來た時からともいふべし。身分の己より優れた家から嫁は娶ふな

といふ格言は隱居も承知してゐるが。さればといつて餘り不釣合の貧家の娘を娶ふのは。家の恥辱といふものでござるよ。今は知らねど往時はと。媒妁人と周三を並べて置いて。底意を知れがしな言をいうたれど肯かれずに。お銀を娶る事に決つたものを。隱居の身で故障をいふ理もなしと目を瞑りて。お銀が來て見れば氣は着く。優しくはする。當人に言分は少しも無けれど。生家の家筋の卑いのが頗る御意に召さずして。先方は磁石で此方が鐵。いづれ吸はるゝに極つてゐると。其ばかりを苦にして。私の亡後は彼の東京辯のちやほやと世辭の好い母親が這入こむで。どういふ事をするか知れたものでないと念つてゐる矢先へ。此頃はもう其下拵か。手廻しの好い。懊惱ほど出入を爲始めたが。會計はお銀の預りゆゑ。どんな幻術も自由自在なれば。其處を見込むで強請に來るのかも知れぬ。事情をいつて泣付かれて見れば。親だもの。苦しい思をしても貢ぎたいは人情。まして財布尻を握つてゐて見れば。摑出して袂へ捻

込ませるは知れた事。十が九まで其に相違はない。金錢の事は扨置き。來る度に何か知らぬ包を提げて皈るのを。お増に聞いて見たれば。買つて置いた魚だとか。肉だとか。到來の菓子折だとか。時によれば澤庵のやうなものまで。新漬だの。味が好いのといつて持せて皈すさうだ。其奉行はお光が鼻藥を貰つて忠義立に勤めるといふ事まで知つてゐる。

其だから言はぬ事ではないに。周三もまた周三だ。美貌望みで娶つたとはいひながら。あれほど鼻毛を延ばさずともの事を。お銀がいふ事爲す事是が非でも唯々と。馬鹿になつて聽いてゐる事もないものだ。あれだからお銀も好い事に思つて精々と運ぶのだ。此家を嫁の親などに掻廻されて耐るものか。と浮世を十五年前に捨て。隱居所に籠つた姑も。政權藤原氏に皈すると見て。痛嘆悲憤の餘り。奮然被布の袂を攘げて。大いに爲すあらむといふ意氣組で。此頃は前のやうに隱宅の隅に屈むで。繪入

新聞のお家騷動ばかりを苦にしてはゐず。居間の火鉢の正面。張臂をして烟草を吃しながら。まづ嫁の擧動から奉公人の働振をじろり／＼。八方睨といふ眼色をして。何も言はずに腹の中の小言帳に委細留めてゐるといふ樣子。

恪とは知らず母親は。有りもせぬ用を拵へて來て見ると。之はどうした事。隱居どのは日暮の梟といふ顏で。まじ／＼と火鉢の正面に坐つてゐる。眼中の容體。眉間の皺の具合。いかにも尋常ならぬ樣子で。奉公人はまた心中大に憤る處あるがごとく。外貌は頗る愼む處あるが如く。常は竈の前に笑聲のするのが。今日に限りて火の消えたか。水を打つたかと想ふほど寂寥閑として。流元で大根を切る音が妙に冴えて聞える。お銀を見れば。いつもならば火鉢の前に天鵞絨の茵を鋪き。隱居所へ上げる茶でも淹れてゐる傍に。小說本の讀未了が伏せてあるといふ筋なるに。今日は臺所に自身出馬とありて。午飯の菜の指揮をしてゐる。

母親は入つて來たは來たれど。變つた樣子に氣を奪れて。ちと足が進みかねるといふ狀。婢等は「お入來なさいまし。」と襷を外しながらばたばた下坐をする。

「もうお支度ですか。」と愛想を與れてから。簡略に親子の挨拶がある。

此時お銀は餘り嬉しくない顏をする。

「光や。之が煮えたら直にお魚を架けておくれ。」と母を伴れて中の間に入り。

「此頃はちつと御機嫌が惡いのだから。」と耳語をする。

「然うかい。」極小さな聲に極力を籠めて。母親は直と居間に通ると。

隱居は一目見て。(また來た。)といはぬばかりの顏色で鰾膠ない挨拶をして。後は物を言ふのも太儀でござるといふ風なり。

此處でちやほやしてくれゝば。母親も居易いといふ譯なれど。根が格別

の用事も無くて來たのゆゑ。餘り度々來るのを變に想つて。隱居の機嫌でも惡くなければ好いがと。案じてゐる處へうんと一睨。ぐつと肝頭に徹へたのである。

然し自身が來てから急に不機嫌といふのではなし。むか腹立と兼て聞いてゐれば。何か些事を氣に懸けてゐるのであらうから。どうか機嫌を取直すやうにしたいと。種々御意に入りさうな事をいつて見れど。蒟蒻に吸瓢を懸けたほども利かず。「然やうでござるかな。」などゝ張合のない應答ばかりして寄せ着けず。忌々しい婆めと勃然とはしたれど。可愛娘の姑。姑の不機嫌の捨所は嫁の身一つ。お銀の難儀になる事なればと。目を瞑つて下から出れば增長して。遂には新聞を取つて讀始める。さほど對手にするが否なら。隱居所へ引籠むだが好さゝうなものを。どうして此處が一寸でも動けるものかとは隱居の腹なるべし。

かくまでにしても隱居に見放された母親は。此上の手段は無しと諦めた

が。お銀を對手にして談話を始むれど。例の用無しゆゑ談話らしい談話は出來ず。少しは話の無いではなけれど。其は隱居を憚る事のみなれば。母親も戸惑して此處少時默然。隱居は澄して新聞を讀む。お銀は灰に○や口や十文字を書いたり消したり。母親は鐵瓶の蓋を食指で撫でながら。湯氣の立つのを眺と見てゐたが。

「それからね。お鐵の縁談だがね。」と漸く一條の血路を開く。お鐵の縁談といつても極模糊した事で。未だ相談に來るほど出來たのではなけれど。隱居の手前子供ではなし。萬更用無しで遊びに來たと。想はれるのが苦しさに。不圖考へて。さも用あり氣に態う言つて見たのである。お銀は母親の切々來るのを。隱居が快く念はぬとは薄々知つたゆゑ。今日も亦來たのを南無三首尾惡し。どうか隱居の前へ取繕はなければと心を痛めてゐる處へ。妹の縁談とは成程親の來るのも尤な用事。何の用で來た。來ずともの事をといふ顏の隱居へ。是見よがしに。

「おや。お鐵の…………而して大概極つたんですか。」
「極つたといふほどでもないけれども。まあ良さゝうな話だから。お前にも急に言つて相談して來いつてね。また御父親が彼性急だものだから。何でもかでも今日行つて。是非話をして來いつて。突出されるやうにして來ましたのさ。」
隱居は何も聞かぬ顏で。頻に新聞を讀むではゐるが。甚麼談話をするかと引立耳で。其方にばかり氣を取られてゐるゆゑ。目はお留守になつて同處を繰返して讀むでゐる。
「さうでしたか。見合は？」
「四五日內にしやうかとも思つてゐるのだけれど。其前に少しお前に相談をしたい事があつてね。」
と言未了てわざと忸怩する。忸怩などはせずともの事なれど。これからは他聞を憚る秘中の秘密。隱居は其と氣を利かして。大方遠慮をするで

あらうと思の外。猶且悠然自若として新紙を眺めてゐる。(讀むでゐるにあらず)
母親は此業突張といはぬばかりの悔しさうな目をして。隱居の樣子を睨と視てゐる。
「さうして先方の身分は？」
お銀は此話を眞に受けてゝもゐるやうに。突込むで來るので。母親は大きに避易して持餘す氣味あれども。目顏で知らせる事もならず。爲う事なしに落着き拂つて。
「父親の上役の方の周旋で。お役所は違ふけれども。やつぱり勤吏さ。」
「それはまあ。大相好いおやありませんか。」
「まだ最う一つあるのだよ。」
「外に？」
「外にさ。其方は會社へ勤める人だが。之も相應の口さ。それで………。」

と娘ならば疊を拵るか。のゝ字を書くかといふ處なれど。母樣なればゞ雁首の煙脂を火筋で挾つて。少時思ふ處あるがごとく。遠慮する處あるがごとく。其内に雁首の掃除も出來て。すうと一服吸つて。とんと敲き。最う一服吸つて敲いても。隱居は更に蠢ともせず。例の通り新聞を眺めてゐる。

「裏の山茶花は盛だらうねえ。」と禪の問答でもするやうな。緣のない言を突然言出す。

「盛はもう過ぎて今は何も無いけれど。もう少し經つと梅がね。」

「梅は好いねえ。花はもう梅の事だ。」

「あゝ。庭の枝折戸の側の蜜柑が餘程黃みましたよ。」

「あの蜜柑がさぞ見事だらうね。」

「行つて御覽なさいな。」

「蜜柑なんぞは八百屋に列むでゐるのより外に見た事のない人だから。」

ほゝほゝ。」
蜜柑を玉につかつて此構を逃れる計略。やれ嬉しやと隠居はお銀と倶に立ちつ、隠居一人置去にして庭に出る。と、隠居は急に新聞を捨てゝ伸上り、硝子障子から二人の影を透して、
「何を談しくさるか。」と鐵瓶を下して火を撥け。手を暖るとて火鉢の縁に懸けた肘が外れて灰にすぼり。はつと思つて挙げる袖に扇られて雲のごとく灰が舞ひ立つ。
「これ誰か。増！光！」
女が駈着けて、おや／＼おつと蒲に団扇、水に雑巾。拭いたり敲いたり隠居も耐らず陣を退いて本堂に遁籠む。
二人は庭から裏へ出ながら、こそ／＼話し
「どういふものだか此頃は大変機嫌が悪いのだから。當分御母様も来ない方が可いよ。」

「何で那樣に機嫌が惡いのだえ？」

「何だか解らないけれども。何か旦那に言はれたらしいの。」

「お前にも辛く抵るかい。」

「何。別に。辛く抵つたところが悖はずにそつとして置くから構ひはしない。誰が來てもあゝいふ佛頂な顏をしてゐるのだから。御母樣も來れば側杖を食ふから。當分來ない方が可いよ。」

「あゝもう懲々した。來やしないよ。ぢや別に用も無いのだから私は歸るよ。」

「まあ御膳でも食べて。」

「あの目で睨まれて吭へ通るものかね。」

「ぢやあお歸りか。」と帶の間から懷中物を出して。紙幣を一枚紙に包むで。

「御父樣に何か。」

「おや然うかい。」

と氣の毒さうに請受る。

(六)

歸途に母親獨以爲く。隱居の今日の不機嫌はどういふ理由であらう。銀が何か氣に入らぬ事をしたのか知らぬ。さうも想ふけれど。聞いて見れば旦那に何かいはれたらしいといふから。さうかも知れぬ。あゝいふ風の姑だから。我は親だよ。大事な御母樣だよ風を吹かし過ぎたので。旦那も勃然として何とか言ひなすつたのが氣に障つて。一同に八當りのお相伴をさせるのかも知れぬ。一同のお相伴は兎も角も。私にまで當る事は無からう。私を何だと思ふのだ。馬鹿々々しい。私は銀の親ぢやないか。銀の親なら周三樣にも親だ。さて見れば隱居とは親と親同士で同等の位ぢやないか。それでも娘が世話になると思ふから。一段下に出て御隱居樣々々々々々といつてやれば好氣になつて。他を目下に見て大きな顏をしてゐる。何の事た！

娘が可愛からこそ腰を卑くして。月に一度でも行つてやるのだ。何のあの佛頂面に用でもある事か。もう／＼もう／＼もう用があらうが。何があらうが。行つてやる事ちやない。馬鹿々々しい。

憶起しても腹が立つ。今日の始末は何だ。我が話を爲懸ければ。何處に火事があるといふ顏をして新聞を讀みくさる。母親が娘に會ひに行くからは。色々話のあるのは知れた事だ。側に他人にゐられては骨肉同士の話は爲惡いぐらゐは誰でも知つてる事だ。それが解らないくらゐなら山出しの田舍ものだ。おゝ田舍ものだつけ。第一隱居といふものは。隱居所へ引籠むで。猫火鉢にかぢりついて。新聞でも見てゐれば可いのだに。妙にしやく／＼り出して奈何いふ意だらう。

噫それにつけてもお銀はさぞ辛からう。私なぞは半日ゐても這麼に腹が立つて悔しく／＼て耐らないのを。御母樣々々々々と何事も風の柳に受流して。機嫌を取るといふのは大體な事ちやない。それにあの娘は鐵と比べると。

氣の快濶けた發揮々々した娘であつたが。彼所へ嫁つてから大層落着いて。落着いたといふより何と無く鬱いで。始終考事でもしてゐるやうな鹽梅で。家に居た時分のやうでないのは。勿論一家の主となつたのだから然うもあらうけれど。一つはあの隱居に何のかのと苛まれるので。自然と氣が弱くなつたのに違ひない。なるほどこれだから世間では姑のある家へ娘を遣るのを否がるのだ。尤だ。無理はない。

那樣事をいつちや何ぼう何でも濟まないけれど。あの又隱居が來年や再來年お目出度くなるやうな格ぢやない。もう六十六になるといふのに。髪は茸々として皺寡で。腰は屈まず目はたしかで。馬のやうな齒で澤庵の厚切を咬るから。總入齒だと想つたら入齒は唯四枚だといふ。第一骨太の嚴疊造で。ぼちや／＼と水澤山とは因果な事ぢやないか。まだ十年はあの娘も苦勞を爲ることだらう。

「おや／＼行過ぎた。車やさん二軒後の家だよ。」

「あら御母樣！」 とお鐵が格子を啓けて待つと。氣の無い聲で。

「今歸つたよ。」 と毛絲細工のシオールを渡す。之はお鐵の所有品なるを。今日は寒いからとて時借をしたものと知るべし。

「御母樣。午飯は？」

「未さ。」 と五音の調子は頗る不平は帶びてゐる。

「さう。なぜ食べて來なかつたの。」

「今日はそれ所ぢやなかつたよ。あゝお腹が空いた。お前もう濟むだのかい。」

「今し方。一人法師でおいしくなかつたよ。」

「何かお菜を拵へて？」

「魚屋がね。大變味美から味噌煮につてね。鯖を置いて行つたから味噌煮にしたよ。本當に旨い鯖。仕度をしやうか。」

「あゝ早く爲ておくれ。」

おゝ餒い〳〵といひながら帶を解いて。暖めてある不斷着を取らうとして火燵を啓けると。櫓が焦げて黄臭いほどの火氣。

「まあ此は！」　と慌てゝ火箸を取つて。おや〳〵おやと埋けながら。

「お前まあ此火はどうしたんだねえ。襦袢が焦げやしないかね。」　と衣類を探すと櫓の上には無くて。辷落ちて壁の方に固つてゐる。

「何だねえ。鐵。」　と不承々々に拾ひ上げると。

「何。どうしたの？」　と臺所から覗いて。

「あら落ちてゐたの？」　ふゝふゝふゝと笑ふ。

「笑ひ事ちやないよ。おゝ冷い。ほう冷い。」　と面を顰めながら幾度も身顫ひをして着て仕舞ふと。火鉢の側に坐つて先一服。

其内にお鐵は効々しく膳立をして。母樣の前に据ゑて。脱捨てゝある衣類を疊みに懸る。

「御母樣。姉樣は何をしてゐて？」

「別に何もしてゐなかつた。」　と飯に茶をかける。
「何とかいひましたか。」　と手を停めて母親の顏を見込むで。
「別に何もいひはしなかつた。」
「あら可厭な御母樣。」
「どんな樣子だつたか些と話をなさいなね。」
「別に話をするほどの事はなかつたよ。」　と鯖の骨附の肉を一口入れて。茶漬を挿むで又一口入れて。其箸を茶碗の中の茶でさら〳〵と濯いで。木地塗の二箇所ほど剝げた箸函にしやんと納めて。襟の小楊枝を拔取つて。「大層おいしい鯖だつた。」と膳を少し前へ押遣り。物思はしい顏をして齒を鑿つてゐる。
お鐵は此體を見て合點がゆかず。
「御母樣何だか鬱いでゐるのねえ。いつも姉樣の處から歸つて來ると御機嫌が良いのに。どうしたの。」

之を聞くと母様は懵然疊を瞶めてゐながら。一寸苦笑をしたばかり。直に又眞面目に復つて思案してゐる中に。啣へてゐた楊枝をぷつゝり前歯で咬折る。

どうも異しな様子を氣にしてお鐵が又訊ねる。

「どうぞしたの？　御母様。」

「なあに。」と素氣の無い應答で拂はれて。お鐵は希有な眼色で母親の様子を測量しては見たものゝ。一向理は解らず。但不思議な事だと腑に落しかねてゐる。衣物も羽織も帶も襦袢も疊むで。簞笥に藏はうと。起つて火燵の側を通ると。紙に包むだ物が遺ちてゐるから。拾つて開けて見ると貳圓札が一枚。一寸小首を傾けて。背後へ隱して。御母様と呼び懸け。

「遺失物をした覺はないの？」

「遺物？」と母親は少し考へて。あゝと兩手で火鉢の縁を拍つて。

「あるとも。大事なものを。」と出して見せる。

「無料は還さないよ。」

母親は笑ひかけて。

「何所に遺ちてゐたえ。」

「御母様是はどうしたの。」

「どうするものかね。私が持つてゐたのさ。」

「ほゝほゝほゝ。不可ませんよ。隠しても。」

「何を隠すものかね。」と極眞面目。

「不可ませんよ。一寸此芳芬を嗅いでごらんな。」

と包紙を母親の鼻頭へ持つて行く。嗅ぐと香水の芳芬がする。

「好い匂がしませう。」

「するとも。」

「いけませんよ。隠しても。」

「何だねえ。」　と母親は叱るやうな目で視る。
どんな眼をしてもお鐵は一向平氣で。(いけませんよ)を又繰返して。
「これはね。これは。ホワ……ホワア……ホワルと薔薇といふ舶來の香水の匂で。姉様が手巾に布けるのに持つてるのをちやあんと知つてるますよ。」
四相を悟る重忠が。といふ鹽梅で。屹と見えをするほどお鐵の仕濟し顏。
御母様ぎつくり。殆ど已むことを得ず。
「さうかねえ。」　と苦笑。
「でせう。」　とお鐵は意有るがごとく首を傾げて。母親の顏を覗きこむ。
「奢らうよ。」
「何を。御母様。」
「何でも好いものを。」

「何にしませうね。」

お鮨にせうか。お蕎麥にせうか。いや〳〵直と飛んでお鰻にせうか。鰻が一番好いのだけれど。餘り增長つて熱を吹くと。叱られるに違ひない。それぢやいつそ鰻に似てゐる骨拔鰭にせうか。お刺身も好いし。蒲鉾を買つて附燒にするのも隨分旨し。

母親は舌の痛くなるのも忘れて思案煙草を吃しながら。切に今朝の無念を思返してゐる。

お鐵は一思に鰻飯と決めて言出して見やうか。「何だね。そんな大相な事を。」と遣られはしまいかと暫く躊躇つて。任よと遂に切出す。

「御母様。」　とまづ呼むで見たれど一向返事無し。

「御母樣。」　と最一度。それでも返事なし。

「一寸。御母樣。御母樣てば。」　三度目は一寸といふ冠とつて。てばといふ沓付で。餘程念入に呼むだれば。通じた代りに。「何だね。」と思つたよ

り手嚴しい挨拶。其聲斜ならず不機嫌なり。

お鐵は愕然として默然。右の食指で左の掌に。鰻のうの字を續け樣に幾許も書いた跡を摩りながら。悄返つて母の樣子を視てゐたが。旋て火鉢の傍へ擦寄つて。また。「御母樣。」と極小さな聲をして小當りに當つて見ると。從前の通り墨々として深く思案に暮れてゐる。火鉢の緣に持せて啣へてゐる煙管を見ると。雁首は疾に殼になつてゐるのを夢中ですぱすぱやつてゐる。お鐵はそつと煙草を撚つて塡めても知らず。火を挾むで點けたのも知らず。例の通りすぱ〳〵とやると。卒に來た煙を吸過ぎて。

「えへ〳〵。あは〳〵。」ほゝほゝほゝとお鐵は笑ひ轉ける。

「何を爲たんだねえ。」と猶且煙草の事は知らず。正氣に復つた處が機會と。お鐵は奢つてもらふ註文をすると。

「大業な事をいふぢやないかね。」と察しの如く御採用がない文句なれど。其裏自ら調子の弱い處あつて。此處から擊つて來いといはぬばか

りの隙を覘つて口説立てれば

「まあ御父樣に伺つて。」　と意あるがごとく。遁げるごとく。然はさせじと追窮めて。到頭唯といはせて。

「まあ嬉しい。」

(七)

豐作には一粒万倍。手習には一字千金。毛詩には一日三秋。軍記には一騎當千。一の數を百。千。万に當てた語は幾多もあるが。茲に小姑は鬼千疋と唱傳へて。誰が割出したものやら。不思議な數理がある。愚案ずるに。何樣小姑といふものは。嫁の身にしては鬼千疋でもあらう。尤も雪は白いに極つてゐながら。年代記には紅の雪降るといふ事もあり。仙家の雪は紫としてあるから推して見たら。中には子姑でも佛一體といふやうなのが無きにしもあらざるべし。石といふものは重いに定まつてゐても。氣紛れにおらは水に浮いて見たい。と輕石といふ奴があるのも同じ理窟かも知れぬ。けれども雪といへば白い。石といへば重いに。人が合點する其理で。まづ小姑といへば。嫁たるものは蛾眉を顰めて。あゝ鬼！と念ふが多く。實際もまた其が多いやうに見受けられる。

同種の人間である小姑が。何が故に鬼であるか。其又鬼の一疋ならず。百疋ならず。千疋であるかと考へて見るに。凡そ嫁といふ身上は殆ど一種の居候で。かの雨だれほどに戸を叩いたり。鐵納戸の茄子を食つたりする軟骨動物のごとく。食無魚と出無車が愚痴の種になつて。女主人の不興をおそれみ／＼。氣輕に水を汲むで。言はれぬ前に障子の切張をするぐらゐで。責任が盡せるやうな生易しい食客とは譯が違つて。所謂任重うして道遠く。苦勞が多くて不覊の寡い居候である。

はて何故といつて御覽じろ。第一に夫といふ。護謨の釣竿のやうに馬鹿に取扱ひにくい物の世話をせねばならぬ。鶯のやうな小鳥一羽飼つてさへ。少し放神してゐると。さあ事だといふ始末になる。況や萬物の靈長をやで。其手の懸ること。世話の燒けること。骨の折れること。氣の傷むこと。髪結さん少時と髪を握り。あれお歸りと哺を吐くなどは。恐らく九牛の一毛であらう。

其で又貞女は兩夫へ見えざる事になつてゐて。女大學にも唐土には嫁を歸るといふ。我家に歸るといふ事也として。愁くとも後は寢易き蚊遣哉など〻。どのやうにも辛抱をしろ。死ぬとも夫の家を出るなとまでに訓へられてある。そこで針の莚に坐らせられてもと慄へて。三界に家無しと諦めねばならぬ事にしてあるから。一種の居候で。また一種の終身懲役でもあらうか。

然し夫の無理とか。姑の非道とか。其外添遂げ難き事情があれば。無論離縁も取らうし。家へも還る。其をあの女が違つてゐるといふものは。一人も無い。けれども。其身の不幸とはいひながら。去られたにせよ。おん出たにせよ。兩夫に見えるといふ事は。兎にも角にも女の身には此上もない玷であるから。誰も死ぬの〻次ぐらゐに可厭がる。さほどに可厭がる離縁沙汰であるから。自家から求むるやうな事の無いやうに無いやうに。と寢覺にも思の種にして裝を愼まぬものはない。愼む心になる

が常情であらう。愼まぬのも隨分ある。其は人の屑といつて。紙屑。絲屑。鋸屑ほども役に立たねば。好くしたもので買手もない。扨嫁といふものは。これほどに爲なければならぬものであるから。無能無効な猫の拔毛のやうなものかと思へば。寡夫に蛆が生くといつて。一家内には米鹽薪炭の筆頭たる大事の品物で。家内の女王であるから內君といひ。內寶といふから寶でもある。さほど有難くもまた尊き品でありながら。給金を貰つた例もなく。褒美を戴いた話も聞かぬ。而して居候のごとく。懲役のごとき。境界に墮されて。花散りて空しく梅法師となり。嫁古うして始となる頃。やう〳〵樂をするのでもあらうが。其頃にはもう戒名が出來てゐる。

右の通り嫁の身は夫一人で十分で。澤山で。精一杯で。之でも如何かすると。揮舞しきれない。いかにも人間一匹の始末をするのであるから。此取扱は隨分至難いには相違ないけれども。先方も一人。此方も一人。

ところで先方は夫で此方は女房である。天の配劑妙なる哉は此處等であるか。男女の間には愛情といふものが天然と出る仕掛になつてゐて。此天産物の脂が兩性の間を和げて。軋轢を遏めること請合の妙藥に出來て。歌にも番ひ離れぬ鴛鴦の。詩曰死爲同穴塵。まづ恁云ふ格に行く譯のものになつてゐる。因で此愛情といふ和合劑の脂が。始は水のごとく。後にはとろ〳〵になるほど多量に分泌されると。夫婦二體が粘着いて。其から其上に脂が凝まつて粉衣を被けたやうになると。どれが夫の鼻だか。どれが女房の口だか分らぬやうになつてしまふ。此時を二身同體といつて。彼も無く我も無く。夫の心は妻の心。今日は花見に行かうか。向島へね。其が可。お酒はおよしなさい。うゝよさう。と恁云ふ場合には琴瑟和合の關々雎鳩のといふ語などは已に迂こしい。

百人が百人恁う行きはせぬけれど。恁うもなるべき特効のある脂であるから。嫁が夫に事へるのは。主人に事へるやうなものではない。よし甚

麼ものであつたにした所が。女蘿非獨生であれば。賴む喬木に搦むで、其惠を受けるだけの義理はせずには置かれまい。夫一式の世話は女房の役目である。それくらゐは固より覺悟の前で嫁にゆく。

然し。また攻撃するやうで恐入るが。姑なるものは。實に贅肉さ。贅肉といふは嫁たるものゝ味方をしていつた言で。道をいへば夫の母であるから。則是我母で。贅肉とは勿體ない。大した尊像ではあるか。彼と我との間には愛情の脂(夫婦の和合劑)といふ代物が湧かないから。何處までも心は他人で。此他人の氣を拔くには。例の脂より外に藥がないのだから爲樣がない。で。他人といふものは。離れてゐると大相具合が好く。あの人はと慕はしいのは。舞臺の上で役者を見ると同じで。近いて見ると。大星力彌に皺があつたり。中將姬に青髭があつたりする雜風景は免かれない。缺點が見える。襤褸が出る。口論もすれば摑合ふやうな事にも及ぶ。其中にも女は。豚肉に蟲のゐるごとく。僻見と嫉妬と意地惡の

三毒分を含む有機物なれば。女の字を二つ書けば（あらそふ）。三つは誰も知る（かしまし）で。途上に娘の行合ふのを見てゐると。まづ相對してゐる内は。お姫樣が花道に出たやうな狀で。擦違ふかと思ふと。双方の首が同時に捻れて。髱の毛筋が通つてゐないとか。木履が何寸減つてゐるとか。精細に觀察して。やうやく得心して別れる。

此執念の可恐しさは。女難といつて男の相に表れるほどの邪氣を持つたものである。これほどの可恐しいものが。此度は不思議な御緣とはいひながら。一家内に落合ふのであるから。嫁姑の間の四合行かぬのに論は無いといふべし。これがもし同等の權を持つたことなら。家内は修羅の巷。各の得手々々で。舌戰もあらう。組打もあらう。目覺しくも又淺ましいであらうけれど。それ姑は母といふ御旗を飜して控へたるがゆゑに。嫁は百步を讓り。三舍を避けるは。敢て其威を懼るゝばかりではない。南方深く不毛の地に入り。孤軍糧竭きて夜胡笳の聲を聞く有樣であるか

ら。心細いことは夥しい。援兵と頼む夫は。敵が母者人の御事であれば。弓を彎くことが協はぬ。それでは更に後楯にはならぬ。こゝが嫁の窘む所。姑の悍る所で。今は心安しと鎗襖を造りて。無二無三に突蒐る。嫁の方は何時も敗走して。小座敷の隅に匿れて。しく〳〵泣寝入に事が極つてゐる。

といつて。姑が何處のも無理といふのではなく。嫁にも落度はあらう。あらうから姑の氣にも入らぬといふ話になるのだが。我子の非は見えず。他の子の德は見えぬ親心で。嫁のわづかの過失は。精細に眼に入るところから。自然疎ましくもなり。憎くもなる。麁想があつたから言つてやらうと思つても。他人だから先々と控へる。其控へる勘定が段々溜つて來ると。胸がむか〳〵爲だす。いよ〳〵爲る事が癪に障る。不和の基となる。

其處までに到つては回復のなるものでないから。と嫁たるものは此禍を

末然に防がむ爲に。まだ來て間もなく。姑も物珍しく。私の内も嫁が出來まして。と吹聽がてらに風呂へも連れて。[illegible]御母樣お危うございますなどを言はれると。無性に嬉しくなつて。まあ〳〵雪のやうだと背を無理に流してくれる時分から。第一に機嫌を損せぬやうに。落度の無いやうに。お氣に入られるやうにと勗める。此氣苦勞が業に一通りのものでない。加ふるに主任には夫といふものがある。二兎を逐ふのであるから難い。然し其をも難しとせずに勤めなければならぬ身上だから。大抵の俠やお俐は尾鰭を動かしもせず。俎板に載せられた鯉のやうに。唯恨めしい顏をして。責苦に遇はせる人を横眼で睨と睨むばかり。これほど可哀さうなものはない。其でも姑の意は得難くて。半歳一年の間には機嫌も損ねる。尻尾も捉まる。やつさもつさが起る結極は。母親の貯金と嫁の身はいびられる事になつて了ふ。

凡そ女と生れ。人の嫁となるものは。前世いかなる宿業のありしかは知

らねど。かくまで苛まれたら大方の罪は消滅しさうなもの。せずば社會が相談の上で帳消にしてやつても可いわけなのに。最も罪の深かりし女中衆でゞもあるか。此大姑の上に小姑といふ小附のある重荷を背負はされる御方がある。此小姑が小敵と見て侮るべからずで。姑の隱目附を勤めて。嫁の擧動は細大洩さず密告する。何日の何時頃お客へ出す茶菓子の何を撮むで。二口半に食べた事から。旦那に强請つて蒔繪の櫛を買つてもらつて。用簞笥の何番目の抽斗の何邊に入れてある。嘘と思ふなら持つて來て見せませうかまで附言する。此中に種々潤色をして。姑が氣を惡くするやうに話すこと尤も妙なり。

之が又どういふ理であるかといふに。例の豚肉塊に外ならずで。この嫁が幅をする樣に見えて。おのれはいはゞ厄介物。と巽う邪魔にするのが氣色に障る。といふ僻見から面が憎くなつて。返報がしたいにも力の及ばぬ爲に。虎の威を假りやうと御注進をやる。此注進が私怨を帶びてす

ることゆゑ。姑が自身に見たよりは一層利が強い。で。單嫁の非を訐く
ばかりでなく。私が恁された那された。と陰ではどのやうにか小突廻さ
れる事を情なさゝうに哀訴するから。親子の情で之が又一層利が強い。
薪に油を沃がれては一大事と思ふから。目下ながらも嫁は待遇を善くし
て。無理も聞き。我儘をも通してやれば。其では此千疋鬼が滿足せずに
又其上を望む。望む慾が滿されなければ御注進で困らせる。困るから其
慾をも滿してやると。增長して其上々々と募らす。我に法律なくして彼
に制裁ありと頼むから。其兇惡は鬼といふより外はない。一疋の鬼では
恁う手酷くは行くまいから。鬼千疋！と嫁は怖毛を震ふのである。

扨爰に哀れを止めたのは澁谷夫人銀子で。彼は尋常ならぬ（むづかしや）の姑を持つてゐるが。姑は然したる事もなかつたのが。月日の經つほど箔が剝げて。おひ〳〵に木地が見はれて來る。此頃の樣子では。素人畑の胡瓜を見るやうに。姑の心が變に曲り出して。餘程持餘しの態。之さへあるのに。鬼千疋の小姑が突然出現した。小姑のあることは媒妁の話には無かつたものを。と今更いつた所で爲方がない。

其小姑といふは周三の妹でお滋といつて。熊本鎭臺の工兵中尉の城井泰造といふもの丶家內である。なるほど媒妁も話さなかつた理。白歯で家に居るではなし。餘所へ緣附いてゐた所で。東京にゐるのではなし。遠い熊本に世帶を持つてゐるのであるから。此鬼とお銀との關係は。娑婆の人が牛頭馬頭を地獄變相の圖で見るくらゐのものであらう。これなら

ば呵責に遇ふ理がないから。有つても無くても同じ事である。

ところが。此度城井中尉は東京詰になつて突然出京すると。旅裝束で直入に澁谷へ飛込むで。居宅の見當るまでと捆の繩を解いて。何年ぶりといふ親子の對面であるから。三日でも四日でも車轄を炙るやうに。隱居とお滋の物語は絕えぬ。絕えた所で物見遊山となる。每日のやうに親子連で朝から出懸けて。今日は歌舞伎座。明日は上野。淺草の凌雲閣。玉乘。花は無くとも久しぶりで向島。何のかのと七日ばかりも保養を爲續ける。家の人でも今は城井といふもの丶妻で。ともかくもお客であつて見れば。總菜で御膳といふ譯にも行かぬ。まして近頃は隱居の機嫌が好くない鄙裏で。此お滋がお氣に入と來てゐるのであるから。どうでも善くしなければいよ〳〵姑の感情を害する。其報は覿面お銀の眞向へ祟つて來る。

因でお銀が手の懸ることは普通でない。女の癖に酒を飮む。隱居も飮む。

城井も飮む。夫は勿論飮む。每晚夕方から四人一座で始めて。十二時近くまでちびるから一升餘も入る。それくらゐの事は我慢をしても。お銀を始として婢等から書生に至るまで。之が爲に奔走させられた擧句。夜は一時頃でなくては寢られぬのに。朝はまた六時頃に起きねばならぬ。隱居やお客樣方は夢の七つも見るほど寢て。手水をつかふか間も無く午砲。

奉公人の嘆すことは！陰では城井の事を(長)。お滋の異名を(お長)とつけて雜言をいひあふ。お銀の苦勞はまた這麼ものではない。

姑といふものは湯屋で會つても。御法談の席でも。嫁の讒訴をいひあふが古今の例であるから。我娘といふ敵手を獲た日には耐らぬ。澁谷は役所へ出る。城井は公用で留守になると。母子隱居所へ立籠つて。猫が水を舐めるやうな音をさせて。密談の種はお銀。かうだあゝだと隱居は小言帳を繰返して平常を打撒ける。其勢といふものは。銀河の九天より落

僻見七分の愚痴三分で。「今では周三まで一處になつて私を邪慳にする。もとはお前も知つての通り。實に優しい子であつたのが。此頃は宛然生れ變つたやうに慳貪になつて。何といふと私が惡いやうなことをいひくさる。それといふのも全くお銀が那麼に爲てしまうたのだ。」などゝ兩眼に涙を浮べて口說くから。お滋は。「どうも怪しからん。」と捨置かれぬ氣の先走りがお銀を憎む心となつて。「あんな優しい顏をして。猫撫聲を出して。御母樣どうだの。お滋樣辷つたのと。懷つこい言をいふ口と腹とは反對で。えゝ小癪に障る。」の念があるから。お銀のする事爲す事其裏ばかり見えて。「なるほど御母樣のおつしやる通りです。」「然うぢやらうとも。」と合體して。變に突懸る擧動をする。味方が一人殖ゑたゞけ。隱居の偏僻が一倍劇くなつて。お銀は手も足も出なくなる。

中尉も着京して精々一週間も休むだら。出勤せねばならぬ身であるから。

其内に借家を探して。一日も早く引移るが至當であるのに。二週間經つても二十日經つても。未だどうも思はしい家がないといつて此家から出勤してゐる。

貸家一目といふものさへ出來てゐる此東京に。どれほどの家を借りるのか知れぬが。中尉殿の住はふ家なら四五圓の店賃が精々であらう。そんな家は腐るほどあるのに。あの(長)は何處を探しあるいてゐるのか知らぬ。四五圓で土藏附の邸仕立の家などは。花のお江戸にはございませんよ。熊本の山の中とは土の直段が少々違ひます。一月でも店賃と米代を庇はうと思つて。無い〳〵といつて御厄介になつてゐやがる。一體お國ものといふと根性が汚いつて。

無慚しくつて。貪婪が多いよ。と婢等は聞えよがしに陰言をいふ。之が耳に入つたら悉皆自分の咎になること。とお銀は獨り心を傷めて。止めても一向肯かずに。尻の長いのと。手の長いのと舌の長いのが。癈人の

中の一番厄介物だ。と之に手前節を附けて。車夫は門内の艸挘をしながら鼻唄で諷する。

この尻の長い由來は。中尉のづう〳〵しいばかりでない。お滋が貪婪の根性から隱居を旨く說付けて。借家の見當らぬのを口實にして。居られるだけ長く居て。家賃と米代を掠らうといふ肚から。中尉には。生家だから幾日居ても構はないと御母樣がおつしやるから。まあゆつくりお探しなさいなどをいふと。城井に於ても押は輕くない方であるから。「然やうかの。」ぐらゐで依然其方針を取つてゐる。扨一月にもなると。汗漫の質の周三も餘りの事に思ふ矢先へ。お銀も女の事であれば相應に苦情を鳴らすから。實にもと嬉しくない顏色が母子の目に見える。もうお倉に火が着いたと曉つて。やう〳〵立退支度にかゝる。それも斷乎とはやらずに。最う二三日もゐたらどうか。と誰か言ひさうなものだと云ふ顏をして。荷物を纏めてゐても。留めては一人もない。味方の隱居が獨り噪いで留

めても。同ずるものがないから。漸々出たのが一月と二日目！それも距れて家でも持つことか。人力車なら三錢といふ距離に構へて。隔日にも往來をしやうといふ肚。閑散の身の隱居は。當座朝夕にちよこ〳〵と會ひに行く。其度に。「お銀樣。何か到來の菓子がござらう。一つ下され。」と抱へ出す。「鷄子か。鰹節の折はござらんかな。」と提げて行く。其も種が盡きると。午飯の總菜を重箱に詰めさして持つて行つて。自分も先方で食事をする。新漬を運ぶ。薤を持出す。種々蠶食して了ふと。其後は何でも手當り次第。干鰑でも。切干でも。高野豆腐でも青豆でも。菜になりさうなもの。お滋の世帶の足になりさうな。と見た物は精々と運ぶ。これしきの事はお銀も何とも念はぬ。然し女といふものは。心の細な。氣の小さいものであるから。這麼ことでも快いではないが。高の知れた事と一度も可厭な顏を見せず。唯々と言ふなり次第にしてゐるが。外に可厭な事は。なにほど良い嫁でも中位の我娘のやうには行かぬ。他

人であつて見れば嫁でも遠慮がある。氣兼がある。又氣兼も遠慮もあつたで好いもの。これを取外された日には嫁の骨が粉になる。それが。恁う娘と行通をすると。愛情が其方へばかり傾くから。自ら嫁に疎くなる。嫁に優しい言をいはれるより。娘の所へ行つて劍突を食べる方が心地が快いやうなもので。此處が親子の情で。嫁といへば現在の娘。我子といへば過去の娘。どちらも娘なら親の仕向に二つはなさゝうなものだが。實子と義子を並べて手一つに傳をしたなら甚麼ものであらう。一枚の煎餅を分けてやるのに。四分六分に割るであらう。此情は自然のものであるから。其が強ち善くないといふではなけれど。おのれも一度は嫁をして來た身。可愛く思ふ娘も今嫁の身である事を念つたなら。我嫁へも煎餅の情を。等分にするやうに勉めるが。姑の本分でありさうなもの。口に忠義を言ふのと同じで。之が容易のものでない。其には小姑の無いに越したことはないが。あつたにしても離れてゐれば。嫁は一厄遁れるとい

ふものだが。かういふ事情では到底耐るまい。日毎に往來して會ふ度の話の種はいつもお銀で。隱居は記錄でも讀上げるやうに。楊枝せゝりに昨日の所爲を。係だ那だと陳べると。お滋が爲たり顏で之に一々註釋をする。姑の會ひに行くも。一つは懷しいからではあるが。半分は嫁の不平を泄すのが樂みで出懸けるのだから。今は嫁にどうされやうとも。お滋といふ味方があるといふ心持から。おのづと家に居てもさあ來いといふ風で。お銀に抗るやうな處がある。お銀は之が爲にいとゞ遇ひかねて。辛いのを飮込むでも飮込みきれぬから周三に訴へる。周三は自體小事に屑々たらざる性だから。一々取上げぬ。「唯。然うか。辛抱しろ〳〵。我が附いてゐるから。」ぐらゐで張合のないこと。綿を摑むで打着けるやう。

まゝよ。生れて持つた身分から身れば。數等立勝つた今の身上。家にゐた頃は。二子か瓦斯絲に。めれんす友禪の帶といふのが。かうして縮緬

の羽織を寤起から着て。黄金の指環を穿めてゐられる身上になつたのを念へば。これぐらゐの苦勞はありさうなもの。肝腎の夫が優しくしてくれるのだから。之に優した事はない。あの姑だからとて生涯附いてゐるでもなし。此家に波風の起るのも起らぬのも自分一人の了簡次第。と父樣に聞かせたら。然ぞ有爲奴と喜びさうな健氣な分別をして。何事も姑の心に悖はぬやうにして。お滋にも可厭な顏をせず。自分が妹でもあるやうに下から出て。腫物にさはる柳のしなひかな。まづ雪折れもなしに過ぎた。

それから一月餘經つて。お滋は隱居の口を藉りて三十圓の借用を申込むだが。隱居も周三へは言出し惡いと見えて。お銀に賴むとの御意。此隱居が近頃「賴む。」などゝいふ重い語を用ふのは。殼蜊の裏から眞珠が出るよりも珍しいので。流石に氣毒と思つたか。何となく言語が重複して。「あのな。」「誠にの。」などゝ煮切らない文句を挾むで。「お前さんから周

三へ言うて見ておくんさい。どうでも用達てゝもらはんければ。城井が差當つてえらう困るので。」義理の惡い借財があるといふやうな事を徹見す。

「どうございますか。後刻旦那様にお話をいたして見ませうけれど。此頃は何だか御都合が………。」

此(が)と聞いた時。隱居の目は鮑貝を日向で一寸動かしたやうに。ぎらりと光つてお銀の眉間を睨みつけたのである。

「今晩にも御返事をいたしませう。」

「何分お頼み申した。」とつん〳〵隱居所へ入つて。羽織を着更へて城井へ出向かれる。

(九)

お銀は周三が晩酌の間に此話をすると。以の外の機嫌で。
「貸すことはならん。」と言放つ。其勢に呑れてお銀は次ぐ言葉もなく。煙管を拈つてゐると。
「今月は大分都合も惡いのだ。好かつたところが貸しはんぞ。」と宛然お銀が借主でゝもあるやうに慍りつける。
「でもお母様が那麼におつしやるものでございますから。どうか御都合なすつて半分でも……。」
「成らんよ。今月はあゝいふ事情の費用で窮つてをるのぢやないか。都合の爲樣も無いさ。然し。そりや都合して出來んことはないけれど。それほどまでにして貸す義理はない。お前は知らんけれど從來幾度貸したか。つひに返したこともない。第一あの家で那樣に金錢の入る譯はない

のだ。城井は是といふ道樂のない男で。酒は飲まうけれど。藝者を買ふでもなし。球戲ぐらゐは滋の芝居を見るから思へば輕い事だ。それに二人暮しに婢一人で。月給で足りぬといふ事は決して無い。滋が自分の好きな眞似をして足らぬやうにするのだ。熊本にゐる時も貸せ〳〵いつて來て。お母樣の前があるから何程か貸してやつたけれど。然う度々は此方も出來ん。あれば貸してやる。無いからいかん。さういうてお母樣によう斷るが可い。」

「はい。」　とは言つたが此役は儲からぬ。

「どうぞ貴方からお母樣へ然うおつしやつて下さいまし。私からは何だか申惡くつて……。」

いかにも思つたか。周三は頷いて。酒が濟むと隱居所へ話に出懸けた。

噫。またこれから一層御母樣の目が光るであらう。お滋樣からは憎まれるであらう。ひよんな事が出來たと獨り心を傷めてゐたが。果して翌朝

の隱居の顏色と云つたら。何ともかとも謂はうやうが無い。鋭く睨めたり。慳貪な聲をするのは。蓋し未だ不平の十分ならざる時の事で。此一段上を行つたら憤死するかと想ふばかりの險相で。睨みもせねば顏も見ない。聲も出さない。唯是死灰のごとく枯木のごとく。冷然として沈思えてゐる。朝飯も食はず。湯を一つ飲まず。全く隱居所へ閉籠つて座敷へは影を見せず。義周の粟を食はずといふ意氣組で。時々思はせぶりに唾壺を撃く音をいつもより暴らかに響かせる。藁人形に五寸釘を打たれるよりも胸苦しく。お銀は得もいはれぬ心地で火鉢に取着いて額を抑へてゐる。

かねて合圖やしたりけむ。午が過ぎて間もなくお滋が來て。珍しくお銀に喋々しく挨拶をして。今日の結髪は大和好くなど〻空々しい世辭をいひながら。立つて隱居所へ行つたが。少時密談がありて出て來る顏は！お銀が當時を追想して魘される料にでもなると氣毒であるから。明細に

書くのを遠慮するが。其は眞に凄かつた。御母様いらつしやいと。呼吸の迫つた調子で呼懸けて。襖障子の開閉を仂なく手暴に云て。隱居を伴れて。お銀には一言の挨拶も無く。ぷういと。出たぎり夜になつても還らぬから。夫婦は心配して。車夫の友藏を城井へ見せに遣ると。今晩は一宿。翌日も翌々日も御歸宅無しで。四日目に城井の婢が來て。御隱居所の簞笥の一番上の抽斗の紬のお羽織と。三番目にある霜降の南部の小袖と。フラネルの單衣と。足袋を二足お渡し下さいといふのは。當分歸らぬ心算と見えたり。其も承知して。お銀は玉簾一折と到來の鱧の蒲鉾に。新版の小說を二冊添へて。いつ頃お歸りでございますか。お待ち申してをります。と傳言を云て還したが。攷へて見るに。是は容易ならず腹を立てゝ。私を靑む仕掛に相違ない。飛んでもない事になつたと。お銀は氣が氣で無く。周三が退省るを待つて。此次第を話して。

「どう致しませう。お迎ひにまゐつた所が。迚もお歸りなさる事はござ

いますまい。」　といふと。周三は（つまらぬ眞似をしたものだ）と思ふらしい苦笑を爲て。

「まあそつとして構はん方が可からう。滋が好くない。」　と舌皷をして。

「そつとして置くが可い。」　と至極落着いてゐる。

お銀の身になつて見れば落着いてはゐられぬ。姑を突出した。餘程酷い事をするに違ひない。年寄が可愛さうだ。といはれるに極つてゐる。親類の手前も面目ない。女房に卷れて非道を働き。親を麁末にするとは。學者にも似合はぬ鈍漢だ。と夫までが恥辱を搔ねばならぬ。其罪は皆嫁の身が被なければならぬ。爲て見れば世間へ對し。親類へ對し。我身上に大事が起らねば濟みさうもない。

夫に相談すれば構ふなと言ふけれど。構はずにはゐられぬ。此上は是非が無いから。年寄に心配を懸けるのは氣毒だけれど。生家へ話をして力

を藉りるより外に手段はない。手紙では思ふやうに事情が解らぬから。御母様を呼むで話さうか。否否隱居の留守を乘むで。母親を引入れて好い事をしたなど〻言はれぬとも限らないから。明日生家へ行つて篤り相談をして來やう。と其とは言はずに明日暇をくれといふと。夫は心快く承諾して。

然し無人であるから。正午に周三が退けて來ると入替りに出懸けて。直に歸つて來る心算で朝の間湯にも行き。丁度結日で髮も出來て。さあと待つてゐると。十二時二十分頃轔々といふ車の音。お歸りかと出て見ると三池といふ周三の叔父で。苦い顏をして帽子を取る。續いて車が又一輛。これには伯父の樫村といふ。此一門での名高い御意見番。二人が格子を入ると又車が。其は此方の人である。

二人は顧みて。

「これは丁度好かつた。」

周三は衣服も更めず挨拶に出ると。直に酒の支度をとお銀を呼ぶ。
「否。今日は御酒どころではない。」と三池が口を切ると。御意見番の樫村は詮議の筋有之といふ顔でお銀を一睨する。大方さうとお銀は察するほど無氣味で。こそ／＼と次の間へ遁げて酒の支度に取懸る。
其内に話が始つた。能とは聞えぬけれど。「御母様を。」「お銀様。」「風波が。」「辛／＼あたる。」等の不祥の語が耳に入る。聊も我心に疚しいところはないけれど。背から冷汗が出て。身が竦むやうな心地がする。
燗も出來て。下物は後にしても。先一盃と膳を出すところなれど。どうも座敷へ出惡いから。婢に運ばせやうかとも思つたが。親類が來たのに應待に出ぬといふ方はない。いつも出るのを今日に限つて出なかつたなら。心に怯ける事があるから顏が出せないと想はれやうと。婢に手傳はせて襖を啓けると。話がぷつゝり斷つたやうに寢むで。客の四の目が一直線に我額に注ぐと思ふと。赫として心が悸々。

何か言はれるかと氣遣ひながら。銘々へ配膳して酌をして。退らうとすると。周三が。「少し待て。」「はい。」と坐つたが。その手持無沙汰な事。何處へも顏の遣端が無くって。身體が荷厄介になつてどうもかうも成らぬ。旋て御意見番が和かな調子で。「一寸扨な。」を冒頭に。此度の始末を一通り陳べて。昨日隱居からの手紙で。不取敢今日城井へ行つて一々聞いた所が。恁云ふ話で。と隱居とお滋との口上を聞いて見ると。お銀もえゝ！と吃驚。

半分は痕跡もない虛誕で。三分は僻見で。殘る二分は鷺を鴉といひくろめた片口で。被せられた罪は綿まで透した濡衣で。餘りの事に辨解にも當惑して。可恐人等と思はず周三の顏が見られる。

それから筋路を正しく始終を話して。御母樣に然う取られますのは私の到らぬゆゑ。此後は十分氣を着けてお世話をいたしませうから。何卒お歸り下さるやうに。貴下方の御骨折を願ひますと額のば。樫村は理の分

る性ゆゑ大概疑念が解けて。

「どうも然うであらうよ。隱居樣だつて餘り負けてゐる方ではない。若い時分強盜が三人押込むだ時。長刀の鞘を拂つて水車のごとく揮舞はした事もあつたのだから。」　と酒も身に染みて來た樣子。

然るに三池の叔父の方は。元來隱居贔負で。血系だけに似てゐる性もあり。醉へば卽ち撚上戶。醒むれば可なり偏屈といふ人物であるから。心中大に服せず。此女の柔和に見えるほど肚は善くないのだと只管念込むで。樫村がお銀の肩を持つなら。我は何處までも隱居の尻押をしてやらうと。兩派に分れて見ると。敵の酒は美くないか。これから城井へ行つて。まだ話す事もあるからと先へ還る。

此三池が一人あるばかりで話が纏らず。姑とお滋は益々悍立つて。彼嫁を出せと喧しく言出して。お銀のゐる間は決して還らぬといふ悶着になつて。親類の誰彼が每日のやうに澁谷と城井へ往來して。どうで御座る

の。あゝで候ふのと結極が附かず。とにかく敵手は親といふので澁谷の方でも苦戰で。今の所ではどういふ事に極るか。運命は獨樂のごとく廻つてゐる。

之を聞くと。生家の心配といふものは謂ふにも謂はれぬ。新八郎は苦勞性の老人であるから。もしもの事でもあつた日には。と夜も碌々寢ずに考へて。一日隔に媒妁人のところへ樣子を聞きに行く。母親は母親で。女だけに取越苦勞をして。鬱とりと攷へてばかりゐる。御父樣は焦躁。御母樣は懵然。お鐵は中へ挿まつて狼狽。日に四五度づゝは缺さず劒突を喫はされて脹れてゐる。

下の巻

（一）

扨も隱居の心は石に匪ず。轉すべからず。どうあつてもお銀を出さなければ。私は家へは還らぬと力む。樫村は手甲摩つて扱つたれど。お滋。三池といふ二人の影武者が附いてゐるので。隱居は益我を張つて。牡牛の乳を搾つてお目に懸けたら。といふやうな難題をいつて弱らせる。いかにも。大事の際なり。一人の親ではあるが。無理は無理だと澁谷も腹を立てゝ。罪の無いものは離縁は出來ませぬ。と斷然した挨拶をすると。さういふ了簡なら。私も澁谷家代々の位牌にはなるまい。と隱居も凄いことをいふ。其ではお互に穩でないから。と諸親類總立で宥めたけれど。兎角隱居が無理ばかり言募るので。いづれも此處は手を退いて。今に目が覺めて。皆樣賴むといふ時があらうから。其折思入れ。「構うて

下さるな。」といつた口の端を抓つてやらう。今日の所はまづ〳〵默つてすつこむ事になつたが。周三の身になつて見れば。敵味方と別れても。縁は繋る親と子の間であれば。城井の食客にして。知らぬ顔もして居られぬといふので。月十圓づゝ扶持を送る事にして。一時落着した。

然し。先方が無理とはいひながら。親を別居させた紛擾の發頭人であつて見れば。お銀は寢覺に之が懸念で如何も快くない。

「親を逐出した。」といふ調は我耳にも障る。無理をいはれても親は親。邪慳にされても姑は姑。それを辛抱するが嫁の身の務なり。又いかにも邪魔を拂つて爽然したやうに。いゝわで默つてもゐられぬ夫の手前。そこで義理と人情が糾むで。可憐しい哀願となつたけれど。周三は母親の氣の折れるのも今にと見てか更に騒がず。悠ひ手を着けると不可から構ふな。と一向取合はぬので。其なりけりになつてしまつた。

生家では此紛擾が起ると。兩親は幾ど狂氣の沙汰であつたが。一先かう

いふ事になつたと聞いて。がつくりと腰の拔けるほど安心して。お銀から手紙の來た翌日赤豆飯を炊いたが。馬鹿に目出度いのだからと赤豆澤山にして。いつその事麥の飯にしたら。恐らく一生脚疾は患ふまい。と父親が洒落たほどだから。餘程目出度かつたに相違ない。

さる親の申した。凡そ世中に麥麭をもらふのと。女子を持つほど損なものは無い。女子にはいかほど丹精しても金を懸けても。預物で。遂には手放さねばならぬに極つてゐる。扨外へ遣つてしまつたから。其で緣が切れて。死なうと活きやうと構はぬかと思へば。我子は何處までも我子であるから。苦樂を倶にせずには措かれぬ。さて見れば生涯の厄介で。損は立つとも德にはならぬのが女子である。もし親たちの不心得から左團扇と目懸けたら。これほど德の行くものはあるまいけれど。親が女の厄介になるやうでは。相互の不仕合せといふもの。

丸橋ではお銀を良家へ形附けて。ほつと呼吸を吐く間も無く。今度のや

うな事が起つて苦勞をする。其苦勞が一息寢むだかと思ふと。直に胸に痞へるのは妹のお鐵の身上。

さる銀行に勤めて。今新潟に出張してゐる新輔といふ長男があるからし お鐵も他へ遣りもので。今年は十八になるから今が嫁入の旬で。十九までは盛といふやうなものゝ。お銀などは容色が好いから。廿歳が廿一でも乞ひては許多もあるけれど。妹の方は三割も四割も品が落ちるから。一歳でも若い内が花で。女子を縁付けるのは。縁日の植木と同じ事で。時刻が遲くなるほど捨賣にしなければならぬ。と口を探しに懸ると無いもので。長し短し。細し太し。圓かつたり角張つたりで。兎角四合と適ふやうなのが見當らない。然うかと思ふと。有り出すと又迷ふほど落合つて。都合三軒といふものの前後に言込むで來たのは。一番に官員。二番に商人。三番が職工。官員といふのは年齡が廿五で郵便局へ出て二十五圓の月給。男親が一人ある。商人といふのは横濱の商館勤で。二十枚の給

料。これは兩親附の代り。地面家作が少々あり。年齢は廿七。職工といふのは砲兵第一方面舊砲兵工廠の小銃製造所へ勤める鐵砲鍛冶で。年齢は廿八。月給は廿圓。之全く係累無しで。喧しい伯父があるが。別に世帶を持つてゐる。かう列べた所で。まづどれが好いと母親がお鐵に質ねると。官員は何だか嫌ひ。商人はどうも否。腕に藝のある職工がといふ好みに。兩親は膽を潰した。蓋し父親は。官員といふものを德川時代の武夫のやうに考へて。「花は櫻に。人は喃。」などゝ直にやらかす質だから。當時では何でも官員で無ければならぬやうに念つてゐる。母親は。誰に聞いたか。商人が一番割の好い利益の多いものだ。と素人了簡の商賣氣を出して。どうか商人へ遣りたい。それに横濱商人といふのは。異人を敵手で格別儲ると。澁谷ぐらゐになれば大丈夫だけれど。卑い處では兇が恐いといふ肚で。二十枚と目懸けたのである。

お鐵も夫に持つなら。奇麗な仕事をする人をと思はぬではない。足で飯

炊いて手で金延ばすなどゝいふ洒落から。鍛冶屋様と極めた譯ではなけれど。腕に藝のあるのが世を渡るに一番安心。所帶臭く考へて。眼中常に官員無しでゐたが。鍛冶屋とは少し豫想外であつた。

腕にある藝といつても。あながち職人には限らぬ。何も縁で職人でも否は言はないけれど。鍛冶屋の女房は御思案であるべき娘氣に。ぐつと色氣を捨てゝ。一思に其が望みといふには仔細がある。

この鍛冶屋を尋常の鍛冶屋と想ふと大いに了簡が違ふ。七八年前まで近所に住むでゐた石黒信之といふ。兄新輔とは幼稚馴染で。自分も識つてゐる男である。其頃評判の孝行者で。堅人で。物の道理も解つた。お銀ちやんなども。あの人はと噂をした息子であつたが。父親に早く訣れて。學問の修行もしかねる所から。十七の歳鐡砲鍛冶になつて。わづか二年ばかりの間に驚くほど腕を上げて。母親をもどうやら過せるやうになつたと聞いたが。砲兵工廠へ出る事になつて。小石川の方へ引越してから

は。久しく音信を聞かずにゐた。其信樣だ。職人でも。鍛冶屋でも彼人ならば添つて見たいといふお鐵の所思で。御母樣。あの石黒の信樣ですよといふと。然うさ。まあ不思議ぢやないか。あの信樣がもう二十七になるかねえ。人間は極良いけれど職人がどうも。と一向進まぬ形で。御父樣も子供の時分知つてゐる石黒の息子なら不足は無い方なれど。右同斷鍛冶屋といふのが不承知で。最少し外に職がありさうなものだと首を拈る。

けれども。お鐵が切りに進むでゐるから。當人の緣だからと母親の思飜したのは。あの信樣といふ處に惚れて。あの子ならば確だと父親に相談すると。長らく職人をしてゐたのだもの。氣質も變らずにゐるものか。子供の時分の堅氣ではゐまい。と一應有理な言葉に父親もなるほどゝ氣が着いて。お鐵にも此事を言聞かせる。それでは。舊時の氣質か氣質でないか。調べて見て下さいなとも言はれず。お鐵は可厭な顏をして失

望の樣子であつたが。其代り郵便局も否。横濱も否と皆撥附けて。どうとも話は煑えずに。毎日紛擾してゐる内。喧しいのと觸込のあつた。信之の伯父の瀬川又之丞が。中に入つたものから丸橋の娘といふ事を聞込むで。なるほど之は好からう。と信之に聞いて見ると。惡くはない挨拶で。まことに不思議な御緣だ。早速丸橋に尋ねて來る。

伯父の瀬川から段々樣子を聞いて見ると。味方同士の片口であるから。一から十まで信にはならぬけれど。十分證據のある事が許多もあつて。信之の堅氣なことは十餘年前の信樣に異らず。伯父の口からいふは可笑なものだけれど。御遠慮無しに申上げると。あれなれば實に御薦め申したいとまで申出した。

一體彼工場で。二十五圓以上取るものは上等の職工で。弟子の四五人づゝも使つて。皆職人風の勇肌で。大工の棟梁とか。左官の親方とかいつたやうな身持て。宵越の錢をつかはず。年中ぴい〳〵してゐるのを鋪强

にして。華美がつてゐるのが風習であるけれど。信之は決して然うで無い。第一服裝からして堅氣に作つて。行蹟も職人風で無い。實直過ぎて偏屈のやうで。交際を外すでも無く。優しくて實意のあるのが愛嬌になつて。上役にも可愛がられゝば。下へも通りが好く。職も惡くない所から。隨分用ゐられてもゐる。

昨年の暮母親が亡くなつたが。それまでに。不自由だから女房を持てと度々勸めたけれど。未だ早いと云つて下女を置いて母の世話をさせて。自分は不相變孝行にして面倒を見てゐたが。親の亡後に男の身一つでは所帶が持切れず。此度嫁を探す事になつたが。信之の行蹟が甚麼であるか。私が喋つたばかりでは御得心が行くまいから。兎も角も一日御出下さいまして。當人の樣子も見。また家の樣子も御覧下さいまし。申惡いことではございますが。職人風情の住居とは見えませぬくらゐ。整然と致してをりまする。

一口に職人と申すと。どうやら鑷合せの衣服に尻こけの三尺帶をして。袖の中に握拳をして往來を鼻謠で行くやうな人物と思召しませうが。彼の氣質の堅い所へ。私が大の偏人で喧しやでございますから。決して然やうな不行蹟はございませぬ。と伯父だか媒妁だか知れぬほど。感心な次第を種々並立てたので。丸橋夫婦の心は稍動き始めて。どうやら一思案して見る氣になつた。

（二）

瀨川の話に據れば。一口に鍛冶屋といつても了はれぬ樣子で。活計も餘り苦しからず。厄介は一人も無して。當人は子供の時に變らず實體といふ譯になつて見ると。まづ相手に取つて不足は無い。それは如何いふものか。お鐵が切りに進むでゐるから。此話は纏めて見やうかといふ念も起つたが。今度は母親が乘らぬ加減で。澁谷の顏に對しても。妻の妹が鍛冶屋の女房では嬉しくあるまいといふ遠慮もあつて。之は一寸お銀にも談して見ずば。と出掛けて了簡を聞くと。信樣なら可いぢやありませんか。職工といつたつて。種々類がありますわね。それくらゐの顏になれば。憖ひ小官員よりはどれほど好いか知れはしません。伯父樣とやらの話の通りなれば。決して惡くは無いと思ひますから。尚能く一つ調べて御覽なさいまし、と何の苦も無く極められて。母親はなほ〳〵迷ひ

出して。兎角職工といふのに我慢が爲されず。鍛冶屋といふのにうんざりして。横濱商人にまだ未練を殘してゐたが、二日過ぎて瀬川からの手紙で。明日は日曜で信之も家であるから。家内中で遊びに來てくれといふのは。家の樣子見やら見合やら兼ねて。何とも付かず手輕に呼寄せやうといふ肚。

こゝは鐵を伴れていつては拙い。我が一人で行つて見やう。と新八が出向く事になると。母親は氣を揉むで。

「貴方は惚れつぽいから可けませんよ。獨り惚込むで。うつかり約束なんぞをしてお出なすつちや困りますよ。」

「宜しいよ。心得てゐるよ」と五つ六つ頷くと。お鐵は後から羽織の衿を反しながら。」

「御父樣よく見て來て下さいよ。」

「柄の好いのであつたら買つて來やうか。」

と一同笑つて目出たく門出をする。

どんな樣子であらうかと二人は言暮してゐると。午後三時頃に父親は門口で曖氣をして。折詰を二箇ぶら挈げて御機嫌で歸つて來る。待兼ねた母親とお鐵は左右から詰寄せて。さま〳〵な事を問懸けるので、何と應答をして可いのやら。さう一度に話す事は出來んよ。二人とも控へてゐて。我が一通り話して聞かせるから。扨な。まづ家を出て新橋から鐵道馬車に乘ると。本町通りで線路を外しての。と言出すとお鐵が可悶しがつて。

「お父樣　那樣事はどうでも可いから。先へ行つた所から話して下さいよ。」

「さうか。そんなに先を急ぐなら。道中は端折つて。小石川柳町にまづ着いたとする。柳町といふ所は新開町での…………。」

「そんな事も端折つて下さいよ。」

無闇と端折らせる。鈍漢が驟雨にでも遭つたやうだ。註文たら爲方が無いから。思入れ端折るよ。づゝと端折つて。石黒の家を尋當てたとする。貸家ではあるが。一軒建の極新しい一寸した家よ。格子造での。出窓の下には矮柏が植ゑてあつて。南向の二階屋だ。我が案内をするとの瀬川が直に出て來て。皆樣も御一所だと心待にしてゐたのに。殘念だ殘念だといつての。まづ二階へ通した。」

「信樣は居りましたか。」と母親が嘴を容れるとお鐵は俯むいた。

「まあ急くなよ。追々話すから。二階へ昇つて見るとの。八疊一間だけれど。實に小瀟洒として。道具建が好かつた。堺段通を一杯に敷塡めて更紗の褥が三枚。桐の刳拔の手爐に櫻炭が埋つて。此方から三人行くつもりで待受けてゐたのだ。床には蘭が二鉢。掛花活には梅が入れてあつて。置物には、何だか自然木に蠟石のやうな青い玉が載つて。墨畫の山水の軸だ。時代な竹の臺に詩のやうなものが彫つけてあつて。斑竹の編

むだ短冊掛に何とかいつたつけ。信之の句ださうだ。發句があつた。それから袋戸棚の下に唐机が一脚。これに種々硯だの。水滴だの。筆架文鎭のやうなものを列べて。筆筒に孔雀の尾が二本ばかり、右の方には書物が五六冊。其側に桐の手頃な本箱が對あつて。胡麻竹の茶棚に大分茶器類が奇麗に飾つてあつた。北の窓には小銃製造場の寫眞が金縁の額にして懸けてある。床の向ふが押入での。磯に千鳥の形のある襖で。明取の好い。風通の好さゝうな二階よ。南は掃出しになつてゐて。下が庭で。庭は中々手入が屆いたものだ。裏へ通ふ處に枝折戸があつて。其外には盆栽が澤山列べてあつた。我は瀨川に挨拶をしてゐると。階子の音がとん／＼とん。誰だと思ふ。信樣だ？　大違ひ。四十ばかりの婢がお茶を持つて來たのだ。それから又とん／＼とん。今度のは石黒だ。我を見て少し笑ひかけた處に子供の時の面影はあるが。いやどうも立派な男になつた。我家の新の所へ來て。お神樂の眞似をして遊んでゐた頃とは大き

な違ひだ。十六七の頃も一向生意氣な風の無い。親孝行でもしやうといふ子だから何處か違つて。物柔かな裏に端然とした處のある。依然其通りで。最一息威が付いての。どうもそれは人品なものた。八字髭を生やして。髪を撫附けて。絲織の小袖に白縮緬の兵子帶をして。黑の奉書の三紋の羽織で。屹とした扮裝よ。擧止も閑雅で。口上も確なものさ。總體しつとりとした鹽梅は。どうしても氏といふ奴は爭はれんよ。誰が見たとつて職工ぢや承知が出來ない。まづ四五十圓も取らうかといふ官員だ。鐵砲鍛冶だといふから。我は鼻の下や眼の邊を炭だらけにして。棕櫚箒のやうな頭髪で。臍の穴を黑くして。鼠色の犢鼻褌に。襦袢一枚で出て來るかと想つたら。さうで無い。それから酒が出て中々の御馳走よ。場末だと云つても馬鹿には出來ないものだ。」

と云ひながら折の莎繩を解いて。勿體らしく蓋を取つて。

「この通りだ。こゝに鱵があるだらう。これは味噌吸の種だ。この汁の

加減といふのが無かつた。飲めたよ。」
「そんな事はどうでも可うございますから。それから後は。
「信様も御父様御酒をお上んなさるの？」
「結構な事には大の下戸で。」といふと。母親は妙に眞面目で。
「それが何より。」と諷する所あるが如くに言ふ
「何よりとは情無いのう。然し若いものゝ飲むのは憎いものよ。」
「老人の飲むのは厄介なものですよ。」
はつくしよいと大きな嚔をして。
「誰か我の噂をしてゐると見える。」
「それから御父様どうしました。」
「それからの。勸めて二三盃さしたらの。いつの間にか梅酢漬の生薑見たやうに。爪指まで赤くなつて。この通り不重寶でございますといふとの。何處のも酒客は同じ事をいふと思つて可笑くてよ。瀨川がいふには。

まあ〱飮まないに越した事は無い。おれくらゐの年齡になれば少しは飮むが藥てと。惡く澄してゐたから。我も一寸。「御同樣に。」と愛想をいふと。瀬川は如何もといつて笑ひ出したて。」

「飮むのが二人聚つて。信樣はさぞ迷惑でしたらう。」と意あるが如き母親の詞に。父親は故と無頓着に答へた。

「さうでも無かつた。誠に喜むでの。どうか澤山召上つて〱と。我の飮みやうが足らんで不足に思つてゐたかも知れぬ。」

「何の貴方。そんな事を不足に思つて耐るものですか。」

「それから瀬川に案内されて。家探でもするやうに家中殘らず見て來た。下は玄關が三疊。中の間が六疊。奥が八疊だが。全く瀬川のいつた通り。男世帶とは想はれんほど片附いて。何處も彼も劃然と極つたものだ。餘程世帶持の好い男と見える。

我は別に不服は無し。お銀も至極同意だし。本人は勿論の事だから。ど

うだ。極めやうぢやないか。鍛冶屋といつたつて。鼻下を黒くしてゐる鍛冶屋とは違ふよ。此日本帝國を守護する兵士の。最も有用なる武器を製造する役人だ。どうだ合手に取つて不足は無からう。日本帝國を守護する………。」

「もう解りましたよ。」

「解つたなら言つて見な。」

「言はなくても。解つてゐますよ。」

「何解るものか。日本帝國の武器を守護する。兵士の最も有用なる製造の………どつこい。」

「おほゝほゝほゝ。御父樣違ひました。」

「それ御覧なさいな。貴方だつて其通り………。」

「なに我は違つてゐても解つてゐるのだ。」

「貴方は實に惚れつぽいから可けませんよ。」

「惚れて可いものなら早く惚れるのが目があると謂ふのだ。恐多くも日本帝國を守護し奉る。兵士の最も有用なる武器を製造する役人。東京府士族石黑信之の妻鐵子か。鍛冶屋の女房に鐵子は合性だ。」

「可厭。お父樣は！」

（三）

母親は獨で不得心な顏をして見たもの丶。當人が得心で。父親が得心でお銀がまた得心で。都合三得心に敵しかねたる一不得心。皆が然ういふ事ならと。爰に始めて四得心となつた所へ。瀨川又之丞が來て。どうで御座らう。御承知は下さるまいかといふに。此方からも望む所と。目出度く話が纏つて。然らば棧橋をした羽田氏に媒妁を賴みませう。そこで之も儀式でござるから。一寸見合といふやうな事を。なるほど何處に致したが可うござらう。　左やう此見合といふものは。お互に手持無沙汰な。妙に冷い汗の出る不氣味なものでござるから。家の中で顏を合せるのは廢止にいたして。京橋の勸工場で落合ふといふのは甚麽ものでござりませう。之は新しくて至極お思附でと。來日曜の午後二時を合圖に約束をして瀨川は立歸る。

お鐵は此前姉の事を嗤つたが。今我身上になつて見ると。依然誰の情にも差違はないもので。氣の揉めるやうな。嬉しいやうな。變に。不思議に。餘程妙な心地になつて。憮然として了ふ。之をむづかしくいふと萬感交到るで。泥鰌の笊へ酒を沃けたといふ恰好で。心裏で何か無上に悶ゆるやう。さしあたつて夜寢られず。晝夢を見て。御飯が吭へ通らず。何か氣になつて。而して唯粧したくなる。其中に絶體絶命の日が來て。京橋の勸工塲へ出懸けたが。此日は父親が留守番で。仲人の羽田と母親と三人連。入口は繪草紙と玩具。曲ると瀬戸物に小間物。もう二時を打つたから先方も直に來るであらう。後から來るか。それとも出口から入つて。待伏をしてゐるだらうか。と會ふのが主意で來ながら。其の合ふのゝ辛さ。辛さといふのは妥當で無い。辛いやうな心地。此(やうな)の三字が最も力がある。約言すれば羞かしいの極で。少しの間でも會はぬやうにと。一寸逃れの氣が出て。もし出會つたら身を匿さうといふ下心

から。母親と仲人の間に挾まつて。店の品物を見る目を偸に油斷なく働かせて。前後の人聲にぎよつとし。跫音にびくりとして。顏は上氣して火のごとく。胸は早鐘を撞いてゐる。

母親が。まだ見えませんねといふと。羽田が頻に前後を眴して。もう見えなければ成らない理ですがと話す一言毎に。毛孔から汗がたら〳〵たらと浸出す氣の不快さ。いよ〳〵時刻も迫つて來たと思ふほど。横を向くことも出來なくなつて。造りつけられたやうに。見たくも無い物をまんじりと視て。中頃まで來ると。「おや前面から。」と羽田の聲。そらと思ふと體が竦むで。足が擧らなくなる。

「さあ鐵や。」と母親に手を曳張られて。我にもあらず步さ出して。唐木細工の店の前で。はたと出會ふと。首がぐつたり。

双方で頻りに挨拶を始めると。姨樣いつもお變りなくといふのは信之の聲。舊時とは全で變つて大人染みた。底に濁のある。響く聲が耳に入る。

竊と顏を擧げやうと思つても。どうも擧げる事が出來ない。「お鐵や。御挨拶を。」と母親に曳張り出されて。もう協はない。一寸顏を擧げた其間は。電光。石火。刹那。瞬時。ちらと信之の顏を見たばかりで。後は唯腰を屈めて。先方にばかり物を言はせて。それでも挨拶になつて。下ばかり向いてもゐられぬからと。趣を變へて今度は横を向く〳〵。それから。御一所にと。これでもう〳〵澤山なのに。五人一群になつて。舊の道へ還す。此時の方が陰にゐられて。却つて能く信之を見る事が出來る。勸工場を出ると双方へ別れる。今度の挨拶は前よりは幾分か確に出來たつもりで。信之の顏もどうやらかうやら見て。まづ氣が澄むで。ぶらぶら煉化通を歸り道に。母親は今日の見合で大分惚込むだ樣子で。羽田を捉へて切りに褒めるのを。聞くお鐵の心地は不快は無い。

翌日羽田が結納を持つて來る。酒を出す。目錄を披げて。噫。美事な手蹟だ。石黑が認めたのでござるかと父親は恐悦がると。媒妁は當惑した

顔で。左やう。伯父樣がお認めになつたやうでといはれて。まごつく。
二日過ぎて。お銀の處から祝儀として。惣桐の重簞笥が來ると。母親は嬉しさに價ぶみをして。安くふむで父親に呵られる。お鐵は此中に一杯になるほど衣類が無いとて氣を揉む。漆臭ひ道具が毎日二つ三つ宛殖ゑて。座敷に飾附けてある前に。綿が列ぶ。鰹節が列ぶ。長持と簞笥に場を取られて。父親は今夜から獨り二階に寢ることになる。
當日も逼るといふ大騒ぎの最中へ。お銀が顔出しに來ると。おやまあ大層だ事。悉皆揃ひましたね。と妙に笑ひかけてお鐵の顔をじろりと見る。お鐵は曩に姉を散々冷かした廉があるし。さうでなくても。お銀樣は一體他を冷かしたがる方だから。どんな事をいつて謔はれるかも知れないと大きに恐れて。座敷の隅に少さくなつて悄げてゐると。
「お鐵ちやん此度はお目出たうございます。」とわざ〳〵前へ來て。改つて挨拶をされて。居耐まらずに臺所へ遁込むと。迹には三人で笑ふ

聲がする。もう出ることが出來なくなつて。竈の前に立つて釜の縁を撫でゝゐる中に。幻の如く信之の姿が現れて。自分と盃をしてゐる。あゝ死にたいほど極りが惡いと思ふ途端。空中樓閣ががた〳〵と壞れる一聲。

「鐵や。」　と母親に呼れて。振向くと障子を開けられた。

火鉢の端に三人坐つて。皆此方を向ひてゐるから。又顏を背けて釜の縁を撫でゝゐると。父親が肚では笑つてゐるらしい眞面目な顏をして。

「姉さんに御祝の御禮を言はんのか。」

其は知つてはゐるけれど。其處へ行き難くて。忸怩してゐると。母親が又。

「如何いふもんただね。」　と窘める。

「鐵ちやん〳〵。」　とお銀は例の氣輕に呼ぶ。それでも返事無してゐると。

「可厭な鐵ちやんだね。含羞むてさ。そんな事で信樣のお嫁になれるも

のかね。」
とお銀が譃ひつゝ窘める。
何と言はれても動がざること山のごときに。お銀も張合拔がして捨置いて。母親と話を始めると。父親は今度は極眞面目に。
「鐵。」　と呼ぶから。もう好頃とやう／＼座敷へ出て。母親の陰から。
「姉樣。一昨日は有難うございます。」　といふと。お銀は話を輟めて。
「どういたしまして。貴方も石黒樣へ御縁がお極りで。さぞお嬉しくってゐらつしやいませう。あのお婿樣は當時何處に御住ひで。」
お鐵は俯むいて默然。
「お幾歳でゐらつしやいます。」　と疊みかければ未だ默然。
「おや、石黒樣の奥樣はお啞ね。」　と笑ふと。お鐵は有合ふ煙管を把つて。竊とお銀の膝を雁首でぐい。
「あ痛。」　と不意に駭いて立てた聲に。兩親は吃驚して。

「何だ。」
「どうお爲だ。」　と目を圓くして訊ねる。お銀が。
お鐵は澄して。可笑さを忍むでゐると。
「鐵ちやんだね。」　と肩を一寸衝く。
「何を？」　と恍ける顏をお銀は眤と視て。
「お婿様が附いてると思つて。他を虐めること。」　と態と悔しさうにいへば。
「姉様はもう否。」　と袂を拂つて。怫然といふ鬮梅に立上る所を。
「まあ石黑様の奥様。」　と留める。
「姉様はもう……………。」　と母様の方を向ひて。
「御母様。姉様が種々な事を言つて。」　と憐を乞ふと。母親は嬉しさうに、吃々笑つて取合はず。父親は妙に眼底で笑ひながら。
「石黑の奥様に違いないぢやないか。」

「だから私が石黒の奥様…………。」

「解りましたよ。姉様だつて澁谷様の奥様。」

「はい何でございます。」と落着き拂つて。

「石黒様。何御用でございます。」

「私はもう。知らないわ。」

（四）

結納の交換も濟み。三荷の荷も目出度く送り込むで。お鐵は唯わく〱してゐる中に。はや黄道吉日も今日となる。お天氣で仕合せだと喜むだも午前の事で。二時頃からぽつり〱と落ちて來たのが。ぼと〱と降出して。雪にもならず寒いこと。

「今はどういふものか流行らないけれど。三頭の方が好いやうだね。」

とお鐵の頭に濃厚と塗りながら。

「お前お赤飯にお茶をかけた事があるだらう。だから這麼に雨が降るんだよ。」

と妙な事を責めると。又お鐵の應答が妙。

「お鮨にお茶をかけた事はあるけれど。」

父親は火鉢の傍で。此妙な問答を聽いて笑ひ出し。

「鮨にお茶をかけると。大方お彼岸に降られるだらう。」と二人を笑はせて。

「天氣の好いのに幌をかけるのは可笑いものだ。雨で幸ひよ。」と極無理な負惜みを言ふ。

こんな事を言ひ〳〵。仕度の出來た所へ媒妁夫婦が乘込む。そこで簡略な立振舞があつて。いづれ先方でゆつくり。といふやうな吝な口上て膳を退き。五臺の人力車を揃へて小石川を指して急がせる。

旋て石黒の近所まで來ると。此所彼所の辻や軒下に。骨の折れた蝙蝠傘やら。番傘やらさしかけて。お神樣達娘子供が花嫁子を見物に出てゐる。車の音を聞くと齊しく。彼地の窓から首が出る。此地の格子から體が現れる。それらが無遠慮に噪ぎ立てゝ。其甚しきに至りては。儼々と車に近寄つて。阿部宗任が八幡太郎の寢息を候ふといふ身で。幌の内を瞰きこむのがある。暗い中に白いものが見える許で。あれは紀國蜜柑船だか。

何だか解るものでは無い。お鐵は前胴紬を婿に車外の樣子を見て。自分も那して近所へ來た嫁を見に出た事もあつたつけ。それが今は見られる身になつたか。と難しくいへば俯仰今昔の感に堪へず。御父樣や御母樣も年齢を取つた理だ。と思へば坐に心細くなる。

姉樣が澁谷樣へ嫁く時には。別れるのが悲しくつて。袂につかまつて泣いたらば。姉樣も泣いて。私の手を握つて放さなかつた。今日は家を出る時。誰も殘つてゐる人が無かつたから。それほどでは無かつたけれど。隨分可厭な心地だつた。よく考へて見れば。かうして。御父樣や御母樣と一所に來たやうなもの〻。今夜は私一人置いて行かれるのだ。明朝からは石黑の家の人になるのだ。年に幾度と勘定するほどしか家に行くことの出來ない軀だ。御父樣の肩が凝つても揉むものは無い。御母樣が頭痛で寢たら臺所を爲るものがあるまい。姉樣とも今までのやうには逢へない。

と念ふと浮む涙を指頭で拭いて。おや白粉が剝げはしないかと。懷中鏡を取出して見る。どうもなつては居ない。鏡を出した次手と。ほんの少しばかり曲つたかとも想はれる前髮を理して。延紙で油手を拭いて。鏡を仕舞ふと同時に。狹い路の片側長屋の格子戶の前に車が停る。お鐵は幌の中から竊と見ると。父樣の話に違はぬ結構で。窓の前に垣があつて。矮柏が植ゑてある。

此處で下りて。媒妁夫婦兩親に前後を圍まれて。俯むいたまゝ。玄關から中の間を通つて奧の八疊へ入ると。我家から送つた荷物の飾つてあるのを見れば。他國で知人に會つたやうに。何と無く懷しい。

話に聞いてゐた婢が香煎湯を持つて出て。お鐵の顏を上眼と斜視とで見て退る。嫁御寮は此時既に三分の正氣を失つて。惘としてゐながら心は落着かず。腋の下から汗を出して。顏は熱る。頭痛はする。少時にして媒妁が彼方へと合圖に來ると。母親が唯と挨拶をして。

「さあ　お鐵。」　といつても。お鐵は逡巡してゐるから。少さな聲で。
「お盃だよ。」　と聞くと。心臟がどき〳〵どき。裂けて一時に血が出たかと。想ふほど。動氣で。火に翳されたやうに惣身が熱くなる。此時ははや七分の正氣を失つて。何が何やら一向窮心で。二階まで伴れられたが。ふと座敷の障子の硝子越に人影が見えたので。また心臟がどきどき〳〵。」

座敷へ入ると。三方の長熨斗。三組盃。雌蝶雄蝶の銚子など。草冊紙の大團圓で能く見る道具が眼前。下座に羽織袴で。兩手を膝の上に置いて。俯首になつて控へてゐるのは。花婿の信樣（では無い）石黒信之。お鐵は赫として眼がくら〳〵。脚がわな〳〵。汗がたら〳〵。前後不覺の中に盃が濟むで。下座敷に還つて來ると。始めて人心地がついたやうな。間も無く。二階で親類の盃が始つた樣子。また彼處へ出るのか。と那樣事を苦勞にしながら。お鐵は獨り茫然。肱懸窓を開放して。顏を冷して

逆上を下げてゐる所へ。媒妁が呼びに來ると。續いて母親も衣替の世話に下りて來て。鬢を掻いてやる。顏をなほしてやる。彼此氣を揉むで座敷へ伴れて行く。

そこで。鏡餅は重ねるもの。女夫は並ぶもの。此出來立のほや／＼の夫婦も否應なしに上席に直されて。信之大いに閉口し。忸怩／＼と外於を向けば。お鐵は尚以て。横を向く。惡く洒落たら。雛段の地震といふ趣がある。媒妁は此處を見計らつて高盛を出し。本尊は床入で片附けて了ひ。さあこれからは此方のものと。袴を脱ぐ。扇子を捨てる。三人とも大童にもなつて。おもしろさうに飲み始め。十二時頃までに二升五合といふものを傾けた。

話説お銀の身上にかへる。例の紛擾以來引續いて。隱居は城井の一間に祀られて。當座は頻りに崇められてゐた。其理。拾圓といふ扶持がついてゐるのであるから。城井家に取つては少しも損の立つ話でない。まづ五圓を食雜用に入れて。剩餘の五圓といふものは私費として。蝦夷錦の仕合袋の底に。番號の揃つた。折目の無いのを。二つ折にして仕舞つてあるのを。お滋は殆ど毎月の書入にして。「御母樣濟みませんけれど二三日…………。」など丶言ふと。其處は親子の情で。又色々世話にもなるといふ心から。唯々と貸してやる。返してもらはう氣も無ければ。返さうといふ了簡も無しで。

如此重寶な。秀鄕が龍宮からもらつて來た米俵のやうな。無盡藏の臍を持つてゐる御母樣の事であるから。何かと氣を着けてお滋は孝行をする

城井も此魂膽を表向は知らぬ顔の御存じてあるから。隱居を邪魔にする所では無い。口には税が賦らぬと思つて。虎髭で掩はれてゐる鰐口を窄めて。御母樣から遊ばせ。あゝなさいませ。おや嚔が出ましたな。お風邪を召すとなりません。滋や其の私の縕袍を。いや今日の飯は硬うてならん。貴方には好うない。粥にして上げるが可え。なんのかのと至極優しい言をいふ。

隱居殿は眞に受けて。ほく／＼喜び。實の子でも無い城井が。軍人のやうにも無く。きつう優しうしてくれる。其に。周三は如何いふものぢやあらう。嫁と心を合せくさつて。私を邪魔にして。年寄つたものを流人同樣に遇うて。私を城井の門から葬式を出す事か。それでも。滋といひ城井といひ。揃ふて優しうしてくるゝものがあるから。不仕合せの中の仕合せじや。

と周三夫婦を情無く怨むだけ其丈城井を頼もしく嬉しがる。焉んぞ知ら

む。周三といふものが無く。月十圓といふ扶持を仕送る源か微かつせば、
隱居の境遇は甚麽ものであらう！
奥の四疊半に置炬燵をして。好きだといつて。床に花を絶えせず。牛乳は異人臭うて飲めんから。半熟の雛卵を二顆に。食鹽とスプウンを添へ、て。午餉には鷄を細く碎いて。齒齦でも潰せるやうに調へさせて。晩が五勺などゝいふ。寸法に行くものと心得らるゝか。これ大いなる不了簡の極度。まづ世間の手本を見るに。いはれぬ前に氣を利かせて。天氣の好い日にては洗濯の一つも爲ねばならぬ。孩兒のがあれば。孫の可愛さの醉興からといふやうな貌をして。傳もせねばならぬ。と一々數へ立てたらば。下女奉公人のすなる事をも敢て辭せず。喜んで其勞を執るやうにせねば。我娘はともあれ。聟殿が好い顔をすることではあるまい。太甚しきに至りては。我孫を坊樣の孃樣のと。不倫千萬な尊號を奉りて湯屋の女房に僱婆と間違へらるゝほどに身を墮さなければ。臺所の隅に

なりと含いて。死水を取つてやらうといふ聟が多度あるものではない。已に此位にしても。十人が九人までは無くもがなと念はれる。嫁にやつた先方の厄介になるのと、茶呑友達を欲しがるのは。壽長き女の耻辱としてある。

鮮魚と珍客は三日おけば臭ふといふ。西洋の諺があるが。當分は隱居も珍しいのと。十圓の扶持といふので。珍重されたやうなもの丶。日が經ち。月が累るに就けて。第一の要素の（珍しい）が消えて。差代りまして（厄介な）といふ感情が。先づ城井の心に萠し始めると。踵いで第二要素の（月十圓）も。補充になる。重寶にはなるが。唐辛子も食慣けると辛味が鈍くなるがごとく。今では尋常のやうな氣持になつて。これ丈でも入らなかつたら一寸困るのだが。さて入りつけて見るとさまで有難くも無いやうな理屈で。自分の方の爲筋になる事は少しも感じずに。不利益になる一塊の老肉團が。惡く厄介で。兎角邪魔で。所で近來は餘り（御母

様）を唱へない。少しお滋がちやほやいふと。城井の御機嫌が麗しから
ぬ。

城井は軍人で。軍人といへば。多く杯を呼び妓を聘し。一醉王公を輕んずる的氣象の者であるが。城井は其例で無い。斗酒も敢て辭せずの豪飲はやるが。頗る愚痴上戸で。尤も不斷から量の少さな。所帶臭い。戰場に臨むだら。敵の首よりは分捕を專一に働きさうな性であるから。面と向つて否な言こそ言はないが。頻に心の色を面に表はして。悟れがしに仕向ける。けれども。お滋が中に立つて。色々遠回しに宥めるので。隱居も心地に好くないけれども。今急に澁谷へ澄した顔で還る譯にも行かぬ所から。節を屈し。癇を抑へて。潜龍無用と忍むでゐる。其所で破裂も無しに。納まらぬやうに納まつてはゐるが。正に是機一發といふ處。所謂七分三分の兼合。

一夜城井中尉が飲過ぎから舌を辷らして。ちくと癪を言ふと。腹を立て

る段では。自分が無理でも膨れる代物の隱居だから。況んや理あるに於いてをや。無料で置いて貰ひはすまいし。怪しからん事をいつたものだ。と散々に立腹して。憤て翌日は二食絶食をするといふ勢。お滋が種々に詫びたので。晩には快く五椀、召上つて下さる事にはなつたもの丶。隱居は肚裏に。此家は長く留まる處で無いと始めて曉つたのである。時に不運なるかな。官海の風波穩かならず。鯰鰌大いに恐慌の折から。澁谷周三も非の字となつて。官制改革後であるから。三年間の涙金は下らぬ始末。手許に現金といつては。愧かしながら從來の生計を二月と續けるほども無い。幾分か氣強いのは。地所と我住むでゐる家作と。外に株券が少しばかり。差當つては之を賣食にしてなりとも。命の蔓にありつくまでは。籠城しなければならぬ。それも一二年の中に有附けば好けれど。長引かれると大事になる。

まづ此家作を賣拂つて。四五圓の借宅に蟄居と極めて。時節の到來を待

つの外に無しと。恩顧の奴婢に暇を出す。入るものは書籍屋。道具屋。近所へは面目無し。自分は心細して。お銀は夫が切腹せぬ顔世御前といふ思で。混雑する中に半病人で鬱いでゐる。

恁る次第なれば。此際どうか勘辨して一所になつて下さい。それともお可厭ならば。六圓に減じて不承してもらひたい。此二者何方か一つといふ。掛合を城井方へ差向けると。隱居も吃驚。憎いの怨めしいのと謂へば謂ふものゝ。懸り息子が一世の浮沈。厩まで屬いてゐる家を出て。背の低い疎な杉垣に。歳古る丸太の御門といふ構は。餘り嬉しくは無い。辛からうと夫婦の心の中も思ひやられる。又自分にしても。今こそ恁して舅の家の客分になつて。何不足無く暮してゐるのも。原はと云へば。周三といふ確とした後楯があるからで。お滋も大事にしてくれるには違ひないが　老の杖となるのは周三ぐらゐの事は隱居も心得てゐる。(但し之は近來悟つたことゝ知るべし。)其證據は。覿面六圓といふ減額。六圓

では小遣も浮かぬ。然し此上は出し切れぬといふ其も道理。ではあるが此方も窮る。其で勘辨が出來ぬといふなら。一所になれといふ。今更一所になるも意氣地が無さ過ぎる。六圓でどうか我慢はなるまいか。それとも胸を撫つて一所にならうか。何方にしても昨日に變る身上を。心細く考へるばかりで。どうとも分別が着かぬ。

是は扨置いて。隱居は當座ほど珍重されぬのを。面白く思つてゐないのに。根が我儘の方であるから。一寸した事まで腹が立つて。こんな譯のものではあるまいにと。(御母樣風)の吹かせ損ひをして。獨り胸を惡くしてゐる。お滋も亦親子の心易立から。長い月日には隨分麁末な待遇もすれば。氣に障る言をいひもする。始めの内こそ。嫁の優しい言葉よりは。娘の劍突が嬉しくもあつたが。此頃になつて。見ると。城井の爲所の面白くない所から。自然僻見を及ぼして。お滋も餘り香しくもなくなつて來た。

因で折々は嫁の事も憶出される。周三も優しかつた。と考へると稍歸心が動き初めて。家の樣子はどんなであらう。一寸一晩泊で遊びに行つて見たいけれど。未練らしくて其も否だ。

先方から詫を入れて。歸つてくれといつて來れば。其を機に歸りたいものだが。今となつて此方から口を切る譯にも行かぬ。と些の意地ばかりで持つてゐた矢先へ。六圓といふ一大事か起つたので。さあ爰が考へもの。澁谷の言分には。十圓では送りかねるから。六圓で免してくれ。もし其で勘辨がならぬなら還つて下さいと。此挨拶では心から我に還つてくれろと頼む氣は無いので。六圓で否ならと。どうでも可い了簡なのを。有難さうに喜んで還る事もない。最う少し辛い思をしても。客分でゐて見やう。周三だつて一人の親をいつまで妹に預けて苦勞をさせもしまい。今は未だ還る時節でないと。其趣を澁谷へ答へたのは立派であつたが。六圓の聲が懸ると。忽ちお膳に其反響がして。二尾の魚は一尾となる。

鷄卵のお羹が葱ばかりとなる。その理屈ではあるが。今更のやうに隱居は顏を顰めた。金拾圓でさへも飽かれたのが。殆ど半分の減額であるから。これではほんの米代だけで。少し孝行の眞似でもすると。忽ち食込む始末。それも城井の會計に。ちつとでも餘裕があるのなら兎も角も。從來隱居の臍を豫算に入れて繰廻してゐたほどの内證であるから。世話の燒けるだけも損に立つと。實の親であつて見れば。お滋もそらほど精算をしてかゝる譯でもあるまいけれど。打明けて言つて見た所で。十圓の時ほど嬉しくないには相違あるまい。是に於て城井は隨分煩くお滋に氣障な事をいふ。隱居は隱居で亦お滋に否味をならべる。中でお滋が大弱り。此分では迚も納りさうも無いから。いつそ大悶着の起らぬ内に。滋谷へ還したが得策と。此筋を隱居に微見して見ると。どうか物になりさうな鹽梅であるから。かねて一味の親類三池方へ出向いて。自一至十を話して。舊の鞘に納るやうに話をしてくれと賴むと。其は我の口から

は言難い。樫村めに其見ろといはれるのが業腹だ。我からでは却つて稜が立つて好くないから。お前が自身に周三に會つて然う言つたが好いからと斥られた。

（六八）

彼此悶着があつて。結極お滋か我を折り。隱居が角を折つて。多く謂ふ本木に勝る末木爲して。姑は矢張嫁の世話になるといふ事に納つた。水の流と人の身は。今日に知られぬ飛鳥川。と歌でも聞くと豪勢意氣であるが。淵が瀨に變られた身のつまらなさ。外套の裾を朝風に飜してハヽナの煙を口髭に炷籠めながら。馬上優に出勤した姿は。玄關に跽つて見送るお銀も。適れ殿振と心勇むだものが。此頃では建附の悪い格子をがたくり引開けて。葱の味噌汁の噯氣をしながら。ぼく／＼出て行くのを見るにつけて。情無いやら。味氣無いやらで。胸が一杯になる。それがお銀ばかりでは無い。親は親だけに。老婦は老婦だけに悲しさも勝る。あのやうに身を卑して苦勞をしてゐるのに。と有繫に隱居も我儘を節むで神妙にしてゐられると。角に出はせぬ窓の月だから。お銀も自

づと優しくして上げたくなる。其處でやさしく爲る。喜ぶ。喜ばれる。やさしくするで。爰が家内の治る大本とも謂つべく。御母樣といへばお銀樣やと。、和氣靄然堂に滿つる澁谷家今日の有樣に於て。貧は諸道の障碍としてある本文が大いに疑はれる。

案じられるのは。此家内和合の樂みは。恐らく周三が再び出世の曉に忽ち霧消して了ふであらう。去て見れば。他日の榮華は寧ろ今日の貧樂に如かざる譯であるが。それは唯の理窟で。富と貴きとは。人の願ふ所。少々家内に風波があつても。不自由の無い方が先づ。と色氣を出すが常情で。一日も早く好い官途があれば。と隱居もお銀も只管それればかりを念じてゐる。

他の思ふほどにも無く。本人の旦那樣は綽々然として呑氣で。大概隔日に例の見そぼらしいぼく／＼で出かけて。飛乘の辻車で四方を推廻し。同藩出身の大臣やら。局長やら。然るべき處を賴みにあるきながら。思

はしい口も無くて歸つて來るのに。一向苦勞さうな顏もせぬから。少しは好い話でもあるのかと思つて。どうでございましたとお銀が氣にして聞くと。さうお前のやうに急いたつてあるものでは無い。半年や一年で腐るものでもないから。氣長に待つが可えなどゝ。鰹節でも乾しておくやうなことを言つて。根から合手にならぬ。

お銀は獨り鬱勃念つても。向河岸の火事へ柄杓の水を打懸けるやうに。氣の揉榮も爲ぬといふもので。後には根負をして餘り言はなくなる。口頭にこそ出さぬが。心の中の苦勞は尋常で無い。然れど苦勞にしたからといつて。其でどうといふ事は無し。結句心を痛めるだけが損とは思ふものゝ。そこが凡夫の淺ましさには。兎角行末が案じられて。苦勞も心配も爲ずには居られぬ。

周三が一向無頓着でゐるのを。隱居も餘りの事と腹は立つけれど。面と向つて謌々く言はれぬところから。何と無く其鋒先をお銀の方に向けて。

聞き辛いことを聞かせられるからお銀は耐らぬ。餘り切なさに。無駄とは知りながら折々周三に口說くと。おつに韲弄かされて。太平樂の仕舞は定文句の。我を誰だと想ふ。澁谷周三だ。お前たちを乞食にはさせぬからと大きく蔽冠せられて。すご〳〵お酌をするが例である。

却說お鐵の方は睨む姑も無く。面倒な親類も無く。旦那樣は幼稚馴染の信樣で。成人したお坊樣と飯事するやうな樂世帶。慾と謂つたら蚤起が辛ひか知らねど。亭主の出勤を送出して了へば。其から五時頃までは一人天下である。お薩の蒸燒をして寢ながら食べて。お腹がよくなつたら晝睡をしてゝ。誰が何と言ふものも無い。但戸鎖をしておかぬと。此近邊は下駄泥棒が行るから。と叔父さんの言つた通りの始末で。嫁に參りましたと謂はうよりは。舍兄の處に助手に來た方が適當らしい。

身分を謂はゞ職工。月の入高も輕少なもので。其に應じて活計もお麁末ではあるが。憚んながら宵越の錢は持たねえのさの肌ではなくて。生れ

得て元來篤實一遍。元朝から後に近き大晦日の事を慮る質の信樣であるから。吝嗇にはせぬが奢侈がましい眞似も爲ぬといふもので。月給の四分の一は。毎月相違無く郵便貯金通帳に記入されて。月に二度ほどは日曜日に。夫婦連で遊山にも出懸ける。其內に懷妊の噂があつて。實家の兩親はころ〳〵懽ぶ。五月の帶といふ頃。丸橋の神棚の燈明に。三晩續けて大きな丁子が耀いたので。阿母樣は無上に目出たがつてゐると。果せる哉。澁谷內よりの文。何を知らせて來たか。皆々樣御推もじ被下度候。

(廿四年八月)

紅葉全集巻之壹終

明治三十七年一月十五日印刷
明治三十七年一月十八日發行
明治三十七年五月再版發行
明治三十八年二月三版發行
明治三十八年十二月四版發行
明治三十九年十月五版發行
明治四十年六月六版發行
明治四十一年三月七版發行

明治四十一年十二月八版發行
明治四十二年四月九版發行
明治四十三年四月十版發行
明治四十三年十二月十一版發行
明治四十五年一月十二版發行
大正元年十一月十三版發行
大正三年十月五日十四版發行

紅葉全集第壹卷

定價金壹圓八拾錢

著者　尾崎德太郎

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　高橋季吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

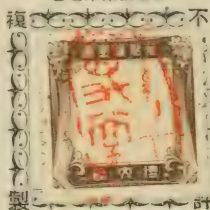
發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

（工場製本）

十千萬堂藏版

故尾崎紅葉君著

紅葉全集

全六册

洋裝菊判函入　表裝高雅　正價各金壹圓八拾錢　送料各十二錢

第一卷　○色懺悔○新桃花扇○南無阿彌陀佛○戀の蛻○夏痩○新色懺悔○猿枕○七十二文命の安賣○風雅娘○巴波川○拈華微笑○此ぬし○關東五郎○文ながし○わかれ蚊帳○二人むく助○二人女房

第二卷　○伽羅枕○むき玉子○夏小袖○おぼろ船○紙きぬた

第三卷　○戀の病○三人妻○男ごゝろ○袖時雨○俠黑兒○心の闇○むらさき

第四卷　○隣の女○鷹料理○冷熱○靑葡萄○不言不語○三箇條○浮木丸○八重襷

第五卷　○多情多恨○千箱の玉章○安知歇貌林○寒牡丹

第六卷　○金色夜叉前編○金色夜叉中編○金色夜叉後編○續金色夜叉○續々金色夜叉○新續金色夜叉○煙霞療養○紅葉山人傳○紅葉著作年表

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し奇思縱橫字々靈快を極めざるなし、曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を組め、俊群英を養ふて藻社の名一世を壓す、山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり、山人の逝くや命也。而て山人の精神は萬古常に新也、蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み、凡そ山人が遺作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ、思ふに七寶の散りて點數せるは聯ねて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め　謹みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

故福地櫻癡居士著

櫻癡全集

全三册　洋裝三六判函入　裝幀高麗優美　正價各金　壹圓貳拾錢　送料各十二錢

上編　○あはれ浮世○東鑑拜賀の卷○小楠公脚本○關原譽凱歌○女俠駒形おせん○喜劇二人袴○芳哉義士譽○扇の恨○平野次郎○求女塚身替新田○新作夜の鶴

中編　○人生X光線○斬奸○滑稽小說花懺悔○廻る因果○女浪人

下編　○僞稱紳士○色慾二筋道○滑稽小說陰陽大和錦○車善七○仙居の夢○出放題○鳥居甲斐○高島秋帆

櫻癡居士の文は瀟洒にして簡明殊に濃粧の中に絢爛の趣きを與へたるは、江戸子質たる居士の特色を最もよく發揮したるものと稱して可なり、居士生前に作るところ小說あり、脚本あり、史論あり、戯文あり、短文あり、長短宜しきに從ひ、繁簡趣を成し、才思の横溢せる、學識の卓越せる、當代實に其匹儔を見ざるの概ありき、唯其作品の多量、雄編大作にして猶且散逸するもの多きを憂うべしとするのみ、今その粹を拔き妙を集め、以てこの上中下三卷をなす　庶幾くは居士の彩筆に渴するものゝ望を滿すことを得ん乎.

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

故川上眉山君著

眉山全集

全四册

洋裝菊判函入
裝幀高尚優美

正價各金 壹圓八拾錢

送料各十二錢

第一編 ○[illegible]折竹○風流狂言記○お駒○有明○青華○大さかづき○書記官○うらおもて○鹿子絞○島田くづし○奥様○船橋○柴栗○うつせ貝○寢醒○いさゝ川○碧水志○逸樂編○黄昏○塵影○絃聲

第二編 ○梅紅葉○左巻○野人○行衞○二重帶○一軒百姓○鶴澤橋○三銃士

第三編 ○春宵○虚僞の價○落葉○爪木折○綾小袖○春潮○片影○滑稽相續三人男○澪標○萬平○凡人界○妖艶○弱氣質○希望○小妾記○喜劇仙臺平○裏座敷○明眸○小町紅

第四編 ○新家庭○昔の戀○梅の寮○同胞○魔道○一夜天下○寶の山○千紅萬紫

幽艶にして清迥なる眉山氏の筆は眞に明治の華文なり況んや其想。おのづから當代の重きをなして、而も逌爾として追らざる處、我文壇の重鎮たり。今や斯人亡くして其著作單り金聲玉振の響を傳ふ。本書に收めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏の絶倫の盛名を擅にせしめたるもの、實に是れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇に異彩ある大作家の面影なり。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館